

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（139）

東九州自動車道建設（末吉財部IC～大隅IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

建 山 遺 跡  
西原段Ⅰ遺跡  
野鹿倉遺跡

2009年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



建山遺跡遠景（野鹿倉遺跡方向を望む）

巻頭カラー2



西原段 I 遺跡出土遺物

# 序 文

この報告書は、東九州自動車道13次区間（末吉財部 I C～大隅 I C）の建設に伴って、平成17・18年度に実施した曾於市大隅町（旧曾於郡大隅町）に所在する建山遺跡と、平成18・19年度に実施した曾於市大隅町に所在する西原段 I 遺跡、野鹿倉遺跡の発掘調査の記録です。

建山遺跡は、旧石器時代ナイフ形石器文化期と細石刃文化期、縄文時代草創期から晩期、古代から中世にかけての複合遺跡であることがわかりました。主な成果としては、旧石器時代の細石刃文化期でブロックや細石刃などが発見されました。また、縄文時代早期では集石遺構や落とし穴、変形撚糸文土器、手向山式土器、石鏃などが発見されました。さらに、古代から中世にかけての掘立柱建物跡や溝状遺構等の発見が注目されます。

西原段 I 遺跡は、旧石器時代から中世にかけての遺構や遺物等が発見されており、各々の時代の移り変わりを示す良好な資料を提供しております。

野鹿倉遺跡は、旧石器時代から古代にかけての遺構や遺物等が発見され、なかでも縄文時代早期の集石遺構が12基発見されたことは注目されます。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

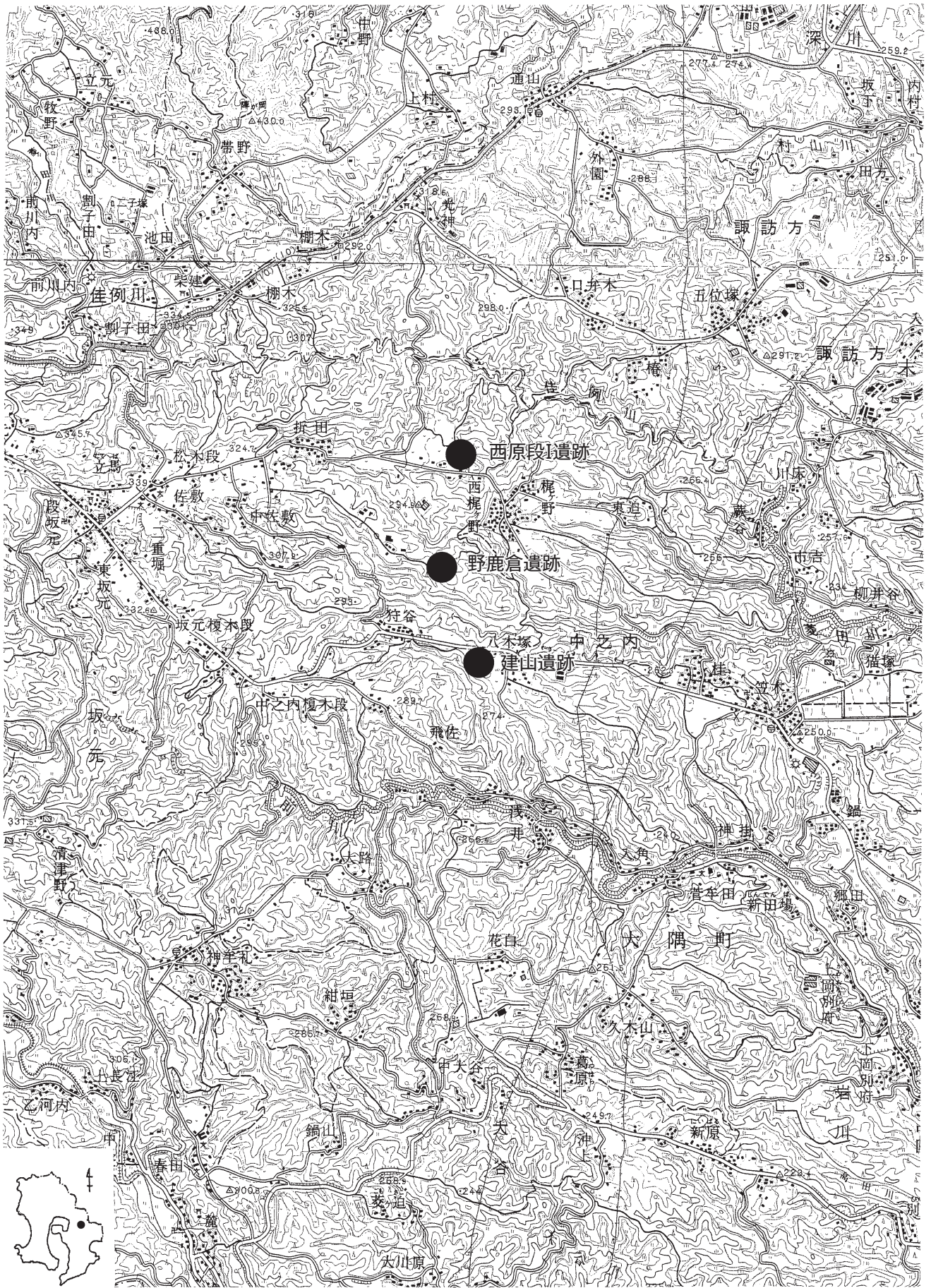
最後に、調査に当たりご協力いただいた国土交通省大隅河川国道事務所や曾於市教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年 3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 宮 原 景 信

# 報告書抄録

ふりがな	たてやまいせき にしはらだんいちいせき のかくらいせき							
書名	建山遺跡		西原段 I 遺跡		野鹿倉遺跡			
副書名	東九州自動車道建設（末吉財部IC～大隅IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	IV							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第139集							
編集者氏名	彌榮久志 宮田栄二 高岡和也 新保朋久 國師洋之 田畑哲治 木内敏生							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査起因
		市町村	遺跡番号					
たてやまいせき 建山遺跡	かごしまけんそおし 鹿児島県曾於市 おおすみちよういわがわ 大隅町岩川 あざやしきだん 字屋敷段	46217	63-253-0	31° 38' 04"	130° 56' 14"	確認・本調査 20050808～ 20060322 本調査 20060509～ 20070320	13,133  18,983	東九州自動 車道建設
にしはらだんいちいせき 西原段 I 遺跡	かごしまけんそおし 鹿児島県曾於市 おおすみちようなかの 大隅町中之内 あざとびのお 字鳶ノ尾 つつみのさこ 堤ノ迫 こうじんのさこ 荒神ノ迫		63-27-0	31° 39' 11"	130° 56' 02"	確認・本調査 20061204～ 20070320 本調査 20070801～ 20071026	6,004  2,952	
のかくらいせき 野鹿倉遺跡	かごしまけんそおし 鹿児島県曾於市 おおすみちようなかの 大隅町中之内 あざのかくら 字野鹿倉		63-252-0	31° 38' 40"	130° 55' 58"	確認調査 20070201～ 20070216 確認・本調査 20070801～ 20071026	20  6,642	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
建山遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代 古代～中世	礫群，ブロックなど 集石，落とし穴，土 坑，竪穴住居跡 掘立柱建物跡，溝状 遺構，軽石集積		三稜尖頭器，ナイフ形石器， 細石刃，細石刃核，削器他 手向山式土器，変形撚糸文土 器，石鏃，磨石他 土師器，土師甕他			
西原段 I 遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古代～中世	礫群 集石，土坑 道路状遺構，落とし穴		剥片  中津野式土器			
野鹿倉遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代	集石		石核，剥片			
遺跡の概要	<p>建山遺跡では主に旧石器時代から中世までの遺構・遺物が発見された。特に注目される遺構は，後期旧石器時代細石刃文化期のブロック，縄文時代早期の集石遺構，古代～中世の掘立柱建物跡や溝状遺構などが挙げられる。遺物は，後期旧石器時代細石刃文化期の細石刃，細石刃核，縄文時代早期の変形撚糸文土器，手向山式土器，古代～中世の土師器などが挙げられる。</p> <p>西原段 I 遺跡では，旧石器時代から縄文時代の早期，中・後期，晩期，古代～中世と長期に及ぶ遺構や遺物が発見されている。特に注目される遺構は，縄文時代早期の集石遺構，古代～中世の硬化面を伴う道路状遺構，落とし穴などが挙げられる。遺物については組織痕文土器，中津野式土器，土師器，石鏃，磨石・敲石，石皿等が出土した。</p> <p>野鹿倉遺跡では主に旧石器時代の遺物，縄文時代早期の遺構・遺物が発見された。特に，縄文時代早期の集石遺構が12基検出されたことが注目される。</p>							



遺跡位置図 (1 : 50,000)

# 例 言

- 1 本報告書は、東九州自動車道(末吉財部IC～大隅IC間)建設に伴う建山遺跡、西原段 I 遺跡及び野鹿倉遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 建山遺跡は鹿児島県曾於市大隅町岩川に、西原段 I 遺跡は鹿児島県曾於市大隅町中ノ内に、野鹿倉遺跡は鹿児島県曾於市大隅町中ノ内野鹿倉に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成(整理作業)は、国土交通省九州地方整備局大隅国道河川事務所及び鹿児島県土木部から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、建山遺跡が平成17年8月8日～平成18年3月22日、平成18年5月9日～平成19年3月20日の期間に実施した。西原段 I 遺跡は平成18年12月4日～平成19年3月20日、平成19年8月1日～10月26日の期間に実施した。野鹿倉遺跡は平成19年2月1日～2月16日、平成19年8月1日～10月26日の期間に実施した。
- 5 遺物番号は、建山遺跡、西原段 I 遺跡及び野鹿倉遺跡それぞれで通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は土器が1/3、石器の縮尺は小型の剥片石器は1/1または2/3、磨石・敲石、石皿等の大型の石器は1/3を基本としたが、一部この限りではない。遺構の縮尺は1/20を基本としたが、一部の遺構に関してはこの限りではない。各々、挿図毎に示した縮尺を参考とされたい。
- 7 本書で用いたレベル数値は、道路公団鹿児島工事事務所が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面作成、写真撮影は、調査担当者が行った。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て國師洋之が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て彌榮久志と國師洋之が行った。
- 11 石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て宮田栄二、田畑哲治、木内敏生、寒川朋枝が行った。一部は国際航業株式会社鹿児島支店、株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店に委託した。
- 12 土器と石器の出土分布図関係は、全て木内敏生が作成した。
- 13 遺物の写真撮影は、福永修一が行った。
- 14 自然科学分析は、株式会社加速器分析研究所、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 15 本報告書の執筆・編集は彌榮久志、宮田栄二、高岡和也、新保朋久、國師洋之、田畑哲治、木内敏生が行った。  
第 I 章……田畑哲治 第 II 章……新保朋久 第 III 章……國師洋之  
第 IV 章……彌榮久志(第 5～11 節)、宮田栄二(第 2～4, 11 節)、國師洋之(第 1, 6～8, 10, 11 節)、田畑哲治(第 6～8 節)、木内敏生(第 6～8, 11 節)  
第 V 章……高岡和也 第 VI 章……高岡和也
- 16 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、建山遺跡の遺物注記の記号はタテ、西原段 I 遺跡はNHD1、野鹿倉遺跡はNGKで表記してある。

# 目 次

卷頭カラー  
序 文  
報告書抄録  
例 言  
本文目次  
挿図目次  
表 目 次  
図 版 目 次  
あとがき

## 本 文 目 次

第 I 章 発掘調査の経過	1
第 1 節 調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査の組織	2
第 3 節 調査の経過（日誌抄）	6
第 II 章 遺跡の位置と環境	11
第 1 節 地理的環境	11
第 2 節 歴史的環境	12
第 III 章 遺跡の層位	16
第 IV 章 建山遺跡	17
第 1 節 発掘調査の方法及び層位	17
確認トレンチの状況	22
第 2 節 旧石器時代の調査成果	23
1 調査の概要	23
2 旧石器時代の石器石材	23
3 第 I 文化層の遺構と石器群	24
第 3 節 第 II 文化層の石器群	29
第 4 節 第 III 文化層の石器群	32
第 5 節 縄文時代草創期の調査成果	79
1 調査の概要	79
2 遺物	79
第 6 節 縄文時代早期の調査成果	82
1 調査の概要	82
2 遺構	82
3 遺物	116
第 7 節 縄文時代前・中期の調査成果	154
1 調査の概要	154
2 遺構	154
3 遺物	159
第 8 節 縄文時代後・晩期の調査成果	171
1 調査の概要	171
2 遺構	171
3 遺物	173
第 9 節 弥生時代・古墳時代の調査成果	196
遺物	196
第 10 節 古代・中世の調査成果	198
1 調査の概要	198
2 遺構	198
3 遺物	223
第 11 節 まとめ	237
付編 自然科学分析（放射性炭素年代測定）	243
第 V 章 西原段 I 遺跡	245
第 1 節 発掘調査の方法及び層位	245
第 2 節 旧石器時代の調査成果	252
1 調査の概要	252
2 遺物	252
第 3 節 縄文時代の調査成果	253
1 調査の概要	253
2 遺構	253
3 遺物	257
第 4 節 弥生時代～中世の調査成果	280
1 調査の概要	280
2 遺構	280
3 遺物	285
第 5 節 まとめ	289
付編 自然科学分析（放射性炭素年代測定）	291
第 VI 章 野鹿倉遺跡	293
第 1 節 発掘調査の方法及び層位	293
第 2 節 旧石器時代の調査成果	298
1 調査の概要	298
2 遺物	298
第 3 節 縄文時代の調査成果	300
1 調査の概要	300
2 遺構	300
3 遺物	308
第 4 節 古代の調査成果	314
1 調査の概要	314
2 遺物	314
第 5 節 まとめ	316



# 挿 図 目 次

## 遺跡位置図

第1図	周辺遺跡位置図	13
第2図	基本土層図	16

## 第IV章 建山遺跡

第3図	トレンチ配置図及び周辺地形図	17
第4図	土層断面図(1)	18
第5図	土層断面図(2)	19
第6図	土層断面図(3)	20
第7図	土層断面図(4)	21
第8図	第I文化層の石器群位置図	24
第9図	第I文化層 第1ブロック石器群 出土分布図	24
第10図	第I文化層 第1ブロック出土石器(1)	25
第11図	第I文化層 第1ブロック出土石器(2)	26
第12図	第I文化層の礫群	27
第13図	第I文化層 第2, 3ブロック出土石器	28
第14図	第II文化層の石器群位置図	29
第15図	第II文化層 第1ブロック出土石器	30
第16図	第II文化層 第2ブロック出土石器	31
第17図	第II文化層 第2ブロック石器出土分布図	31
第18図	第III文化層の石器群位置図	32
第19図	第III文化層 第1ブロック出土石器(1)	33
第20図	第III文化層 第1ブロック出土石器(2)	34
第21図	第III文化層 第1ブロック石器出土分布図	34
第22図	第III文化層 第2ブロック出土石器(1)	36
第23図	第III文化層 第2, 3ブロック出土石器	37
第24図	第III文化層 第4ブロック出土石器(1)	39
第25図	第III文化層 第4, 5, 6ブロック 出土石器	40
第26図	第III文化層 第7ブロック出土石器(1)	42
第27図	第III文化層 第7ブロック出土石器(2)	43
第28図	第III文化層 第2～8ブロック石器群 出土分布図	44
第29図	第III文化層 第9ブロック出土石器	46
第30図	第III文化層 第11ブロック出土石器(1)	47
第31図	第III文化層 第11ブロック出土石器(2)	48
第32図	第III文化層 第11ブロック出土石器(3)	49
第33図	第III文化層 第12ブロック出土石器	51
第34図	第III文化層 第13ブロック出土石器(1)	52
第35図	第III文化層 第13ブロック出土石器(2)	53
第36図	第III文化層 第13ブロック出土石器(3)	54
第37図	第III文化層 第13ブロック出土石器(4)	56
第38図	第III文化層 第14ブロック出土石器(1)	57
第39図	第III文化層 第14ブロック出土石器(2)	58
第40図	第III文化層 第14ブロック出土石器(3)	59

第41図	第III文化層 第15, 16ブロック出土石器	61
第42図	第III文化層 第20ブロックほか出土石器	62
第43図	第III文化層 第11～20ブロック石器群 出土分布図	63
第44図	第III文化層 第1, 2ブロック出土細石刃	65
第45図	第III文化層 第3, 4ブロック出土細石刃	66
第46図	第III文化層 第5～9ブロック出土細石刃	67
第47図	第III文化層 第11～12ブロック出土細石刃	68
第48図	第III文化層 第13ブロック出土細石刃	69
第49図	第III文化層 第14～20ブロック出土細石刃	70
第50図	第III文化層 細石刃出土分布図(1)	71
第51図	第III文化層 細石刃出土分布図(2)	72
第52図	I類土器出土状況図	78
第53図	I類土器	80
第54図	縄文早期 遺構位置図	81
第55図	縄文早期 1号竪穴住居跡	82
第56図	縄文早期 2号竪穴住居跡, 1号・ 2号竪穴状遺構	83
第57図	縄文早期 連穴土坑	84
第58図	縄文早期 連穴土坑内出土石器	84
第59図	縄文早期 1号, 2号土坑	86
第60図	縄文早期 3号, 4号土坑	87
第61図	縄文早期 5号～7号土坑	88
第62図	縄文早期 8号, 9号土坑	89
第63図	縄文早期 10号土坑	90
第64図	縄文早期 1号～3号集石	92
第65図	縄文早期 4号～6号集石	93
第66図	縄文早期 7号～9号集石	94
第67図	縄文早期 7号集石内出土遺物	94
第68図	縄文早期 10号, 11号集石	96
第69図	縄文早期 12号集石	97
第70図	縄文早期 13号～15号集石	98
第71図	縄文早期 16号, 17号集石	99
第72図	縄文早期 18号集石	100
第73図	縄文早期 19号～22号集石	102
第74図	縄文早期 23号, 24号集石	103
第75図	縄文早期 25号～28号集石	104
第76図	縄文早期 25号集石内出土土器	104
第77図	縄文早期 29号集石内出土石器	104
第78図	縄文早期 29号, 30号集石	105
第79図	縄文早期 1号, 2号落とし穴	108
第80図	縄文早期 3号落とし穴	109
第81図	縄文早期 4号, 5号落とし穴	110
第82図	縄文早期 6号～8号落とし穴	111
第83図	縄文早期 9号, 10号落とし穴	112
第84図	縄文早期 11号～13号落とし穴	113
第85図	縄文早期 磨石集積	114
第86図	縄文早期 磨石集積内出土石器	114

第87図	Ⅱ類～Ⅶ類土器出土状況図	115	第133図	XV類土器	161
第88図	Ⅱa類土器	116	第134図	XVI類土器	162
第89図	Ⅱb類・Ⅱc類土器	117	第135図	XVII類土器	162
第90図	Ⅲ類土器	118	第136図	XVIII類土器	163
第91図	Ⅳ類土器	118	第137図	XIX類土器	164
第92図	V類土器	120	第138図	XXa類土器	165
第93図	Ⅵa類土器	122	第139図	XXb類土器	166
第94図	Ⅵb類土器	122	第140図	Va層（縄文前・中期）出土石器状況図	168
第95図	Ⅶa類土器	123	第141図	Va層（縄文前・中期）出土石器(1)	168
第96図	Ⅶb類土器	124	第142図	Va層（縄文前・中期）出土石器(2)	169
第97図	Ⅶc・Ⅶd類土器	124	第143図	縄文後・晩期 遺構位置図及びⅣa層・Ⅳb層 出土石器状況図	170
第98図	Ⅷ類・Ⅸ類土器出土状況図	125	第144図	縄文後・晩期 18号土坑 及び土坑内出土軽石製品	171
第99図	X類～XIII類土器出土状況図	126	第145図	XXI類～XXXI類土器出土状況図	172
第100図	VIIIa類土器(1)	128	第146図	XXI類土器	173
第101図	VIIIa類土器(2)	129	第147図	XXII類土器	174
第102図	VIIIb類土器	129	第148図	XXIII類～XXVIII類土器	175
第103図	VIIIc類土器	130	第149図	XXIX類・XXX類土器	177
第104図	VIIId類土器	131	第150図	無文土器及び底部と土製品	178
第105図	VIIIe類土器	131	第151図	XXXIa類土器	180
第106図	Ⅸ類・X類土器	132	第152図	XXXIb類土器	182
第107図	XI類土器	133	第153図	XXXIc類土器(1)	183
第108図	XIIa類土器(1)	135	第154図	XXXIc類土器(2)	185
第109図	XIIa類土器(2)	136	第155図	XXXId類土器	186
第110図	XIIb類土器	136	第156図	XXXIe類土器	187
第111図	XIII類土器及び出土状況図	137	第157図	Ⅳa層・Ⅳb層（縄文後・晩期） 出土石器(1)	191
第112図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期） 出土石器状況図	140	第158図	Ⅳa層・Ⅳb層（縄文後・晩期） 出土石器(2)	192
第113図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(1)	141	第159図	Ⅳa層・Ⅳb層（縄文後・晩期） 出土石器(3)	193
第114図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(2)	142	第160図	Ⅳa層・Ⅳb層（縄文後・晩期） 出土石器(4)	194
第115図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(3)	143	第161図	Ⅳa層・Ⅳb層（縄文後・晩期） 出土石器(5)	195
第116図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(4)	144	第162図	弥生・古墳 土器	196
第117図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(5)	145	第163図	古代・中世 遺構位置図	197
第118図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(6)	146	第164図	古代 1号掘立柱建物跡	198
第119図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(7)	147	第165図	古代 2号掘立柱建物跡	199
第120図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(8)	148	第166図	古代 3号掘立柱建物跡	200
第121図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(9)	149	第167図	古代 4号掘立柱建物跡	201
第122図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(10)	150	第168図	古代 5号掘立柱建物跡	202
第123図	VIII層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(11)	151	第169図	古代 6号掘立柱建物跡	203
第124図	縄文前・中期 遺構位置図	153	第170図	古代 7号, 8号掘立柱建物跡	204
第125図	縄文前・中期 3号竪穴状遺構	154	第171図	古代 軽石集積	206
第126図	縄文前・中期 4号竪穴状遺構	155	第172図	古代 9号掘立柱建物跡	207
第127図	4号竪穴状遺構内出土土器 及び出土状況図	155	第173図	古代 1号焼土跡	208
第128図	縄文前・中期 14号, 15号土坑	156			
第129図	縄文前・中期 16号, 17号土坑	157			
第130図	XIV類～XX類土器出土状況図	158			
第131図	XIV類土器(1)	159			
第132図	XIV類土器(2)	160			

第174図	古代	2号焼土跡	209
第175図	古代	3号, 4号焼土跡	210
第176図	古代	5号焼土跡	211
第177図	古代	6号焼土跡	212
第178図	古代	1号～3号溝状遺構・断面図	213
第179図	古代	4号, 5号溝状遺構・断面図	214
第180図	古代	軽石配石	215
第181図	古代	ピット	216
第182図	古代	軽石集積内出土土器	218
第183図	古代	軽石集積内出土軽石製品	219
第184図	古代	軽石集積及び軽石配石内 出土軽石製品	220
第185図	古代	2号溝状遺構内出土軽石製品	221
第186図	古代～中世	土器出土状況図	222
第187図	古代	土器(薄手甕)	224
第188図	古代	土器(厚手甕A)	225
第189図	古代	土器(厚手甕B)	226
第190図	古代	土器(土師器坏)	228
第191図	古代	土器(土師器碗)	230
第192図	古代	土器(土師器皿)	231
第193図	古代	土器(土師器鉢)	231
第194図	古代	土器(器種不明)	232
第195図	古代	土器(墨書)	233
第196図	古代	土器(焼塩土器)	233
第197図	中世	木炭土坑	236
第198図	中世	出土遺物	236
第199図		帯磁率の高い範囲	239
第200図		帯磁率測定値	239

## 第V章 西原段I遺跡

第1図	遺跡周辺地形及びグリッド図	246
第2図	調査範囲図	247
第3図	遺物出土状況図	248
第4図	土層断面図1(C地点)	249
第5図	土層断面図2(A地点)	250
第6図	土層断面図3(B地点)	251
第7図	旧石器遺物出土状況図	252
第8図	旧石器出土遺物	252
第9図	縄文時代早期集石1	253
第10図	縄文時代遺物出土状況図	254
第11図	縄文時代早期集石2	255
第12図	縄文時代中期～後期集石	256
第13図	縄文時代中期～後期土坑	256
第14図	縄文時代晩期土坑	257
第15図	1・2・3類土器	258
第16図	4・5・6類土器	259
第17図	7a-1類土器	260
第18図	7a-2類土器	261

第19図	7a-3類土器	263
第20図	7a-4・5類土器	264
第21図	7b-1類土器	265
第22図	7b-2類土器(1)	266
第23図	7b-2類土器(2)	267
第24図	7b-3類土器	268
第25図	7b-4類土器(1)	270
第26図	7b-4類土器(2)	271
第27図	7b-4類土器(3)	272
第28図	7c-1類土器	273
第29図	7c-2・7d・7e類土器	274
第30図	縄文時代石器(1)	276
第31図	縄文時代石器(2)	277
第32図	縄文時代石器(3)	278
第33図	縄文時代石器(4)	279
第34図	古代～近世遺構配置図	281
第35図	落とし穴実測図	282
第36図	畑跡実測図	283
第37図	道路状遺構実測図	284
第38図	弥生～古代出土遺物	285

## 第VI章 野鹿倉遺跡

第1図	遺跡周辺地形及びグリッド図	294
第2図	遺物出土状況図	295
第3図	土層断面図1	296
第4図	土層断面図2	297
第5図	旧石器遺物出土状況図	298
第6図	旧石器出土遺物	299
第7図	縄文時代早期集石配置図	301
第8図	縄文時代早期集石(1)	302
第9図	縄文時代早期集石(2)	303
第10図	縄文時代早期集石(3)	304
第11図	縄文時代早期集石(4)	305
第12図	縄文時代早期集石(5)	306
第13図	縄文時代早期集石(6)	307
第14図	1～5類土器	308
第15図	6～11類土器	309
第16図	12～14類土器	310
第17図	縄文時代石器(1)	311
第18図	縄文時代石器(2)	312
第19図	縄文時代石器(3)	313
第20図	古代遺物出土状況図	314
第21図	古代出土遺物	314

# 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表(1)……………	14
第2表	周辺遺跡一覧表(2)……………	15

## 第IV章 建山遺跡

第3表	トレンチ別調査結果……………	22
第4表	旧石器 石器観察表(1)……………	73
第5表	旧石器 石器観察表(2)……………	74
第6表	旧石器 細石刃観察表(1)……………	75
第7表	旧石器 細石刃観察表(2)……………	76
第8表	旧石器 細石刃観察表(3)……………	77
第9表	I類土器観察表……………	80
第10表	縄文早期 連穴土坑計測表……………	84
第11表	縄文早期 連穴土坑内出土石器観察表……………	84
第12表	縄文早期 土坑計測表……………	90
第13表	7号集石内出土土器観察表……………	95
第14表	7号集石内出土石器観察表……………	95
第15表	25号集石内出土土器観察表……………	101
第16表	29号集石内出土石器観察表……………	101
第17表	縄文早期 集石計測表……………	114
第18表	縄文早期 落とし穴計測表……………	114
第19表	縄文早期 磨石集積内出土石器観察表……………	114
第20表	II類～XIII類土器観察表(1)……………	138
第21表	II類～XIII類土器観察表(2)……………	139
第22表	VIII層～VIa層(縄文早期) 出土石器観察表……………	152
第23表	縄文前・中期 4号堅穴状遺構内 出土土器観察表……………	155
第24表	縄文前・中期 土坑計測表……………	156
第25表	XIV類～XX類土器観察表……………	167
第26表	Va層(縄文前・中期)出土石器観察表……………	169
第27表	縄文後・晩期 土坑計測表……………	171
第28表	土坑内出土軽石製品観察表……………	171
第29表	XXI類～XXXI類土器観察表(1)……………	188
第30表	XXI類～XXXI類土器観察表(2)……………	189
第31表	IVa層・IVb層(縄文後・晩期) 出土石器観察表……………	195
第32表	弥生・古墳 土器観察表……………	196
第33表	古代 1号掘立柱建物跡計測表……………	198
第34表	古代 2号掘立柱建物跡計測表……………	199
第35表	古代 3号掘立柱建物跡計測表……………	200
第36表	古代 4号掘立柱建物跡計測表……………	200
第37表	古代 5号掘立柱建物跡計測表……………	205
第38表	古代 6号掘立柱建物跡計測表……………	205
第39表	古代 7号掘立柱建物跡計測表……………	205
第40表	古代 8号掘立柱建物跡計測表……………	205
第41表	古代 9号掘立柱建物跡計測表……………	207

第42表	古代 ビット計測表……………	216
第43表	古代 軽石集積内出土土器観察表……………	221
第44表	古代 軽石集積内ほか出土軽石製品 観察表……………	221
第45表	古代・中世 土器観察表(1)……………	234
第46表	古代・中世 土器観察表(2)……………	235
第47表	各検出層における礫の集中密度別の 集石分類表……………	239
第48表	縄文時代早期 (VIII～VIa層出土) 石器組成表……………	242
第49表	縄文時代前・中期 (Va層出土) 石器組成表……………	242
第50表	縄文時代後・晩期 (IVa, IVb層出土) 石器組成表……………	242
第51表	測定試料及び処理……………	243
第52表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果……………	243
第53表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果……………	244

## 第V章 西原段 I 遺跡

第1表	縄文時代土器観察表(1)……………	286
第2表	縄文時代土器観察表(2)……………	286
第3表	縄文時代土器観察表(3)……………	287
第4表	縄文時代土器観察表(4)……………	288
第5表	弥生～中世遺物観察表……………	288
第6表	石器観察表……………	288

## 第VI章 野鹿倉遺跡

第1表	縄文時代土器観察表……………	315
第2表	古代遺物観察表……………	315
第3表	旧石器時代石器観察表……………	315
第4表	縄文時代石器観察表……………	315

# 図 版 目 次

## 建山遺跡

図版 1	建山遺跡空中写真 (狩俣遺跡方向を望む) ……	317
図版 2	調査風景, 土層断面 ……	318
図版 3	旧石器時代遺物出土状況ほか ……	319
図版 4	縄文時代早期 1 号竪穴住居跡 検出状況ほか ……	320
図版 5	縄文時代早期 1 号竪穴状遺構完掘状況ほか ……	321
図版 6	縄文時代早期連穴土坑完掘状況ほか ……	322
図版 7	縄文時代早期 3 号集石ほか ……	323
図版 8	縄文時代早期 1 号落とし穴半裁状況ほか ……	324
図版 9	縄文時代早期 6 号落とし穴半裁状況ほか ……	325
図版 10	縄文時代早期 9 号落とし穴半裁状況ほか ……	326
図版 11	縄文時代早期 12 号・13 号落とし穴 検出状況ほか ……	327
図版 12	縄文時代前・中期 3 号竪穴状遺構 検出状況ほか ……	328
図版 13	古代 1 号掘立柱建物跡検出状況ほか ……	329
図版 14	古代 1 号焼土跡検出状況ほか ……	330
図版 15	旧石器時代第 I・II 文化層出土石器 ……	331
図版 16	旧石器時代第 III 文化層出土石器(1) ……	332
図版 17	旧石器時代第 III 文化層出土石器(2) ……	333
図版 18	旧石器時代第 III 文化層出土石器(3) ……	334
図版 19	細石刃の使用痕 ……	335
図版 20	I・IIa・IIb・V 類土器 ……	336
図版 21	VIIa・VIIb・VIIc・VIIIa 類土器 ……	337
図版 22	VIIIa・VIIId・VIIIe・X 類土器 ……	338
図版 23	XIIa・XIII・XIV 類土器ほか ……	339
図版 24	XVII・XVIII・XIX・XXa・XXb 類土器 ……	340
図版 25	XXXIc・XXXId 類土器ほか ……	341
図版 26	縄文時代早期出土石器(2) ……	342
図版 27	縄文時代早期出土石器(3) ……	343
図版 28	縄文時代前期～晩期出土石器(1) ……	344
図版 29	縄文時代前期～晩期出土石器(2) ……	345
図版 30	古代 土師甕 ……	346
図版 31	古代 土師器坏 ……	347
図版 32	古代 土師器塊ほか ……	348

## 西原段 I 遺跡

図版 1	遺跡空中写真 ……	349
図版 2	土層断面, 集石 (1 号・2 号) ……	350
図版 3	集石 (4 号), 土坑 (1・2・3 号) ……	351
図版 4	落とし穴 ……	352
図版 5	畑跡・甕形土器出土状況・道路状遺構 ……	353
図版 6	作業風景 遺物出土状況 ……	354
図版 7	1～6 類土器 ……	355

図版 8	7a 類土器 ……	356
図版 9	7b 類土器 ……	357
図版 10	組織痕土器 1 ……	358
図版 11	組織痕土器 2 ……	359
図版 12	復元土器 ……	360
図版 13	7c・7d・7e 類土器 縄文時代石器 1 ……	361
図版 14	縄文時代石器 2 ……	362

## 野鹿倉遺跡

図版 1	遺跡空中写真 ……	363
図版 2	土層断面 1 ……	364
図版 3	土層断面 2 ほか ……	365
図版 4	集石 (1～4 号) ……	366
図版 5	集石 (5～12 号) ……	367
図版 6	遺物出土状況 ……	368
図版 7	調査風景 ……	369
図版 8	石器 1, 1～7 類土器 ……	370
図版 9	8～14 類土器 ……	371
図版 10	石器 2, 土師器 ……	372

# 第 I 章 発掘調査の経過

## 第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、末吉財部IC～志布志IC区間の事業に先立って事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課に照会した。この計画に伴い文化財課は、平成11年11月に末吉財部IC～鹿屋串良IC間を、平成12年2月には鹿屋串良IC～志布志IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施した。その結果、50か所の遺跡（854,100㎡）が存在することが明らかになった。

分布調査の結果をもとに、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部高速道路対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センターの4者で協議を重ね、対応を検討してきた。その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の緻密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査や確認調査が実施されることとなった。

そこで、鹿児島県は平成13年7月10日から7月26日の間に、末吉財部IC～鹿屋串良IC間の工事計画図をもとに33の遺跡についての詳細分布調査と、平成13年9月17日から10月26日までと平成13年12月3日から12月25日にわたって遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

その後、日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）の民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設が確定し、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月には末吉財部ICから大隅IC間の発掘調査協定書締結の運びとなり、本格的な埋蔵文化財の発掘調査が実施されることとなった。

平成16年3月には、国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事により新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きるということになった。

これを受けて、建山遺跡の調査は、平成17・18年度に過密植栽地を除いた部分の確認調査・本調査を実施した。

西原段 I 遺跡の調査は、まず平成18年度に過密植栽地を除いた部分の確認調査・本調査を実施した。さらに、高速道路建設予定地で遺跡に認定されていなかった遺跡隣接地の試掘調査を行った結果、遺構・遺物の存在が確認されたため、平成19年3月に遺跡の拡張が認定された。そこで平成19年度に、この拡張部分の本調査を実施した。

野鹿倉遺跡の調査は、平成18年度に用地買収が終了している箇所の確認調査を実施し、遺物及び遺物包含層が確認された。平成19年度は未調査であった箇所についての確認調査・本調査を実施した。

## 第2節 調査の組織

### 【建山遺跡】

(平成17年度 確認調査・本調査)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	上今 常雄
調査企画者	〃	次長兼総務課長	有川 昭人
	〃	次長兼調査第一課長	新東 晃一
	〃	調査第二課長	立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮 久志
調査担当者	〃	〃	彌榮 久志
	〃	文化財主事	井ノ上秀文
	〃	文化財研究員	木内 敏生
	〃	〃	馬籠 亮道
	〃	文化財調査員	市耒 真澄
調査事務担当者	〃	主幹兼総務係長	平野 浩二
	〃	主 事	福山恵一郎

(平成18年度 本調査)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	上今 常雄 (～H18.7.31)
	〃		宮原 景信 (H18.8.1～)
調査企画者	〃	次長兼総務課長	有川 昭人
	〃	次長兼南の縄文調査室長	新東 晃一
	〃	調査第二課長	立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮 久志
調査担当者	〃	主任文化財主事	井ノ上秀文
	〃	文化財主事	内山 伸明
	〃	文化財主事	永濱 功治
	〃	文化財主事	福永 修一
	〃	文化財研究員	木内 敏生
	〃	文化財調査員	市耒 真澄

調査事務担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係	長	寄井田正秀
	〃	主事		五百路 真
調査指導者	鹿児島大学	法文学部	教授	森脇 広
	鹿児島大学	法文学部	准教授	本田 道輝
	熊本大学	文学部	准教授	小畑 弘己

(平成19年度 整理・報告書作成)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所, 鹿児島県土木部高速道対策室			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	宮原 景信
作成企画者	〃	次長兼総務課	長	平山 章
	〃	次長兼南の縄文調査室	長	新東 晃一
	〃	調査第二課	長	立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係	長	彌榮 久志
作成担当者	〃	〃		彌榮 久志
	〃	文化財主事		新保 朋久
	〃	文化財主事		國師 洋之
	〃	文化財主事		田畑 哲治
調査事務担当者	〃	総務係	長	寄井田正秀
	〃	主事		五百路 真
調査指導者	福岡大学	人文学部	准教授	桃崎 祐輔

(平成20年度 整理・報告書作成)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所, 鹿児島県土木部高速道対策室			
調査主体者	鹿児島県教育委員会			
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課			
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	宮原 景信
作成企画者	〃	次長兼総務課	長	平山 章
	〃	次長兼南の縄文調査室	長	池畑 耕一
	〃	調査第二課	長	彌榮 久志
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係	長	中村 耕治
作成担当者	〃	調査第二課	長	彌榮 久志
	〃	文化財主事		國師 洋之
	〃	文化財主事		木内 敏生
調査事務担当者	〃	総務係	長	紙屋 伸一
	〃	主査		五百路 真



報告書作成検討委員会	平成20年12月3日	宮原所長ほか	13名
報告書作成指導委員会	平成20年12月1日	池畑次長ほか	6名
企画担当者		文化財主事	鶴田 静彦
		文化財主事	上床 真

### 【西原段 I 遺跡】

(平成18年度 確認調査・本調査)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所, 鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 上今 常雄 (~H18.7.31)
	〃		宮原 景信 (H18.8.1~)
調査企画者	〃	次長兼総務課長	有川 昭人
	〃	次長兼南の縄文調査室長	新東 晃一
	〃	調査第二課長	立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮 久志
調査担当者	〃	文化財主事	高岡 和也
	〃	文化財主事	田畑 哲治 (~H19.1.26)
	〃	文化財主事	松下 建生
	〃	文化財調査員	橋口 拓也
調査事務担当者	〃	総務係長	寄井田正秀
	〃	主事	五百路 真

### 【西原段 I 遺跡・野鹿倉遺跡】

(平成19年度 本調査)

事業主体者	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所, 鹿児島県土木部高速道対策室		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長 宮原 景信
調査企画者	〃	次長兼総務課長	平山 章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	新東 晃一
	〃	調査第二課長	立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	彌榮 久志

調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事	新保 朋久
	〃	文 化 財 主 事	國師 洋之
	〃	文 化 財 主 事	松下 建生
調査事務担当者	〃	総 務 係 長	寄井田正秀
	〃	主 事	五百路 真

(平成20年度 整理・報告書作成)

事業主体者 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所, 鹿児島県土木部高速道対策室

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	宮原 景信
-------	----------------	-----	-------

作成企画者	〃	次 長 兼 総 務 課 長	平山 章
-------	---	---------------	------

〃	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑 耕一
---	---	-------------	-------

〃	〃	調 査 第 二 課 長	彌榮 久志
---	---	-------------	-------

〃	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	中村 耕治
---	---	---------------------	-------

作成担当者	〃	文 化 財 主 事	高岡 和也
-------	---	-----------	-------

調査事務担当者	〃	総 務 係 長	紙屋 伸一
---------	---	---------	-------

〃	〃	主 査	五百路 真
---	---	-----	-------

報告書作成検討委員会 平成20年12月3日 宮原所長ほか 13名

報告書作成指導委員会 平成20年12月1日 池畑次長ほか 6名

企画担当者		文 化 財 主 事	寺原 徹
-------	--	-----------	------

		文 化 財 主 事	黒川 忠広
--	--	-----------	-------

調査指導者	鹿児島大学法文学部准教授		本田 道輝
-------	--------------	--	-------

	鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸課学芸調査係長		東 和幸
--	--------------------------	--	------

### 第3節 調査の経過（日誌抄）

#### 【建山遺跡】

平成17年度は確認調査と本調査を，平成18年度は本調査を実施した。以下，発掘調査の経過を日誌抄により月単位で略述する。

（平成17年度 確認調査）

平成17年8月

環境整備。1トレンチのⅥ～Ⅷ層及び2・4・5・6トレンチのⅣ～Ⅷ層掘り下げ・Ⅸ層上面検出・写真撮影・遺物取上げ・土層断面図作成。3トレンチのⅢ～Ⅴ層掘り下げ・Ⅵ層上面検出・遺物取上げ。7トレンチのⅤ層掘り下げ。

平成17年9月

8・9・10・11・12・14トレンチのⅣ～Ⅷ層の掘り下げ・Ⅸ層上面検出・写真撮影・遺物取上げ・土層断面図作成。13トレンチのⅦ～ⅩⅦ層掘り下げ・ⅩⅧ層上面検出・写真撮影・土層断面図作成。16・17トレンチのⅣ～Ⅴ層掘り下げ。

平成17年10月

1・2・4・6トレンチの拡張・Ⅳa層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。15・22トレンチのⅤ～Ⅷ層及び16・17・21トレンチのⅣ～Ⅷ層掘り下げ・Ⅸ層上面検出・写真撮影・遺物取上げ・土層断面図作成。23・24トレンチのⅣ～Ⅵ層及び25・26トレンチのⅢ～Ⅴ層掘り下げ・写真撮影。全面調査部分表土剥ぎ。

（平成17年度 本調査）

平成17年11月

22・24・25トレンチのⅨ～ⅩⅦ層掘り下げ・ⅩⅧ層上面検出・写真撮影・土層断面図作成。23トレンチのⅥ～Ⅷ層掘り下げ・Ⅸ層上面検出・写真撮影。26トレンチのⅣ～Ⅹ層掘り下げ・遺物取上げ。27・28トレンチのⅢ～Ⅳa層の掘り下げ・軽石集積写真撮影及び実測。F～I-21～30区のⅣa層掘り下げ・掘立柱建物跡柱穴検出・実測。G～I-25～27区のⅣa～Ⅶ層掘り下げ。E～H-66～68区のⅣa層掘り下げ・遺物取上げ。現地説明会（11月12日，参加者178名）。

平成17年12月

F～I-21～23区のⅣb～Ⅴ層掘り下げ・遺物取上げ。F～G-27～30区の下層確認トレンチⅣb～Ⅵ層掘り下げ。F～I-26～30区のⅣa層掘り下げ・Ⅳb層コンター図作成。G～I-24～27区のⅦ層掘り下げ。F～G-21～26区の掘立柱建物跡柱穴掘り下げ・実測・写真撮影。G-21～23区の竪穴住居跡実測・掘り下げ・写真撮影。

平成18年1月

F～G-21～26区の掘立柱建物跡写真撮影・実測。F～G-21区の溝状遺構掘り下げ。F-26～27区のⅣb層上面コンター図作成。G-23区の竪穴住居跡実測・掘り下げ。G～I-25～27区のⅧ層上面検出。G～I-27～30区のⅦ層上面検出。H～I-24～28区の下層確認トレンチⅦ～Ⅷ層掘り下げ。

平成18年2月

F～G-21～26区の掘立柱建物跡柱穴半裁・掘り下げ・実測。F～I-30～31区の溝状遺構検出。

G-21～23区の竪穴住居跡掘り下げ・実測。H-21区の焼土遺構検出状況写真撮影・掘り下げ。H-26区の下層確認トレンチⅨ～Ⅹ層掘り下げ。H-28区の集石実測。H-29区の確認トレンチⅩ層以下掘り下げ。G～I-24～27区のⅨ層上面コンター図作成。H～J-3～6区のⅦ層上面検出。I-6区の集石実測。I-21区の溝状遺構実測・掘り下げ・写真撮影。

平成18年3月

F～G-21～25区のⅣ層掘り下げ。F～H-6～8区のⅥ～Ⅷ層掘り下げ。G-21～23区の竪穴住居跡掘り下げ・実測・写真撮影。G～H-20区の溝状遺構実測・掘り下げ。H-21～24区のⅦ～Ⅷ層掘り下げ及びⅨ層上面コンター図作成。H～I-18～22区のⅦ層遺物取上げ。H～I-21区の焼土遺構掘り下げ・実測。I-16～19区の土層断面実測。I-29区の落とし穴掘り下げ。

(平成18年度 本調査)

平成18年5月

環境整備。C～E-72～75区のⅤ～ⅩⅥ層掘り下げ・Ⅹ層検出ブロック写真撮影・遺物取上げ。F-74区の土層断面図作成。

平成18年6月

E-63～64区のⅢb～Ⅳa層掘り下げ・遺物実測・遺物取上げ・焼土遺構実測・写真撮影。F～G-75～77区のⅦ～Ⅷ層掘り下げ・遺物取上げ。F～H-73～75区のⅦ～Ⅷ層掘り下げ・遺物取上げ・土坑実測・写真撮影・Ⅸ層上面コンター図作成・Ⅹ層掘り下げ。

平成18年7月

D～E-75区のⅢb～Ⅳ層掘り下げ・Ⅳb層上面コンター図作成。E-62～63区のⅦ～Ⅷ層掘り下げ・遺物取上げ・Ⅶ層検出集石写真撮影。F～G-74～79区のⅥ～Ⅷ層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・Ⅸ層上面コンター図作成・土層断面実測・Ⅹ層細石器ブロック周辺掘り下げ・下層確認トレンチⅦ～ⅩⅣ層掘り下げ。F-78区のⅨ層検出連穴土坑写真撮影・実測・掘り下げ。F-80区のⅦ層検出集石実測・写真撮影・Ⅹ層掘り下げ。

平成18年8月

C～E-74～77区のⅦ～Ⅹ層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。D～E-80区の表土～Ⅷ層掘り下げ・遺物取上げ。D～F-77～81区の土層断面図作成。F-80区のⅦ層検出集石実測・写真撮影・竪穴住居跡掘り下げ。F～G-77～79区のⅩ層掘り下げ・遺物取上げ。F～G-80～81区のⅨ層検出土坑実測。

平成18年9月

C～E-77～78区のⅩ～ⅩⅠ層掘り下げ。D～E-80区のⅩ層掘り下げ。E-55～59区の土層断面実測。F-78～80区の土層断面実測・写真撮影。F～G-80～81区の竪穴住居跡及び土坑実測・写真撮影・掘り下げ。F～G-19区の土層断面実測・写真撮影。G-28～29区のⅩⅣ～ⅩⅥ層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。

平成18年10月

F～H-36～41区のⅣa層掘り下げ・Ⅳb層上面コンター図作成・写真撮影・遺物取上げ・下層確認トレンチⅣb～Ⅴ層掘り下げ・6トレンチⅨ～ⅩⅦ層掘り下げ。F～H-42～47区のⅣ～Ⅵ層掘り下げ・下層確認トレンチⅦ～Ⅷ層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。F～H-48～53区のⅢb～Ⅷ層

掘り下げ・IVb層及びIX層上面コンター図作成。

平成18年11月

F～I-30～31区の下層確認トレンチIVb～V層掘り下げ・溝状遺構実測・写真撮影・掘り下げ。E-44区の下層確認トレンチXI～XVII層掘り下げ。F～H-41～54区のIVb～VIII層掘り下げ・IX層上面コンター図作成・下層確認トレンチXIV～XVII層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・土層断面実測・VII層検出集石及びIX層上面検出土坑実測。G-51区のVII層検出集石実測。

平成18年12月

F～G-34～37区のIII層掘り下げ。F-48～49区のXVI層掘り下げ・遺物取上げ・礫群実測。F～H-50～52区のX層掘り下げ・下層確認トレンチXI～XVII層掘り下げ・遺物取上げ。F～H-39～44区のVII～VIII層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・IX層検出土坑実測・写真撮影・土層断面実測。G～H-53区のIIIb～IVa層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。G～I-31～32区のV～VI層掘り下げ・下層確認トレンチVII～VIII層掘り下げ。空中写真撮影実施。

平成19年1月

F～I-30～31区の下層確認トレンチVIII～XII層掘り下げ・遺物取上げ。F～I-32～38区の下層確認トレンチIV～VIII層掘り下げ・IV層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・IVb層上面コンター図作成。F～H-39～43区のVIII層掘り下げ・IX層上面コンター図作成・X～XI層掘り下げ・IX層上面検出落とし穴実測・写真撮影・下層確認トレンチXIV～XVII層掘り下げ。F～G-48～49区の下層確認トレンチXIII～XVII層掘り下げ。F～H-51区の下層確認トレンチX層掘り下げ。H-53区のIVb層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ。H～I-33～35区の焼土遺構実測。

平成19年2月

F～I-29～31区の下層確認トレンチXIV～XVI層掘り下げ。F～I-39～43区の下層確認トレンチVIII～XVII層掘り下げ・X～XI層掘り下げ・遺物取上げ・土層断面実測・VII層検出集石及びIX層上面検出土坑実測・写真撮影。G-32～33区のVII～VIII層掘り下げ・遺物取上げ・IX層上面コンター図作成。G～H-36～38区のVII～X層掘り下げ・遺物取上げ・IX層上面コンター図作成。

平成19年3月

H～I-29～31区の下層確認トレンチXV～XVII層掘り下げ・土層断面実測。E～I-32～43区の下層確認トレンチXIV～XV層掘り下げ・写真撮影・遺物取上げ・VII層検出集石及びIX層上面検出土坑実測・写真撮影。H-53～54区の下層確認トレンチIII～IX層掘り下げ・遺物取上げ・土層断面実測。F～G-61～62区の下層確認トレンチIII～VI層掘り下げ・遺物取上げ。調査終了。

### 【西原段 I 遺跡・野鹿倉遺跡】

調査の経過は、日誌抄により週単位で略述する。

(平成18年度) ※A地点、B地点は西原段 I 遺跡をあらわす。

平成18年12月4日(月)～8日(金)

A地点 確認トレンチ1・2調査。重機による表土剥ぎ。B地点 雑木、杉根除去作業。

平成18年12月11日(月)～15日(金)

A地点 VII～VIII層調査 土坑1号の調査。B地点 雑木、杉根除去作業。

平成18年12月18日（月）～22日（金）

A地点 ボラ抜きによってⅧ層近くまで攪乱を受けているため、下層確認トレンチを設定し、調査を行う。土層断面実測。トレンチ配置図作成。

B地点 雑木、杉根除去作業。トレンチ調査。トレンチ配置図作成。

平成18年12月25日（月）～26日（火）

B地点 Ⅱ層調査。

平成19年1月5日（金）～12日（金）

A地点 下層確認調査。土坑検出。

B地点 トレンチ調査。畝状遺構検出。検出状況写真撮影及び実測。Ⅲ層調査。

平成19年1月15日（月）～19日（金）

A地点 下層確認調査。隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 畝状遺構調査。Ⅲ～Ⅳ層調査。コンター図作成。

平成19年1月22日（月）～26日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 畝状遺構調査。Ⅳ～Ⅴ層調査。コンター図作成。土層断面図作成。

平成19年2月1日（木）～9日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 Ⅴ～Ⅶ層調査。集石検出。写真撮影及び実測。下層確認調査。

野鹿倉遺跡 確認トレンチA・B 2本設定。

平成19年2月13日（火）～16日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 Ⅴ～Ⅷ層調査。集石検出。写真撮影及び実測。遺物取上げ。下層確認調査。

野鹿倉遺跡 確認トレンチA・B 2本設定。Ⅸ層上面まで調査。

平成19年2月19日（月）～26日（月）

空中写真撮影（21日）。B地点 下層確認調査。集石調査。トレンチ配置図作成。

平成19年3月1日（木）～9日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 Ⅳ層上面落とし穴検出、平面実測、半裁。Ⅳ層上面コンター図作成（F-30・31区）。

平成19年3月12日（月）～16日（金）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。

B地点 落とし穴調査、逆茂木痕検出。Ⅴ層調査。下層確認トレンチ調査。

平成19年3月19日（月）～20日（火）

A地点 隣接地試掘トレンチ調査。埋め戻し。調査終了。

B地点 落とし穴調査。下層確認トレンチ調査。埋め戻し。調査終了。

（平成19年度）

平成19年8月1日（水）～10日（金）

西原段Ⅰ遺跡 Ⅲ～Ⅳ層調査。硬化面を伴う道路状遺構調査。

野鹿倉遺跡 確認トレンチ調査。重機による樹根除去及び表土剥ぎ。  
平成19年8月16日（木）～17日（金）  
西原段Ⅰ遺跡 C・D-4～6区Ⅲ～Ⅳ層調査。遺物取上げ。硬化面を伴う道路状遺構調査。  
野鹿倉遺跡 確認トレンチ調査。重機による樹根除去及び表土剥ぎ。  
平成19年8月20日（月）～24日（金）  
西原段Ⅰ遺跡 Ⅲ～Ⅳ層調査。遺物取上げ。硬化面を伴う道路状遺構調査。  
野鹿倉遺跡 確認トレンチ調査。遺物出土状況，土層断面写真撮影。  
平成19年8月27日（月）～28日（火）  
西原段Ⅰ遺跡 B～D-3～6区Ⅲ～Ⅳ層調査。遺物取上げ。C-5区東壁土層断面図作成。  
野鹿倉遺跡 確認トレンチ調査。重機による樹根除去及び表土剥ぎ。  
平成19年9月3日（月）～7日（金）  
西原段Ⅰ遺跡 B～D-4～5区Ⅳ層調査。遺物取上げ。E・F-1・2区北壁土層断面図作成。  
野鹿倉遺跡 下層確認トレンチ調査。E・F-7区Ⅲa～Ⅳ層調査。  
平成19年9月10日（月）～14日（金）  
西原段Ⅰ遺跡 Ⅲa～Ⅳ層調査。遺物取上げ。甕形土器出土状況実測及び取上げ。土坑調査。  
野鹿倉遺跡 下層確認トレンチ調査。E・F-7区Ⅲa～Ⅳ層調査。  
平成19年9月18日（火）～21日（金）  
西原段Ⅰ遺跡 Ⅲa～Ⅳ層調査。遺物取上げ。  
野鹿倉遺跡 下層確認トレンチ調査。E・F-7区Ⅲa～Ⅳ層調査。  
平成19年9月25日（火）～27日（木）  
西原段Ⅰ遺跡 B～D-1～3区Ⅳ層調査。遺物取上げ。  
野鹿倉遺跡 1トレンチ拡張部分調査。E・F-7区Ⅶ層調査。I・J-5～6区Ⅷ層調査。  
Ⅷ層上面検出集石調査。  
平成19年10月2日（火）～5日（金）  
西原段Ⅰ遺跡 D・E-2・3区Ⅳb層調査。B～D-1・2区Ⅳb層調査。遺物取上げ。  
野鹿倉遺跡 E・F-7・8区Ⅷ層調査。集石調査。  
平成19年10月9日（火）～12日（金）  
西原段Ⅰ遺跡 B～D-1・2区Ⅳ層調査。下層確認調査。  
野鹿倉遺跡 E～J-7区Ⅶ～Ⅷ層調査。集石調査。  
平成19年10月15日（月）～19日（金）  
西原段Ⅰ遺跡 下層確認調査。C～E-3・4区Ⅳ層調査。  
野鹿倉遺跡 E・F-7区Ⅹ層調査。集石実測。  
平成19年10月22日（月）～26日（金）  
西原段Ⅰ遺跡 C-2・3区（市道下部分）Ⅳ層調査。遺物取上げ。  
野鹿倉遺跡 E・F-7・8区Ⅺ～ⅩⅦ層調査。I・J-7・8区Ⅹ～ⅩⅦ層調査。  
空中写真撮影（22日）。調査終了。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

建山遺跡は曾於市大隅町岩川に、西原段Ⅰ遺跡及び野鹿倉遺跡は曾於市大隅町中之内に所在する。曾於市は、鹿児島県の東部を形成する大隅半島の北部に位置し、東側に志布志市、南側に曾於郡大崎町及び鹿屋市、西側に霧島市、北側は都城市と接し、宮崎県との県境に位置している。

遺跡の所在する曾於市を含めた鹿児島県北部から大隅半島北半分にかけての地勢を概観すれば、東西の山地とこれらに挟まれた低地帯から構成されている。

山地は、東側に志布志湾北部から宮崎県に突出した形で、北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）で、主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中生層の地質からなっている。西側は、北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なる。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と、南部の大籠柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。東西の山地は、ともに九州山地の延長をなし、それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。

これらの山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この地域の火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、大部分は湾奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。この火砕流堆積物は、堆積後現在に至るまでに大小多くの河川で開折され、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。一方、低地は、高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また何段かの河岸段丘も認められる。

曾於市のうち大隅町の地形は、東西に狭長で北部高地に端を発する前川、後川、月野川の三川がそれぞれ町内の東部、中部の波状型の凹地を随所に貫流し、東南に向かい、菱田川に入り志布志湾に注いでいる。大隅半島の基盤となる地層は、高隈山周辺に分布している新生代古第3紀の日南層群である。

建山遺跡が所在する岩川地区は、曾於市のほぼ中央部にあたり、西部の牧ノ原台地から東部の岩川低地に漸移する標高200m～300mの丘陵性台地が卓越する地域である。さらに、この丘陵性台地は、大淀川水系と菱田川水系に属する諸河川により浸食を受け、小台地群に分断された台地に立地している。

西原段Ⅰ遺跡は、曾於市大隅町岩川の標高約270mの台地状に位置する。谷部には志布志湾に注ぐ菱田川の支流である前川が流れ、さらにその支流となる川の開析によって南東から北西に延びるやせ尾根状の台地が形成されている。台地の北側と南側に開析する谷により、南北はさらに、小さな舌状台地が形成されている。谷の底部と遺跡の立地する台地との比高差は約30mである。

野鹿倉遺跡は、曾於市大隅町の西方で、複雑に入り込んだ狭少な標高約287mの台地縁辺端部に位置している。遺跡は、主要地方道志布志・福山線八木塚と、同線坂元を起点とする市道桂・二重堀線の西原段Ⅰ遺跡とのほぼ中間地点付近で、養豚場や養鶏場のある台地に所在する。周辺には台地



との比高差約30～60mの谷が複雑に貫入している。

## 第2節 歴史的環境

建山遺跡・西原段Ⅰ遺跡・野鹿倉遺跡の周辺は、これまで本格的な発掘調査がされていないため詳細は不明だったが、近年の東九州自動車道建設に伴って調査された遺跡によって、次第に様相がはっきりしつつある。

旧石器時代では、耳取・桐木・桐木B・関山・建山・定段・チシャノ木などの遺跡で多くの資料が出土している。とりわけ耳取・桐木遺跡ではナイフ形石器文化期と細石刃文化期の二時期の遺構・遺物が発見され、これらはさらに細分化される様相もある。ナイフ形石器文化期ではナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器などとともに多くの礫群や石器製作跡が検出されており、耳取遺跡では日本最古級の女性像ともいわれる石製品も出土している。細石刃文化期でも細石核や細石刃とともに礫群・石器製作跡が検出されている。建山遺跡でもナイフ形石器文化期のナイフ形石器・剥片尖頭器とともに石器製作跡が、細石刃文化期の細石刃・細石核とともに石器製作跡が検出されている。

縄文時代の遺跡は各時期、多くの遺跡が発見されているが、なかでも古い時期のものが多。

草創期のもは少ないが、桐木遺跡では隆起線文土器や石鏃が出土し、集石が検出されている。

早期の遺構は、竪穴住居跡・連穴土坑・集石・土坑・落とし穴などが、踊場・耳取・桐木・関山・関山西・地蔵免・唐尾・西原段Ⅰ・建山・狩俣・高古塚・定段・チシャノ木など多くの遺跡で検出されており、吉田式・前平式・撚糸文・押型文・石坂式・平楯式・塞ノ神A式・塞ノ神B式など多種の土器や多種多量の石器が出土している。この中では前平式土器などとともに竪穴住居跡約40軒、土坑約220基、集石約30基などが検出された定段遺跡が注目される。この地域は早期集落の密集度が高い地域といえる。

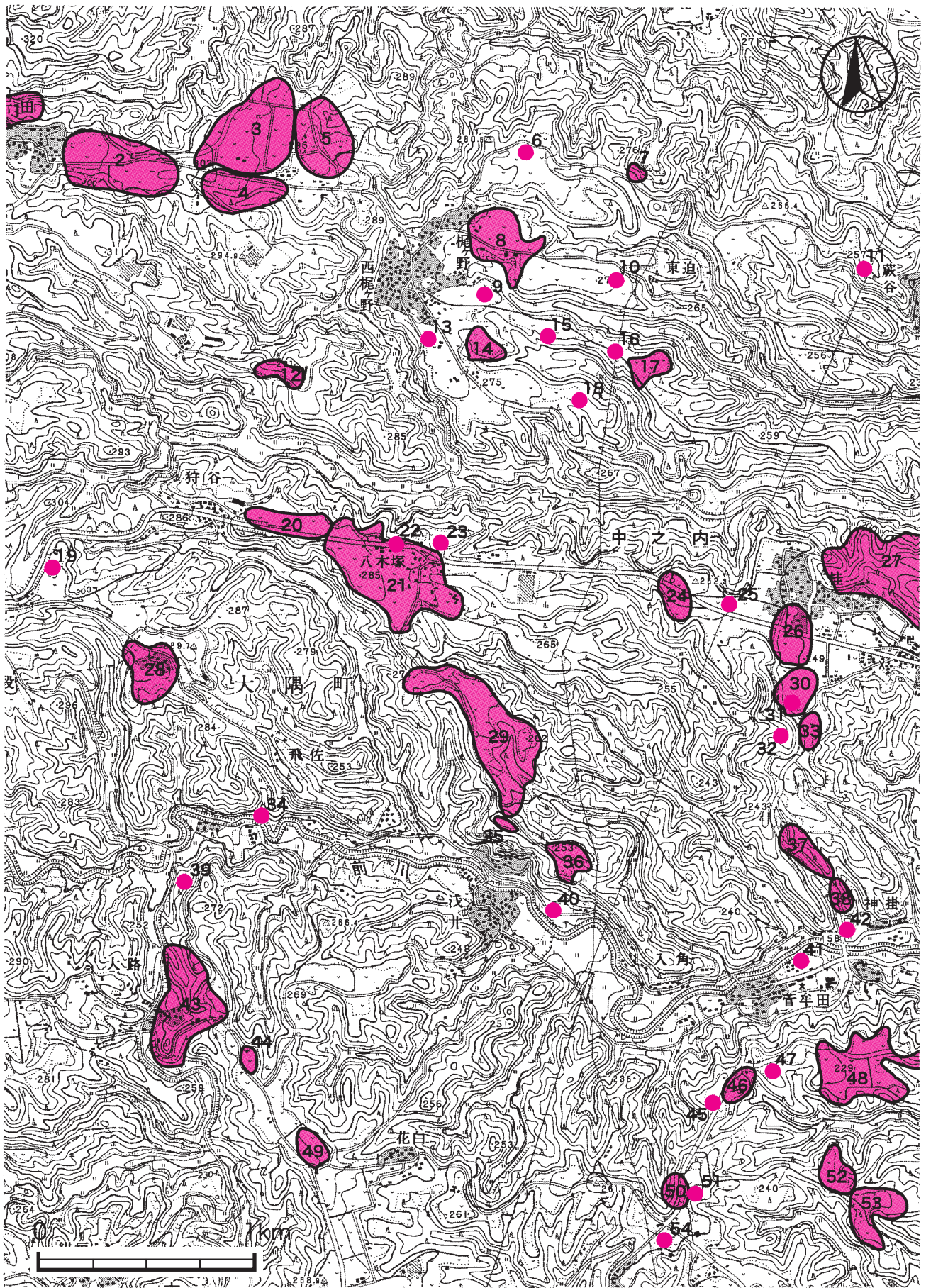
中期では桐木遺跡で船元式土器・石鏃・石匙が多く出土し、関山・唐尾・高古塚などの遺跡で落とし穴が、小倉前・チシャノ木遺跡では土坑が検出されている。

後期の遺跡はそれほど多くないが、丸尾遺跡は丸尾式土器の標識遺跡である。

晩期の遺跡は各地にあるが、大きな集落遺跡はない。桐木遺跡では入佐式・黒川式土器とともに5軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑などが検出されている。他に入佐式土器や黒川式土器とともに関山・関山西・唐尾・建山などの遺跡で竪穴住居跡が検出されている。上中段遺跡では夜臼式土器の土器セットに丹塗り壺や刃痕土器などが含まれている。

地形のせい、弥生時代・古墳時代の遺跡は少なく、関山西・打込・吹切段Ⅱ遺跡などが挙げられるが詳細は不明である。墳墓や集落の様相も不明である。

古代は高篠・踊場といった都城盆地に近い遺跡で掘立柱建物跡などが検出されているが、内陸部では少ない。中尾立・唐尾・建山・狩俣・高古塚などで掘立柱建物跡や焼土跡などが検出され、墨書土器も出土している。上中段遺跡では墨書土器や焼塩土器などとともに韃の羽口や鉄滓・鉄製品など製鉄関係の遺物が多く出ている。中世では桐木遺跡で道跡が、狩俣遺跡で畠跡が検出されている。



第1図 周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表(1)

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	63-36-0	前畑段	曾於市大隅町中之内 前畑段	丘陵	縄文(後)	岩崎上層式	
2	63-101-0	東原	曾於市大隅町中之内 東原	台地	縄文(早～ 晩), 弥生, 奈良, 平安	縄文土器・土師器・ 打製石斧(半欠)・ 鉄滓	
3	63-57-0	西原段Ⅱ	曾於市大隅町中之内 西原段	台地	縄文	縄文土器	
4	63-186-0	峯段	曾於市大隅町中之内 峯段	台地	縄文, 平安	土器・土師器	町埋文報(16)
5	63-27-0	西原段Ⅰ	曾於市大隅町中之内 西原段	台地	縄文(後)	岩崎上層式	本報告書
6	63-99-0	ノト口	曾於市大隅町中之内 ノト口	台地	縄文(晩)	縄文土器・局部磨製 石斧・敲石	
7	63-206-0	谷川内	曾於市大隅町中之内 谷川内	丘陵	奈良～平安	土師器	
8	63-115-0	打込	曾於市大隅町中之内 打込	台地	弥生, 歴史	土師器	
9	63-142-0	前岡	曾於市大隅町中之内 前岡	台地	歴史	土師器	
10	63-95-0	わらび堂	曾於市大隅町中之内 わらび堂	台地	縄文(晩)	縄文土器・頁岩剥片	
11	63-146-0	蕨谷	曾於市大隅町中之内 蕨谷	丘陵	縄文(早), 歴史	小片のため時代不明	
12	63-252-0	野鹿倉	曾於市大隅町中之内 野鹿倉	台地	縄文	土器	本報告書
13	63-141-0	前畑	曾於市大隅町中之内 前畑	台地	縄文, 歴史	須恵器	
14	63-40-0	中崎迫	曾於市大隅町中之内 中崎迫	台地	縄文(晩), 歴史	土師器	
15	63-143-0	重ヶ迫	曾於市大隅町中之内 重ヶ迫	台地	古代	土師器	
16	63-144-0	重吉迫Ⅰ	曾於市大隅町中之内 重吉迫	台地	古代	土師器・黒色土器	
17	63-28-0	重吉迫Ⅱ	曾於市大隅町中之内 重吉迫	台地	縄文(後), 古代	土師器	
18	63-145-0	高尾迫	曾於市大隅町中之内 高尾迫	台地	歴史	土師器	
19	63-17-0	観音段	曾於市大隅町中之内 4300	台地	縄文(早)	石皿	
20	63-29-0	狩谷	曾於市大隅町中之内 狩谷	台地	縄文(後)		
21	63-253-0	建山	曾於市大隅町岩川 建山	台地	旧石器, 縄 文, 古代	土器	本報告書
22	63-187-0	八木塚	曾於市大隅町中之内 八木塚	台地	中世	墳丘(消滅)	
23	63-102-0	柿木渡	曾於市大隅町中之内 柿木渡	台地	縄文	石錘(5例)	
24	63-213-0	一里山	曾於市大隅町中之内 一里山サセフ	台地	縄文(早)	前平式・塞ノ神式	
25	63-166-0	一里山	曾於市大隅町中之内 一里山・二本榎	台地	縄文(晩), 歴史	土師器・青磁	
26	63-239-0	尾ノ迫	曾於市大隅町中之内 桂	台地	縄文, 中世, 近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
27	63-168-0	手取城跡	曾於市大隅町中之内 手取・陣之元	丘陵	中世, 近世		「日本城郭体系」18, 町埋文報(15)
28	63-16-0	赤松迫	曾於市大隅町大谷 赤松迫	台地	縄文(早)	石坂式	
29	63-254-0	狩俣	曾於市大隅町岩川 狩俣	台地	縄文, 古代	土器・石器	H17年, 18年発掘調 査
30	63-240-0	吹切段A	曾於市大隅町中之内 西笠木	台地	縄文, 中世, 近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
31	63-41-0	吹切段Ⅰ	曾於市大隅町中之内 吹切段	台地	縄文(晩)	布目文	「大隅町誌」

第2表 周辺遺跡一覧表(2)

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
32	63-118-0	吹切段Ⅱ	曾於市大隅町中之内吹切段	台地	縄文(早・晩), 弥生, 奈良, 平安, 中世	弥生土器	
33	63-241-0	松ヶ迫田	曾於市大隅町中之内笠木	台地	縄文	土器・石器	町埋文報(21)
34	63-152-0	宗ノ段	曾於市大隅町大谷宗ノ段	丘陵	歴史	土師器	
35	63-234-0	入角	曾於市大隅町岩川入角	台地	古墳?	墳丘?	
36	63-255-0	高古塚	曾於市大隅町岩川高古塚	台地	古墳, 古代	土器	H17年, 18年発掘調査
37	63-52-0	松ヶ迫田	曾於市大隅町中之内松ヶ迫田	台地	縄文(早・後・晩), 歴史	縄文土器	
38	63-242-0	長迫A	曾於市大隅町中之内神掛	段丘	縄文, 中世, 近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
39	63-174-0	宮田	曾於市大隅町大谷宮田	丘陵	縄文	炭化物・鉄滓	
40	63-61-0	浅井	曾於市大隅町岩川向上・仮屋ヶ段	丘陵	縄文	石斧・敲石	「大隅町誌」
41	63-136-0	光神免	曾於市大隅町岩川2828-3	丘陵	古墳	土師器	削平を受けているが墳丘らしきものが残存
42	63-119-0	長迫	曾於市大隅町中之内長迫	丘陵	縄文(晩), 弥生, 歴史	石斧・叩石・土師器	
43	63-190-0	愛宕山墨跡	曾於市大隅町長江字大路他	丘陵	中世(南北朝～戦国末)		県埋文報(29)
44	63-211-0	吹谷迫	曾於市大隅町大谷2428-4	台地	縄文	土器片	
45	63-156-0	菅牟田	曾於市大隅町岩川菅牟田	丘陵	縄文, 奈良, 平安	土師器	町埋文報(21) H16年発掘調査
46	63-243-0	菅牟田A	曾於市大隅町岩川菅牟田	山腹	縄文, 中世, 近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
47	63-43-0	イチノ木	曾於市大隅町岩川イチノ木・前畑上	台地	縄文(晩)		
48	63-44-0	上山	曾於市大隅町岩川上山	台地	縄文(晩), 歴史		
49	63-212-0	船窪	曾於市大隅町岩川船窪	台地	縄文, 古墳, 平安～近世	土師器	町埋文報(9)
50	63-244-0	井手山A	曾於市大隅町岩川久木山	台地	縄文(早), 近世	土器・石器・陶磁器	報告書有
51	63-62-0	井手山	曾於市大隅町岩川井手山・定塚	台地	縄文, 歴史	土師器	
52	63-2-0	定段(定塚)	曾於市大隅町岩川定塚・入佐	台地	旧石器, 縄文(早), 歴史	前平式・塞ノ神式・土師器	H16年, 17年発掘調査
53	63-63-0	稲村	曾於市大隅町岩川稲村	丘陵	縄文		H17年, 18年発掘調査
54	63-70-0	久木山	曾於市大隅町岩川麦ヶ迫	台地	縄文	叩石・石皿・石斧	「大隅町誌」

【参考文献】

1. 大隅町役場 昭和44年2月「大隅町史」
2. 鹿児島県立埋蔵文化財センター2002.3「出水平遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(43)
3. 鹿児島県立埋蔵文化財センター2002.3「九養岡遺跡・蹄場遺跡・高篠遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(36)
4. 鹿児島県立埋蔵文化財センター2005.3「桐木耳取遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(91)
5. 鹿児島県立埋蔵文化財センター2008.3「関山遺跡・鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(125)
6. 鹿児島県立埋蔵文化財センター2008.3「関山西遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(126)
7. 鹿児島県立埋蔵文化財センター2008.3「唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(127)
8. 国土調査1972「土地分類基本調査-岩川」
9. 末吉町役場, 末吉町教育委員会 昭和45年10月「末吉郷土史」
10. 芳 即正・塚田公彦編 旺文社1995.11「鹿児島県風土記」
11. 平凡社1998.7「鹿児島県の地名」日本歴史地名大系47

### 第三章 遺跡の層位

層厚は異なるが、隣接する桐木耳取遺跡の基本層位と一致する。以下、各層について順に述べる。なお、P3、P11、P14、P15、P17は桜島を噴出源とするものである。

層順		噴出年代	
I 層	表土		暗褐色土 現表土。
II 層	文明ボラP3	AD1,471年	黄白色軽石層 桜島を噴出源とした軽石層。近年の発掘調査で畝状遺構の発見事例が報告。
IIIa層			黒色土 主に古代から中世の遺物包含層。
IIIb層			黒褐色土 主に古代の遺物包含層。
IVa層			茶褐色土 IVb層の腐植土と捉えられ、縄文時代後期から晩期該当の遺物包含層。
IVb層	御池火山灰	約4,600年前	黄褐色砂粒土 霧島御池火山灰層に比定される。
Va層			赤橙色土 Vb層の腐植土で縄文時代前期から中期該当の遺物包含層。
Vb層	アカホヤ火山灰	約7,300年前	暗赤褐色土 遺跡全体に安定して堆積。鬼界カルデラを噴出源とする。
VIa層			青灰色土 縄文時代早期該当の遺物包含層。
VIb層	桜島P11	約8,000年前	黄褐色軽石層 桜島を噴出源とした軽石層。
VII 層			明黄褐色土 縄文時代早期該当の遺物包含層。
VIII 層			黒褐色土 縄文時代早期該当の遺物包含層。
IX 層	薩摩火山灰P14	約12,800年前	黄白色火山灰土 ほぼ全域に20～25cm程度堆積しており、上位は固結した火山灰、下位は3mm前後の軽石で構成。
X 層			黒褐色粘質土 旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層。通称チョコ層。
X I 層			黄橙色粘質土 旧石器時代該当の遺物包含層。
X II 層			暗褐色粘質土
X III 層			黄色軽石混褐色粘質土
X IV 層	桜島P15含む		暗褐色硬質土
X V 層			暗褐色硬質土 旧石器時代該当の遺物包含層。
X VI 層	桜島P17含む	約26,000年前	明赤褐色土 旧石器時代該当の遺物包含層。
X VII 層			黄褐色砂質土 下位にあるシラスの風化層。
	シラス	約26,000～29,000年前	明黄白色砂質土 始良カルデラを噴出源とする。入戸火砕流堆積物、ATと表示される遺跡の基盤層。

第2図 基本土層図（網かけは、遺物包含層）

【参考文献】町田洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」東京大学出版会

# 建 山 遺 跡

## 第IV章 建山遺跡

### 第1節 発掘調査の方法及び層位

平成17年8月8日から平成18年3月22日まで（平成17年度）に確認調査と本調査を行い、平成18年5月9日から平成19年3月20日まで（平成18年度）本調査を行った。

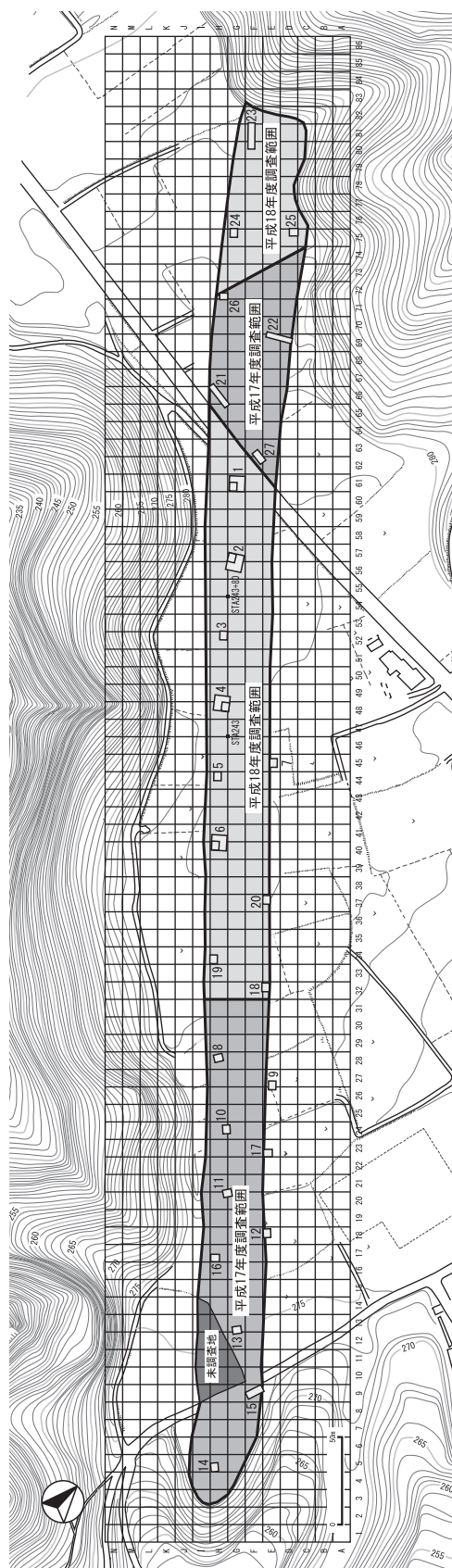
平成17年度の確認調査は、 $5 \times 4$  mの大きさを基本とするトレンチを27か所設定して実施した結果、ほぼ全てのトレンチから遺構や遺物が確認され、遺跡は全域に広がることになった（第3図）。

確認調査の結果に基づき、平成17年度の本調査は遺跡の南端部及び県道63号線の北側部分（一部）を実施した。また、平成18年度の本調査は遺跡の北端部及び中央部を実施した。

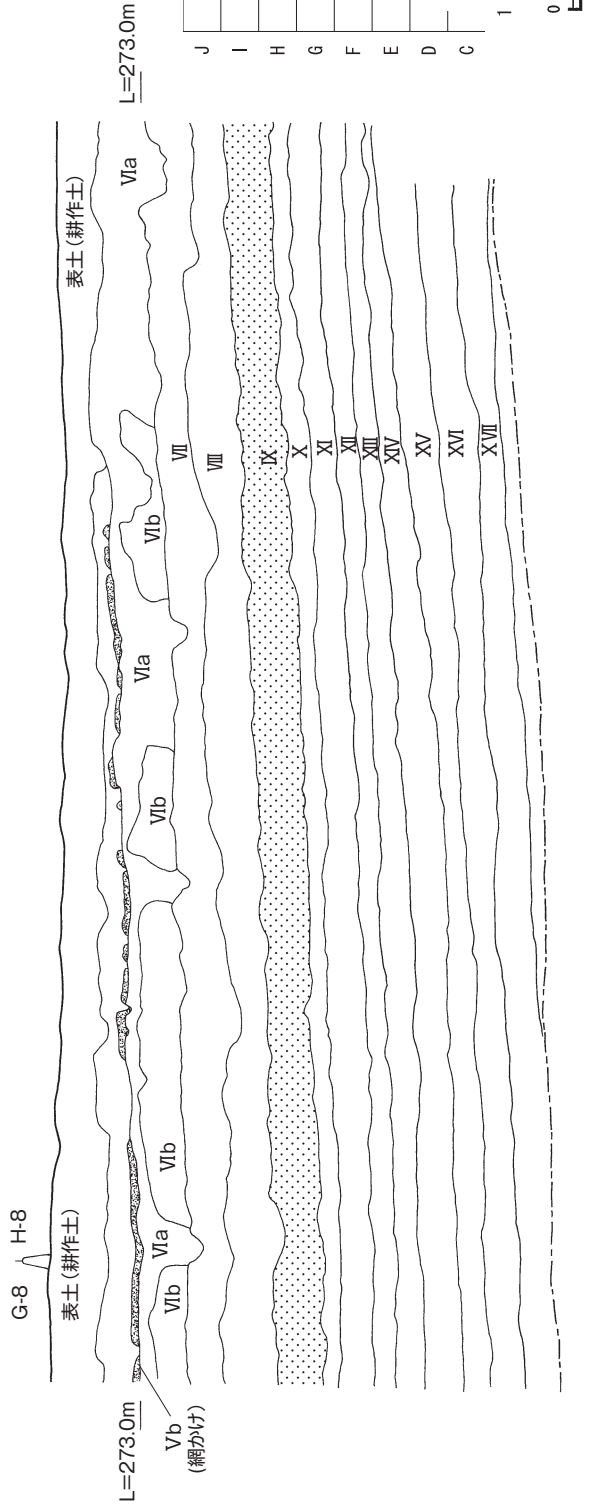
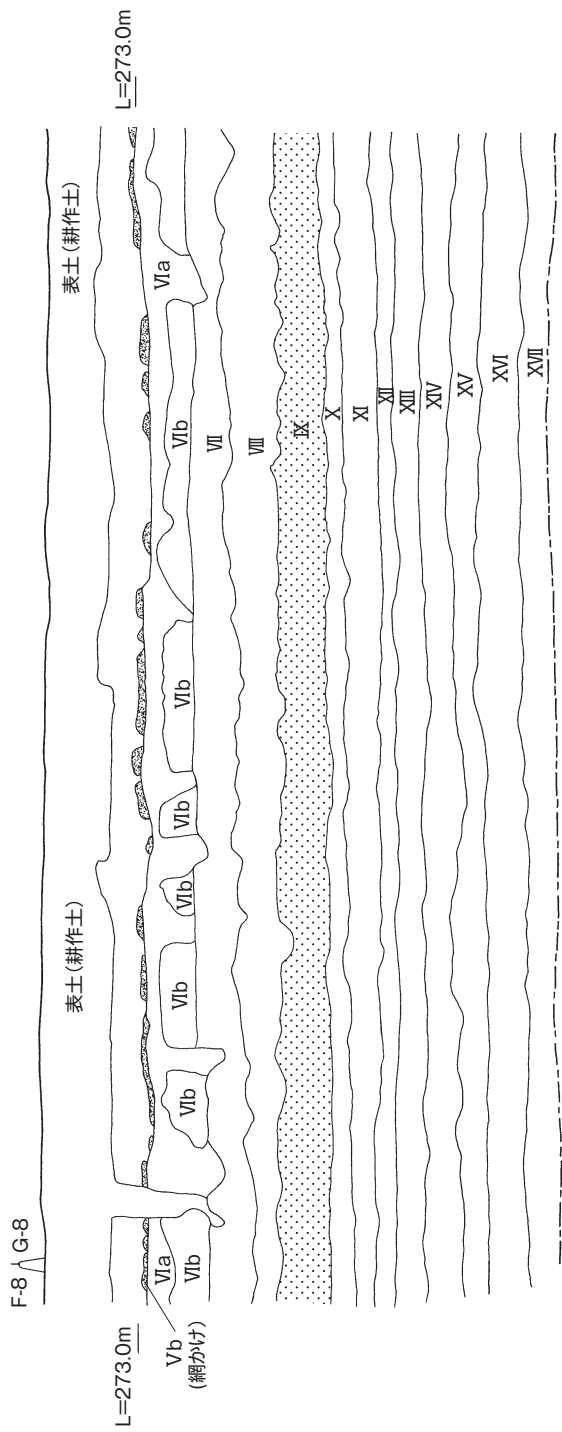
調査は、I層（現表土層）及び無遺物層と確認されたVb層、IX層については重機により掘削し、遺物包含層及びその可能性がある層については人力による掘り下げを行った。

遺跡内の位置を決定するために $10\text{m} \times 10\text{m}$ の区割り（グリッド）を設定した。グリッドは西日本高速道路株式会社により設定された高速道路センター基準杭STA243とSTA243+80の2点を結ぶ直線を基準軸として東から西側に向かって1, 2, 3・・・, 北から南側に向かってA, B, C・・・とする $10\text{m}$ 間隔のグリッドを設定した。

出土遺物及び遺構は写真撮影及び位置の記録、実測作業を行い、炭化物等は自然科学分析用のサンプリングを行った。

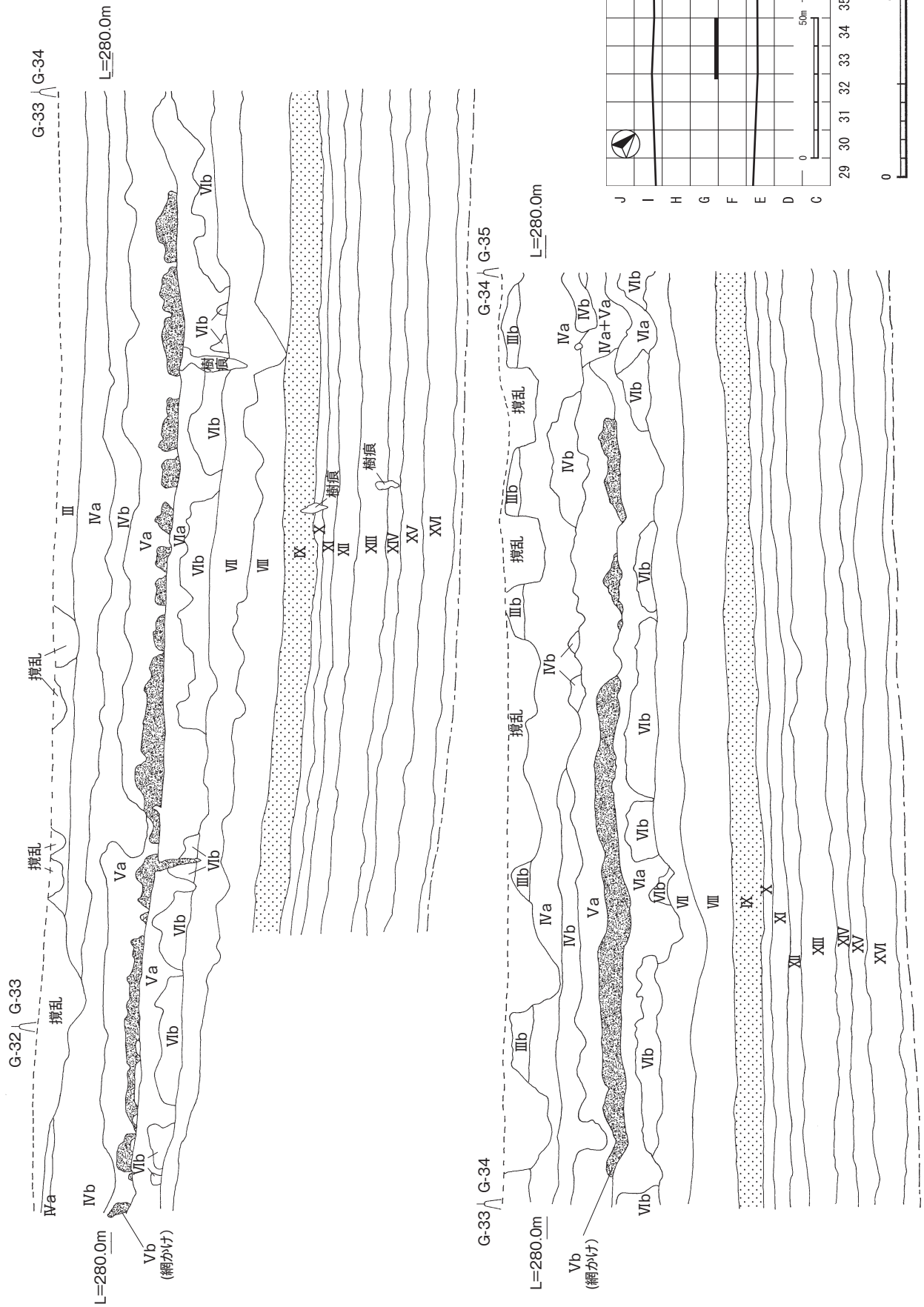


第3図 トレンチ配置図及び周辺地形図

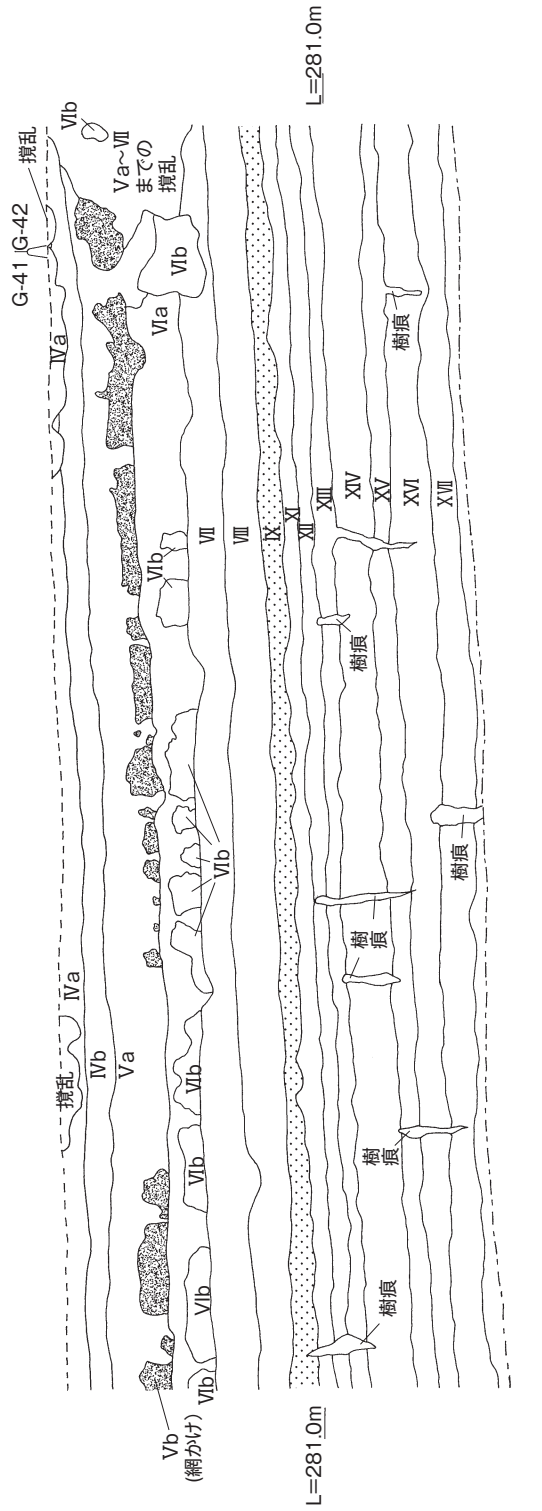
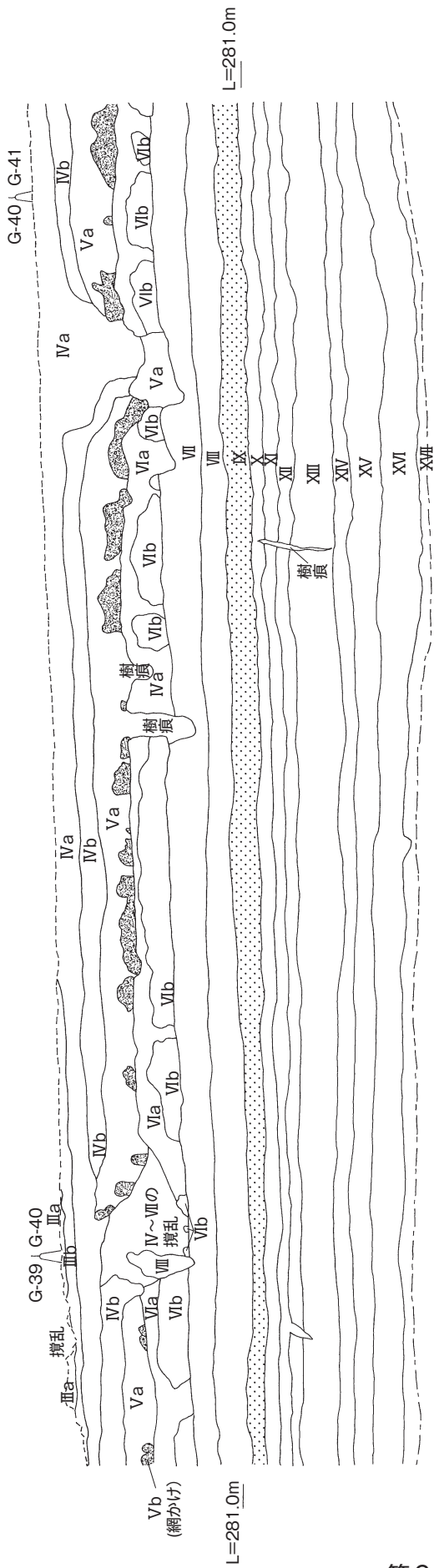


第4図 土層断面図(1)



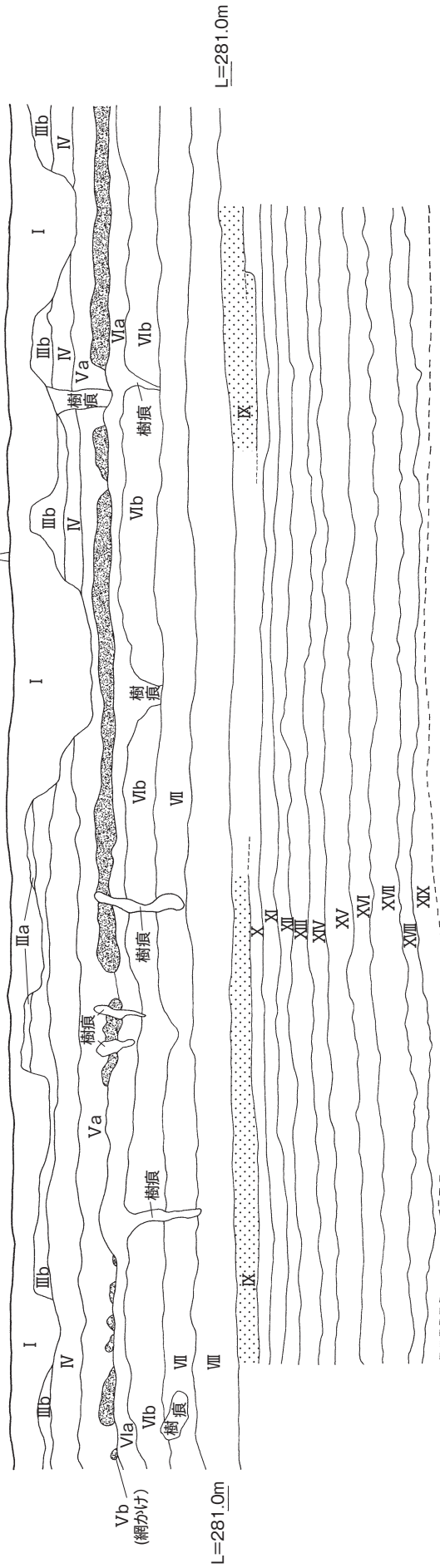


第5図 土層断面図(2)

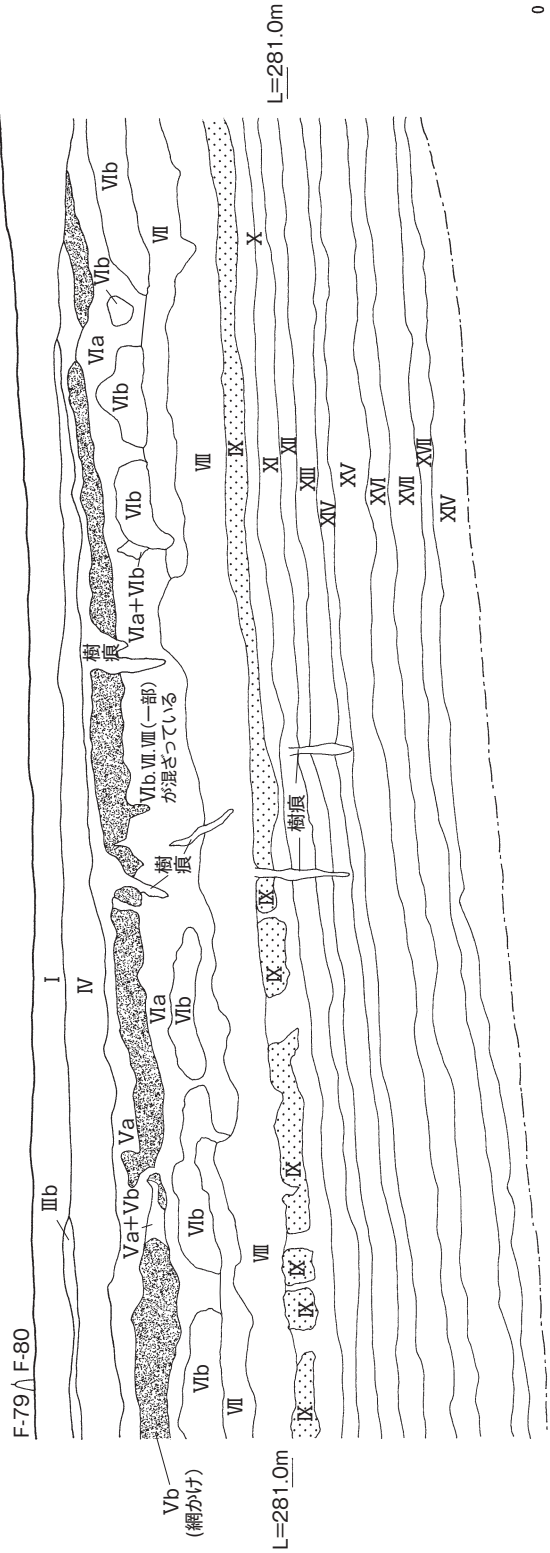


第6図 土層断面図(3)

F-79 | G-79



F-80 | F-81



第7図 土層断面図(4)

### 確認トレンチの状況

5 × 4 mの大きさを基本とするトレンチを27か所設定して実施した結果、ほぼすべてのトレンチから遺構・遺物が確認された。

27トレンチでは、Ⅲb層から軽石集積が検出された。その他のトレンチにおいてⅦ、Ⅷ層で検出された主な遺構は、集石遺構である。

第3表 トレンチ別調査結果

ト レ ン チ 番 号	層	I層	II層	Ⅲa層	Ⅲb層	Ⅳa層	Ⅳb層	Va層	Vb層	Ⅵa層	Ⅵb層	Ⅶ層	Ⅷ層	Ⅸ層	X層	XI層	XII層	XIII層	XIV層	XV層	XVI層	XVII層
	時期		P 3	中世	古代	縄文後期 晩期		縄文前期 中期		縄文 早期	P11	縄文 早期	縄文 早期	P14	草創 期旧 石器					P15		P17
1 T					○	×	×	×	×	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2 T					○	○	×	×	×	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3 T				○	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4 T				○	○	×	×	×	×	×	×	◎	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5 T					○	×	×	×	○	×	◎	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6 T					○	◎	×	×	×	×	◎	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7 T							×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8 T				○	○	×	×	×	×	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9 T					×	×	×	×	×	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
10 T					×	×	○	×	×	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11 T					○	×	×	×	○	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12 T						○	○	×	×	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
13 T													×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
14 T								×	×	×	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15 T										×	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16 T					×	×	×	×	×	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17 T						○	×	×	×	×	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
18 T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19 T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20 T		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21 T				○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22 T					×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
23 T					○	×	×	×	×	×	◎	◎	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
24 T					×	×	×	×	×	×	◎	◎	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
25 T				○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
26 T				○	○	×	×	×	×	×	○	×	×	○	-	-	-	-	-	-	-	-
27 T				◎	○	×	×	×	×	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-

◎：遺構検出 ○：遺物出土 ×：出土なし -：未調査

## 第2節 旧石器時代の調査成果

### 1 調査の概要

建山遺跡の旧石器時代遺物は、出土層の違いにより大きく三時期の文化層に区別できる。出土層が下位で時期的に古いものから、それぞれ第Ⅰ～Ⅲ文化層と呼称した。

第Ⅰ文化層は、第XVI層を出土層とするもので、3ヶ所のブロックからなり大型の槍先形尖頭器や三稜尖頭器を主体とするものである。また、礫群が1基検出されている。

第Ⅱ文化層は第XV層を包含層とするもので、2ヶ所のブロックが検出され、小型三稜尖頭器が主体となるものである。

第Ⅲ文化層は第X層からXI層を包含層とするもので、合計20ヶ所のブロックを認識した。主体となる石器群は細石刃石器群であるが、一部のブロックでは小型ナイフ形石器が主体となるものも存在し、また、石鏃や土器片を共伴するものも認められた。しかし、本来的に第Ⅲ文化層は細石刃文化期が主体であり、一部その前後の時期も存在していると考えられる。

これらのブロックのなかで特徴的なものが細石刃核型式と石材の違いであり、特に黒曜石の産地の差がブロックにより明確に異なり、それぞれの時期の細かな違いも反映していると考えられる。

### 2 旧石器時代の石器石材

出土した石器は多種多様の石材が使用されており、黒曜石についても南九州産のみでなく西北九州産が認められている。ここでは肉眼的観察により大きく区別し、それらの一部については産地同定分析を実施している。ここでは出土した主な黒曜石について区別しておく。

上牛鼻産… 風化が激しく、外観は消し炭状で特徴的なものであるが、新しい割れ面は漆黒で光を通さない。薩摩川内市樋脇町上牛鼻が主産地であるが、日置市市来町平木場も産地として確認されている。

上青木・桑ノ木津留産… アメ色で透明感があり、不純物の少ない特徴のものである。以前には桑ノ木津留産とされていたが、近年大口市上青木で広い散布域が確認された黒曜石である。また、いわゆる霧島系と呼ばれる黒色でわずかに不純物を有する小角礫の黒曜石も本報告書ではこれに含む。ここでは桑ノ木津留系とした。

日東系… 大口市日東産地を標準とするものであり、不純物が多いものである。透明感がない点で三船産と異なる。日東周辺では多くの産出地が知られているが、まだ多くの露頭の存在が予想されている。ここでは大口市五女木産を含む意味で日東系とした。

腰岳産… 漆黒色を呈し、不純物がきわめて少ないものである。南九州では遠隔地石材であり、集団の移動などに関連して、特定の時期もしくは特定の石器形態と関連している可能性が考えられる。

淀姫・針尾系… 青灰色を呈し、ガラス質であり不純物は少ない特徴のものである。淀姫産と針尾産は外礫皮面や色調の差などがあるが、ここでは一括して取り扱った。これも南九州では遠隔地石材であり、集団の移動などを考慮する必要があるだろう。ここでは淀姫系として取り扱った。

### 3 第I文化層の遺構と石器群

第I文化層は第XVI層を遺物包含層とするものである。第XVI層は、赤褐色を呈する細かい火山噴出物が認められるもので、桜島起源のP17と推定され、年代の決め手となる。遺物集中部は3ヶ所存在しており、南から1、2、3ブロックとした。礫群も1基検出された。

#### 第1ブロック

H・I-29・30区付近に位置しており、経18m×10mの範囲に分布を有する。石材は、頁岩、粘板岩、黒曜石などで、大型の槍先形尖頭器や三稜尖頭器、搔器、使用痕剥片などである。

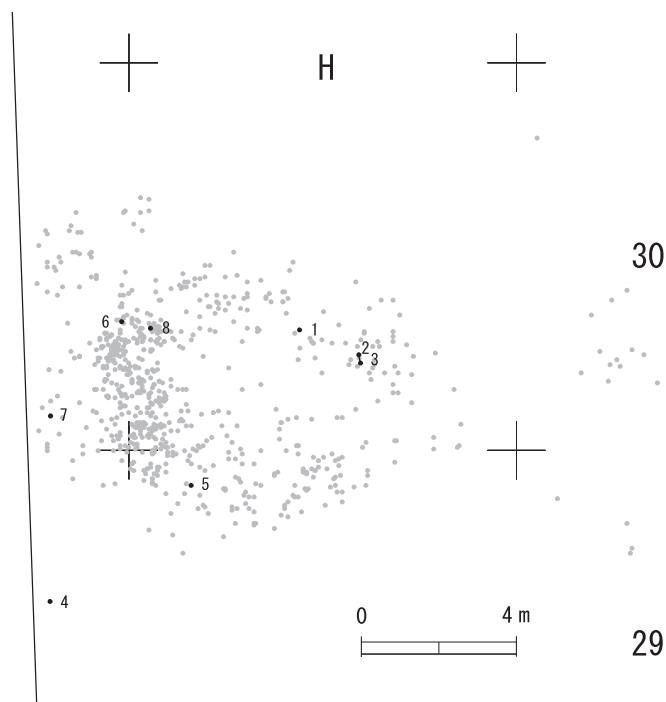
##### 槍先形尖頭器（第10図1）

1は幅広剥片を使用して比較的粗い剥離を両面から施して全体の整形を行ったものである。先端部は細かい剥離を丁寧に施して形成している。長さは15.5cm・幅4cmを計る。石材は粘板岩である。

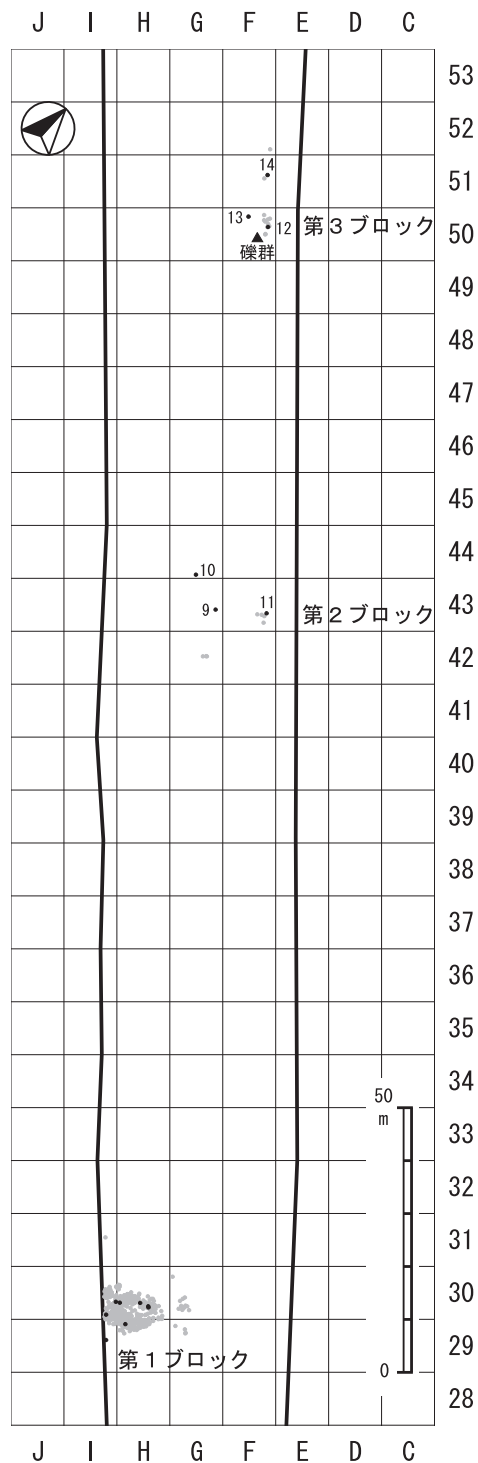
##### 三稜尖頭器（第10図2、第11図4・5）

2は背面に自然面をもつ横長剥片を素材としたもので、腹面側からの細かい連続した二次加工により整形を行い断面三角形で鋭い先端部をもつ。基部端は尖がらない。石材は安山岩が使用されている。3の整形剥離片が接合した状況である。

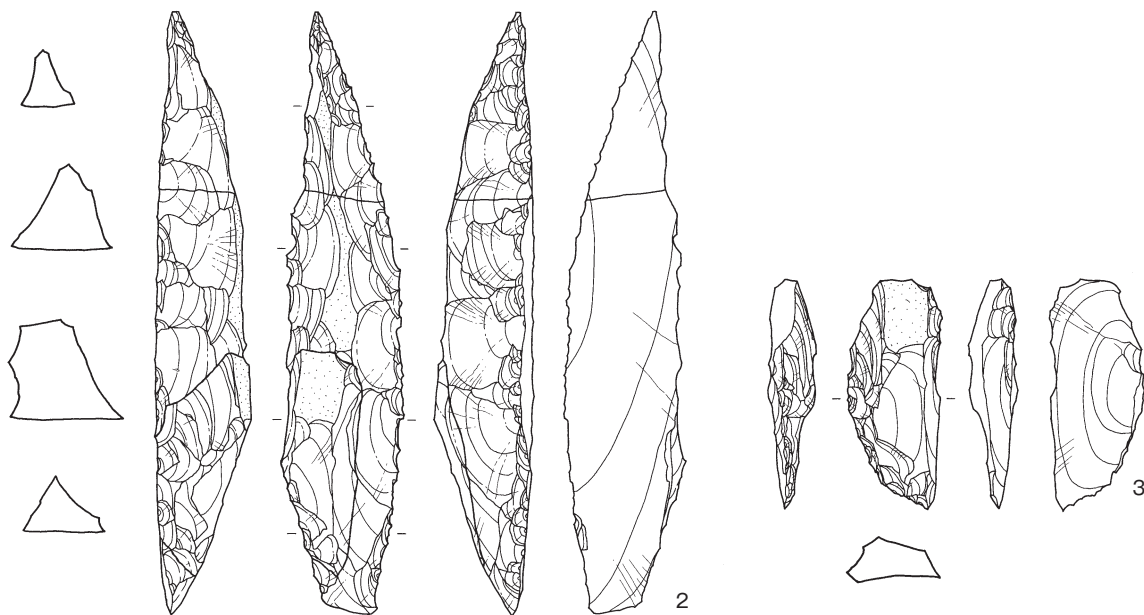
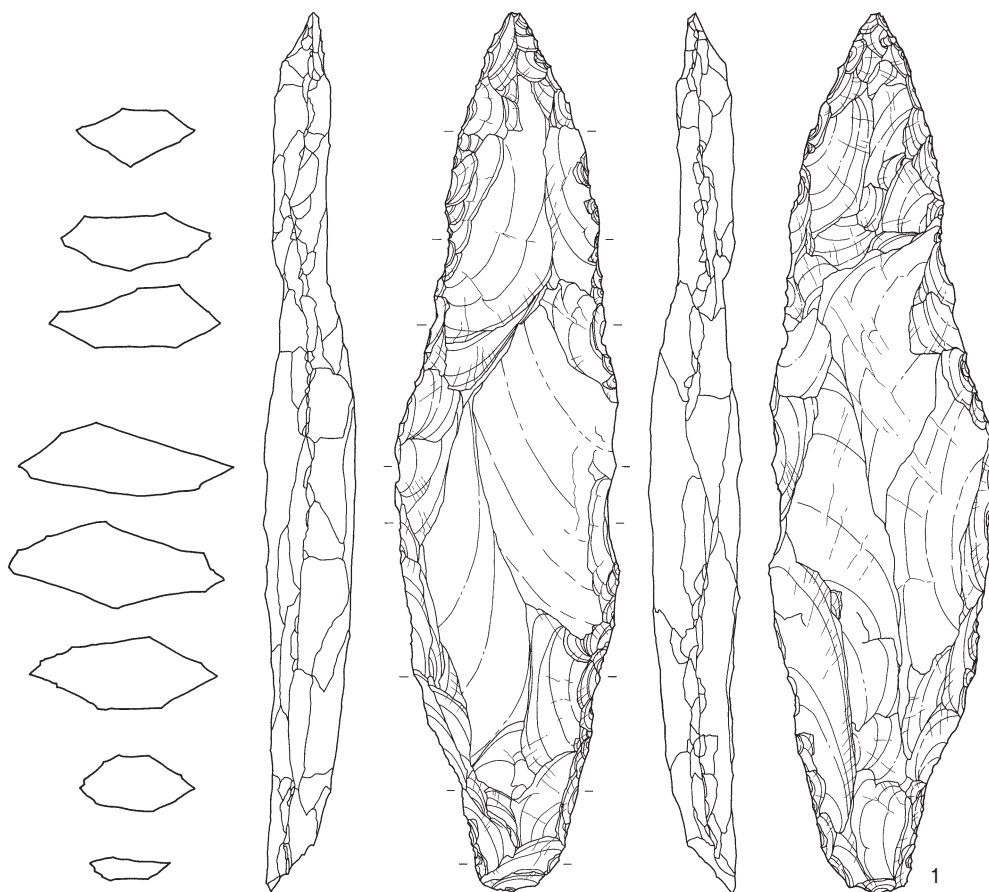
4は黒曜石製のものである。厚みのある横長剥片が素材とされ、剥片の打面部は平坦状の剥離により除去され



第9図 第I文化層 第1ブロック石器群出土分布図

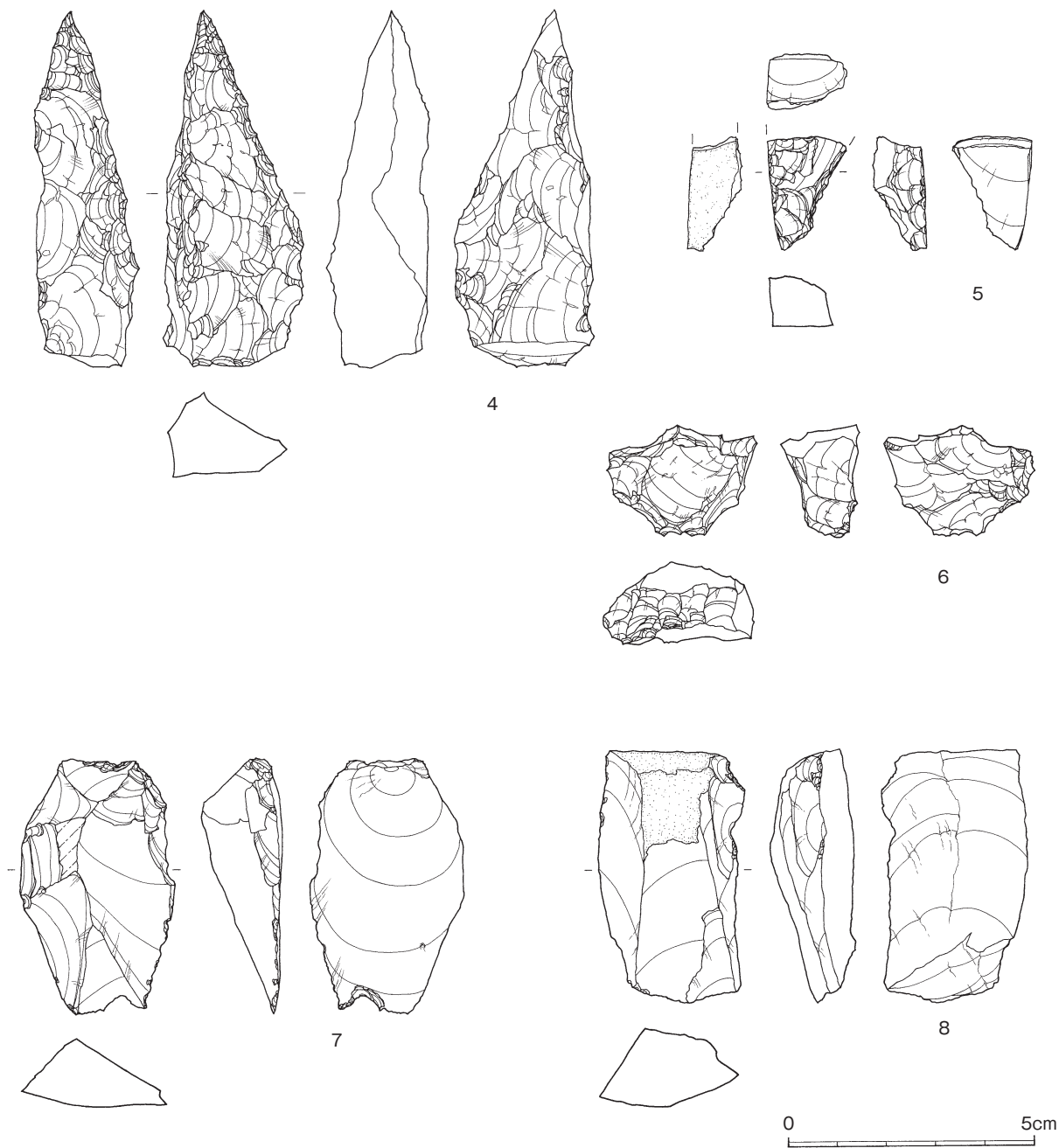


第8図 第I文化層の石器群位置図



0 5cm

第10図 第I文化層 第1ブロック出土石器(1)



第11図 第I文化層 第1ブロック出土石器(2)

ている。両側縁部は腹面側からの二次加工により整形されている。また背面の稜上剥離も施されている。5は2と同質の石材による欠損品である。細かい二次加工が施されている。

**搔器 (第11図6)**

6は4と同質の黒曜石製で、二次加工を急角度に施したものである。分析の結果日東系である。

**使用痕剥片 (第11図7・8)**

いずれも剥片の鋭利な縁辺に微細な使用痕が観察されるものである。7は珪質頁岩製、8は安山岩製である。



## 第2ブロック

G-43区及びF-42区から少量の遺物が出土した。ひとつのブロックとして認定できる出土量と言えないが、第2ブロックとした。石材は安山岩や頁岩である。

### ナイフ形石器 (第13図9・10)

9は背面に平坦な自然面が残る縦長剥片を素材としたものであり、鋭利な一側縁を残して他の縁辺はブランディングを施したものである。打面は折断して、それに近い両側縁に細かい二次加工を直線状に施して基部としている。先端部をわずかに欠損するものの、それでも長さ10cmを越すかなり大型のナイフ形石器である。10は頁岩製の縦長剥片を使用したものであり、剥片の打面は折断して、その近くの両側縁を直線的に二次加工して基部とした基部加工のナイフ形石器である。

### 剥片 (第13図11)

11は頁岩製であり、打面は前方向からの剥離で形成された山形の頂部に位置している。このような打面の形状と位置は瀬戸内技法に類似している。

## 第3ブロック

F-50・51区に分布域を有するもので、遺物量は多くない。少量の石器などのほか、礫群が1基検出された。

### 検出遺構

#### 礫群 (第12図)

F-50区のP17を含む第XVI層の下面で検出された。40×60cmの範囲に計6個の礫から構成されており、径5cmから12cm程度の礫が使用されていた。礫は火熱を受けて赤化が認められ、近辺には炭化物が多く認められた。ただし礫の下面に掘り込みは認められなかった。

出土した炭化物による年代測定 (AMS) の結果は、 $23,539 \pm 84$ 年であった。

遺構周辺の出土遺物はナイフ形石器や使用痕剥片など少数であった。

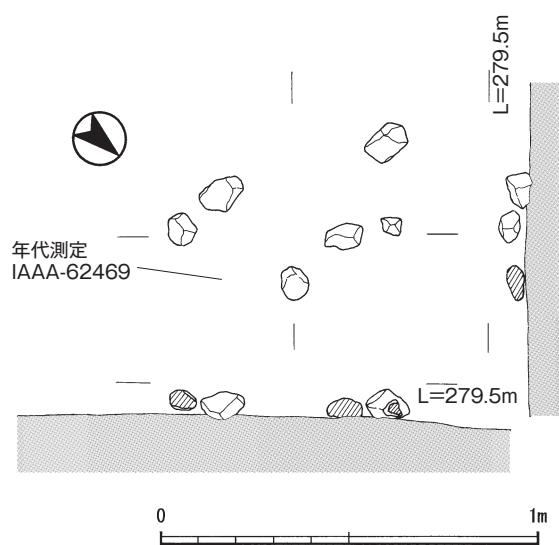
#### ナイフ形石器 (第13図12・13)

12は横長剥片を素材とし、基部は両側縁に腹面側から細かいブランディングを施しており、先端部はほとんど二次加工を施していないものである。石材は頁岩である。

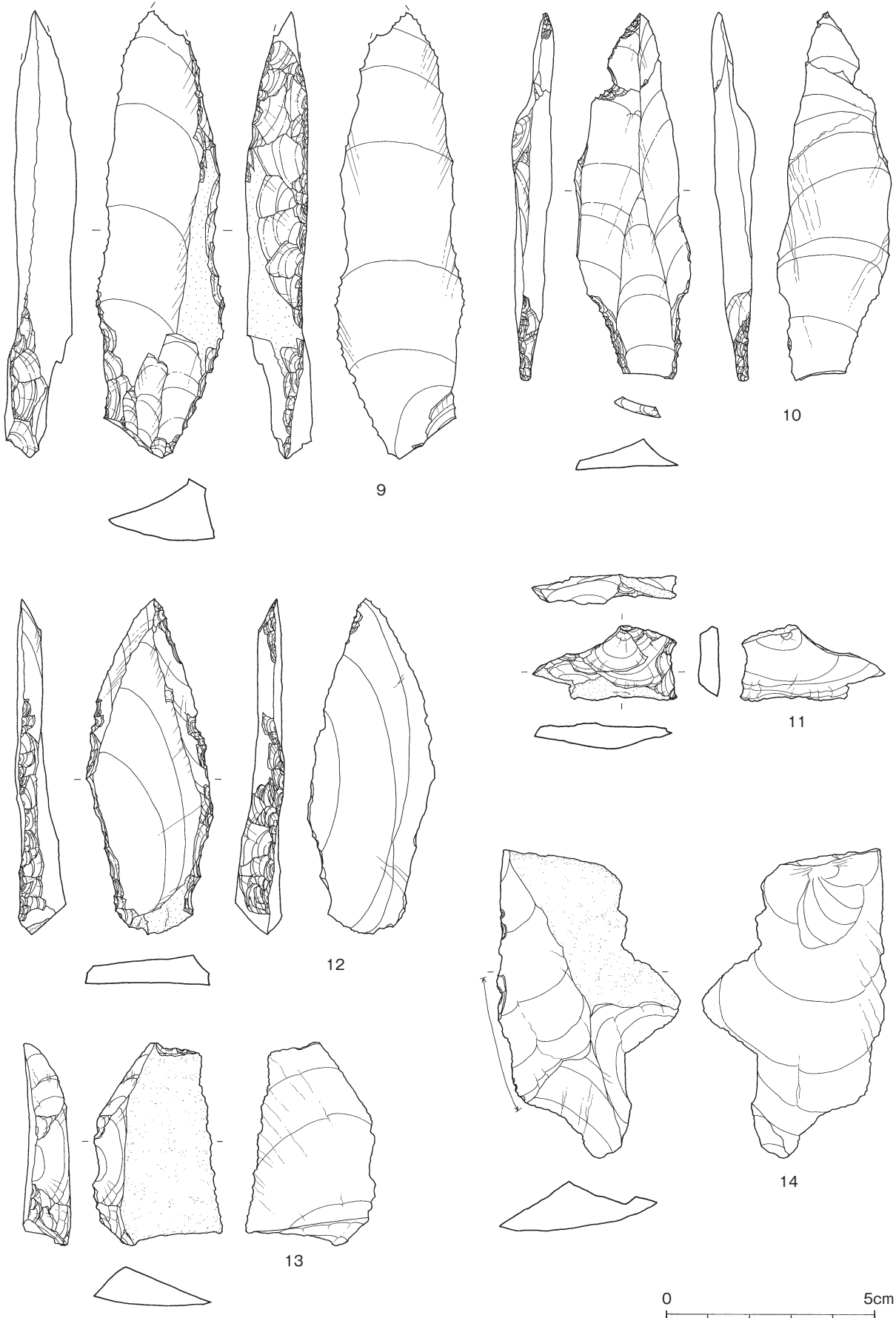
13は砂岩製の縦長剥片を使用したものである。基部を欠損している。鋭利な縁辺は残して、反対側には粗い二次加工が施されている。

#### 使用痕剥片 (第13図14)

14は背面に自然面を残す縦長状の剥片であり、鋭利な側縁に使用痕が認められる。石材は砂岩である。



第12図 第I文化層の礫群



第13図 第I文化層 第2, 3ブロック出土石器

### 第3節 旧石器時代 第Ⅱ文化層の石器群

第Ⅱ文化層は、第XV層を遺物包含層とするものである。第XV層はP15が点在する第XIV層の下位であり、またP17が認められる第XVI層との中間の位置にある。

計2ヶ所のブロックが検出された。いずれも日東系黒曜石を主な石材とするもので、主体となる器種は小型の三稜尖頭器である。

#### 第1ブロック

G-29区に分布するもので、径約5m程度の分布域をもつ。2種類の黒曜石と頁岩が使用されている。

##### ナイフ形石器（第15図15）

15は頁岩製の縦長剥片を素材とし、基部近くの片側縁と稜上に二次加工を施して基部とするもので、中位から先は片側縁に粗い二次加工が施されている。先端部を欠損している。

##### 三稜尖頭器（第15図16）

16は横長剥片を素材とし、腹面側からと稜上からの二次加工により断面三角形に仕上げた三稜尖頭器の一部である。基部もしくは尖端部のみの破損品である。石材は桑ノ木津留産黒曜石である。

##### 削器（第15図17・18）

17はやや厚みのある比較的大型の剥片を使用し、両側縁に粗い二次加工により刃部を施したものである。18も同様の素材剥片を使用し、両側縁に粗い二次加工を施して刃部としたものである。いずれも黒曜石分析で日東産黒曜石と判定された。

##### ブロック外出土使用痕剥片

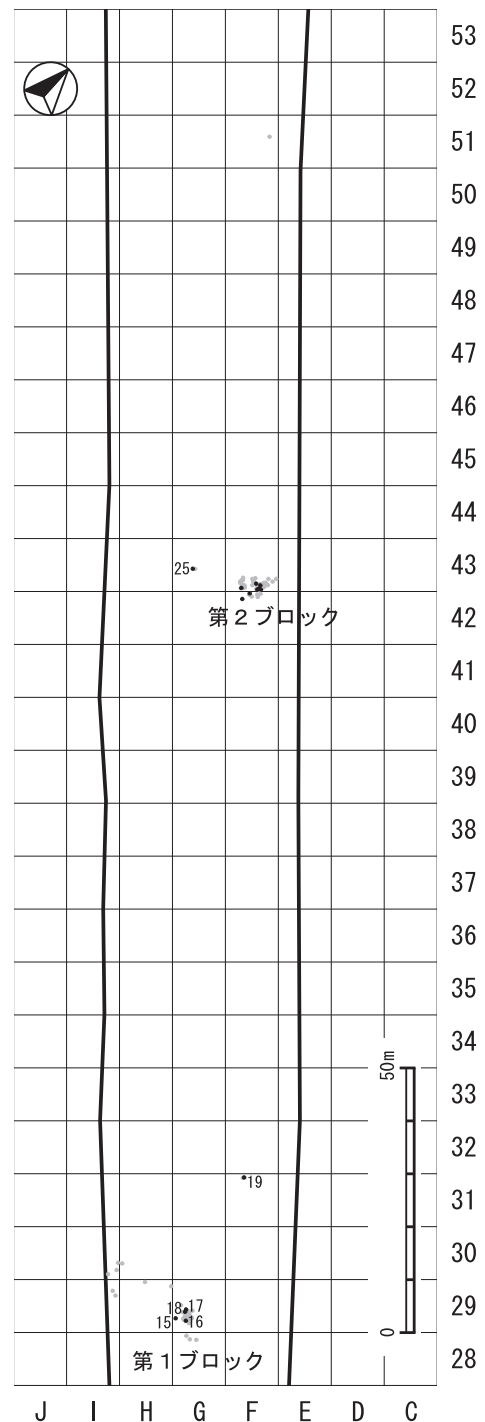
19はF-31区から出土した使用痕のある剥片である。石材は日東系黒曜石とは異なると推定される。

#### 第2ブロック

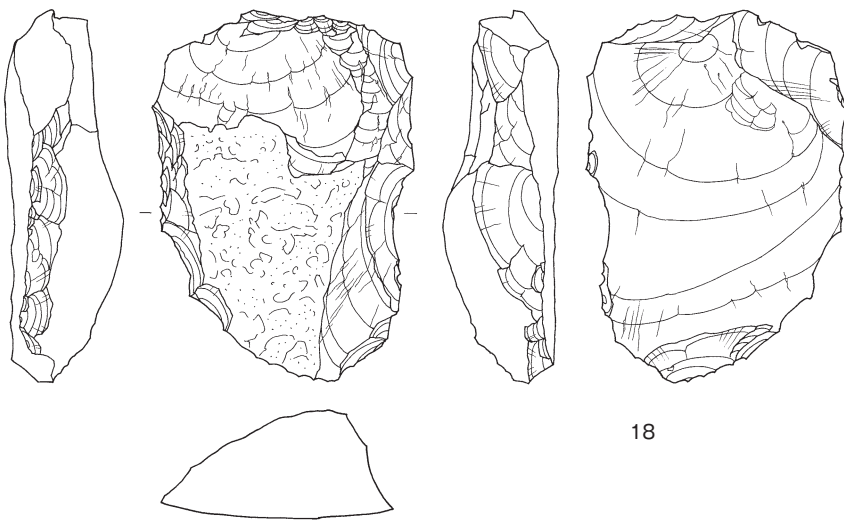
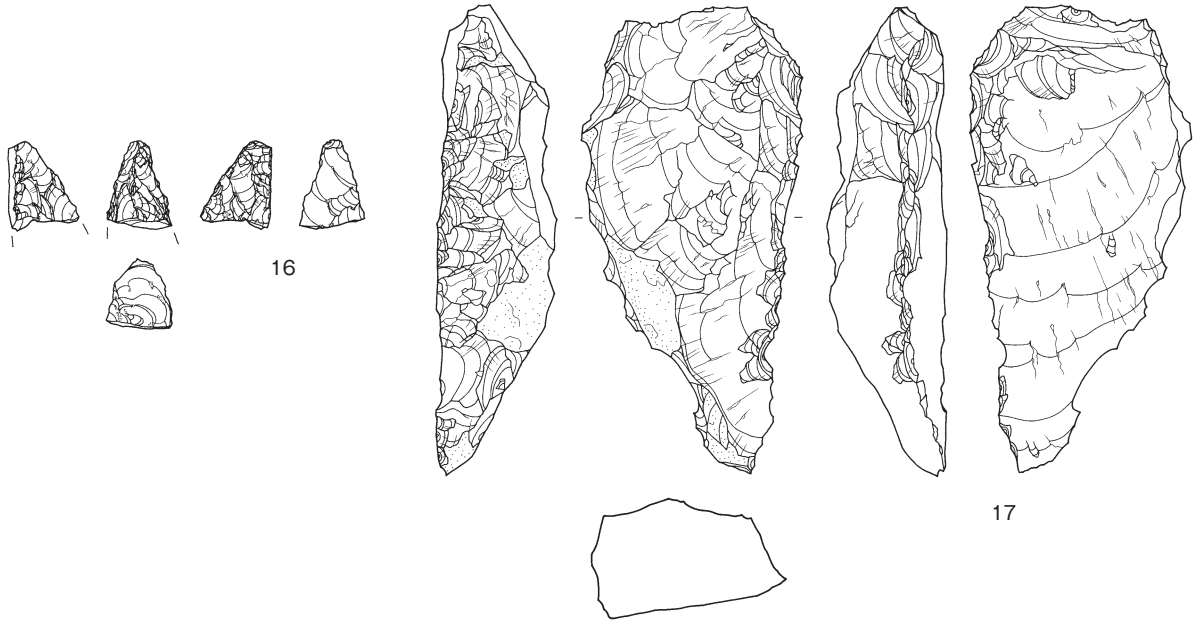
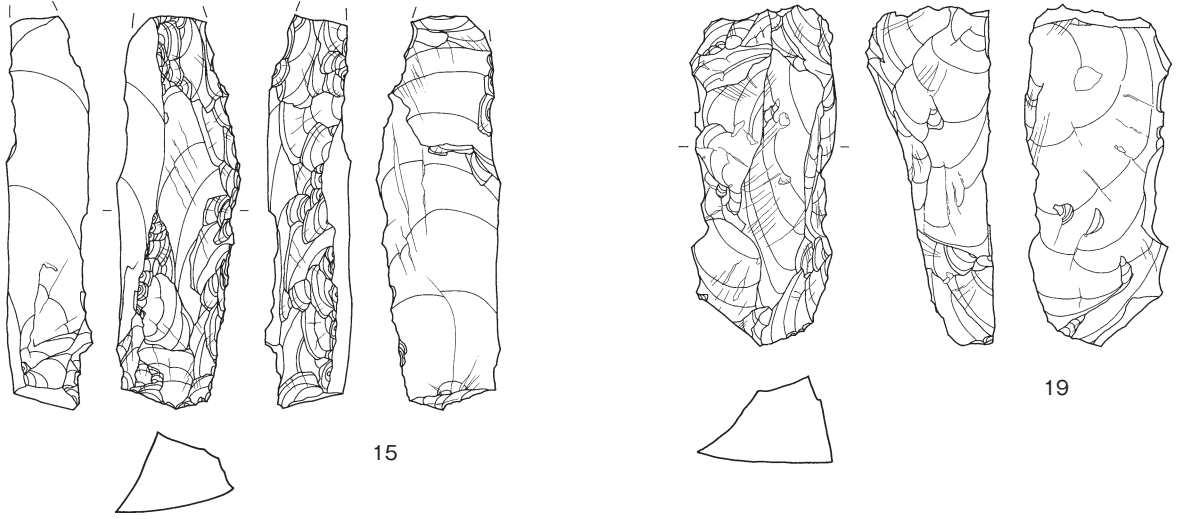
F-42・43区付近に分布するもので、小型の三稜尖頭器を主体とするものである。

##### 三稜尖頭器（第16図20～25）

20は横長剥片を素材とし、腹面側から細かい二次加工を施して整形したものである。基部近くは両側縁をノッチ状に仕上げている。21・22も小型の横長剥片を使用したもので、21は基部を、22は先端部を欠損している。22も意図的に整形した基部を有する。

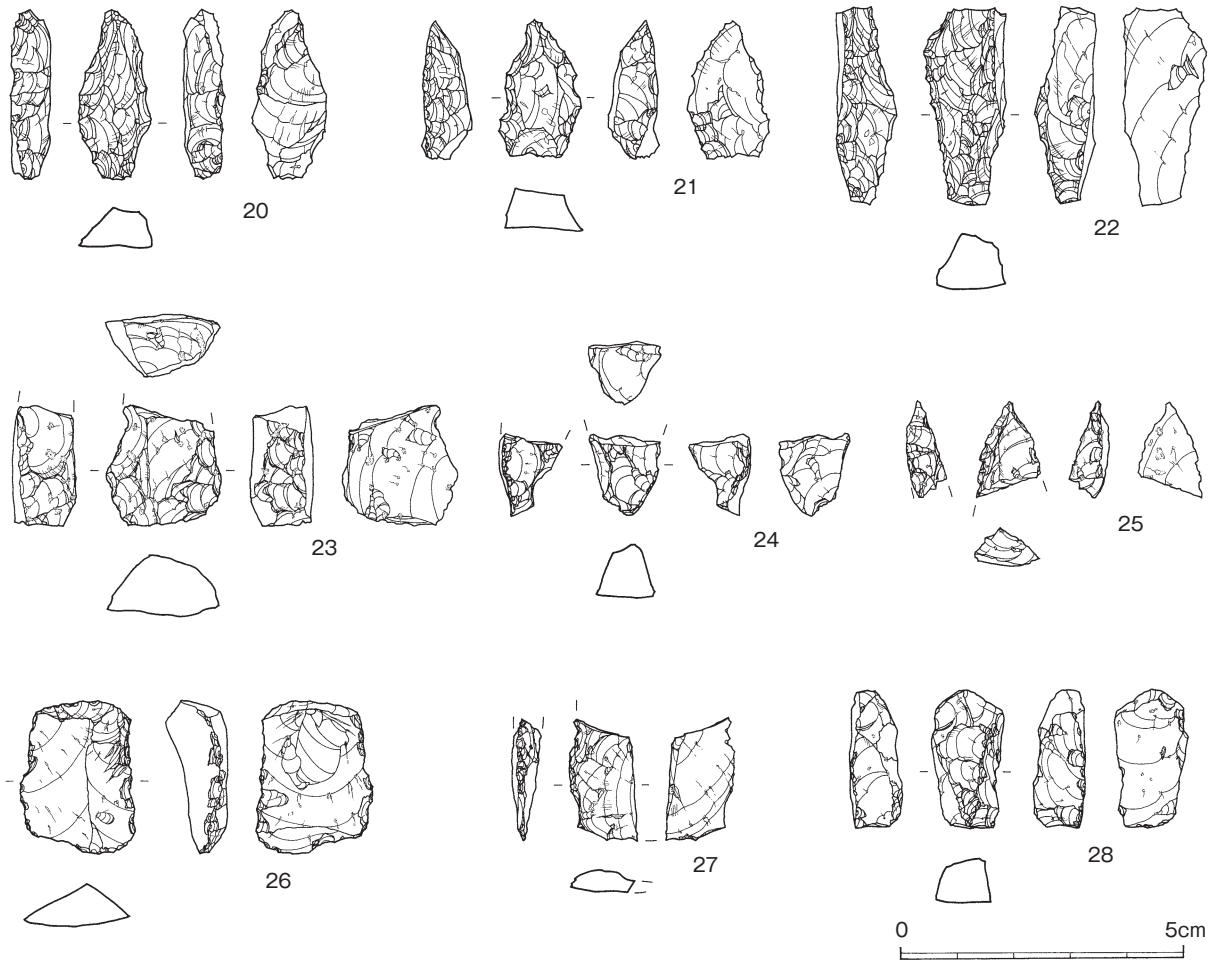


第14図 第Ⅱ文化層の石器群位置図



0 5cm

第15図 第Ⅱ文化層 第1ブロック出土石器

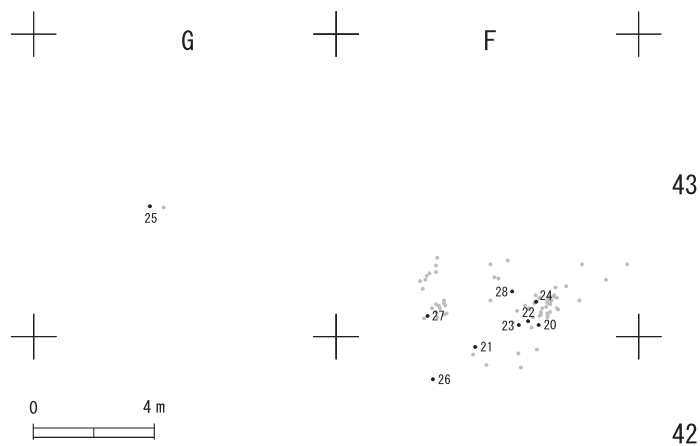


第16図 第Ⅱ文化層 第2ブロック出土石器

23～25も同様に横長剥片を素材にしたもので欠損品である。石材はいずれも日東系黒曜石である。

スクレイパー（第16図26～28）

26は縦長剥片が使用され両縁辺に細かい二次加工が施されたものである。27は細かい二次加工により刃部が形成された破損品。28は縁辺に細かい使用痕が観察される。石材は同様に日東系黒曜石である。



第17図 第Ⅱ文化層 第2ブロック石器出土分布図

## 第4節 旧石器時代 第Ⅲ文化層の石器群

第Ⅲ文化層は、第X層と第XI層を遺物包含層とするものであり、その上位の第IX層が薩摩火山灰層(P14)で、第X層は黒褐色粘質土、第XI層は黄褐色粘質土である。第Ⅲ文化層は細石刃文化を主体とする石器群であるが、南九州では終末の細石刃石器群の一部に土器や石鏃が共伴する縄文時代草創期の時期もみられる特徴がある。本遺跡でも第X層から草創期土器の出土が認められている。ここではこれらの時期も含めて第Ⅲ文化層としている。

第Ⅲ文化層では視覚的な出土分布として、計20ヶ所の遺物集中部(区域)を認識してブロックとした。なお、ブロックは石器のみでなく、土器を主体とするものも含めている。ブロックは各々10m以内の近距離に接しているブロック集中部が2ヶ所認められ、これをブロック群とした。また、他と20m以上離れている単独のブロックも2基認められた。ブロックは南から1・2・3・・・と呼称した。また石器の中で細石刃については一括して後で記載した。

### 第1ブロック

F-31・32区に径約11×8m程度の楕円形に分布し、細石刃核の出土は多く細石刃の数は少ない石器群である。石材は桑ノ木津留の黒曜石が主体となっている。

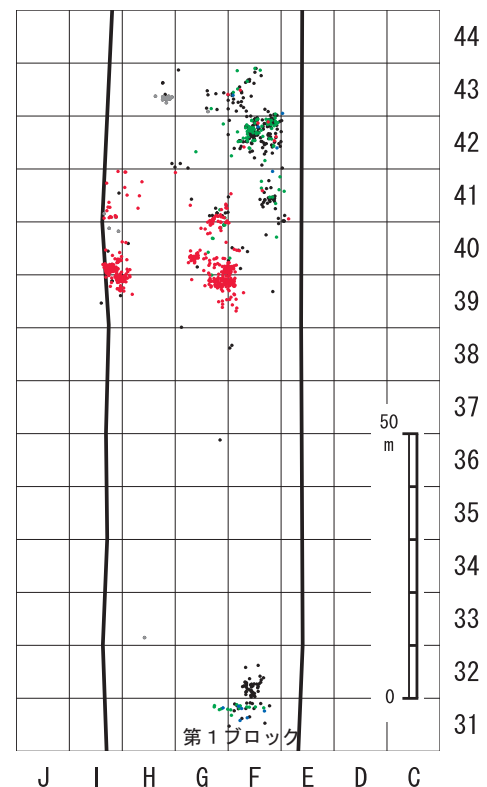
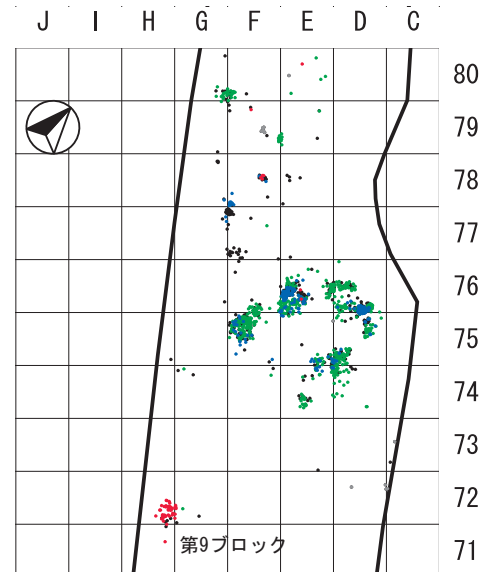
#### 細石刃核 (第19・20図29～43)

29は背面と両側面の一部に自然面が残る黒曜石の細角礫を使用したものである。打面は後方に傾斜しており、打面調整が顕著に施されている。背面には横方向から剥離が施されている。典型的な野岳・休場型細石刃核である。30も同様の細礫を使用したものであり、後方に傾斜した打面には打面調整が施されている。

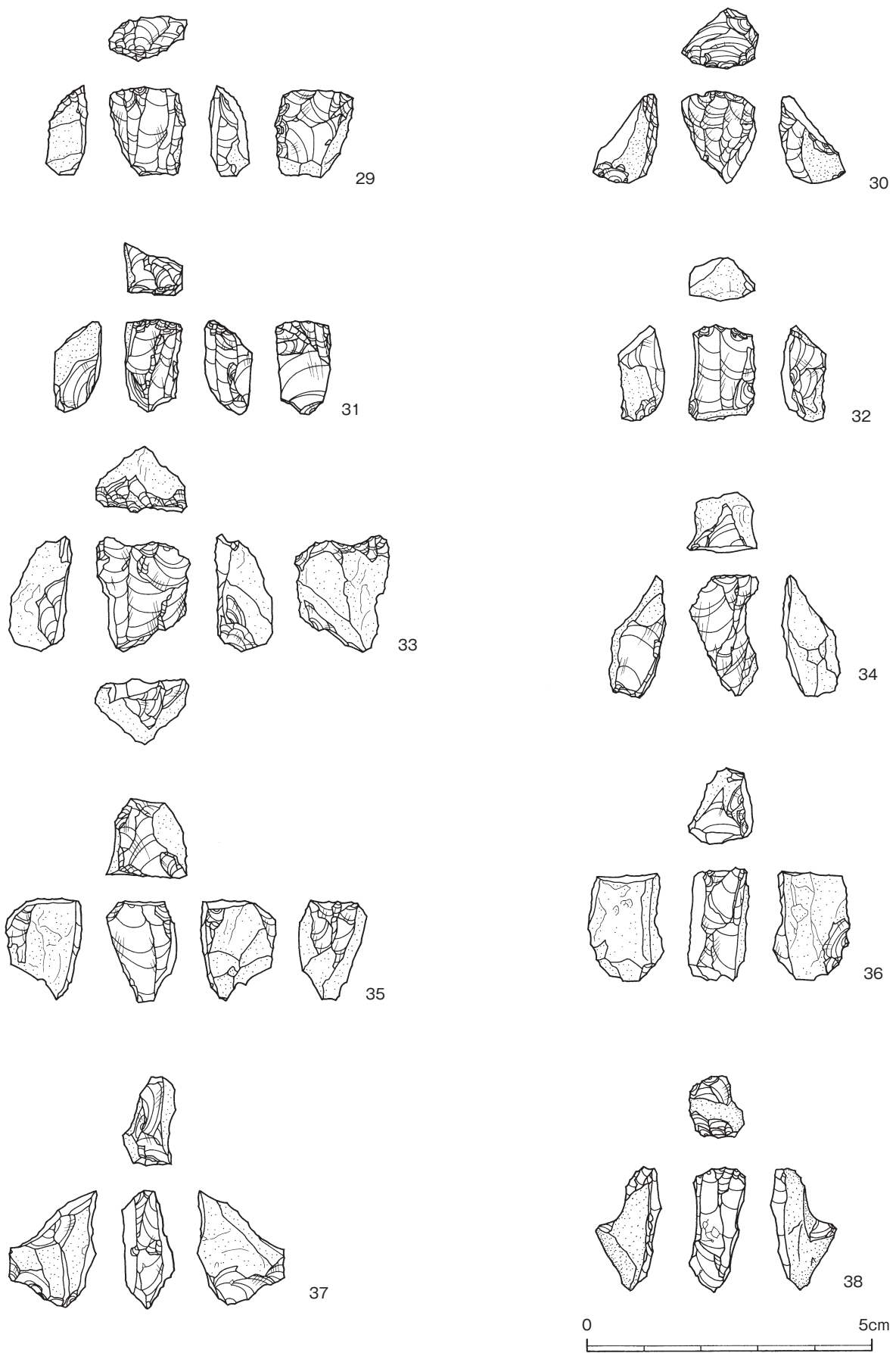
31は背面に広い剥離面がみられることから、細礫を分割したものを素材としたものであろう。32は自然面をそのまま打面としたものであり、打面と作業面の角度は他とほぼ共通した鋭角である。

33～39はもとの黒曜石細礫の形状がよく理解できるので33・34は比較的広い面を作業面にし、35～38は細礫の小口部を作業面としている。40は細礫の分割面を打面にしたものである。42は打面を側面方向からの細かい調整を施している。39は桑ノ木津留と分析された。

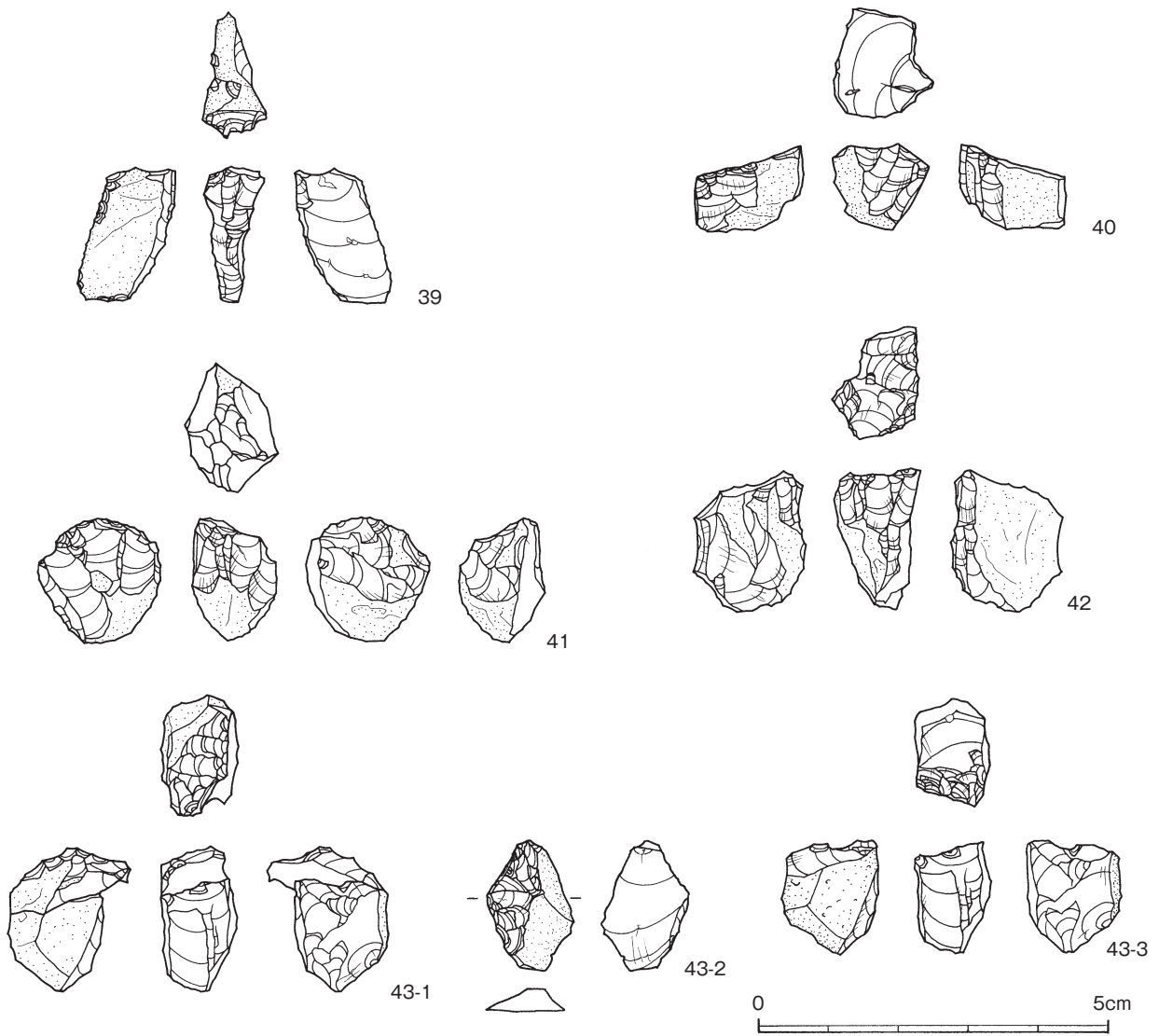
43は接合資料であり、打面は側面方向からの細かい調整をした後に作業面方向から剥離し平坦な打面を形成している。その後、細石刃剥離に先立ち、打面調整を顕著に行っている。



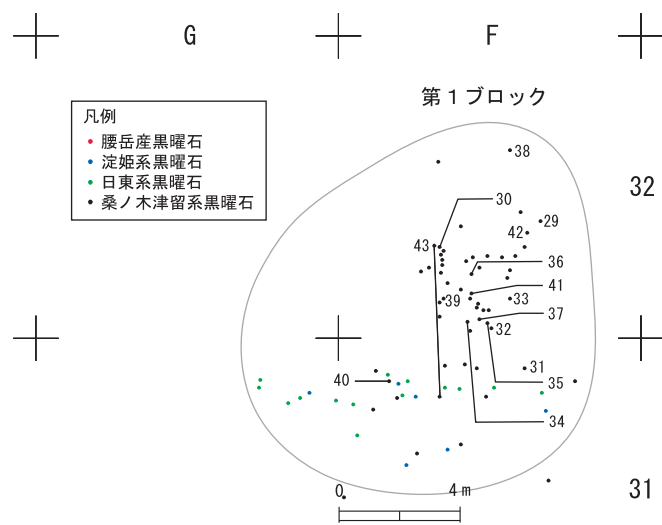
第18図 第Ⅲ文化層の石器群位置図  
(凡例は第21図に記載)



第19図 第Ⅲ文化層 第1ブロック出土石器(1)



第20図 第Ⅲ文化層 第1ブロック出土石器(2)



第21図 第Ⅲ文化層 第1ブロック石器出土分布図



## 第2～8ブロック群

E～I-39～40区にかけては、7ヶ所の石器群集中ブロックが隣接して検出されており、視覚的に第2～8ブロック群と認識することができるが、このうち第8ブロックは土器片が主体となっている。そして、ブロック群としているが、その各個別ブロックの内容は、細石刃核石器群のみのものや、一部土器片が出土する第3ブロック、また石鏃が含まれる第6ブロック、あるいは小型ナイフが主体となる第7ブロックなど多様であることから、位置的に近接しているものの形成時期に関しては同一ではなく、異なる時期と考えられる。(第28図参照)

### 第2ブロック

H・I-39・40区に径約10×5mの範囲に分布域を有する。この中に径約2m程度の極めて遺物が集中している部分が2ヶ所存在している。多数の細石刃のほか細石刃核が出土した。ここでの石材は腰岳産黒曜石が主体であることが特徴的なことと言える。

#### 細石刃核接合資料 (第22図44・45)

44は楔形細石刃核と打面再生剥片の接合資料である。44-1は接合状況であり、両面加工のブランクが使用され、打面再生剥片の正面部には作業面の痕が認められる。44-2の打面再生剥片は作業面方向からみて左側面方向から剥離されている。44-3は最終形態である。石材は腰岳産黒曜石が使用されている。

45も腰岳産黒曜石を使用した楔形細石刃核の接合資料である。45-1はその全体接合状況であり比較的大型の剥片が素材となっている。45-2はブランク形成の段階で剥離されたものであり、縁辺には二次加工が施されている。45-3は打面形成削片が接合した状況で、45-4は削片であり、作業面方向から剥離されている。細石刃剥離に先立ち45-5にみられるように打面調整は顕著に施されている。これらは黒曜石分析の結果まちがいに腰岳産と判定された。

#### 細石刃核の破片 (第22図46)

46は細石刃剥離に際して、ヒンジフラクチャーが生じたものである。

#### ファースト・スポール (第22図47)

47は断面三角形を呈し、稜上に丁寧な二次加工が施されていることから、ブランク形成を伴う楔形細石刃核から剥離されたものであることが理解される。

#### 削片と削片利用の彫器 (第23図48)

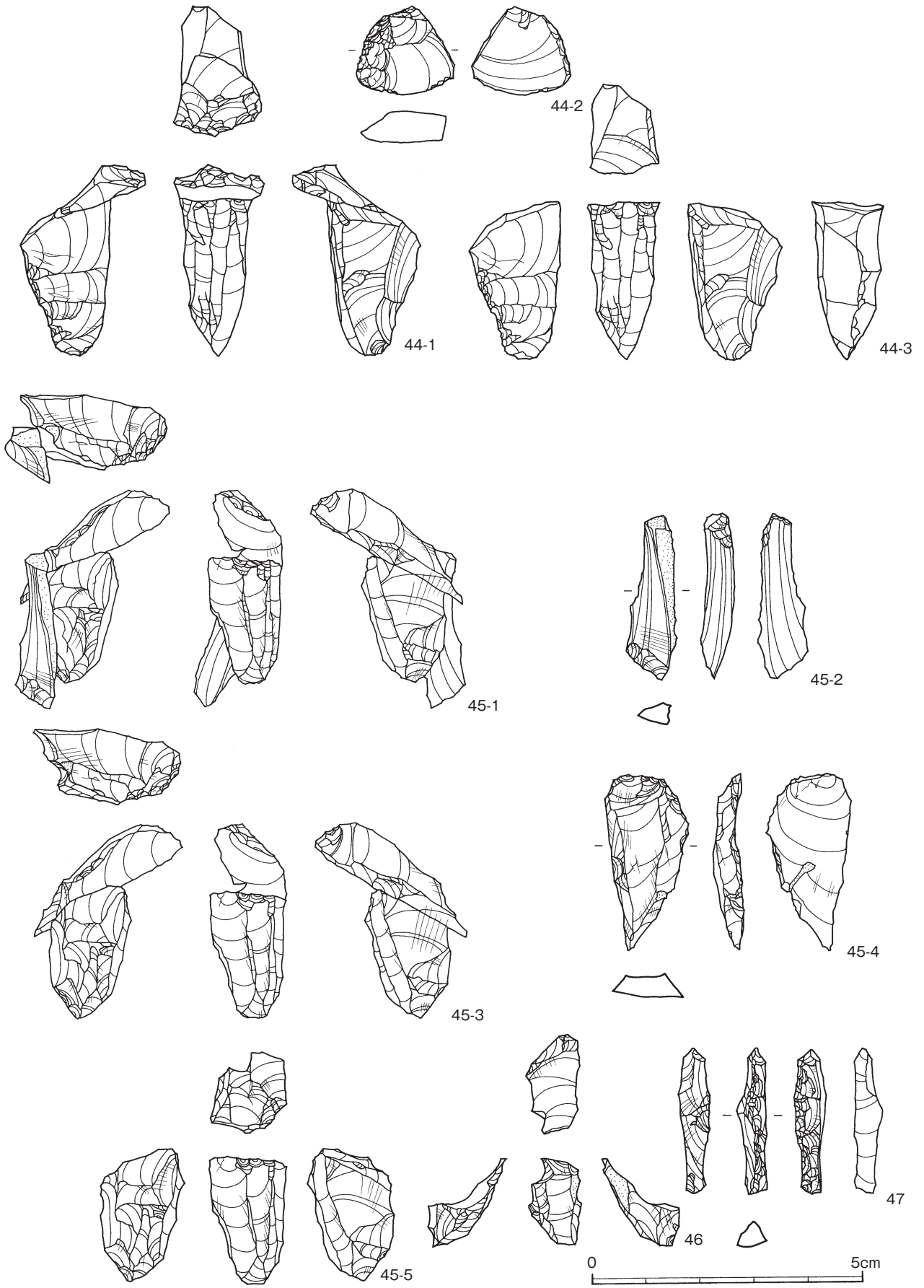
48-1は削片の接合資料であり、作業面方向から削片が剥離される以前の側面からの打面整形剥片と削片が接合したものである。削片の背面には側面からの連続した剥離痕が残っている。そして48-2は削片の打面近くに明瞭な槌状の二次加工が認められる彫器である。このような彫器は唐津地域では多く出土している。石材は腰岳産黒曜石である。

#### 削器 (第23図49)

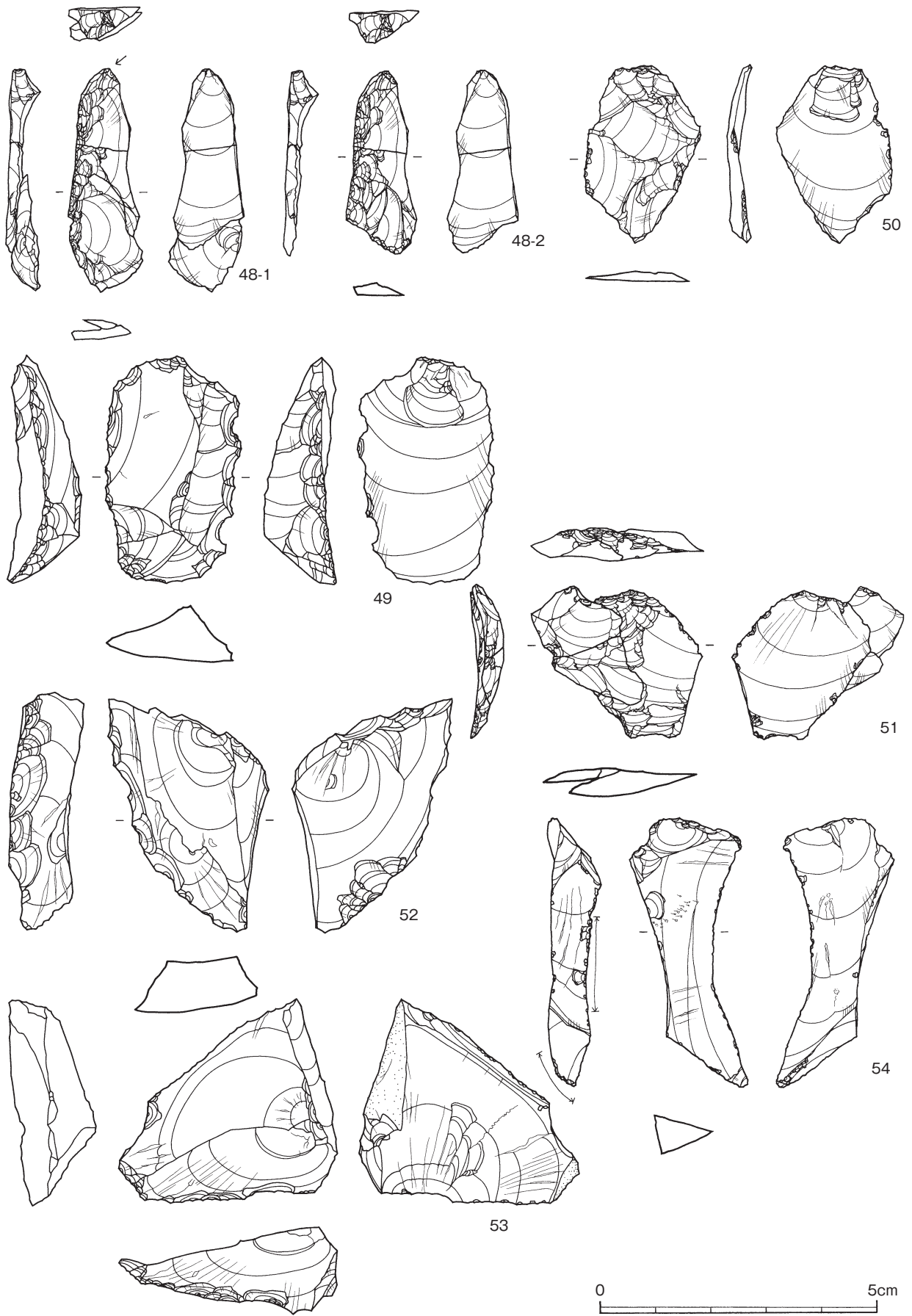
49は縦長剥片を利用し、両側縁に二次加工を施して刃部としたものである。刃部の使用痕は著しく、また腹面にも使用による痕跡が顕著に残っている。

#### 使用痕剥片 (第23図50・51)

50・51はいずれも腰岳産黒曜石製であり、共通して打面がうすいことから鹿角による剥片で、ブランク形成時に剥離されたものと考えられる。縁辺の一部に使用痕が認められた。



第22図 第三文化層 第2ブロック出土石器(1)



第23図 第Ⅲ文化層 第2, 3ブロック出土石器

### 第3ブロック

H・I-41区付近で第2ブロックの北側に隣接している。出土遺物数は多くなく、点在している状況であるが、土器片も出土している。

#### スクレイパー（第23図52・53）

52は腰岳産黒曜石製の幅広剥片を使用し、鋭利な縁辺に比較的丁寧な二次加工を施して刃部としたものである。53も剥片の一部に二次加工が施されたものである。53は黒曜石分析を行った。

#### 使用痕剥片（第23図54）

54は縦長状剥片の縁辺の一部及び、剥片の末端に使用痕が認められるものである。石材は腰岳産黒曜石である。

### 第4ブロック

F・G-39・40区に径約14×10mの楕円形の範囲に分布している。第2ブロックと同様に、使用されている石材では腰岳産黒曜石が主体となっている。器種としては細石刃・細石刃核、使用痕剥片などが多い。

#### 細石刃核（第24図55～58）

いずれも漆黒色で良質な腰岳産黒曜石を使用したものである。側面に平坦面が残っていることから素材は剥片であり、また縁辺には平坦なブランク形成の剥離がみられる。正面形はV字形を呈し楔形となり、打面は作業面方向からの削片剥離によって形成されており、後方に傾斜する特徴をもつ。55は背面に自然面が残存し、打面調整が顕著である。56は削片剥離面が背面となっている。57は比較的うすく、削片剥離後もその面から石核整形を施している。58も腰岳産黒曜石の剥片を素材としたものであり、二次加工を施した部分を背縁としている。打面は作業面方向からの削片剥離により形成し、その後に打面調整を行いながら細石刃を剥離している。

#### ファースト・スポール（第24図59～61）

いずれも断面三角形を呈し、片側面には稜上からの丁寧な二次加工が連続して施されており、細石刃状に剥離されたものであることから、細石刃核から剥離された最初の剥片と考えられる。形状からブランク形成を施した楔形細石刃核から剥離されたことが理解される。全て腰岳産黒曜石製。

#### 使用痕剥片（第24図62～第25図66）

全て腰岳産黒曜石と考えられる良質なものであり、剥片の鋭い縁辺の一部に使用痕が観察される。63は接合資料である。65は黒曜石分析を行った。

#### 石核（第25図67）

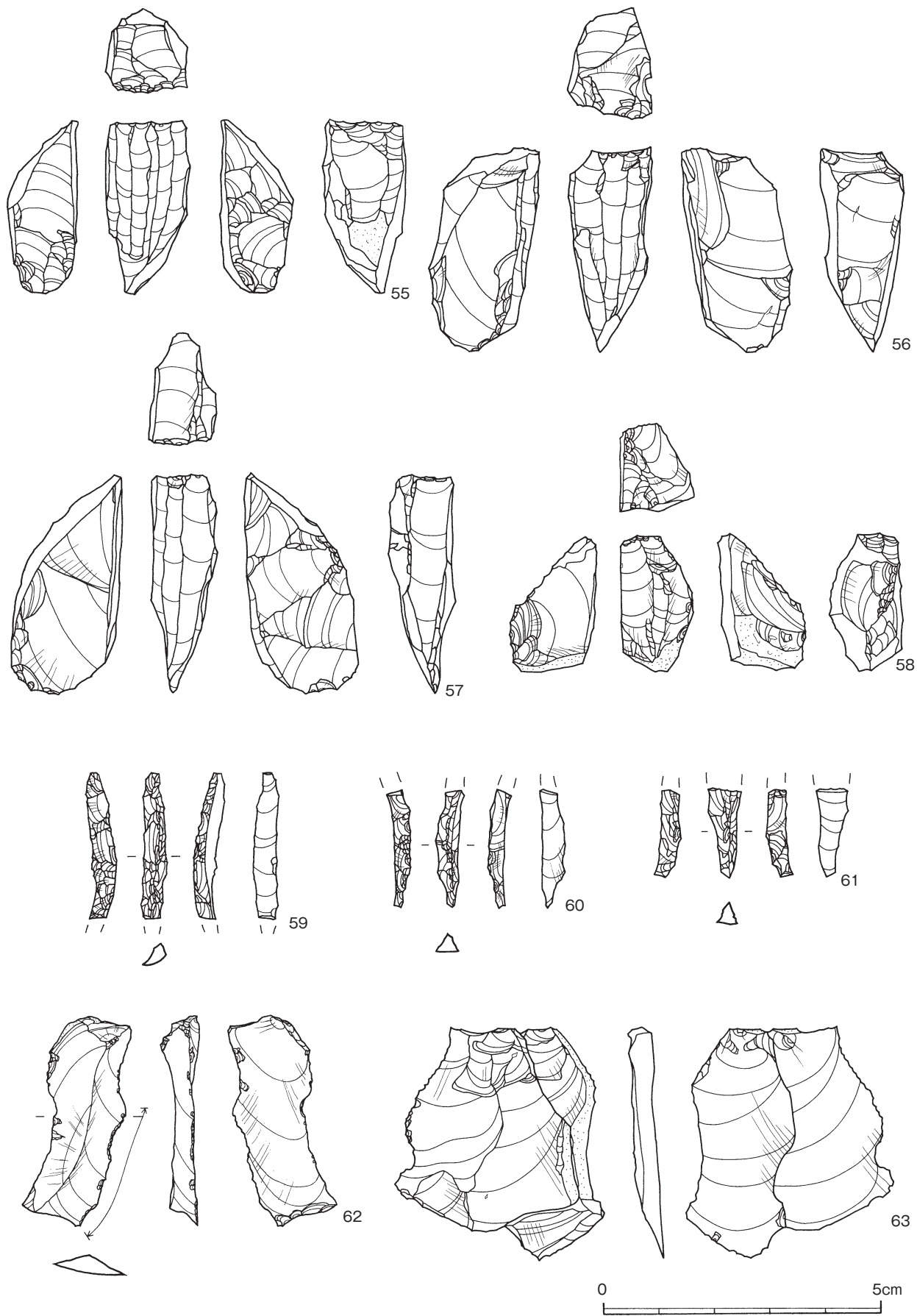
67は不純物の多い日東産黒曜石を石材とするもので、平坦な主剥離面を打面にして、小型の剥片を剥離している石核である。

### 第5ブロック

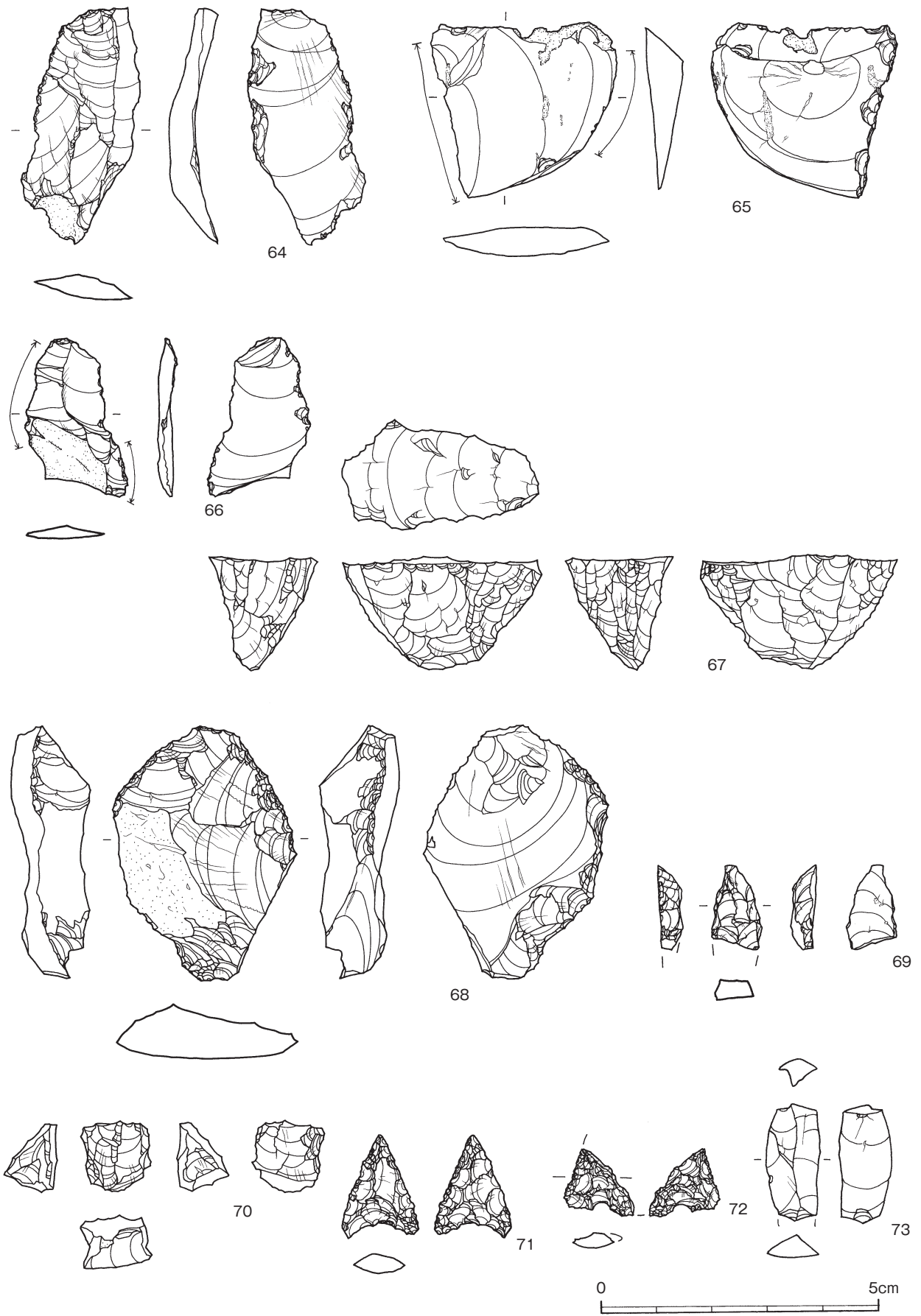
第4ブロックの北側に位置しており、遺物は多くない。径約8×4mの分布域をもつ。腰岳産黒曜石の多数の細石刃が主体である。細石刃については後で説明する。

#### 削器（第25図68）

68は背面に自然面が残る剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたものである。石材は腰岳産黒曜石と考えられる。



第24図 第Ⅲ文化層 第4ブロック出土石器(1)



第25図 第Ⅲ文化層 第4, 5, 6ブロック出土石器

## 第6ブロック

E・F-41区に分布し、径約11×5mの楕円形の範囲に広がる。遺物数は多くないものの、他と異なり石鏃が2点出土している。出土した石材は桑ノ木津留系黒曜石が主体である。

### ナイフ形石器（第25図69）

69は小型の縦長剥片を素材とし、片側縁に丁寧なブランディングを施したものである。基部を欠損している。

### 細石刃核（第25図70）

70は風化が著しい特徴を有する上牛鼻産黒曜石を石材とするもので、かなり小型の細石刃核である。打面は後方に傾斜し、側面方向からの調整剥離が行われている。

### 石鏃（第25図71・72）

71は頁岩製で、小型三角形鏃である。基部はわずかに凹み、両面とも丁寧な押圧剥離により整形されている。72は桑ノ木津留系黒曜石を石材とするものであり、先端部は欠損している。衝撃剥離による欠損であることから使用によるものであろう。

### 小型縦長剥片（第25図73）

打面は三角形を呈し、幅厚であることから押圧剥離ではなくソフトハンマーにより剥離されたもので、小型ナイフ形石器の素材剥片と考えられる。

## 第7ブロック

F-42区からF・G-43区にかけて比較的広い分布域をもち、器種では小型ナイフ形石器が最も多く、石材では他のブロックと異なり上牛鼻産黒曜石が主体的な石材となっている。

### ナイフ形石器（第26図74～78）

74は水晶製の縦長剥片を素材とし、基部の片側と背縁に細かいブランディングを施したものである。先端は尖らしている。75は頁岩製で、縦長剥片の打面はそのまま残して両側縁に二次加工を施し基部とし、また先端近くもブランディングにより尖らしている。76・78は欠損品であり、77は細かい二次加工を施したものである。

### 削器（第26図79）

79は剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたもの。80は打面部を折断した使用痕剥片とした。

### 細石刃核（第26図81～84）

81は剥片利用で後方に傾斜した打面に打面調整が著しい。82は角柱形、83は細礫使用、84は厚手の剥片を素材としたものである。

### 石核（第27図85）

85は良質な珪質頁岩製の縦長剥片を利用した石核である。主要剥離面側に片側面からのみでなく打面側や反対の先端部方向からも求心的に剥離している。

## ブロック外の石器

### 石鏃（第27図86）

86は3・5・7・8ブロックの中間あたりで出土したもので、黒曜石製である。

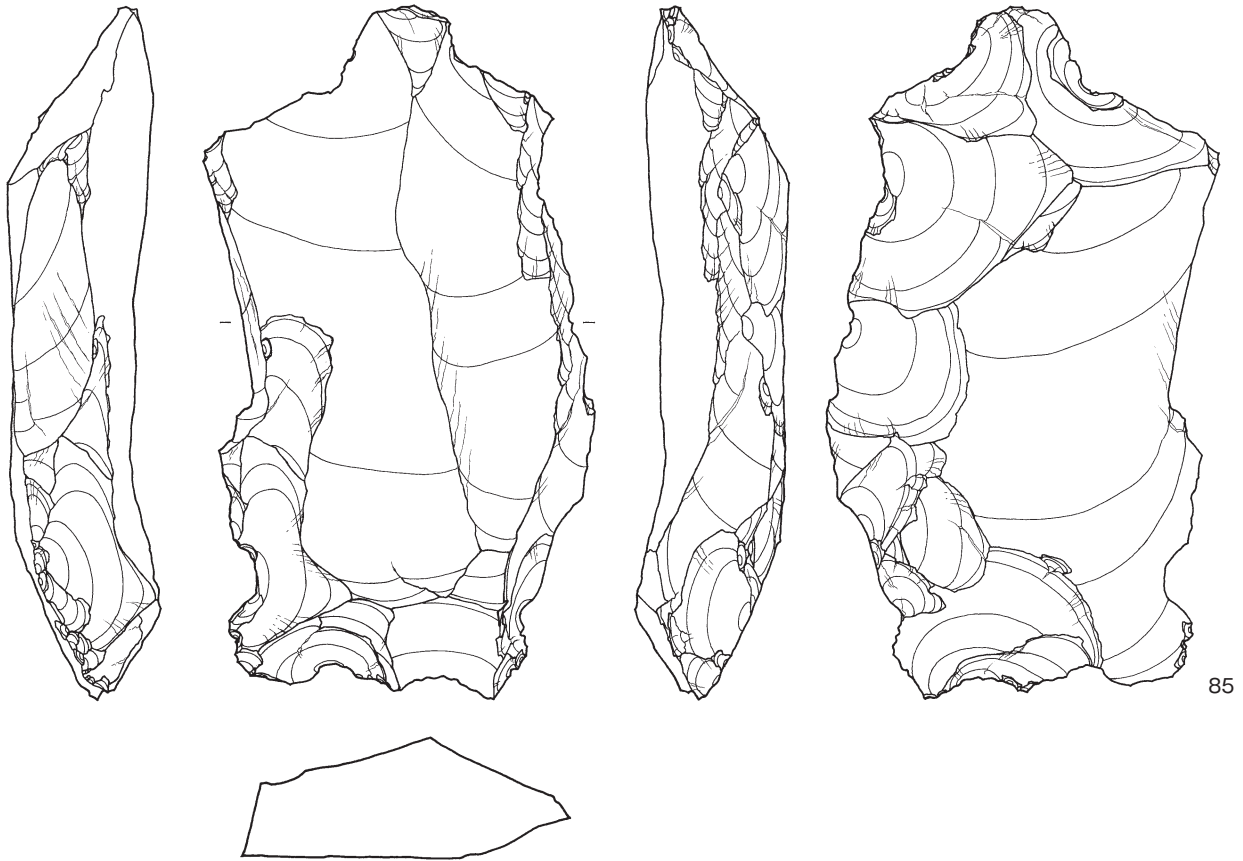
### 使用痕剥片（第27図87）

87は頁岩製の縦長剥片であり、縁辺には微細な使用痕が認められる。



第26図 第Ⅲ文化層 第7ブロック出土石器(1)

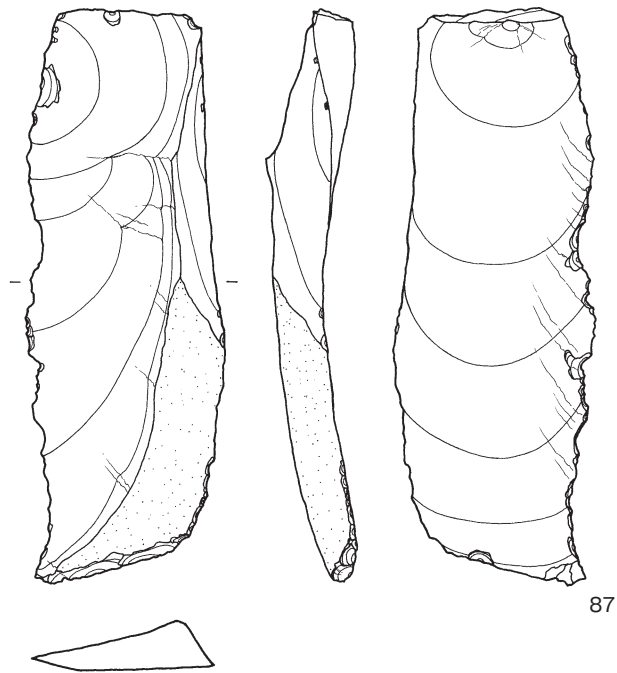




85



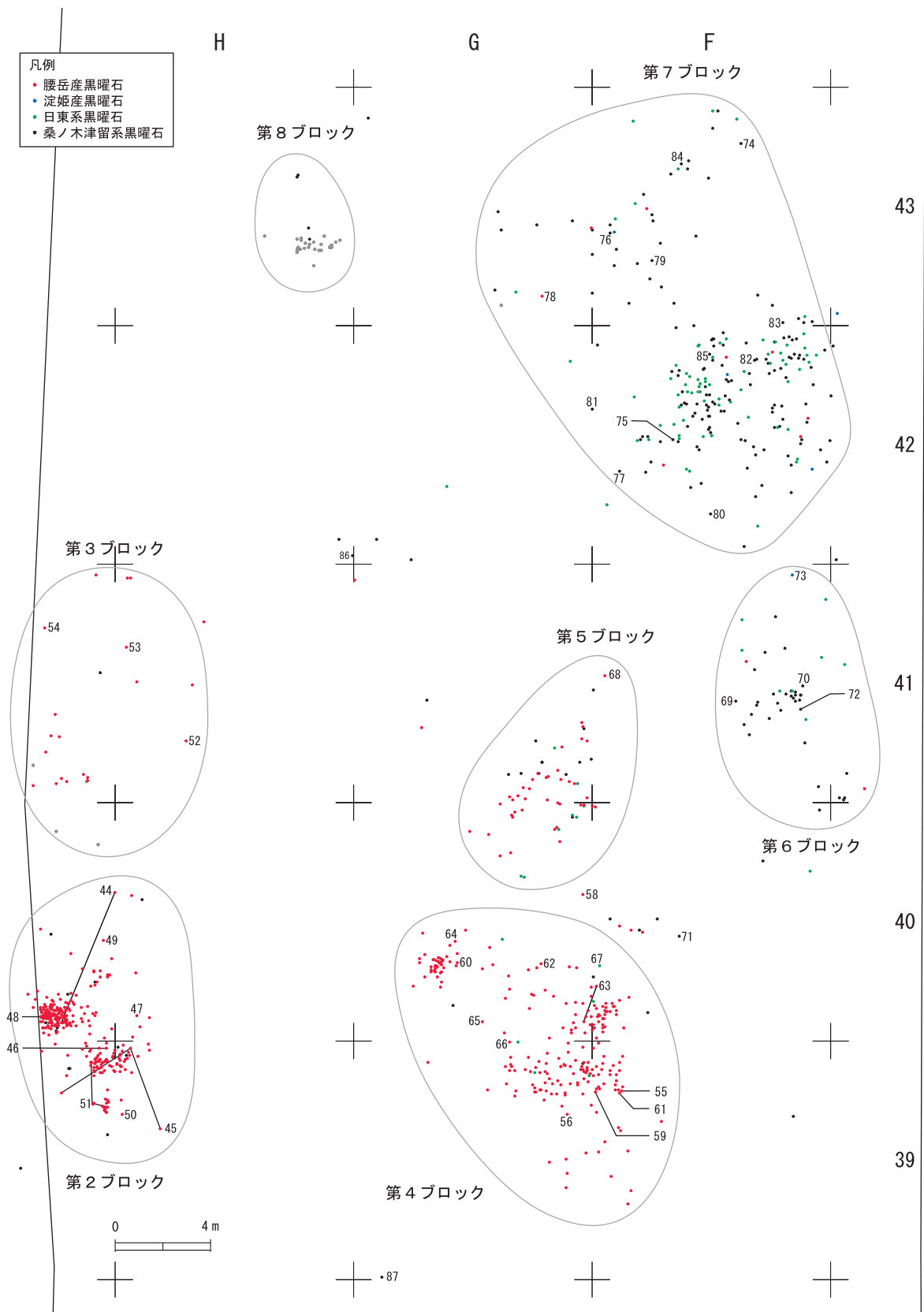
86



87



第27図 第Ⅲ文化層 第7ブロック出土石器(2)



第28図 第Ⅲ文化層 第2～8ブロック石器群出土分布図

## 第9ブロック

H-72区付近で直径約6mの範囲に分布域がみられた。出土した石器は細石刃・細石刃核などであり、それらの石材は腰岳産黒曜石が主体であった。(第18図参照)

### 細石刃核 (第29図88・89)

88は典型的な野岳・休場型を呈するものであり、打面は後方に傾斜し打面調整が顕著なものである。作業面幅は比較的広く、左側面は背面からの整形剥離が行われており、背面には側面方向からの整形剥離が施されている。石材は良質な腰岳産黒曜石である。

89は典型的な楔形を呈し、打面は作業面方向からの削片剥離により形成されている。側面には周縁からの整形剥離が施されており、正面形はV字形となる。石材は腰岳産黒曜石である。

### 削片もしくはファースト・スポール (第29図90)

90は片側面に連続した剥離が施されており、ブランク整形が施された楔形細石刃核から最初に剥離されたもので、削片もしくはファースト・スポールと考えられるものである。

### 使用痕剥片 (第29図91)

91は細石刃核の調整剥片と考えられるもので、2点が接合したものである。剥片の末端には細かい使用痕が認められる。90と同様腰岳産黒曜石が使用されている。

## 第10～20ブロック群

これらは各々10m以内に近接しており、視覚的にはブロック群として把握できる。しかし各々のブロックは主体となる石材に違いも認められ、時期などは検討する必要がある。(第43図参照)

## 第10ブロック

E-74区に径約3m程度の範囲に分布するものである。剥片や細片が主体となっている。石材では日東産と推定される気泡の多い黒曜石が主である。

## 第11ブロック

D・E-74・75区で径約12×8mの楕円形に分布している。細石刃・細石刃核・スクレイパーなどがみられ、特に日東産と考えられる石材が主体となっている。

### 細石刃核 (第30図92・93)

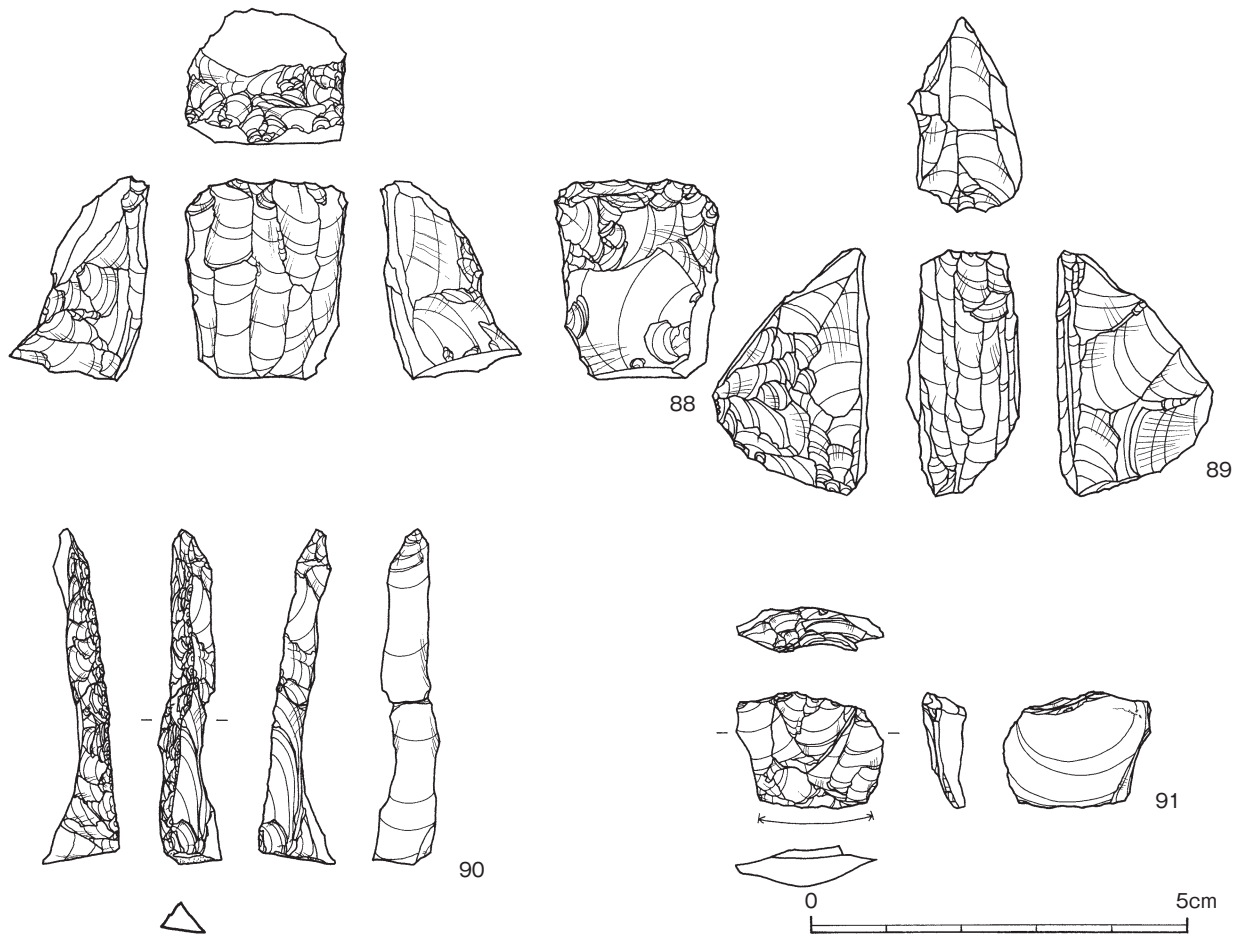
92は黒曜石細角礫を使用したもので、打面形成後に一つの面を作業面としている。93も同様の細角礫を使用したもので、正面の作業面がステップしており、その後図の上面に作業面を転移している。黒曜石は黒色良質でいわゆる「霧島産」に近い。

### 尖頭状の搔器 (第30図94)

94は比較的厚手で幅広の剥片を素材とし、主要剥離面から背面に二次加工を施し、全体を尖頭状に仕上げたものである。このような形態から三稜尖頭器に類似するが、両側縁の刃部には細かい使用痕が認められる。石材は日東産黒曜石と考えられる。

### その他の搔器 (第30図95～第32図100)

95は角礫を使用したものであり、最も薄い縁辺に、両面から二次加工を施し刃部としている。良質の桑ノ木津留系黒曜石製である。96は幅広剥片の一端に急角度の二次加工を施し刃部としたものである。97・98も同様の剥材を使用し、縁辺の一部に二次加工を施して刃部としたものである。いずれも石材は気泡が多い特徴があり日東産黒曜石と考えられる。97は分析で日東系と判定された。



第29図 第Ⅲ文化層 第9ブロック出土石器

99・100はそれぞれ接合資料である。100は3点が接合したもので、先に剥離された100-2の末端には細かい二次加工が施され、最後に剥離された幅広で厚みのある剥片100-3は丁寧な二次加工が施されて搔器とされている。

#### 剥片の接合資料（第32図101）

101-1は剥片4点の接合資料である。桑ノ木津留系黒曜石の角礫を使用したもので、101-2の鋭い縁辺には使用痕が認められる。

#### 使用痕剥片（第32図102）

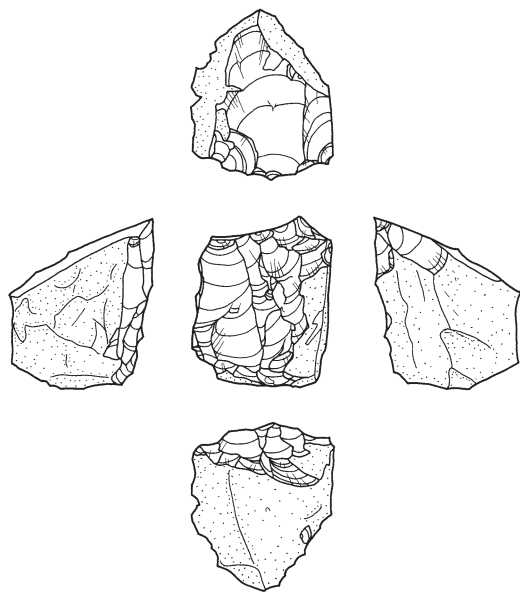
102は淀姫産黒曜石製の小型縦長剥片を素材としたもので剥片の末端には細かい使用痕が認められる。

#### 第12ブロック

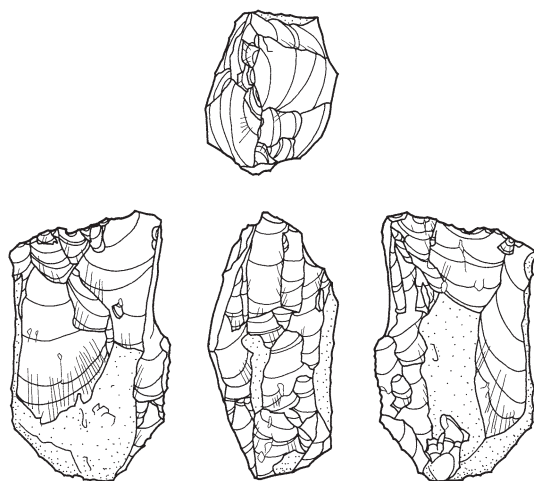
D-75・76区に分布域を有しており、径約14×8mの楕円形の範囲に広がる。出土している器種は細石刃とスクレイパーなどであり、石材はスクレイパーに使用されている日東産と推定される黒曜石が主体である。なお、中心部に淀姫系黒曜石の集中部が1か所みられる。

#### スクレイパー（第33図103～108）

103はうすい剥片の両側縁に細かい二次加工を施したものである。104は不定形剥片の縁辺にそれぞれ腹面や背面に二次加工を施したものである。これは風化の特徴から淀姫産黒曜石と考えられ



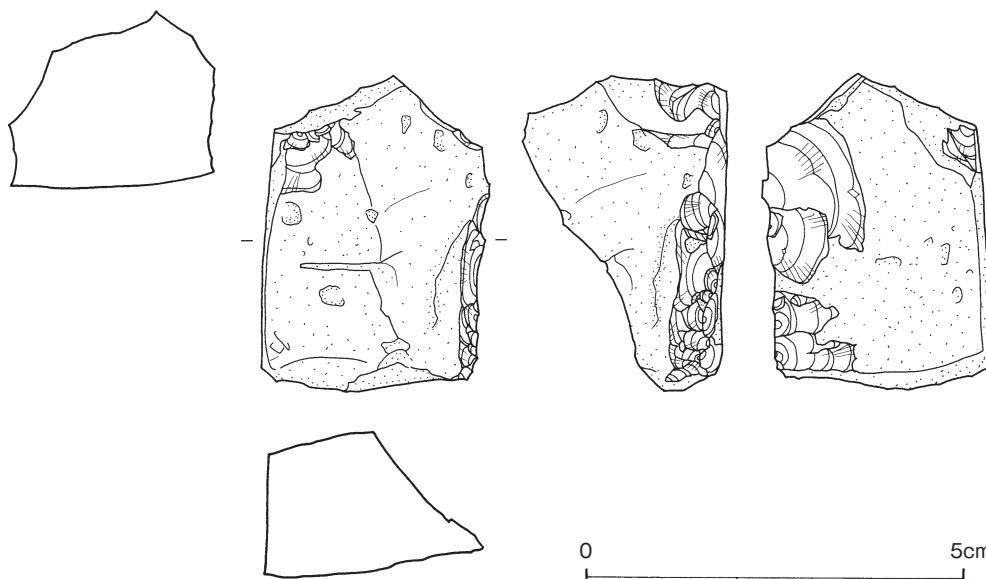
92



93



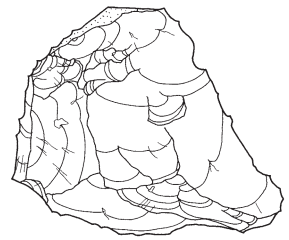
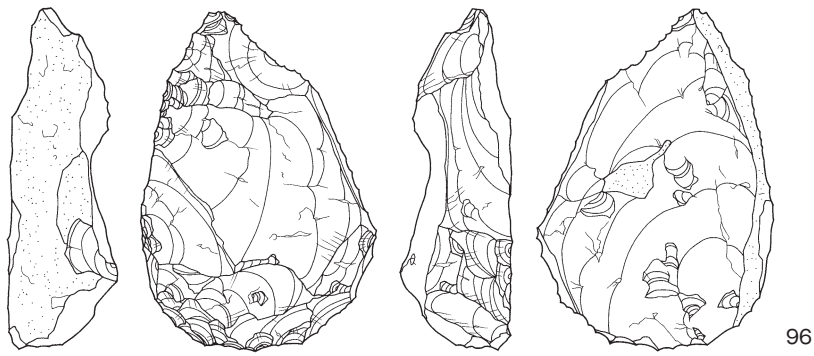
94



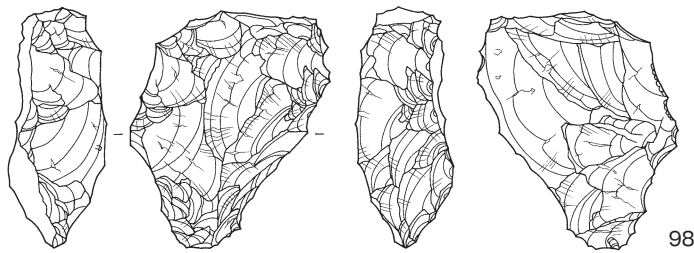
95

0 5cm

第30図 第Ⅲ文化層 第11ブロック出土石器(1)



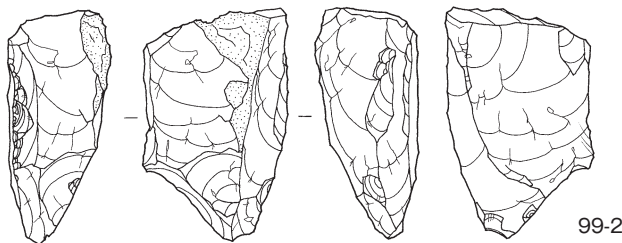
97



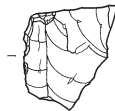
98



99-1



99-2

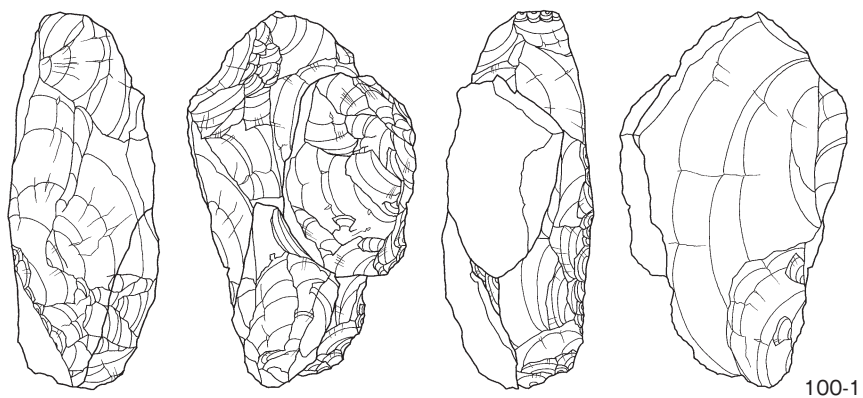


99-3



0 5cm

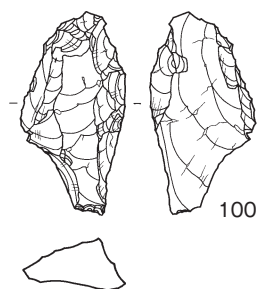
第31図 第Ⅲ文化層 第11ブロック出土石器(2)



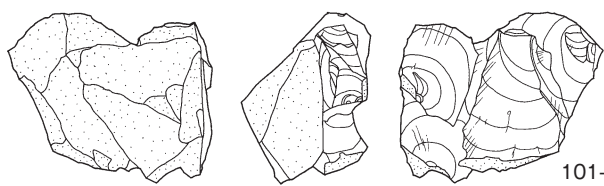
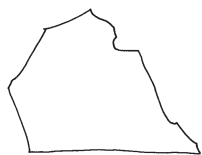
100-1



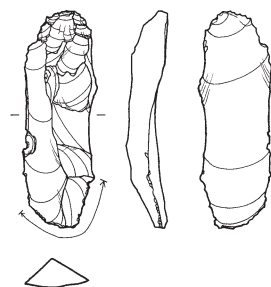
100-3



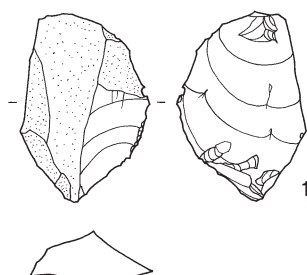
100-2



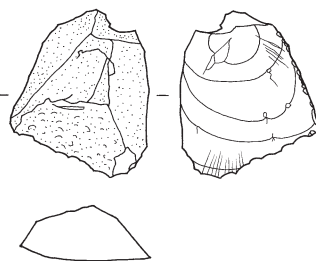
101-1



102



101-2



101-3



第32図 第Ⅲ文化層 第11ブロック出土石器(3)

る。105は幅広剥片の打面側に丁寧な二次加工を施して刃部としたものである。欠損後に再加工を施している。106は平坦な剥離面から、107は平坦な自然面から比較的粗い剥離により急角度の刃部を施したものである。108も部分的に二次加工による刃部が認められるが刃部の大部分は欠損している。石材はいずれも日東産黒曜石と思われる。

#### 接合資料（第33図109）

109は比較的厚手の剥片の接合資料である。2点の小片が剥落状に接合し、残存部には使用痕も認められる。

#### 縦長剥片（第33図110・111）

110は桑ノ木津留系黒曜石製の小型縦長剥片で、打面と先端部が折断されたものである。111は日東産黒曜石製と考えられるものである。

### 第13ブロック

E-76区付近を中心とするもので、径約8×6mの範囲に分布していた。器種は細石刃・細石核・スクレイパーなどが主体であった。石材としては、淀姫系黒曜石と考えられるものが最も多く、次が、桑ノ木津留系黒曜石及び日東系黒曜石であった。

#### 細石刃核（第34図112～第35図117）

112は平坦な自然面が残る板状の剥片を素材とし、打面から背面にかけて側面からの整形剥離を行い、小口部分を作業面にしたものである。特徴的な風化面から淀姫産黒曜石製と考えられる。113も同質の黒曜石を石材としたものであり、周縁からの整形剥離により正面形をV字形に整えブランク整形をした楔形細石刃核である。

114は板状の黒曜石礫を使用し、側面方向からの剥離により傾斜した打面をつくり、小口部分を作業面にしたものである。同一作業面で下端からも剥いでいる。115は周縁からの剥離によりブランク形成をしたもので、114と同様に打面は左側面に傾斜している。116は背面に自然面が残る剥片を使用したもので、打面は側面方向からの剥離により形成している。分析で淀姫系と判定された。

117も自然面が残る剥片を使用したものであり、打面転移をしていることにより作業面は前後に認められる。石材は114・115・117は桑ノ木津留系黒曜石と分析された。

#### 作業面再生剥片（第35図118）

118は周縁からブランク整形を施した細石刃核のステップした作業面を取り除くため、側面から剥離したものである。

#### スクレイパー（第35図119・120）

119は比較的厚みのある剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたもの。120は接合資料であり幅広剥片の末端に急角度の丁寧な二次加工を施して刃部とした搔器であるが、図の右側が欠損したことで、左側の刃部を再加工したものである。石材はいずれも日東産黒曜石と思われる。

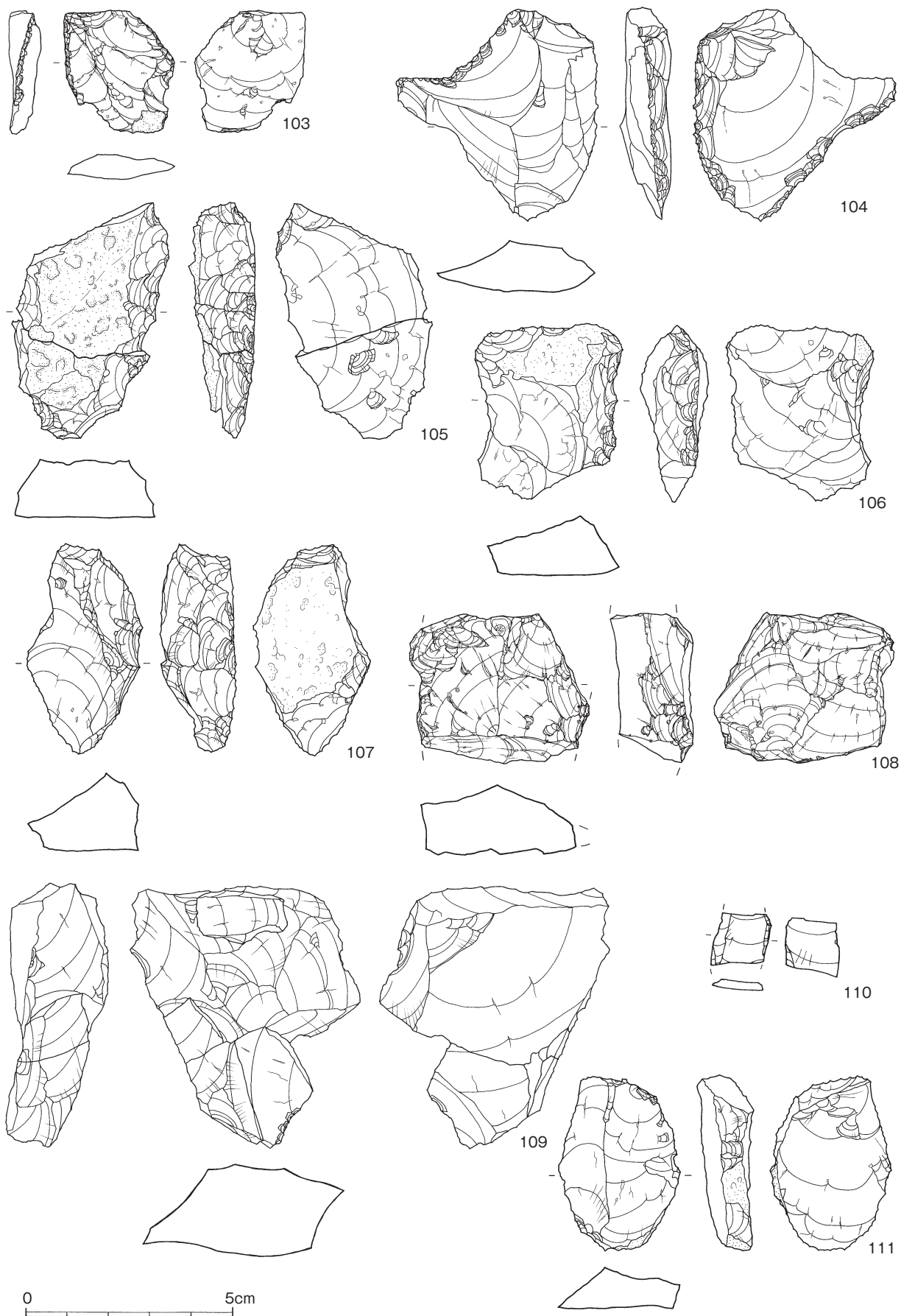
#### 使用痕剥片（第35図121・122）

121は剥片の末端に使用痕が認められるものである。122はうすい剥片の末端を折断しており、側縁に使用痕が観察されるものである。

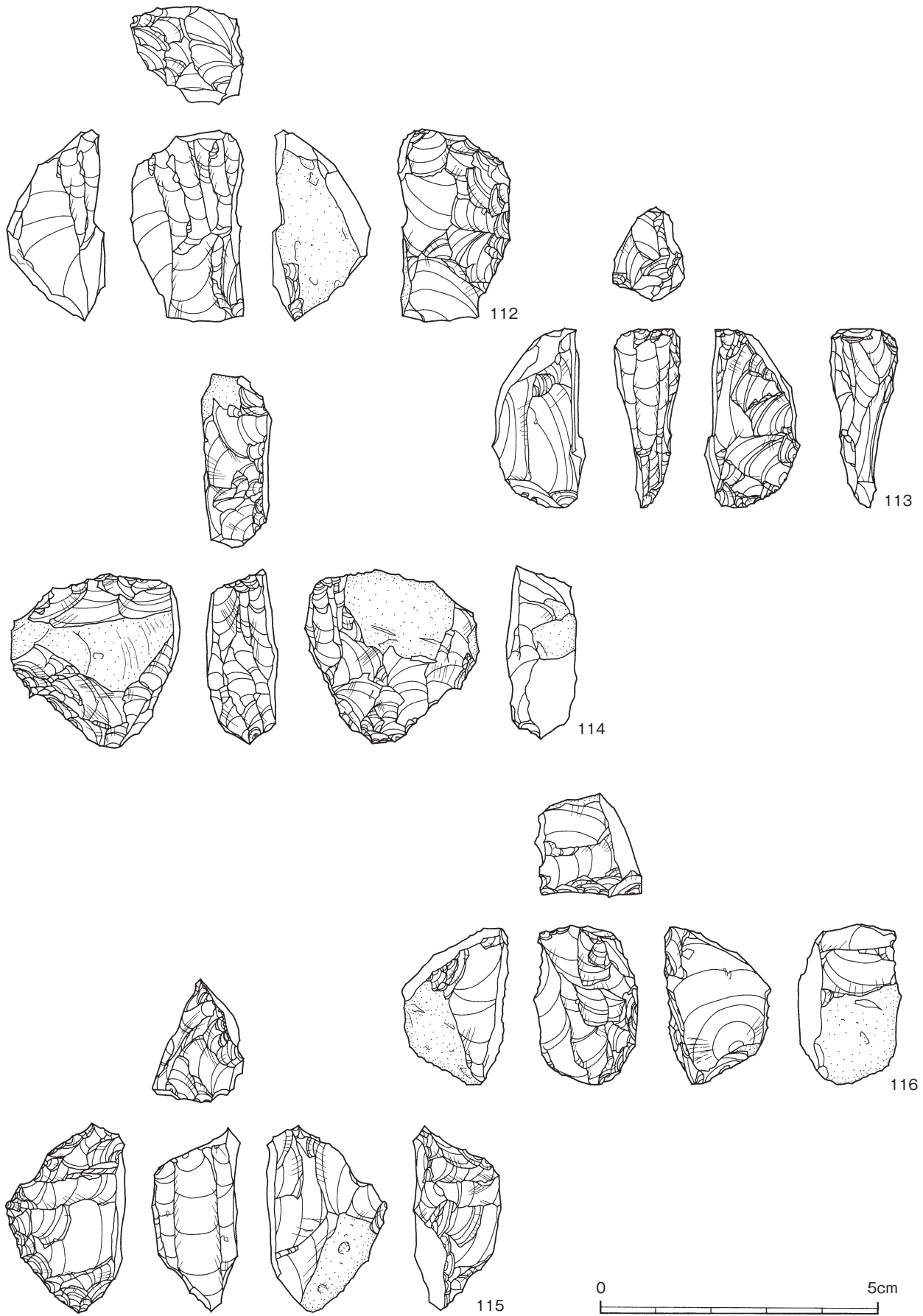
#### 接合資料（第36図123～第37図126）

123は比較的大型の剥片を素材にした石核と搔器の接合資料である。切り合い関係から、先に搔

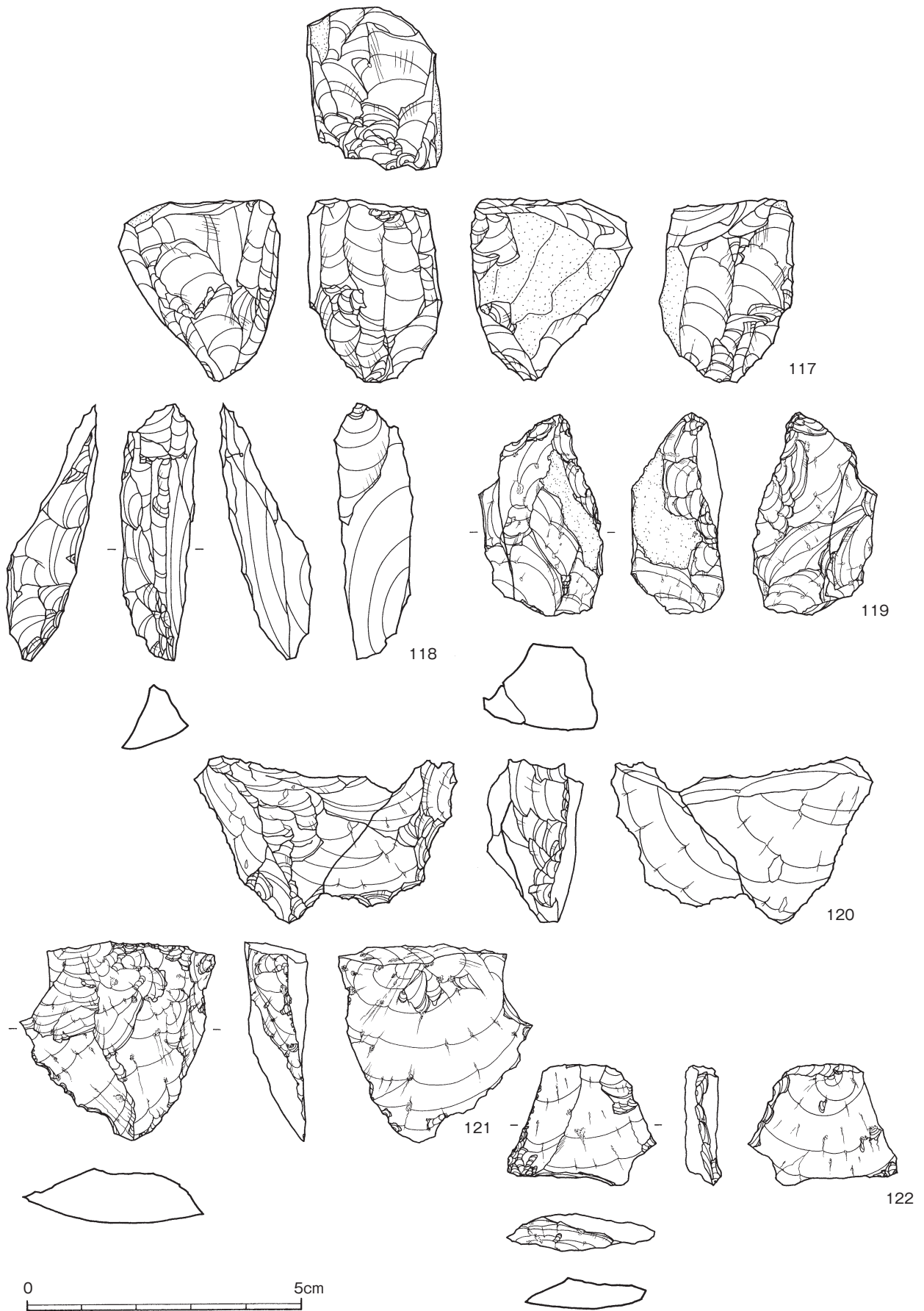




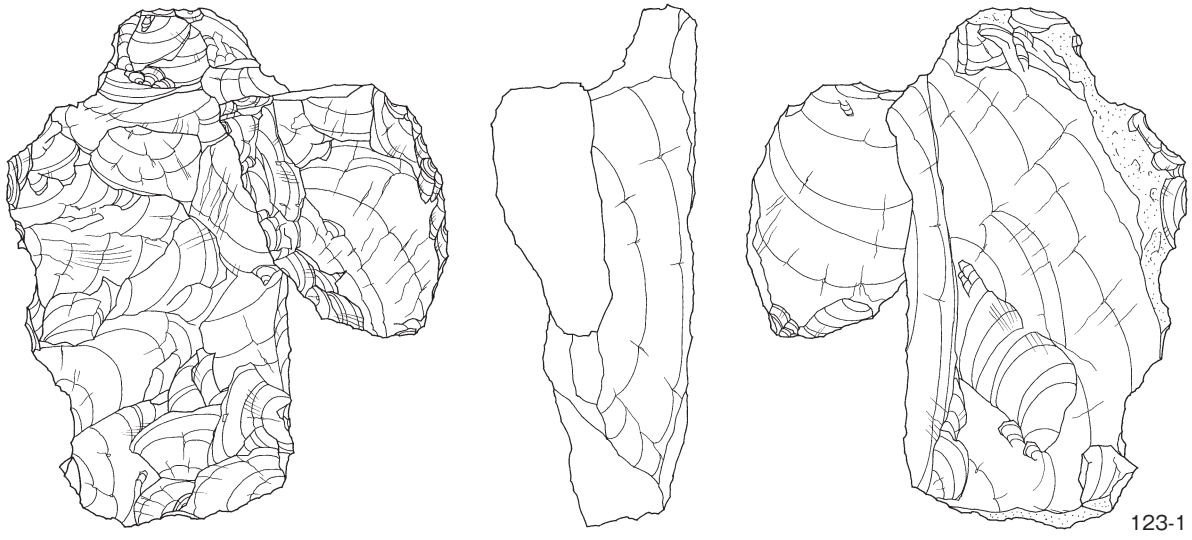
第33図 第三文化層 第12ブロック出土石器



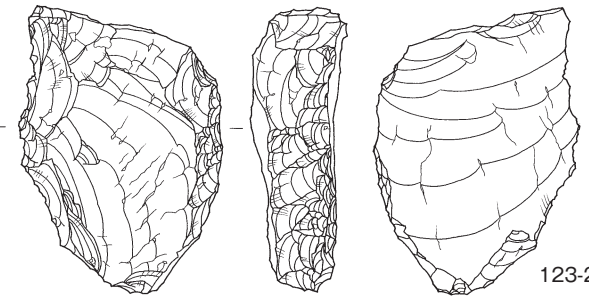
第34図 第三文化層 第13ブロック出土石器(1)



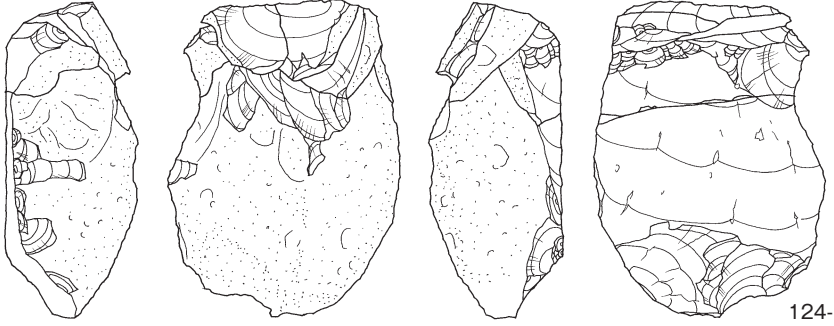
第35図 第三文化層 第13ブロック出土石器(2)



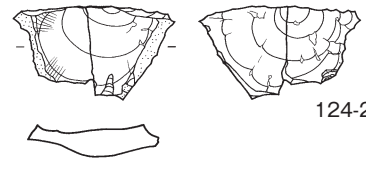
123-1



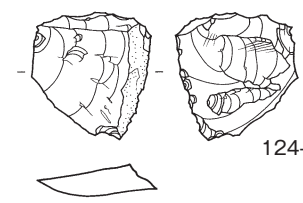
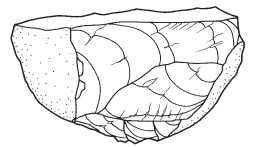
123-2



124-1



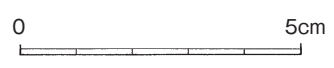
124-2



124-3



124-4



第36図 第Ⅲ文化層 第13ブロック出土石器(3)

器とされる幅広剥片が剥離され、その後大型の剥片が剥離されたと考えられる。大型の剥片は中央から二つに分割され、また周辺から小型の剥片が剥離されている。最初に剥離された幅広剥片は両側縁と末端に丁寧な二次加工が施されて搔器（123-2）とされている。この搔器の裏面はかなり摩滅しており、著しい使用が考えられる。

124は石核と剥片の接合資料である。黒曜石円礫を分割したものを使用し、一端から小型の剥片を連続して剥離している。反対側の端部も自然礫面を打面にして数回剥離している。その後横方向から剥離して124-4となっている。石材は日東産黒曜石である。

125は桑ノ木津留系黒曜石剥片と搔器の接合資料である。125-1は全体接合で、125-2が周縁に急角度で丁寧な二次加工を施したラウンド・スクレイパーであり、その後正面をヒンジさせて剥ぎ取り、再度刃部の再加工を行っているのが125-3である。左側は剥落している。

126は同様の石材を使用した剥片の接合資料である。

#### 第14ブロック

F-75区を中心として、径約8×6mの分布範囲をもつ。器種は細石刃・細石刃核・小型ナイフ形石器・スクレイパーなどであり、石材のなかでは日東産黒曜石が量的に最多となっている。

##### 細石刃核（第38図127～129）

127は板状の黒曜石を使用しており平坦な自然礫面を両側面とし、背面は片側面からの丁寧な剥離により整形している。打面は側面からの折断の後に、作業面からの打面調整も施されている。

128は細石刃核の接合資料である。128-1の全体接合状況から素材は小角礫であったことが理解できる。角礫の角の部分から小型の剥片が連続して剥離されており（128-4, 128-3）、残存部が細石刃核となっている。石材は127と同様に桑ノ木津留系黒曜石と考えられる。

129は特徴的な風化状況より淀姫系黒曜石と考えられるもので、自然礫面を打面として、下縁は両面から整形して正面面をV字形にしている。打面調整が顕著に施されている。

##### ナイフ形石器（第38図130）

130は背縁に細かいブランチングを施したもので、下半部を欠損するものの小型である。

##### スクレイパー（第39図131～135）

131は幅広剥片の厚みがうすい左側縁に二次加工を施したもので、削器的な使用が想定される。また、右側の急角度の縁辺には著しい使用痕が認められ搔器的な使用が考えられる。

132・133は比較的厚みのある剥片を素材とし、粗い二次加工を施して急角度の刃部を形成した搔器である。132の裏面は使用のため摩滅している。133は欠損品である。

134は縁辺に使用痕状の細かい剥離が認められるもので、135も二次加工や使用痕状の剥離が認められるものである。135は粘板岩製である。

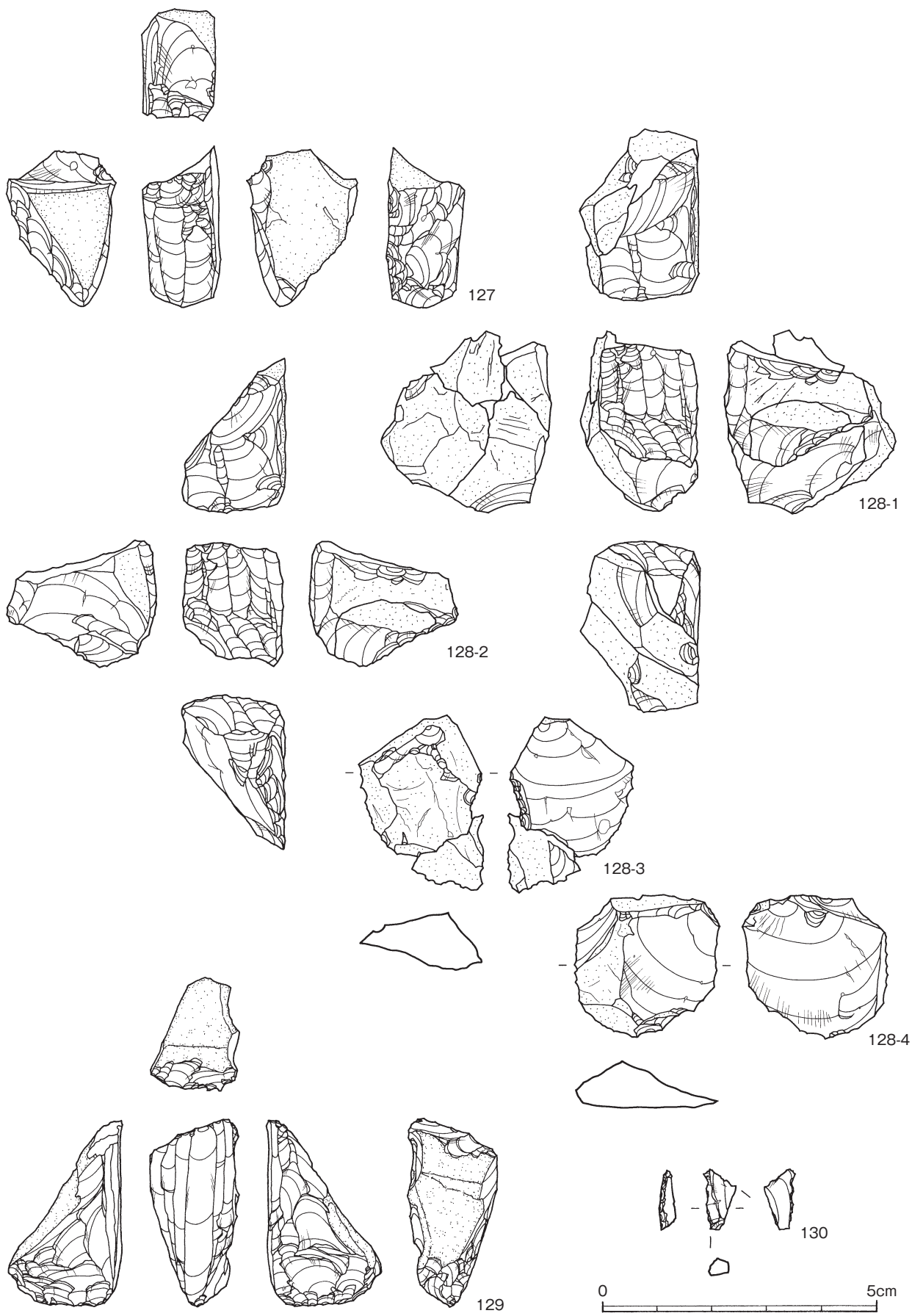
##### 接合資料（第40図136・137）

136は搔器と剥片の接合資料である。136-1が全体接合状況で、上端から剥片を剥いだものが136-2であり、剥離された剥片の縁辺にも細かい二次加工が施されている。136-2の段階で右側縁に刃部が形成されたと考えられる。次にまた上端から剥片剥離が行われ、刃部を再加したものが136-3である。なお、剥離された剥片の縁片の縁にも使用痕が認められる。

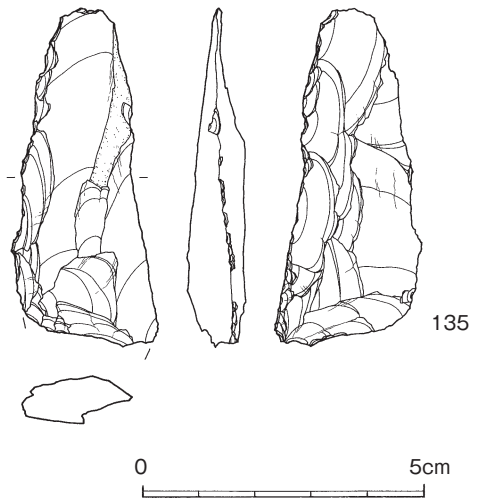
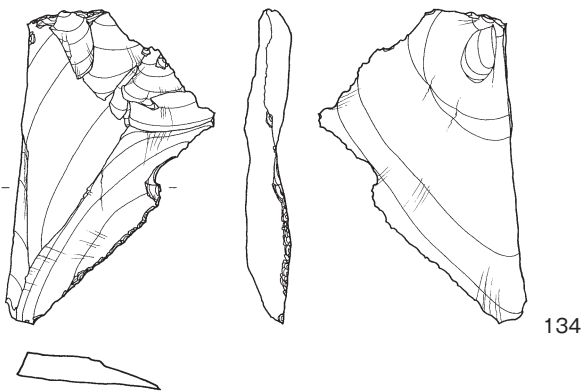
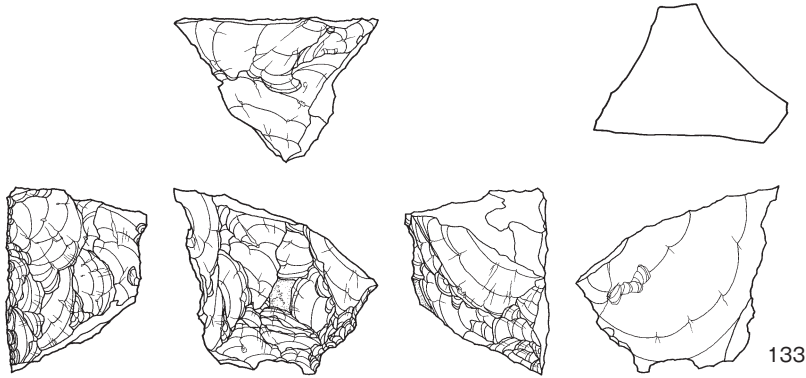
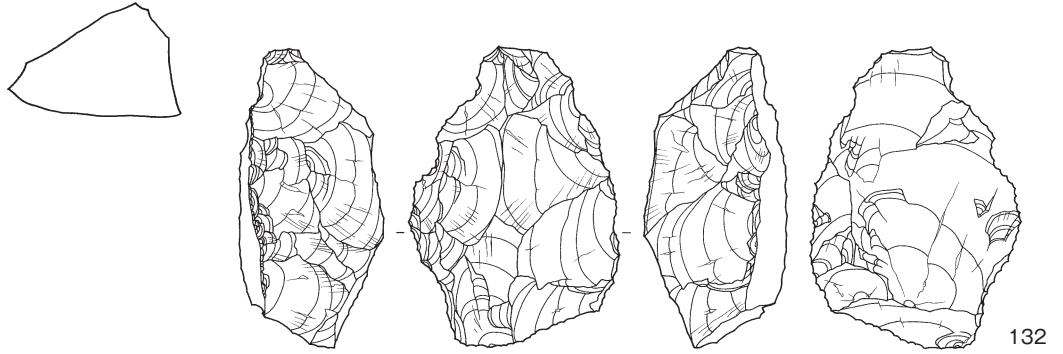
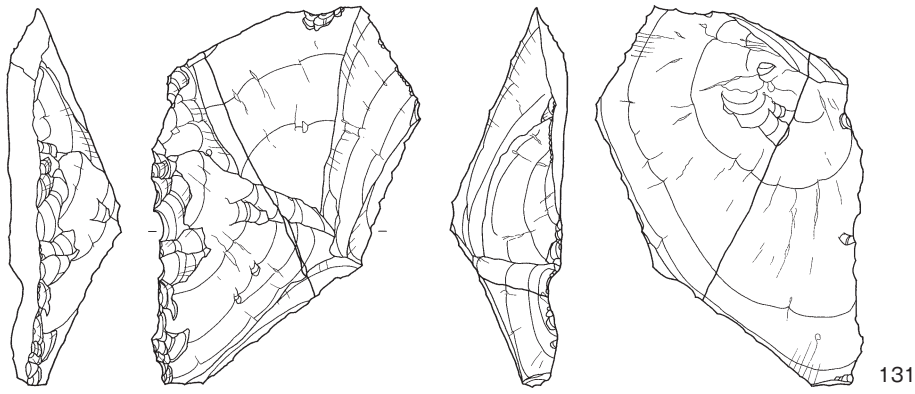
137はスクレイパーと剥片の接合資料である。137-2の側縁に細かい二次加工が認められる。



第37図 第Ⅲ文化層 第13ブロック出土石器(4)

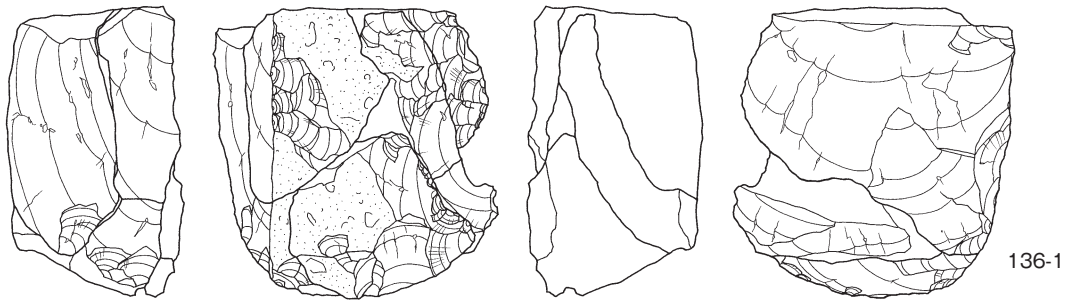


第38図 第Ⅲ文化層 第14ブロック出土石器(1)

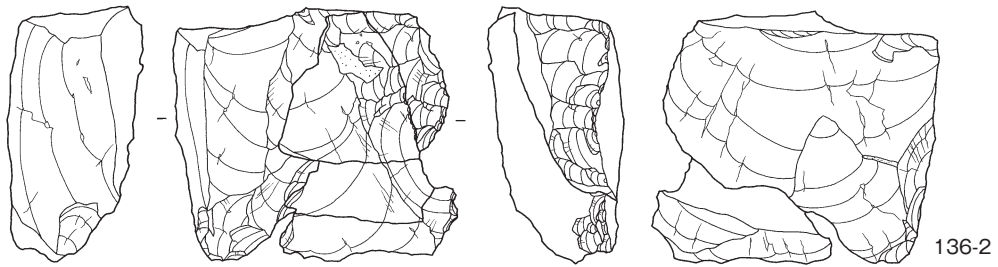


第39図 第Ⅲ文化層 第14ブロック出土石器(2)

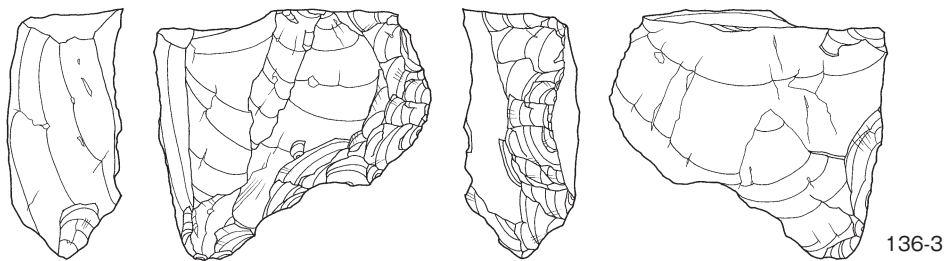
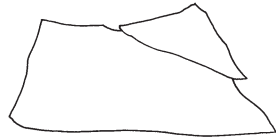




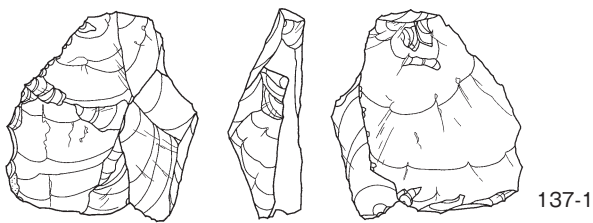
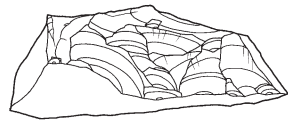
136-1



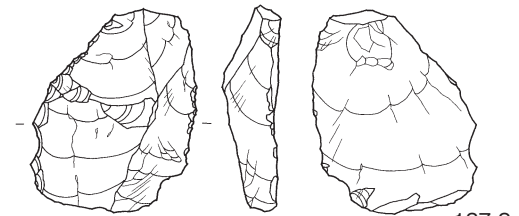
136-2



136-3



137-1



137-2



第40図 第Ⅲ文化層 第14ブロック出土石器(3)

## 第15ブロック

F-76・77区付近で、径約4 m程度の範囲に分布域をもつものである。遺物数は多くなく、細石刃や細石刃核などが出土している。出土石材のほとんどが桑ノ木津留系黒曜石であった。

### 細石刃核（第41図138～141）

138は片面に自然礫面を残す小型剥片を素材とし、小口部分を作業面にしたものである。139は板状の剥片を素材として横方向からの剥離により打面を形成したものである。140も同様の剥片を使用しており、打面は折断により形成している。打面調整も行っている。

141は細石刃核の接合資料であり、141-1の接合状況により素材剥片は比較的大きく、それを腹面からの折断で分割したものであることがわかる。141-2の打面には打面調整が施されている。これらの石材は全て桑ノ木津留系黒曜石である。

## 第16ブロック

F・G-77・78区付近で約6×2 mの範囲に分布している。出土した石器は細石刃・細石刃核などであり、それらの石材は桑ノ木津留系黒曜石が主体であったが、淀姫系黒曜石も認められた。

### 細石刃核（第41図142～144）

142・143はその特徴的な風化から淀姫系黒曜石と思われるもので、142は後方に傾斜する打面を有し、そこには打面調整が施されている。143はV字状の正面形を呈する楔形で、打面は作業面方向からの削片剥離により形成されている。

144は細石刃核の接合資料である。最も早い段階で打面の上のやや大きめの剥離が行われ、下端は折断されている。144-2の直前で右側面方向からの剥離で打面が形成されている。打面調整も顕著に行われている。石材は桑ノ木津留系黒曜石である。

## 第17ブロック

F-78区の中心部付近に径約2 m程度の範囲に剥片や細片がやや集中していた。

## 第18ブロック

E・F-79区の境界付近に径約3×1 m程度の広さに剥片や細片がやや集中していた。

## 第19ブロック

F-79区の中央付近に径約2 m程度の範囲に土器片が集中していた部分がみられた。土器については縄文時代草創期の頃で取り扱った。

## 第20ブロック

F・G-80区付近で、径約4×4 m程度の分布範囲を有し、細石刃核やスクレイパーなどが出土している。石材では日東産黒曜石が主体であった。

### 細石刃核（第42図145）

145は打面転移をしており、作業面は正面と右側面に2面認められ、それぞれ剥離角は異なる。

### スクレイパー（第42図146～148）

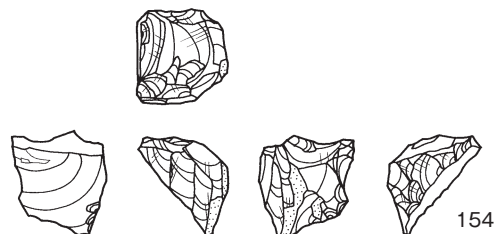
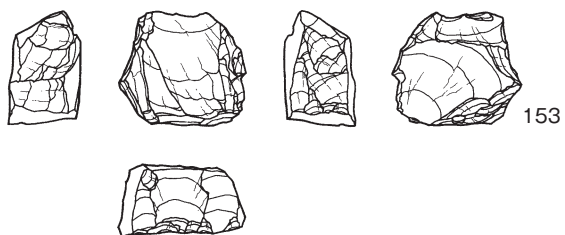
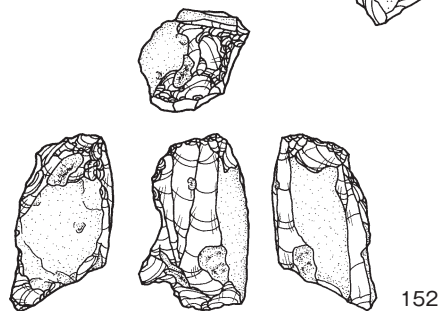
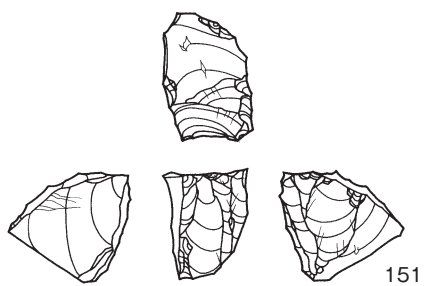
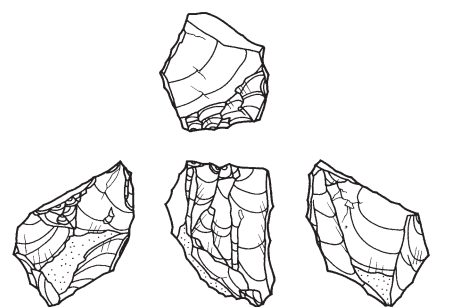
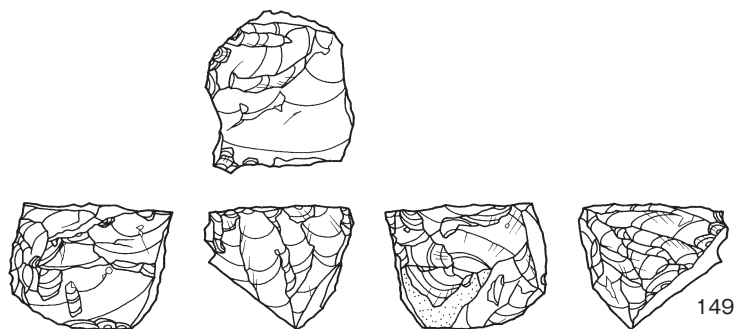
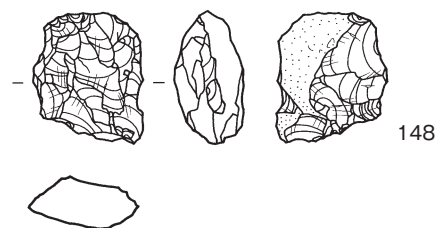
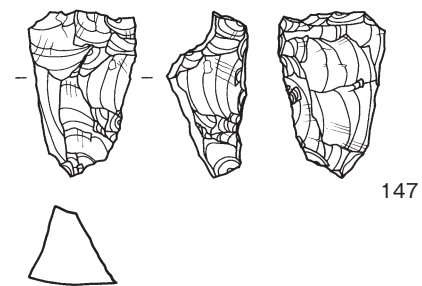
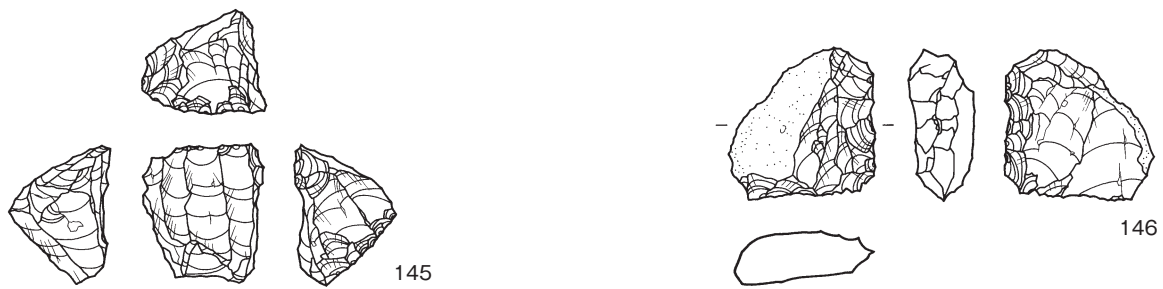
いずれも二次加工が認められるものである。

### ブロック外の石器（第42図149～154）

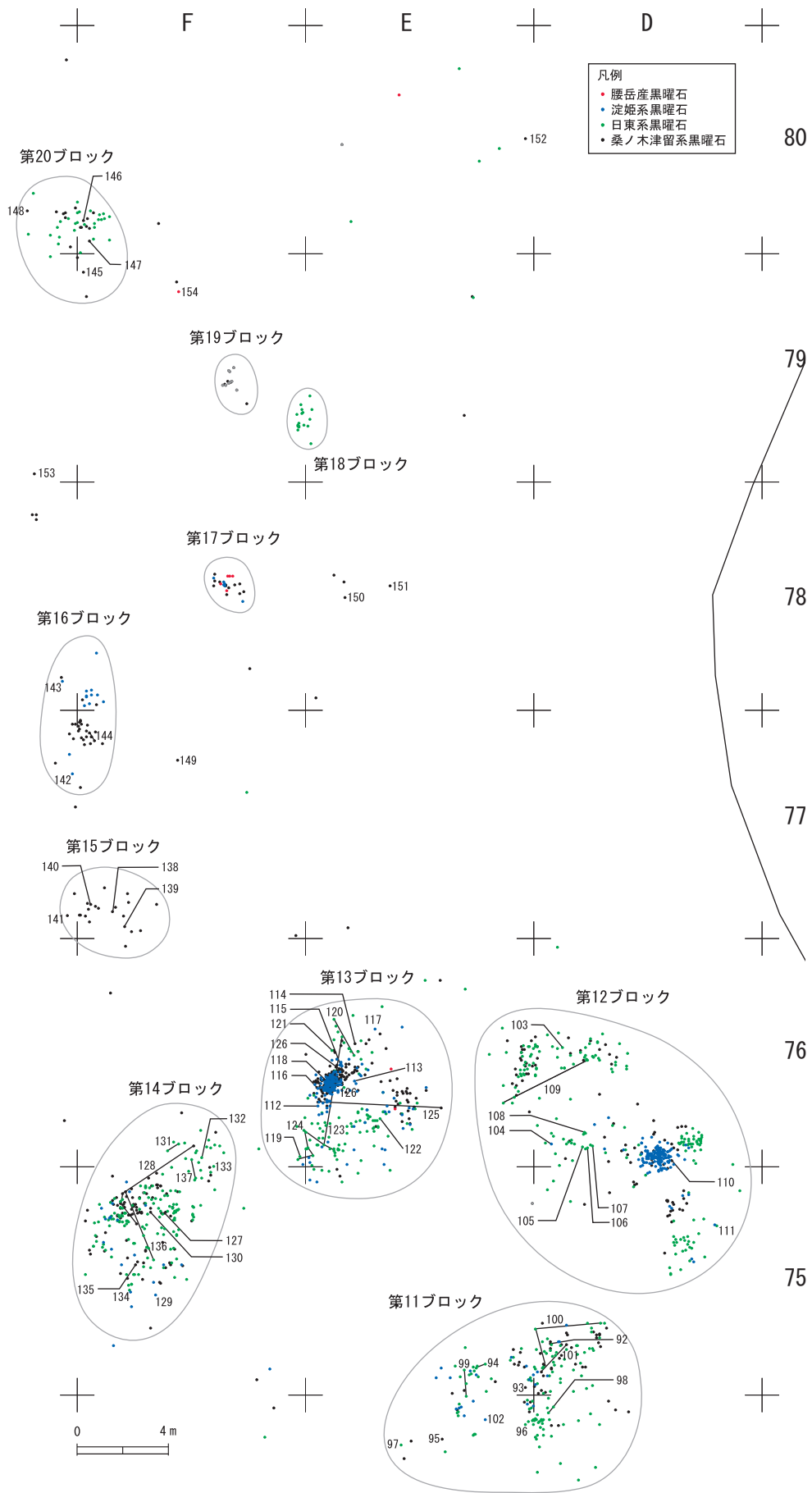
いずれも小型の細石刃核である。149は16ブロックに近い位置で、150・151は第17ブロックに近い位置で出土している。剥片素材や細礫を使用したものが認められ、153のみは水晶製である。



第41図 第Ⅲ文化層 第15, 16ブロック出土石器



第42図 第Ⅲ文化層 第20ブロックほか出土石器



第43図 第三文化層 第11～20ブロック石器群出土分布図

### 細石刃について（第44図155～第49図419）

第1ブロックから第20ブロックまで、出土した細石刃は合計263点であった。基本的に、ブロックごとに頭部・中間部・尾部に区別して掲載した。出土分布は第50図と51図で示した。

細石刃の出土数は、第2ブロックが46点と最多であり、次が4ブロックの40点で、その次が第13・14ブロックの34点であった。細石刃核が最多の15点出土した第1ブロックの細石刃はわずか2点と少なかった。

各ブロックの細石刃と石材は下の表のとおりである。

ブロック	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
ob桑ノ木	2			5		5	14				8	17	15	21	14	2	1		1	1
ob腰岳		46	11	35	10				15		1	1								
ob淀姫											2	3	19	13						
ob上牛鼻							1													
合計	2	46	11	40	10	5	15		15		11	21	34	34	14	2	1		1	1

上の表のように細石刃の石材は、ブロック差により違いが明確であり、腰岳産黒曜石が主体の第2～5ブロックと、第9ブロックのほか、淀姫系黒曜石が主体となる第13ブロックがあり、そして在地産桑ノ木津留系黒曜石が主体の第1、6、7、12、14、15ブロックに分けられる。

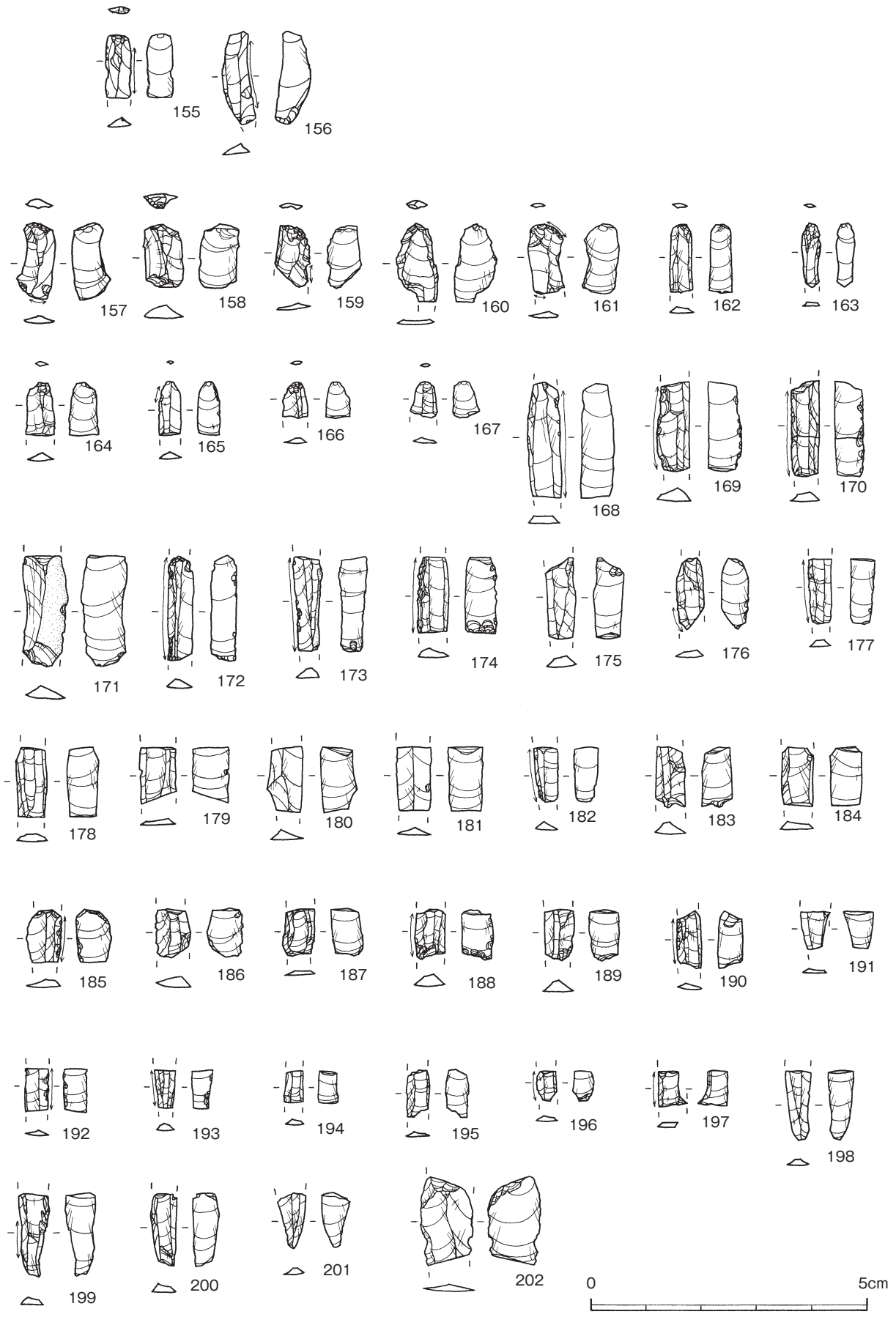
### 細石刃と使用痕（図版19参照）

出土した細石刃には、使用した痕跡と推定される連続した微細な剥離が縁辺に認められるものや、またその微細剥離の稜上などが磨滅しているもの、あるいはルーペなどで線状痕が観察されるものが認められている。このような細石刃の使用痕は、中間部のみでなく、頭部や尾部の細石刃にも認められるが、数的には中間部のものが多いようである。

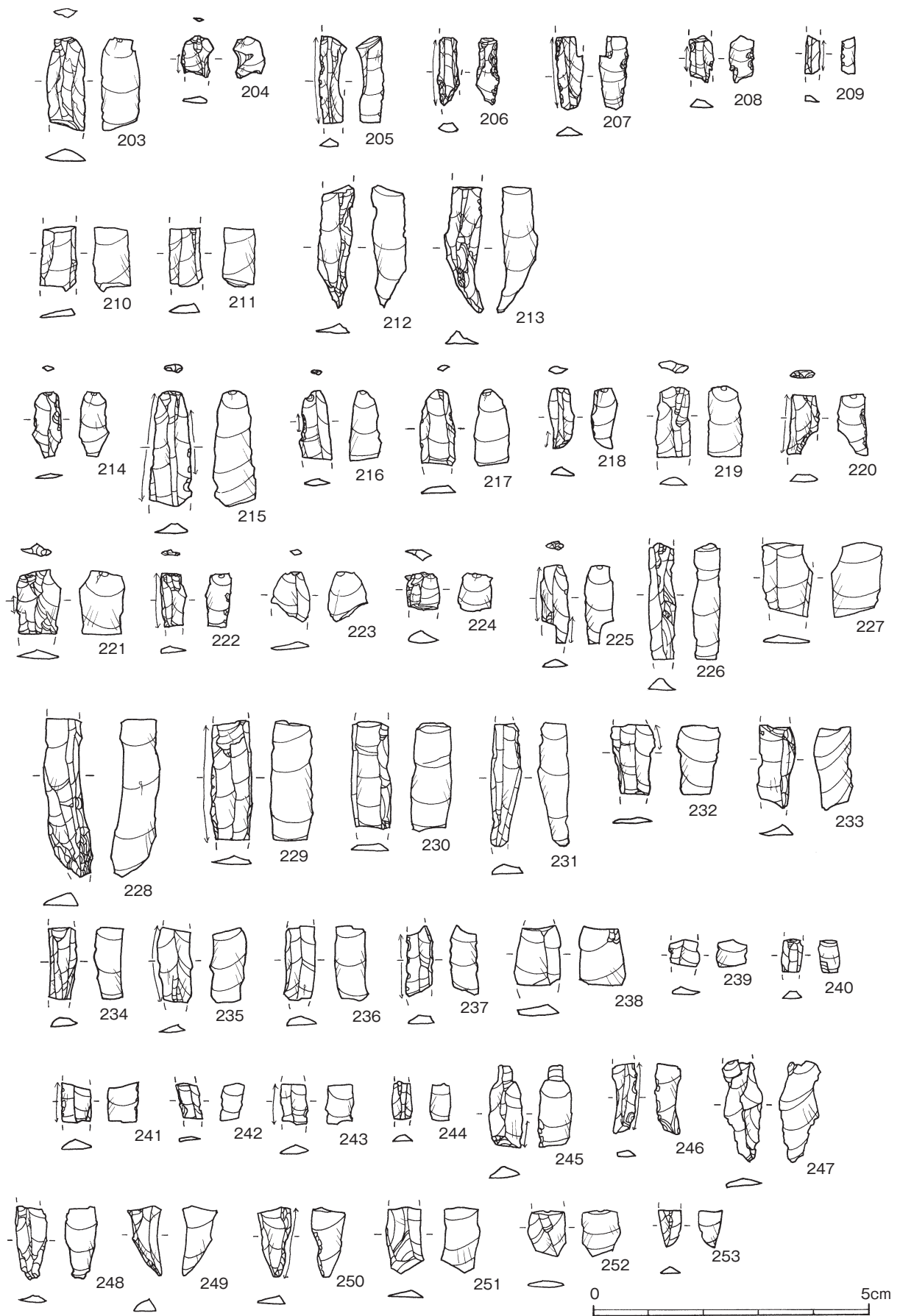
使用痕が認められる中間部の細石刃は、例えば第2ブロック第44図（157～202）を例にとると、長さ20mm程度の端正なもの（168）や、長さ15～18mm程度の比較的長いもの（169・170・172～174）などの他に長さ5～8mm程度の比較的小さいもの（188・190・192・193・196・197）など多様である。これらの使用痕のある細石刃は、長いものと短いものに分布がまとまる傾向がみられる。

前者の比較的長い細石刃では、左側縁に使用痕があり、線状痕が裏面（169、170）や左半分（172、174）にみられるものがあり、また後者の短く折断された細石刃でも長軸方向に線状痕が裏面（188、190、193）や右半分（192）に確認できるものがみられた。

次に第3ブロックでは11点の細石刃が出土（203～212）している。石材はいずれも腰岳産黒曜石である。このうち204は左側縁に微細剥離があり、その裏面には長軸方向の線状痕が観察され、右側縁部はわずかに折れている。同様に205も左側縁に微細剥離があり、その裏面には長軸方向の線状痕が観察され、右側縁はわずかに折れている。さらに206・207・208も左側縁に微細な剥離が残り、その裏面には線状痕が明確に残り、右側縁と異なりわずかに変色している。これらも右側縁は一部破損している。いずれも左側縁に微細な剥離が認められ、裏面の長軸方向の線状痕の存在から長軸方向に使用されたと考えられる。また、これらは共通して右側縁が破損しており、装着部の関係と推定される。この5点の使用痕や装着痕が共通した細石刃は、近接した位置でほぼ直線状に出土していることから、この場所で、新たな新品と取り換えられた可能性が考えられる。また4ブロックでも220・225・246など長軸方向の線状痕が観察された。



第44図 第Ⅲ文化層 第1, 2ブロック出土細石刃

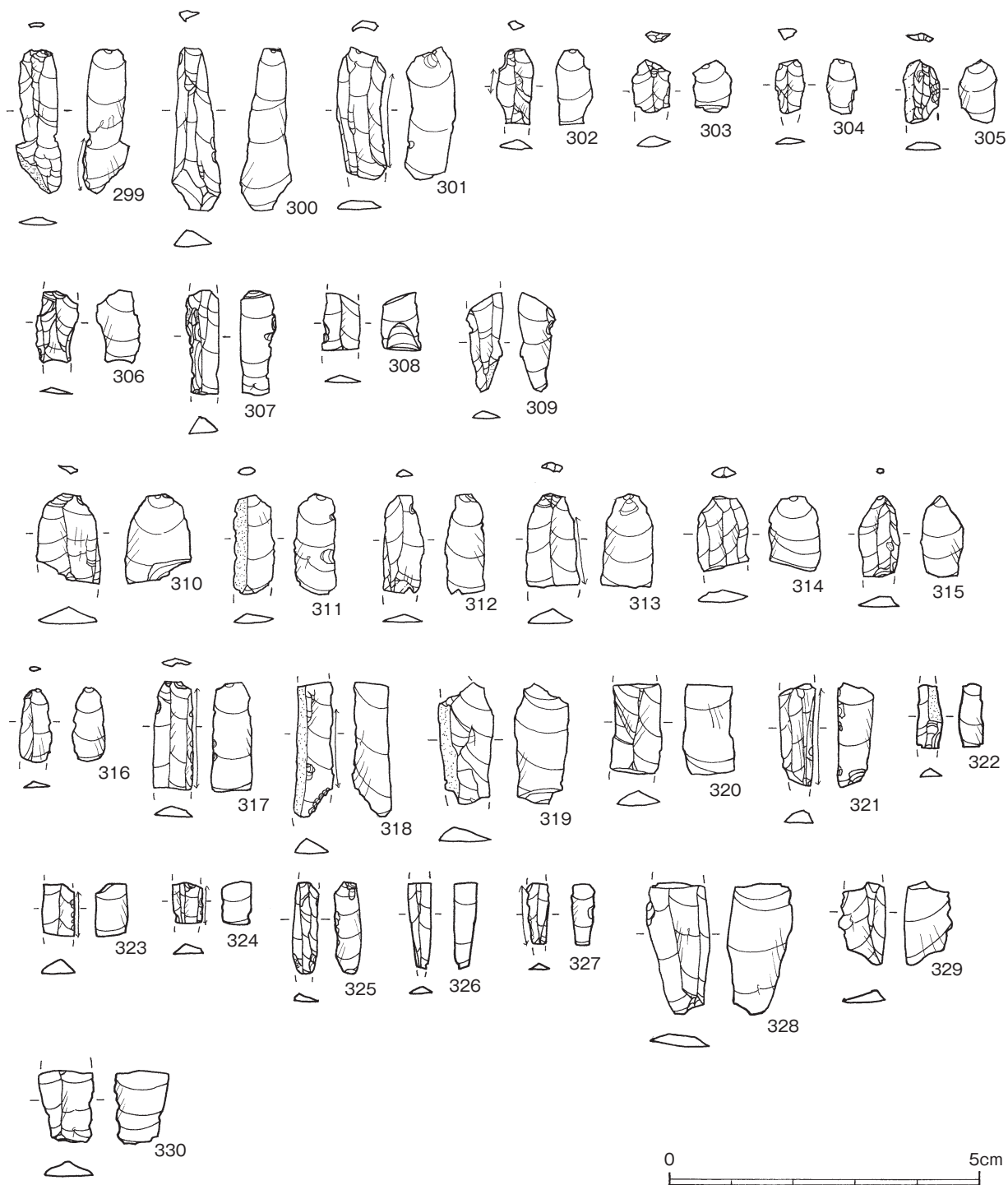


第45図 第Ⅲ文化層 第3, 4ブロック出土細石刃





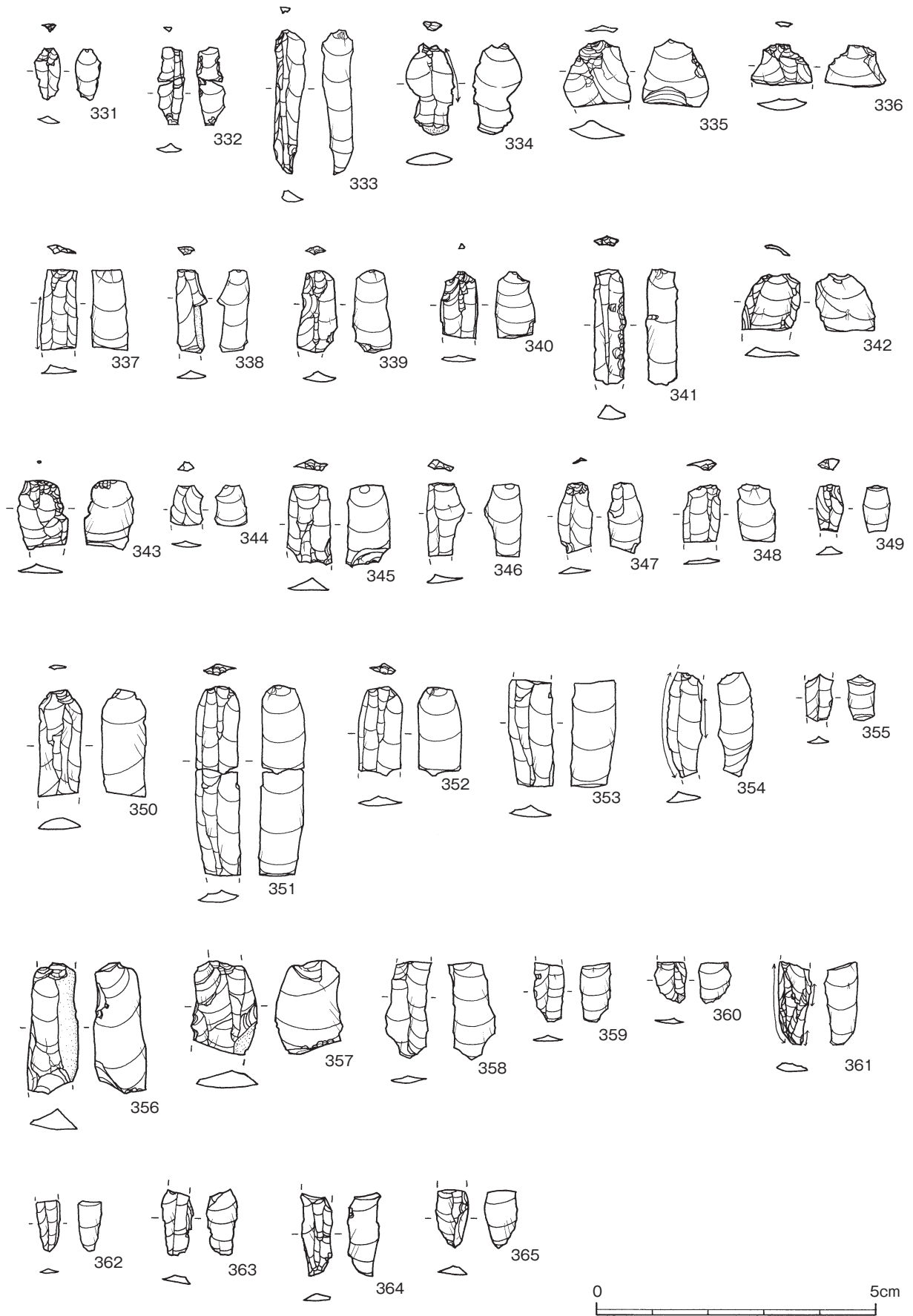
第46図 第Ⅲ文化層 第5～9ブロック出土細石刃



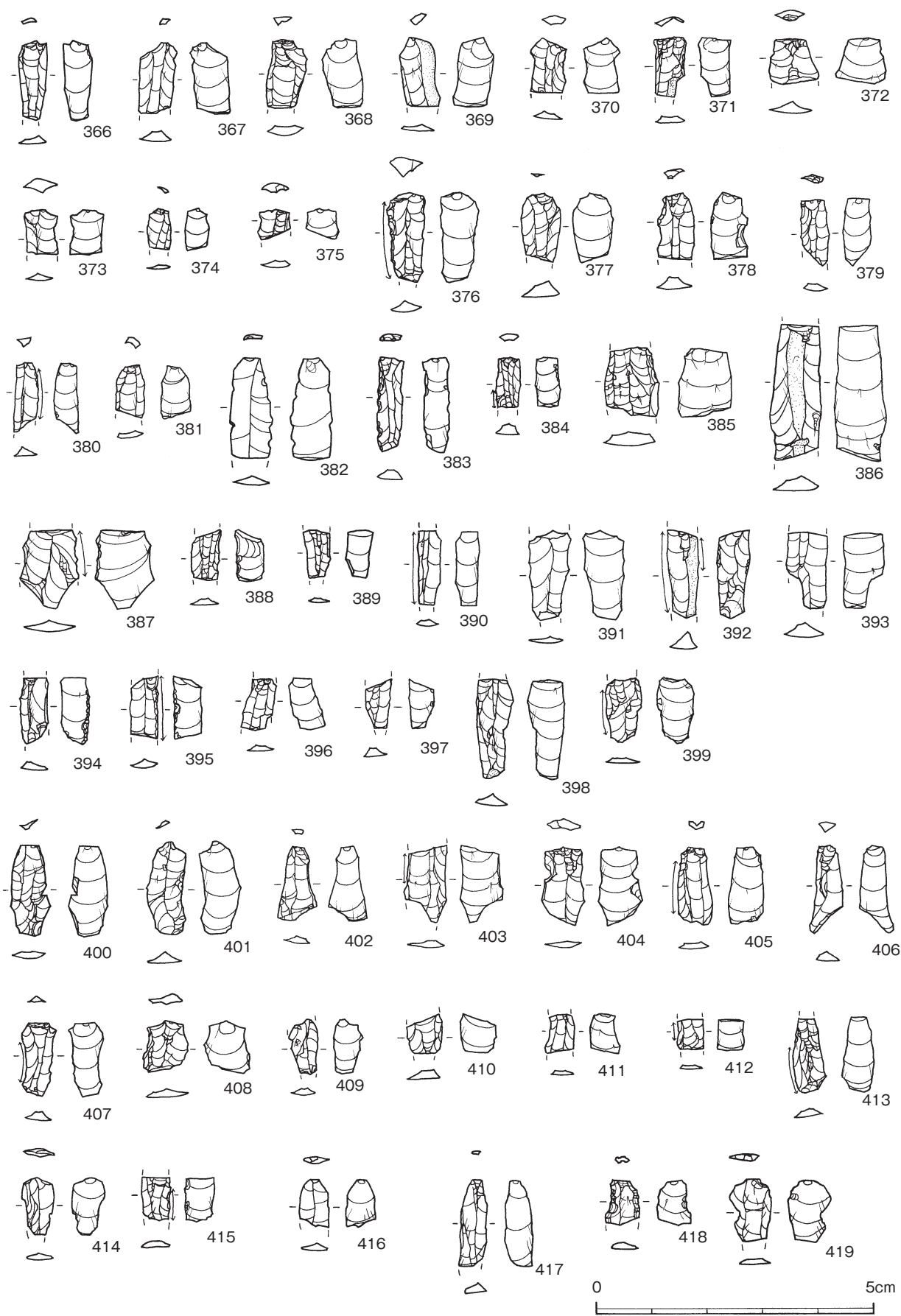
第47図 第Ⅲ文化層 第11～12ブロック出土細石刃

このほか、桑ノ木津留系黒曜石を主体とする第12ブロックでも、321・324・325のように長軸方向に線状痕が明確に残り、かつ使用部分が右半分のみ変色している例（321）もみられた。

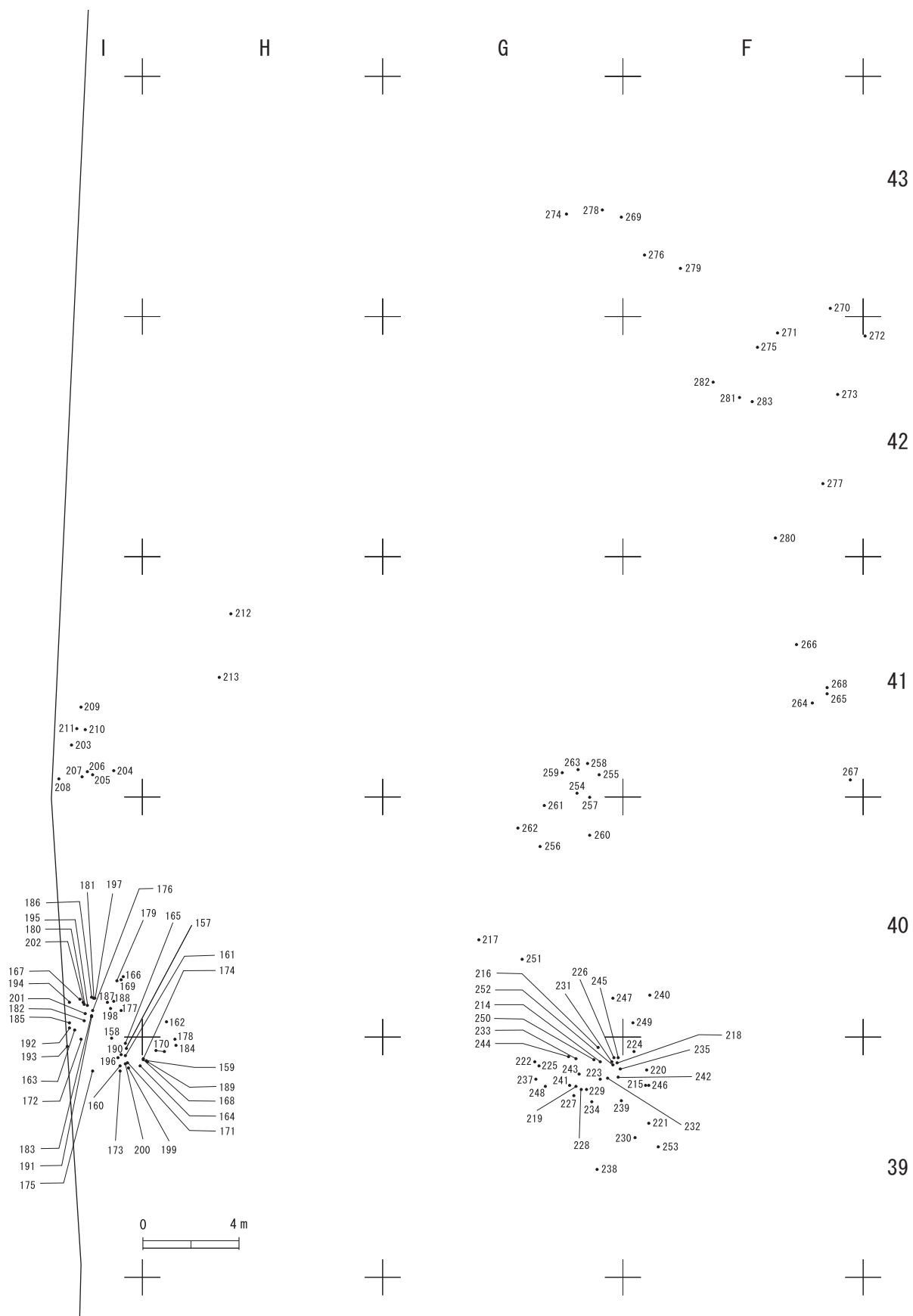
また13ブロックの341などでは裏面全体に長軸方向の線条痕が観察されており、これまでのシベリア出土例のような側縁の溝に埋め込む常識的な装着方法とは異なる装着が推定される。



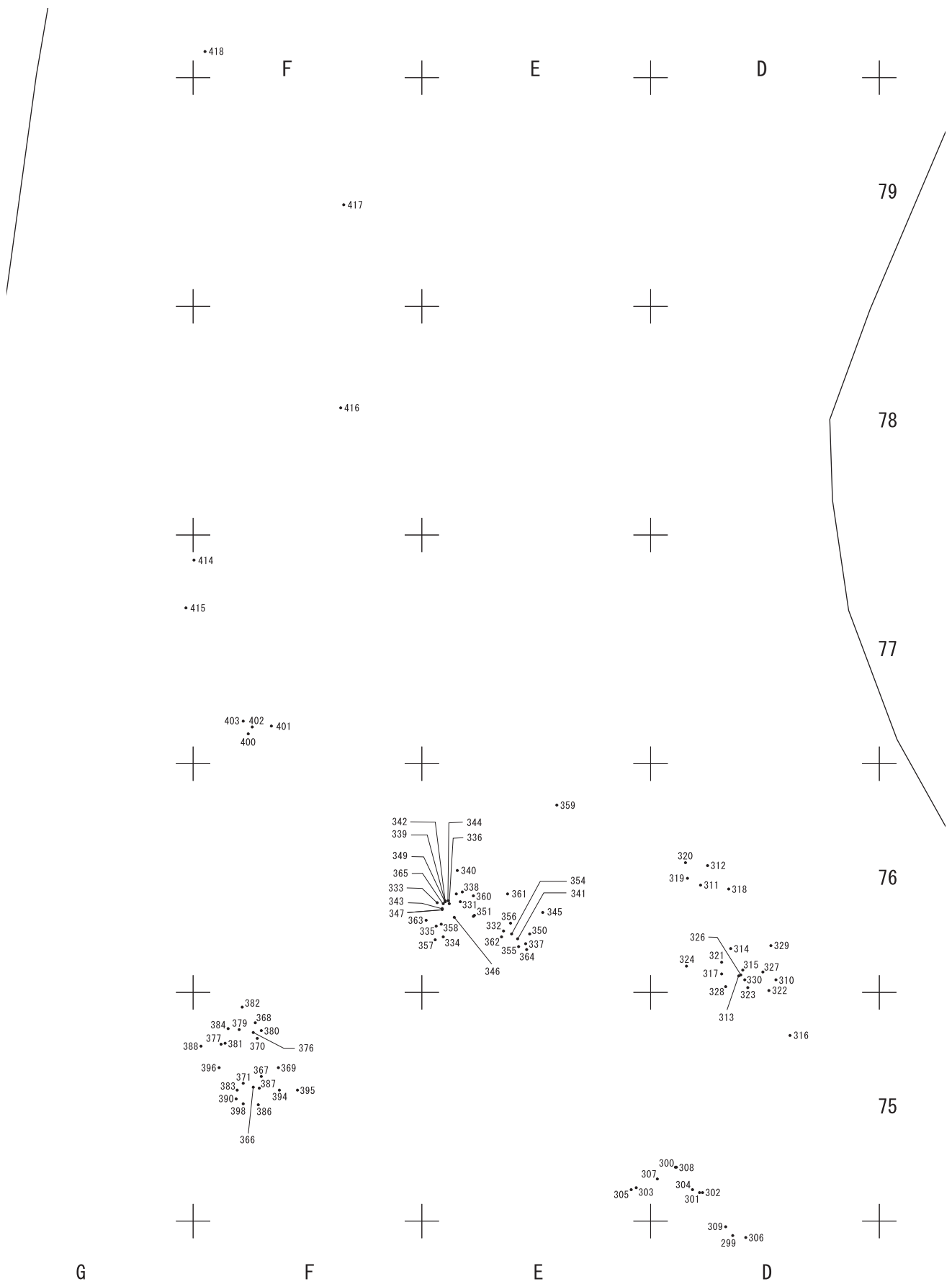
第48図 第三文化層 第13ブロック出土細石刃



第49図 第Ⅲ文化層 第14~20ブロック出土細石刃



第50图 第Ⅲ文化層 細石刃出土分布图(1)



第51図 第三文化層 細石刃出土分布図(2)



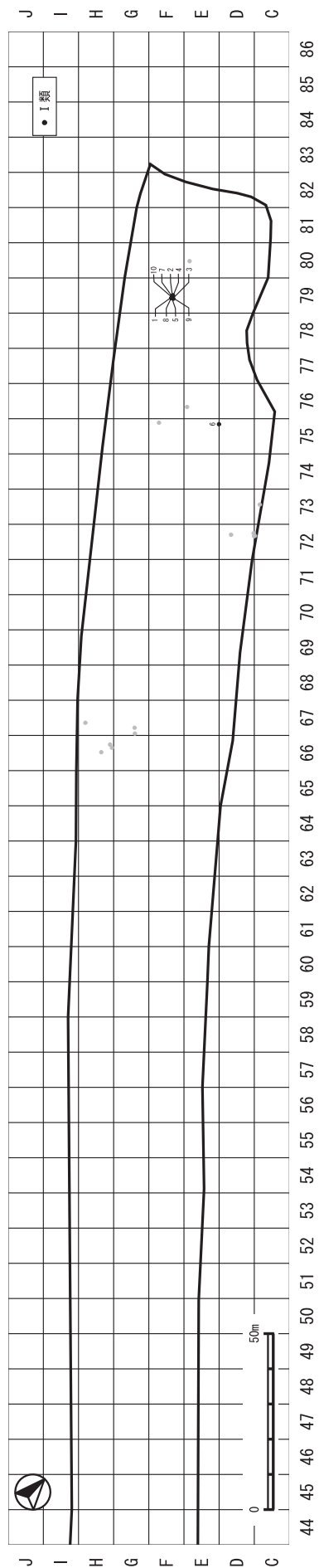
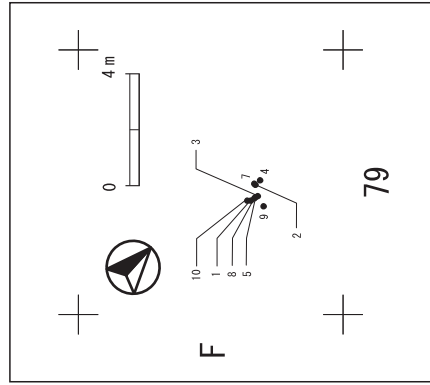
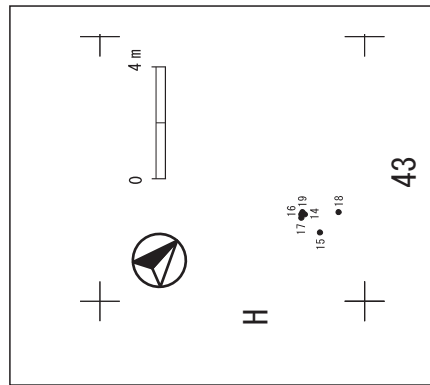
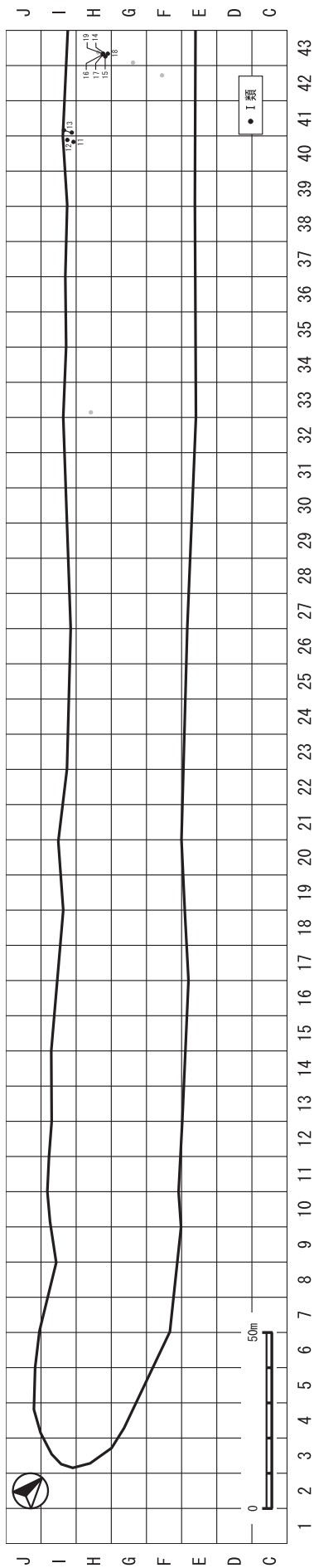












第52図 I類土器出土状況図

## 第5節 縄文時代草創期の調査成果

### 1 調査の概要

これらの土器は第Ⅹ層に細石刃及び細石刃核等と同一層の状況で出土した。

各細石刃及び細石刃核のブロックとの出土状況関係はF-79区に9点、E-75区に1点、I-40・41区に4点出土している。また、H-43区では18点が出土している。これらをⅠ類とした。細石器のブロックとの出土状況としては、石器との関係が良くつかめなかった。

### 2 遺物

#### Ⅰ類（第53図1～19）

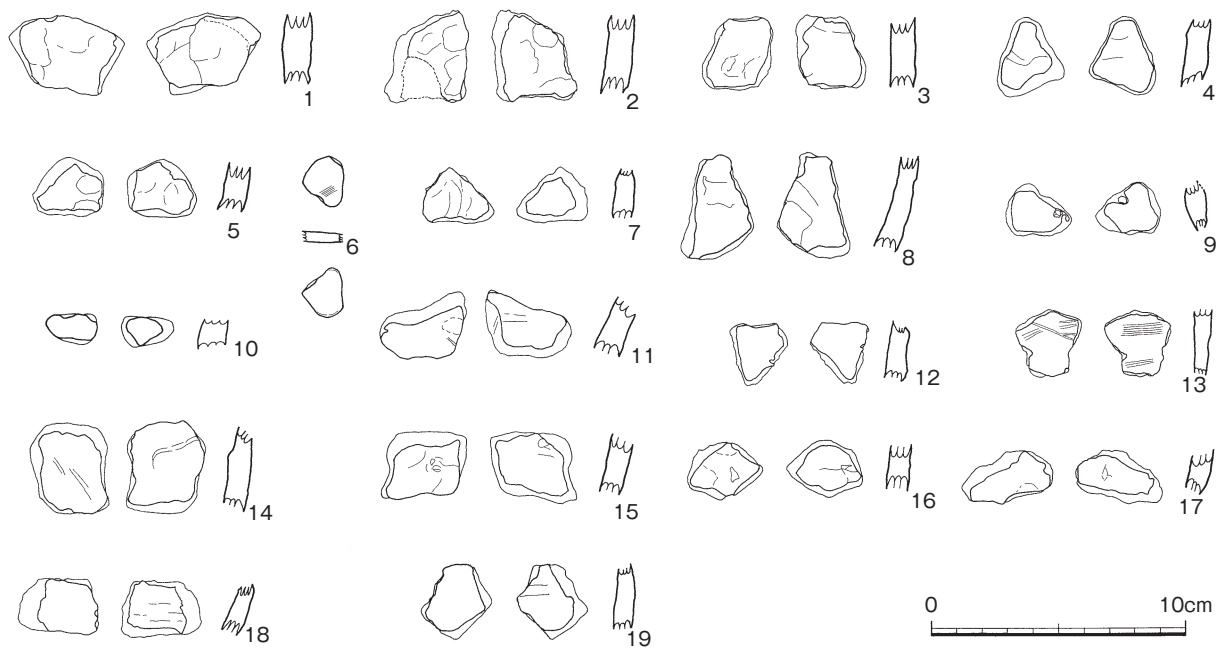
土器片では口縁部と底部がしっかり確認できるものがなく、器形が不明である。これらの土器は通称チョコ層といわれる粘質土の中に包含されているため、器面の保存状態が悪い。土器は全て無文土器である。

1～9はF-79区の中に出土したものである。1は部位が胴部でやや厚めの深鉢である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。色調は外面に若干灰色の斑点が残るが茶褐色である。内面は膜状に灰色の面が全体的に残り、やや鈍い凸凹の調整面がみられる。2は部位が胴部でやや厚めの土器である。外面は一部はがれているが指圧状の調整痕である。内面は横位の調整痕がみられる。3は部位が胴部でやや厚めの土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の斑点がある。内面は膜状に灰茶褐色の面が全体的に残り、横位の調整面がみられる。4は部位が胴部でやや薄めの土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干黒茶褐色の斑点がある。内面は膜状に灰茶褐色の面が中央部に残り、調整面がみられる。5は部位が胴部でやや厚めの土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の面が残り丸く丁寧な調整面が想像され、無文である。内面は膜状に灰茶褐色の面が全体的に残り、やや凸凹の調整面がみられる。6はE-75区の中に1点だけ混在して出土している土器である。この土器は半分欠けた状態で、平坦である。よって、器面調整からみて低部の状態に類似している。色調は茶褐色である。7は部位が胴部でやや薄めの土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の面が残り一部剥がれている。内面は膜状に灰茶褐色の面が全体的に残り、やや凸凹の調整面がみられる。8は部位が胴部でやや厚手の土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の斑点がみられる。内面は灰茶褐色の面が部分的に残り、やや凸凹の調整面がみられる。9は部位が胴部でやや薄手の土器である。外面は保存状態が悪く砂粒が露出している。若干灰茶褐色の面が残り丸く丁寧な調整面がある。内面は茶褐色の面が一部残っている。10は部位が胴部で厚手の無文土器である。外面は黒茶褐色で横位の筋状の調整痕がみられる。内面は茶褐色で小片のため調整痕は不明である。

11, 12, 13はF-79区の中の土器である。11は部位が胴部で無文の深鉢である。器面は横位の撫で調整で、外面が茶褐色、内面が黒褐色である。12は薄手の土器である。器面の色調は黒褐色で、器面調整は、内面が研磨気味に丁寧に施し、外面は一部剥げた状態で不明である。13は薄手の土器である。器面の色調は茶褐色で、器面調整は、内面が研磨気味に丁寧に施し、外面は一部剥げた状態で不明である。

H-43区には18点出土した。ここでは、しっかり図化できる2.5cm以上の6点を掲載する。14は

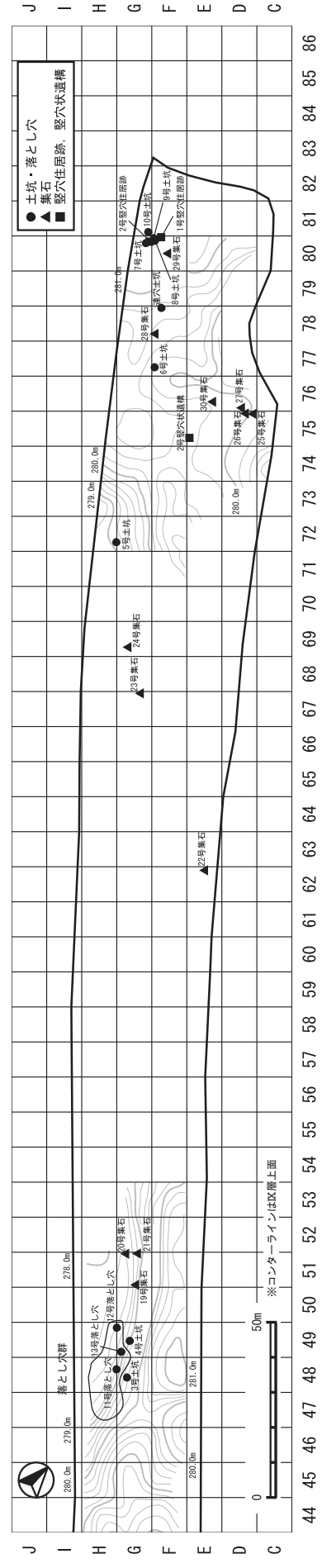
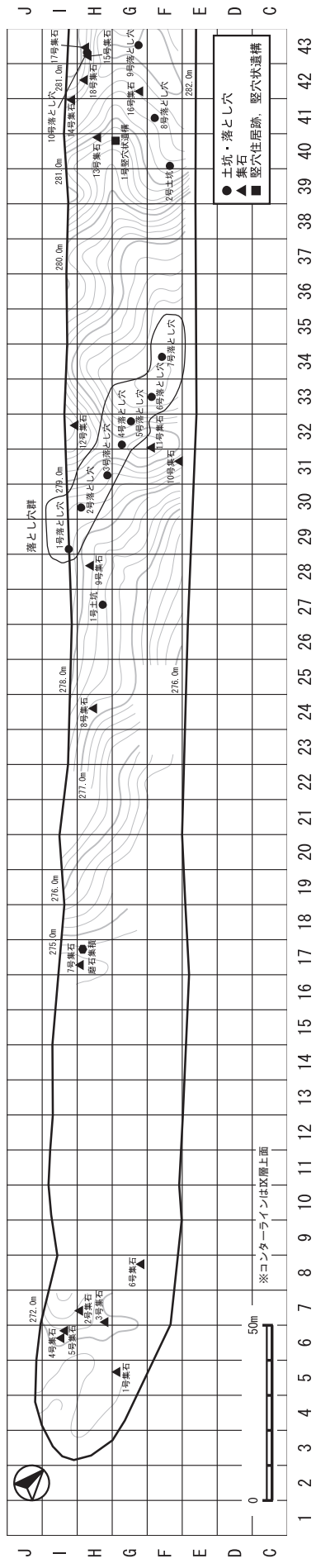
厚手の深鉢胴部である。色調は外面が茶褐色で、内面が灰褐色である。器面調整は、外面が撫でて、内面は粘土の輪積みの積み上げで一部剥げた状態である。15は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が茶褐色で、内面が灰茶褐色である。器面調整は、外面が撫でて、内面は横位の撫てである。16は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が灰色と茶褐色の斑点で、内面が暗茶褐色である。器面調整は、外面が撫でて、内面は横位の撫てである。17は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が灰色と茶褐色の斑点で、内面が黒茶褐色である。器面調整は、外面が撫でて若干凹凸がみられる。内面は横位の撫てである。18は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が暗灰色と茶褐色の斑点で、内面が黒茶褐色である。器面調整は、外面が撫でて、内面は横位の撫てである。19は厚手の深鉢胴部である。色調は外面が暗灰色と茶褐色の斑点で、内面が黒茶褐色である。器面調整は、外面が撫でて、内面は横位の撫てである。



第53図 I類土器

第9表 I類土器観察表

観号	図番号	取上番号	分類1	分類2	区	器口	器底	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考	
53	1	4722	I		F	79	X	-	撫で	凹凸	茶褐色	灰色	長・石・雲・砂	軟質	
	2	4716			F	79	X	-	指圧痕	撫で	褐色	褐色	長・石・雲・砂	軟質	
	3	4721			F	79	X	-	撫で	撫で	灰茶褐色	灰茶褐色	長・石・雲・砂	普通	
	4	4718			F	79	X	-	撫で	撫で	黒茶褐色	灰茶褐色	長・石・雲・砂	軟質	
	5	4720			F	79	X	-	丁寧な撫で	凹凸	灰茶褐色	灰茶褐色	長・石・雲・砂	軟質	
	6	5234			E	75	X	-			茶褐色	茶褐色	長・石・角・砂	硬質	
	7	4717			F	79	X	-	撫で	凹凸	灰茶褐色	灰茶褐色	長・石・雲・小礫	軟質	
	8	4719			F	79	X	-	撫で	凹凸	灰茶褐色	灰茶褐色	長・石・雲・砂	軟質	
	9	4724			F	79	X	-	丁寧な撫で	撫で	灰茶褐色	茶褐色	長・石・金雲・砂	軟質	
	10	4723			F	79	X	-	筋状	不明	黒茶褐色	茶褐色	長・石・雲・砂	軟質	
	11	8072			I	40	XI	-	撫で	撫で	茶褐色	黒褐色	長・石・雲	硬質	
	12	8071			I	40	XI	-	不明	丁寧な撫で	黒褐色	黒褐色	長・石・雲	硬質	
	13	8062			I	41	X	-			茶褐色	茶褐色	長・石・雲	硬質	
		8070			I	41	XI	-	不明	丁寧な撫で	茶褐色	茶褐色	長・石・雲	硬質	
	14	7571			H	43	X	-	撫で	撫で	茶褐色	灰褐色	長・石・雲	硬質	
	15	7567			H	43	XI	-	撫で	撫で	茶褐色	灰茶褐色	長・石・雲	硬質	
	16	7555			H	43	X	-	撫で	撫で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・雲	硬質	
	17	7553			H	43	X	-	撫で	撫で	茶褐色	黒茶褐色	長・石・雲	硬質	
	18	7544			H	43	X	-	撫で	撫で	暗灰色	黒茶褐色	長・石・雲	硬質	
19	7556	H	43	X	-	撫で	撫で	暗灰色	黒茶褐色	長・石・雲	硬質				



第54図 縄文早期 遺構位置図

## 第6節 縄文時代早期の調査成果

### 1 調査の概要

VIII層～VIa層までを縄文時代早期該当層として調査した。その結果、遺構は竪穴住居跡2軒、竪穴状遺構2基、連穴土坑1基、土坑10基、集石遺構30基、落とし穴13基、磨石集積1基が検出された（第54図）。

遺物は、前葉から後葉までのⅡ類～ⅩⅢ類土器と、石鏃、スクレイパー、磨石・敲石類や石皿等の石器が出土した。

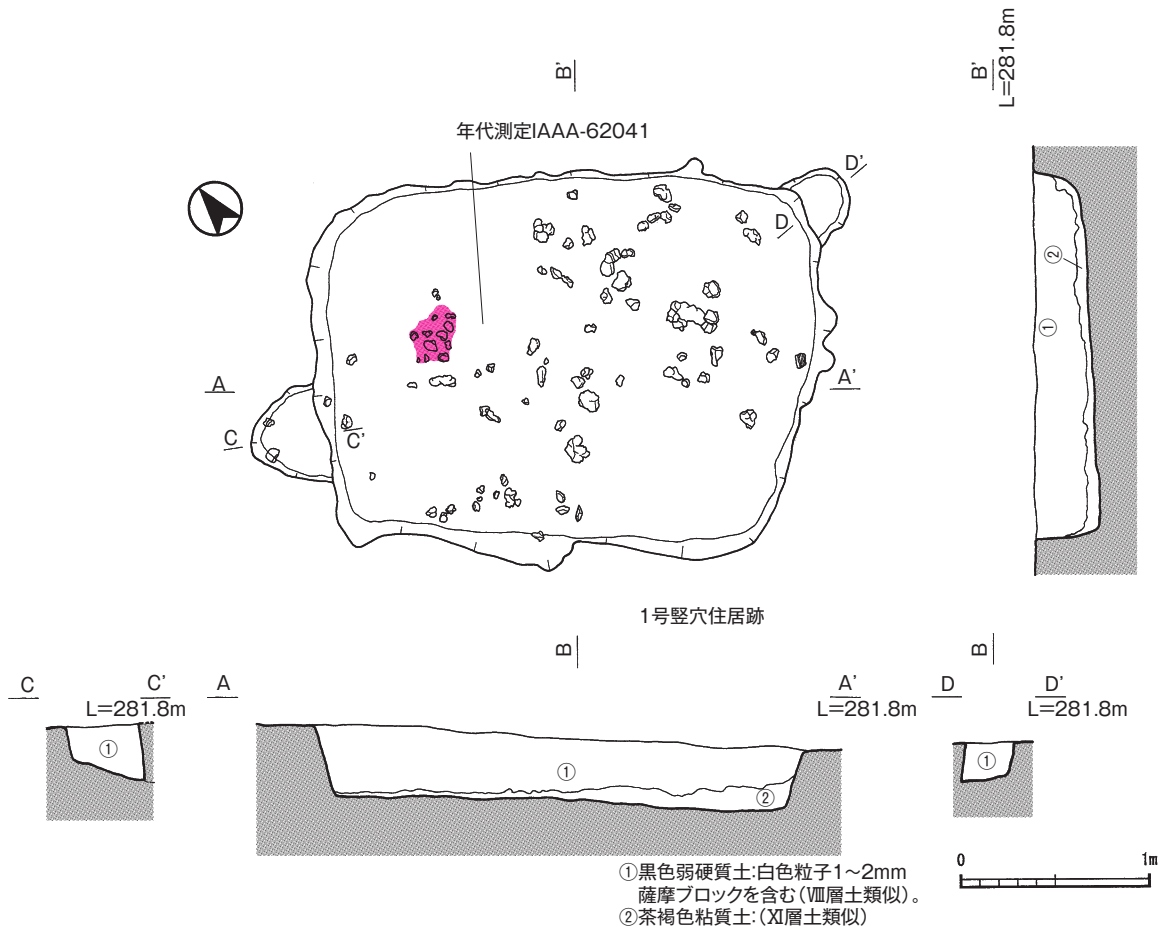
### 2 遺構

#### (1) 竪穴住居跡・竪穴状遺構

竪穴住居跡2軒、竪穴状遺構2基が検出された。柱穴、焼土跡は検出されなかったが、埋土内炭化物の有無及び平面プランの形状によって竪穴住居跡と竪穴状遺構に分けた。

#### 1号竪穴住居跡（第55図）

F-80・81区のⅨ層上面で検出された。平面プランは264cm×196cmの隅丸長方形で、軸線はN-30°-Wである。また、長軸東南側と西北側の一部が突出している。検出面から床面までは約30cmで、壁はほぼ垂直に掘り込み、明瞭に確認できる。主体となる埋土はⅧ層土で、径1～2mmの白色粒子および薩摩火山灰のブロックを含んでいる。なかでも埋土中位から下位にかけて炭化物や薩摩火山灰のブロックが多い。なお、炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、8,960±40(yrBP)である。遺構内からは礫と土器片が数点出土した。



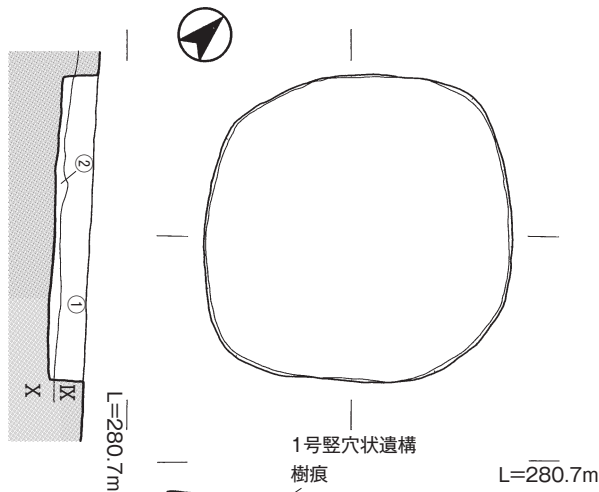
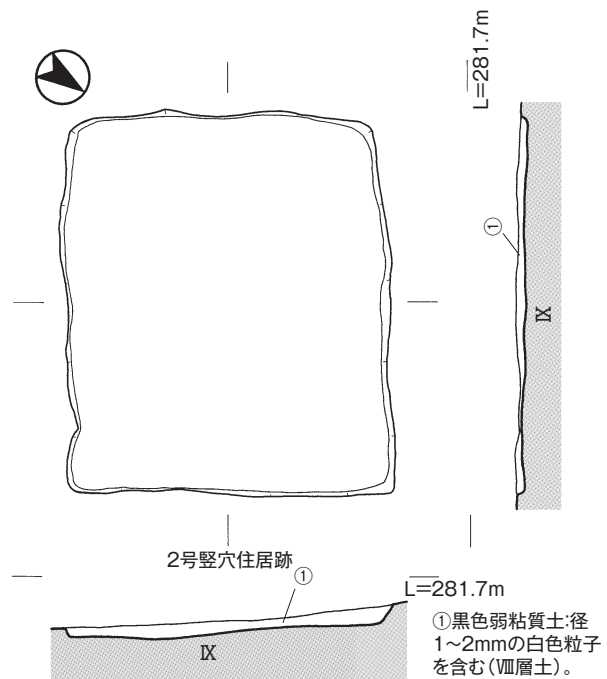
第55図 縄文早期 1号竪穴住居跡



### 2号竖穴住居跡 (第56図)

F・G-80区のIX層上面で検出された。平面プランは200cm×170cmの方形，軸線はN-67°-Eである。検出面から床面までは7cmで，壁はほぼ垂直に掘り込み，明瞭に確認できる。

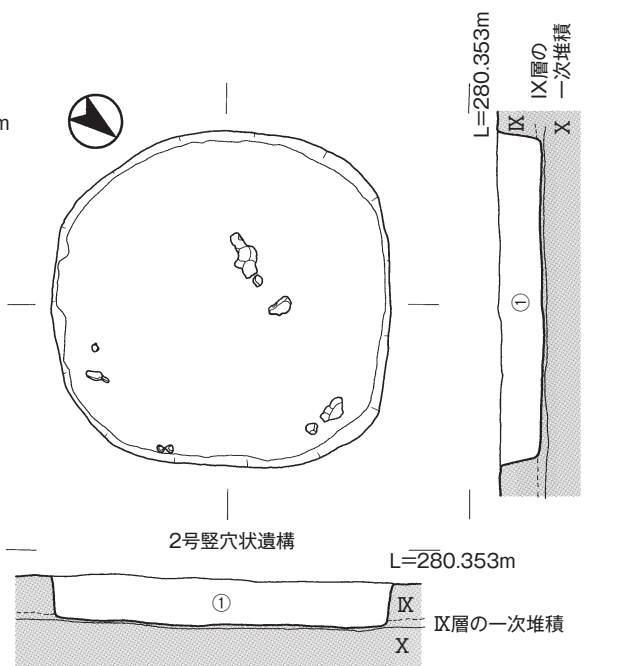
埋土は，径1～2mmの白色粒子を含んだVIII層土である。1号竖穴住居跡と隣接する。



- ① 黒色土(10YR2/1):径1～2cm程度のオレンジ色のパミス(P13)と径1～2mm程度の白いパミスを少量含む。しまりややあり。粘りあり。
- ② 黒色土(10YR1.7/1):①とX層が1:2くらいの割合で混じっているようである。粘質。

### 1号竖穴状遺構 (第56図)

G-40区のIX層上面で検出された。平面プランは162cm×162cmの略円形，軸線はN-30°-Wである。検出面から床面までは18cmで，壁は垂直に掘り込み，明瞭に確認できる。

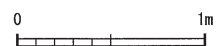


### 2号竖穴状遺構 (第56図)

E・F-75区のIX層上面で検出された。平面プランは180cm×176cmの略円形，軸線はN-63°-Eである。検出面から床面までは25cmで，壁は垂直に掘り込み，明瞭に確認できる。

埋土はVIII層土で，径1～3mmの桜島P13と思われる軽石と薩摩火山灰層のブロックが混在している。遺構内で焼土跡や柱状ピットは検出されなかった。

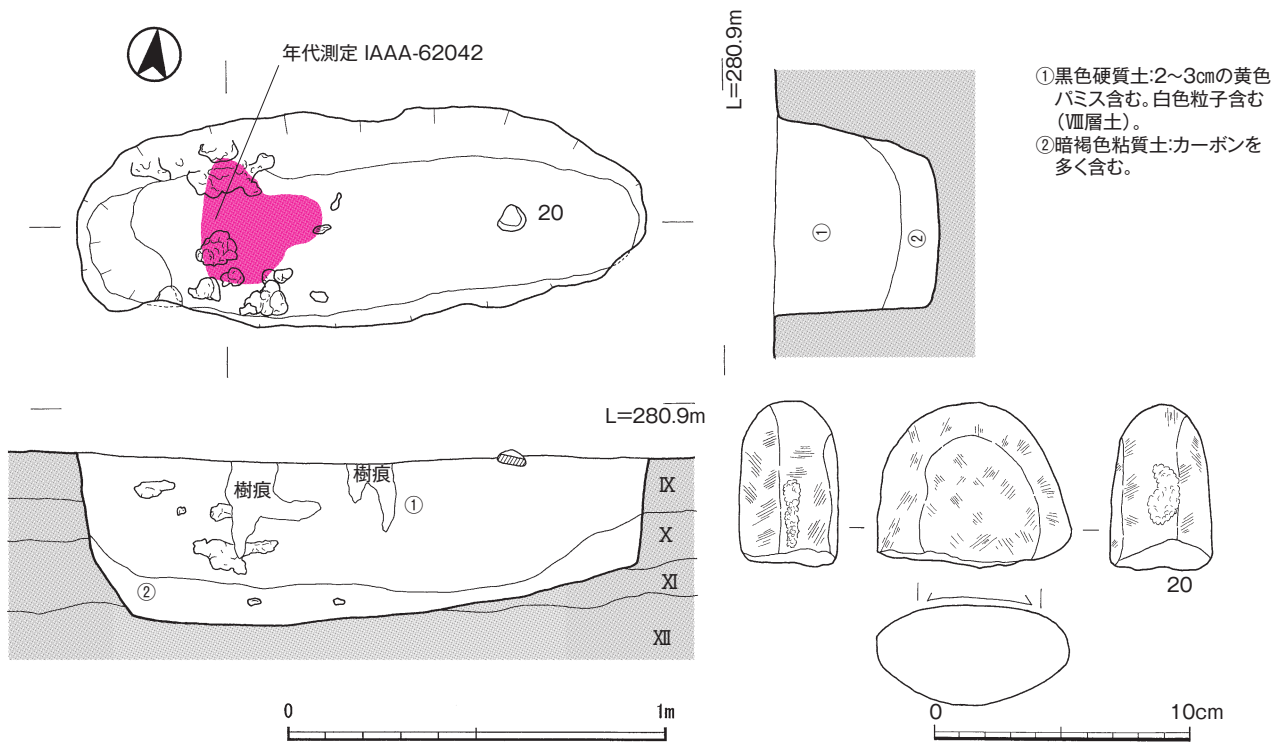
- ① 黒色土:白色粒子を含む(VIII層土)。



第56図 縄文早期 2号竖穴住居跡, 1号・2号竖穴状遺構

(2) 連穴土坑（第57図）

F-78区のIX層上面において連穴土坑（炉穴）を1基検出した。検出面における平面形は長径150cm、短径54cmの楕円形で、検出面からの深さは40cmである。埋土は上位のVIII層該当の黑色硬質土が大部分を占め、底面近くに暗茶褐色粘質土が約10cm堆積している。X層を掘り抜いており、東側はXI層を底面とし、西側はXII層を底面としている。長径はおおよそ東西方向を向いている。連穴土坑のブリッジに相当する部分は薩摩火山灰層で作られたと想定され、おそらく崩落した後、埋土が堆積したため底面付近に薩摩火山灰層がブロック状に存在する。また、検出面より磨石・敲石が1点出土している（第58図）。土坑底面の煙道該当部分手前に微量の炭化物が散在し、側面には焼土跡らしき色の変化がわずかに認められた。この炭化物の放射性炭素年代測定結果は、 $8,950 \pm 40$  (yrBP)であった。また、焼土部分と想定される部分の帯磁率を測定したところ、周囲よりも高い測定値が得られた。



第57図 縄文早期 連穴土坑

第58図 縄文早期 連穴土坑内出土石器

第10表 縄文早期 連穴土坑計測表

挿図番号	番号	検出区	検出面	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
57	-	F-78	IX層	150	54	40	年代測定

第11表 縄文早期 連穴土坑内出土石器観察表

挿図番号	図番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
58	20	4218	磨石・敲石	砂岩	6.5	7.7	4.0	280.0	

### (3) 土坑

#### 1号土坑（第59図）

H-27区のⅨ層で検出された。平面プランは長辺118cm，短辺51cmの長形状で，長辺西側の一部が突出している。検出面からの深さは51cmである。

#### 2号土坑（第59図）

F-40区のⅨ層で検出された。平面プランは長径116cm，短径75cmの楕円形で，検出面からの深さは53cmである。南北方向に長径をもつ。長径の西北側に1か所と南側に2か所小穴がみられる。小穴の深さはそれぞれ50cm，5cm，40cmである。また，遺構内には薩摩火山灰層のブロックが入り込んでいる。

#### 3号土坑（第60図）

G-48区のⅨ層の傾斜面で検出された。平面プランは長辺87cm，短辺73cmの方形で，検出面からの深さは49cmである。底面は西側に傾斜し，長辺東側に深さ85cmの小穴がみられる。平面プランがはっきりしており，人為的に掘られた可能性が高い。

#### 4号土坑（第60図）

G-49区のⅨ層で検出された。平面プランは長径108cm，短径54cmの楕円形で，検出面からの深さは73cmである。掘り込み形状はバケツ状で，底面は南側に傾斜している。279mのコンターライン上の傾斜地に掘られ，南北方向に長径をもつ。本遺構の近くには落とし穴があり，落とし穴の可能性も考えられる。

#### 5号土坑（第61図）

G・H-71区のⅦ層で検出された。平面プランは長径207cm，短径100cmの楕円形で，検出面からの深さ47cmである。埋土はⅥb層が主体である。

#### 6号土坑（第61図）

F-77区のⅨ層で検出された。平面プランは長径105cm，短径96cmの円形で，検出面からの深さは13cmである。底面は平坦面をなしている。

#### 7号土坑（第61図）

G-80区のⅨ層で検出された。平面プランは長軸126cm，短軸32cmの不定形で，検出面からの深さは18cmである。底面は平坦面をなしている。長軸南西側に深さ11cmの小穴がみられる。

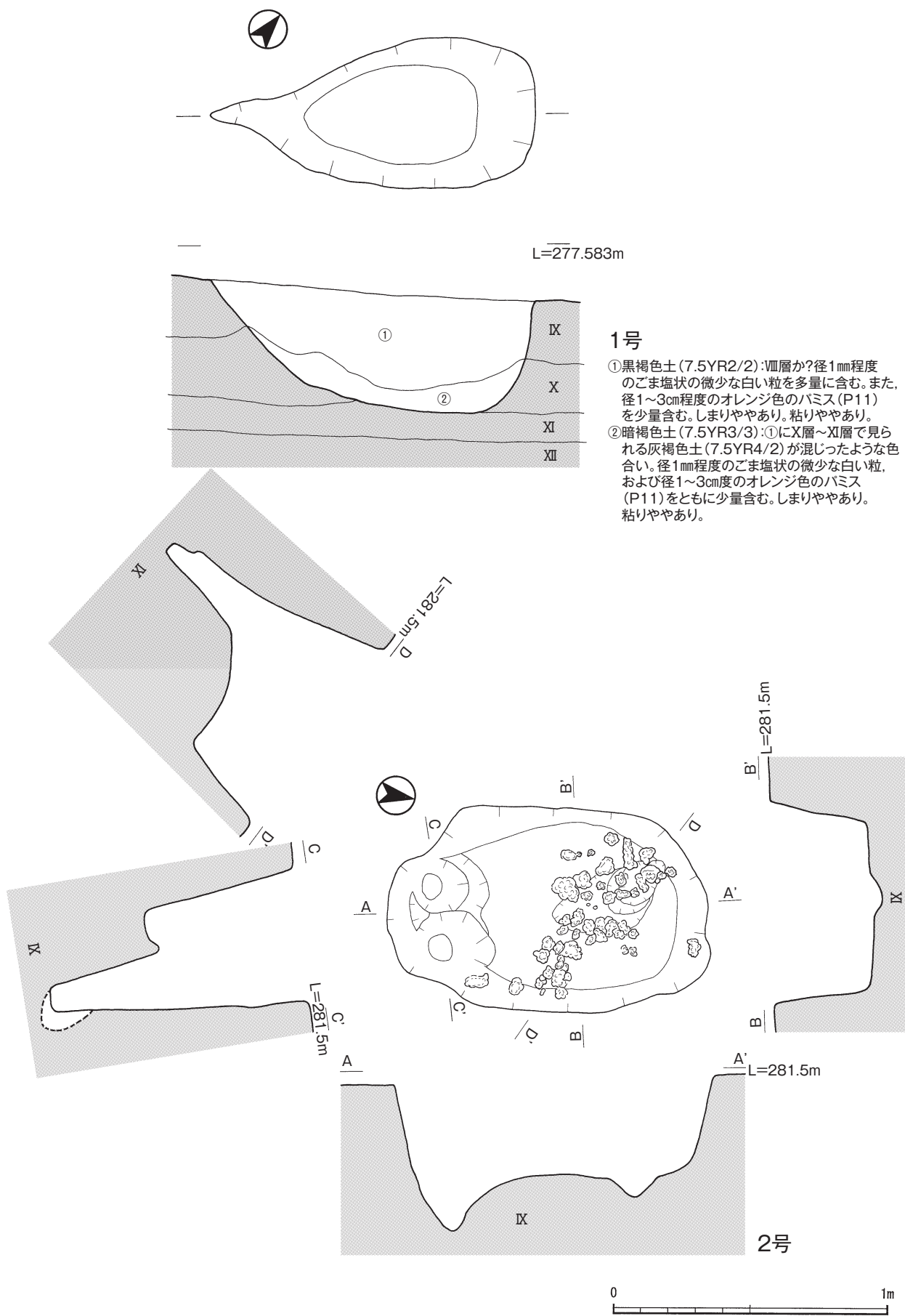
なお，7号から9号土坑は1号竪穴住居跡と切り合っている。しかし，埋土の違いから3基の土坑の方が1号竪穴住居跡より古いと判断した。

#### 8号土坑（第62図）

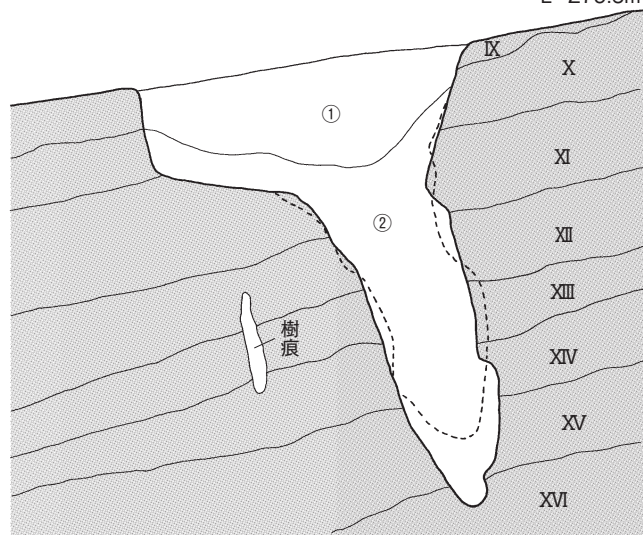
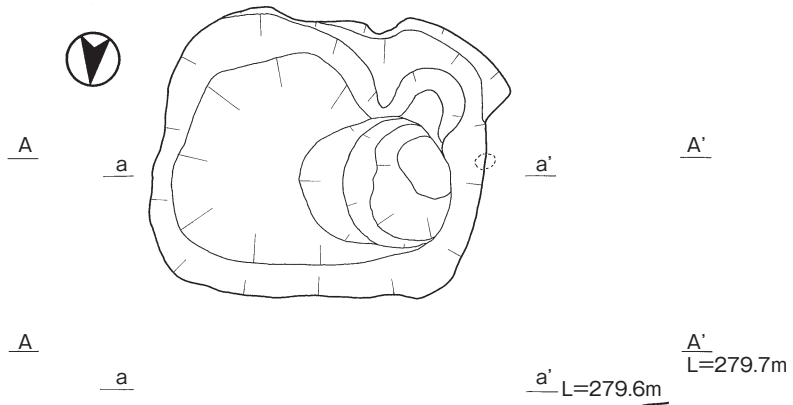
F・G-80区のⅨ層で検出された。平面プランは長軸117cm，短軸48cm，58cmの不定形で，検出面からの深さは26cmである。底面は平坦面をなしている。9号土坑と切り合う。

#### 9号土坑（第62図）

F・G-80区のⅨ層で検出された。平面プランは長辺69cm，短辺68cmの正形状で，検出面からの深さは32cmである。底面は平坦で掘り込み壁はほぼ垂直に立ち上がる。

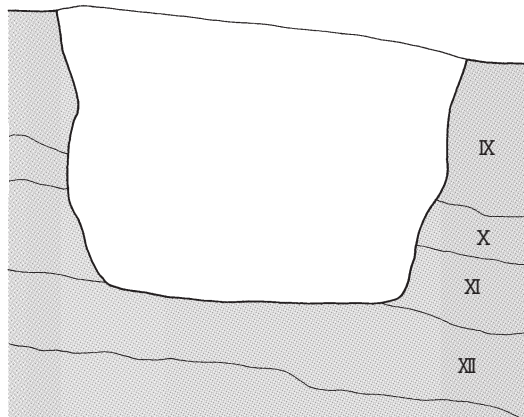
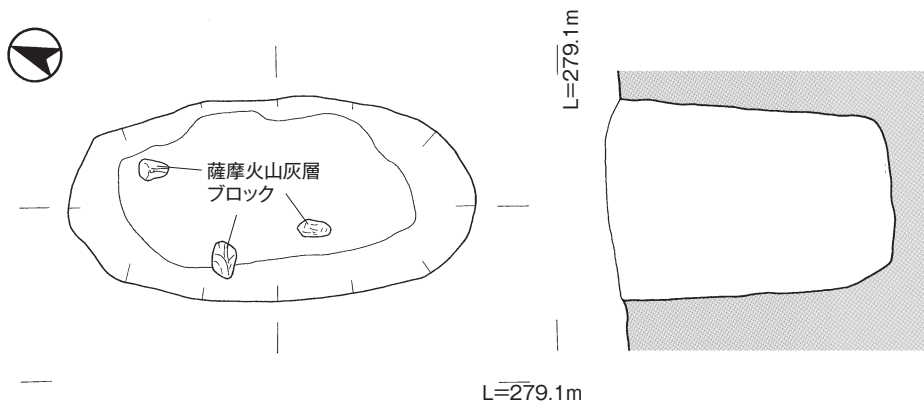


第59図 縄文早期 1号, 2号土坑



**3号**

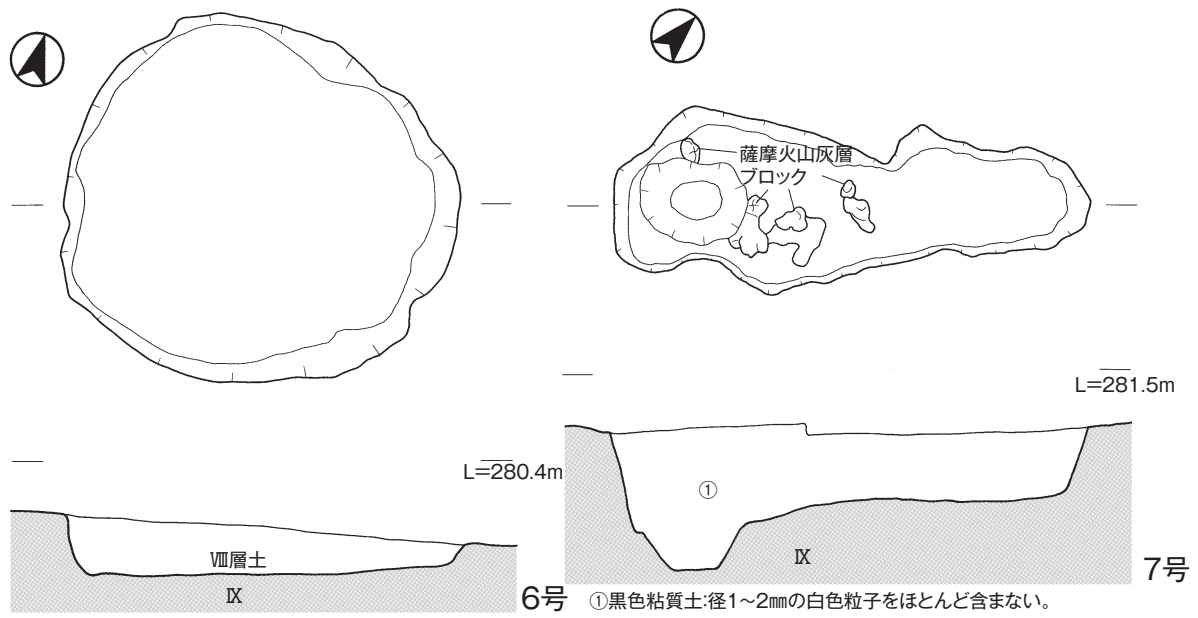
- ① 黒色土:白粒やや少なめ(VII層土)。
- ② ①より薄い黒色土:IX層土が混入した色。



**4号**

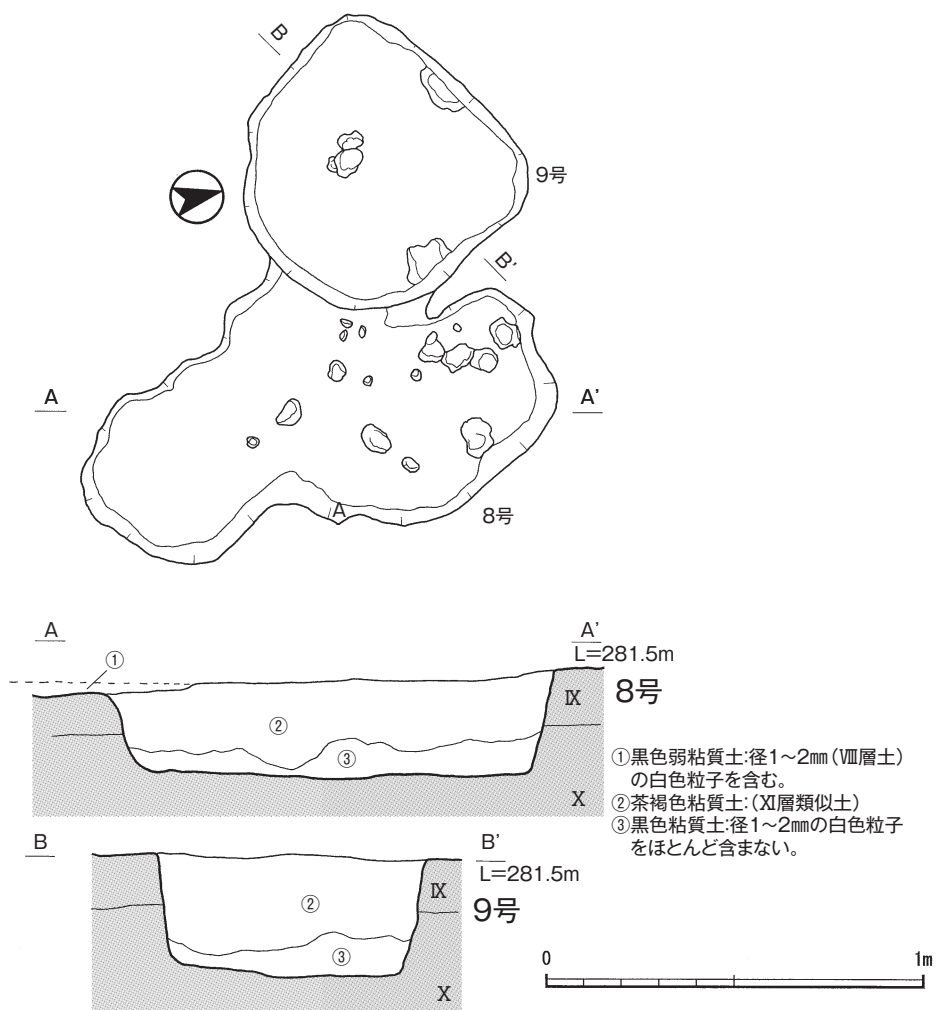


第60図 縄文早期 3号, 4号土坑



① 黒色粘質土 径1~2mmの白色粒子をほとんど含まない。

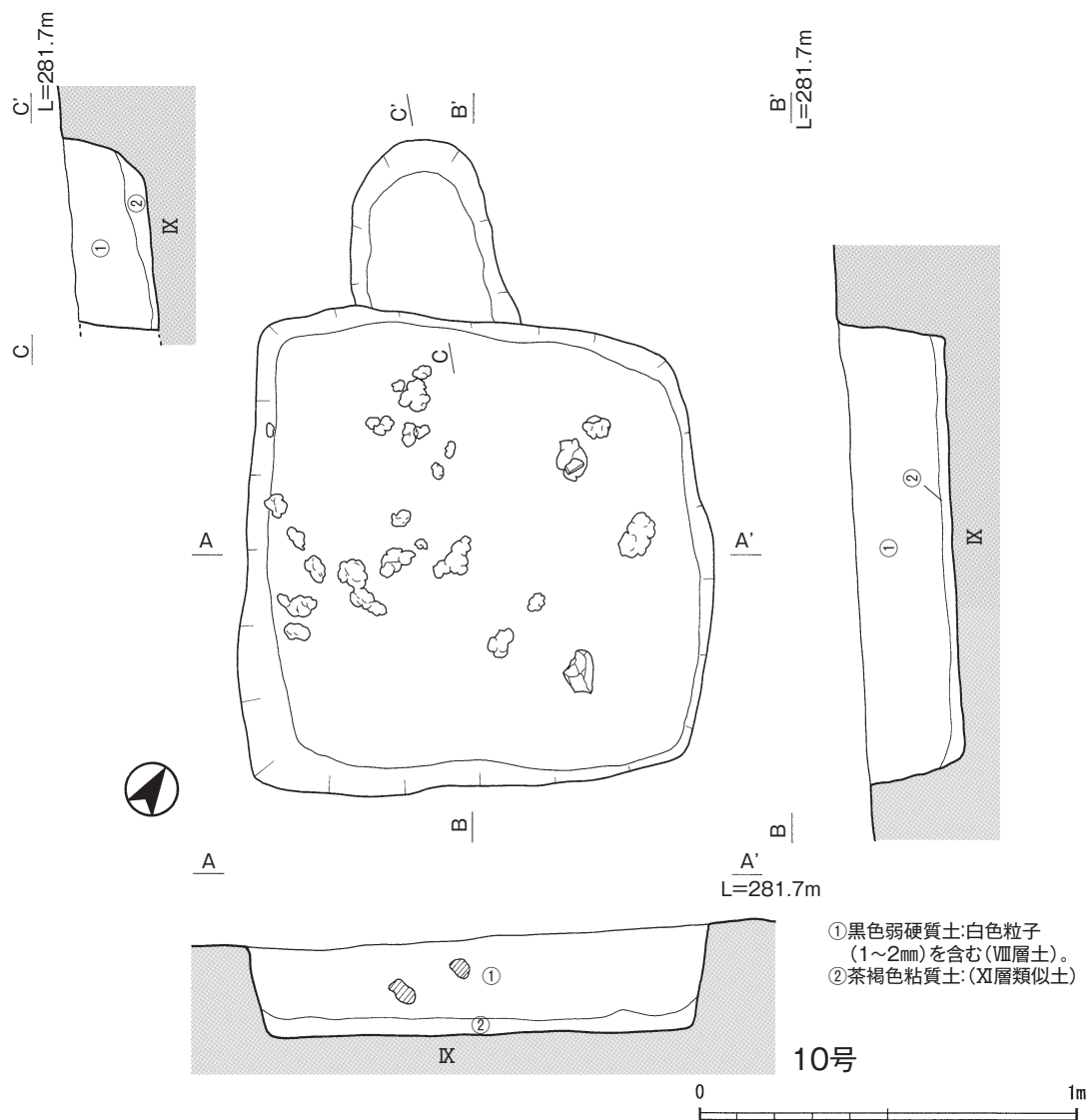
第61図 縄文早期 5号~7号土坑



第62図 縄文早期 8号, 9号土坑

10号土坑 (第63図)

G-81区のⅨ層で検出された。平面プランは長辺124cm, 短辺122cmの正方形状で, 検出面からの深さは26cmである。また, 短辺北側の一部が突出している。底面は平坦面をなしている。埋土中より礫1点と落ち込みと思われる土師甕1点が出土した。他は薩摩火山灰層のブロックを図化した。炭化物はほとんど無く, 床面付近の硬化面, 焼土跡, 柱穴跡などは確認できなかった。



第63図 縄文早期 10号土坑

第12表 縄文早期 土坑計測表

挿図番号	番号	検出区	検出面	長辺・長径・長軸(cm)	短辺・短径・短軸(cm)	深さ(cm)	備考
59	1	H-27	IX層	118	51	51	
	2	F-40	IX層	116	75	37	
60	3	G-48	IX層	87	73	35	
	4	G-49	IX層	108	54	73	
61	5	G・H-71	VII層	207	100	47	
	6	F-77	IX層	105	96	13	
	7	G-80	IX層	126	32	18	
62	8	F・G-80	IX層	117	48,58	26	
	9	F・G-80	IX層	69	68	32	
63	10	G-81	IX層	124	122	26	



#### (4) 集石遺構

30基検出された。形態等により以下のように分類した。

**I 類集石遺構**：掘り込みを伴い、礫の詰まり方で2類に細分した。

- ・ I a類（掘り込みを伴い、礫が多い）
- ・ I b類（掘り込みを伴い、礫が少ない）

**II 類集石遺構**：掘り込みは確認されない。礫のみで構成され、礫の残存状況からII類に細分した。

- ・ II a類（礫が集中する）
- ・ II b類（散礫状態）

##### 1号集石（I b類）（第64図）

G-5区のVII層で検出された。107cm×106cmの範囲に安山岩9個、頁岩6個、砂岩2個の計17個の礫が散在している。中央部にVII層とVIII層の混土層の入った深さ9cm掘り込みが確認できる。

##### 2号集石（II b類）（第64図）

H-7区のVIII層で検出された。88cm×62cmの範囲に安山岩7個、頁岩1個、砂岩2個の計10個の礫が散在している。礫の大きさは小～中型で被熱している。

##### 3号集石（II b類）（第64図）

H-7区のVII層で検出された。247cm×175cmの範囲に礫が散在している。

##### 4号集石（II b類）（第65図）

I-6区のVII層で検出された。172cm×108cmの範囲に安山岩9個の礫が散在している。

##### 5号集石（II b類）（第65図）

I-6区のVIII層で検出された。156cm×52cmの範囲に安山岩17個の礫が散在している。

##### 6号集石（II b類）（第65図）

G-8区のVII層で検出された。187cm×186cmの範囲に礫が散在している。

##### 7号集石（II a類）（第66図）

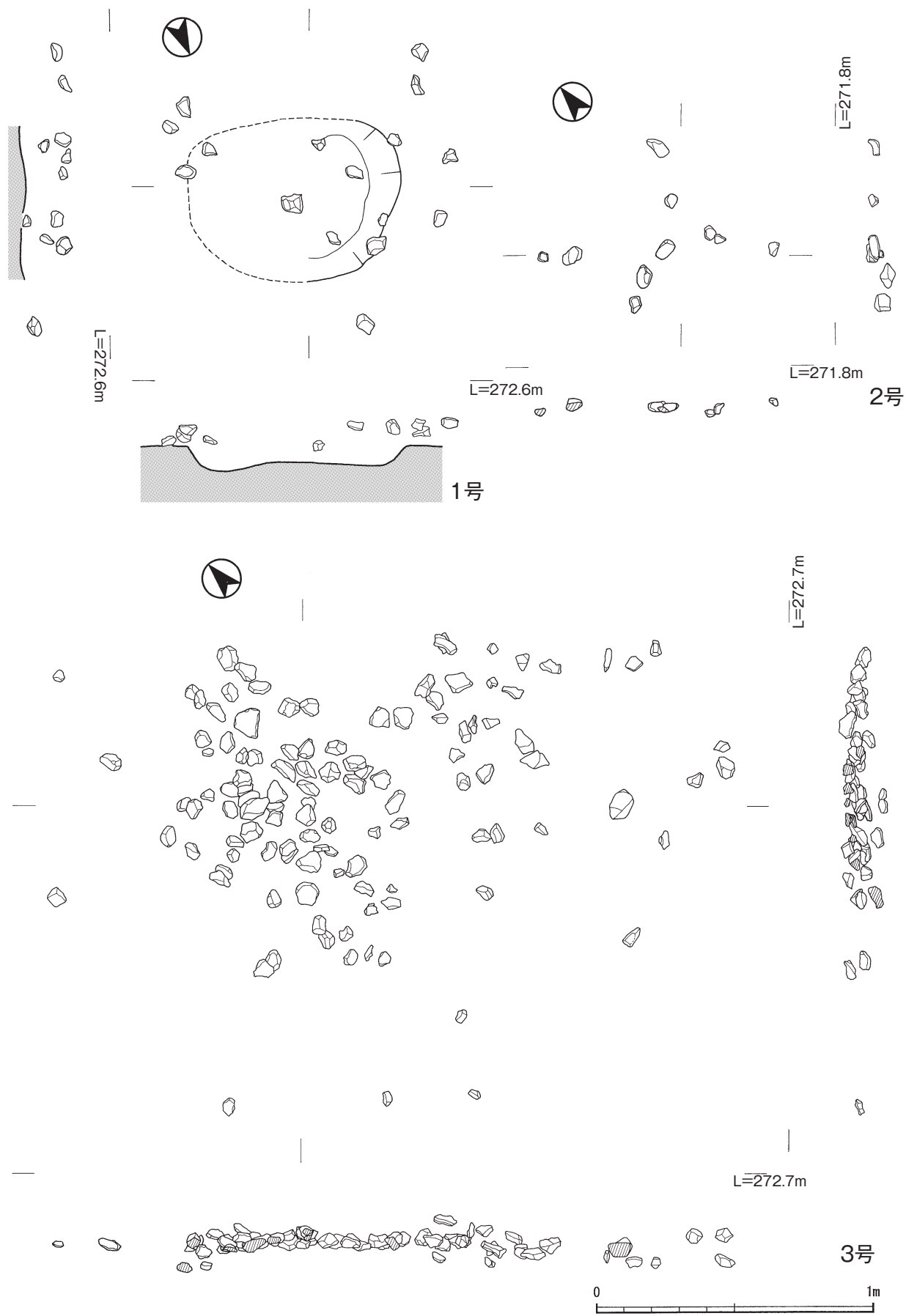
H-17区のVII層で検出された。127cm×75cmの範囲に安山岩56個、頁岩ほか7個の計63個の礫が集中している。礫の多くは被熱している。遺構内から土器片1点、石皿1点が出土した（第67図）。

##### 8号集石（II a類）（第66図）

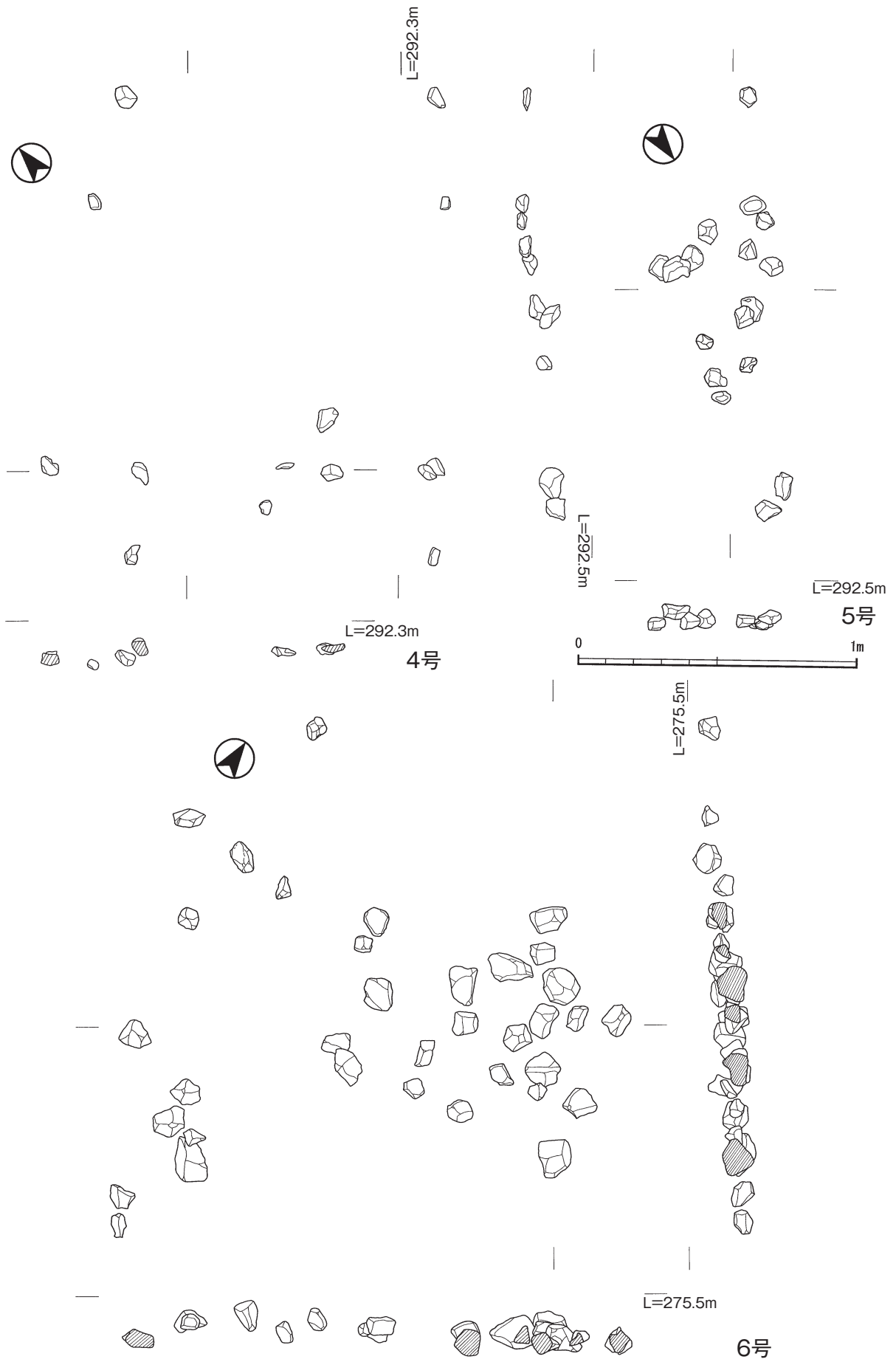
H-24区で検出された。95cm×60cmの範囲に安山岩56個、頁岩5個の計61個の礫が集中している。掘り込みは確認できなかった。

##### 9号集石（II b類）（第66図）

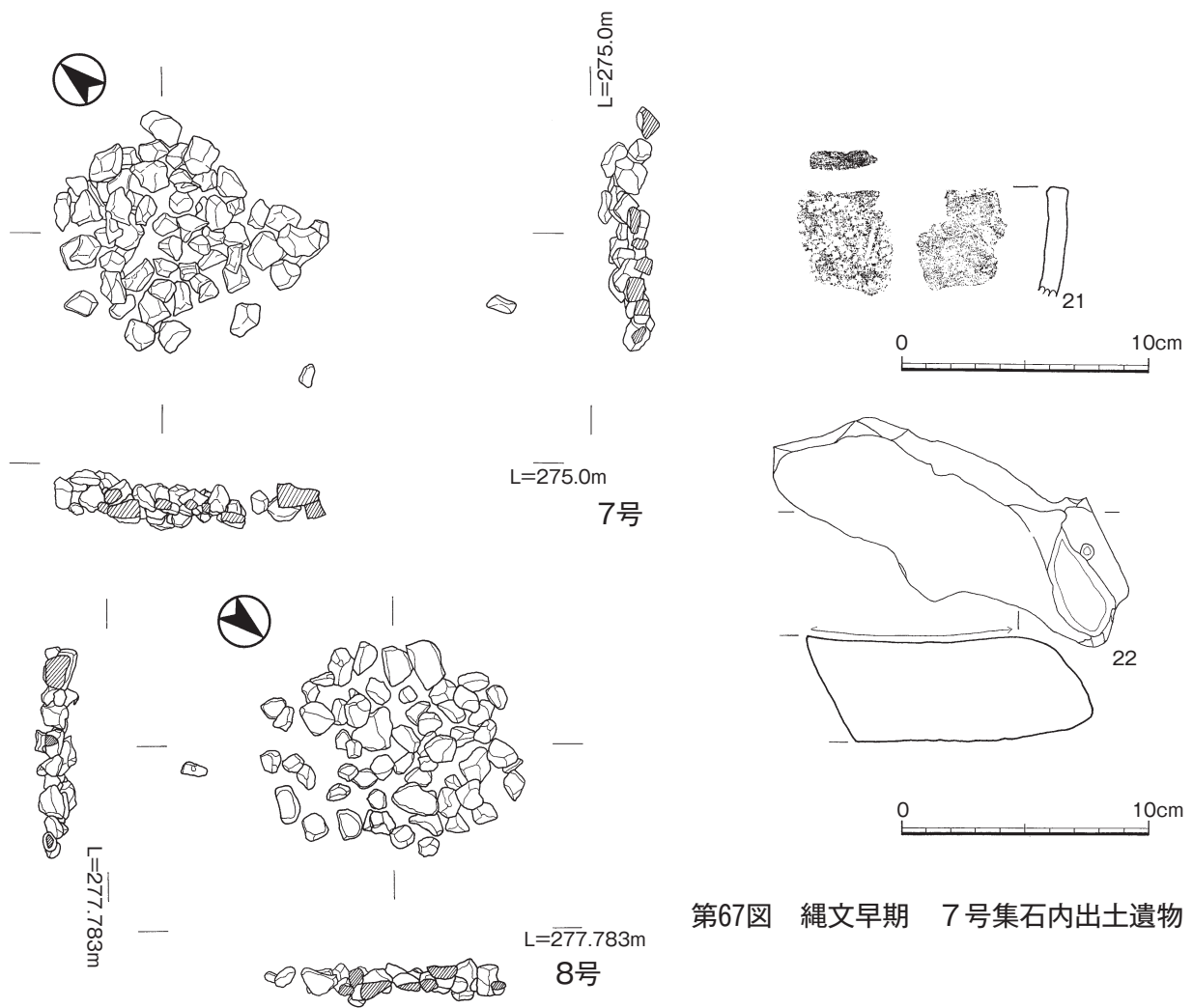
H-28区のVII層で検出された。145cm×110cmの範囲に安山岩8個、頁岩4個、砂岩ほか3個の計15個の礫が散在している。長軸南側に落ち込みがみられるが、遺構の掘り込みかどうかは不明である。



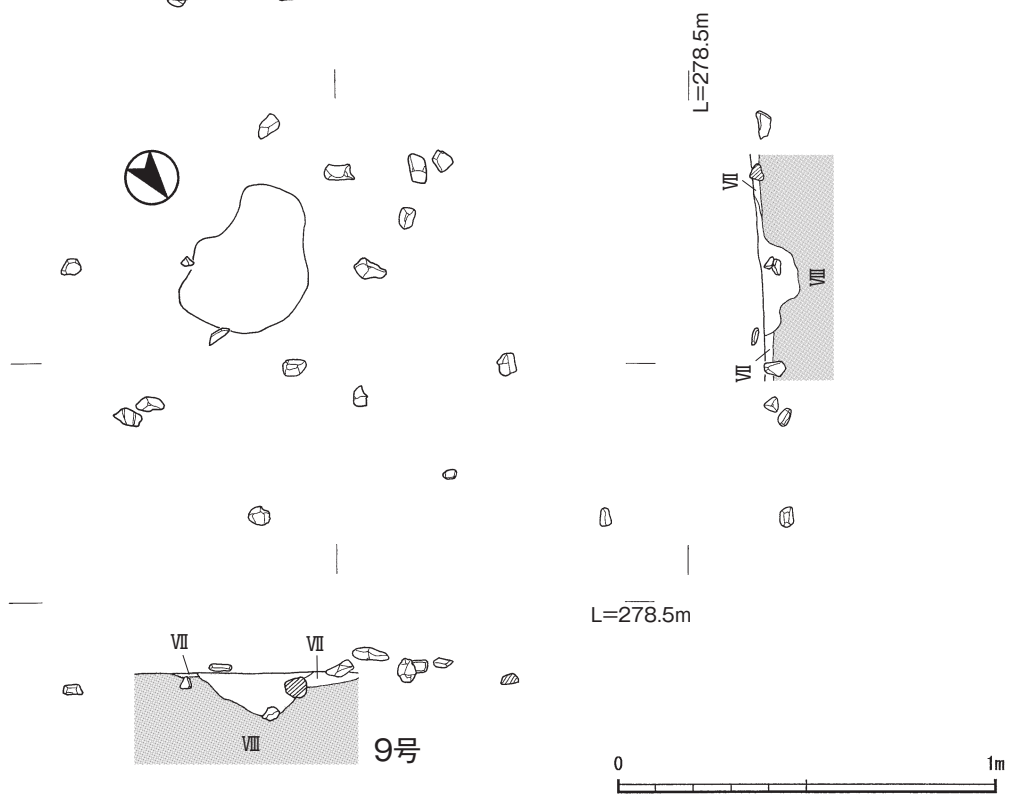
第64図 縄文早期 1号~3号集石



第65図 縄文早期 4号~6号集石



第67図 縄文早期 7号集石内出土遺物



第66図 縄文早期 7号~9号集石

第13表 7号集石内出土土器観察表

挿図番号	図番号	分類	器種	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考
67	21	VIIc	深鉢	撫糸文	撫で	茶褐色	茶褐色	長・石・金雲・砂	硬質	

第14表 7号集石内出土石器観察表

挿図番号	図番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
67	22	108.18	石皿	安山岩	9.5	14.6	4.4	610.0	

**10号集石(Ⅱb類)(第68図)**

F-31区のⅦ層で検出された。197cm×120cmの範囲に安山岩10個、砂岩6個の計16個の礫が散在している。礫は拳大よりやや小さめのものが多い。被熱しているが、激しく赤化したり破碎したりした様子はみられない。

**11号集石(Ⅰa類)(第68図)**

F-32区のⅨ層で検出された。長径122cm、短径121cm、礫上面から深さ32cmのほぼ円形の掘り込みが確認できた。礫は掘り込み内に集中して、掘り込み底面には炭化物が多く出土した。

**12号集石(Ⅱb類)(第69図)**

I-32区のⅦ層で検出された。306cm×242cmの範囲に安山岩27個、頁岩7個、砂岩6個の計40個の礫が散在している。礫は全て被熱しているが、掘り込みや焼土跡、炭化物は確認できなかった。

**13号集石(Ⅱb類)(第70図)**

H-40区のⅦ層で検出された。194cm×150cmの範囲に安山岩21個、頁岩2個、砂岩3個の計26個の礫が散在している。礫の多くは被熱している。

**14号集石(Ⅱa類)(第70図)**

I-41区のⅦ層で検出された。111cm×104cmの範囲に礫が集中している。遺構の近くに横転の痕跡があるため、影響を受けている可能性がある。炭化物も少々出土した。

**15号集石(Ⅱa類)(第70図)**

H-43区で検出された。43cm×32cmの範囲に安山岩4個、砂岩1個の計5個の礫が集中している。

**16号集石(Ⅱb類)(第71図)**

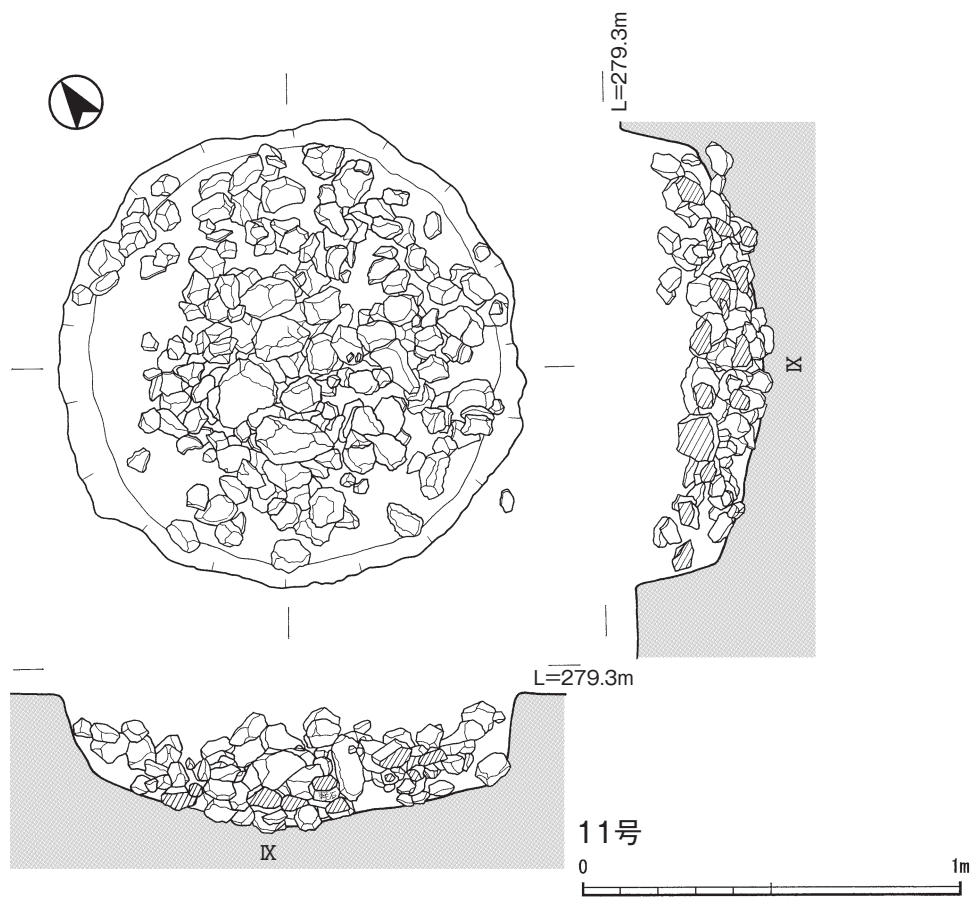
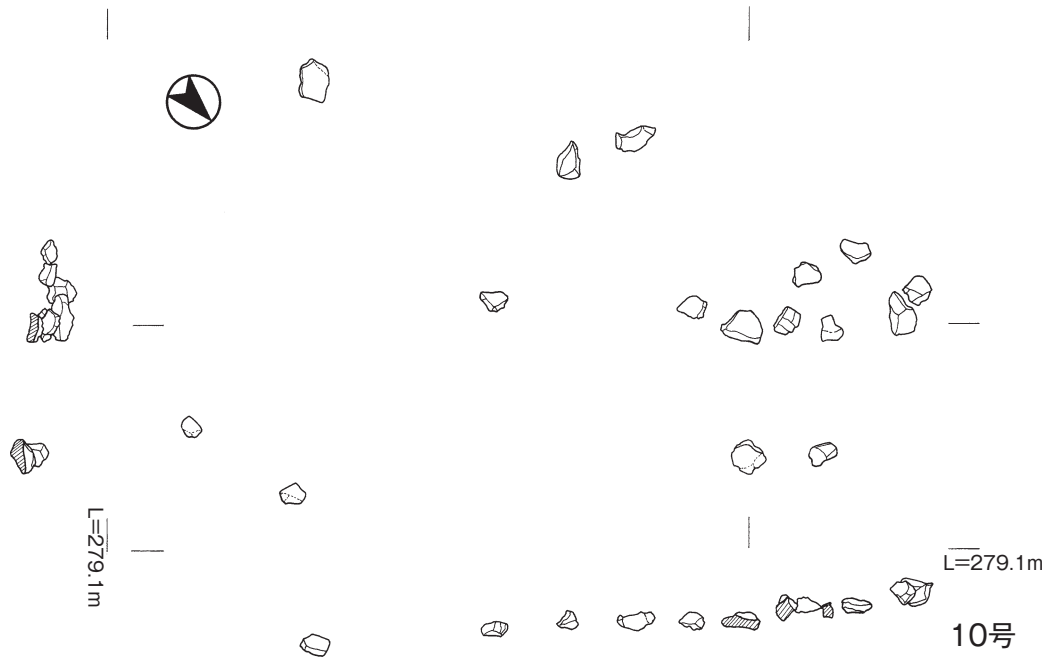
G-42区のⅦ層で検出された。215cm×155cmの範囲に安山岩25個、砂岩3個の計28個の礫が散在している。遺構の近くには樹痕や横転の箇所が多くみられた。

**17号集石(Ⅱb類)(第71図)**

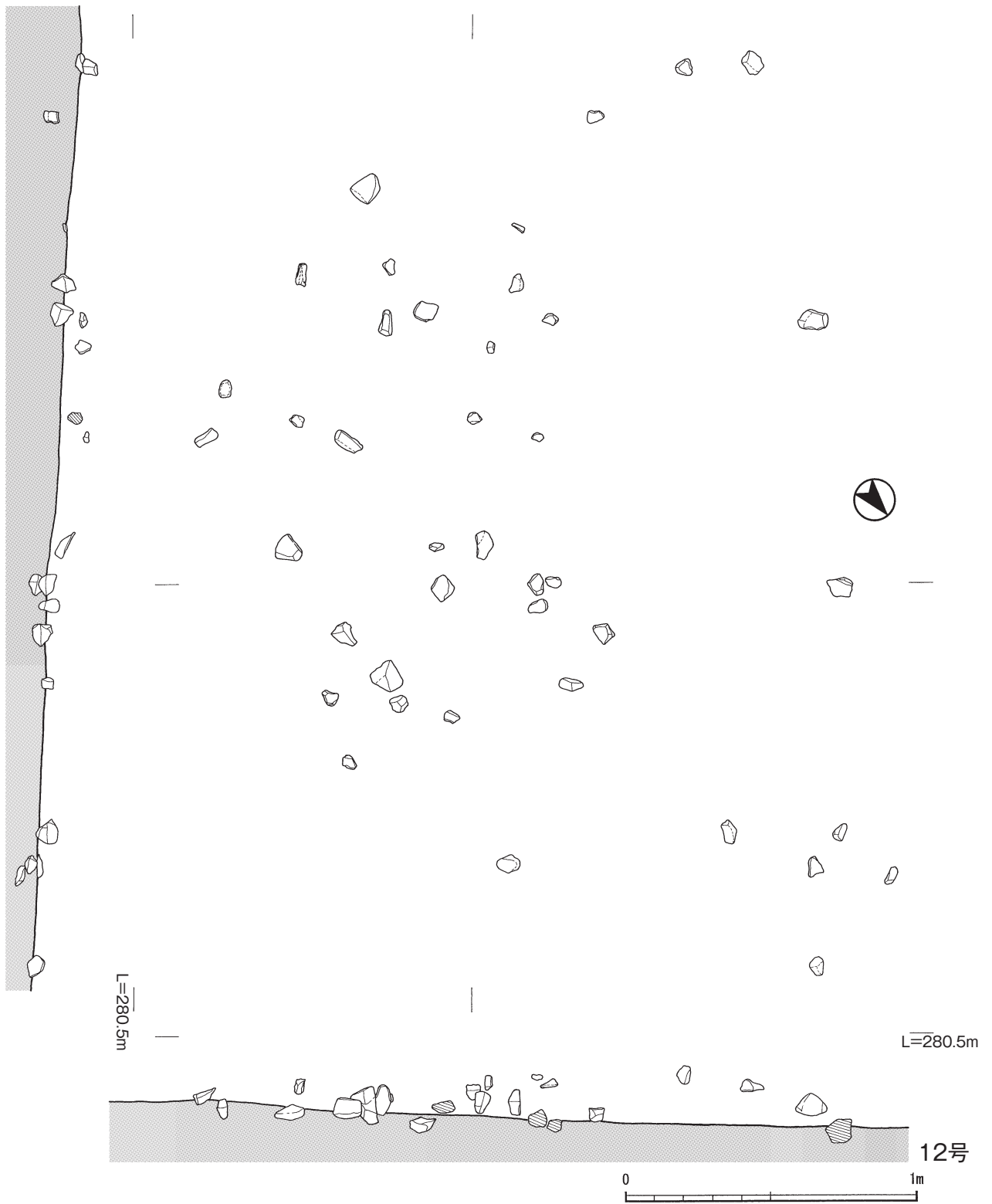
H-43区のⅦ層で検出された。165cm×161cmの範囲に安山岩26個、頁岩1個、砂岩1個の計28個の礫が散在している。

**18号集石(Ⅱb類)(第72図)**

H-42区のⅦ層で検出された。246cm×191cmの範囲に安山岩15個、頁岩5個、砂岩12個の計32個の礫が緩やかな傾斜地に散在している。



第68図 縄文早期 10号, 11号集石

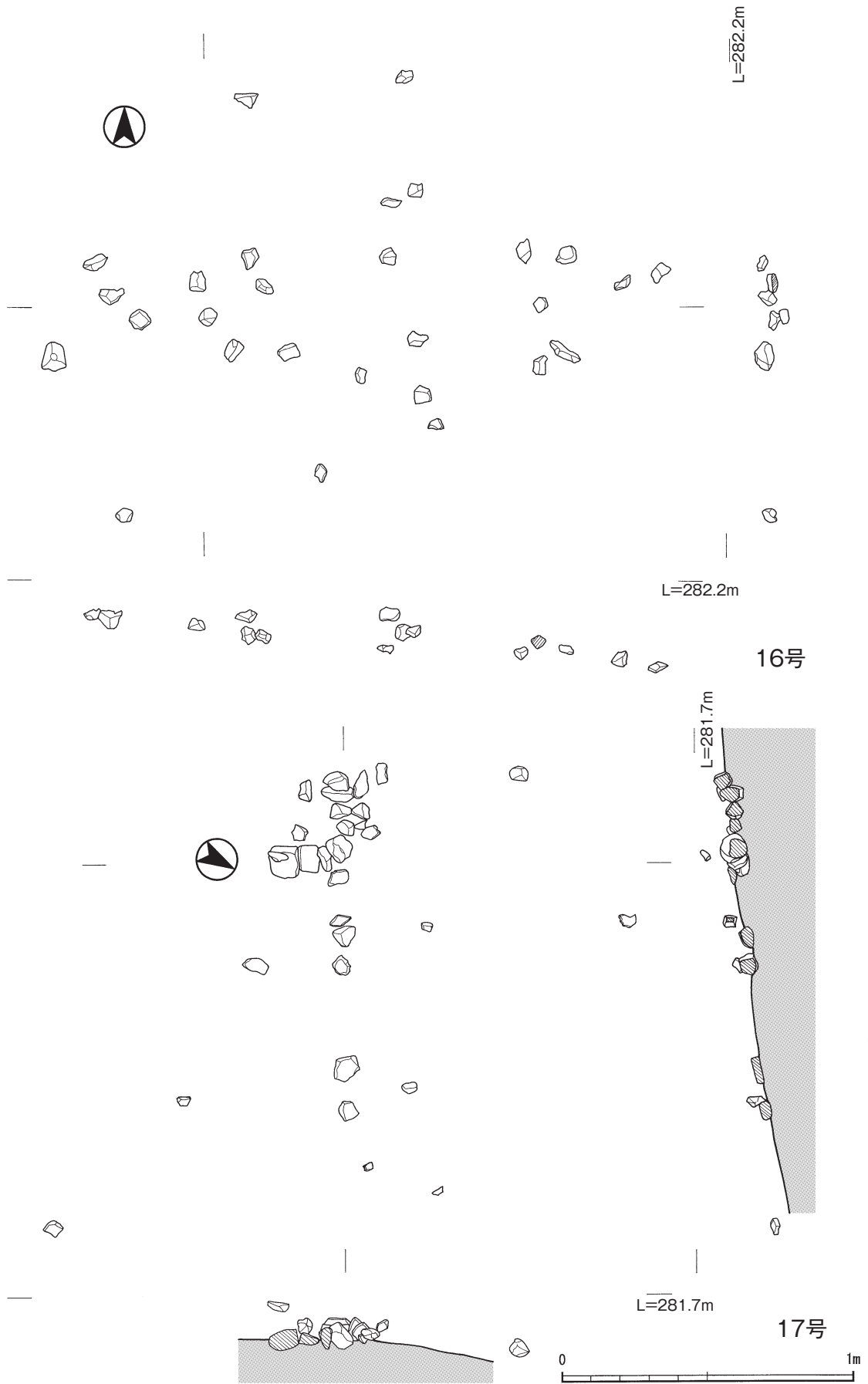


第69図 縄文早期 12号集石

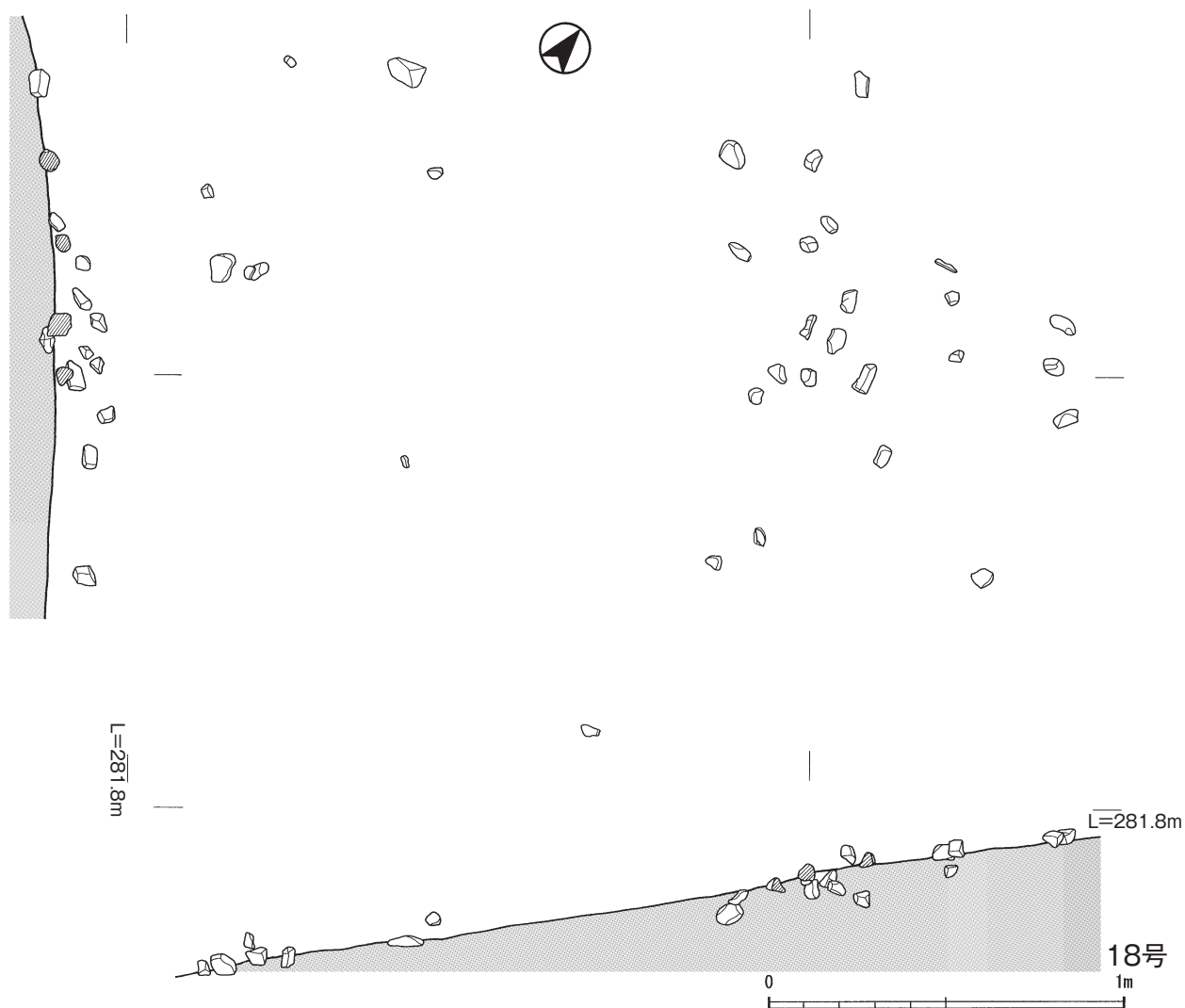


第70図 縄文早期 13号~15号集石





第71図 縄文早期 16号, 17号集石



第72図 縄文早期 18号集石

**19号集石（Ⅱb類）（第73図）**

G-51区のⅦ層で検出された。210cm×144cmの範囲に礫が散在している。被熱や破碎した礫は少ない。掘り込み、焼土跡、炭化物は確認されなかった。

**20号集石（Ⅰa類）（第73図）**

G-51区のⅥa層で検出された。70cm×50cmの範囲内に長径42cm，短径36cm，礫上面から深さが21cmのほぼ円形の掘り込みが確認できた。礫は被熱による赤化と破碎がみられるが，炭化物の出土は少ない。

### 21号集石（Ⅱa類）（第73図）

G-51区のⅦ層で検出された。26cm×15cmの範囲に4個の角礫で構成されている。うち2個は赤化を確認できた。掘り込み、焼土跡、炭化物は確認されなかった。

### 22号集石（Ⅱb類）（第73図）

E-62区のⅦ層で検出された。73cm×72cmの範囲に20個の礫が散在している。

### 23号集石（Ⅱb類）（第74図）

G-67区のⅥa層で検出された。186cm×115cmの範囲に拳大の角礫が約30個散在している。

### 24号集石（Ⅱb類）（第74図）

G-69区のⅦ層で検出された。185cm×112cmの範囲に34個の礫が全体的に散在している。礫の一部に被熱や破碎したものがみられた。

### 25号集石（Ⅱa類）（第75図）

D-75区の25トレンチ内のⅧ層で検出された。65cm×55cmの範囲に拳大の安山岩の礫が30個ほど集中している。掘り込みは確認されなかった。遺構内東側に円筒形土器の底部が出土した（第76図）。厚手の土器で底部は平底である。器面調整は外面・底面ともに丁寧な撫で調整で、内面は粗い。器面には貼り付け部分がみられる。

### 26号集石（Ⅱb類）（第75図）

D-75区の25トレンチ内のⅦ層で検出された。93cm×82cmの範囲に25個の礫が散在している。北東側約2mに25号集石が検出した。礫の多くは安山岩で5cm以下の大きさである。

### 27号集石（Ⅱb類）（第75図）

D-76区のⅦ層で検出された。130cm×110cmの範囲に18個の礫が散在している。

### 28号集石（Ⅱb類）（第75図）

F-78区のⅦ層で検出された。115cm×104cmの範囲に22個の礫が散在している。

### 29号集石（Ⅰa類）（第78図）

F-80区のⅦ層で検出された。227cm×178cmの範囲の中央部に礫が密集している。長径110cm、礫上面から深さ25cmの掘り込みが確認できた。遺構内からは礫器が1点出土した（第77図）。また、炭化物が約120cm×約100cmの範囲で散在している。なお、炭化物の放射性炭素年代測定の結果は、8,780±40（yrBP）である。

### 30号集石（Ⅱb類）（第78図）

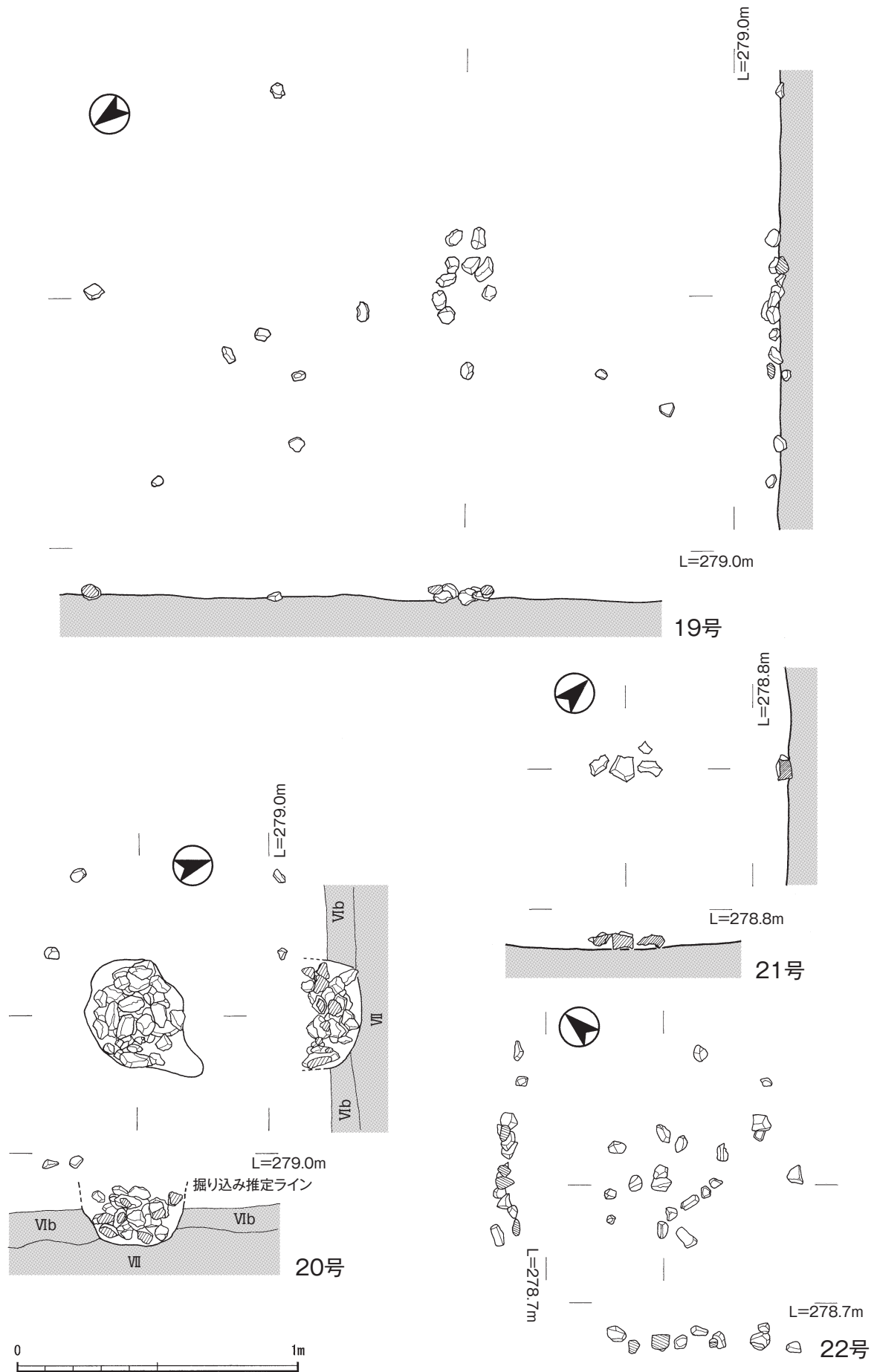
E-76区のⅦ層で検出された。140cm×88cmの範囲に16個の礫が散在している。

第15表 25号集石内出土土器観察表

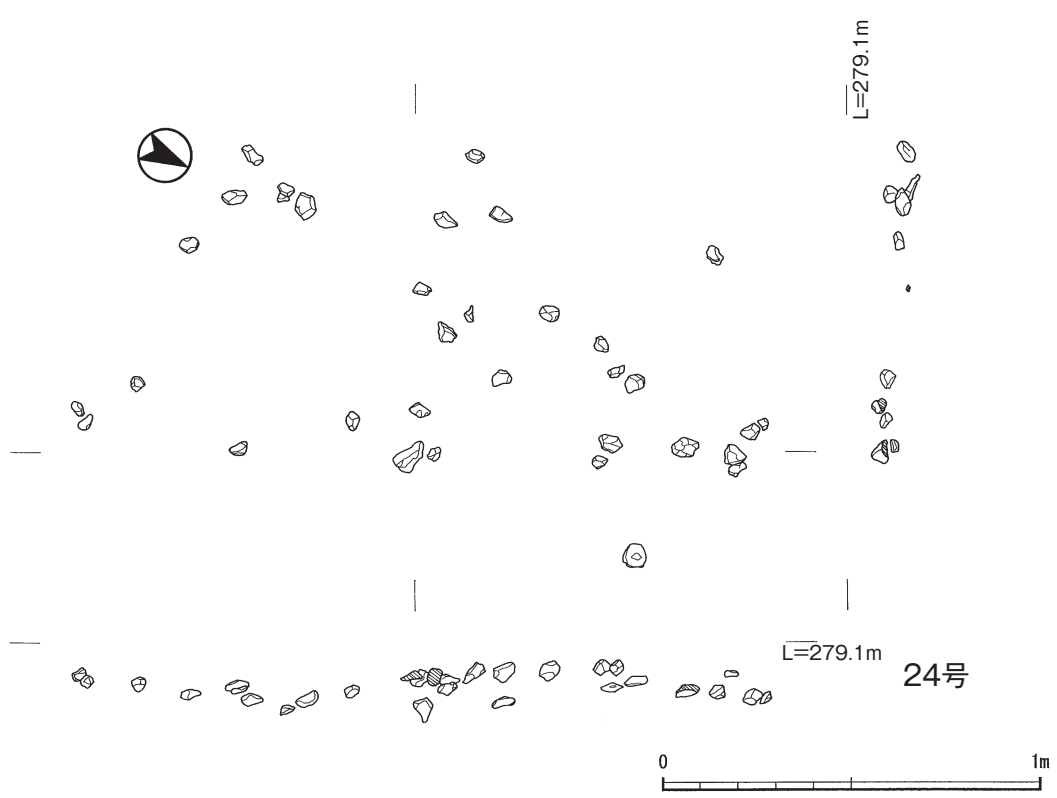
挿図番号	図番号	分類	器種	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考
76	23	Ⅱa	深鉢	丁寧な撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質	底径14.0cm

第16表 29号集石内出土石器観察表

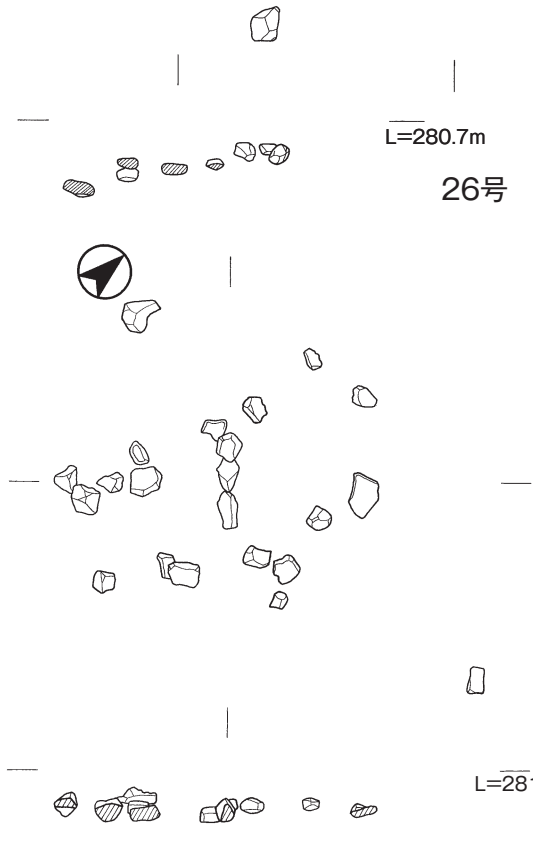
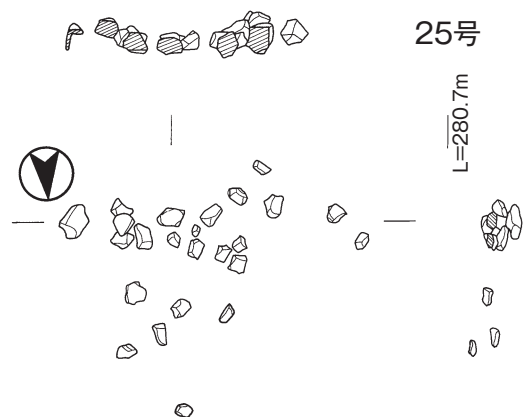
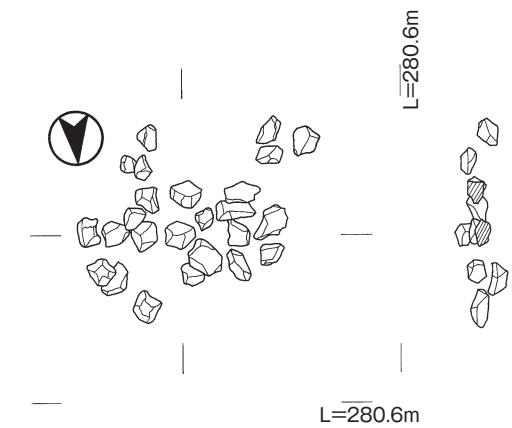
挿図番号	図番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
77	24	4860	礫器	安山岩	8.7	8.6	3.8	250.0	



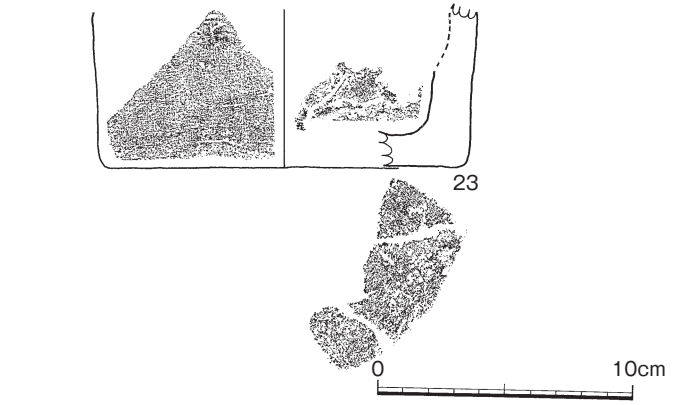
第73図 縄文早期 19号~22号集石



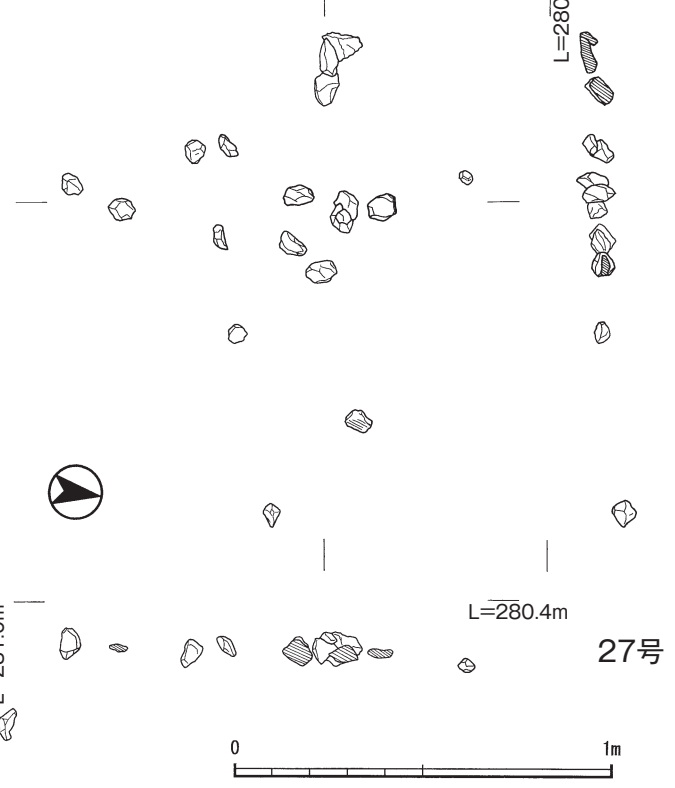
第74図 縄文早期 23号, 24号集石



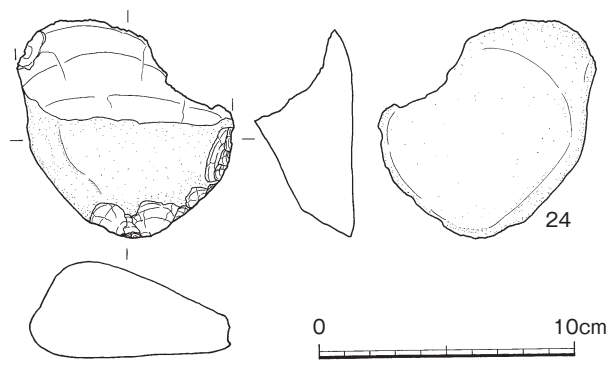
第75図 縄文早期 25号~28号集石



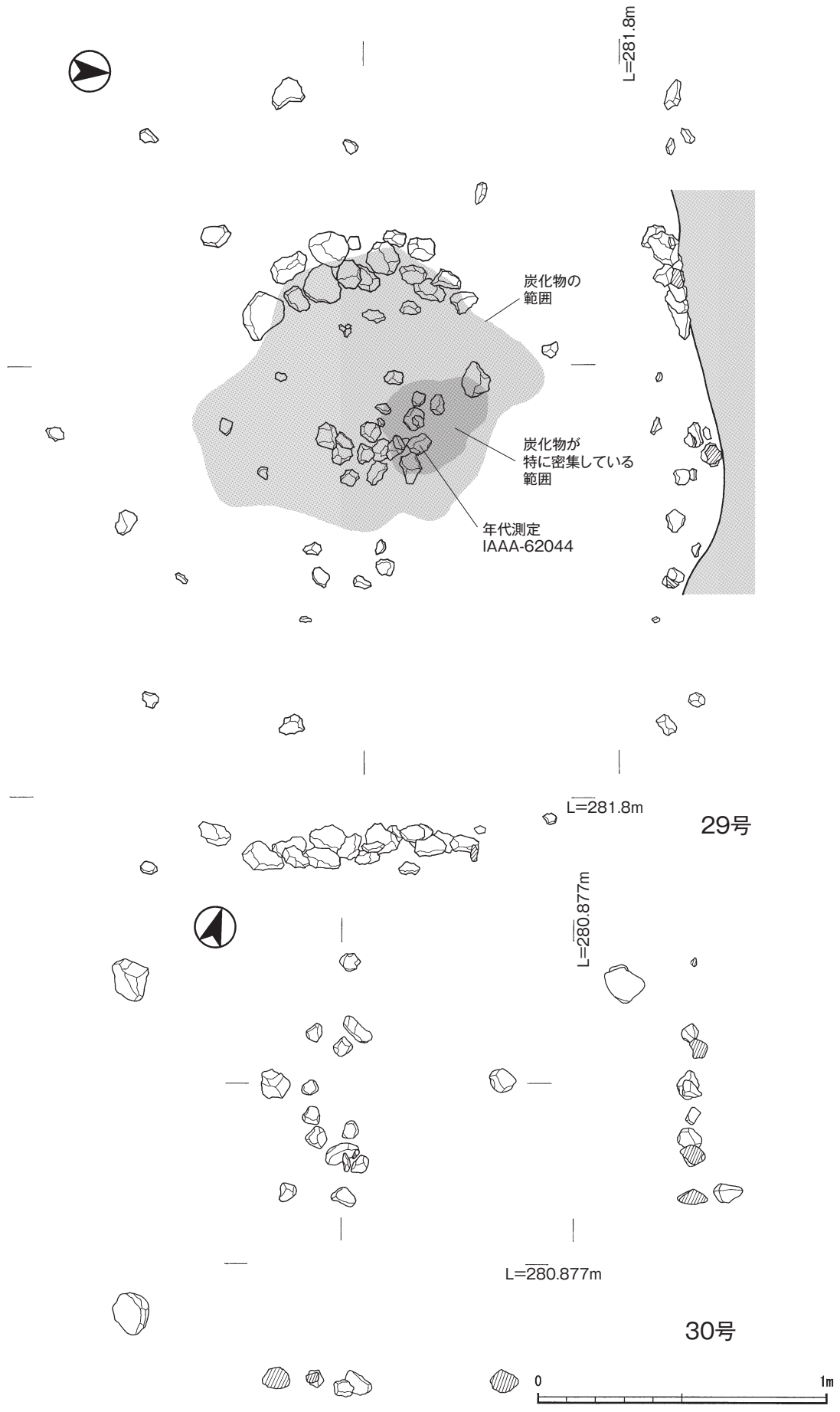
第76図 縄文早期 25号集石内出土土器



28号



第77図 縄文早期 29号集石内出土土器



第78図 縄文早期 29号, 30号集石

## (5) 落とし穴

縄文時代早期の落とし穴は13基検出された。遺構の形状は楕円形または長楕円形で、全ての遺構に小ピットが1か所検出された。また、落とし穴群として2群を認定した。1つは、H-29区からF-34区にかけて帯状に検出された7基で、G-32区の4号落とし穴を中心に、南北方向になだらかに下って検出された。もう1つは、G・H-48・49区内で隣接して検出された3基である。

### 1号落とし穴（第79図）

I-29区のⅨ層で検出された。平面プランは長径139cm、短径89cmの楕円形で、検出面からの深さは145cmである。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦面をなし、中央に直径18cm、深さ59cmの小ピットが検出された。主体となる埋土はⅧ層で、埋土中には、大きさが5～25mmのオレンジ色パミス、5～15mmの灰白色パミスが全体的に混入している。

### 2号落とし穴（第79図）

H-30区のⅨ層で検出された。平面プランは長径110cm、短径65cmの楕円形で、検出面からの深さは136cmである。掘り込み形状はバケツ状で、底面は平坦面をなし、中央に直径10cm、深さ38cmの小ピットが検出された。埋土はレンズ状に堆積している様相が観察される。

### 3号落とし穴（第80図）

H-31区で検出された。平面プランは長径134cm、短径82cmの楕円形で、検出面からの深さは152cmである。東西方向に長径をもつ。底面は平坦面をなし、中央に直径16cm、深さ68cmの小ピットが検出された。

### 4号落とし穴（第81図）

G-32区のⅨ層で検出された。平面プランは長径140cm、短径97cmの楕円形で、検出面からの深さは148cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦面をなし、中央に直径9cm、深さ42cmの小ピットが検出された。遺構の長径方向は279mのコンターラインに並行するような形で掘られている。埋土からは、最終的にⅧ層の黒褐色土を一気に充填した様相が観察される。

### 5号落とし穴（第81図）

G-32区のⅨ層で検出された。平面プランは長径115cm、短径71cmの楕円形で検出面からの深さは149cmである。底面の中央に直径12cm、深さ41cmの小ピットが検出された。主体となる埋土はⅧ層で①の埋土中には桜島P13が多く散在する。東西方向に長径をもつ。

### 6号落とし穴（第82図）

F-33区のⅨ層で検出された。平面プランは長径123cm、短径78cmの楕円形で、検出面からの深さは135cmである。掘り込み形状はほぼバケツ状で、底面は平坦面をなし、中央に直径10cm、深さ65cmの小ピットが検出された。主体となる埋土はⅧ層である。遺構は東西方向に長径をもち、斜面で検出した落とし穴群7基のうち、最も標高の低い位置で検出された。

### 7号落とし穴（第82図）

F-34区のⅨ層で検出された。平面プランは長径107cm、短径60cmの楕円形で、検出面からの深さは135cmである。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦面をなし、中央に直径11cm、深さ51cmの小ピットが検出された。東西方向に長径をもち、最も標高の低い位置で検出された。



### 8号落とし穴（第82図）

F-41区のⅨ層で検出された。平面プランは長径118cm，短径63cmの楕円形で，検出面からの深さは115cmである。掘り込み形状はバケツ状で，底面は平坦面をなし，中央に直径13cm，深さ57cmの小ピットが検出された。埋土は①のⅧ層が主体で，桜島P13が多く散在している。小ピットの埋土内炭化物の放射性炭素年代測定の結果は， $22,200 \pm 90$  (yrBP)であった。これは旧石器時代に該当する年代であるが，該当する層にあった炭化物が小ピット内に落ち込んだと思われる。

### 9号落とし穴（第83図）

G-43区のⅨ層で検出された。平面プランは長径147cm，短径90cmの楕円形で，検出面からの深さは95cmである。掘り込み形状はバケツ状で，底面は平坦面をなし，中央に直径15cm，深さ70cmの小ピットが検出された。遺構は282mのコンターライン内に囲まれ，13基の落とし穴のなかでは標高が最も高いところで検出された。埋土は①のⅧ層が主体で，桜島P13や直径1～2mm程度の白いパミスが多く散在している。

### 10号落とし穴（第83図）

H-43区のⅩ層で検出された。平面プランは長径137cm，短径62cmの楕円形で，検出面からの深さは108cmである。掘り込み形状はバケツ状で，底面は平坦面をなし，中央に直径10cm，深さ68cmの小ピットが検出された。遺構の長径方向は281.6mのコンターラインと重なる。

### 11号落とし穴（第84図）

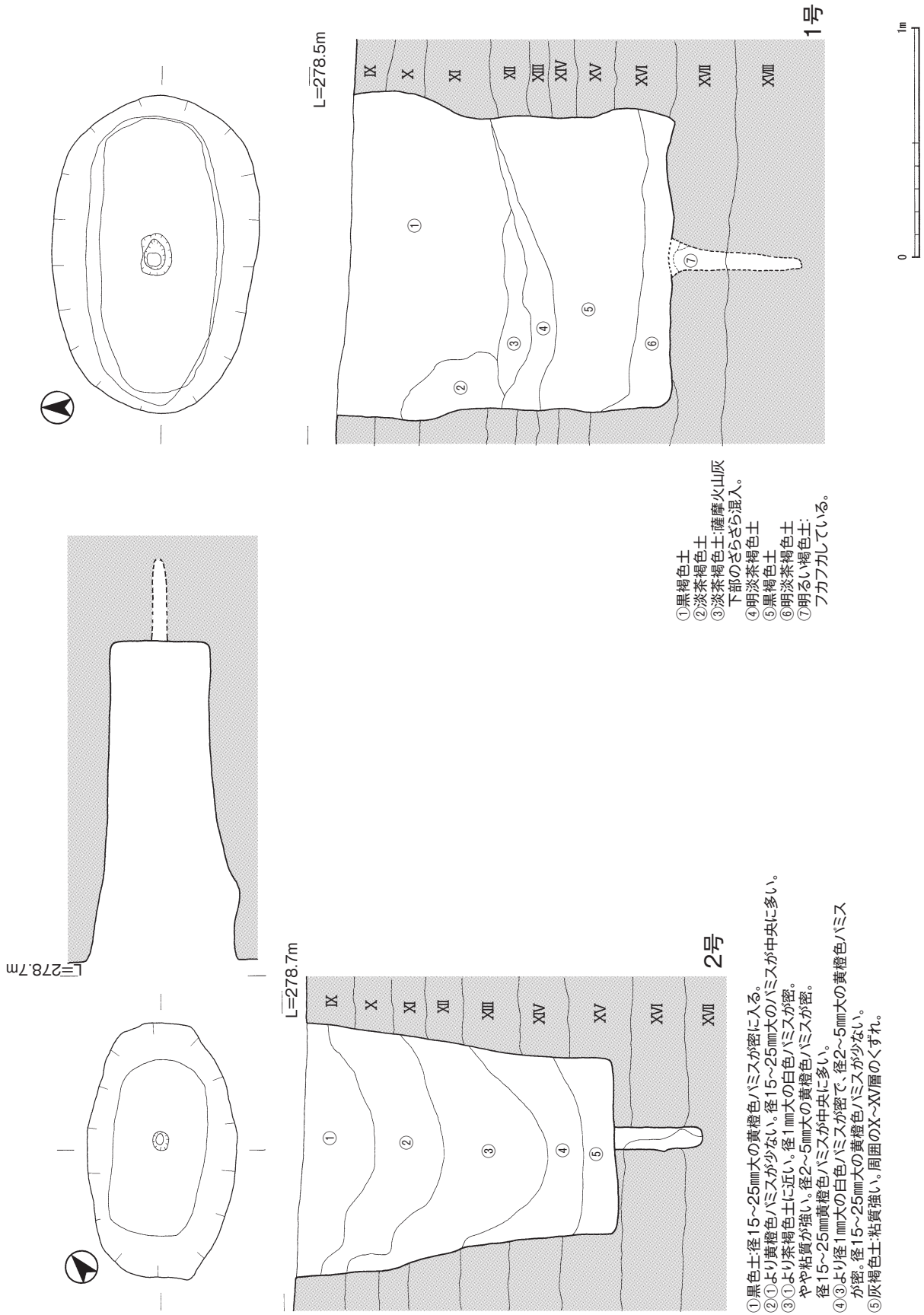
G・H-48区のⅩ層で検出された。平面プランは長径90cm，短径54cmの楕円形で，検出面からの深さは52cmである。底面は平坦面をなし，中央に直径9cm，深さ62cmの小ピットが検出された。Ⅹ層で検出されたが，遺構の形態や埋土などから，縄文時代早期のものと判断した。遺構から約50cm離れた土層壁を参考にすると，Ⅸ層の層厚は約35cm，Ⅷ層の層厚は約60cmあるため，本遺構の実際の深さは100cm以上と想定される。遺構の長径方向はコンターラインと垂直に重なる。なお，小ピットの埋土内炭化物を放射性炭素年代測定したところ， $8,920 \pm 50$  (yrBP)であった。

### 12号落とし穴（第84図）

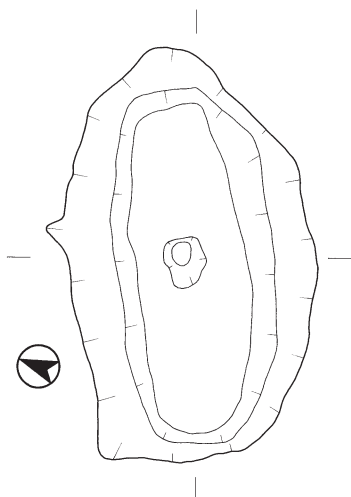
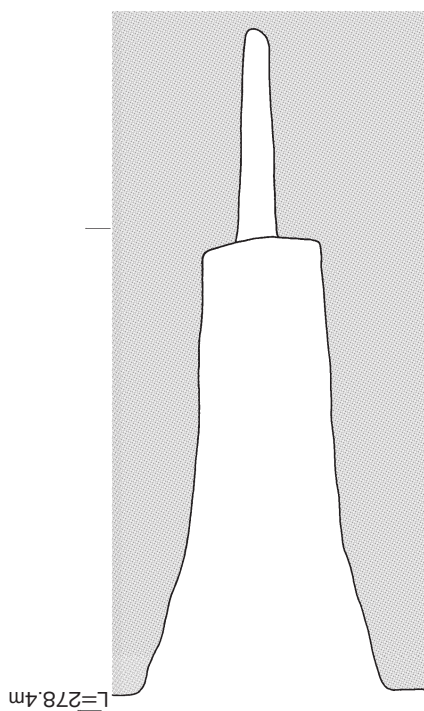
G・H-49区のⅨ層で検出された。平面プランは長径120cm，短径77cmの楕円形で，検出面からの深さは90cmである。底面は平坦面をなし，中央に直径12cm，深さ40cmの小ピットが検出された。埋土は大きく2つにわかれ，主体は桜島P13を多く含むⅧ層である。斜面で検出された落とし穴群3基のうち，最も標高の低い位置で検出され，Ⅸ層の層厚は70cmを超える。

### 13号落とし穴（第84図）

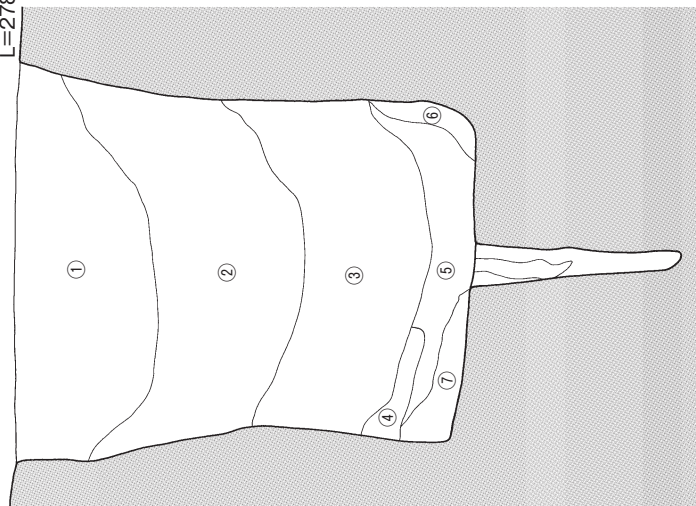
G-49区のⅨ層で検出された。平面プランは長径118cm，短径58cmの楕円形で，検出面からの深さは92cmである。掘り込み形状はバケツ状で，底面は平坦面をなし，中央に直径15cm，深さ70cmの小ピットが検出された。遺構は，278.8mのコンターライン上に掘られ，南東-北西方向に長径をもつ。



第79図 縄文早期 1号, 2号落とし穴



L=278.4m

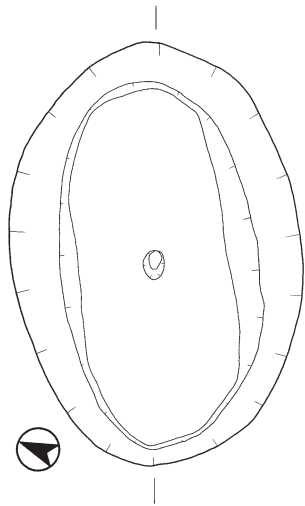


- ① 黒褐色・黄橙色ハミス混入土 (7.5YR2/1)。径 (15~25mm) 大の黄橙色ハミスが密に入る。ベースは黒褐色土に径1~2mmの白色ハミスが密に入る。
- ② ①より黄橙色のハミスが中央にかたまる。
- ③ 黒褐色・黄橙色ハミス混入土 (7.5YR2/2)。①より茶が強い。
- ④ 40~50mm大のハミスが入る。粘質が強い。
- ⑤ 明黄褐色土。XIII-XIV層のくすれか。粘質強い。
- ⑥ ③の径40~50mm大のハミスなし。粘質強い。
- ⑦ にぶい黄橙色・粘質強い。XV~XVI層のくすれ。
- ⑦ にぶい黄橙色・粘質強い。XIV~XV層のくすれ。

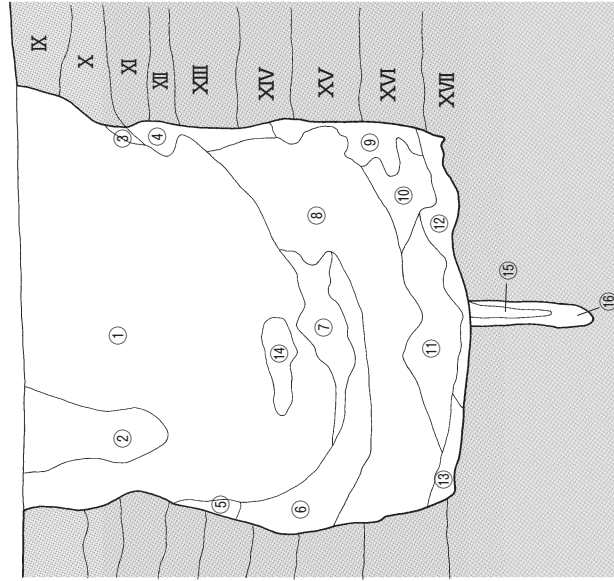
3号



第80図 縄文早期 3号落とし穴



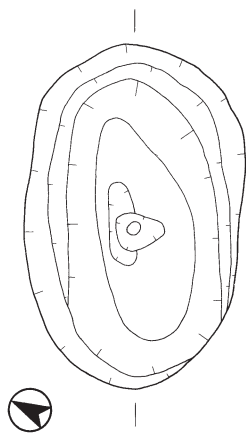
L=279.3m



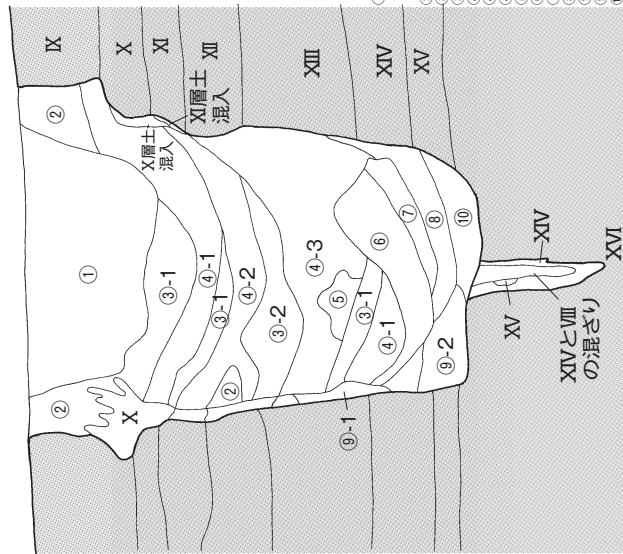
4号



- ①黒褐色土(10YR2/2)径2~3mm程度のオレンジ色のハミス(P13)を多く含む。また、直径0.5mm程度の白いハミスを多く含む。しまりややあり。粘りややあり。
- ②黒褐色土(10YR2/3)①より、やや茶色っぽい。またP13が①より少ない。白いハミスは①と同じ程度含む。しまりややあり。粘りややあり。
- ③黒褐色土(10YR2/2)①とX層が半々くらいで混じり合う。しまりややあり。粘りややあり。
- ④黒褐色土(10YR3/3)①とXI層がそれぞれ混同程度に混じり合う。粘りあり。
- ⑤黒褐色土(7.5YR3/3)①とX層が半々くらいで混じり合う。しまりやや粘りややあり。
- ⑥黒褐色土(10YR2/3)①を中心にX層、XII層、XIII層をそれぞれ少量ずつ含む。混じり方は均一ではなく、全てが一斉に混ざり合う。しまりややあり。
- ⑦黒褐色土(10YR3/4)X層を中心に①とX層を少量含む。粘りあり。
- ⑧黒褐色土(10YR2/3)⑥と同じく、①を中心にX層、XII層、XIII層をそれぞれ少量ずつ含む。粘りややあり。
- ⑨黒褐色土(10YR3/2)④より⑥の割合が多く、全体として④より黒っぽい。粘りややあり。
- ⑩黒褐色土(10YR2/3)⑧とはほぼ同じだが、⑨が少量混じっている。
- ⑪①を中心にX層とXII層を少量含む。⑥と同様、混じり方は均一ではなく、全てが一斉に混ざり合う。粘りあり。
- ⑫灰褐色土(10YR4/2)しまりほぼなし。粘りあり。
- ⑬黒褐色土(10YR2/3)粘りややあり。しまりややあり。
- ⑭X層のプロック(径3~4cm)が集中している。
- ⑮黒褐色土(10YR2/2)小ヒット部分か?粘りややあり。
- ⑯褐色土(10YR4/4)やわらかく、ほろほろと崩れる。



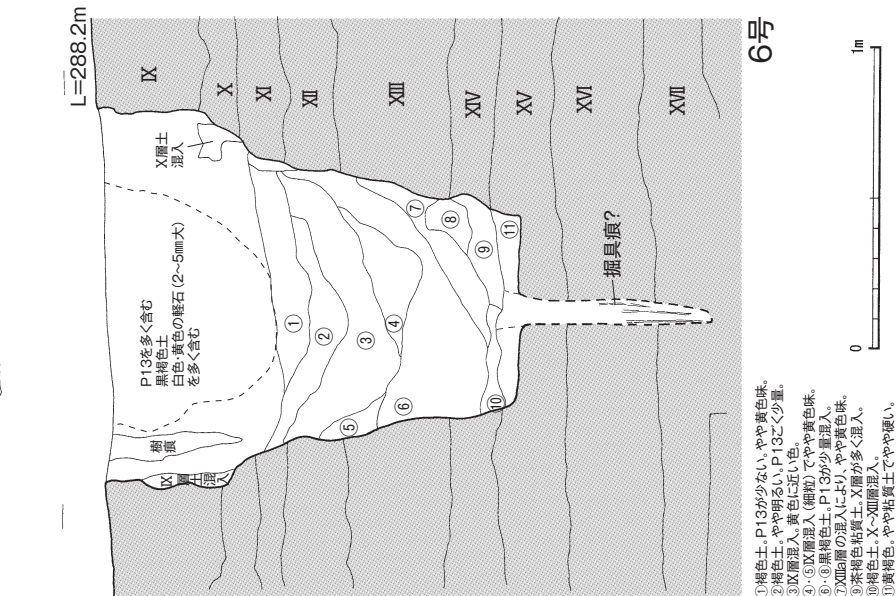
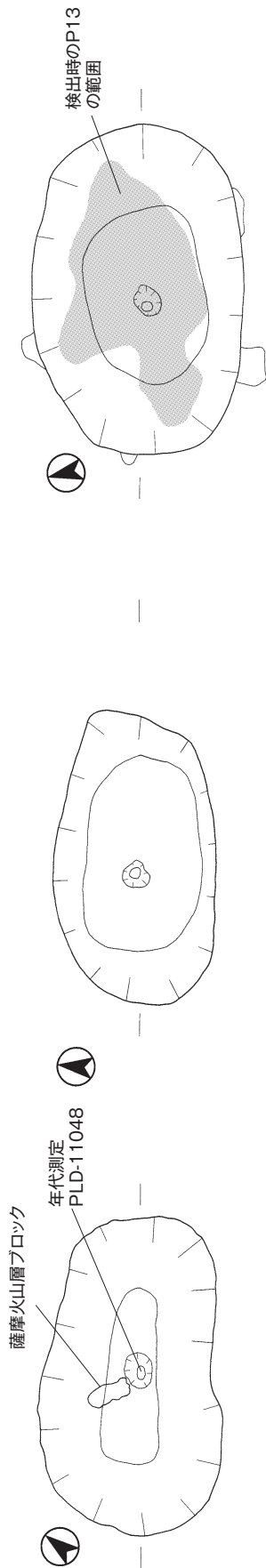
L=278.9m



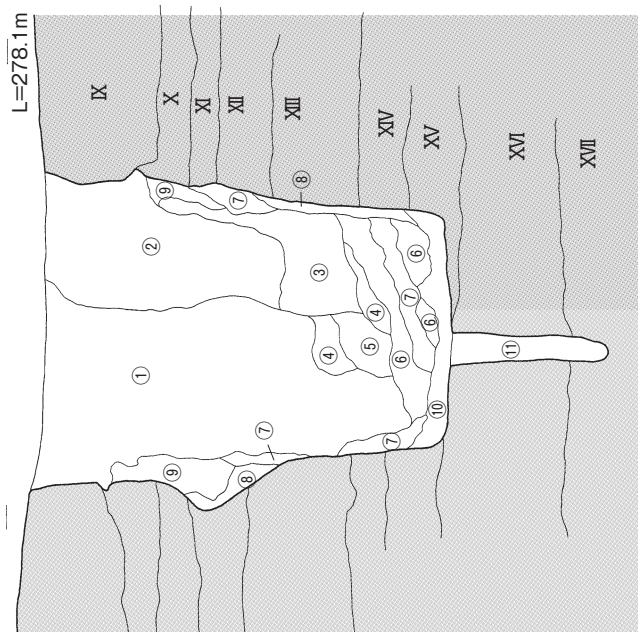
5号

- ①黒色土(10YR1.7/1)1~3mm大の白色系ハミス、砂粒、2~5mm大の黄色ハミス(P13)が非常に多く混入する。
- ②①のP13がほとんど混じらないもの。(加層)
- ③-1①にX層が混入する。
- ③-2①にX層が混入する。
- ④-1②にX層が混入する。
- ④-2②にX層が混入する。
- ④-3②にX層が混入する。
- ⑤②にX層が混入する。
- ⑥⑤にX層のプロックが混入する。
- ⑦X層をベースに②とX層が混入する。
- ⑧②をベースにX層が混入する。
- ⑨-1①をベースにXI~XIII層が混入する。
- ⑨-2⑨-1にP13が入らない。
- ⑩X層をベースに②が少量混入する。

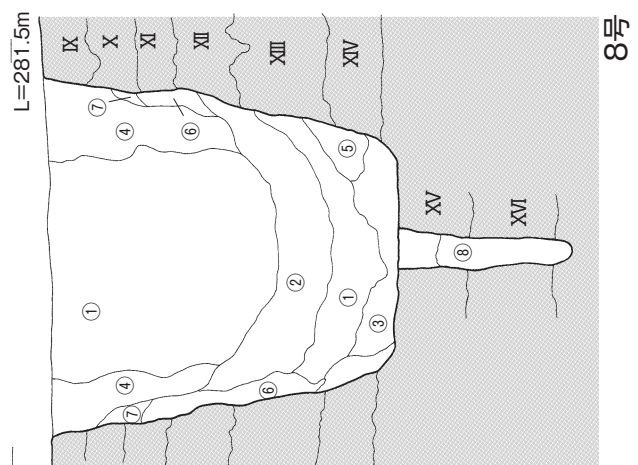
第81図 縄文早期 4号, 5号落とし穴



- ① 褐色土、P13が少なく、やや黄色味。
- ② 褐色土、やや明るい、P13ごく少量。
- ③ IX層混入、黄色に近い色。
- ④、⑤ IX層混入(細粒)でやや黄色味。
- ⑥、⑦ 黒褐色土、P13が少量混入。
- ⑧ 黒褐色土、P13が少量混入。
- ⑨ 茶褐色粘質土、X層が多く混入。
- ⑩ 褐色土、X~IX層混入。
- ⑪ 黒褐色、やや粘質土でやや硬い。

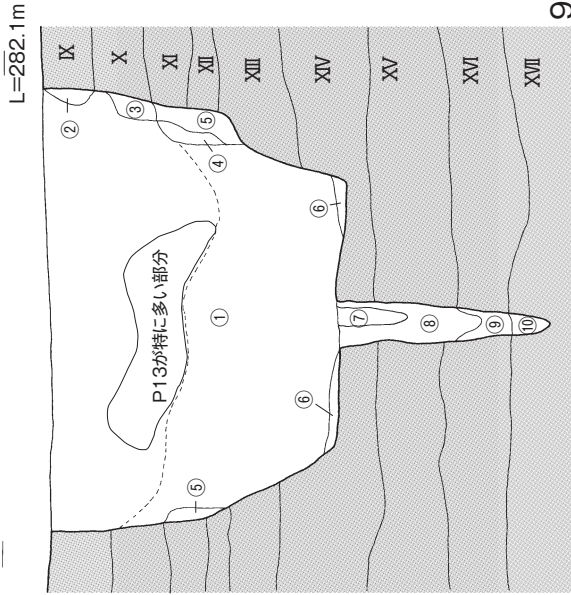
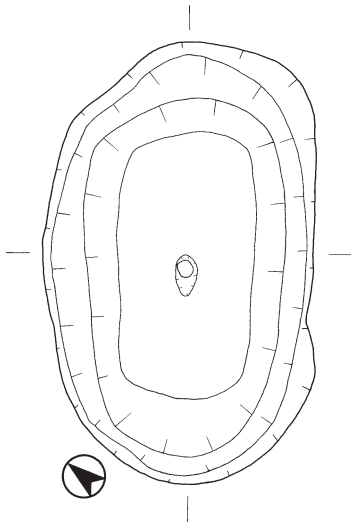
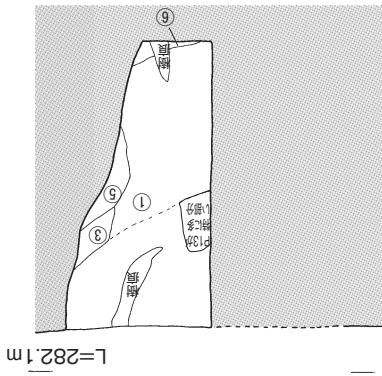


- ① VII層P13多い、白色粘含む。
- ② 黒褐色粘質土(①よりやや明るい、P13少ない)。
- ③ 暗茶褐色粘質土(①より明るい、P13少ない)。
- ④ P13が入れない。
- ⑤ 暗茶褐色粘質土P13含む。
- ⑥ 暗茶褐色粘質土P13少量含む。
- ⑦ 明茶褐色ローム質土(①より明るい、P13少ない)。
- ⑧ 明茶褐色ローム質土(①より明るい、P13少ない)。
- ⑨ 黄褐色ローム質土(①より明るい、P13少ない)。
- ⑩ 黄褐色ローム質土(①より明るい、P13少ない)。
- ⑪ 灰色ローム質土(部分的に茶褐色の鉄分?)を含む。



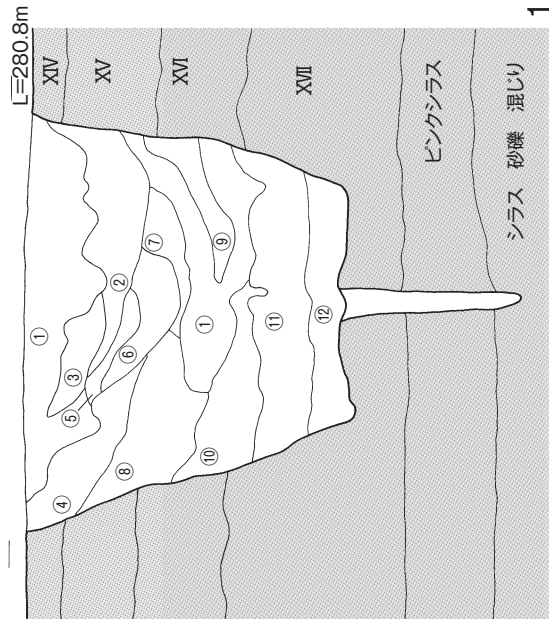
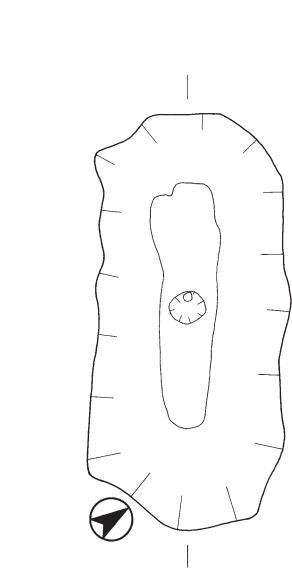
- ① 黒色粘質土P13多く含む、白色粘子を多く含む。
- ② 黒褐色粘質土(①よりやや明るい、P13少ない)。
- ③ 暗茶褐色粘質土(①より明るい、P13少ない)。
- ④ 黒色粘質土(①より明るい、P13少ない)。
- ⑤ 暗茶褐色粘質土(①より明るい、P13少ない)。
- ⑥ 黄褐色粘質土P13少量含む。
- ⑦ 黒褐色粘質土(①より明るい、P13少ない)。
- ⑧ 明茶褐色粘質土(①より明るい、P13少ない)。

第82図 縄文早期 6号~8号落とし穴



- ①黒褐色土(10YR2/2) 凝縮のオレンジ色のハミス(P13)を多く含む。また、径1~2mm程度の白いハミスを多く含む。粘りややあり。
  - ②灰層のブロック、樹根により崩れたものか。
  - ③黒色土(10YR1.7/1) 灰層に①と同じ径1~2mm程度の白いハミスを少量含む。粘りあり。
  - ④黒褐色土(10YR2/3) ①と②が半々で混じり合ったような色合い。粘りややあり。
  - ⑤黒褐色土(10YR3/3) 灰層を中心に、①が少量混じり合ったような色合い。粘りややあり。
  - ⑥灰層の層と①がまだらに混ざり合っている。粘りややあり。しまりあり。
  - ⑦黒褐色土(7.5YR3/2) P13を少量。P15をごく少量含む。粘りややあり。しまりややあり。
  - ⑧褐色土(7.5YR4/4) P13を少量。P-15を少量含む。粘りややあり。しまりややあり。
  - ⑨褐色土(10YR4/6) 少量のP17を含む。粘りややあり。しまりややあり。
  - ⑩にぶい黒褐色土(10YR5/4) ごく少量のP17を含む。粘りややあり。しまりややあり。
- ※②~⑤の間隙には全て樹根あり。

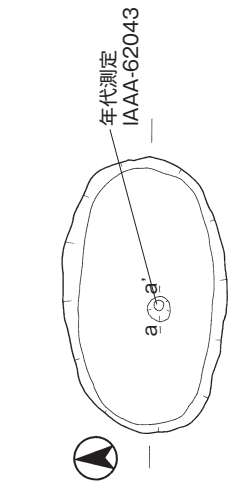
9号



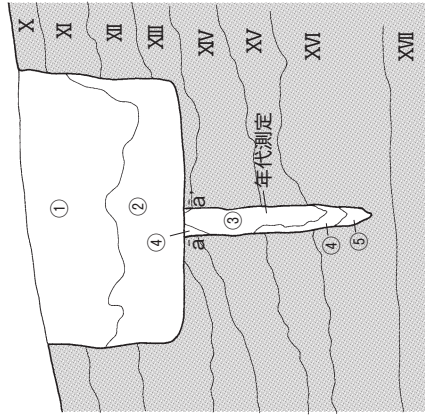
- ①黒褐色土 P13混じり 2.9mm軽石混入。②①より明るい褐色土。
- ②黒褐色土+淡茶褐色粘土 XIV層混入。①も少量混入。
- ③褐色土 ⑥②とやや異なる。
- ④褐色土 ⑥②とやや異なる。
- ⑤②に近いがわずかに①が混入する。
- ⑥淡褐色土 XIV層と混ざったものか。
- ⑦②に近いがわずかに①が混入する。
- ⑧XVII層混入。⑩①に近い P13が少なく、XVII層が混じり明るい色調。
- ⑨明茶褐色粘土。XIV層に近い。⑩灰褐色土。①はXIII層土が混入。

10号

第83図 縄文早期 9号, 10号落とし穴

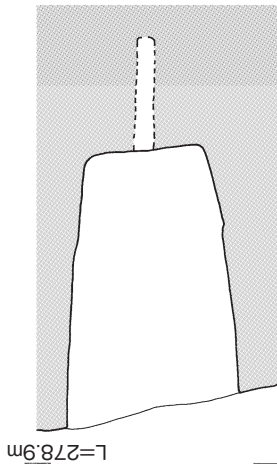


L=269.7m

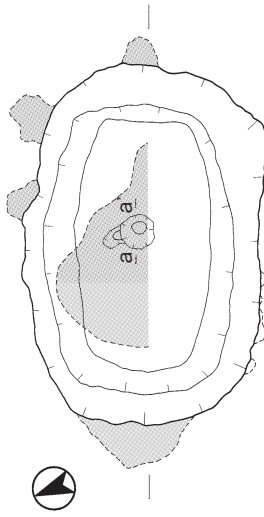


11号

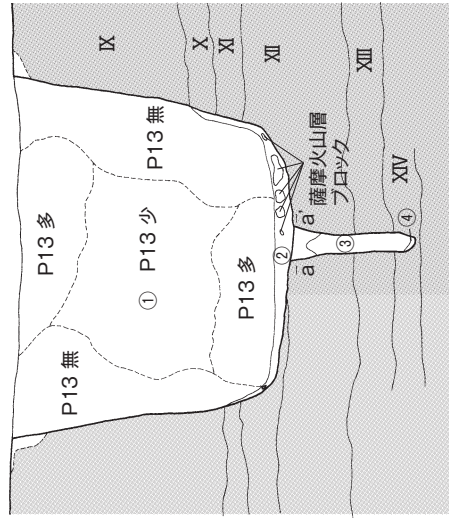
- ①赤褐色土 径1~2mmの白色粒子を多く含む。
- ②黒褐色土 径1~2mmの白色粒子を多く含む。
- ③黒褐色土 径1~2mmの白色粒子を含む5cm程度の礫石(P14?)を含む。
- ④黒色土(ハサ/ハサ)としている。
- ⑤明黄褐色土(ハサ/ハサ)としている。



※横溝の箇所は、  
縦溝P13が多い。

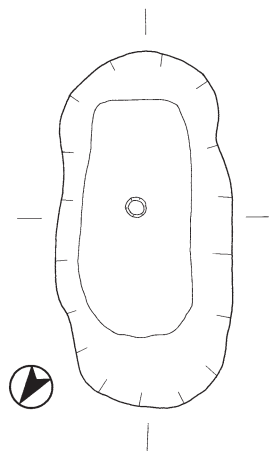


L=278.4m

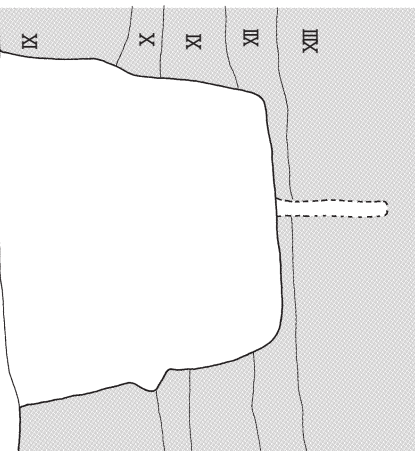


12号

- ①黒色褐色土 P13白色粒子含む。
- ②赤褐色土
- ③赤褐色粘質土
- ④黄褐色土



L=278.9m

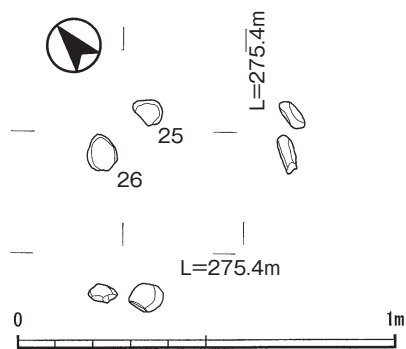


13号

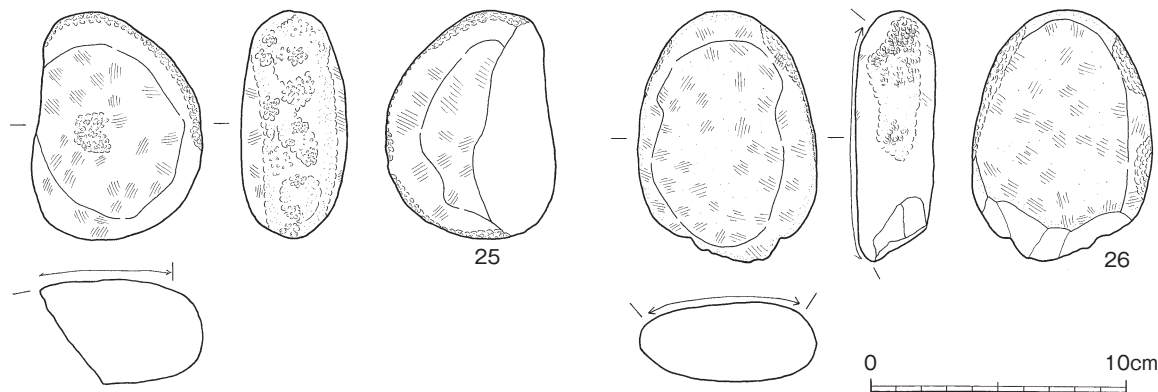
第84図 縄文早期 11号~13号落とし穴

(6) 磨石集積 (第85, 86図)

H-17区のⅦ層で検出された。磨石が2個近接して出土した。周辺には遺構は確認できなかった。磨石は2個とも一部分が欠けており、完形ではない。



第85図 縄文早期 磨石集積



第86図 縄文早期 磨石集積内出土石器

第17表 縄文早期 集石計測表

挿図番号	番号	検出区	検出面	大きさ (cm)			掘り込み (cm)			備考	挿図番号	番号	検出区	検出面	大きさ (cm)			掘り込み (cm)			備考
				長径	短径	深さ	径	径	深さ						長径	短径	深さ	径	径	深さ	
64	1	G-5	Ⅶ層	107	106	79	-	-	8		71	16	G-42	Ⅶ層	215	155	-	-	-		
	2	H-7	Ⅷ層	88	62	-	-	-		17		H-43	Ⅶ層	165	161	-	-	-			
	3	H-7	Ⅷ層	247	175	-	-	-		72		18	H-42	Ⅶ層	246	191	-	-	-		
65	4	I-6	Ⅶ層	172	108	-	-	-		73	19	G-51	Ⅶ層	210	144	-	-	-			
	5	I-6	Ⅶ層	156	52	-	-	-			20	G-51	Ⅵa層	70	50	42	36	21			
	6	G-8	Ⅶ層	187	186	-	-	-			21	G-51	Ⅶ層	26	15	-	-	-			
	7	H-17	Ⅶ層	127	75	-	-	-			22	E-62	Ⅶ層	73	72	-	-	-			
66	8	H-24	-	95	60	-	-	-		74	23	G-67	Ⅵa層	186	115	-	-	-			
	9	H-28	Ⅶ層	145	110	-	-	-			24	G-69	Ⅶ層	185	112	-	-	-			
68	10	F-31	Ⅶ層	197	120	-	-	-		75	25	D-75	Ⅷ層	65	55	-	-	-			
	11	F-32	Ⅸ層	-	-	122	121	32			26	D-75	Ⅶ層	93	82	-	-	-			
69	12	I-32	Ⅶ層	306	242	-	-	-			27	D-76	Ⅶ層	130	110	-	-	-			
	13	H-40	Ⅶ層	194	150	-	-	-			28	F-78	Ⅶ層	115	104	-	-	-			
70	14	I-41	Ⅶ層	111	104	-	-	-			29	F-80	Ⅶ層	227	178	110	-	25	年代測定		
	15	H-43	-	43	32	-	-	-		30	E-76	Ⅶ層	140	88	-	-	-				

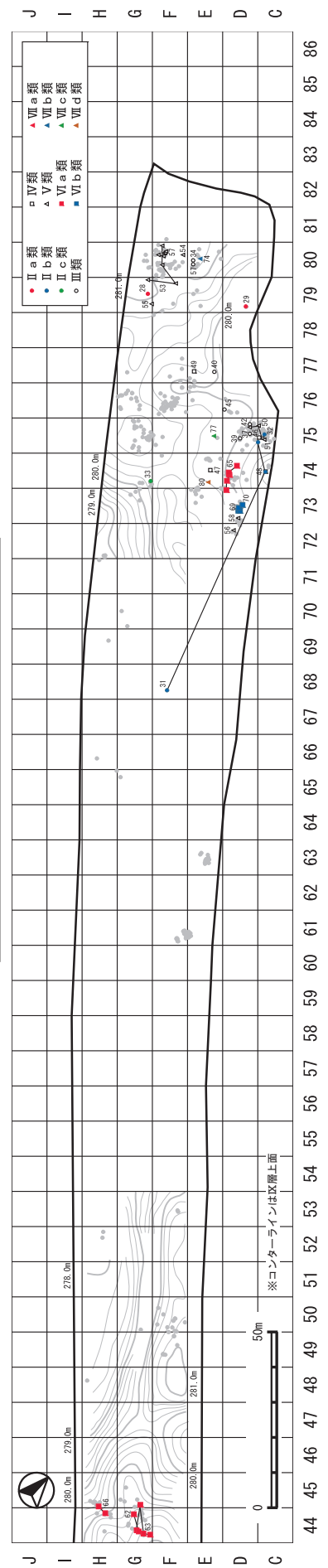
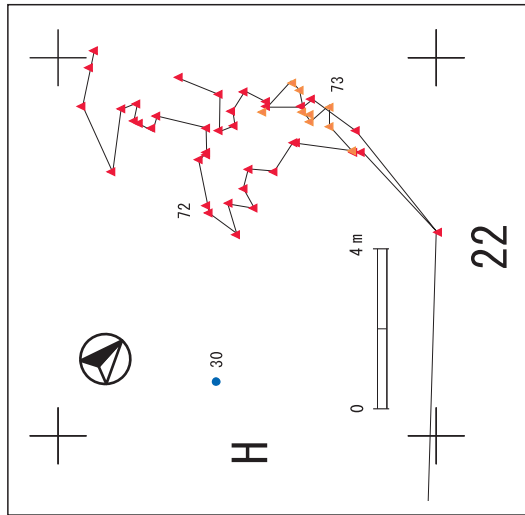
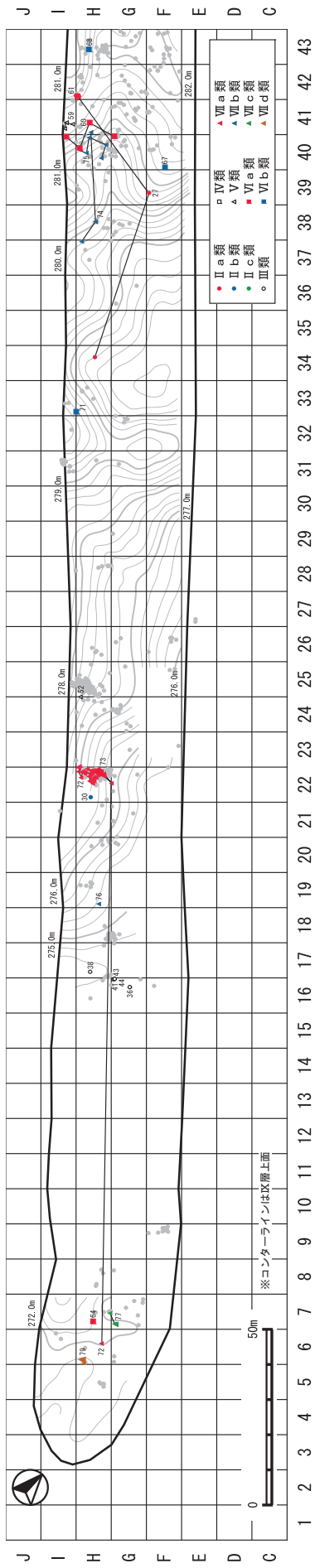
第18表 縄文早期 落とし穴計測表

挿図番号	番号	検出区	検出面	形状	大きさ・深さ (cm)			小ピット (cm)			備考	挿図番号	番号	検出区	検出面	形状	大きさ・深さ (cm)			小ピット (cm)			備考
					長径	短径	深さ	数	径	深さ							長径	短径	深さ	数	径	深さ	
79	1	I-29	Ⅸ層	楕円形	139	89	145	1	18	59		82	8	F-41	Ⅸ層	楕円形	118	63	115	1	13	57	年代測定
	2	H-30	Ⅸ層	楕円形	110	65	136	1	10	38			9	G-43	Ⅸ層	楕円形	147	90	95	1	15	70	
80	3	H-31	Ⅸ層	楕円形	134	82	152	1	16	68		83	10	H-43	XⅣ層	長楕円形	137	62	108	1	10	60	
81	4	G-32	Ⅸ層	楕円形	140	97	148	1	9	42			11	G・H-48	X層	楕円形	90	54	52	1	9	62	年代測定
	5	G-32	Ⅸ層	楕円形	115	71	149	1	12	41		12	G・H-49	Ⅸ層	楕円形	120	77	90	1	12	40		
82	6	F-33	Ⅸ層	楕円形	123	78	135	1	10	65		84	13	G-49	Ⅸ層	楕円形	118	58	92	1	15	70	
	7	F-34	Ⅸ層	楕円形	107	60	135	1	11	51													

第19表 縄文早期 磨石集積内出土石器観察表

挿図番号	図番号	取上番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
86	25	SB101.②	磨石・敲石	砂岩	9.0	6.8	4.2	320.0	
	26	SB101.①	磨石・敲石	安山岩	10.0	7.1	3.1	350.0	





第87図 II類～VII類土器出土状況図

### 3 遺物

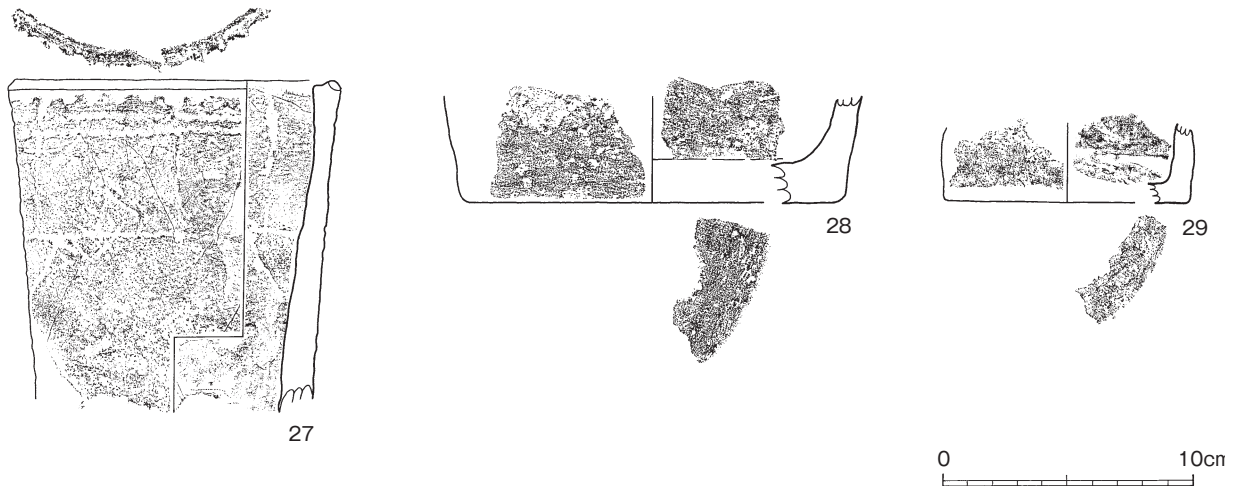
#### (1) 土器

##### Ⅱ類

第Ⅱ類は器形が円筒土器で外面に貝殻復縁による文様を施すタイプである。この類は文様によってaからcの3類に分けられる。

##### Ⅱa類 (第88図27~29)

27は直行した口縁部をもつ円筒形の土器である。土器としては厚手で、口唇部は角がある平坦を呈している。文様は口唇部の外輪部に貝殻腹縁による連続刺突文と外面に2条の貝殻腹縁による刺突を施している。色調は外面が暗灰褐色で内面が黒褐色を呈している。器面調整は内外面とも篋状施文具による丁寧な横撫で調整である。28は円筒土器の底部で平底である。文様はなく色調は外面が暗灰茶褐色で内面が暗灰褐色を呈している。器面調整は内外面とも篋状施文具による丁寧な横撫で調整である。29は円筒土器の底部で平底である。文様はなく色調は外面が暗灰茶褐色で内面が黒色を呈している。器面調整は内外面とも篋状施文具による丁寧な横撫で調整である。



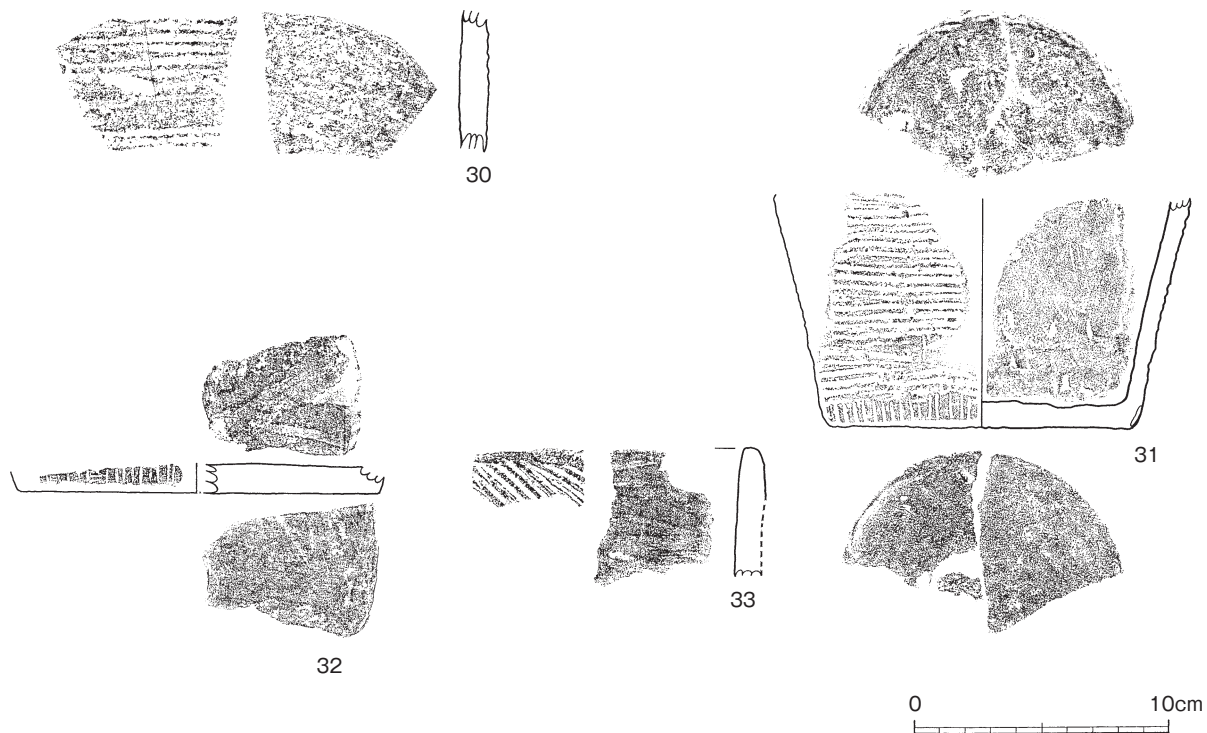
第88図 Ⅱa類土器

##### Ⅱb類 (第89図30~32)

30は円筒形の貝殻文土器である。円筒土器の厚手の胴部である。文様は外面に横位の貝殻条痕を施している。色調は外面が茶褐色で内面が暗灰褐色を呈している。器面調整は内面に篋状施文具による横撫で調整である。31は円筒形の貝殻文土器である。円筒土器の薄手の胴部から底部で、平底ある。文様は外面に横位の貝殻条痕を施し、底部の縁に縦位の沈線を連続して施している。色調は外面が黒茶褐色で内面が暗灰褐色、底面が茶褐色を呈している。器面調整は内面に篋状施文具による横撫で調整である。32は円盤状の平底である。低部の縁に縦位の沈線を連続して施している。色調は茶褐色で、器面調整は篋状施文具で丁寧に仕上げている。

##### Ⅱc類 (第89図33)

33は円筒形の貝殻文土器である。円筒土器の厚手の口縁部である。文様は外面に斜位の貝殻条痕を施している。色調は外面が灰茶褐色で内面が茶褐色を呈している。器面調整は内面に篋状施文具による横撫で調整である。

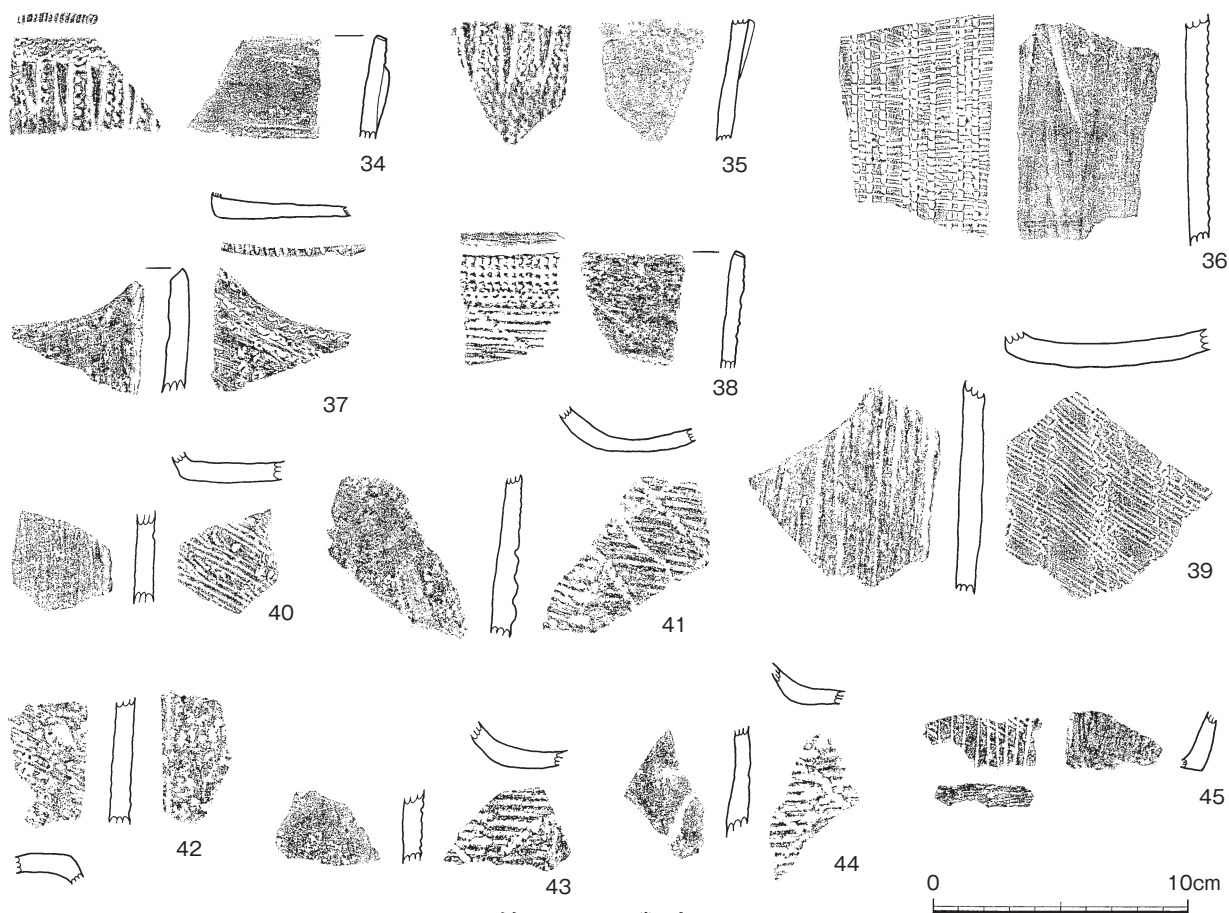


第89図 IIb類・IIc類土器

### Ⅲ類 (第90図34~45)

第Ⅲ類は円筒形と角筒形の器形をもつ貝殻条痕文土器である。

34は口縁部がやや外反した円筒土器の薄手の深鉢である。口唇部は平坦に切り、細い刻み目を施している。口縁外面には貝殻腹縁部による横位の刺突文を施し、その下位に楔形の貼り付け突帯をまわしている。楔形突帯は逆三角形粘土を篋で押し付けて貼り付けている。その楔形突帯の間には縦位に貝殻腹縁部による刺突文を施している。色調には外面が暗茶褐色で煤の付着があり、内面は茶褐色を呈している。内面調整は縦位の後横位に丁寧な篋撫でを施している。35は口縁部が欠損しているが9同様に解釈できるので同一個体の可能性が高い。36は円筒土器の薄手の深鉢で、胴部にあたる。外面は貝殻腹縁部による条痕をやや斜位に施し、その上から3列に縦位に施している。内面の器面調整は縦方向に篋状調整具による搔き上げを施している。色調は外面が暗茶褐色に黒の斑点がみられ、内面は灰茶褐色である。37は角筒土器の口縁部で角部が山形状に呈している。口唇部は平坦に切り、細い刻み目を施している。口縁部には弧上に3列に貝殻腹縁部による刺突を施し、その下位は貝殻腹縁部による縦位の刺突を施している。角部は菱形状に刻み目を施している。色調は外面が暗茶褐色に黒の斑点がみられ、内面は灰茶褐色である。38は角筒土器の口縁部である。口唇部は平坦に切っているがやや丸みを持っている。口縁部の文様は貝殻腹縁部による押圧連続文を施し、器面は深い横位の貝殻条痕の上に貝殻腹縁部による刺突を斜位に施している。内面の調整は篋状具による搔き上げである。色調は外面が暗茶褐色で、内面は灰茶褐色である。39は角筒土器の胴部である。外面の文様は貝殻腹縁部による斜位の条痕の上に2列の貝殻腹縁部による刺突を菱形状に施している。角部には菱形状に刻み目を施している。内面は篋状具による搔き上げ調整を施している。40は文様や器形からみて39と同一土器の可能性が高い。なお、37と39と40は同一個体の可能性が高い。41は角筒土器の胴部である。外面の文様は貝殻腹縁部による横位の条痕に斜位の刺突を



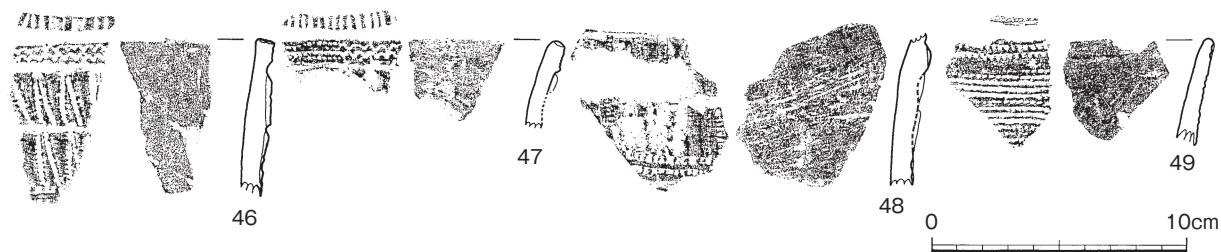
第90図 III類土器

施し、角部は菱状の刻み目を施している。色調は外面が暗茶褐色に黒の斑点がみられ、内面は灰茶褐色である。42, 43, 44は41と同じ文様と器形をしているが、43, 44は内面の色調が黒褐色を呈している。これらは同一個体の可能性が高い。45は角筒土器の底部である。外面の文様は細長い沈線を縦位に刻み、その上には貝殻腹縁部による刺突が一部みられる。底面は角切りで篋状具による丁寧な撫で調整がみられる。内面調整は篋状具の搔きあげである。色調は内外面茶褐色を呈している。なお、この底部は37のグループと思われる。

IV類 (第91図46~49)

第IV類は楔形突帯と押し引き条痕を持つ円筒土器と角筒土器である。

46は平坦に切られた口唇部に細い刻み目を施し、口縁端部に2条の貝殻腹縁部による横位の刺突を付け、貝殻腹縁部によるやや斜めの楔状文を二段に浮き上がらせるように施し、その下部に押し引き状の一部が見られる。内面は篋状具の撫で調整である。色調は内外面明茶褐色を呈している。



第91図 IV類土器

47は46と同じ文様と器形胎土焼成をしているが、外面の色調が黒斑になっている。48は47と同質であるが、口縁端部が破損し、その代わりに胴部の押し引き状痕が横位に施しているのが分かる。内面の調整は口縁部が丁寧な撫でで胴部が横位の篋状具の撫でである。46, 47, 48は同一個体の可能性が高い。49は器形が角筒土器で、外面に押し引き状痕を横位に施した口縁部である。内面の調整は研磨状に施され、色調は内外面とも黒褐色である。

#### V類 (第92図50~59)

第V類は口縁部に貝殻腹縁部による刺突と胴部に条痕が綾杉状に施されている土器である。

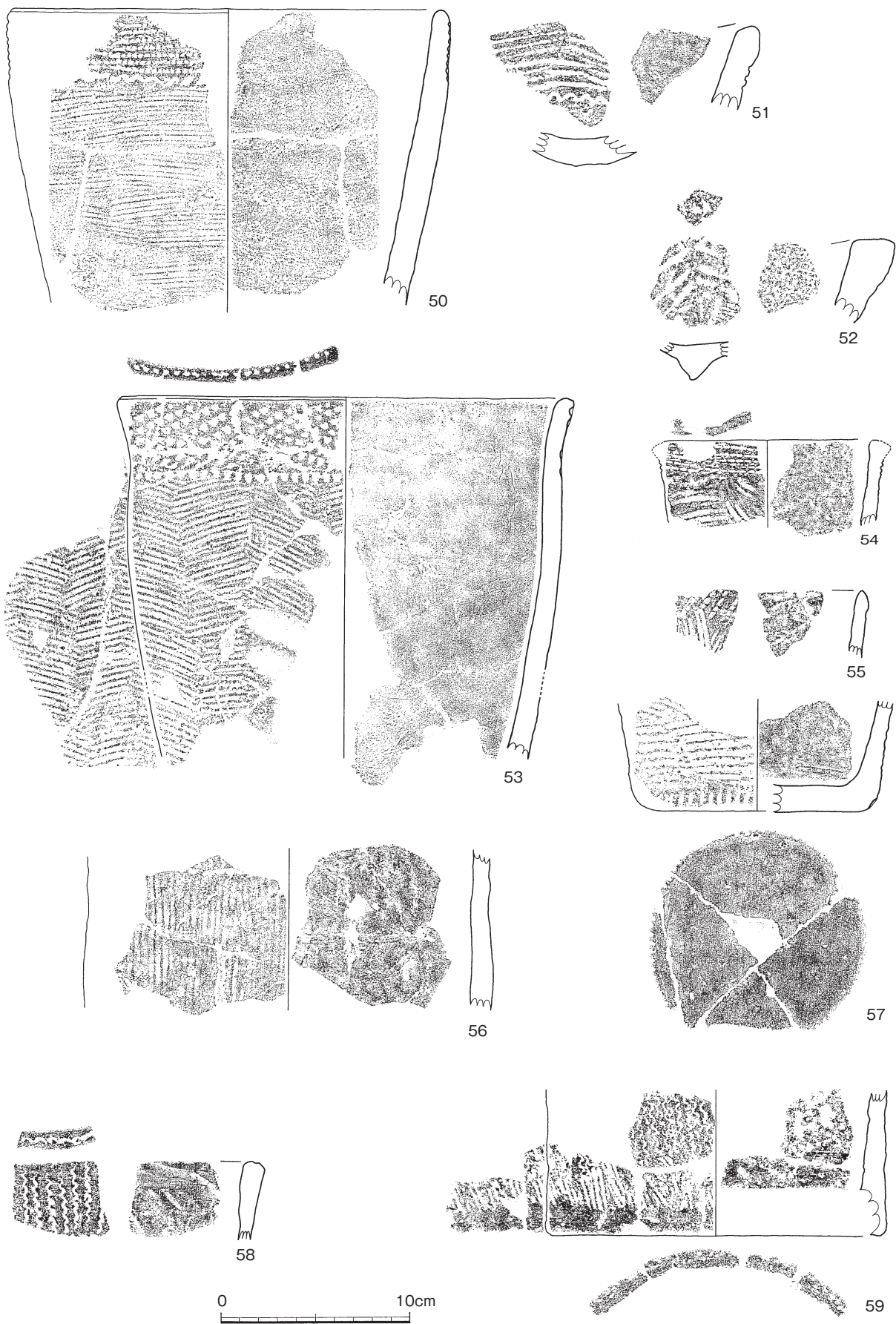
50と51は同一個体と考えられる。口縁部は波状でその部分は瘤状に膨らみ、胴部はやや丸みを持つ器形である。文様は、口縁部に幅の凹凸の狭い貝殻腹縁部による横位の7段刺突と凹凸の広い貝殻刺突を最下位に施している。胴部の条痕は浅く、斜位で一部綾杉状に施されている。内面の調整は横位の撫でである。この土器は、全体的厚めの土器で胴部が一番厚い。色調は内外面とも明茶褐色である。52は口縁部の瘤状に突起した部分である。三角柱の形を貼り付け貝殻刺突を3段に施している。周りは貝殻条痕が斜位にみられる。色調は内外面とも明茶褐色である。53は頸部でやや絞られ口縁部が外反し、肩部がやや張る器形である。文様は口唇部に貝殻腹縁部による刺突があり、口縁部には貝殻腹縁部による「く」の字形の連続刺突と頸部に貝殻腹縁部による横位の刺突を施している。肩部から胴部にかけては浅い綾杉文を縦位に施している。内面は丁寧な撫で調整である。色調は外面が明赤茶褐色で、内面には胴部に黒色の帯びが横位に見られる。54は直行する口縁部をもつ円筒土器である。口唇部は平坦に切られ、口縁部の上面形は角状部がみられる。角状の口縁部には剥がれている部分があり瘤がついている可能性がある。口縁部の文様は、横位の貝殻腹縁部による刺突が5条みられる。胴部は貝殻条痕が綾杉状に見られる。色調は暗茶褐色を呈している。55は口縁部に斜位の貝殻刺突連続文を付け、胴部に貝殻条痕をV字状に施している。色調は暗茶褐色を呈している。56は口縁部に貝殻刺突文があり、胴部に縦位の貝殻条痕が見られる。色調は暗茶褐色を呈し、黒色の煤付着部がみられる。57は平底の胴部及び底部である。外面の文様は胴部にV字状に貝殻条痕を施し、底部に横位の貝殻条痕と縦位の刻目文を施している。色調は外面が茶褐色を呈し、内面が黒色を呈している。58は縦位の貝殻腹縁部による連続刺突文の下に横位の刺突文を施しているやや外反した口縁部である。色調は外面が茶褐色を呈し、内面が黒色を呈している。59は円筒土器の底部である。外面の文様は貝殻腹縁部の縦位の刺突連続文と貝殻条痕文である。底部の中は厚い円盤部が抜けた状態である。底面の端部は調整が良いが、内面は一部剥がれた状態である。色調は外面が茶褐色を呈し、内面が暗茶褐色を呈している。

#### VI類

第VI類は土器の器形がバケツ形になるタイプである。この類は文様で分けられ、a類が貝殻腹縁部による刺突と貝頂による押圧、b類が貝殻腹縁部による筋状文と篋状施文具による筋状文を施すタイプである。a類は60と61と62と63と64と65と66で、b類は67と68と69と70と71である。

#### VIa類 (第93図60~66)

60は口唇部の外側が削られ口縁部が丸みを持つ器形である。文様は、口縁部に5条の貝殻腹縁部による横位の刺突文が巡らされ、5ないし6条の貝殻腹縁刺突文を斜位にクロスする形で施している。内面の調整は丁寧に横撫でをしている。色調は外面が茶褐色であるが口縁部に煤などによる黒



第92図 V類土器

色がみられ、内面は黒茶色を呈している。61は貝殻刺突文を施した口縁部である。色調は茶褐色で、調整は磨きである。62と63は同一個体と考えられる。口唇部は平坦に整形され、口縁部が内側に向く丸みのある器形である。文様は口縁部に横位の沈線を廻し、胴部に貝殻腹縁部による横位の鋸歯状刺突文を連続で施している。内面は丁寧にやや磨きを掛けて仕上げている。色調は口縁部が茶褐色で、胴部が暗茶褐色である。64は口唇部の外側が丸みをもち、口縁部が内側に向く器形である。外面は瘤状突起の残りが縦位にみられ、文様は横位の貝殻腹縁部による押し下げた文形を全体的に施している。内面の整形は簡単に撫で調整をしている。色調は外面が茶褐色であるが口縁部に煤などによる黒色がみられ、内面は黒茶色を呈している。65は口唇部が平坦に整形され、口縁部が内側に向く丸みのある器形である。文様は貝殻腹縁部による横位に押し下げた文形を全面的に施している。内面の調整は磨きが掛かり丁寧に仕上げている。色調は外面が胴部から口縁部に掛けて黒灰褐色で胴部が明灰茶褐色である。内面は黒茶褐色の口縁部で見込みは灰茶褐色である。66は口唇部が平坦に整形され、内側に舌状に張り出し、口縁部が内側に向く丸みのある器形である。文様は貝殻背面部による横圧文を全面的に施している。内面の調整は磨きが掛かり丁寧に仕上げている。色調は外面が胴部から口縁部に掛けて黒灰褐色の斑点がみられ、胴部は灰茶褐色である。内面は黒茶褐色の口縁部で見込みは灰茶褐色である。

#### Vlb類（第94図67～71）

67と68は同一個体と思われる。口縁部が内側に向いた厚手のバケツ形の土器である。文様は貝殻腹縁部による曲線を縦位に組み合わせている。内面の整形は横位に撫で調整を行っている。色調は外面が灰茶褐色で、口縁部には煤による黒色の帯がみられる。内面は口縁部が灰茶褐色で胴部は黒色である。69と70は同一個体と思われる。やや薄手の土器で部位は胴部である。文様は細い沈線を縦位の鋸歯文を連続している。内面の調整は磨きである。色調は内面が黒褐色で、外面が口縁部に近い部分の黒褐色と胴部の灰茶色の組み合わせである。

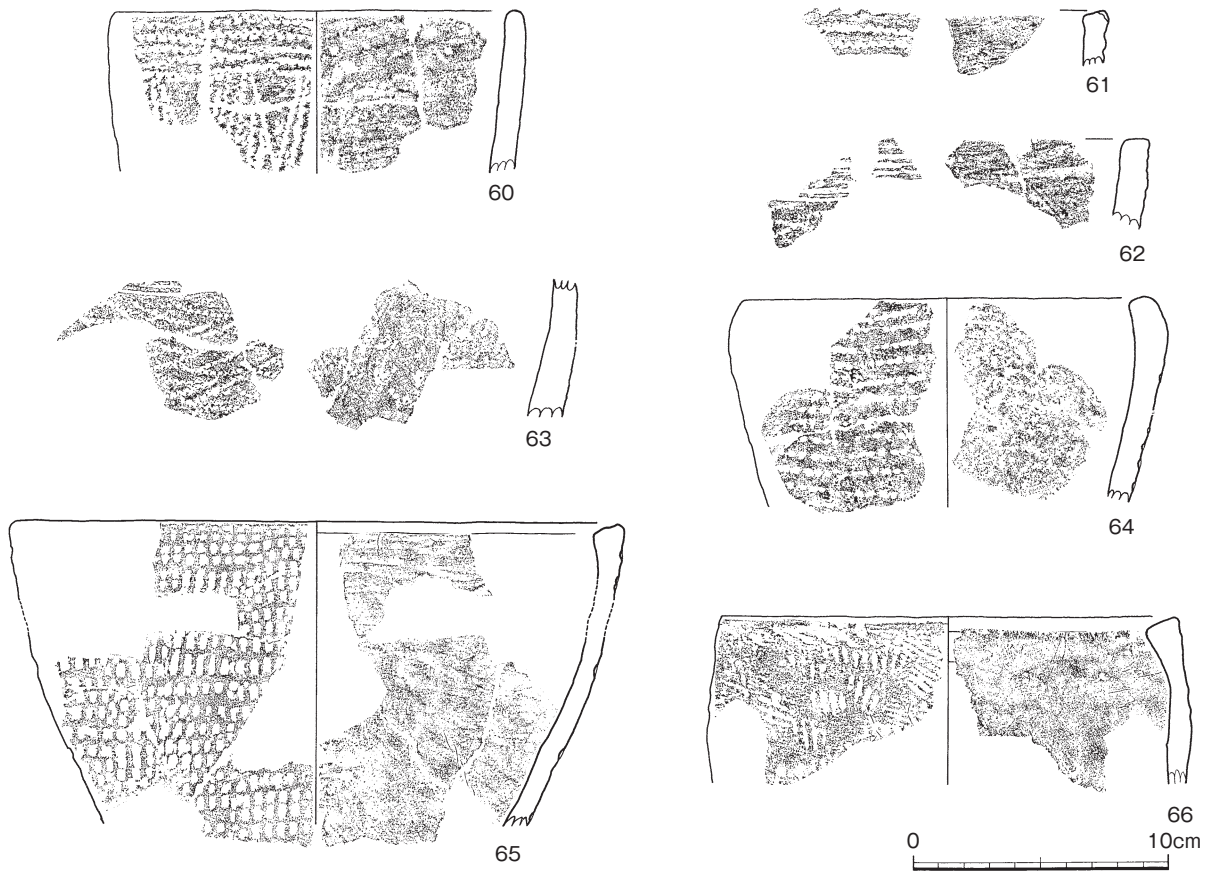
71は直行した口縁部をもつ円筒状の小形の土器である。文様は貝殻腹縁部による縦位の沈線を全面に施している。内面の調整は丁寧な磨きである。色調は外面が灰茶褐色で、内面が口縁部の暗茶褐色と胴部の黒色の組み合わせである。

#### VII類

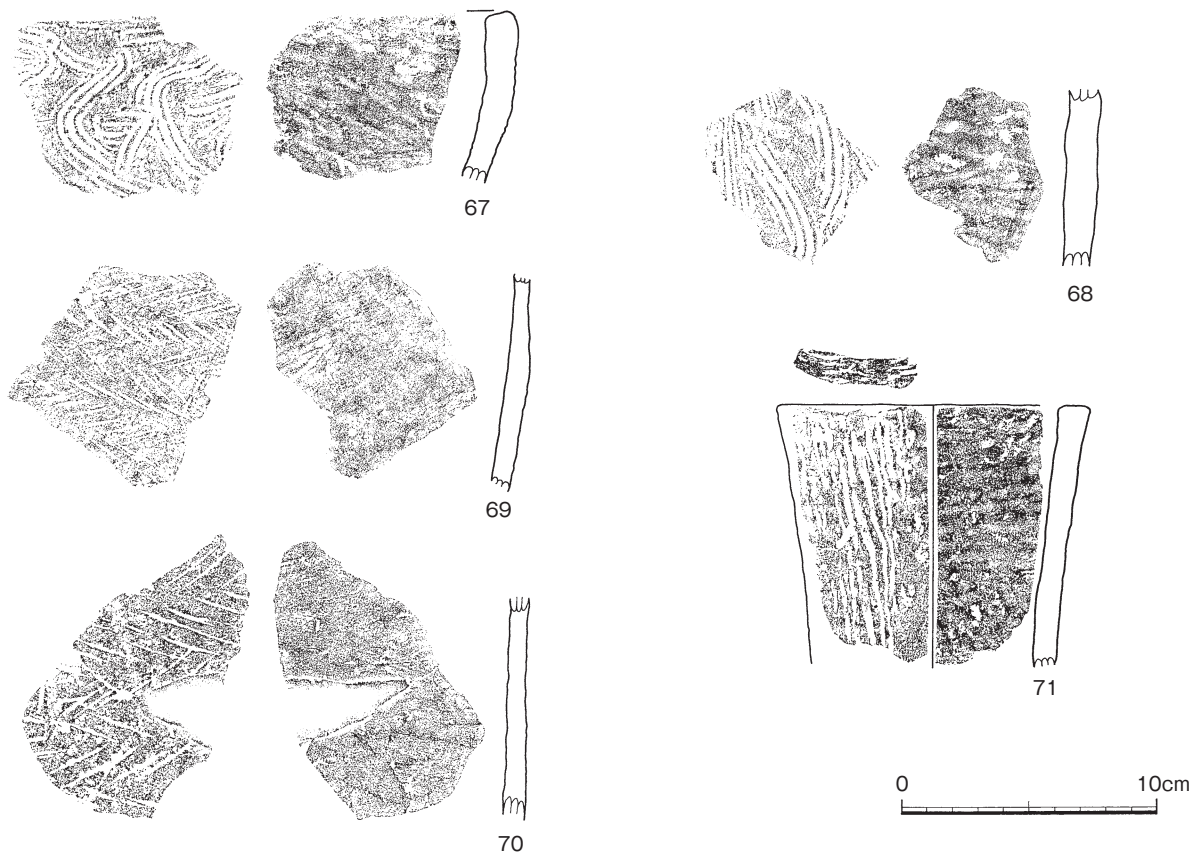
この類は文様が撚糸文系の土器で a～d に分けて説明をする。

#### VIIa類（第95図72・73）

この類は撚糸文が変形に施されているものである。72は頸部で締まり口縁部が大きく朝顔状に外反し、胴部は球状に膨らむ器形をしている深鉢である。文様付けは間をおき巻きつけた撚糸原体を作り施したものである。いわゆる変形撚糸文である。文様が付いている部位は口唇部、外面の口縁部から胴部、内面の口縁部に縦位に施している。内面の変形撚糸文は上部から見える部分に施されているが、部分的に消されている状況である。また、2～4条の細い筋も描かれている。胴部の文様は変形撚糸を横位に回転して施文している。色調は茶褐色がベースであるが内外面の一部に黒斑がみられる。73は72の器形と文様と調整が類似している。

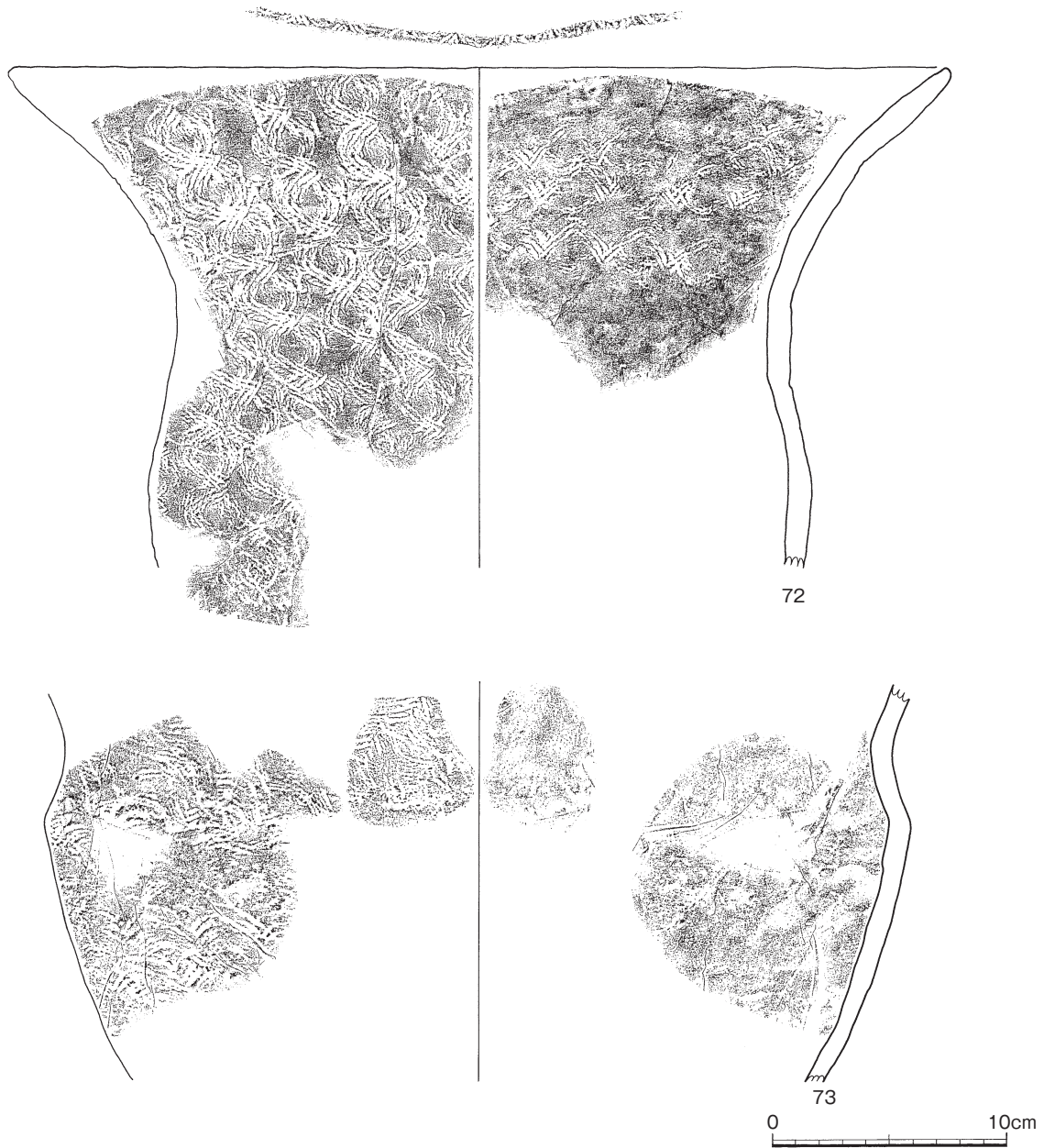


第93図 VIa類土器



第94図 VIb類土器



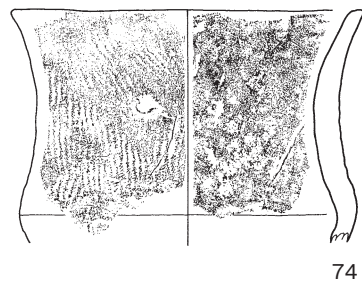


第95図 VIIa類土器

#### VIIb類 (第96図74~76)

この類は極細撚糸文が極細である。

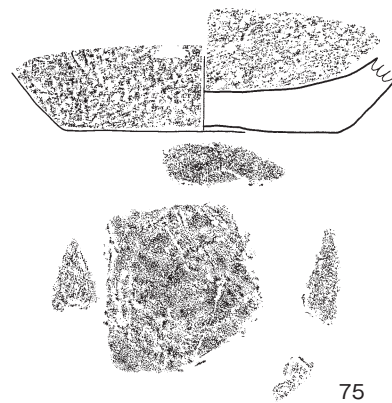
74は胴部で「く」字状に折れ、頸部でしまり、口縁部が外反する器形である。文様は細い目の詰まった撚糸を胴部から口縁部にかけて、縦位に施している。内側の調整は横撫でで器面を整形している。色調は外面の胴部が明茶褐色で、口縁部から頸部にかけては煤などで大方黒褐色になっている。内面は口縁部が黒色で頸部以下が暗茶褐色である。75は厚手の平底で、球状に胴部が立ち上がる器形である。外面文様は極細く目の詰まった撚糸文が全面に施されている。器面調整は外面が丁寧に撫で調整されている。内面は使用過程で変化したと考えられ、器面が荒くなり、凸凹が若干みられる。胎土の色調は黒色である。76は底部近くである。器は細い撚糸文を施したもので、色調が暗茶褐色である。前とは色調と厚みが違うが同一個体の可能性もある。



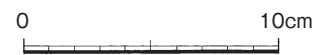
74



76



75



第96図 VIIb類土器

VIIc類 (第97図77・78)

この類は極太の撚糸文土器である。

77は太めの撚糸文が口縁部と胴部に横位に施されたものである。内側の側器面調整は口縁部が横撫で、胴部は斜めである。口縁部は平坦で、器形は筒状をなし厚手である。色調は全体的に黒褐色である。78は肩部が張り、頸部で締まる器形である。文様は太めの撚糸文を縦位に施している。色調は肩部が煤で黒色化しているが全体的に赤茶褐色である。内面にも黒斑がみられる。器面調整は外面が撚糸の上を撫で調整をしている。内面が横撫でである。

VIIId類 (第97図79・80)

この類は網目状撚糸文である。

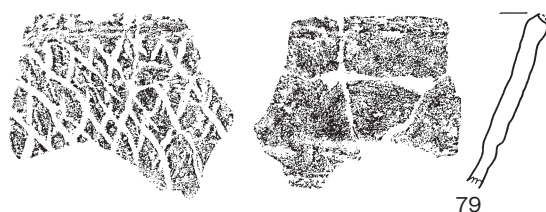
79は外開きの口縁部で、器面調整は撫で調整である。色調は灰茶褐色である。80は直行する胴部で、器面調整は撫でである。色調は灰茶褐色である。



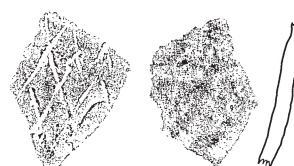
77



78



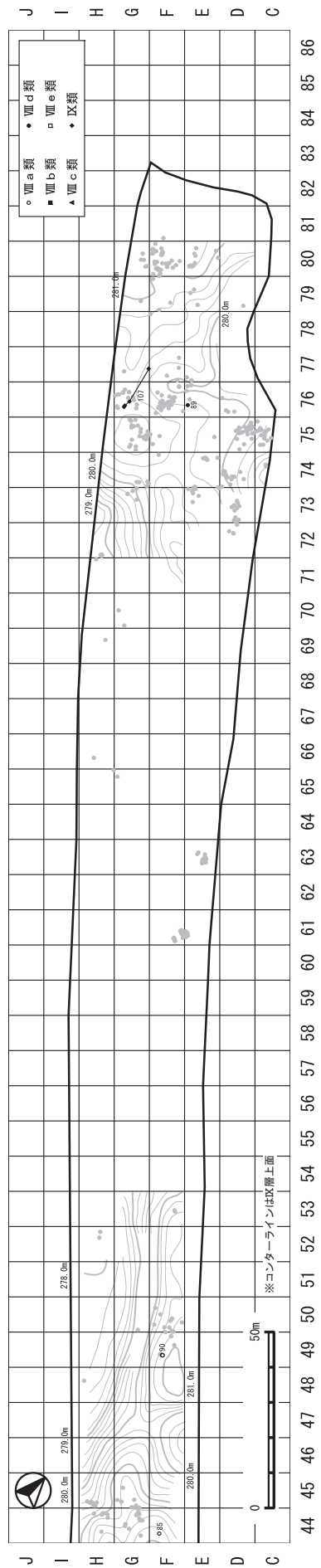
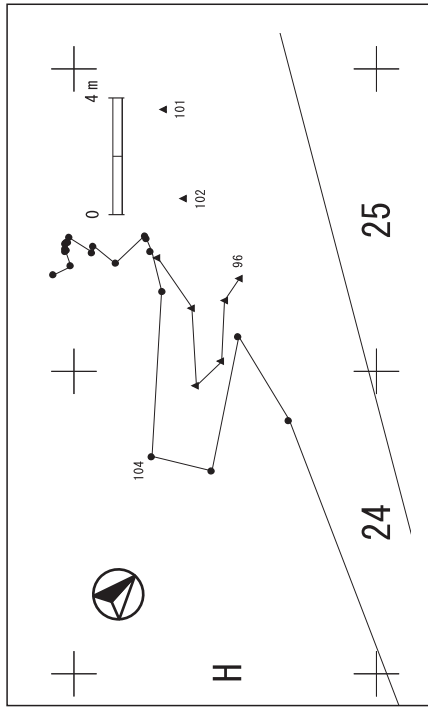
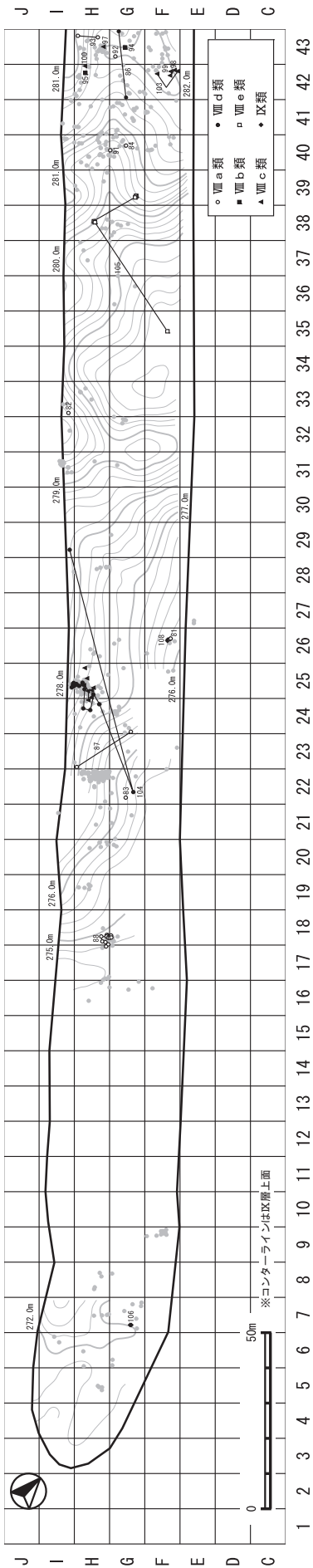
79



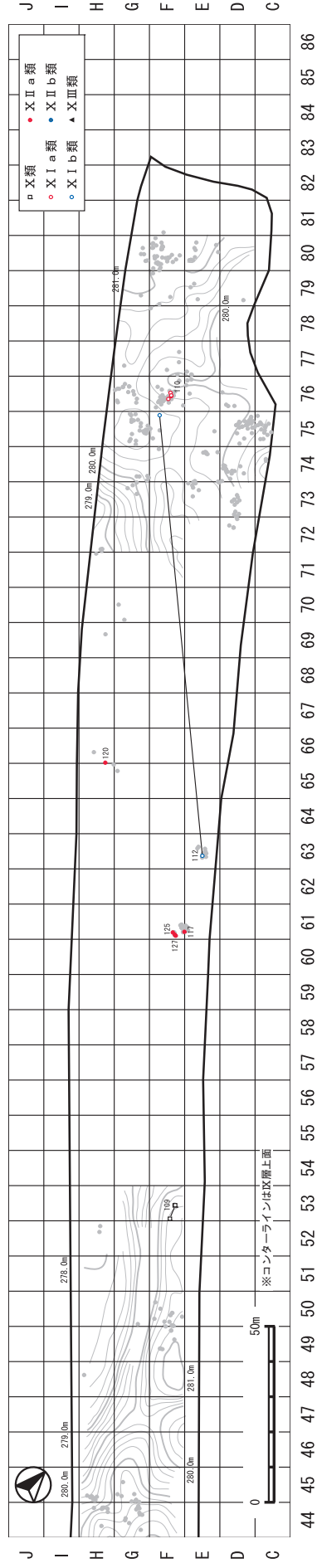
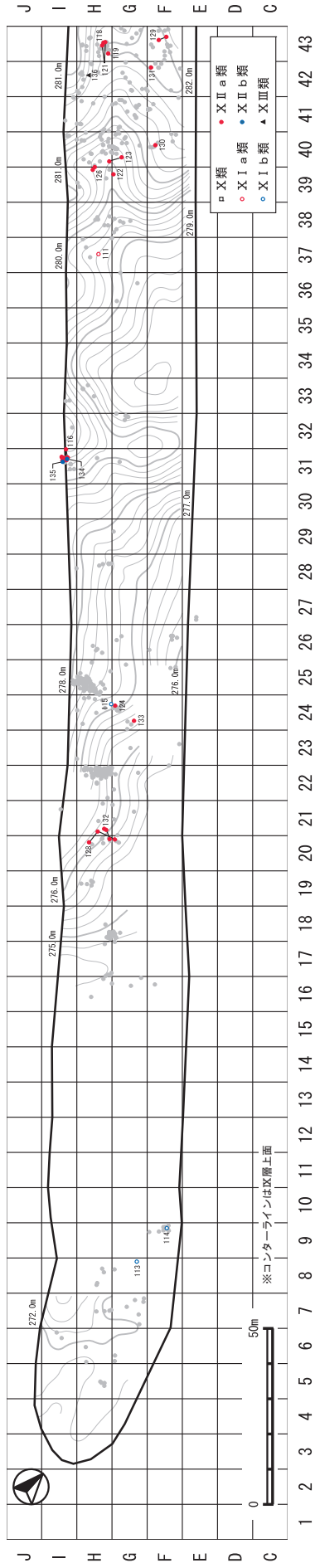
80



第97図 VIIc・VIIId類土器



第98図 VII類・IX類土器出土状況図



第99図 X類～Ⅲ類土器出土状況図

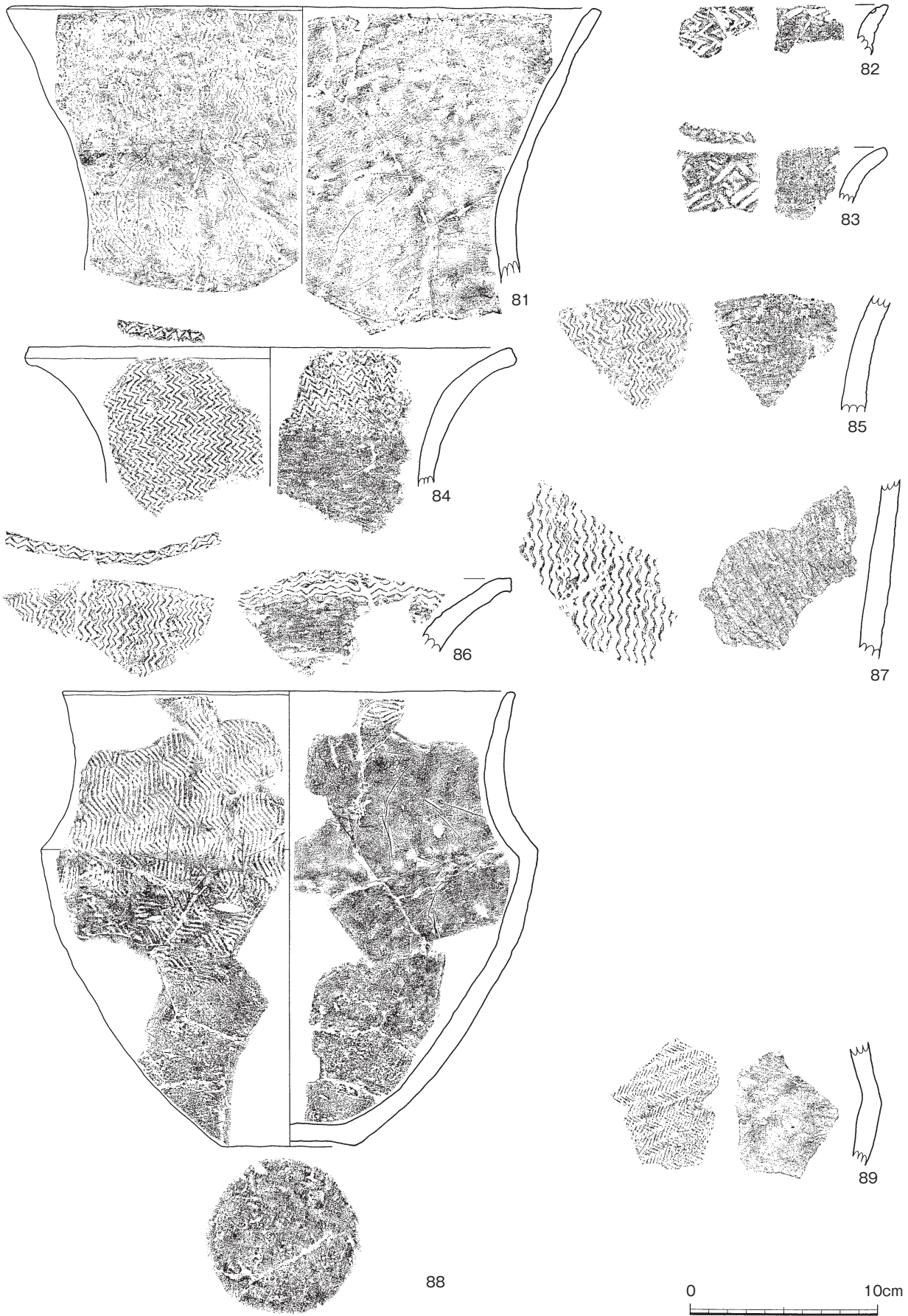
## Ⅷ類

この類は押型文を施したものである。

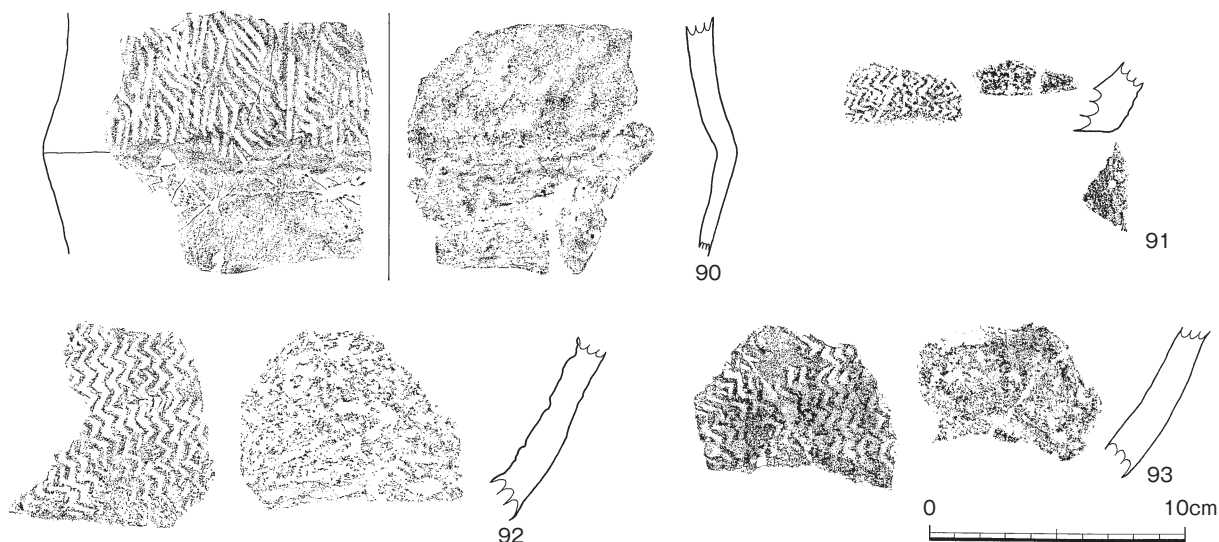
### Ⅷa類 (第100・101図81~93)

この類は山形押型文を施した土器である。

81は頸部がしまり、口縁部が朝顔状に外反する器形である。文様は口唇部と外面に施している。山形押型文は施文具自体が大きく、幅広の溝を付けたもので、外面は縦位に施されている。器面は、外面口縁部に煤が付着し、黒色の色調で、頸部は赤褐色をしている。内面は明茶褐色で、横撫で調整をしている。土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は $8,080 \pm 40$ (yrBP)であった。82は外反する口縁部である。文様は大型の山形押型文である。外面は押型文を縦位に施し、内面には竹管状の施文具で刺して引いている文様がみられる。色調は外面が灰茶褐色で内面が明茶褐色である。83は外反する口縁部である。文様は大型の山形押型文である。外面は押型文を縦位に二重に施し、口唇部にも文様がみられる。色調は明茶褐色である。84は頸部がしまり、口縁部が大きく外反する器形である。文様は口唇部、外面、内面に山形押型文がみられる。その山形押型文の溝は1単位4本が目につく。外面は山形押型文で縦位に、内面の押型文は横位に回転させている。色調は外面が茶褐色で、内面も茶褐色で口縁部には煤による黒斑も見られる。85は外反する厚手の頸部である。文様は7条と思われる溝のある原体で施した山形押型文である。外面は押型文を縦位に施している。内面は横撫で調整である。色調は外面が茶褐色で内面が黒色である。86は外反する山形口縁部である。口唇部はきちんと角を付け平坦に切っている。文様は6本の回転溝が目につき、道具としては6本の溝がある施文具の可能性もある。それを外面は縦位に、内面は横位に回転させている。色調は暗茶灰色で胎土の色は黒色である。87は直行する厚手の胴部である。文様は7条と思われる溝のある原体で施した山形押型文である。外面は押型文を縦位に施している。内面は丁寧な横撫で調整である。色調は外面が茶褐色で内面が黒色である。88は肩部で稜線をつくり、「く」の字状に張り、頸部で丸みをもって締まり、口縁部はやや外反し、胴部は球状に膨らむ器形である。底部はやや上げ底である。文様は7条と思われる切り込みを入れた原体を口縁部から肩部まで縦位に、胴部は横位ないし斜位に山形押型文を施している。胴部の下部は無文である。内面は原体を横位回転している。外面の色調は明茶褐色が基調で、煤などで変化した暗灰茶褐色斑で構成し、内面の色調は暗茶褐色を基調に黒斑がみられる。89は肩部で「く」の字に稜をつくり、頸部が締まり、胴部は丸みをもって張る器形をもつ土器である。文様は胴部から頸部にかけて縦位に細目の山形押型文を施している。内面の調整は指圧痕がみられ、撫で調整である。色調は黄茶褐色であり、外面に煤が付着し、黒色の斑点がみられる。90は肩部で「く」の字に稜をつくり、頸部が締まり、胴部は丸みをもって張る器形をもつ土器である。文様は肩部から頸部にかけて縦位に大型の山形押型文を施している。施文具の筋彫りは5条と思われる。内面の調整は指圧の起伏が斜位にみられ、手撫で調整している。色調は外面に煤が付着し、暗茶褐色の中に黒斑がみられ、内面は茶褐色である。91は平底である。胴部には山形押型文が縦位に施されている。92は胴部から底部にかけてのもので、丸みをもつ器形である。文様は大型の山形押型文で、縦位に施されている。内面は粗く凹凸がみられる。色調は外面が茶褐色に黒斑がみられる。内面は黒茶褐色である。



第100図 VIIIa類土器(1)

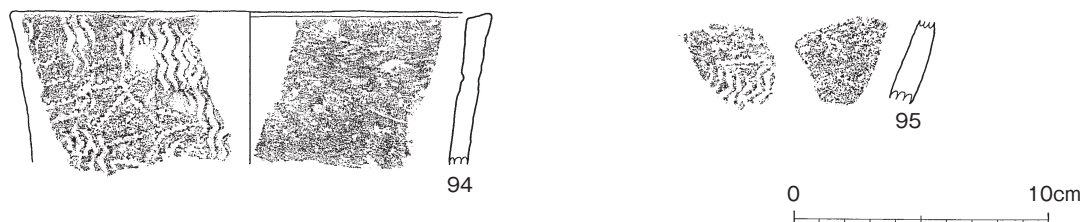


第101図 VIIIa類土器(2)

VIIIb類 (第102図94・95)

この類は山形押型文に貝殻刺突を施したものである。

94は平坦な口唇部で直行する口縁部である。文様は大型の山形押型文を縦位に施し、一部押型文を消し、貝殻腹縁で刺突を施している。内面は口唇部付近が横撫で調整であるが、縦位の調整痕がみられる。色調は黄茶褐色が基調であるが、口縁部に煤などの黒班がみられる。焼成度は硬質で、胎土には石英、角閃石、長石等がみられる。95は底部近くの胴部である。文様は大型の山形押型文と貝殻腹縁部の刺突文を組み合わせている。内面の器面調整はやや雑である。色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。



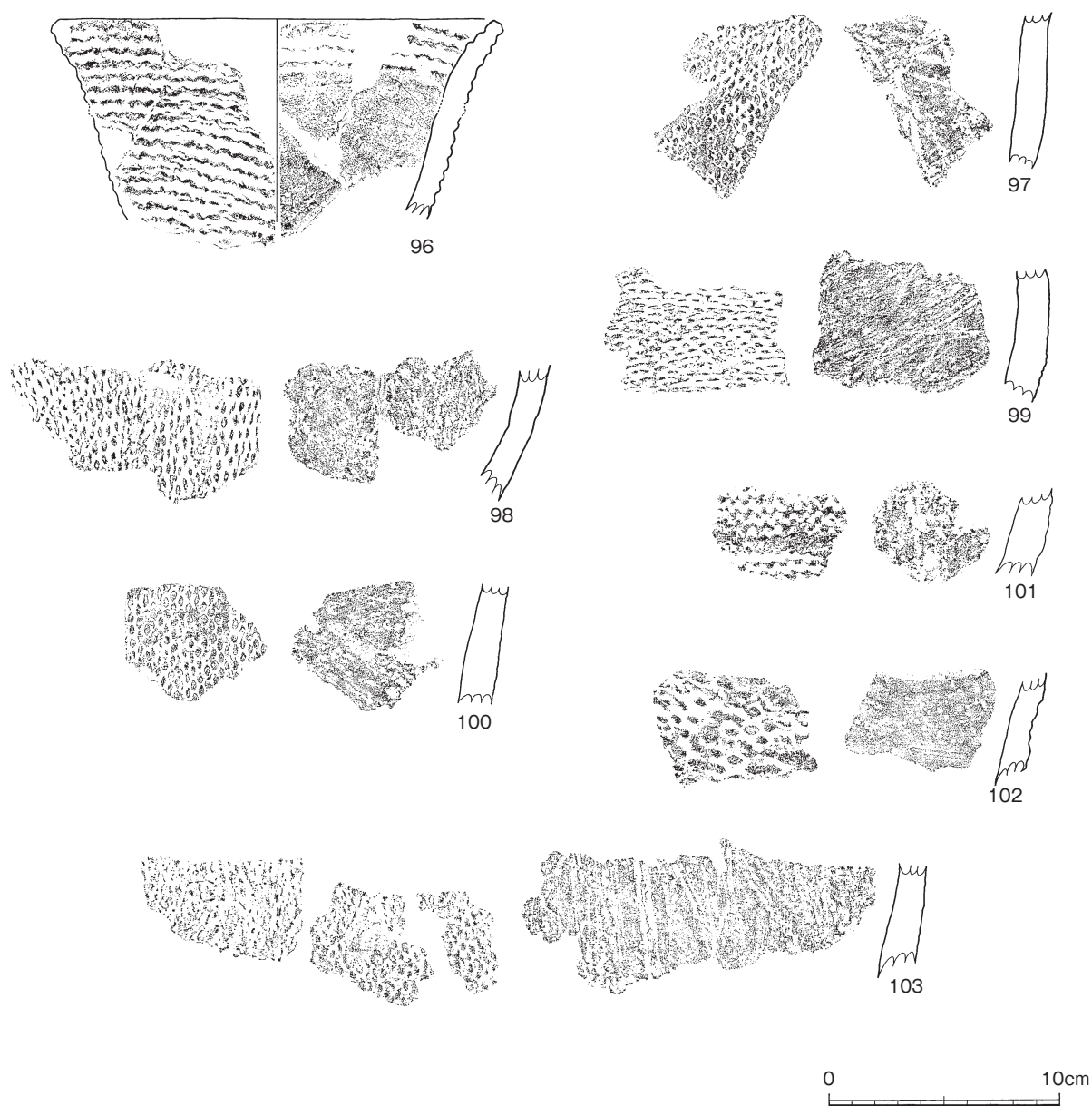
第102図 VIIIb類土器

VIIIc類 (第103図96~103)

この類は楕円押型文を施した土器である。

96は外反する口縁部である。口唇部は尖り気味につくり、頸部は厚い器壁である。文様は内側が3列、外側が5列と思われる楕円押型文を横位で外面全体と内面は口縁部に施している。内面調整は横撫でである。内面色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。97はやや締まった頸部から胴部にかけてである。文様は外面全体に楕円押型文を縦位に施している。内面の面調整は雑に斜位と横位の撫でがみられる。外面の色調は煤が付着し黒茶褐色である。内面は明茶褐色である。98は丸みをもつ胴部で、厚手である。文様は5列と思われる楕円押型文を縦位に施している。内面の器面調整はやや雑で縦位に施している。色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。99は丸みをもつ胴部で、厚手である。文様は5列と思われる楕円押型文を縦位に施している。内面の器面調整は掻き上げで斜位に施している。色調は外面が暗茶褐色で内面が茶褐色である。100・101・102・103は

胴部である。100・103は縦位に，101・102は横位に施している。調整は撫で調整で，色調は黒褐色である。



第103図 VIIIc類土器

#### VIII d類 (第104図104)

この類は格子目押型文を施したものである。

104は肩部で稜をもち頸部で締め，口縁部が大きく開き，胴部が丸みを持つ器形である。縦位と横位の筋を掘り込んだ施文具で回転して押型文を施している。結果的に四角形の舛が菱状に施文された形で，その舛は5列と思われる。施文は口唇部と内側口縁部そして，外面全体である。押型文は口縁部内側や外面全体から観察すると菱形をなしているのので，施文具の筋は斜状にクロスしていることが伺えられる。よって，施文方向は内面が横位に外面が縦位と考えられる。土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は， $8,110 \pm 40$ (yrBP)である。





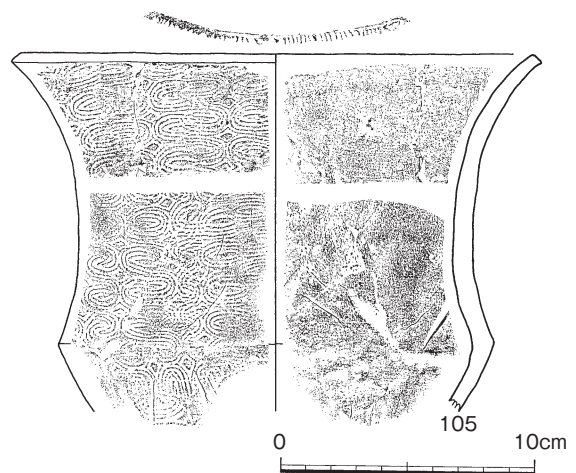
第104図 VIII d類土器

**VIII e類 (第105図105)**

この類は同心円状の楕円押型文が施されているものである。

105は稜をもつ肩部が土器の下位になり、頸部が長くやや縮まり、口縁部が外反する器形である。

なお、胴部は丸みをもっている。文様は口唇部と外面に縦位に施されている。内面の調整は横位の撫で調整である。色調は、外面は茶褐色の中に黒斑が有り、内面は明茶褐色である。

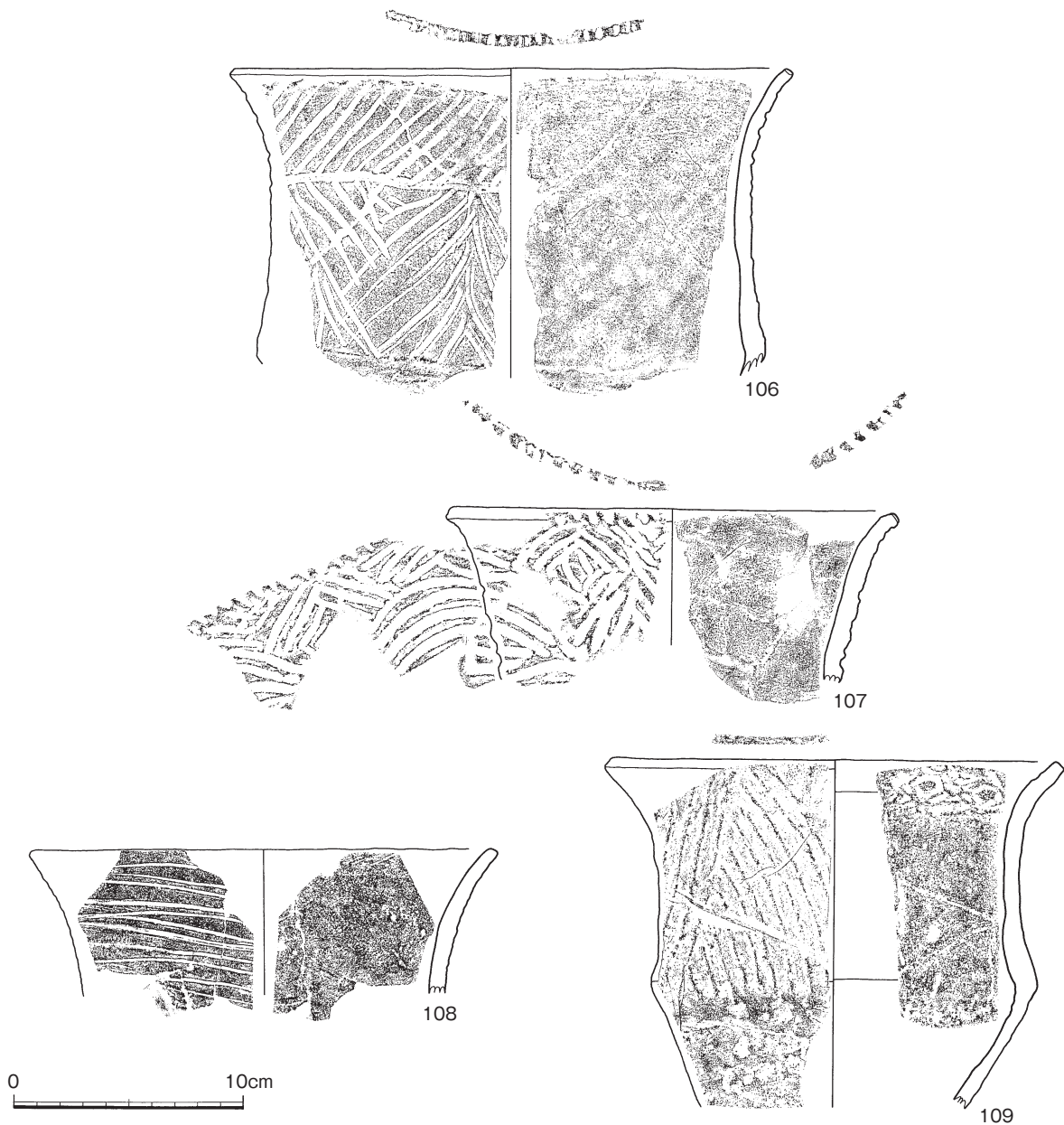


第105図 VIII e類土器

**IX類 (第106図106~108)**

この類は文様に沈線文を施すタイプである。

106は肩部に稜を付け「く」の字状に折れ、頸部が長く、やや縮まり、口縁部が外反する器形である。文様は口唇部には刻み目を施し、口縁部から頸部の間に、沈線文を施している。文様の構成は頸部の上部に横位の沈線を施し、上部は斜位の沈線を廻し、下部には斜位の沈線を直角に組合わしている。内面の調整は丁寧な横撫で調整である。色調は外面が黄茶褐色で、内面が暗茶褐色である。



第106図 IX類・X類土器

器壁は薄手である。107は頸部から外反する器形の口縁部である。文様は口唇部に刻み目を入れ、弧文を重ねた重弧状と菱形をした舛内に重ねた重舛形状の文様を施している。また、重弧状と重舛形状の文様の間には山形状の文様を施している。なお、下部の文様は山形を重ねた部分らしいところが伺える。内面の調整は丁寧な横撫で調整である。色調は内外面が暗灰茶褐色中に黒斑がある。器壁は薄手である。108は頸部から大きく外反する口縁部である。文様は細い沈線を横位に施している。内面の調整は丁寧な横撫で調整である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が暗茶褐色である。器壁は薄手である。

**X類 (第106図109)**

この類は微隆起突帯を施した土器である。

109は肩部に稜を付け「く」の字状に折れ、頸部が長く、やや締まり、口縁部が外反する器形である。なお、胴部は直線的に底部に向かっていく。文様は肩部より上に微隆起突帯を弧状の縦位に重

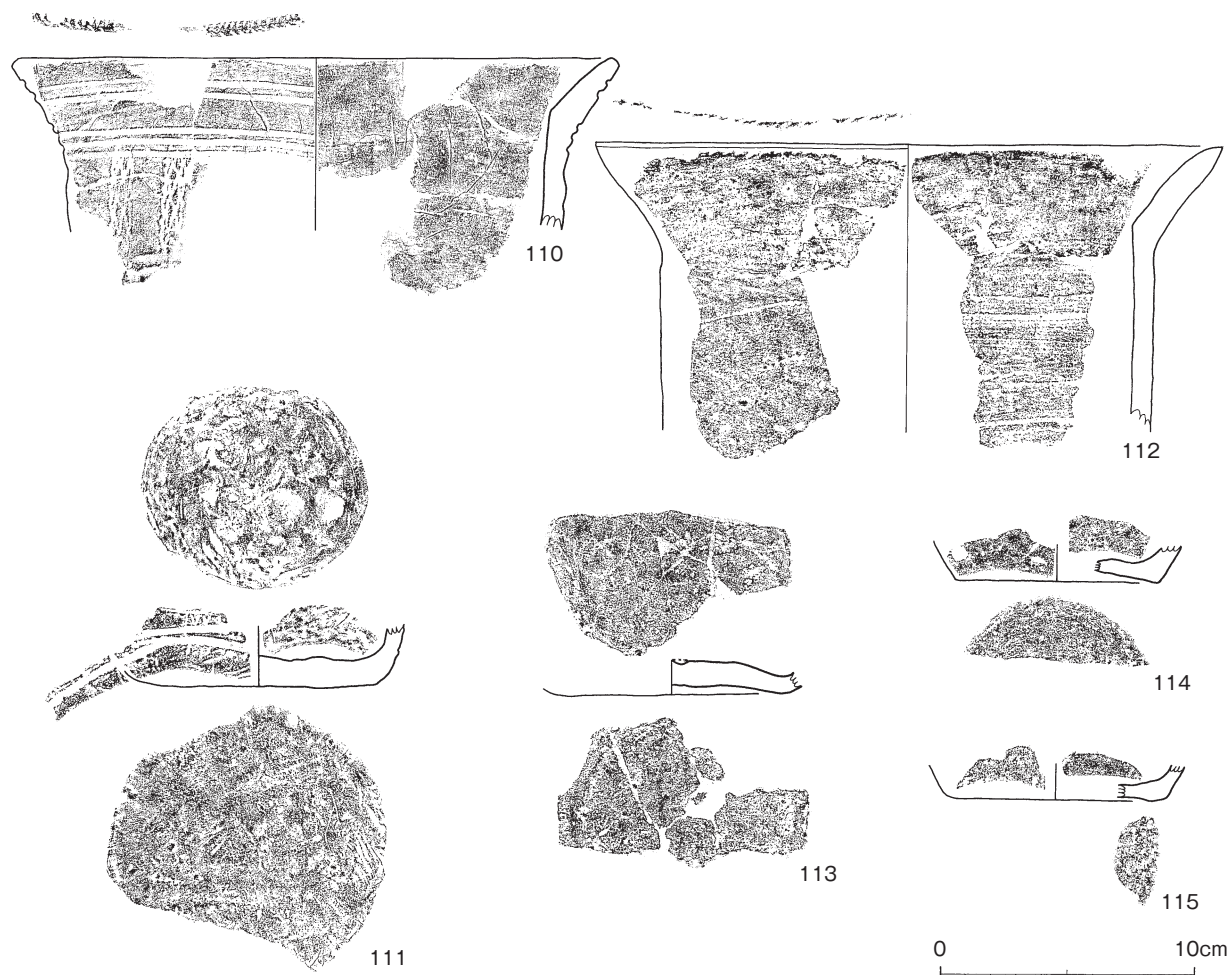
ねて施し，内面には円形と山形類似の押型文を横位に施している。内面の調整は丁寧な横撫で調整である。色調は外面が暗茶褐色で，内面が黒茶褐色である。器壁は薄手である。

### XI類

この類は撚糸文と貝殻刺突文を施す土器群である。a類は撚糸と沈線文を施すもの，及び口唇部に刻みはあるが外面に施さないもの，b類は貝殻文と沈線文を施すものと，沈線のみのもものに分類した。

#### XIa類 (第107図110・111)

110は頸部で「く」の字状に折れ口縁部が外反し，胴部は直行する器形である。文様は口唇部に羽状の刻み目を施し，口縁部に2条の沈線，頸部に3条の沈線を横位に施している。胴部は網目状の撚糸文を縦位に施している。色調としては外面が暗灰茶褐色の胎土に黒色の煤が沈線内や口縁部に付着している。内面には煤が付着していない暗灰茶褐色を呈している。111は平底の底部である。底部の外面の器面調整は撫で調整で，角は丸く餅状に整形され，中には窺状の刺し痕が走っていて



第107図 XI類土器

キズもある。内面の整形は中央部を厚く手撫でできり，胴部との縁を窺状施文具で押しなでており，全体的に凹凸がみられる。文様は胴部の境に2条の沈線を横位に廻らし，縦位に網目状撚糸文を施している。この網目状撚糸文は底面まで届いている部分もある。器面の色調は外面周囲が茶褐

色で、中央部が煤付着で黒色を呈している。内面は縁が黒褐色で中央部が灰褐色を呈している。

#### XIb類 (第107図112~115)

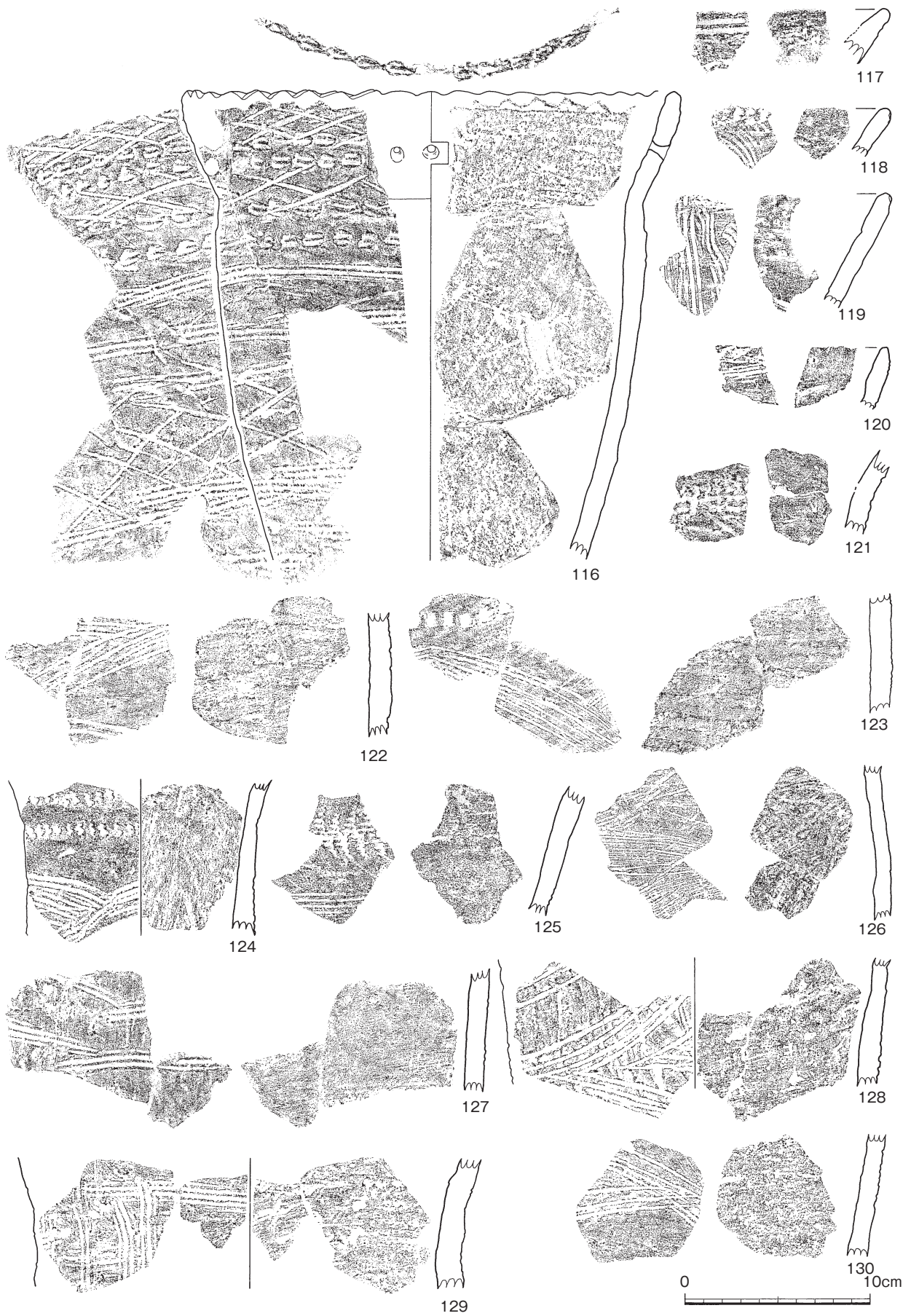
112は頸部で「く」の字状に外反し、直行した胴部の器形である。文様は口唇部に斜向した刻目文を施すのみである。器面調整は内外面とも篋状施文具による横撫でを施している。器面の色調は外面が灰茶褐色の上に黒色の煤が付着している。内面は茶褐色である。113, 114, 115は若干上げ底気味の底部である。上部の文様は不明であるが、薄手の整形、灰茶褐色の色調、胎土、焼成度で見れば第XI類に入る土器である。

#### XII類

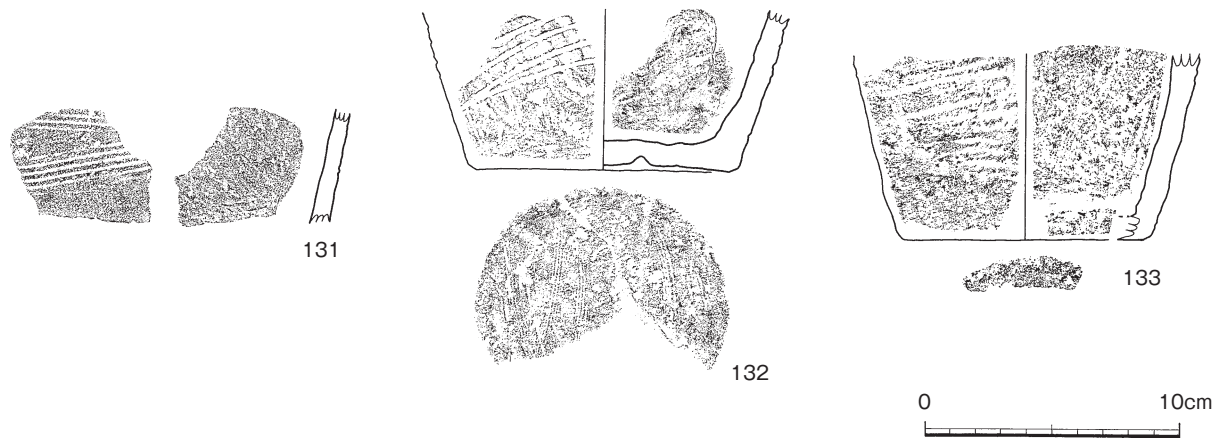
第XII類は頸部で屈折及び屈曲しやや外反した器形で、器壁が厚く、やや粗雑に器面調整されたもので、貝殻腹縁部による刺突文様や沈線を持つものである。この類は有文が第XIIa類、無文が第XIIb類に分けられた。

#### XIIa類 (第108図116~133)

116は頸部で鈍角に「く」の字状に折れ、口縁部が外反し、胴部が若干丸みを持ちながら張る深鉢である。口唇部は貝殻腹縁部による押し引きの刻みを施し、口縁部は菱形格子の沈線文の上に貝殻腹縁部による押し引き刻文を頸部から上に施している。頸部は貝殻腹縁部による横位の沈線を施し、胴部は貝殻腹縁部の沈線を上位と下位に、一部は交差する2条をそれぞれに廻らし、中位は菱形格子目文の沈線を施している。色調は黒褐色を呈し、口縁部外面に煤が付着し黒色斑点がみられる。器面調整は、篋状施文具による撫で調整である。また、円形の補修孔が口縁部にみられる。117は外反する口縁部で、文様は沈線と貝殻刺突の一部が見られる。色調は外面が暗茶褐色で内面が黒褐色である。118は外反する口縁部で、文様は横位の貝殻刺突と曲状の貝殻条痕が見られる。色調は外面が灰茶褐色で内面が茶褐色である。119は外反する口縁部で、文様は横位貝殻刺突と縦位の貝殻状痕が見られる。色調は内外面暗茶褐色である。120は外反する口縁部で、文様は斜傾の貝殻刺突と貝殻条痕及び沈線が見られる。色調は外面が赤茶褐色で内面が茶褐色である。121はやや外反する頸部である。文様は貝殻腹縁部による横位の連続刺突文と同条痕である。色調は内面が灰茶褐色で、外面が茶褐色ある。122は厚手の胴部である。文様は4本の沈線を束状にし、交差した沈線文である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が灰褐色である。器面調整は篋撫で調整である。123は胴部である。文様は貝殻刺突文と束にした弧状の沈線文である。色調は外面が黒褐色で、内面が暗褐色である。器面調整は篋撫で調整である。124は外反する口縁部をもつ頸部で、文様は口縁部に横位の貝殻刺突と弧状の貝殻条痕及び沈線が見られる。器面調整は内面が縦位の撫で調整で、外面が丁寧な撫で調整である。色調は外面が黒茶褐色で、煤の付着もみられ、黒斑がある。内面は茶褐色である。125はやや外反する頸部である。文様は貝殻腹縁部による横位の連続刺突文と同条痕である。色調は内外面灰茶褐色である。126は薄手の頸部から胴部である。文様は束状にした弧状の沈線文である。色調は外面が茶褐色で、内面が暗褐色である。器面調整は篋撫で調整である。127は厚手の胴部である。文様は貝殻腹縁部による4本の条痕で、繋ぎながら横位に施している。色調は外面が茶褐色で、内面が灰褐色である。器面調整は篋撫で調整である。128は薄手の胴部である。文様は4本沈線を束状にした「く」の字状の沈線文の繰り返しである。色調は外面が茶褐色で、内面が暗褐色である。器面調整は篋撫で、内面は荒い篋撫で調整である。129はやや締まった厚手の



第108図 XIIa類土器(1)

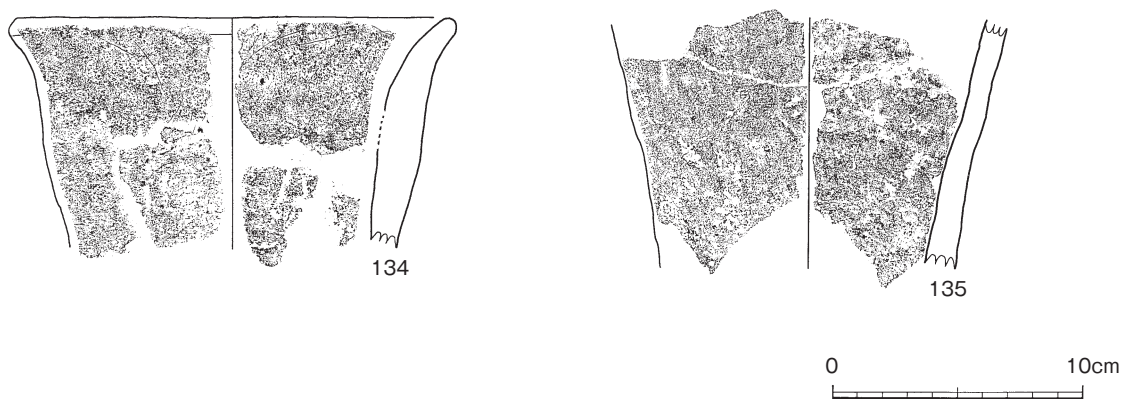


第109図 XIIa類土器(2)

頸部である。文様は格子目に施した貝殻条痕である。色調は外面が暗褐色で、内面が茶褐色である。器面調整は篋撫で調整である。130は厚手の胴部である。文様は3ないし4本の沈線を束状にし、交差した沈線文である。色調は外面が茶褐色で、内面が明暗褐色である。器面調整は篋撫で調整である。胎土は石英、長石、角閃石等がみられる。焼成度は良く硬質である。131は薄手の胴部である。貝殻腹縁部による沈線文である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が茶褐色である。器面調整は篋撫で調整であるが全体的に角が潰れ川で磨耗された状況で研磨状である。132は厚手の底部である。文様は4本の沈線を束状にした沈線文である。色調は外面が茶褐色で、内面が黒褐色である。器面調整は篋撫で調整で、底面内部は凸凹である。133は厚手の底部である。貝殻腹縁部による斜条痕である。色調は外面が灰茶褐色で、内面が灰暗褐色である。器面調整は篋撫で調整である。

XIIb類 (第110図134・135)

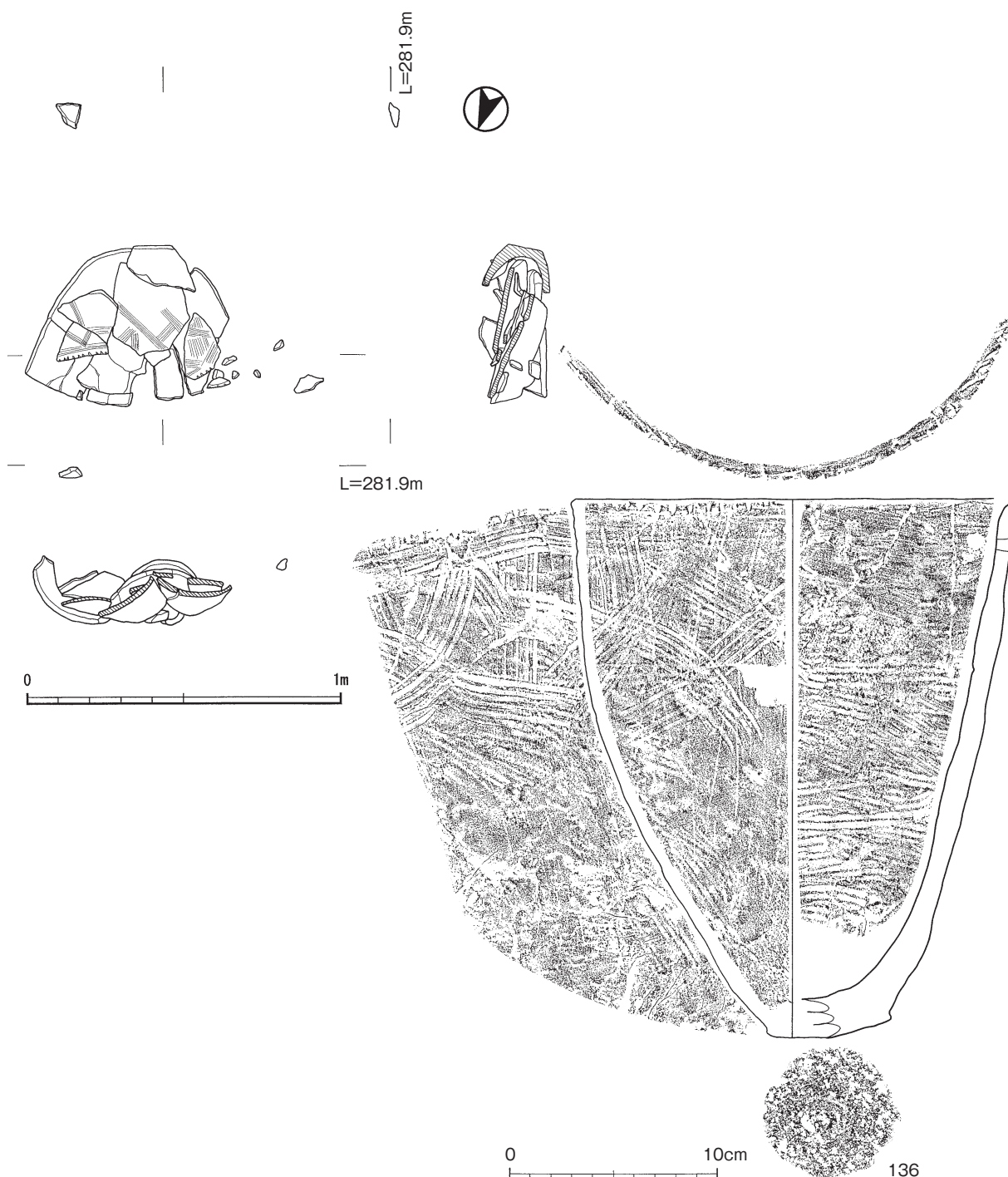
134は口縁部が外反する器形で、器壁の厚みは口縁部より胴部が厚くずんぐりとした深鉢である。色調は口縁部外面が黒褐色で胴部は暗茶褐色である。内面は口縁部が暗茶褐色で胴部は茶褐色である。135は深鉢の胴部である。器面調整は丁寧な撫で調整である。色調は外面が茶褐色で、内面が黒褐色である。



第110図 XIIb類土器

Ⅲ類 (第111図136)

この類は文様に条痕を施すものである。136は口縁部が直行し、胴部から底部に向かって絞り込まれ、丸底に若干貼り付けをして段を付けた底部をもつ深鉢の完形土器である。器形としてはいびつである。文様は口唇部外面に篋状施文具による刻み目を施し、口縁部から胴部にかけて貝殻腹縁部による6条の条痕を3～4cm間隔で縦位に施し、口縁部には横位に、胴部には施文具を交差させ菱形の格子状に施している。器面調整は外面が貝殻条痕の上を撫で調整し、内面は貝殻腹縁部による横位の条痕を施している。色調は外面の口縁部に煤が付着し黒褐色を呈し、胴部から下は茶褐色である。なお、底部は使用されて白色化している。また、内面は黒茶褐色を呈している。



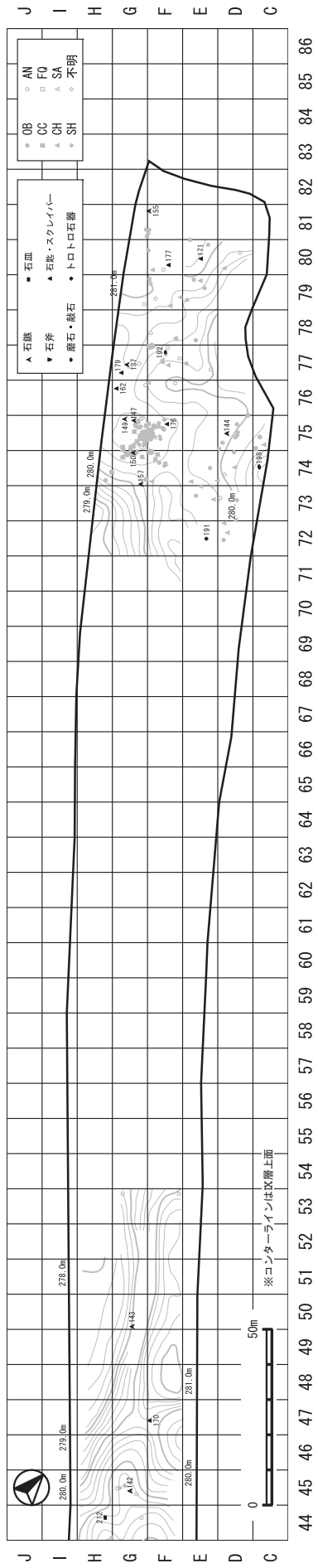
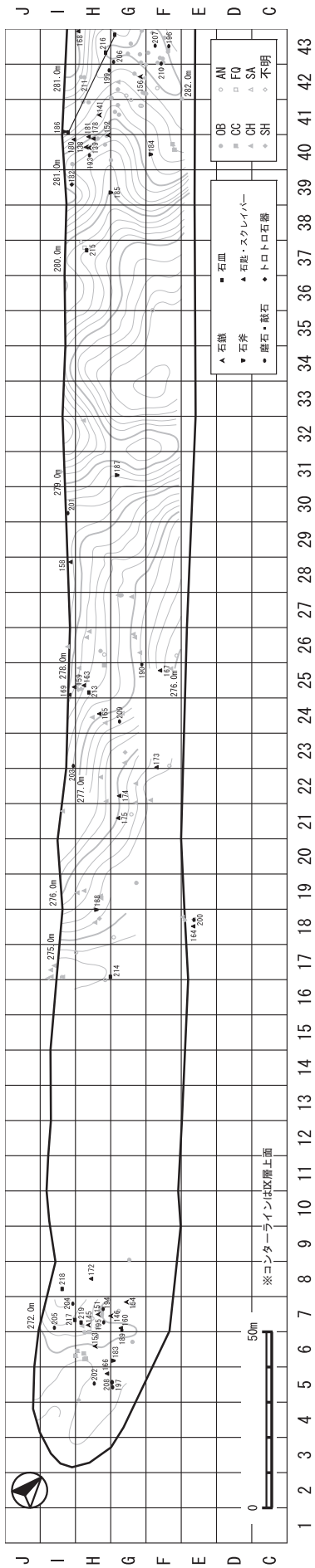
第111図 Ⅲ類土器及び出土状況図

第20表 II類～XIII類土器観察表(1)

器種	図番号	取上番号	分類1	分類2	区	層位	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考												
88	27	20818 2151 21572 21603	II	a	H 42 VII -		貝殻刺突文 丁寧な筒撫で	丁寧な筒撫で	暗灰褐色	黒褐色	長・石	硬質	口径12.6cm												
		F 39 VII -																							
		I 42 VII -																							
		H 34 VII -																							
		G 79 VII -																							
89	31	21140	II	a	H 22 VII -		丁寧な筒撫で 筒撫で	丁寧な筒撫で 筒撫で	暗灰茶褐色 茶褐色	暗灰褐色 黒色	長・石・雲 長・石・雲	硬質 硬質 硬質	底径14.4cm 底径9.4cm												
		D 79 VII -																							
		H 22 VII -																							
		F 68 IV a																							
		C 74 VII -																							
90	31	1980	III	b	C 75 VII -		沈線 丁寧な筒撫で	筒撫で	黒茶褐色	暗灰褐色	長・石・雲	普通	底径12.0cm												
		1989																							
		1992																							
		3536																							
		5969																							
		4759																							
		5902																							
		459																							
		227																							
		4829																							
		4855																							
		5898																							
		407																							
		5899																							
		5908																							
91	46	1987	IV	c	C 75 VII -		刻目 筒撫で	筒撫で	明茶褐色	明茶褐色	長・石・雲	硬質													
		1945																							
		1984																							
		4852																							
		456																							
		1988 4838																							
		1999																							
		10612																							
		3851																							
		3853																							
		4217 5958																							
		4200																							
		3847																							
		2868																							
		92			50									435 439 440 445 446 448	V	d	D 75 VII -		貝殻刺突文 綾杉条痕文	撫で	明茶褐色	明茶褐色	長・石・雲	硬質	口径22.8cm
2885																									
52																									
51																									
53																									
54																									
55																									
56																									
57																									
58																									
59																									
93	60		21580 21582 21584 21600	VI		a	H 40 VII -		貝殻刺突文	丁寧な撫で	茶褐色	黒茶褐色	長・石・雲	硬質			口径16.8cm								
			52																						
			20009																						
			21075																						
		21587																							
		21573																							
		62																							
		63																							
		64																							
		65																							
		66																							
		67																							
		68																							
		69																							
		94	70		2889 2891 2893		VII								a	H 42 VII -			貝殻刺突文 丁寧な筒撫で	筒撫で	茶褐色	茶褐色	長・石・雲 長・石・雲・砂	硬質	口径40.4cm
22283																									
10700 10755 10757																									
10759 11250 11256																									
11298 11302 11303																									
11310 11354 11355																									
11359 11360 11361																									
11495 11496 11497																									
11498 11499 11502																									
11505 11506 11507																									
11508 11509 11512																									
11513 11514 11517																									
11518 11523 11524																									
11539 11549 11667																									
11715 11716																									
95	72	11758	VII	a	H 6 VII -		変形撚糸文	撫で	明赤褐色	明黄褐色	長・石・雲	硬質	口径40.4cm												
		11255 11259 11291																							
		11522 11535 11541																							
		11552 11664 11665																							
		4756																							
		7895																							
		7899																							
		20010																							
		48 53 21042																							
		21046 21060																							
		11464																							
		4870																							
		11870 12030 12031																							
		12154																							
		11003 11007																							
11009 11010																									
96	74	11941	VIII	a	E 74 VII -		網目状撚糸文	撫で	灰茶褐色	灰茶褐色	長・石・雲 長・石・雲・角	軟質 普通 硬質	口径3.4cm 年代測定 口径25.8cm												
		11213 11214																							
		22282																							
		5984																							
		21085																							
		6215																							
		20854																							
		20883																							
		5977																							
		11349																							
		5895 12275 12331																							
		12124 12130 12205																							
		12206 12207 12208																							
		12211 12212																							
		12218 12223																							
97	77	11870 12030 12031	VIII	a	H 18 VII -		山形押型文	撫で	明茶褐色	暗茶褐色	長・石・雲 長・石・雲・角	硬質	口径24.0cm 底径7.2cm 器高24.3cm												
		12154																							
		11003 11007																							
		11009 11010																							
		1941																							
		11213 11214																							
		22282																							
		5984																							
		21085																							
		6215																							
		20854																							
		20883																							
		5977																							
		11349																							
		5895 12275 12331																							
12124 12130 12205																									
12206 12207 12208																									
12211 12212																									
12218 12223																									
98	78	11870 12030 12031	VIII	a	H 17 VII -		山形押型文	撫で	黄茶褐色	黄茶褐色	長・石・雲 長・石・雲・角	硬質	口径24.0cm 底径7.2cm 器高24.3cm												
		12154																							
		11003 11007																							
		11009 11010																							
		1941																							
		11213 11214																							
		22282																							
		5984																							
		21085																							
		6215																							
		20854																							
		20883																							
		5977																							
		11349																							
		5895 12275 12331																							
12124 12130 12205																									
12206 12207 12208																									
12211 12212																									
12218 12223																									
99	79	11870 12030 12031	VIII	a	E 76 VII -		山形押型文	撫で	黄茶褐色	黄茶褐色	長・石・雲 長・石・雲・角	硬質	口径24.0cm 底径7.2cm 器高24.3cm												
		12154																							
		11003 11007																							
		11009 11010																							
		1941																							
		11213 11214																							
		22282																							
		5984																							
		21085																							
		6215																							
		20854																							
		20883																							
		5977																							
		11349																							
		5895 12275 12331																							
12124 12130 12205																									
12206 12207 12208																									
12211 12212																									
12218 12223																									







第112図 VIII層～VIa層（縄文早期）出土石器状況図

## (2) 石器

縄文時代早期の石器は、Ⅷ層～Ⅵa層を中心に出土している。同包含層内からは、縄文時代早期の土器が出土しており、石器類に関しても同様と想定する。以下に、石鏃21点、石匙11点、スクレイパー13点、トロトロ石器1点、局部磨製石斧1点、打製石斧5点、磨石・敲石22点、石皿9点を図示した。

### 石鏃 (第113・114図137～157)

25点出土し、21点図示した。

137～143は最大長2cm未満の小型のものである。137～140は、二等辺三角形形状を呈し、138・140は基部が浅く凹む。141～143は正三角形形状を呈し、141・142は基部に浅い抉りが、143は明確に脚部が作出された深い抉りが見られる。

144～151は最大長2cmを超える大型のものである。144・145は二等辺三角形形状を呈し、基部に抉りは見られない。146～151は二等辺三角形形状を呈し、基部に抉りが見られる。147～151は、明確に脚部が作出されている。150・151は、胴部中央のやや下位に角をもつ形状である。

152～154は、欠損のため形状の分類ができなかった。155～157は未製品である。

### 石匙 (第115・116図158～168)

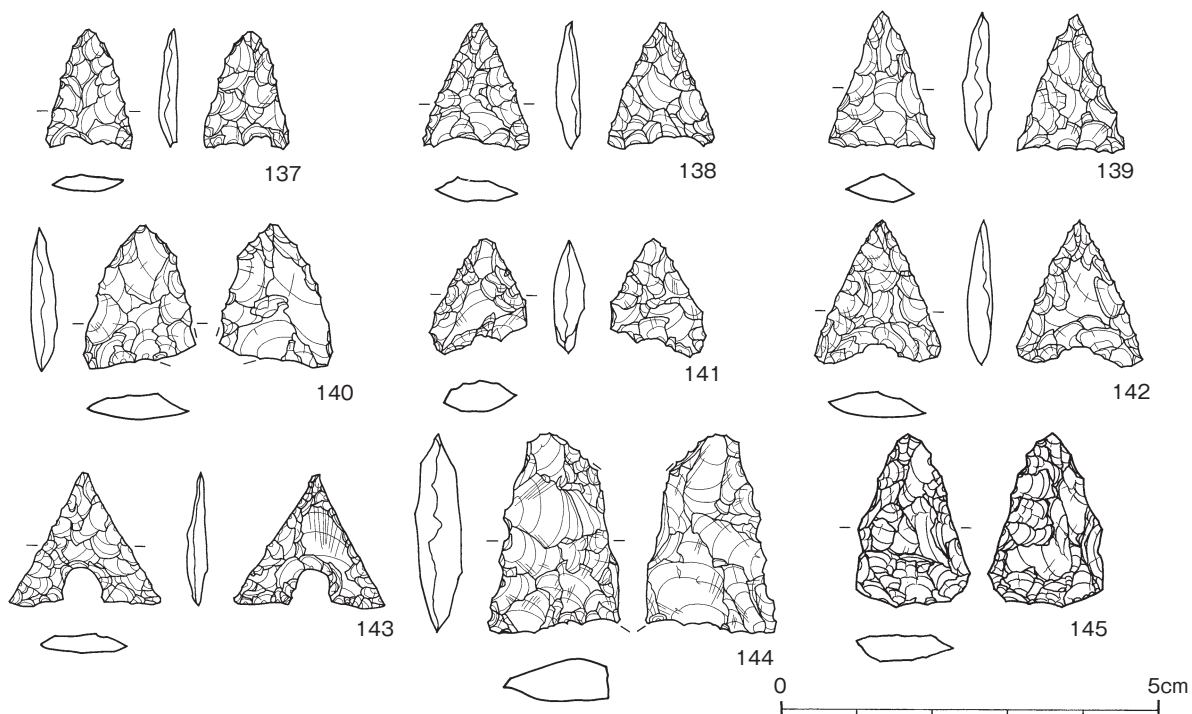
11点出土し、全て図示した。160・162～164はチャート製、158・159・161・165～168は安山岩製であり、チャート製4点のうち3点は縦長の形状をしている。

### スクレイパー (第116・117図169～181)

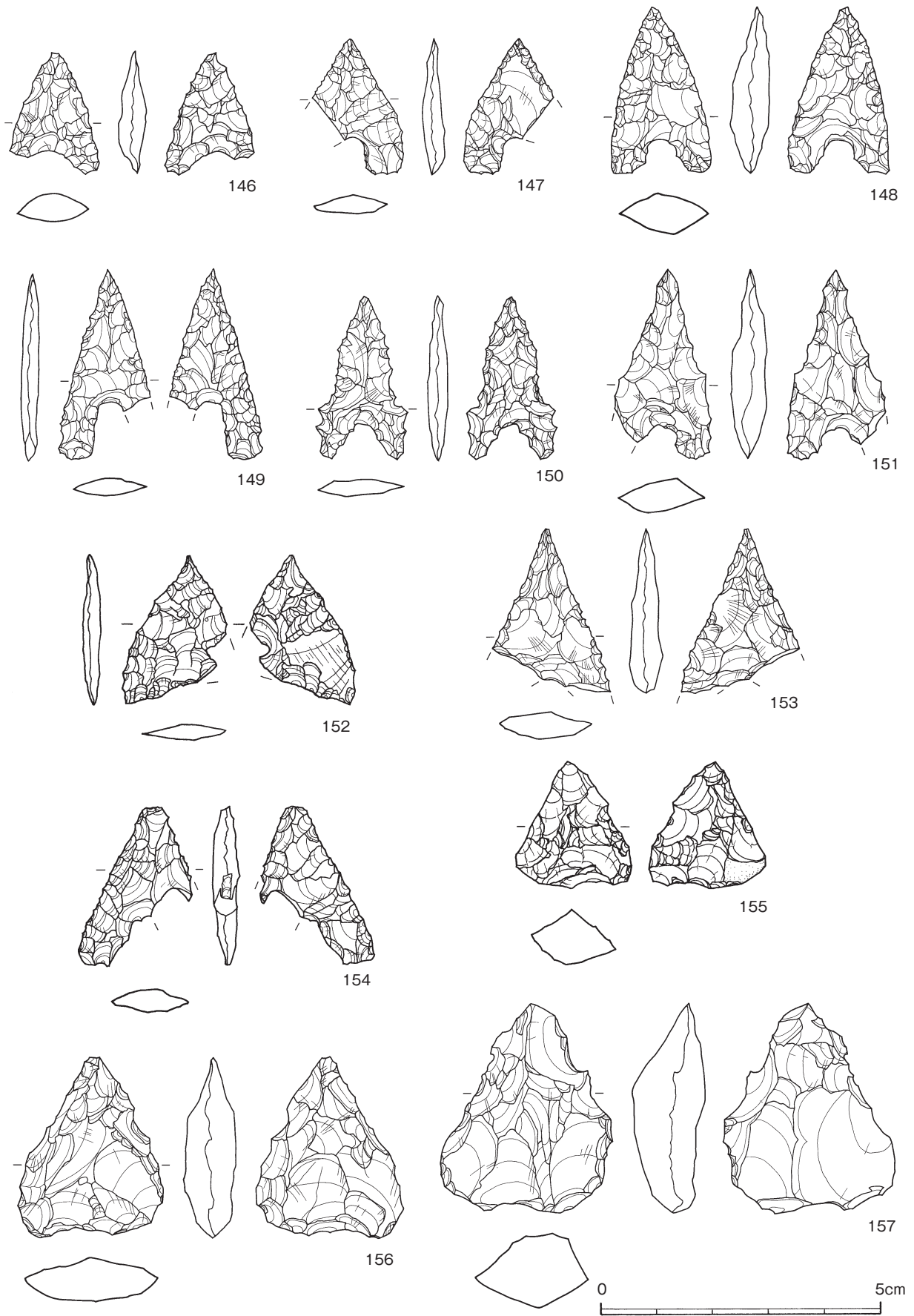
17点出土し、13点図示した。180は刃部が明確に形成され、その角度は急である。181は表裏面に研磨が加えられていることから、磨製石斧を再生してスクレイパーに利用したと考えられる。

### トロトロ石器 (第117図182)

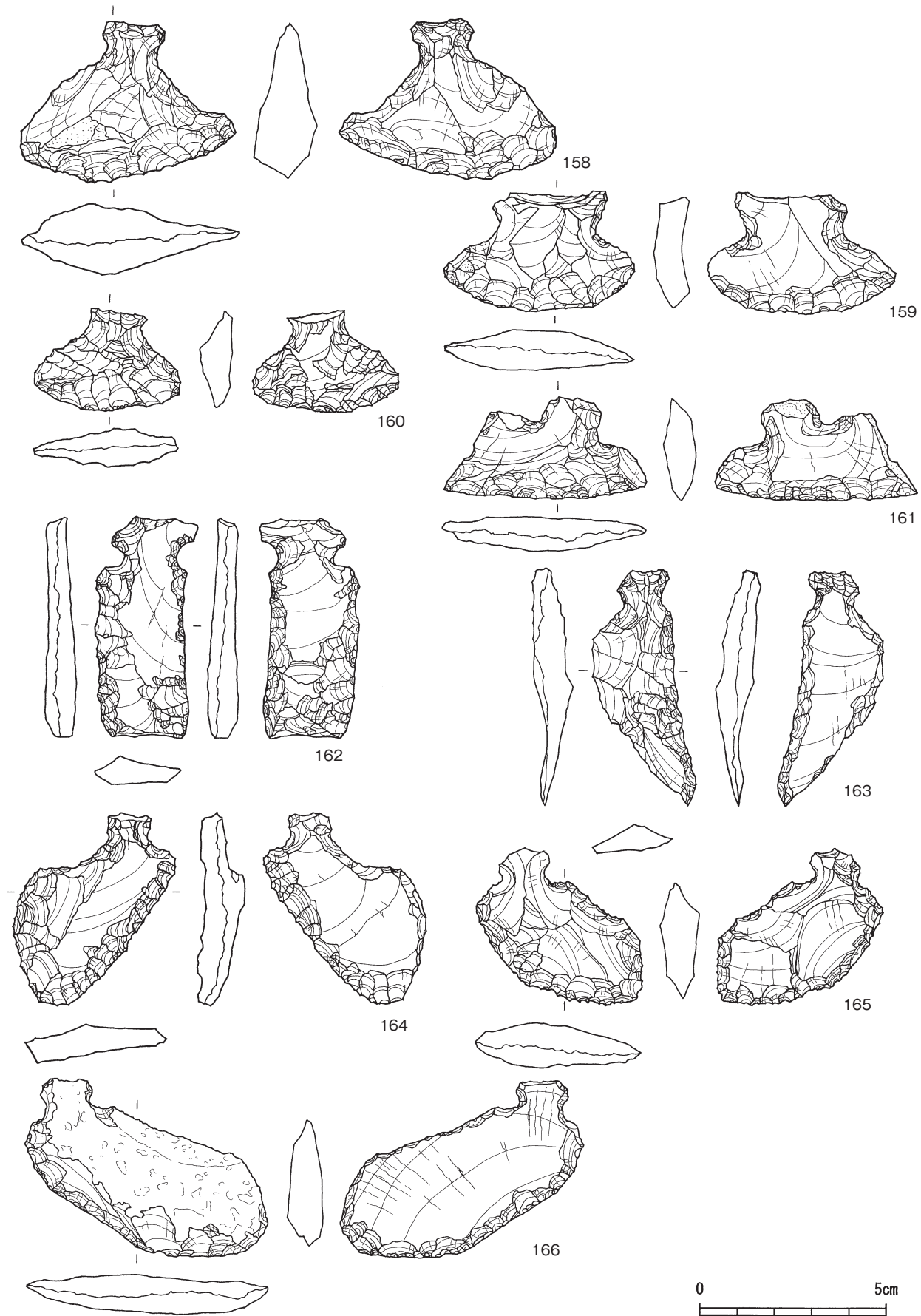
1点出土した。182は表裏面の剥離稜線が摩滅し光沢をもった、いわゆるトロトロ石器である。



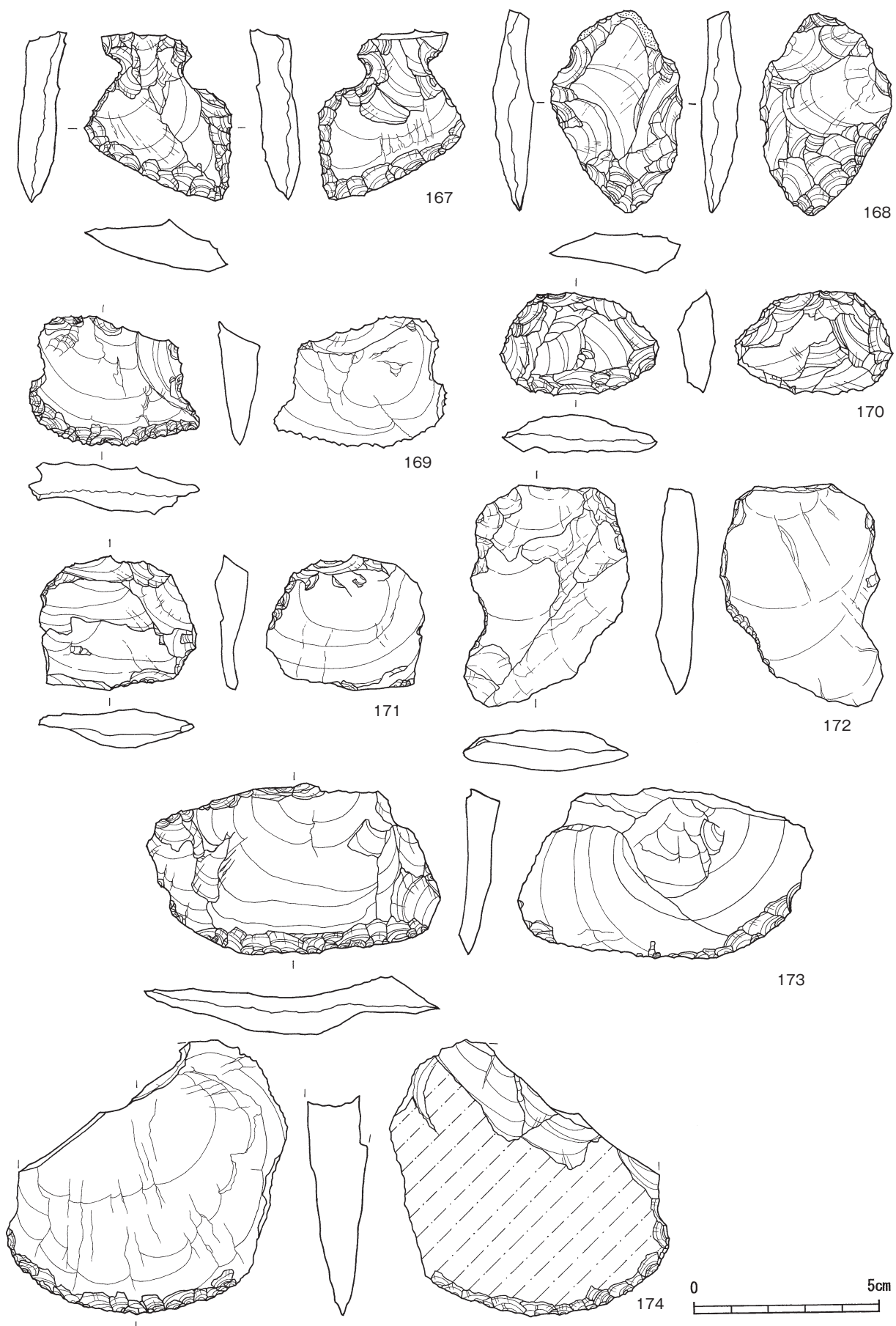
第113図 Ⅷ層～Ⅵa層 (縄文早期) 出土石器(1)



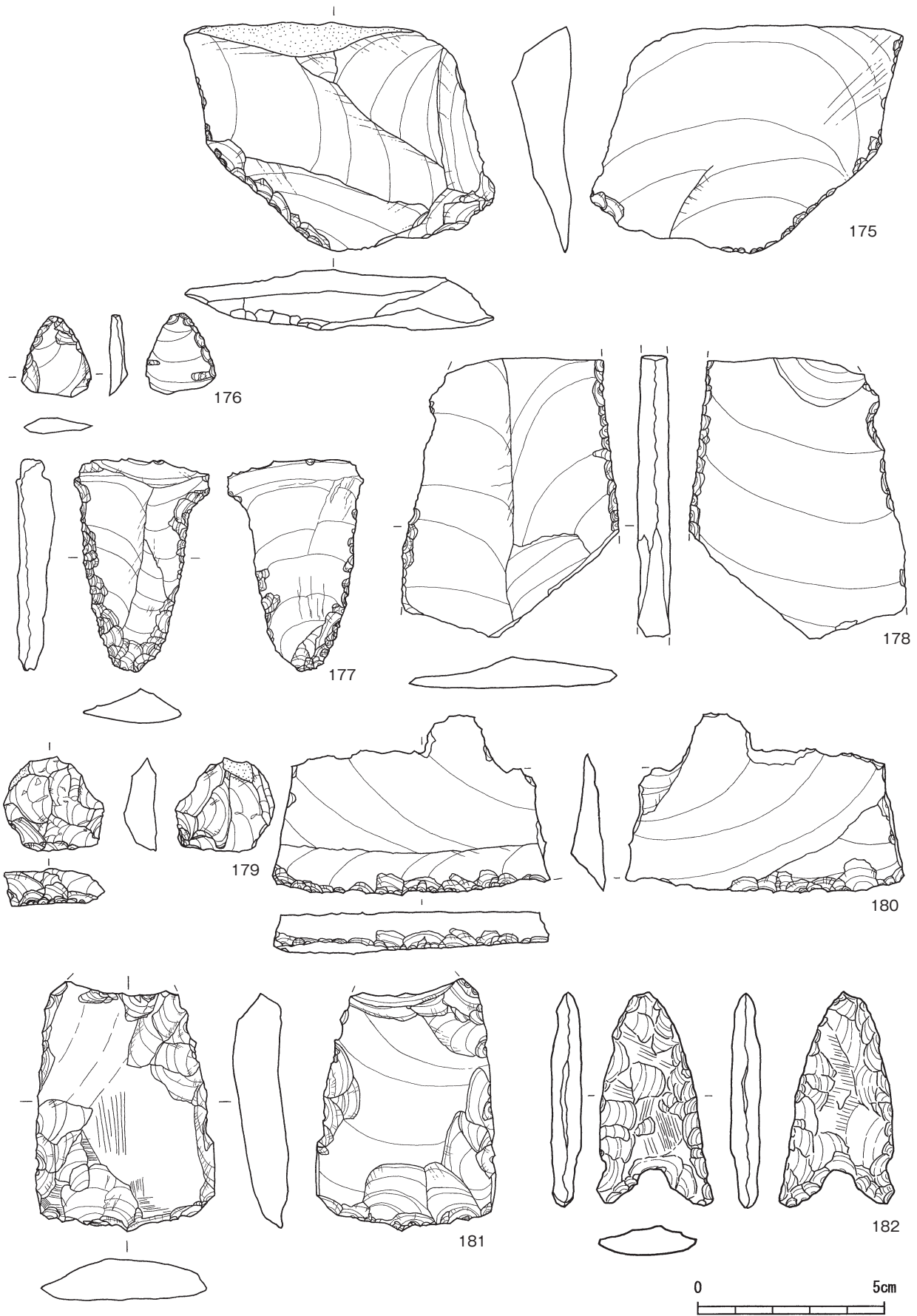
第114図 Ⅷ層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(2)



第115図 Ⅷ層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(3)



第116図 Ⅷ層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(4)



第117図 Ⅷ層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(5)

### 石斧 (第118図183~188)

6点出土し、全て図示した。磨製石斧と打製石斧を一括した。183は局部磨製石斧で、基部の両側縁に研磨を加えている。184~188は打製石斧である。187は裏面と左縁部に節理面が残る剥片を素材としている。188は自然礫皮面が残る剥片を利用しており、基部近くの両側面に抉りが認められる。他は基部や刃部が欠けた欠損品である。

#### 磨石・敲石

磨面や敲石痕が認められるものを一括して取り扱い、使用痕や形態等から4類に大別した。

**I類 (第119図189~192)** 表・裏面に磨面が認められ、いわゆる「磨石」である。5点出土し、4点図示した。54は表面に磨面が認められ、やや扁平な素材を用いている。189・191は、表・裏面に磨面が認められる。

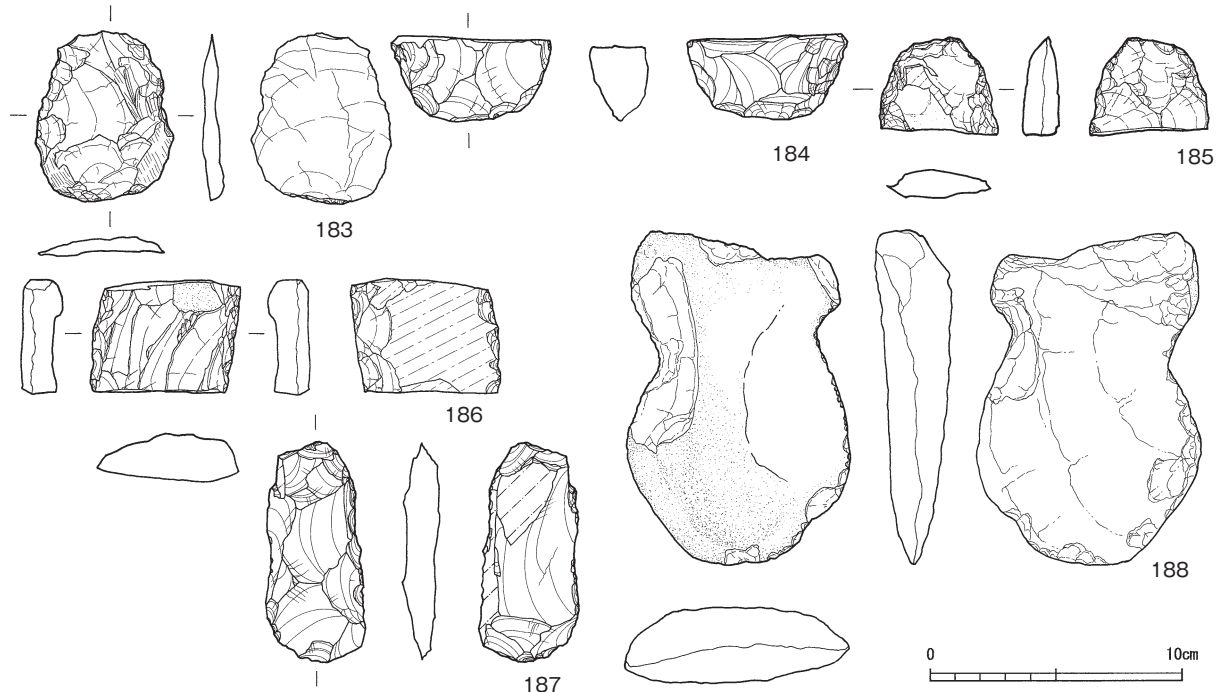
**II類 (第119・120図193~200)** 平面形態が円形または楕円形であり、表・裏面に磨面を有し、主に端部や周縁部に敲打痕が認められるものである。8点出土し、全て図示した。194・197・199は円形を、193・196・200は楕円形を呈してそれぞれ周縁に敲打痕が認められる。197は1号集石遺構内から出土した破片と接合した。198は隅丸方形を呈した扁平な素材を用いている。

**III類 (第120~122図201~207, 210)** 平面形態が円形または楕円形であり、表・裏面に磨面を有し、主に表・裏面や周縁部に敲打痕が認められるものである。8点出土し、全て図示した。201~204, 206は円形を、205・210は楕円形を呈している。204は表面と周縁部に、203・206は表・裏面と周縁部に敲打痕が集中している。

**IV類 (第122図208・209)** 敲石としてのみ使用されている。2点出土し、全て図示した。208・209ともに安山岩である。

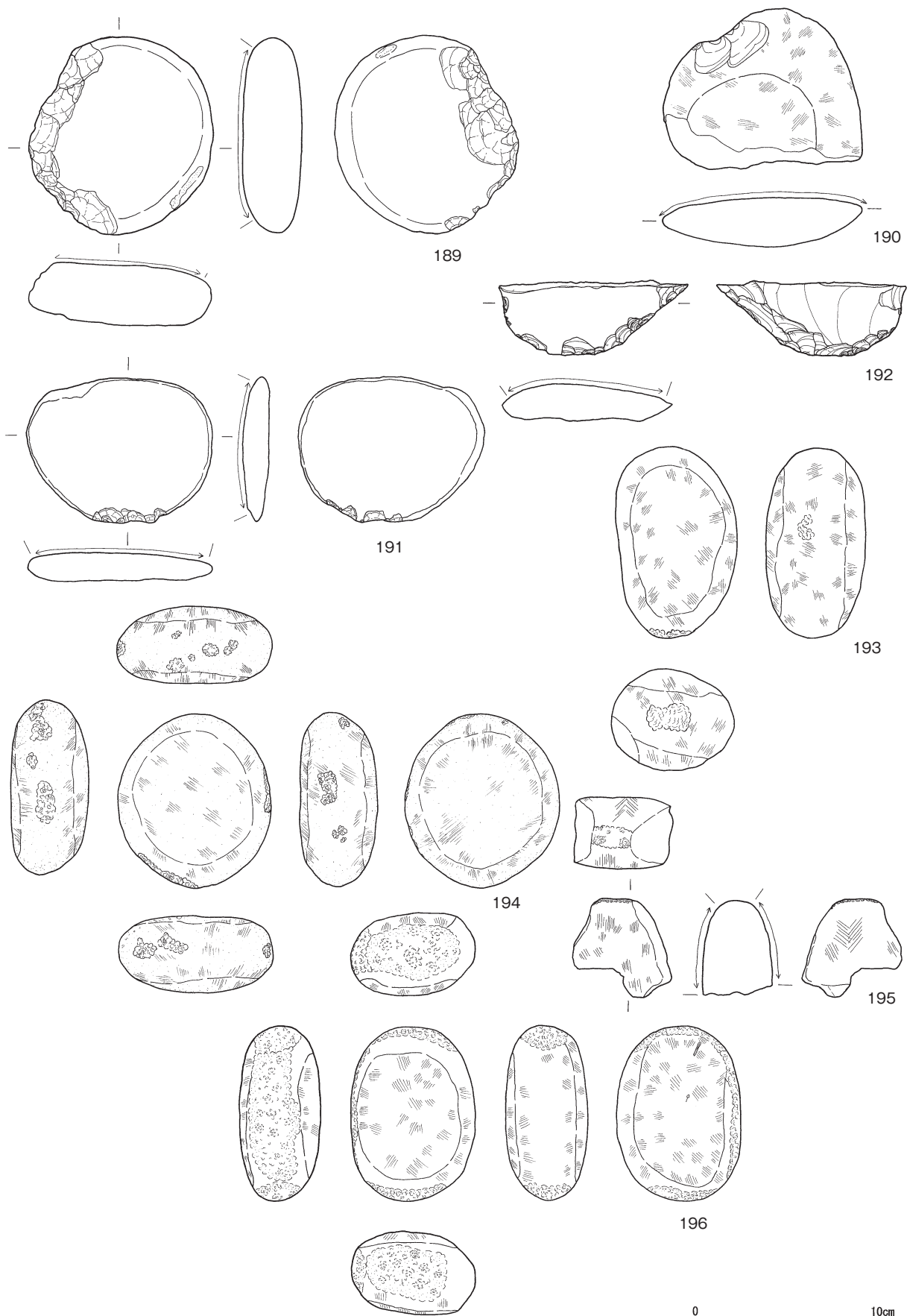
#### 石皿 (第122・123図211~219)

平坦面が使用により磨かれているものである。13点出土し、9点図示した。破碎したものが多く、完形は214の1点のみである。213・214の2点は砂岩で、その他7点は安山岩である。

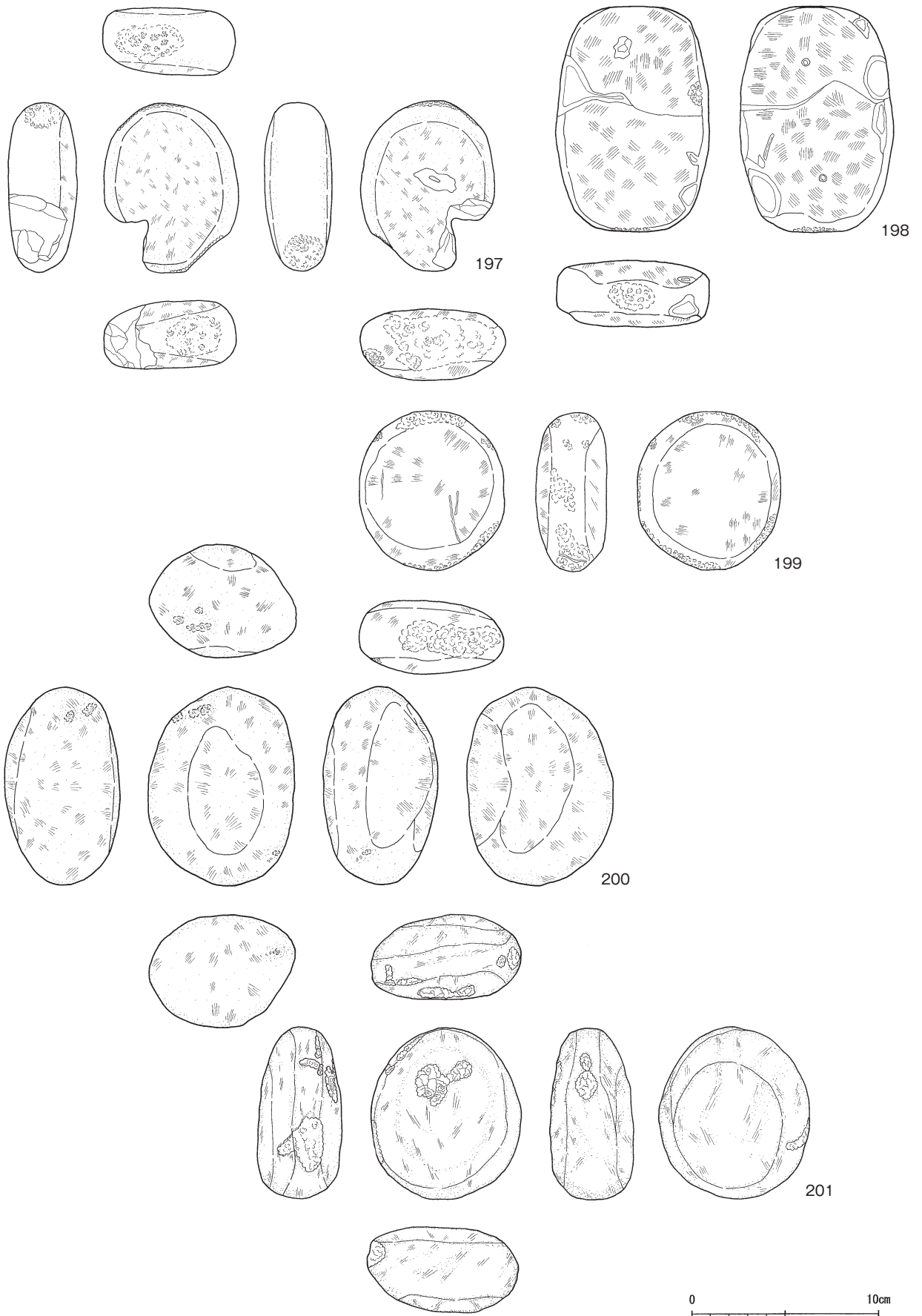


第118図 VIII層~VIa層 (縄文早期) 出土石器(6)

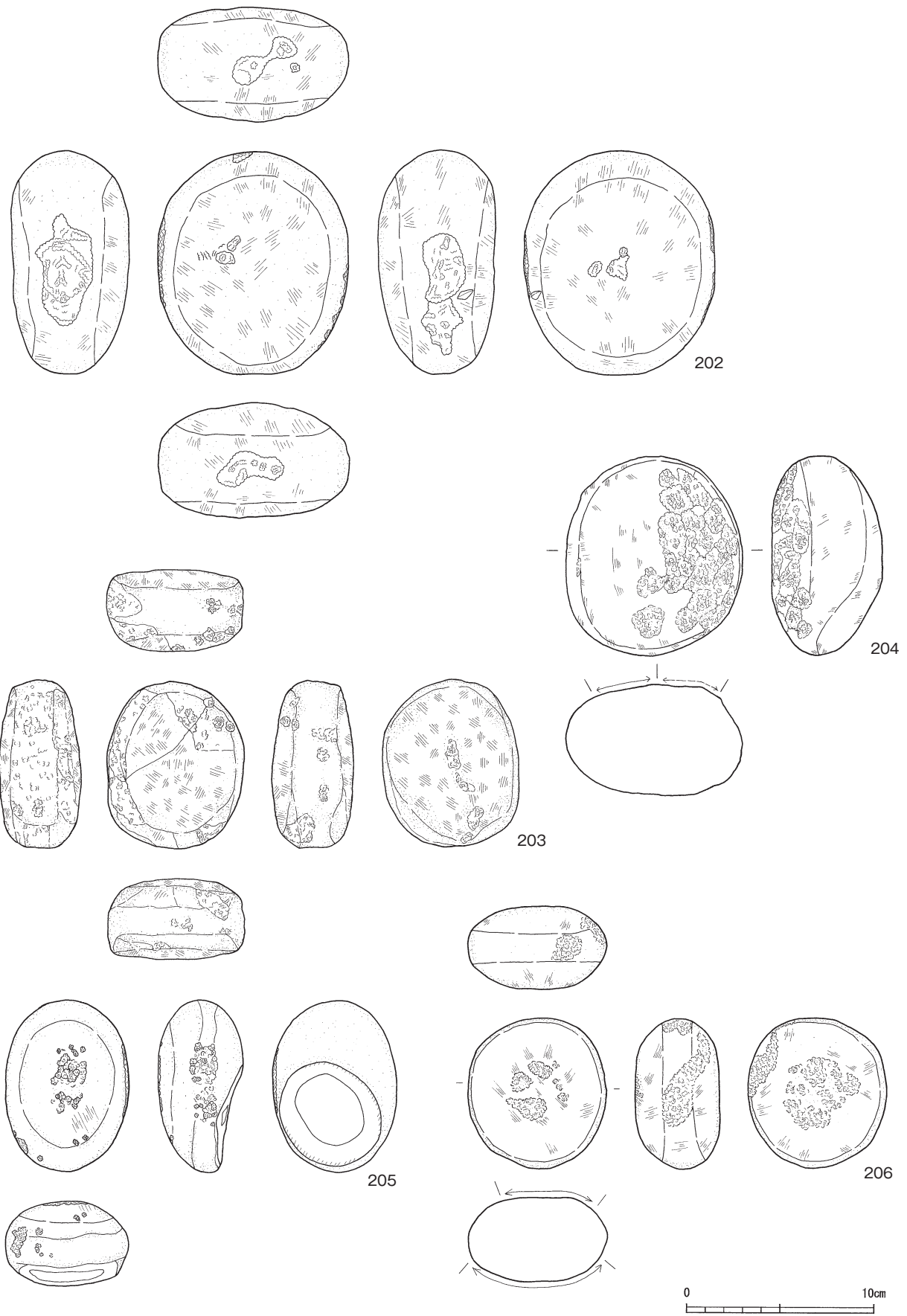




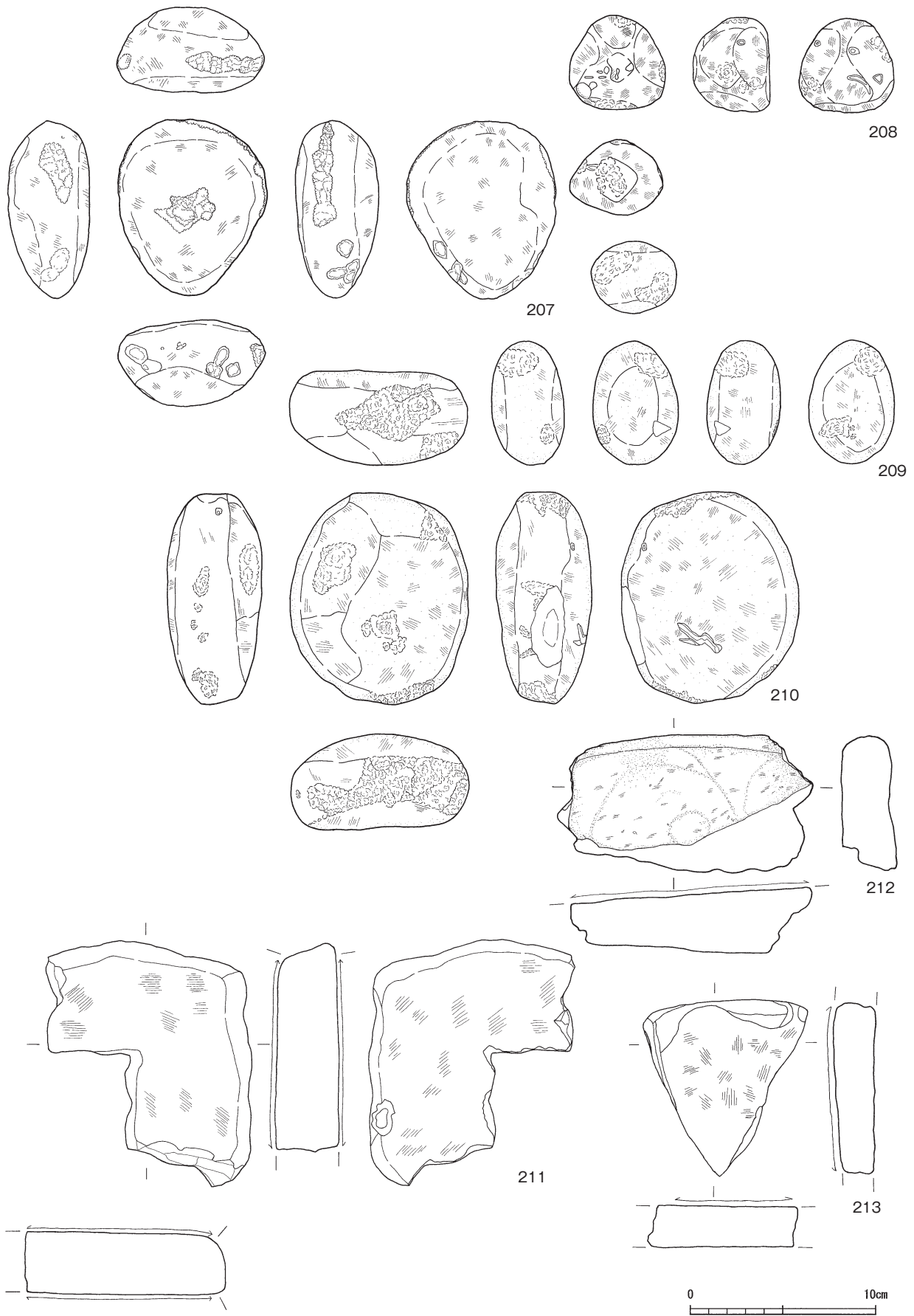
第119図 Ⅷ層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(7)



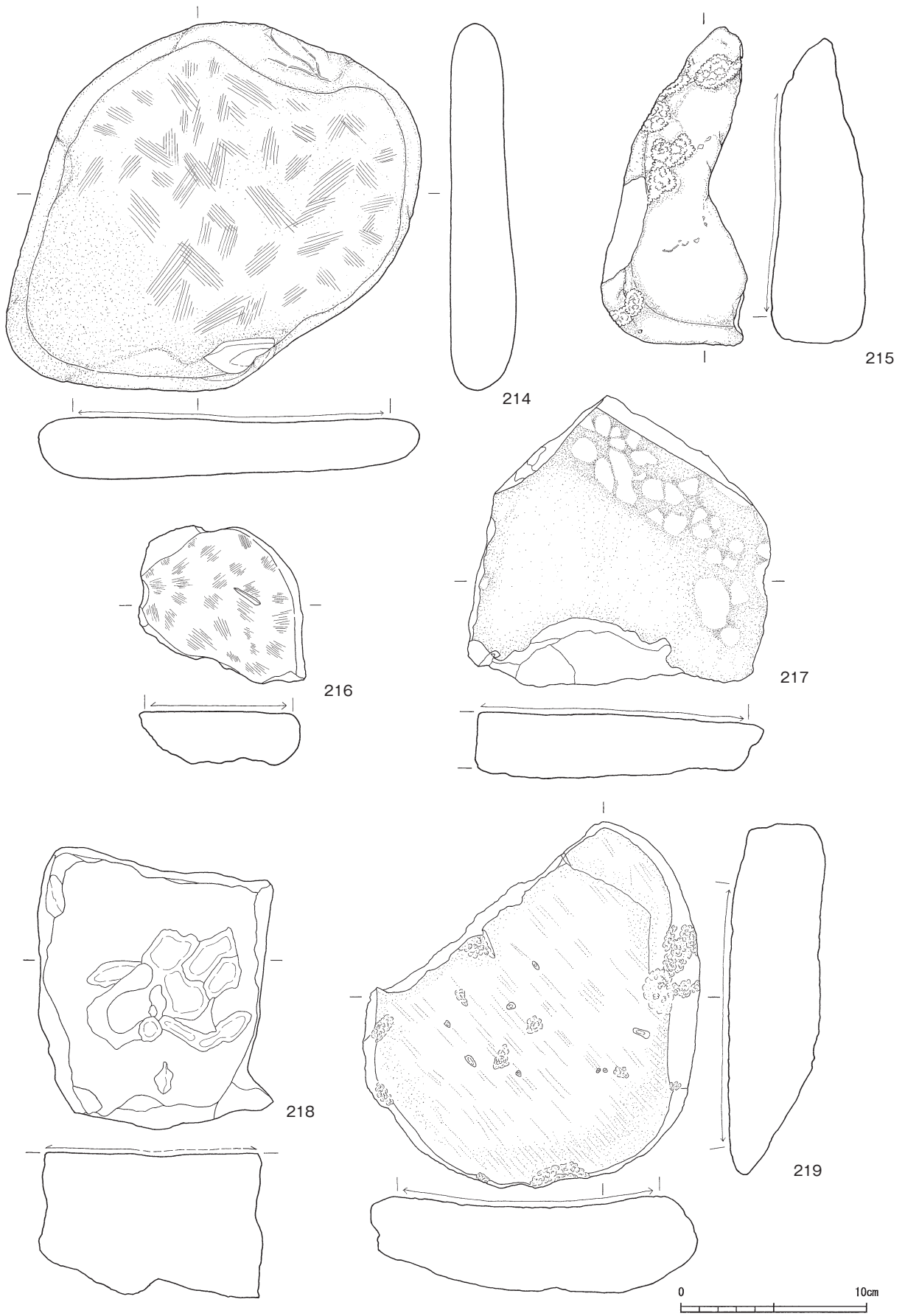
第120図 VIII層～VIa層（縄文早期）出土石器(8)



第121図 VIII層～VIa層（縄文早期）出土石器(9)

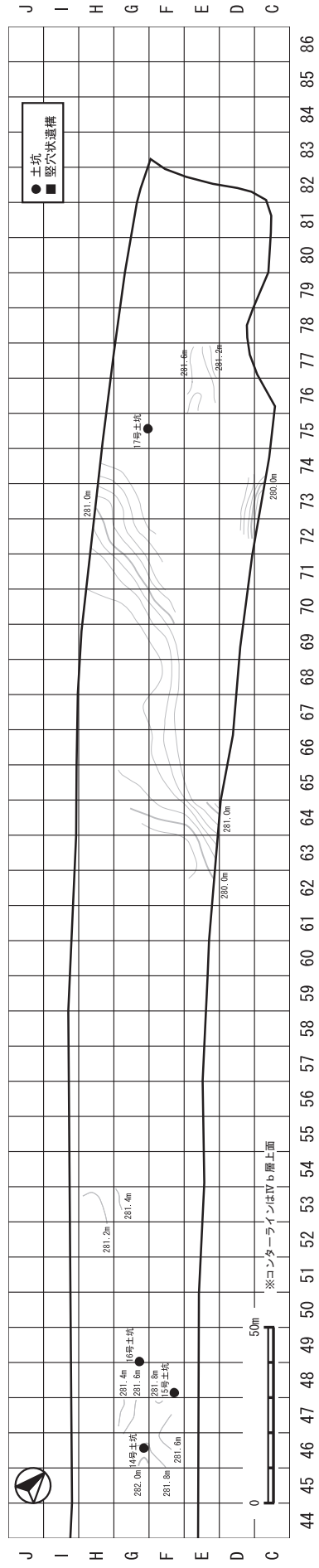
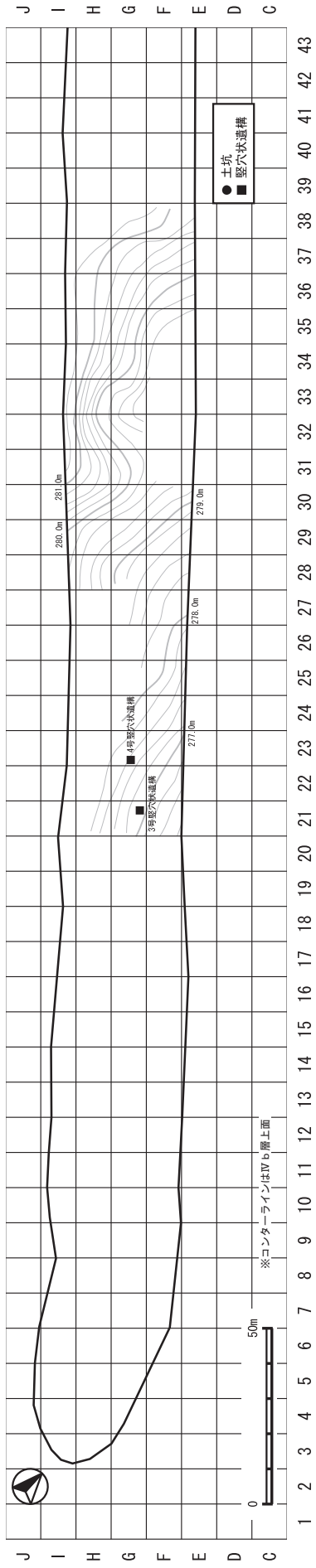


第122図 Ⅷ層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(10)



第123図 Ⅷ層～Ⅵa層（縄文早期）出土石器(11)





第124図 縄文前・中期 遺構位置図

## 第7節 縄文時代前・中期の調査成果

### 1 調査の概要

Va層を縄文時代前・中期該当層として調査した。その結果、遺構は竪穴状遺構2基、土坑4基が検出された（第124図）。

遺物は、XIV類～XX類土器と、石鏃、スクレイパー、磨石・敲石等の石器が出土した。

### 2 遺構

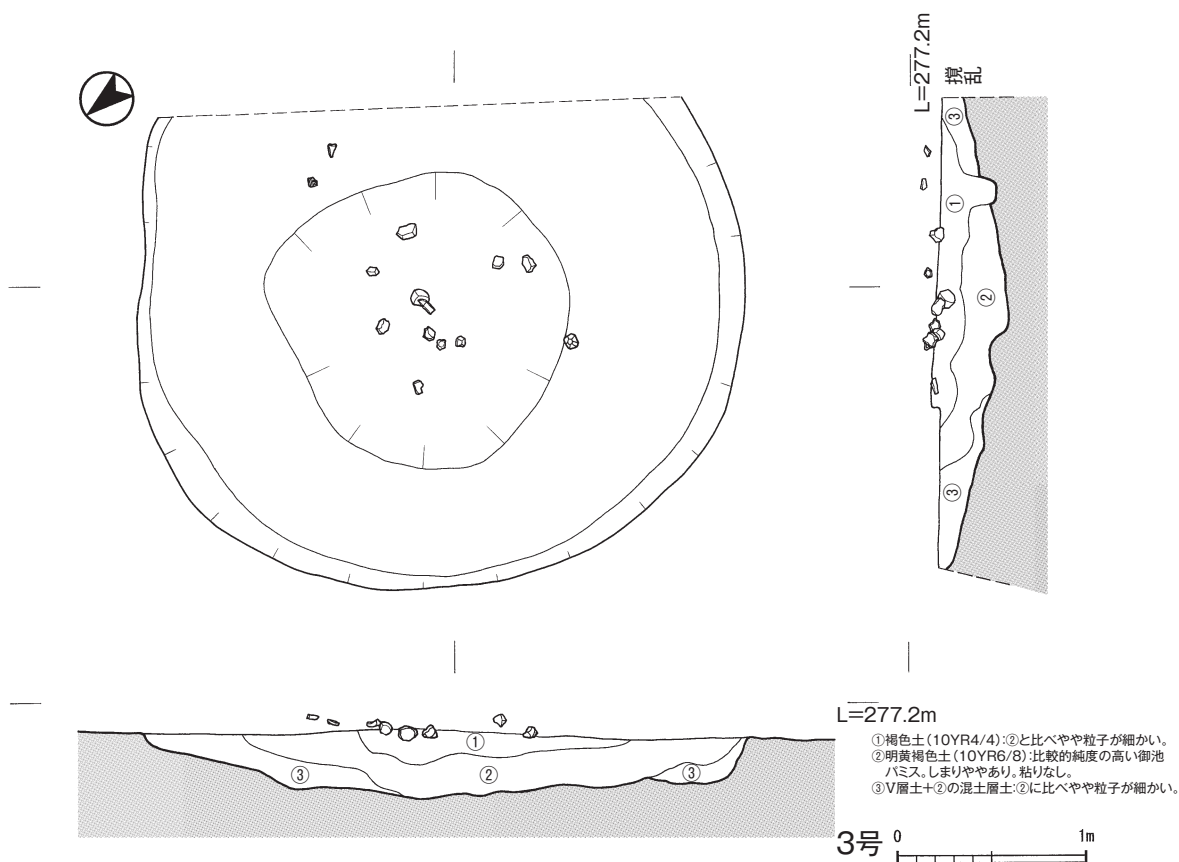
#### (1) 竪穴状遺構

##### 3号竪穴状遺構（第125図）

G-21区で検出された。西側が用地外のため、全形を確認できなかったが基本的には円形のプランで中央部がややくぼんでいる。推定規模は直径約320cm、検出面から床面までは36cmである。床面はやや段をもっているようである。埋土上部で安山岩12点、頁岩2点の計14点の礫が出土した。遺構内で焼土跡や柱状ピットは確認できなかった。

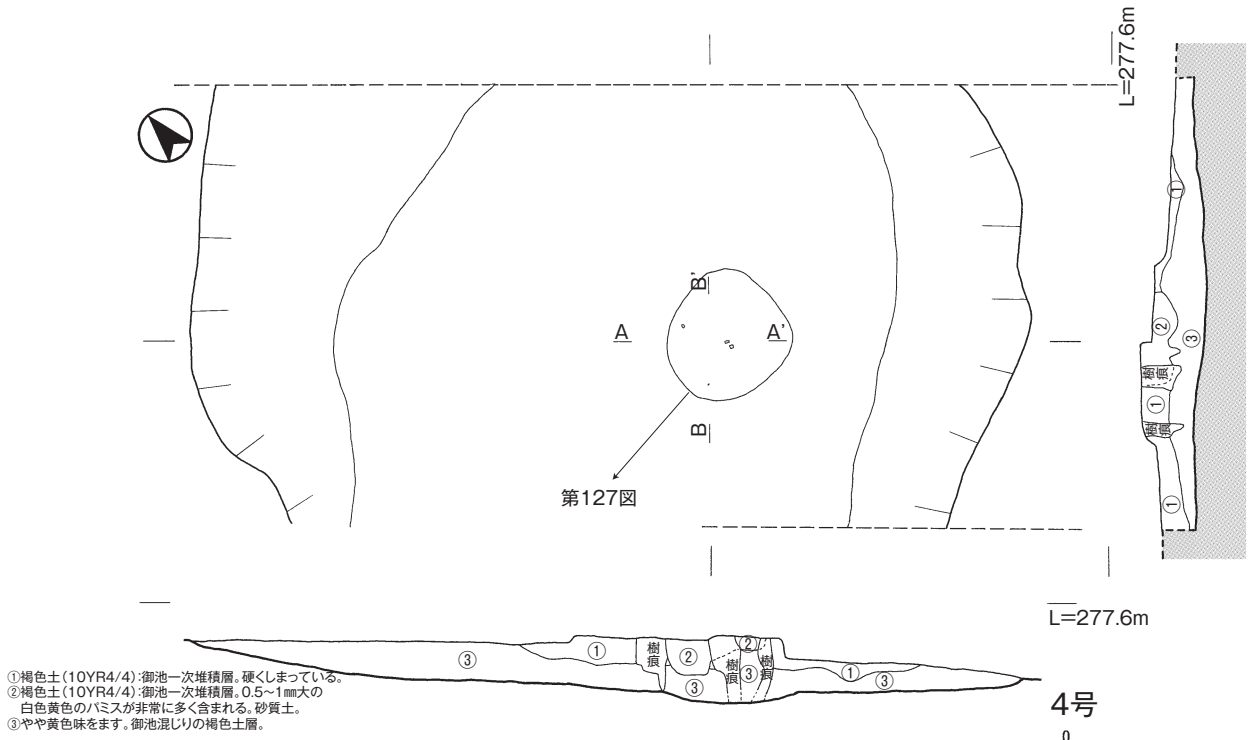
##### 4号竪穴状遺構（第126図）

G-23区で検出された。床面付近しか残存しておらず、壁の立ち上がりを正確につかみにくい、基本的にはほぼ円形のプランとみられる。残存状況での規模は440cm×235cm、検出面から床面までは32cmである。また、遺構内からは同一個体の土器片等が出土した（第127図）。



第125図 縄文前・中期 3号竪穴状遺構





第126図 縄文前・中期 4号竖穴状遺構



【出土遺物】(第127図)

220は、口縁部がやや反する器形の深鉢である。文様は口縁部に棒状の施文具で縦位に深い押圧文を施し、その下にやや曲線状に横位の深い凹線を施している。

221は、胴部から底部にかけての深鉢である。底面は平底で広く張りがみられる。器面調整は底面も含め、外面は貝殻腹縁部による条痕の後、部分的に窺撫で調整している。口縁部は確認できないが、煤垂れ痕らしきものがみられる。無文土器の可能性が高い。

第127図 4号竖穴状遺構内出土土器及び出土状況図

第23表 縄文前・中期 4号竖穴状遺構内出土土器観察表

挿図番号	図番号	分類	器種	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考
127	220	XXI	深鉢	沈線、撫で	撫で	黒色	暗茶褐色	長・石・角	硬質	
	221	IX	深鉢	貝殻条痕	撫で	赤茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質	底径11.0cm

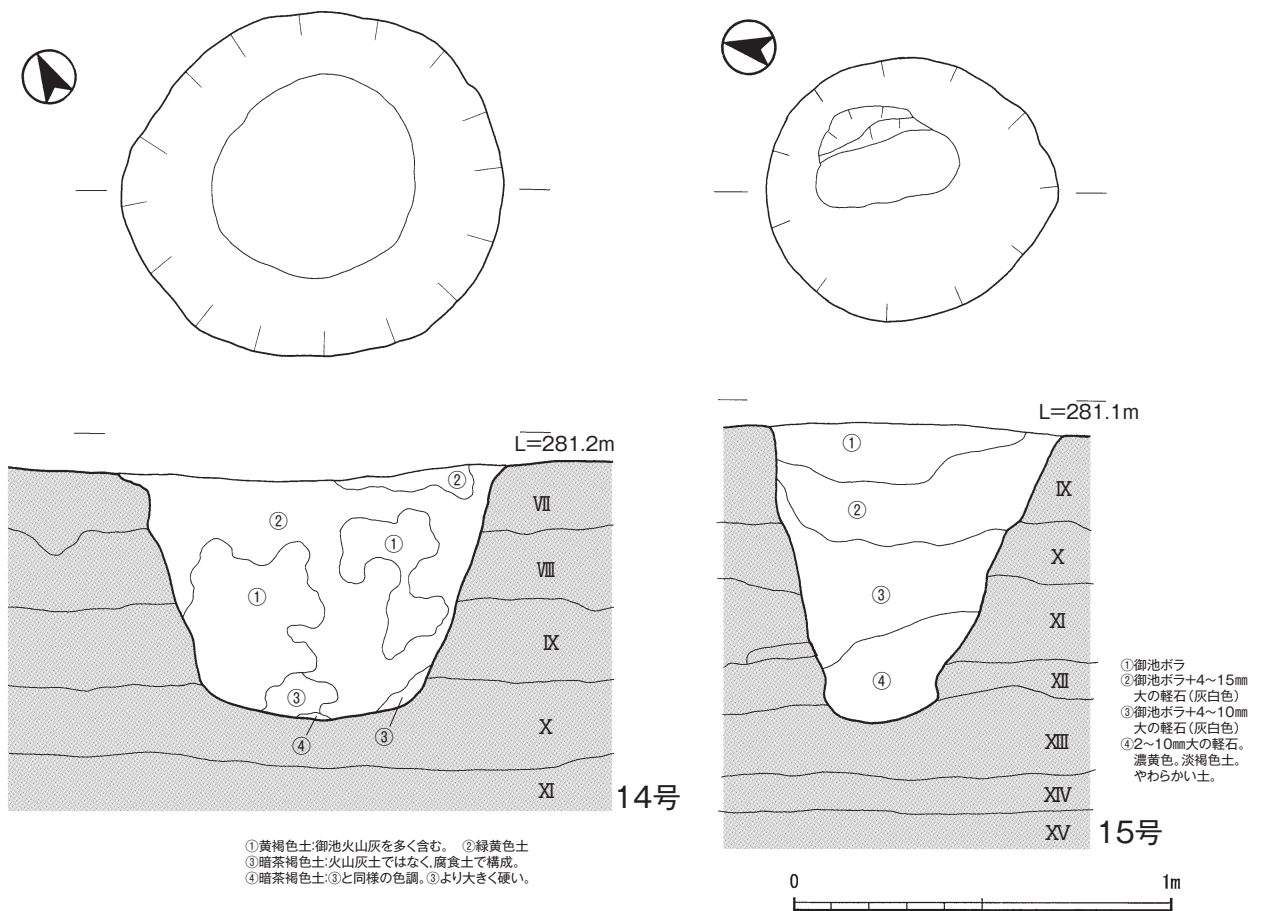
(2) 土坑

14号土坑 (第128図)

G-46区のVII層で検出された。平面プランは長径102cm, 短径91cmの円形で, 検出面からの深さは63cmである。掘り込み形状はバケツ状で, 底面は平坦面をなしている。遺構の形態等から落とし穴を想定したが, 小ピットは検出されなかった。遺構はVII層上面で検出されたが, 埋土状況からプラス50cm程度上部のVa層上面を掘り込んでいると考えられる。よって, 実際の深さは110cm~120cm程度と想定される。

15号土坑 (第128図)

F-48区のIX層で検出された。平面プランは長径77cm, 短径70cmの円形で, 検出面からの深さは78cmである。掘り込み形状はバケツ状で, 底面はほぼ平坦面をなしている。



第128図 縄文前・中期 14号, 15号土坑

第24表 縄文前・中期 土坑計測表

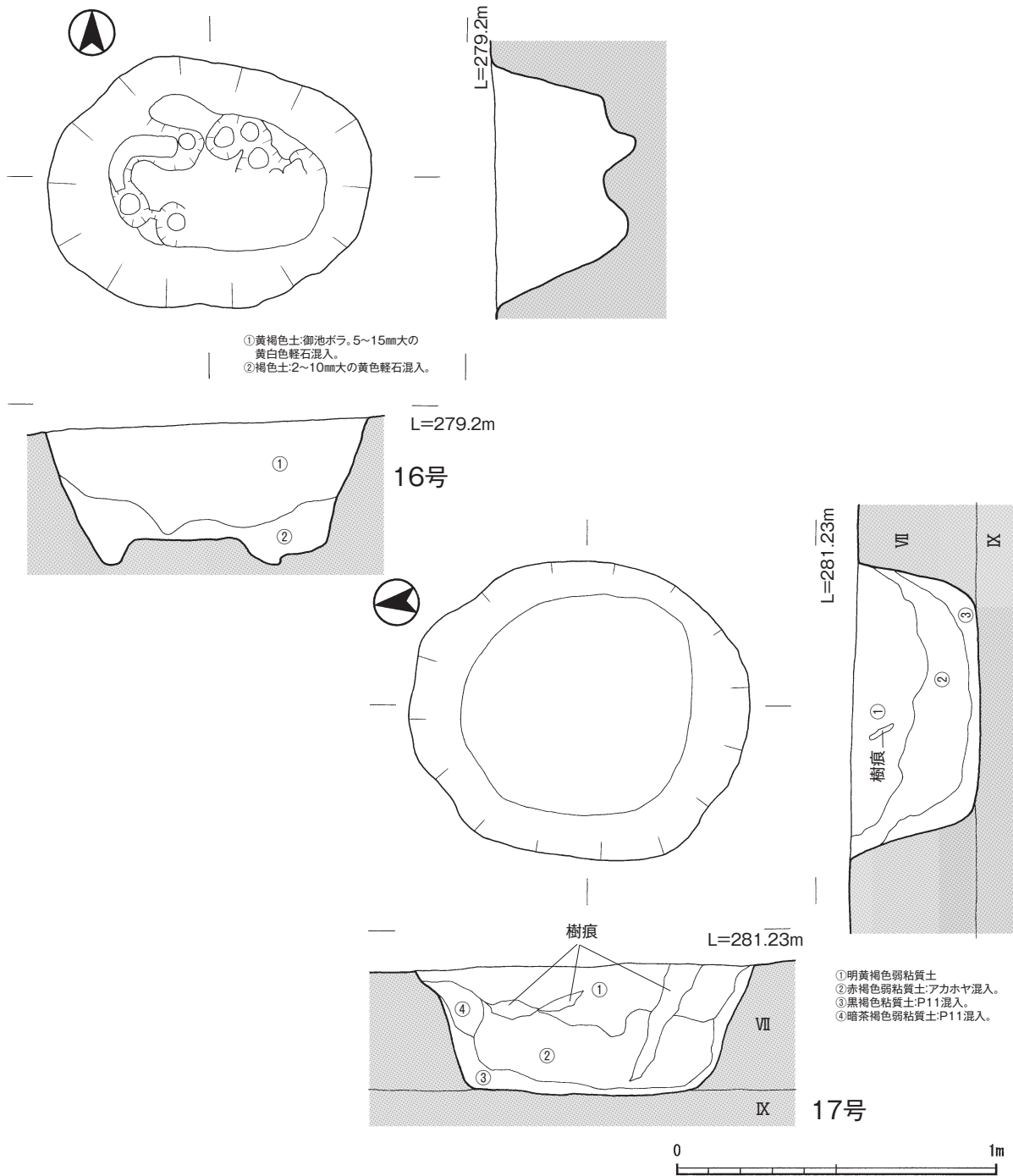
挿図番号	番号	検出区	検出面	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
128	14	G-46	VII層	102	91	63	
	15	F-48	IX層	77	70	78	
129	16	H-49	-	100	76	36	
	17	F・G-75	VII層	106	93	40	

16号土坑（第129図）

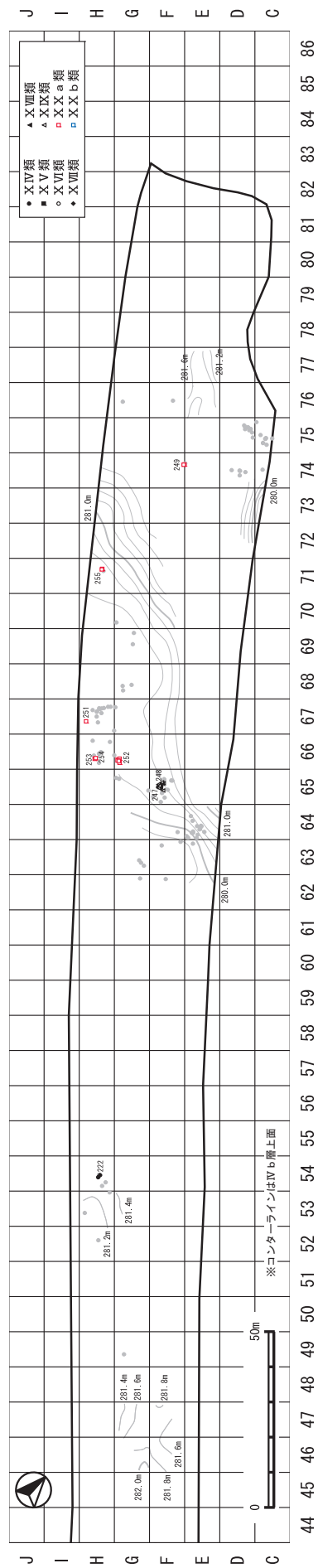
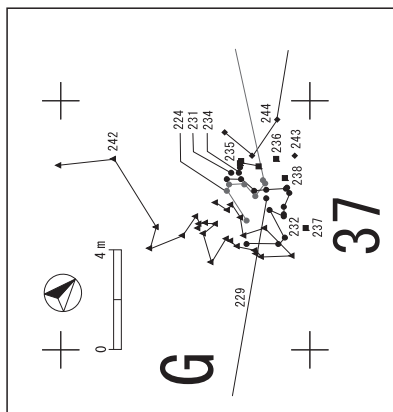
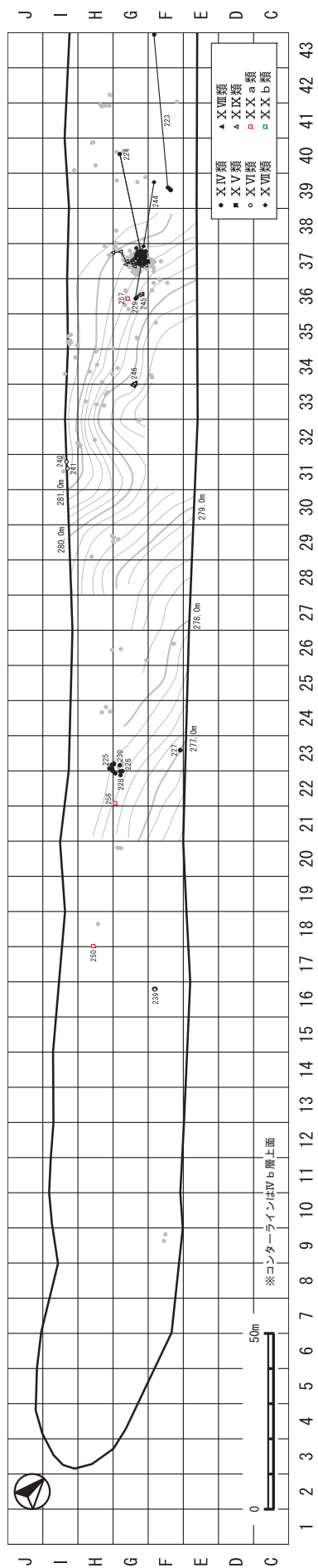
H-49区で検出された。平面プランは長径100cm，短径76cmの楕円形で，検出面からの深さは36cmである。床面端部に9か所の小穴がみられる。小穴の深さは，5～9cmである。

17号土坑（第129図）

F・G-75区のVII層で検出された。平面プランは長径106cm，短径93cmの円形で，検出面からの深さは40cmである。南北方向に長径をもつ。掘り込み形状はバケツ状で，底面は平坦面をなしている。



第129図 縄文前・中期 16号，17号土坑



第130図 XIV類～XX類土器出土状況図

### 3 遺物

#### (1) 前期土器

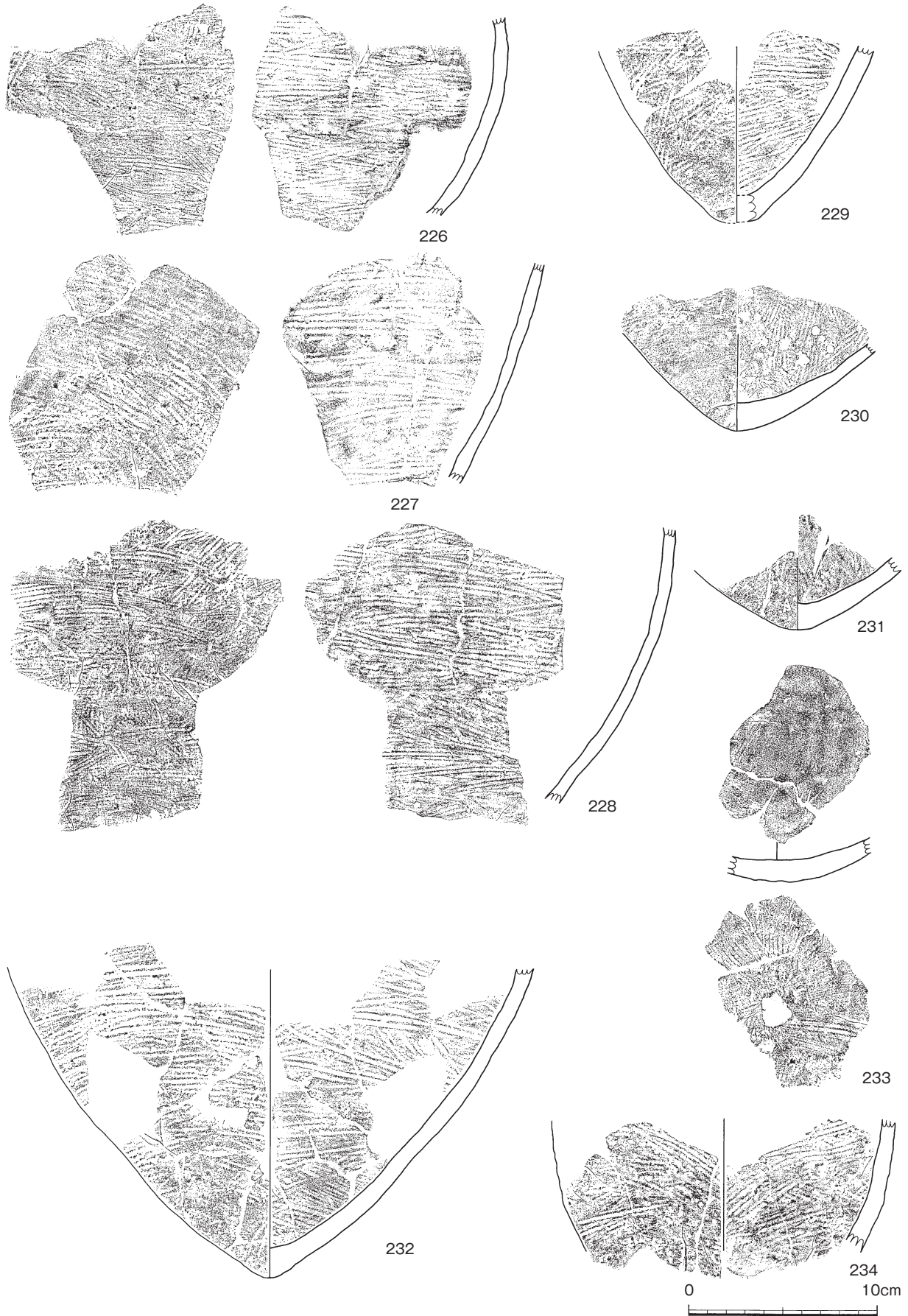
#### XIV類 (第131・132図222~234)

この類は丸底で、器面調整が貝殻腹縁部による調整を施すものである。

222は胴部から口縁部にかけて外向し、円錐形の器形である。器面調整は外面が貝殻腹縁部による縦位の条痕を施し、内面は横位の条痕の上を研磨状に施している。色調は外面上部に煤が付着し黒色を呈し、内面は暗茶褐色を呈している。胎土は長石、角閃石等が入り黒色を呈している。焼成度は良く硬質である。223は胴部から口縁部にかけて外向し、円錐形の器形である。器面調整は外



第131図 XIV類土器(1)

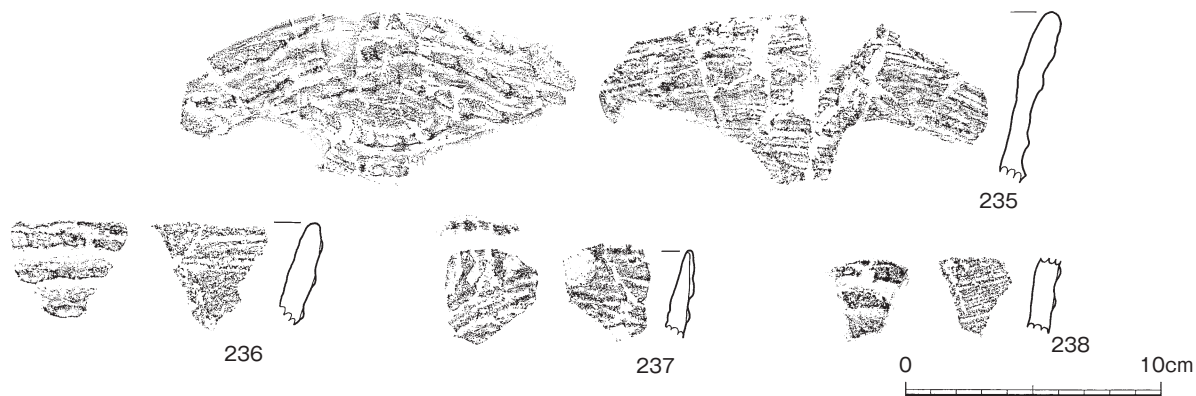


第132図 XIV類土器(2)

面が貝殻腹縁部による縦位及び斜位の条痕を施し、内面は横位の条痕を施している。土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は $4,055 \pm 30$  (yrBP)である。224は胴部から口縁部へは直行し、底部へは円錐状に絞り込む器形である。器面調整は外面が横位及び斜位に施し、内面が横位に施している。色調は外面上部に煤が付着し黒色と黒褐色を呈し、胴部は茶褐色である。内面は上部が暗茶褐色を呈し、胴部が茶褐色を呈している。225と226は同一個体と思われる。器形は胴部から口縁部へは直行し、底部へは円錐状に絞り込む器形である。器面調整は外面内面ともに横位に貝殻条痕を施している。色調は外面上部に煤が付着し黒色と黒褐色を呈し、胴部は茶褐色である。内面は茶褐色を呈している。227と228は底部へは円錐状に絞り込む器形の胴部で同一個体と考えられる。器面調整は外面内面ともに横位に貝殻条痕を施している。色調は外面に煤が付着し黒色と黒褐色を呈している。内面は茶褐色を呈している。229はやや丸みをもった尖底部である。器面調整は同様である。色調は基本的に茶褐色である。230, 231, 232は尖底部である。器面調整は貝殻腹縁部での調整で縦位横位が見られる。色調は内面が黒色で、外面が茶褐色である。なお、231は白色化している。233は丸底である。器面調整は外面が浅い条痕で、内面が黒色の研磨である。この類とは若干異なる。234の内面に黒色斑点がみられる。

#### XV類 (第133図235~238)

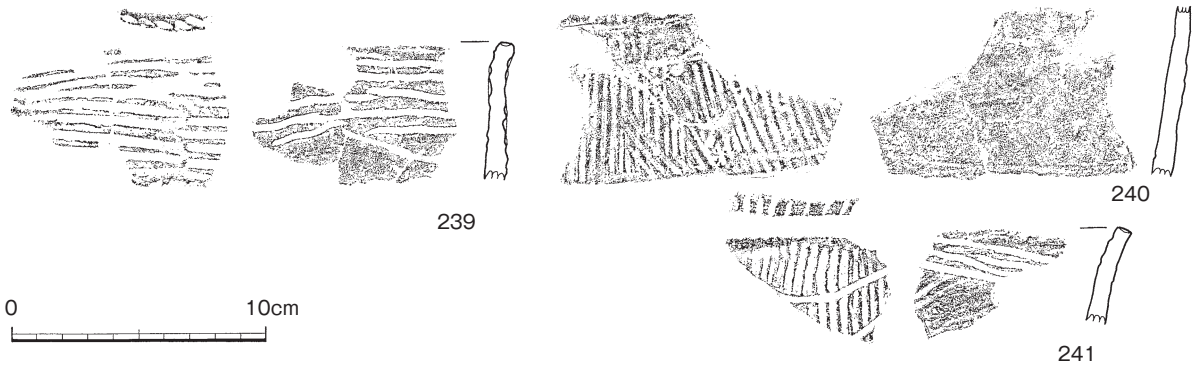
この類は隆起線土器である。235, 236, 237, 238は同一個体と思われる。器形は直行する口縁部で口唇部は波状を呈す。文様は2条の隆起突帯を波状に廻し、高い部分には下部に逆の隆起突帯を施している。また、237では口唇部に縦位に貼り付け突帯がみられる。器面調整は外面が撫で調整で、内面が貝殻条痕の横位の調整である。色調は外面が黒褐色で、内面が暗茶褐色である。



第133図 XV類土器

#### XVI類 (第134図239~241)

この類は器面全体にやや細い沈線を施す土器である。239は直行する薄手の口縁部である。文様は口唇部に斜位の刻み目を施し、外面に横位の沈線を全面に廻し、内面には横位の5条の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が茶褐色である。240は直行する薄手の胴部である。文様は胴部外面に縦位と斜位の刻み目を施し上下に沈線を廻らしてそれを囲む形である。器面調整は撫で調整である。色調は外面が茶褐色と暗茶褐色斑点で、内面が黒茶褐色である。241はやや外反する薄手の口縁部である。文様は口唇部に刻み目を施し、外面に横位の沈線を全面に縦位と横の曲線を施し、内面には横位の3ないし4条の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が茶褐色で、内面が明茶褐色である。

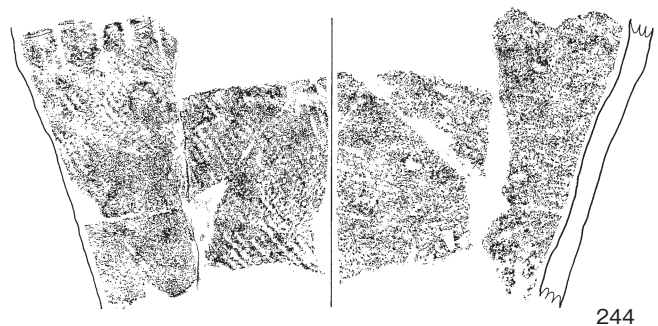
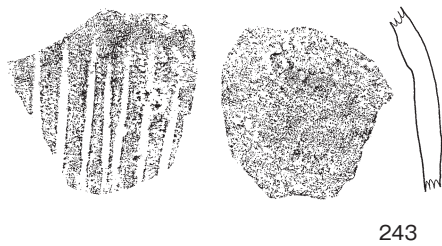


第134図 XVI類土器

(2) 中期土器

XVII類 (第135図242~244)

この類は沈線文と撚糸文を施す土器である。242は頸部で締め口縁部はキャリッパー形で、胴部は丸く張っている器形で、薄手である。文様は口縁部から口唇部にかけて背の高い突帯を鋸歯状に貼り付け、間にV字の貼り付けと口唇部まで貼り付けた瘤状の突起を施している。また、外面は



第135図 XVII類土器

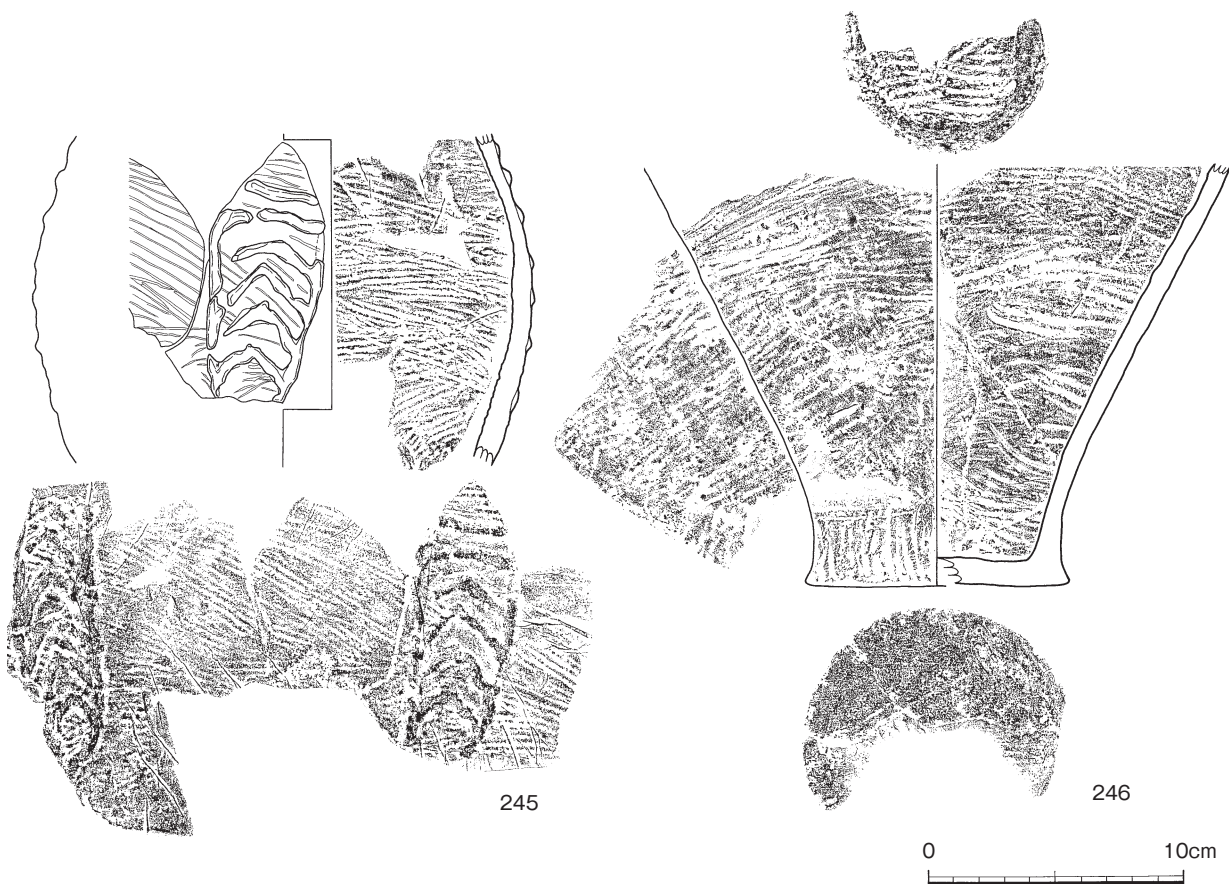


櫛目状施文具による器面調整がやや斜位に重ねて施している。内面は貝殻腹縁部による丁寧な横位の器面調整である。色調は全体的に濃淡のある暗灰褐色であるが部分的に茶褐色が見られる。243は口唇部が破損した口縁部と思われる。器形は膨らみをもつ口縁部で内湾する通称キャリッパー形と言われるものである。文様は内湾するキャリッパーの一番膨らんだ部分から頸部まで、縦位に沈線を連続に施している。一部に撚糸文も見られる。244も同じ文様であるので同一個体の可能性が高い。器面調整は外面が丁寧な撫で調整で、内面は粗い撫で調整で、器面に接合の貼り付け部分もみられる。色調は外面が全体的に灰茶褐色で口縁部は煤付着で黒色化されている。内面は黒褐色で、胎土は内面が黒褐色である。244は胴でやや張り、頸部でやや締まり口縁部に向かう器形である。器壁は接合部による肥厚もみられる。文様は外面に斜位の撚糸文を施している。内面の器面調整は篋状施文具による撫で調整である。色調は外面が黒褐色で、内面が暗灰褐色である。

**XIII類 (第136図245・246)**

この類は薄手で貝殻条痕文の器面調整を主としたもので、突帯と沈線等で文様を施しているものである。

245は薄手で球状の器形である。文様は貼り付け突帯で蓄枿形に5ないし6段に仕切るものを2面に施している。器面調整は外面が斜位の貝殻条痕の上を撫で調整をし、内面は横位の貝殻条痕を施している。色調は外面上部が黒褐色で、下部が茶褐色である。内面は暗茶褐色である。246はやや張った平底をもつ薄手の胴部から底部である。器面調整は胴部が横位の貝殻条痕で、底部が縦位の貝殻条痕である。色調は外面が赤茶褐色で内側は底部の内側が黒色で、他は淡茶褐色である。

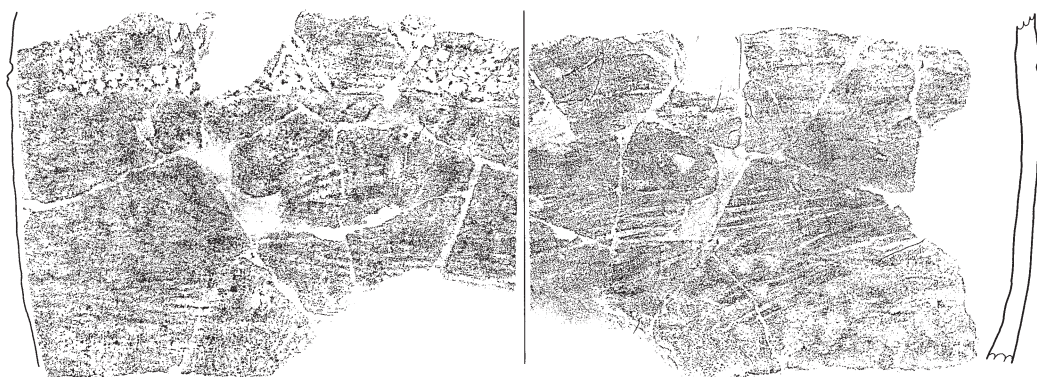


第136図 XIII類土器

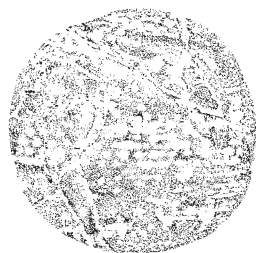
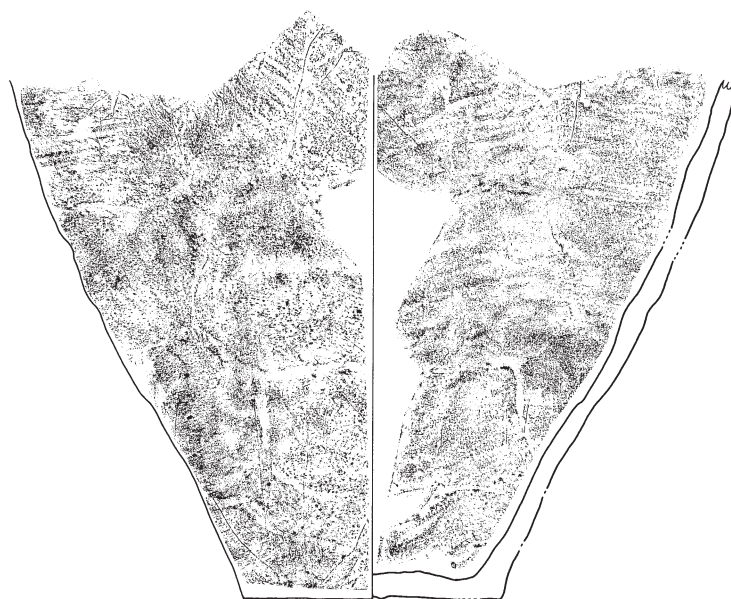
**Ⅸ類 (第137図247・248)**

この類は肥厚口縁部をもつものである。

247は口縁部が肥厚し、口唇部が欠損している。口縁部は直行し、胴部は張った深鉢である。文様は肥厚面に連点と沈線を横位とV字型に施している。器面調整は内外面とも貝殻腹縁部の横位の条痕がみられる。色調は茶褐色で口縁部近くの肥厚部には煤が付着しているため黒色の斑点がみられる。248は247と質が類似しているためこの類に入れた。また、器壁、器面調整、胎土が類似し、見方によっては同一個体と考えられる。器形は深鉢で、胴が張り、底部に向かって絞られている。底部は平坦の底面をもつ平底である。平底の外面には網代の版文がみられる。



247



248



第137図 Ⅸ類土器

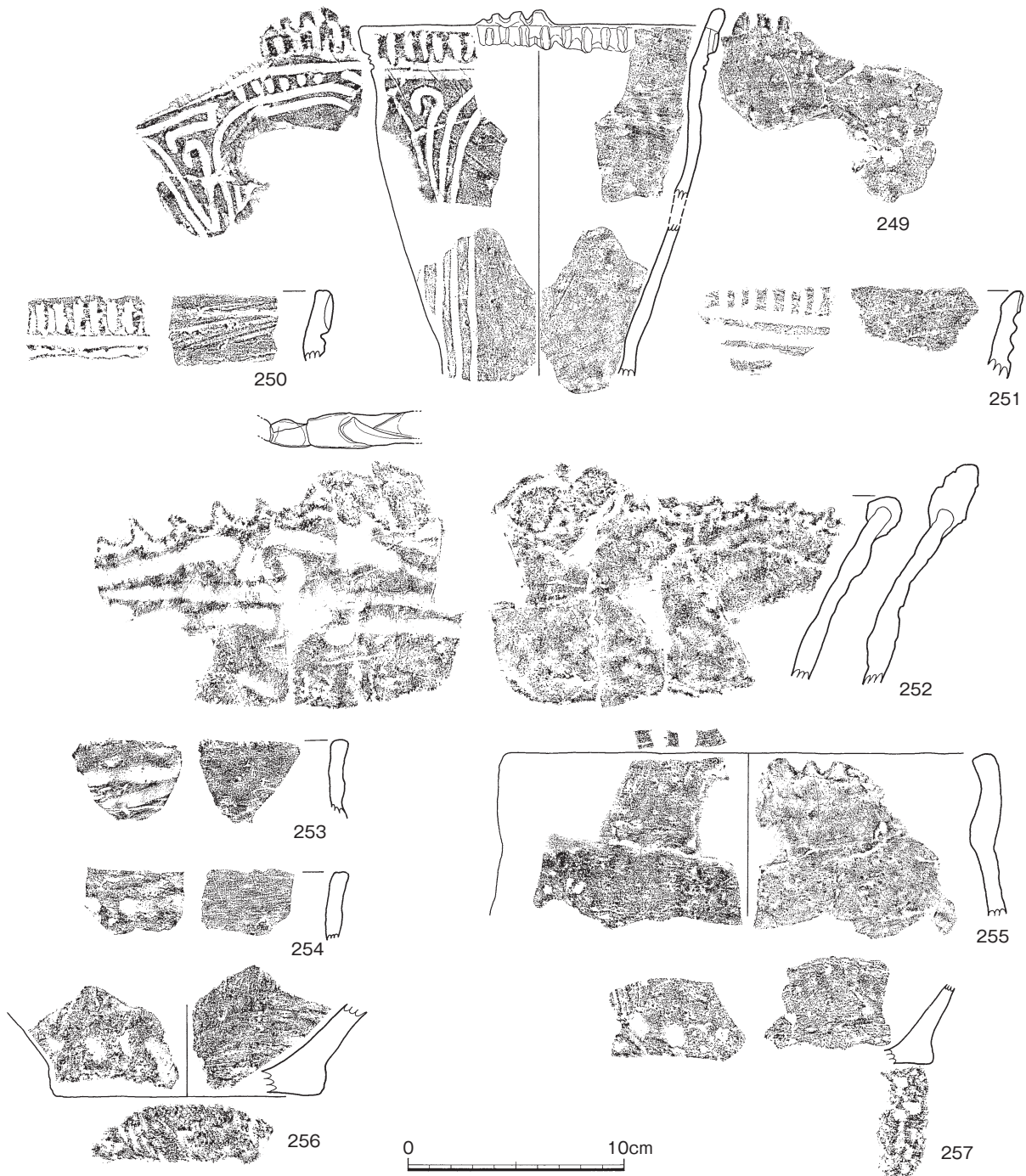
## Ⅹ類

この類は沈線文ないし凹線文を器面全体および胴部から口縁部にかけて文様を施すものである。この中を胎土でaとbに分けた。

### Ⅹa類 (第138図249~257)

同類は南九州の胎土と若干異なるもので中九州の文様に近いものである。

249は底部の端が無い完形品に近い土器で、器形は底部がやや広い深鉢である。口唇部には3箇所刻みを入れて4箇所突起をつくった部分と、突起と沈線を施した部分をつけている。文様は口縁部に縦位沈線の刻みを廻らし、突起の下部や頸部の一部に連点と沈線を施し、頸部は横位に、



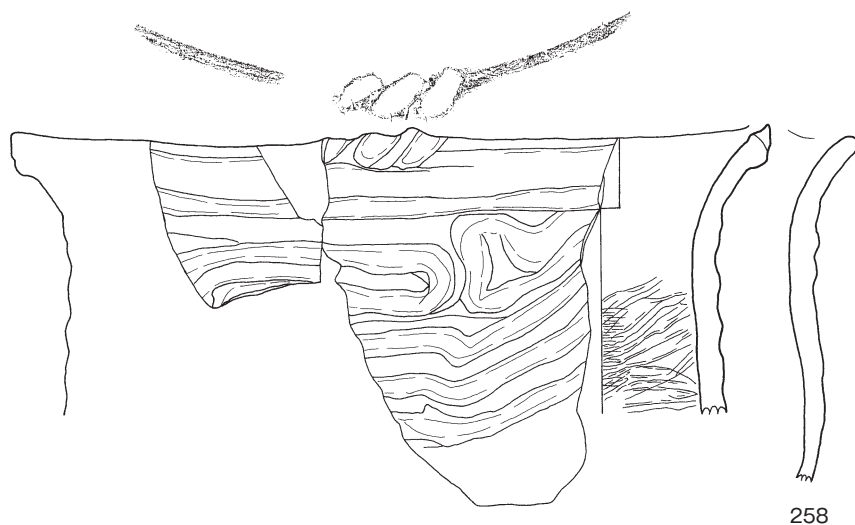
第138図 Ⅹa類土器

頸部から底部まで縦位に窓枠状に施し、その間に蕨手状の文様を施している。器面調整は篋状の撫で調整である。色調は外面が暗赤茶褐色で内面が黒茶褐色である。250は口縁部がやや外反する器形の深鉢である。文様は口縁部に棒状の施文具で縦位に深い沈線を施し、その下に横位の深い沈線を施している。器面調整は横位の撫で調整である。色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。251は口縁部がやや外反する器形の深鉢である。文様は口縁部に棒状の施文具で縦位に沈線を施し、その下につけた横位の深い沈線を施している。器面調整は横位の撫で調整である。色調は外面が茶褐色で内面が暗茶褐色である。252は頸部が若干締まりながら胴部から口縁部が直行する器形をもつ深鉢である。口唇部には粘土を捩り紐状に組んだ突起を貼り付け、また、粘土紐をつまみながら波状に施している。文様は蕨手状の凹線を横位に組んだ構成をしている。色調は外面が茶褐色で口唇部から口縁部の一部まで煤の付着で黒色化し、内側は茶褐色である。253は深鉢の口縁部である。文様は凹線文で横位に施している。器面調整は篋状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が茶褐色で内側は黄茶褐色である。254は深鉢の口縁部である。文様は凹線文で横位に施している。器面調整は篋状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が煤による黒色化で内側は黄茶褐色である。255は頸部内側で段を作り直行する深鉢の口縁部である。口唇部には押し圧による刻みがみられるだけで外面の文様は口唇部のみである。文様は凹線文で横位に施している。器面調整は撫でを横位に施している。色調は外面が暗茶褐色で内側は黒茶褐色である。256は底部である。底部に張り出しがみられ、底面は網代底である。器面調整は撫で、色調は外面が暗茶褐色で内側は赤茶褐色である。257は底部である。底部に張り出しがみられ、底面は網代底である。器面調整は撫で、色調は外面が茶褐色で内側は暗茶褐色である。

### XXb類 (第139図258)

この類は同類 a の胎土より南九州に良く見られる土器に中九州の文様を施しているものである。

259は口縁部が外反し胴部が球状になる器形の深鉢である。口唇部は波状になり、一部には指厚による凹線を斜位に施している。胴部の文様は凹線文を靴形状に施している。器面調整は篋状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が茶褐色で内側は淡茶褐色である。



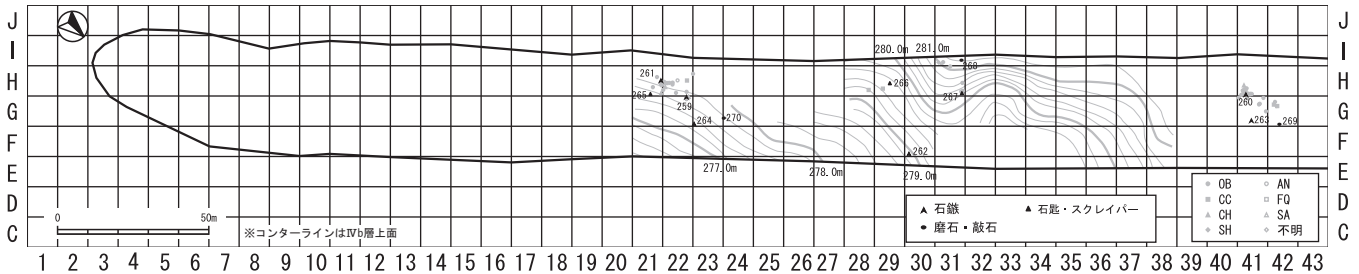
第139図 XXb類土器

第25表 XIV類～XX類土器観察表

観号	図番号	取上番号	分類1	分類2	区	開口	脚	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考			
131	222	7814 7819	XIV		H	54	V	a	貝殻条痕	研磨	黒色	暗茶褐色	長・角	硬質	煤付着 口径26.8cm		
	223	20072 20073			F	39	IV	a	貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	黒色	長・角	軟質	煤付着 年代測定		
		20074 20085			F	43	V	a									
		20077			G	40	IV	b									
	224	20039			6771 6797 6801 6809 6813 6997 7022	G	37	IV	b	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	長・角	軟質		
		225				10438 10440	H	23	V	a	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	長・角	軟質	
10442 10443			G	23		V	a										
10444 10448	G		22	V	a												
132	226	10418 10419 10420 10425	XIV		G	22	IV	a	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	長・角	軟質	煤付着		
	227	12293 12292			F	23	IV	a	貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	茶褐色	長・角	軟質			
	228	10416 10423			G	22	IV	a	貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	茶褐色	長・角	軟質	煤付着		
	229	6277 6296 6297			G	37	IV	b	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	長・角	硬質	煤付着		
	230	10450			G	36	IV	a	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	黒色	長・角	硬質			
	231	6816 6817			G	23	V	a	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	黒色	長・角	硬質			
	232	6872 6922			6924 6938 6948 6987 6989 7003 7016 7020 7045	G	37	IV	b	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	黒色	長・角	硬質		
		233				21158 21161	H	31	V	a	貝殻条痕	研磨	茶褐色	黒色	長・角	硬質	
		234				6803 6814 6819 6970	G	37	IV	b	貝殻条痕	貝殻条痕	橙	にぶい黄橙	長・角	硬質	黒斑点
		235				6821 6824 7001	6827 7862 6991	G	37	IV	b	隆起線文	貝殻条痕	黒褐色	暗褐色	長・角	軟質
	236				6827	G		37	IV	b	隆起線文	貝殻条痕	黒褐色	暗茶褐色	長・石・角	軟質	
	237				7862	G		37	IV	b	隆起線文	貝殻条痕	黒褐色	暗茶褐色	長・石・角	軟質	
238	6991		G	37	IV	b		隆起線文	貝殻条痕	黒褐色	暗褐色	長・石・角	軟質				
134	239	11416 11417 11418	XVI		F	16	V	-	刻目, 沈線	沈線, 撫で	暗茶褐色	茶褐色	長・石・角	軟質			
	240	20192			i	31	IV	b	刻目, 沈線	撫で	茶褐色	黒茶褐色	長・石・角	硬質			
	241	20271			i	31	V	a	刻目, 沈線	沈線, 撫で	茶褐色	明茶褐色	長・石・角	硬質			
135	242	6291 6684 6689 6690 6691 6710 6741 6752 6765 6774 6779 6871 6876 6877 6890 6891 6892 6901 6905 6908 6911 6915 6959 6962	XVII		G	37	IV	b	鋸歯状突起	貝殻条痕	暗灰褐色	暗灰褐色	長・石・ 金雲・角	軟質	口径32.8cm		
	243	6830			G	37	IV	b	沈線, 捺糸文	粗い撫で	灰茶褐色	黒褐色	長・石・角	硬質	煤付着		
	244	6273 6841 6849			G	37	IV	b	捺糸文	へら撫で	灰茶褐色	黒褐色	長・石・角	硬質			
		20068			F	39	IV	a									
245	6726 6728 21024	6726 6728 21024	G	36	IV	b	附付突起貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	軟質					
136	246	21427 21503 21504 21505 21506 21507 21508 21529 21530 21532	XVIII		G	34	IV	a	貝殻条痕	貝殻条痕	赤茶褐色	淡茶褐色	長・石・角	軟質	底径10.4cm		
		21511 21512 21509 21510			G	33	IV	a									
137	247	1302 1311 1315 1317 1319 1326 1329 1511 1514	XX		F	65	IV	a	連点, 沈線	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	長・石・角	軟質	煤付着		
	248	1303 1305 1310 1312 1313 1316 1318 1320 1321 1324 1500 1501 1502 1504 1505 1506 1507			F	65	IV	a	貝殻条痕	貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	長・石・角	軟質	底径10.2cm		
138	249	4378 4379 4426 4427	XX		a	F	74	IV	a	沈線, 捺糸状	へら撫で	暗赤茶褐色	黒茶褐色	長・角	軟質	口径16.4cm	
	250	10745			a	H	18	IV	a	沈線	撫で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	硬質		
	251	637			a	H	67	IV	a	沈線	撫で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	硬質		
	252	747 748 751 755 764 806 807			a	G	66	IV	a	凹線文	撫で	茶褐色	茶褐色	長・石・角	軟質	煤付着	
	253	282			a	H	66	IV	b	凹線文	へら撫で	茶褐色	黄茶褐色	長・石・角	硬質		
	254	284			a	H	66	IV	b	凹線文	へら撫で	黒色	黄茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着	
	255	1820 1821			a	H	71	III	-	刻目, 凹線文	撫で	暗茶褐色	黒茶褐色	長・石・角	硬質	口径22.2cm	
	256	10399			a	G	22	IV	a	撫で	撫で	暗茶褐色	赤茶褐色	長・石・角	硬質	底径12.2cm	
	257	6722			a	G	36	IV	b	撫で	撫で	茶褐色	暗茶褐色	長・石・角	硬質		
	258	21176 21177 21179			b	G	30	IV	a	凹線文	へら撫で	茶褐色	淡茶褐色	長・石・角	軟質	口径30.0cm	

### (3) 石器

縄文時代前・中期の石器は、Va層を中心に出土している。同包含層内からは、縄文時代前・中期の土器が出土しており、石器類に関しても同様と想定する。以下に、石鏃6点、石匙1点、スクレイパー2点、磨石・敲石3点を図示した。



第140図 Va層（縄文前・中期）出土石器状況図

#### 石鏃（第141図259～264）

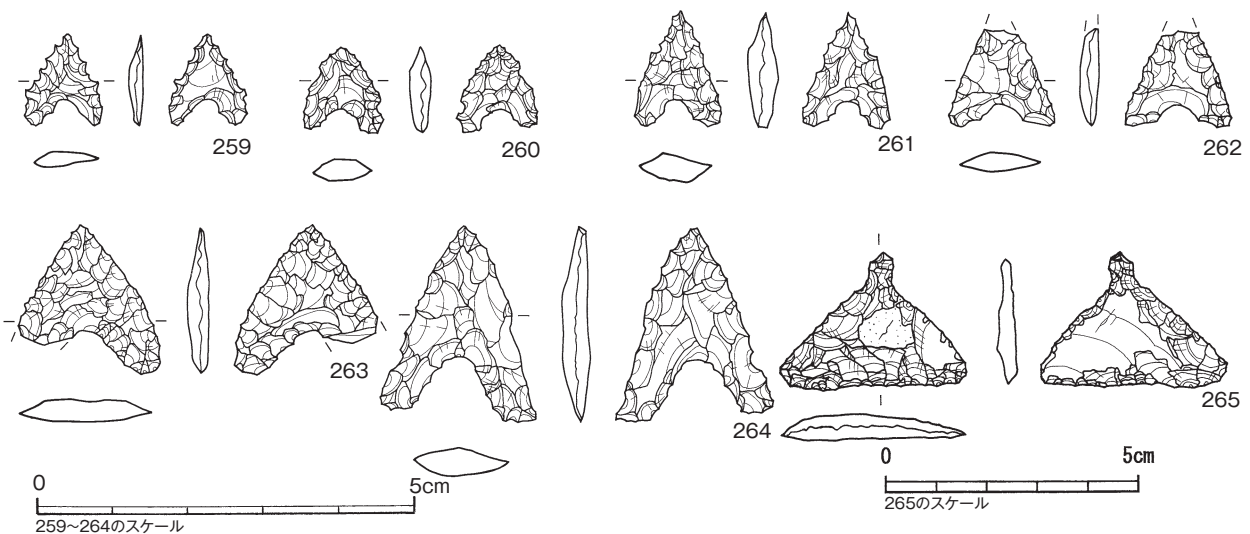
欠損品も含め計8点出土し、6点図示した。259・260は正三角形形状を呈し、基部に抉りが見られる。259の側縁部は明確な鋸歯状を呈している。261・262は二等辺三角形形状を呈し、基部に抉りが見られる。263・264は基部に深い抉りが見られ、明確に脚部が作出されている。特に263は、抉りの内側からも丁寧な調整が施されている。

#### 石匙，スクレイパー（第141・142図265～267）

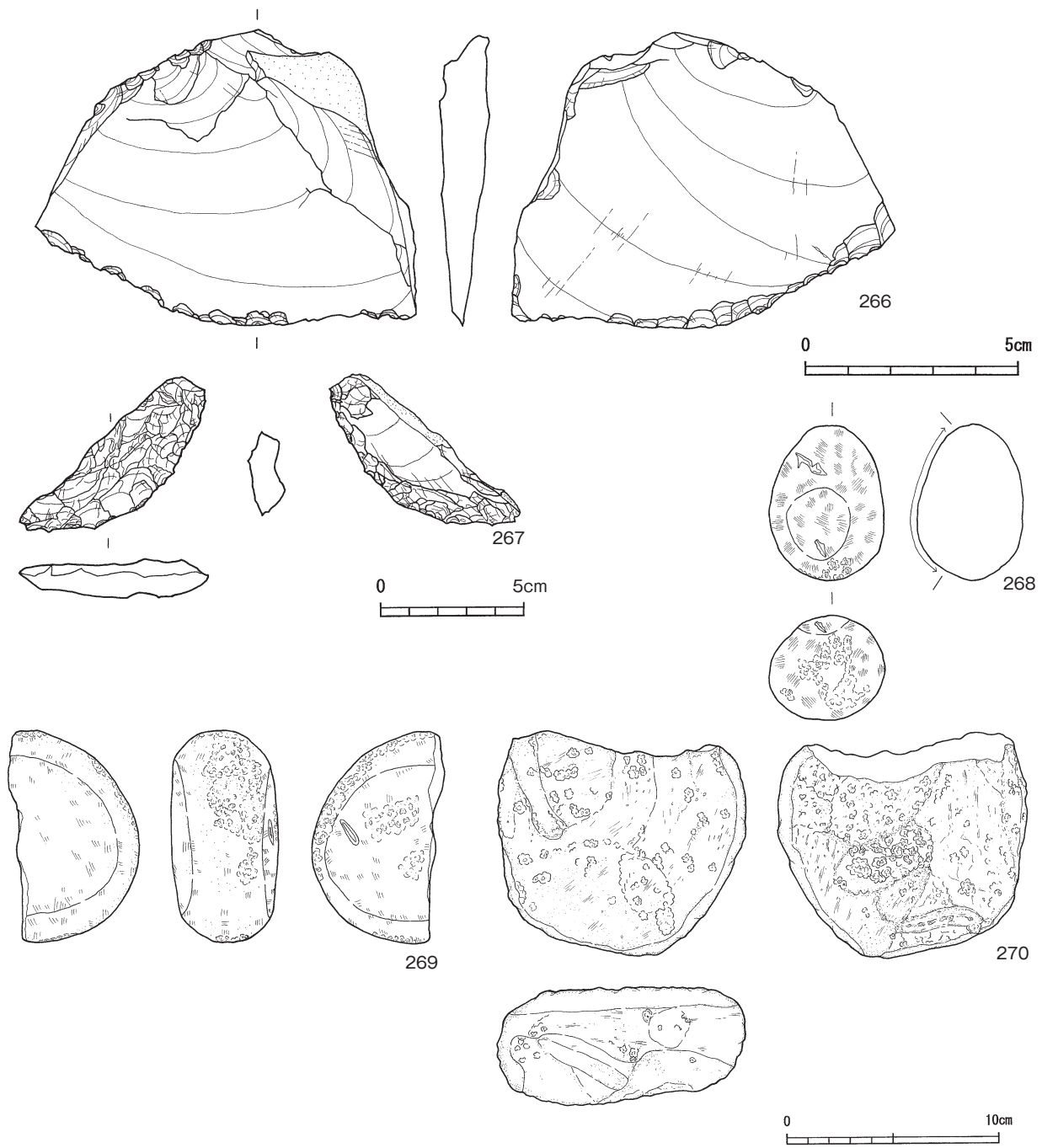
石匙は1点出土した。265は玉随製で、刃部は横方向に丁寧に整形されている。スクレイパーは2点出土した。267は良質な頁岩製で、縦長の形状に整形されている。

#### 磨石・敲石（第142図268～270）

3点出土し、全て図示した。磨面のみでなく、表・裏面または側面に敲打痕が認められる。268は敲石としてのみ使用されている。269は砂岩，270は凝灰岩を石材として使用している。



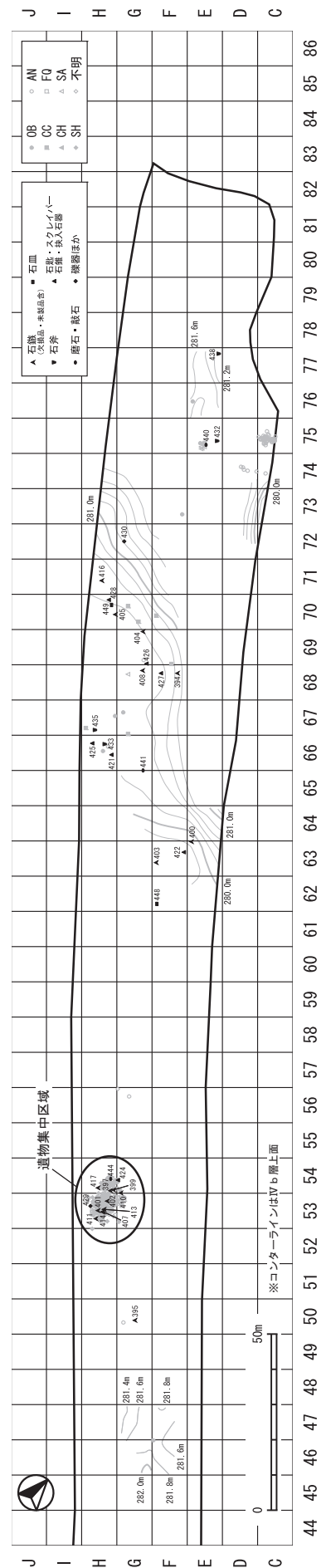
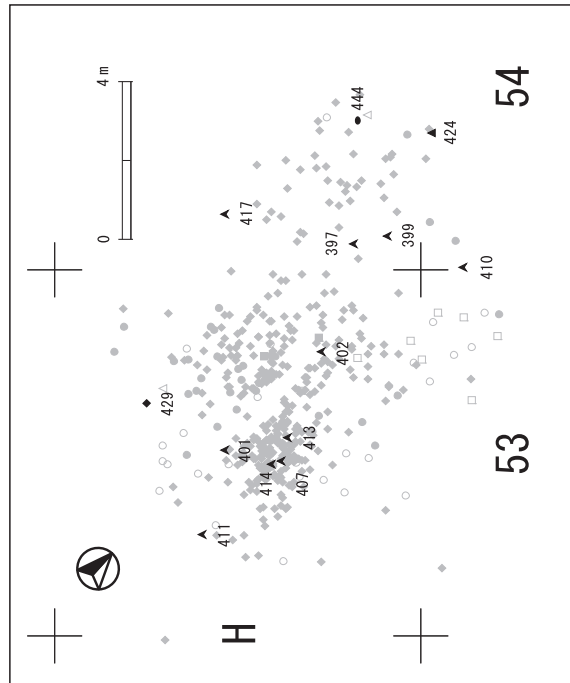
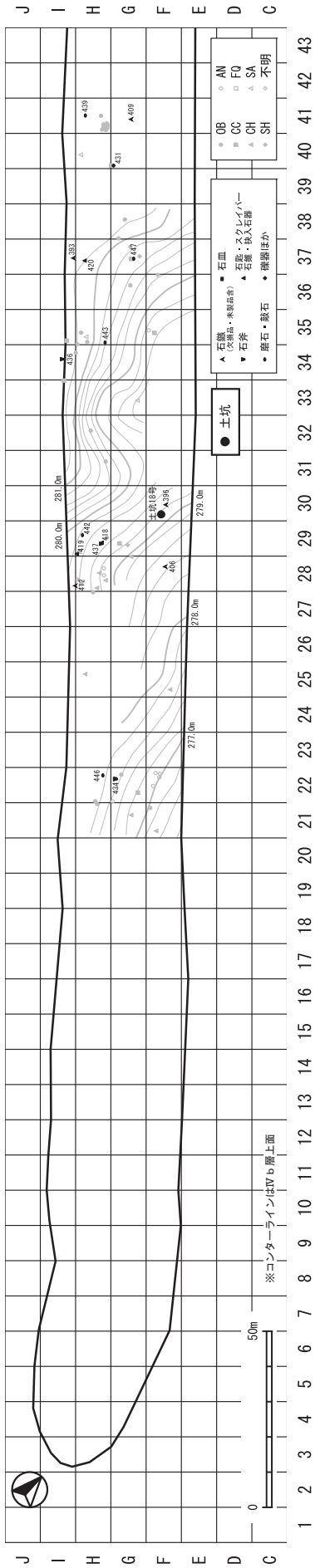
第141図 Va層（縄文前・中期）出土石器(1)



第142図 Va層（縄文前・中期）出土石器(2)

第26表 Va層（縄文前・中期）出土石器観察表

挿図番号	図番号	取上番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	区	層位L1	層位L2	
141	259	10432	打製石鏃	1.2	1.0	0.2	0.19	チャート	G	22	5	a
	260	20170	打製石鏃	1.1	1.1	0.3	0.25	Ob腰岳	H	41	5	a
	261	10360	打製石鏃	1.5	1.1	0.4	0.49	西北系	H	21	5	a
	262	10315	打製石鏃	1.3	1.4	0.3	0.39	チャート	F	30	5	a
	263	20184	打製石鏃	2.0	1.9	0.3	0.81	Ob腰岳	G	41	5	a
	264	10464	打製石鏃	2.6	2.0	0.4	1.06	安山岩	G	23	5	a
	265	10375	石匙	2.6	3.7	0.5	3.54	ギョクズイ	H	21	5	a
142	266	10217	スクレイパー	6.9	8.8	1.5	85.10	頁岩	H	29	5	a
	267	20205	スクレイパー	5.4	6.6	1.3	27.00	頁岩	H	31	5	a
	268	20198	磨石・敲石	7.4	5.4	4.9	260.00	安山岩	I	31	5	a
	269	20104	磨石・敲石	1.0	6.2	5.1	408.00	砂岩	G	42	5	a
	270	10770	磨石・敲石	10.6	11.7	5.2	400.00	凝灰岩	G	24	5	a



第143図 縄文後・晩期 遺構位置図及びIVa層・IVb層出土石器状況図



## 第8節 縄文時代後・晩期の調査成果

### 1 調査の概要

IVa層, IVb層を縄文時代後・晩期該当層として調査した。その結果, 遺構は土坑1基, チップやフレイクを主体とした遺物集中区域が1か所検出された(第143図)。

遺物は, XXI類~XXXI類土器と, 石鏃, 石錐, 石匙, スクレイパー等の石器が出土した。

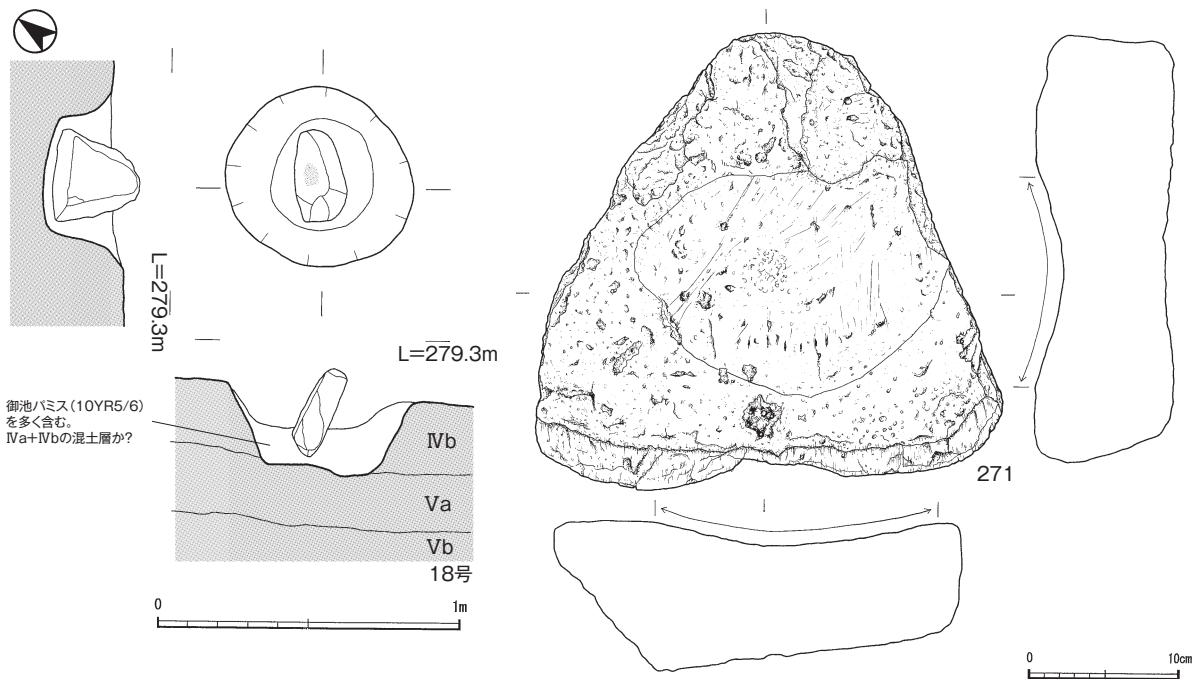
### 2 遺構

#### 18号土坑(第144図)

F-30区のIVb層上面で検出された。掘り込み面は不明であるが, 埋土の状況から縄文時代後・晩期該当の遺構と判断した。埋土中からは三角形の軽石製品1点が直立した状態で出土した。片面に凹みを作った石皿状を呈している。また, 凹みの中には線刻が多くみられる。

#### 遺物集中区域(第143図)

H-53区を中心にチップ, フレイクを主体として検出された。石材別でみると, 頁岩が一番多く544点, 次いで安山岩35点, 黒曜石39点, 鉄石英8点, ギョクズイ5点, チャート3点, 砂岩2点であった。また, 区域内には頁岩製や安山岩製の石鏃が出土しているため, 石器制作跡の可能性が高い。



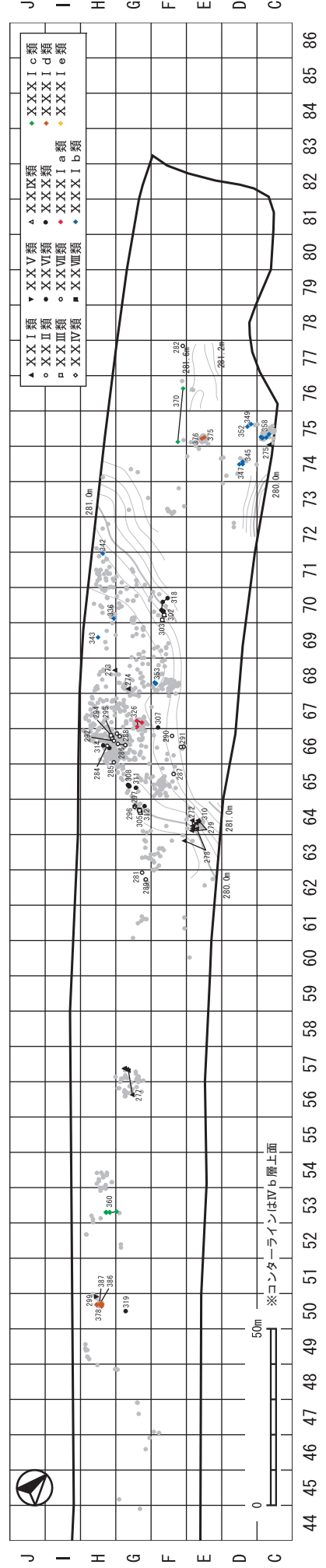
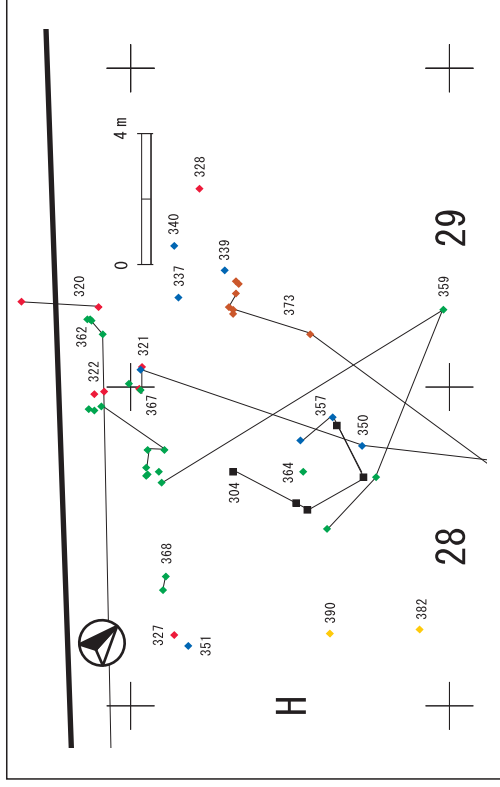
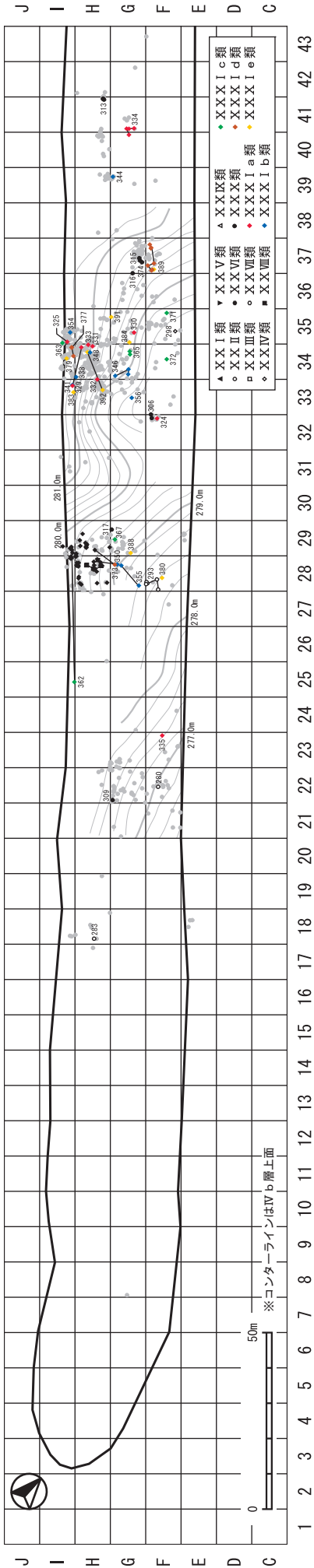
第144図 縄文後・晩期 18号土坑及び土坑内出土軽石製品

第27表 縄文後・晩期 土坑計測表

挿図番号	番号	検出区	検出面	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
144	18	F-30	IVb層	62	60	23	

第28表 土坑内出土軽石製品観察表

挿図番号	図番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
144	271	SD103-1	軽石製品	軽石	304.0	310.0	100.0	2247.0	



第145図 XXXI類～XXXIX類土器出土状況図

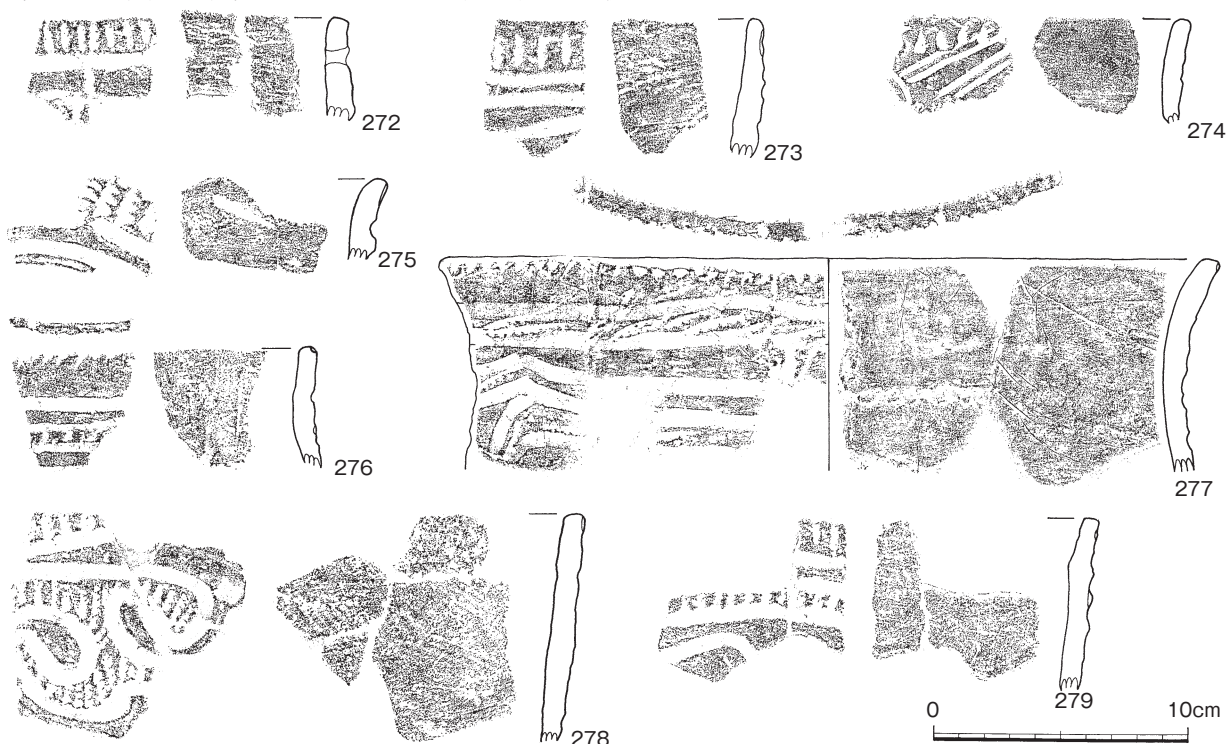
### 3 遺物

#### (1) 後期土器

##### Ⅺ類 (第146図272~279)

この類は沈線文と貝殻腹縁部の刻み目を施すものがaで細めの沈線文を施すものがbである。

272は直行する口縁部である。文様は口縁上部に貝殻腹縁部による縦位の押し引き状の刺突連続文をつけその下位に横位の沈線を施している。器面調整は篋状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が暗茶褐色で内側は淡茶褐色である。273は直行する口縁部である。文様は口縁上部に貝殻腹縁部による縦位の刺突連続文をつけその下位に横位の沈線を施している。器面調整は篋状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が茶褐色で内側は暗茶褐色である。274は直行する口縁部である。文様は口縁上部に貝殻腹縁部による縦位の押し引き状の刺突連続文をつけその下位に斜位の細い2条沈線を施している。器面調整は篋状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が茶褐色で内側は暗茶褐色である。275は直行する口縁部である。文様は口縁上部に貝殻腹縁部による縦位の押し引き状の刺突連続文をつけその下位に横位の沈線を施している。器面調整は篋状施文具による撫でを横位に施している。色調は外面が黒褐色で内側は暗茶褐色である。276は直行する口縁部である。文様は口唇部に刻み目を入れ、下位に横位の沈線文と間に貝殻刺突文を施している。器面調整は横撫である。色調は外面口唇部が煤付着で黒褐色化し他は茶褐色で、内側は暗茶褐色である。277は胴部がやや張り、頸部でやや締まり直行する口縁部をもつ深鉢で、口唇部に台状の突起を貼り付け、刻み目を施している。文様は横位の凹線である。器面調整は篋状施文具による撫でを横位に施している。沈線と沈線の間に貝殻腹縁部の刻み目が見られる。色調は外面が煤付着で黒褐色化し、内側は淡茶褐色である。278・279は直行する口縁部をもつ深鉢である。文様は口縁部に貝殻刺突の連続文を廻らし、やや細めの凹線で蕨手状を描きその中を貝殻腹縁部による刺突連続文を施している。器面調整は横撫である。

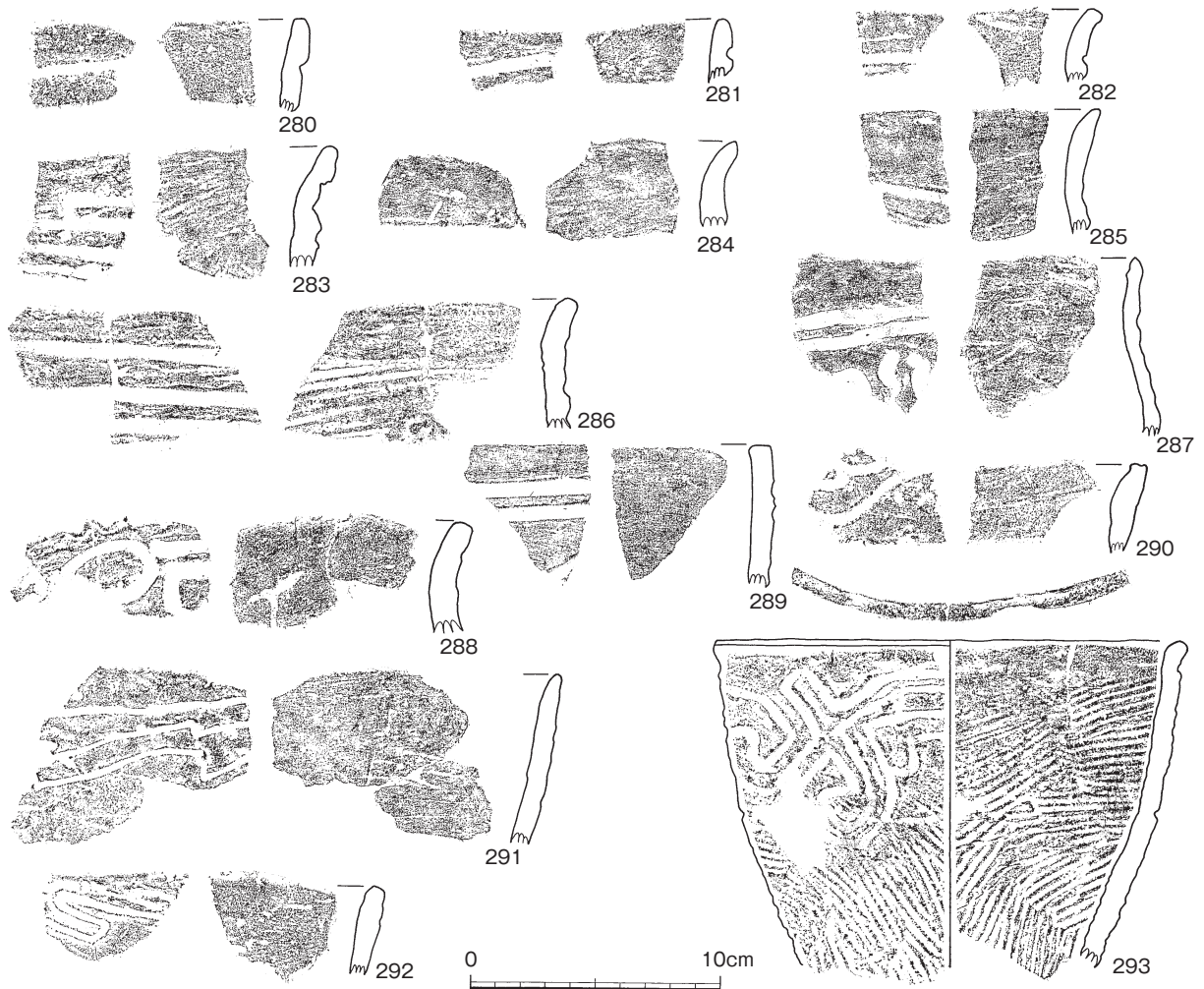


第146図 Ⅺ類土器

XII類（第147図280～293）

この類は沈線のみで文様を施すものである。

280は直行する深鉢の口縁部である。文様は横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗赤茶褐色で、内面が茶褐色である。281は直行する深鉢の波状口縁部である。文様は横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗黄茶褐色で、内面が黄茶褐色である。282は外反する深鉢の口縁部である。文様は横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は内外面とも明褐色である。283は頸部で締まり、外反し肩部で張る深鉢である。そのため、口縁部及び肩部は肥厚している。文様は横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が黒茶褐色で黒色の煤が付着している。内面は暗茶褐色で口縁部は黒色である。284は外反する深鉢の口縁部である。文様はかろうじて頸部に横位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は内外面とも暗茶褐色である。胎土には石英、角閃石、長石等が見られる。焼成度は良く硬質である。285は外反する深鉢の口縁部である。文様は斜位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が茶褐色である。胎土には石英、角閃石、長石等が見られる。焼成度は良く硬質である。286は外反する深鉢の口縁部である。文様は横位の沈線を施している。器面調整は貝殻腹縁部の撫で調整である。色調は外面が赤茶褐色で、内面が灰茶褐色である。287は頸部で締まり外反する深鉢の波状口縁部である。文様は横位の

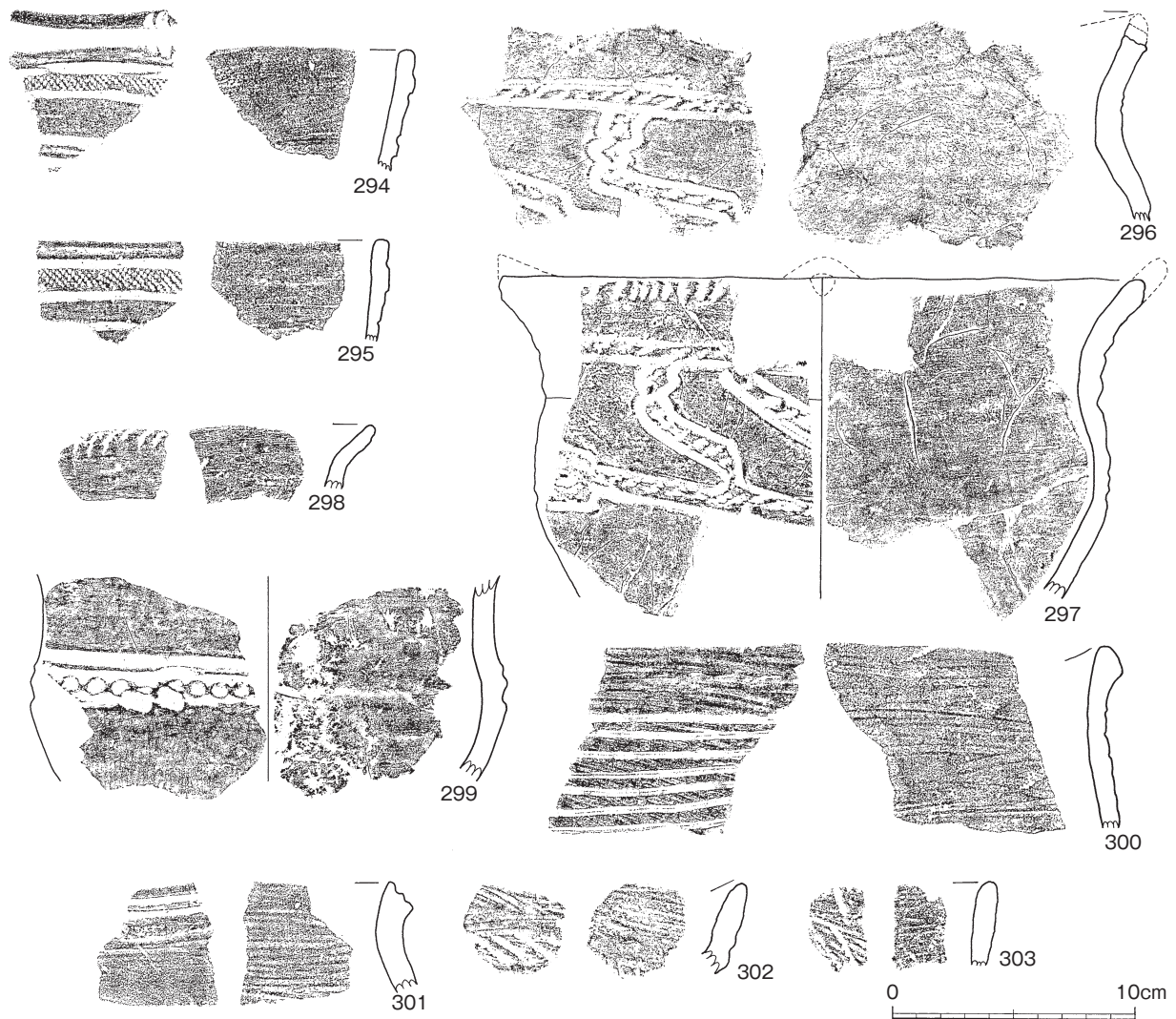


第147図 XII類土器

2本沈線と縦位の曲線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗赤茶褐色で、内面が茶褐色である。288は外反する深鉢の波状口縁部である。口唇部には刻み目がみられる。文様は円形と角形の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が茶褐色である。289は直行する深鉢の口縁部である。文様は横位の2本沈線と斜位の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は内外面とも暗赤茶褐色である。290は直行する深鉢の波状口縁部である。口唇部には刻み目がみられる。文様は横位の沈線を曲線状に施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が赤褐色と灰褐色で、内面が茶褐色である。291は直行する深鉢の口縁部である。文様は横位の沈線を波状に施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が赤茶褐色で、内面が黒茶褐色である。292は直行する深鉢の波状口縁部である。口唇部には刻み目がみられる。文様は湾曲の沈線を施している。器面調整は撫で調整である。色調は外面が暗赤茶褐色で、内面が茶褐色である。293は直行する小型の深鉢である。文様は横位の沈線と蕨手状の沈線を施している。器面調整は貝殻腹縁部による斜位の撫で調整である。色調は外面口縁部が黒色で下部が暗赤茶褐色である。内面は黒茶褐色である。

**XXII類 (第148図294・295)**

この類は磨消縄文土器である。



第148図 XXII類～XXIII類土器

294・295は同一個体と思われ、直行に近い口縁部の部分である。

文様は口唇部の一部に刻み目を付け、外面に横位の平行沈線と撚糸文を施している。器面調整は沈線と撚糸文以外は内外面とも研磨されている。色調は黒茶褐色が基本で、外面の一部に茶褐色がみられる。

#### XXIV類（第148図296～298）

この類は貝殻文で擬似縄文化したものである。

296・297は同一個体と考えられる。器形は頸部で締まり、口縁部が外反し、胴部が球状に張っている。296は波状口縁の山形部である。頂上部が破損しているが口唇部には刻み目がかろうじて残り、中位には円孔が半欠状に残っている。文様は口唇部に貝殻腹縁部による押引連続文を施し、頸部から胴部にかけて2条の平行沈線文の中に貝殻刺突文を施している。これは擬似縄文の範疇に入ると考えられる。文様構成は頸部と胴部に横位に付け、その間を斜位に繋ぐ描き方をしている。器面調整は丁寧な横撫である。色調は296が内外面とも茶褐色で、297が茶褐色と黒褐色である。298は器形が頸部で外反し、文様は口唇部に貝殻刺突の連続文が施されている。破片のため頸部以下は判断できないが、口縁部と胎土、色調、調整等で判断してこの類にした。

#### XXV類（第148図299）

この類は胴部に沈線と凹点刻みがみられるものである。

299の器形は胴部が球状になるものである。文様は胴部の一番張ったところに凹点を横位に連続し、上下に断面V字形の沈線を施している。加えて、凹点連続文の下に大き目の凹点を2点施している。器面調整は外面が黒色研磨で内面が横撫である。色調は外面が黒くないし暗灰褐色で、内面が暗灰色である。

#### XXVI類（第148図300）

この類は口縁部が断面三角形をなし、頸部以下に沈線を施しているものである。

300は波状口縁部と思われるもので、頸部で締まり、断面三角形の口縁部が外反する器形である。文様は頸部以下に浅い筋状の沈線が7本みられ、山形部付近では沈線の間隔が狭くなっている。器面調整は外面が研磨で内面が貝殻条痕の横撫である。色調は外面が赤褐色で、内面が茶褐色である。

#### XXVII類（第148図301）

この類は口縁部が断面三角形をなし、口縁部に沈線を施しているものである。

301は波状口縁部と思われるもので、頸部で締まり、断面三角形の口縁部が外反する器形である。文様は口縁部に沈線が2本みられる。器面調整は外面が丁寧な磨きで内面が貝殻条痕の横撫である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が赤茶褐色である。

#### XXVIII類（第148図302・303）

この類は口縁部に貝殻腹縁部の連続刺突文を施すものである。

302, 303は外反する口縁部で同一個体と思われる。302は波状口縁部で段がつき、外面には稜がつき、その上部に貝殻刺突文を斜位に施している。器面調整は貝殻条痕で外面は斜位と横位で内面は横位である。色調は外面が煤付着で、黒赤茶褐色で内面が赤茶褐色である。303は口縁部の平坦部と思われる。

### XXIX類 (第149図304・305)

この土器は無文で胴部が球状になるものである。

304は球状の胴部で、頸部で締まり、口縁部は大きく外反する器形である。器面調整は横位の研磨である。色調は外面の口縁部が暗茶褐色で、他は灰茶褐色である。305は球状の胴部である。器面調整は外面が横位の研磨で、内面は横撫でである。色調は外面の肩部が黒色で胴部は明茶褐色である。内面は灰褐色である。

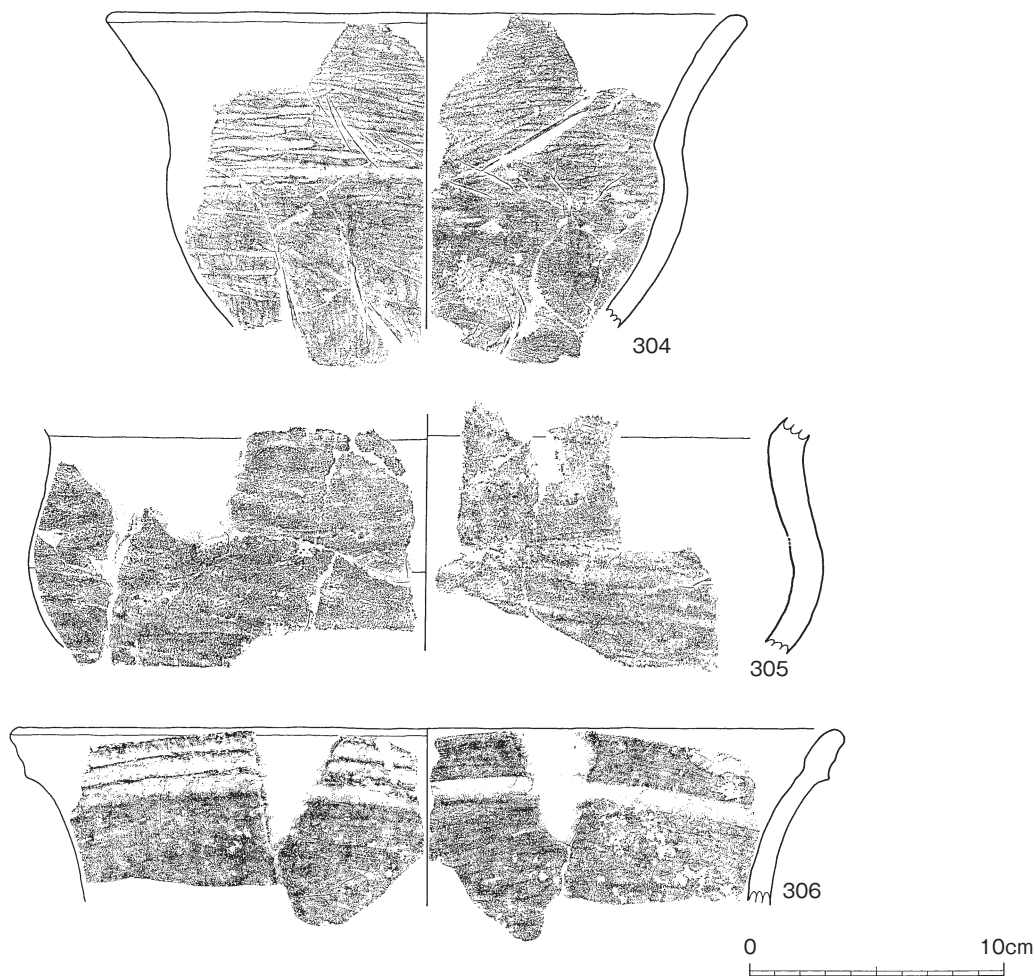
### XXX類 (第149図306)

この類は口縁部に凹線文が見られるものである。

306は外反する口縁部で、口縁部に2条の凹線文が施されている。器面は研磨調整である。色調は暗赤茶褐色と黒色である。

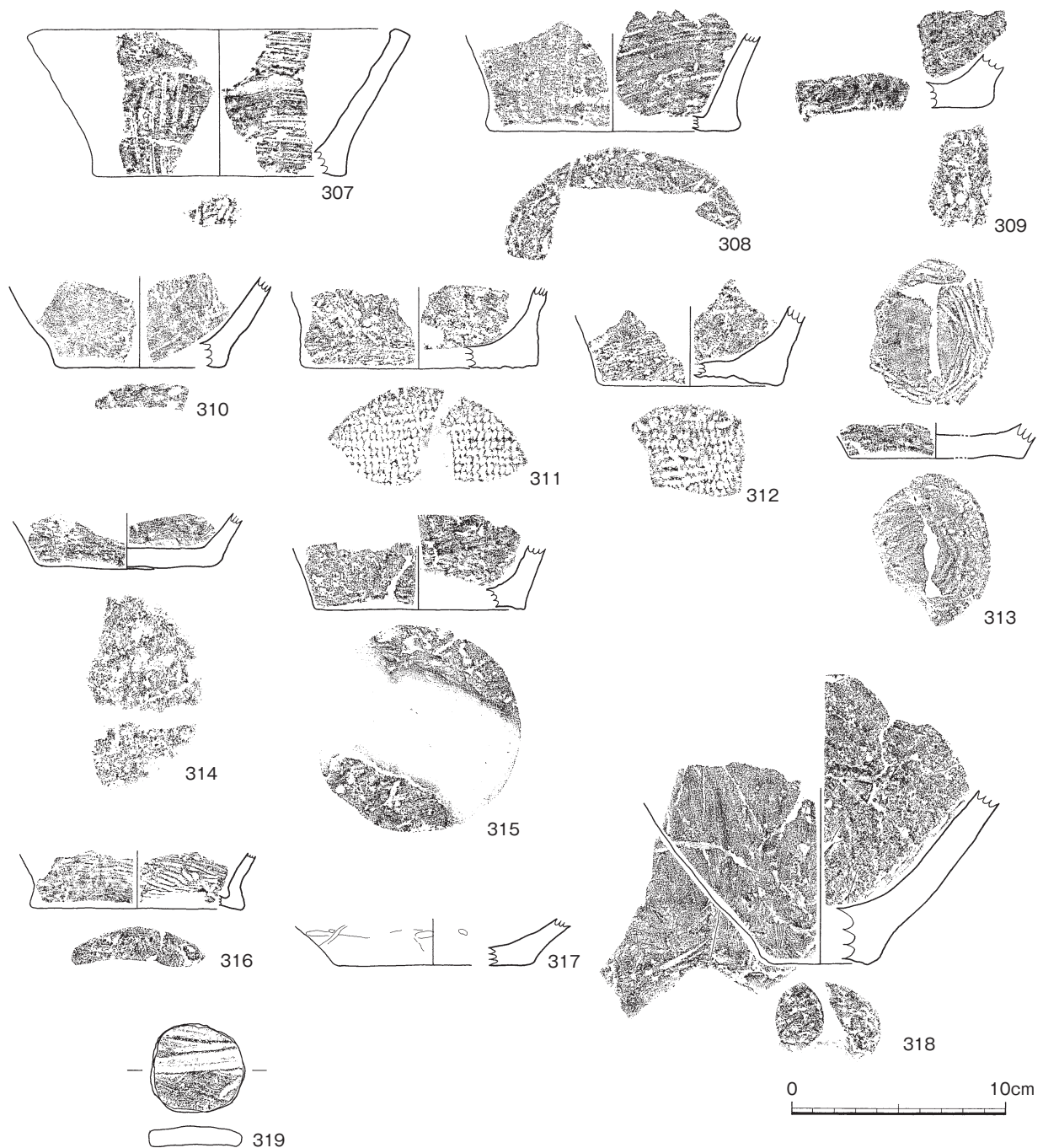
### 無文土器及び底部と土製製品 (第150図307~319)

307は小型の無文土器である。器形は底部から直線状に外反し、口縁部は波状を呈する。器面調整は外面が縦撫で、内面が横撫でである。底面は網代底で平坦と思われる。色調は外面が茶褐色で、内面が暗茶褐色である。胎土には石英、角閃石、長石等が含まれる。焼成度は硬質である。308・309・310は平底で広い張りがみられるタイプである。311・312は張りが無い底部で、312がやや上げ底状態である。底面に網代痕がみられる。器面調整は撫で調整で、色調は茶褐色である。313は絞



第149図 XXIX類・XXX類土器

られた底部で若干上げ底である。器面調整は外面が研磨に近い撫で調整で、内面は貝殻腹縁部による調整である。色調は外面が灰茶褐色で、内面が茶褐色である。314は角が丸みに調整した平底である。器面調整は撫で調整で、色調は茶褐色である。315は張りのない底部で平底である。器面調整は撫で調整で、色調は茶褐色である。316はやや上げ底で、内外面貝殻条痕がみられるものである。色調は灰褐色で薄手の土器である。317は胴部から段をつけて作られた平底である。器面調整は内外面が研磨調整である。色調は外面が灰白褐色で、内面が黒褐色ある。318は厚手で底面が狭い上げ底をもつ土器である。器面調整は外面が研磨に近い撫で調整で、内面は撫で調整である。319は沈線文のある土器片を利用した土製円盤である。



第150図 無文土器及び底部と土製製品



## (2) 晩期土器

### XXIa類 (第151図320~335)

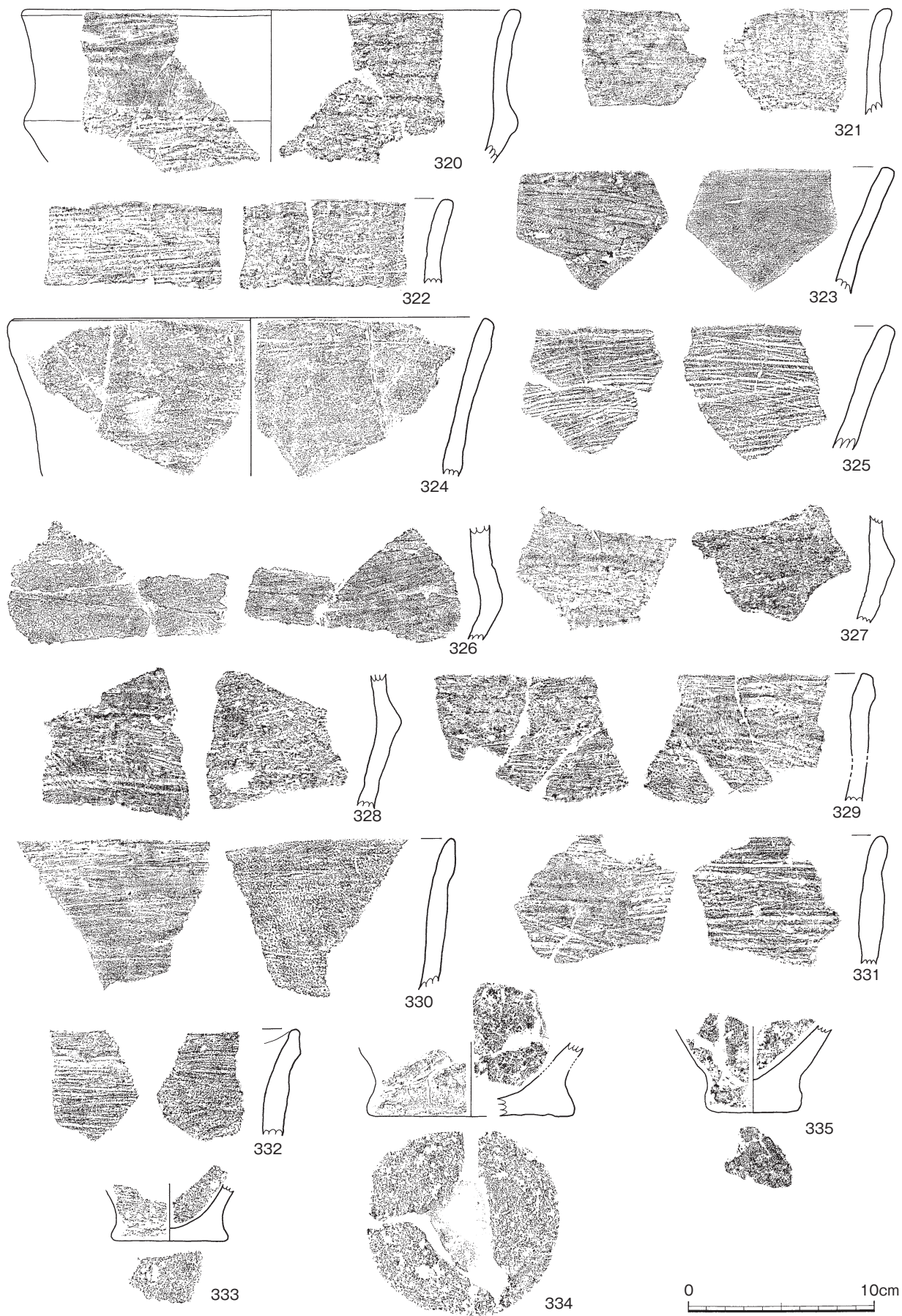
この類は縄文時代晩期の深鉢である。

320・321・322は同一個体と思われる。頸部と肩部が「く」の字状になり、口縁部が直行気味にやや外反し肩部で大きく張る器形である。器面調整は内外面とも横撫で、外面の肩部以下に貝殻条痕文がみられる。色調は外部の口縁部と頸部には煤が付着し黒色化している。肩部以下は茶褐色である。内面は暗茶褐色である。323は頸部がやや締まり、直行気味に外反する口縁部である。器面調整は内外面とも弱い研磨で施している。色調は外面が灰色の上に黒色の煤が付着している。内面は暗茶褐色の上に煤が付着し、黒色化している。324は頸部がやや締まり、直行気味に外反する口縁部である。器面調整は内外面とも弱い撫でで施しているが外面がやや粗い。色調は外面が暗灰色の上に黒色の煤が付着している。内面は茶褐色で、一部には焼成時でできた黒斑がみられる。325は頸部がやや締まり、直行気味に外反する口縁部である。器面調整は内外面とも強い貝殻腹縁部による撫で調整がみられる。色調は外面が赤茶褐色の上に黒色の煤垂れがみられる。内面は茶褐色である。326は張り出しのある「く」の字に折れる肩部である。器面調整は弱い研磨である。色調は外面が黒茶褐色で、黒色の煤もみられる。内面は暗赤茶褐色である。327は張り出しのある「く」の字に折れる肩部である。器面調整は内面が粗い撫で調整で、外面は頸部が丁寧な調整で、胴部が粗い横撫である。色調は外面が茶褐色で、黒色の煤もみられる。内面は暗茶褐色で黒色の斑点がある。328は張り出しのある「く」の字に折れる肩部である。器面調整は内面が粗い撫で調整で、外面は頸部が丁寧な調整で、胴部が粗い横撫である。色調は外面が茶褐色で、黒色の斑点がある。黒色の煤もみられる。内面は暗茶褐色である。329~332は口縁部に肥厚した部分がみられるものである。329は口縁部にやや肥厚した部分をつくり、肩部に向かって丸みをもつ器形である。器面調整は内外面とも粗い撫で調整である。色調は外面が明茶褐色で内面が暗茶褐色である。330は口縁部に肥厚した部分をつくり、肩部に向かって丸みをもつ器形である。器面調整は内外面とも粗い撫で調整である。色調は外面が暗茶褐色で内面が茶褐色である。331は口縁部に肥厚した部分をつくり、肩部に向かって丸みをもつ器形である。器面調整は内外面とも粗い撫で調整である。色調は外面が明茶褐色で内面も明茶褐色である。332は波状口縁で口縁部に肥厚した部分をつくり、肩部に向かって丸みをもつ器形である。器面調整は内外面とも粗い撫で調整である。色調は外面が黒色で内面が明茶褐色である。333は張り出しのある底部で平底である。器面調整は撫で調整で、色調は外面が明茶褐色で内面は黒茶褐色である。334は張り出しのある底部で平底である。器面調整は撫で調整で、色調は外面が明茶褐色で内面は暗茶褐色である。335は張り出しが欠損している底部で平底である。器面調整は撫で調整で、色調は外面が茶褐色で内面も茶褐色である。

### XXI b類 (第152図336~358)

この類は縄文晩期の浅鉢である。

336は口縁部に断面玉縁がみられ、頸部で深く締まり、胴部に向かって大きく張る器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内外面とも黒色である。337は口縁部に断面玉縁がみられ、頸部で浅く締まり、胴部に向かってやや張る器形である。胴部には沈線が横位にみられる。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が茶褐色で、外面は黒色と茶褐色である。338は断面玉縁が口縁部に

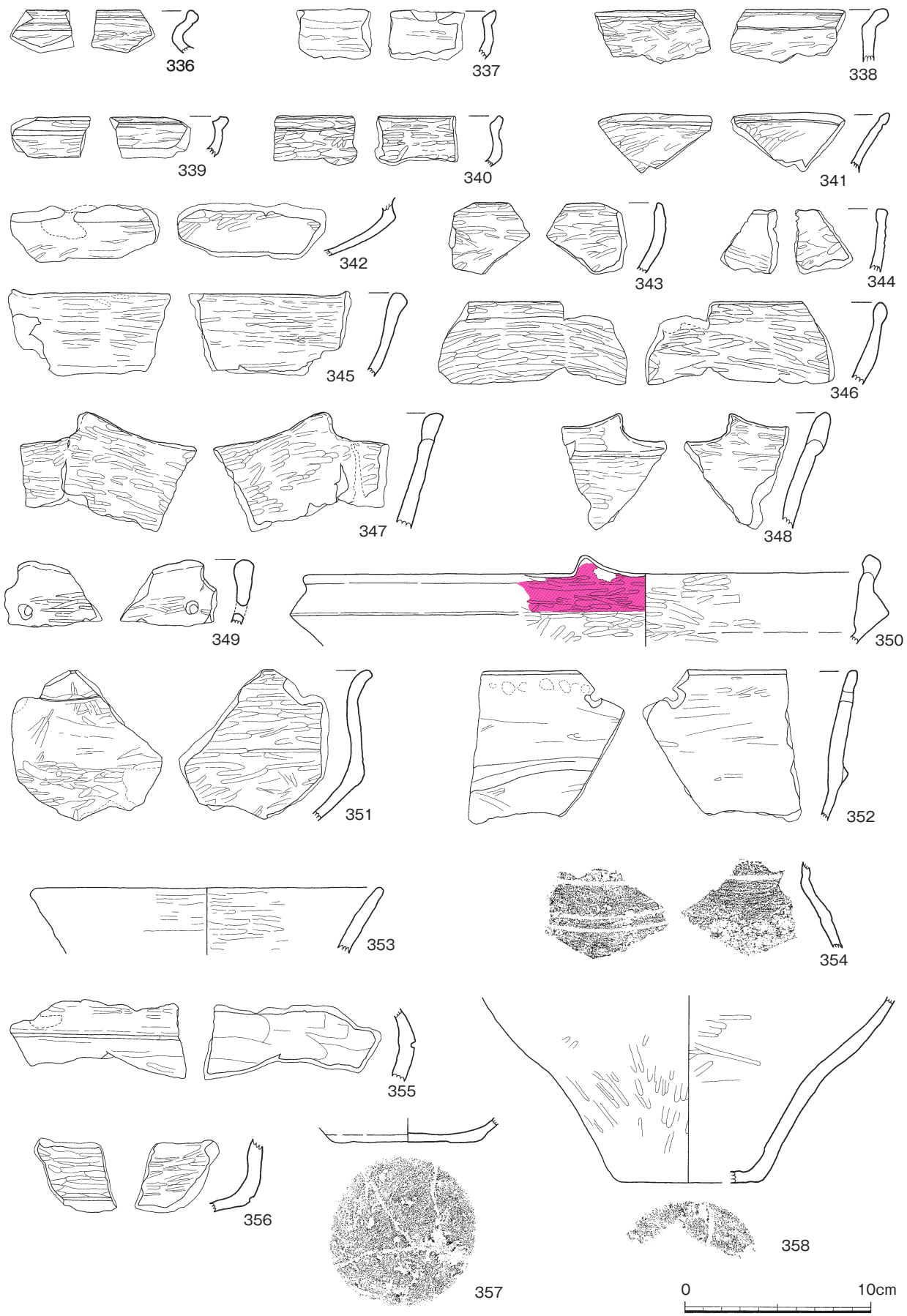


第151図 XXXIa類土器

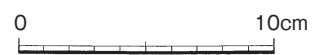
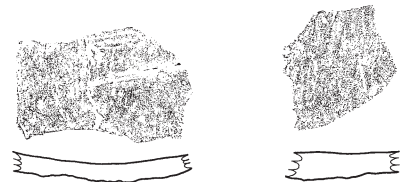
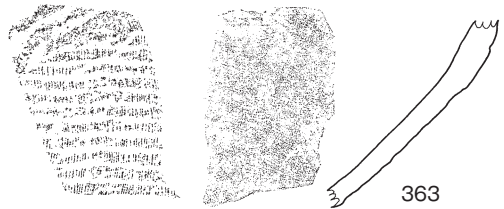
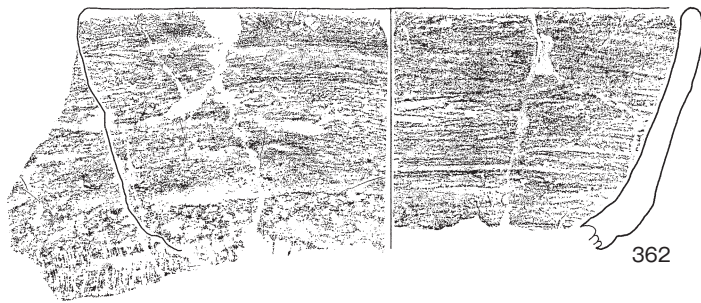
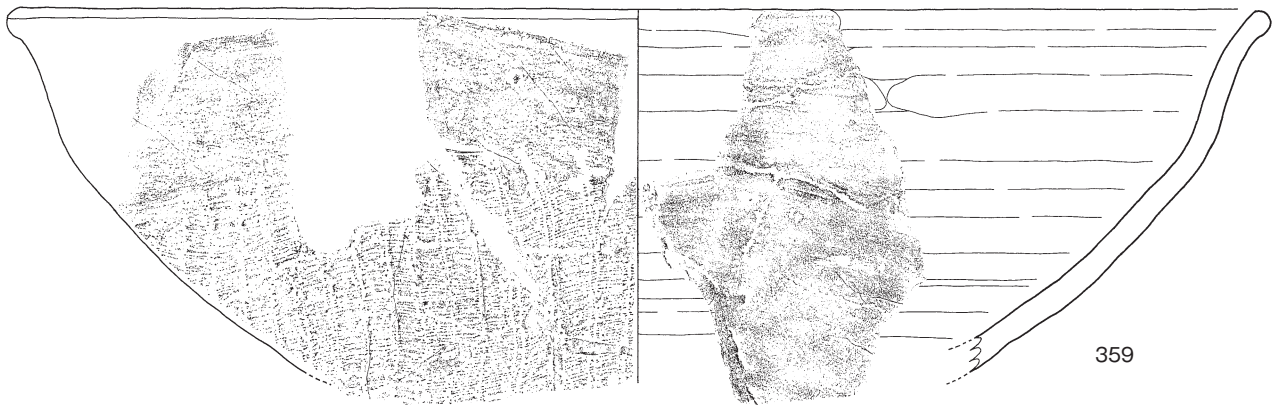
みられ、頸部で浅く締まり、胴部に向かってやや張る器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が茶褐色で、外面は黒色と茶褐色である。339は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部で浅く締まり、胴部に向かってやや張る器形である。胴部には沈線が横位にみられる。器面調整は黒色研磨である。色調は内外面とも黒色である。340は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部で浅く締まり、胴部に向かってやや張る器形で、胴部には稜線がみられる。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が暗茶褐色で、外面は黒色である。341は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部で口縁部が大きく開く器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が黒茶褐色で、外面は黒色と暗茶褐色である。342は頸部で締まり、肩部で稜を持つ頸部から底部までである。器面調整は黒色研磨である。色調は内面外面とも茶褐色である。343は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部から胴部は球状になる器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が黒色で、外面は黒色と茶褐色である。344は断面玉縁が口縁部にみられ、頸部から胴部は球状になる器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が灰黒色で、外面は黒色と灰褐色である。345は丸く膨らむ断面玉縁が口縁部にみられ、頸部から胴部は球状になる器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内面が黒色で、外面は灰褐色である。346は丸く膨らむ断面玉縁が口縁部にみられ、頸部から胴部は球状になる器形である。器面調整は黒色研磨である。色調は内外面とも口縁部が黒色で、胴部が赤茶褐色である。347は口縁部に鱗状突起（別称リボン）を付けたもので外反する器形である。器面調整は外面が黒色研磨で内面が研磨である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が明茶褐色である。348は口縁部に鱗状突起を付けたもので外反する器形である。器面調整は内外面とも黒色研磨である。色調は内外面とも黒褐色である。349は口縁部に鱗状突起を付けたものでやや内反する器形である。器面調整は外面が黒色研磨で内面が研磨である。色調は外面が暗茶褐色で、内面が赤茶褐色に黒色が一部混ざっている。350は口縁部に鱗状突起を付けたもので、口縁部と肩部が断面三角形をした直行する器形である。器面調整は内外面が黒色研磨である。色調は内外面とも灰茶褐色である。351は肩部で「く」の字状に折れ、肩部から口縁部までは直行し、口縁部で外反する器形をもつものである。器面調整は研磨である。色調は内外面とも茶褐色と黒褐色がみられる。352は肩部でやや折れ、外面に断面三角突帯を貼り付け、直行する器形をもつものである。器面調整は研磨である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が茶褐色である。353は外側に直行する器形である。器面調整は研磨である。色調は外面が黒茶褐色で、内面が黒色と一部茶褐色である。354は沈線を頸部と胴部横位に施し、球状をした胴部である。器面調整は弱い研磨である。色調は外面が暗茶褐色と灰茶褐色で、内面が黄茶褐色である。355は沈線を胴部に横位に施し、球状をした胴部である。器面調整は研磨である。色調は外面が黒褐色と灰茶褐色で、内面が暗褐色である。356は沈線を胴部に横位に施し、球状をした胴部である。器面調整は研磨である。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。357は段をつくり上部は立ち上がっている。器壁は薄手の平底である。器面調整は弱い研磨である。色調は外面が黄茶褐色に黒斑があり、内面が黄茶褐色である。358は底面がやや丸みをもつ底部から1回段を作るように絞り込みながら胴部へ開く器形をしている。器面調整は弱い研磨である。色調は外面が黒褐色で、内面が茶褐色である。

#### XXXIc, d類

この類は浅鉢の中で頸部から口縁部の器形が内側に大きく曲がらず、直行ないし外反するもので、



第152図 XXXIb類土器



第153図 XXXIc類土器(1)

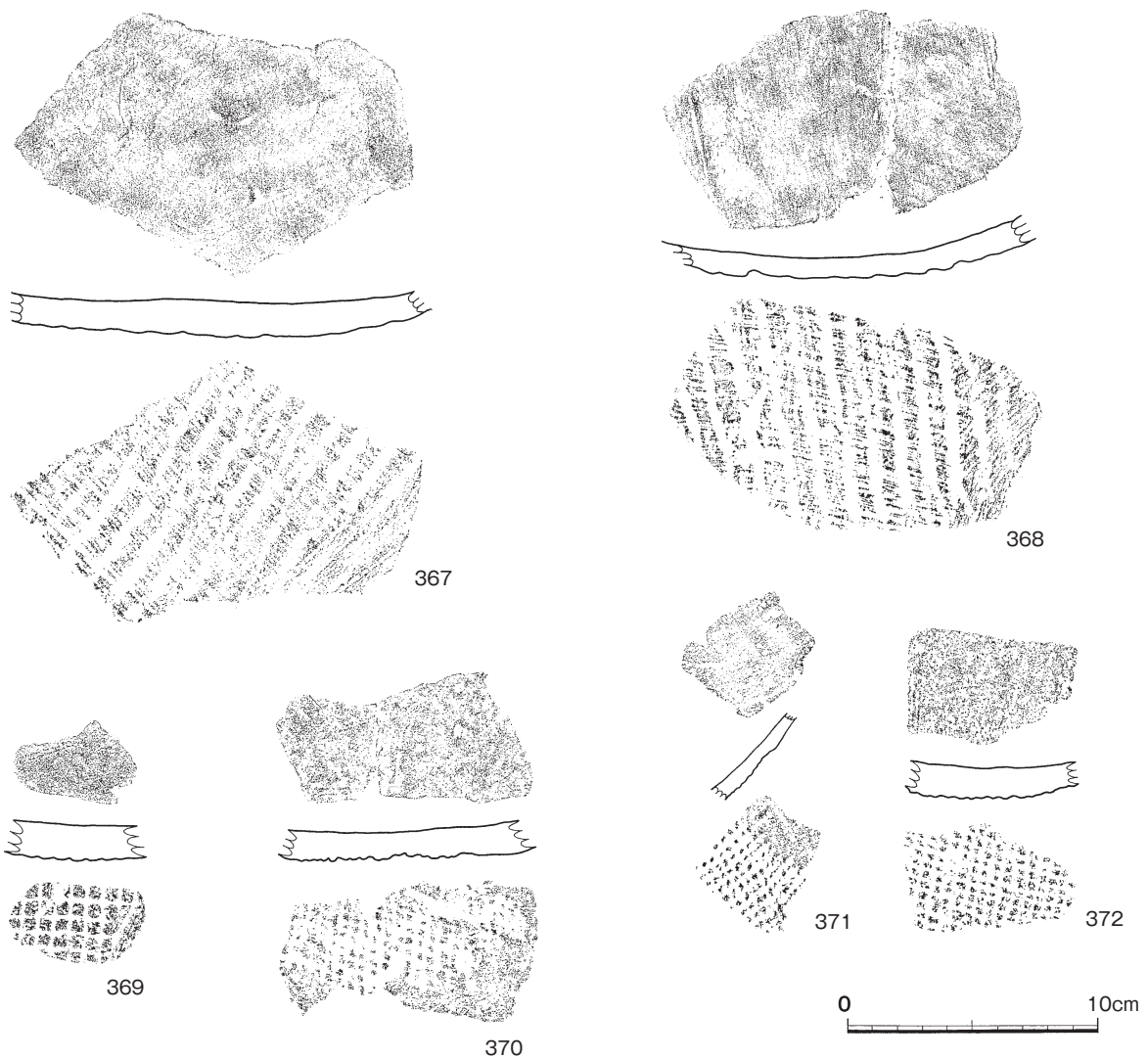
通称ボウル状鉢と呼ばれる大型の浅鉢である。この土器は製作方法に違いがある。共通点は内面が丁寧な研磨があり、外面低部に組織痕があるものと無いもの2つのタイプがある。

#### XXXIc類 組織痕のある土器 (第153・154図359~372)

359は厚手で大型のもので、丸底から肩部で1回折れ、頸部で絞込み、口縁部で外反する器形である。器面調整は、内面には横位の研磨が施され、外面には頸部と口縁部は横撫でがみられ、肩部から底部には幅の広いムシロ目状の組織痕が縦位にみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて煤で黒色化がみられる。ほかに灰茶褐色である。内面は黄茶褐色が大方で、一部黒斑がみられる。360は深みのあるボウル状鉢で、丸底からやや開きながら直行する器形である。器面調整は、内面には横位の研磨が施され、外面には頸部と口縁部は横撫でがみられ、底部には幅の広いムシロ目状の組織痕が縦位にみられる。この組織痕は後から撫で調整があり消えかけている部分もみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて煤で黒色化がみられるほかに明茶褐色である。内面は黄茶褐色と黒斑がみられる。361は肩部から底部にかけての部分と思われる。器面調整は外面に幅の広いムシロ目圧痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が煤付着のため黒色で、内面は暗茶褐色である。362は肩部から直行気味に口縁部が開き、口縁上部ではやや内側に立つ器形である。器面調整は、内面に横位の弱い研磨が施され、外面の口縁部には粗い横撫でがみられ、肩部から胴部には幅の広いムシロ目状の組織痕が横位にみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて煤で黒色化がみられる。内面は黄茶褐色が基本で、底部近くには黒色化がみられる。363は肩部から底部にかけての部分と思われる。器面調整は外面に幅の狭いムシロ目圧痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が煤付着のため黒色で、内面は茶褐色である。364は組織痕土器すなわちボウル状鉢の底部である。器面調整は、内面には横位の研磨が施され、外面には肩部と底部にはムシロ目状の組織痕が縦位にみられる。色調は外面が明茶褐色で、内面は灰茶褐色で、一部黒斑がみられる。365は底部の部分と思われる。器面調整は外面に変則のムシロ目圧痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が黒褐色で、内面は黒茶褐色である。366は底部の部分と思われる。器面調整は外面に幅の狭いムシロ目圧痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は黒茶褐色である。367は底部の部分と思われる。器面調整は外面に幅の広いムシロ目圧痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が明茶褐色で、内面は灰茶褐色である。368は底部の部分と思われる。器面調整は外面に幅の広いムシロ目圧痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が茶褐色で、内面は灰茶褐色である。369は底部の部分と思われる。器面調整は外面に目の広い網目圧痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は黒色である。370は底部の部分と思われる。器面調整は外面に目の狭い網目圧痕の組織痕がみられ、内面には研磨がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は黒色である。371は薄手土器で、底部の部分と思われる。器面調整は外面に網目圧痕の組織痕がみられ、内面には撫で調整がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は黒色である。372は厚手土器の底部の部分と思われる。器面調整は外面に網目圧痕の組織痕がみられ、内面には撫で調整がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面は灰黒色である。

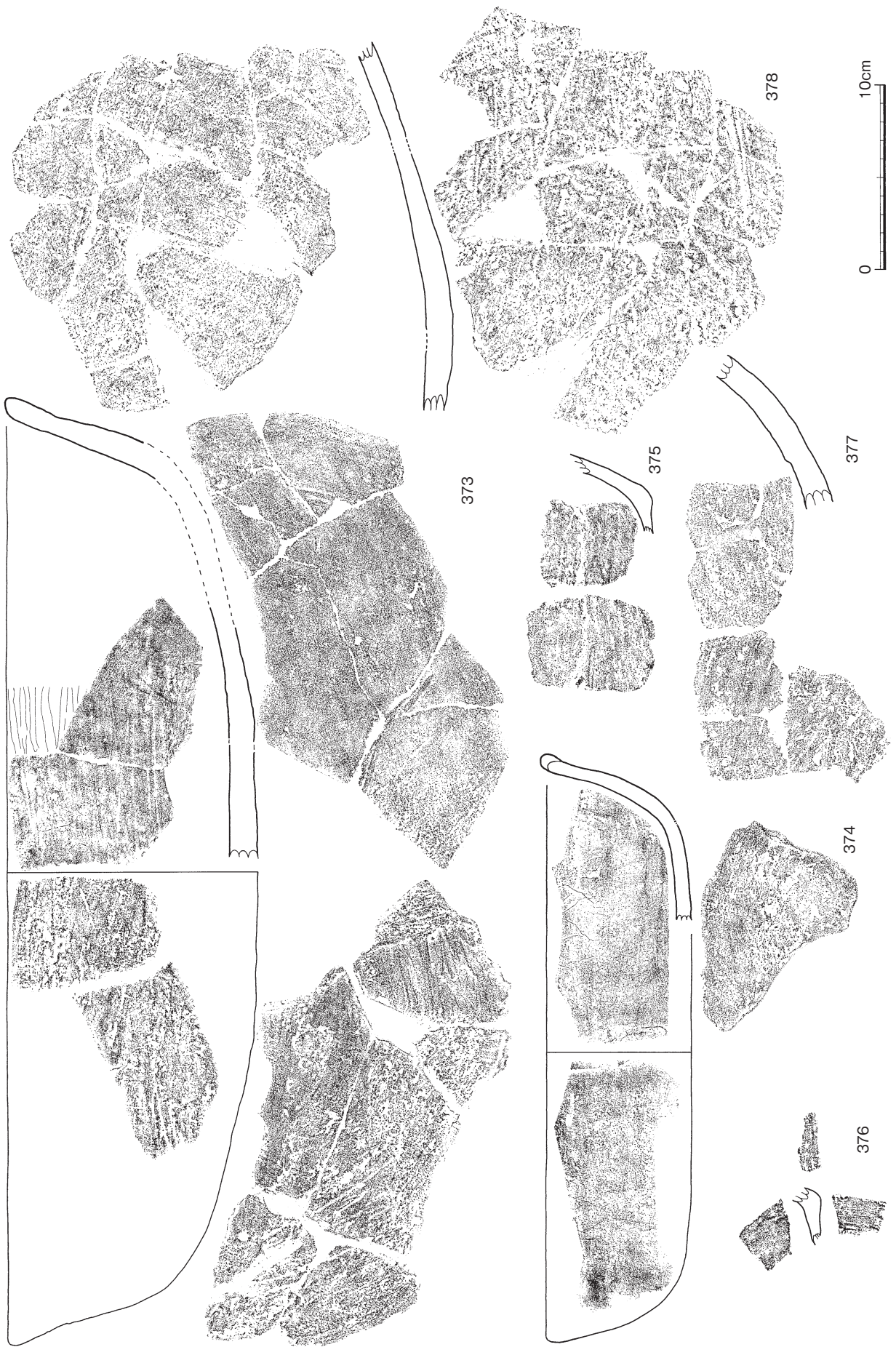
#### XXXId類 組織痕の無い土器 (第155図373~378)

これらの土器はボウル状鉢で組織痕の無いものである。



第154図 XXXIc類土器(2)

373は口径約51cmになる浅鉢で、同質のものを推定復元したものである。器形は胴部から直行気味に口縁部が開き、口縁上部ではやや外反するものである。器面調整は内面に横位の研磨が施され、外面の口縁部から底部にかけては粗い横撫でがみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて灰黒色で一部煤による黒色化がみられる。内面は口縁部が桃茶褐色で、胴部は桃茶褐色、底部は茶褐色である。374は浅いボウル状鉢で、器形は胴部から直行気味に口縁部が開き、口縁上部ではやや外反するものである。また、胴部では折れて底部に至り、口唇部には鱗状突起が付けられている。器面調整は内面に横位の黒色研磨が施され、外面の口縁部から底部にかけては横撫で調整がみられる。色調は外面が口縁部から頸部にかけて煤による黒色化がみられる。内面は口縁部から底部まで黒色である。375は胴部から折れて底部に至るボウル状鉢である。内面は横研磨され、外面は粗い撫で調整である。色調は外面が黄茶褐色に黒斑がみられ、内面は灰茶褐色を呈する。376は胴部から折れて底部に至るボウル状鉢である。内面は横研磨され、外面は粗い撫で調整である。色調は内外面とも茶褐色である。377は胴部から湾曲状に底部に至るボウル状鉢である。内面は弱い横研磨がされ、外面は粗い撫で調整である。色調は外面が茶褐色で、内面は黒茶褐色を呈する。378は湾曲状の底部である。内面は弱い横研磨で、外面は粗い撫で調整である。色調は茶褐色である。



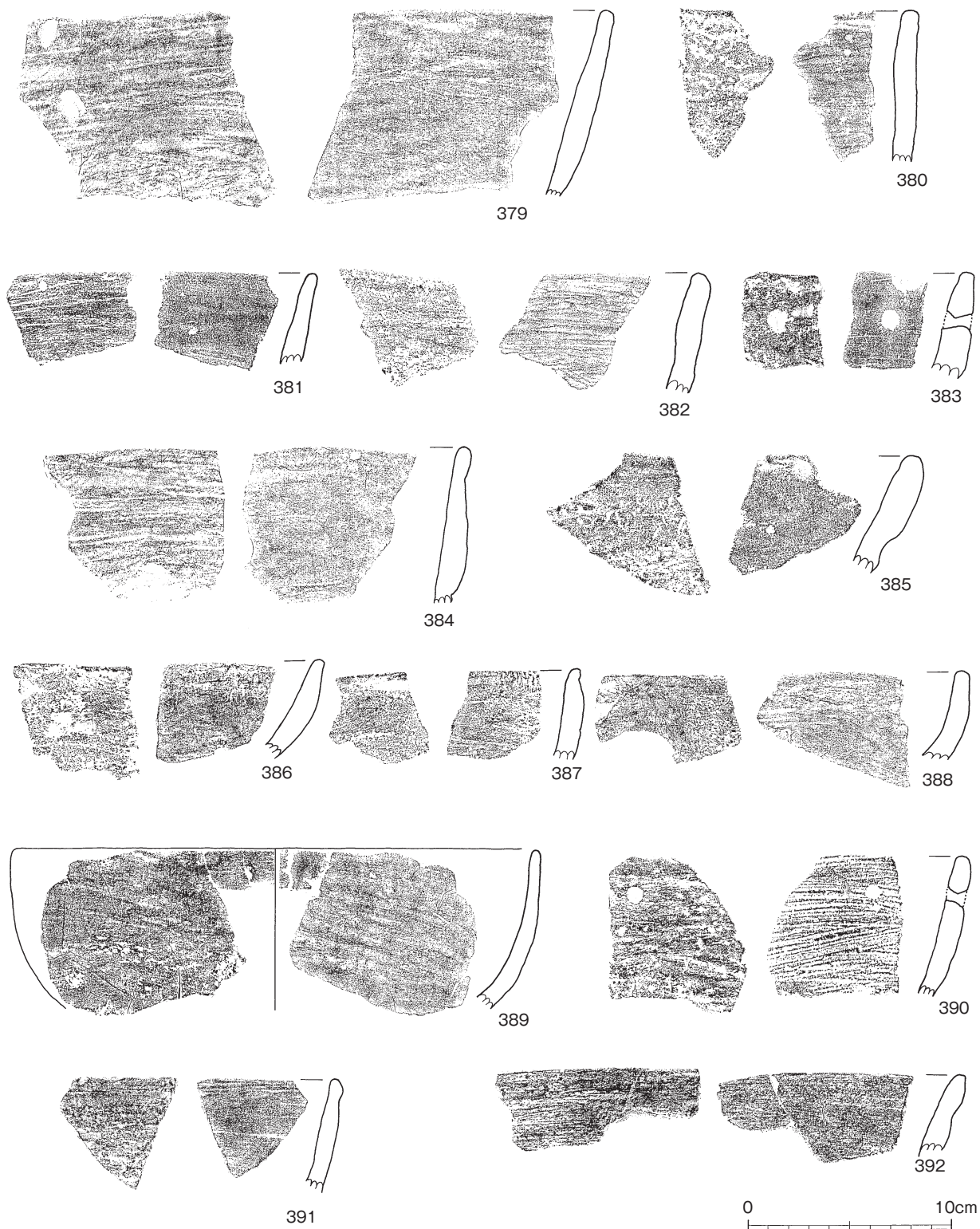
第155図 XXXId類土器



XXIe類 組織痕有無不明の土器（第156図379～392）

379～392は口縁部に限るため組織痕か撫で調整か不明として取り上げた。器形は鉢形土器である。

382は直行する口縁部である。器面調整は内面が横研磨で外面が横撫である。内面には朮痕らしきものが見られる。383は直行する口縁部である。器面調整は内面が横研磨で外面が粗い横撫である。口縁部には補修孔がみられる。



第156図 XXIe類土器



第30表 XXI類～XXI類土器観察表(2)

編年群	図番号	取上番号	分類1	分類2	区	層位	調整	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考	
153	359	10169 10170	X X X I	c	H	28	IV	a	撫で、ムシロ目状の組織痕	研磨	灰茶褐色	黄茶褐色	長・石・角	普通	煤付着 口径44.2cm
		10171 10172													
		10173 10176													
		10177 10239													
		10241 10261													
		10183 10191													
	10181 10182														
	360	10193													
		8581 8582 8583													
		8584 8585 8586													
		8587													
		21608													
21609															
361	10190 10501	c	H	53	IV	a	撫で、ムシロ目状の組織痕	研磨	明茶褐色	黄茶褐色	長・石・角	普通	煤付着 口径38.4cm		
	10502 10534														
362	10643	c	I	29	IV	a	ムシロ目状の組織痕 撫で、ムシロ目状の組織痕	研磨	黒色	暗茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着 口径24.4cm		
	10643														
154	363	20348	X X X I	c	I	35	IV	a	ムシロ目状の組織痕	研磨	黒色	茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着
		364													
		74													
		21419 21451													
		一括													
		10196													
	367	10273		c	H	28	IV	a	ムシロ目状の組織痕	研磨	明茶褐色	灰茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着 口径51.4cm 器高13.6cm
		10166 10167													
		一括													
		2906													
		370													
		2914													
371	21008	c	H	28	IV	a	ムシロ目状の組織痕	研磨	茶褐色	灰茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着 口径32.0cm 器高8.0cm		
	21634														
	一括														
	2906														
	370														
	2914														
155	373	1021 1022 1023	X X X I	d	H	29	IV	a	粗い撫で	研磨	灰黒色	桃茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着 口径51.4cm 器高13.6cm
		10224 10225													
		10226 10228													
		10254													
		6167 6170 6172													
		6181 6182 6183													
	374	4355		d	F	37	IV	-	鱗状突起撫で	黒色研磨	黒色	黒色	長・石・角	普通	煤付着 口径32.0cm 器高8.0cm
		4318													
		21367 21368 21392													
		6087 6088 6089													
		6090 6092 6094													
		6099 6100 6102													
378	6103 6106	d	H	50	IV	a	粗い撫で	弱い研磨	茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着 口径26.0cm 補修孔有り、煤付着		
	6107 6112														
	21336														
	10517														
	一括														
	381														
156	382	10138	X X X I	e	H	28	IV	a	粗い撫で	研磨	灰褐色	明茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着
		21229													
		21416													
		一括													
		6097													
		6098													
	388	10292		e	H	50	IV	a	粗い撫で	研磨	黒色	明茶褐色	長・石・雲・角	硬質	煤付着
		6165 6166													
		10141													
		21400													
		21240													
		21345													
389	6165 6166	e	H	28	IV	a	粗い撫で	研磨	茶褐色	明茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着 口径26.0cm 補修孔有り、煤付着		
	10141														
	21400														
	21240														
	21345														
	21345														
392	21345	e	H	34	IV	a	粗い撫で	研磨	黒色	茶褐色	長・石・角	硬質	煤付着		
	21345														
	21345														
	21345														
	21345														
	21345														

### (3) 石器・石製品

縄文時代後・晩期の石器は、IVa層・IVb層を中心に出土している。同包含層内からは、縄文時代後・晩期の土器が出土しており、石器類に関しても同様と想定する。以下に、石鏃24点、磨製石鏃1点、石錐3点、石匙5点、スクレイパー2点、抉入石器1点、二次加工剥片1点、原石1点、有孔石製品1点、磨製石斧4点、打製石斧3点、磨石・敲石9点、石皿2点を図示した。

#### 石鏃（第157図393～416）

未製品・欠損品も含め計32点出土し、24点図示した。

393～401は、最大長2cm未満の小型のものである。393・394は正三角形を呈し、基部に浅い抉りが見られる。395～401は二等辺三角形を呈し、395は基部に浅い抉り、396～401は明確に脚部が作出された深い抉りが見られる。396は姫島産黒曜石であり、特に丁寧に整形されている。

402～412は最大長2cmを超える大型のものである。二等辺三角形を呈し、基部に抉りが見られ、409～412は明確に脚部が作出されている。404・405は、頭部に近い両側縁が角をもって張り出す形状である。413・414は未製品である。415・416は欠損のため形状の分類ができなかった。

#### 磨製石鏃（第157図417）

1点出土した。417は薄い頁岩の剥片を素材とし、刃部にまで丁寧な研磨が施されている。

#### 石錐（第158図418～420）

3点出土し、全て図示した。419の側縁部はやや鋸歯状を呈する。420は玉随製で厚みがある。

#### 石匙（第158図421～425）

5点出土し、全て図示した。424は針尾系黒曜石製で、横長の形状に丁寧に形成されている。

#### スクレイパー（第158図426・427）

4点出土し、2点図示した。427は玉随製であり、自然面を多く残している。

#### その他（第158図428～431）

全て図示した。428は玉随を素材とした抉入石器である。429は二次加工剥片であり、縁辺の一部に二次加工が施されている。430は水晶の原石である。431は丁寧に研磨が施された有孔石製品である。穿孔は中央部が最も狭くなっている。

#### 石斧（第159図432～438）

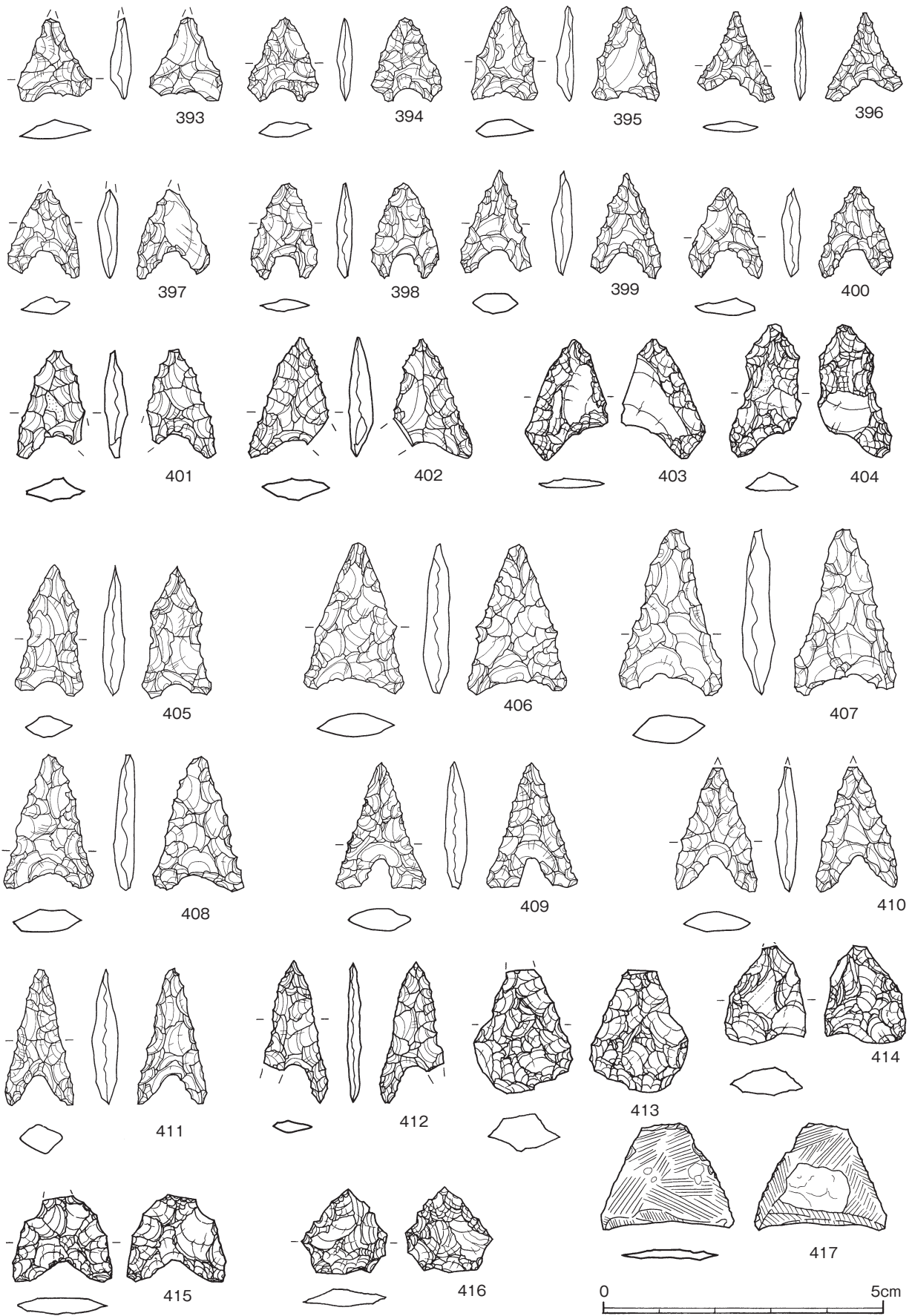
7点出土し、全て図示した。磨製石斧と打製石斧を一括した。432～435は磨製石斧である。432はバチ形をし、側辺も丁寧に磨いている。434は左側縁部に敲打痕が集中して認められる。435は表裏両面に丁寧な研磨が施され、刃部下半は欠損している。436～438は打製石斧である。437・438はラケット形で扁平な剥片を素材としている。

#### 磨石・敲石（第159・160図439～447）

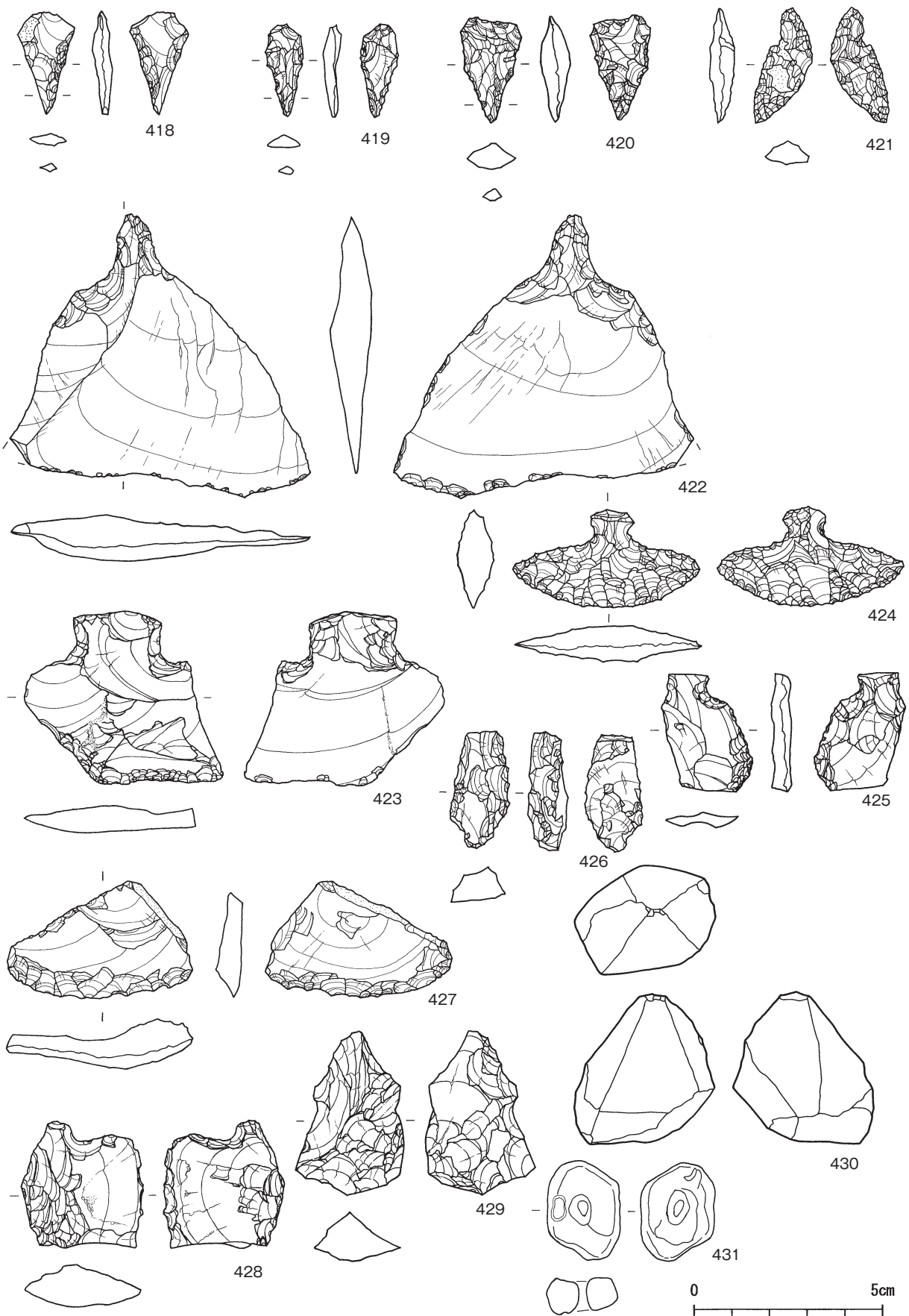
9点出土し、全て図示した。439・442・446は表裏面には磨面が、周縁部には集中した敲打痕が認められる。444は周縁下部に深い凹みが認められる。440・441は小型のもので、磨面と敲打痕が認められる。

#### 石皿（第161図448～449）

3点出土し、2点図示した。2点とも表面に磨面が認められる。448は砂岩を、449は平坦な安山岩を利用している。また、448は被熱している。



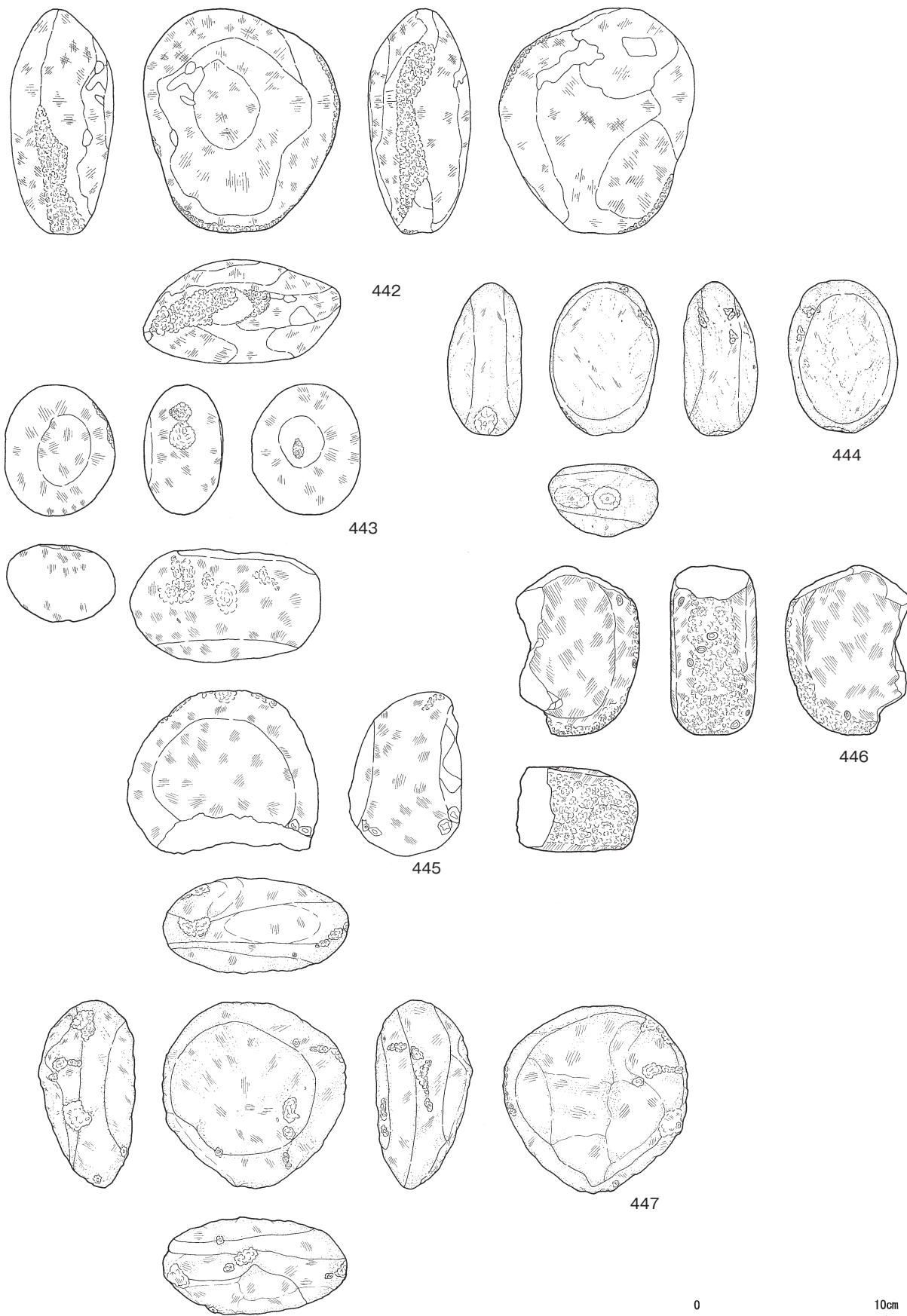
第157図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(1)



第158図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(2)

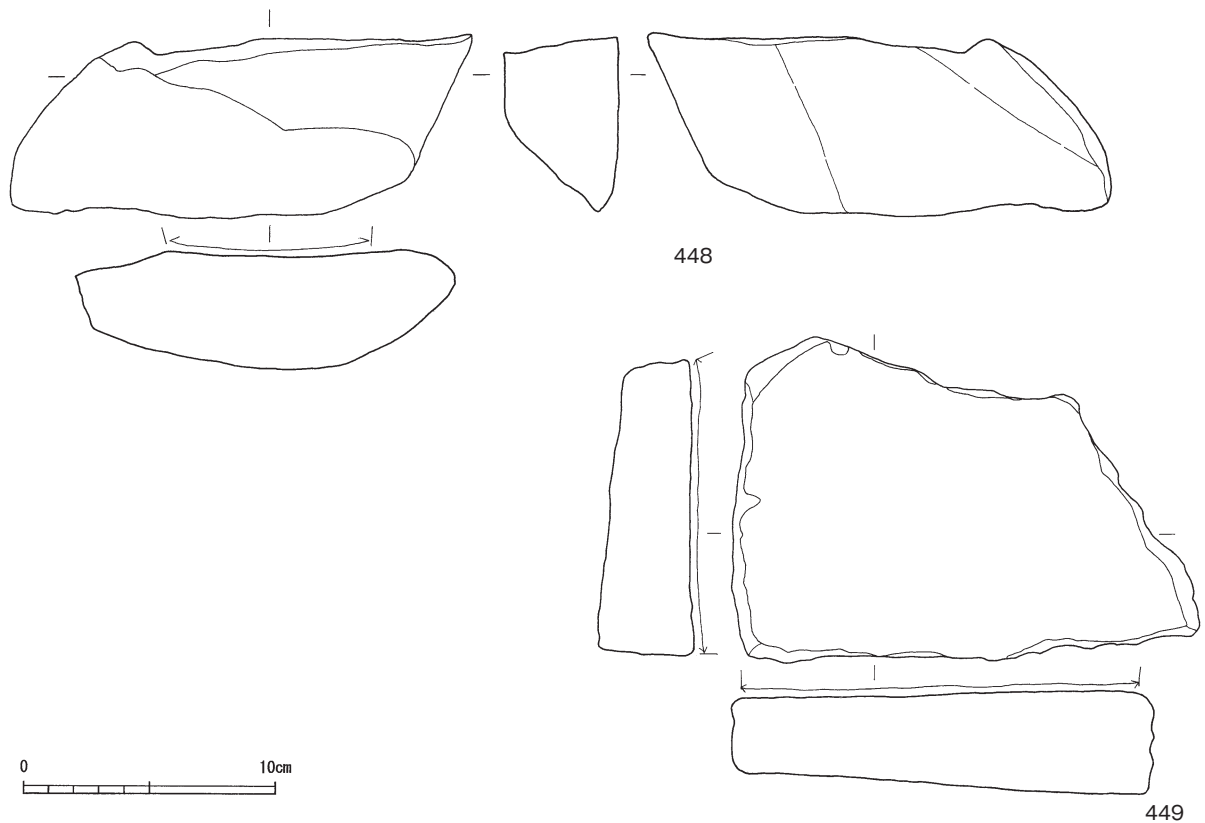


第159図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(3)



第160図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(4)





第161図 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器(5)

第31表 IVa層・IVb層（縄文後・晩期）出土石器観察表

挿図番号	図番号	取上番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	区	層位L1	層位L2		
157	393	6853	打製石鏃	1.5	1.3	0.4	0.49	サヌカイト	I	37	3	b	
	394	1017	打製石鏃	1.5	1.3	0.3	0.44	チャート	F	68	4	a	
	395	6109	打製石鏃	1.7	1.2	0.3	0.58	チャート	G	50	4	a	
	396	10317	打製石鏃	1.6	1.4	0.2	0.25	Ob姫島	F	30	4	b	
	397	7651	打製石鏃	1.6	1.3	0.3	0.44	チャート	H	54	4	b	
	398	表採	打製石鏃	1.7	1.2	0.2	0.48	安山岩	-	-	-	-	-
	399	7612	打製石鏃	1.8	1.2	0.4	0.59	安山岩	H	54	4	a	
	400	3755	打製石鏃	1.6	1.3	0.3	0.50	Ob三船	E	63	3	b	
	401	6448	打製石鏃	1.9	1.2	0.4	0.70	頁岩	H	53	4	a	
	402	6422	打製石鏃	2.1	1.4	0.4	0.90	サヌカイト	H	53	4	a	
	403	9279	打製石鏃	2.2	1.5	0.2	0.50	サヌカイト	F	63	4	a	
	404	1854	打製石鏃	2.3	1.3	0.3	1.00	タンパク石	G	69	4	a	
	405	1884	打製石鏃	2.3	1.2	0.4	0.80	チャート	H	70	4	a	
	406	10307	打製石鏃	2.7	1.8	0.4	1.96	チャート	F	28	4	a	
	407	8579	打製石鏃	2.9	1.8	0.5	2.19	頁岩	H	53	4	a	
	408	952	打製石鏃	2.4	1.6	0.4	1.32	頁岩	G	68	4	a	
	409	20183	打製石鏃	2.2	1.6	0.4	0.88	チャート	G	41	4	b	
	410	7616	打製石鏃	2.2	1.5	0.4	0.95	安山岩	G	54	4	a	
	411	6471	打製石鏃	2.4	1.2	0.5	0.89	安山岩	H	53	4	a	
	412	10161	打製石鏃	2.5	1.1	0.2	0.46	安山岩	I	28	4	a	
	413	7219	石鏃未製品	2.3	1.7	0.7	2.50	頁岩	H	53	4	b	
	414	6437	石鏃未製品	1.7	1.4	0.5	1.50	頁岩	H	53	4	a	
	415	一括	石鏃欠損品	1.5	1.8	0.3	0.50	安山岩	-	-	-	-	
	416	1813	石鏃欠損品	1.5	1.5	0.3	0.50	チャート	H	71	4	a	
	417	7577	磨製石鏃	1.9	2.3	2.0	1.00	頁岩	H	54	3	a	
	158	418	10233	石鏃	2.7	1.5	0.4	1.30	サヌカイト	H	29	4	a
		419	10533	石鏃	2.5	0.9	0.4	0.80	サヌカイト	H	29	4	a
420		21023	石鏃	3.8	1.5	0.8	2.90	タンパク石	H	37	4	b	
421		838	石匙	3.0	1.5	0.7	2.35	Ob上牛鼻	H	66	4	a	
422		1822	石匙	7.5	8.0	1.2	38.00	サヌカイト	F	63	4	a	
423		一括	石匙	4.6	5.3	0.8	17.00	タンパク石	-	-	4	a	
424		7609	石匙	2.6	4.9	0.9	7.54	Ob針尾	G	54	4	a	
425		293	石匙	3.2	2.4	0.4	3.50	タンパク石	H	66	4	b	
426		962	スクレイパー	3.0	1.5	1.0	4.08	Ob三船	G	69	4	-	
427		974	スクレイパー	3.1	4.8	1.3	12.74	タンパク石	F	68	4	a	
428		1836	抉入石器	3.3	3.2	1.2	13.00	タンパク石	H	70	4	b	
429		6376	二次加剝片	2.9	1.9	0.9	3.50	頁岩	H	53	4	a	
430		1085	原礫	3.9	3.7	2.8	39.70	水晶	G	72	4	a	
431		20041	石製品	2.6	1.9	1.1	8.50	頁岩	G	40	4	a	
432		4291	磨製石斧	15.6	6.0	3.4	376.50	ホルンフェルス	E	75	4	a	
433		655	磨製石斧	7.5	6.0	3.4	197.00	砂岩	H	66	4	a	
159		434	10409	磨製石斧	9.3	5.6	2.5	200.00	砂岩	G	22	4	a
	435	223	磨製石斧	11.3	4.1	2.1	112.00	頁岩	H	67	4	a	
	436	21334	打製石斧	8.7	3.0	1.8	65.00	頁岩	I	34	4	a	
	437	10234	打製石斧	11.9	7.8	1.1	130.80	頁岩	H	29	4	a	
	438	4446	打製石斧	10.8	7.0	1.5	114.80	頁岩	E	77	4	a	
	439	21114	磨石・敲石	9.1	8.1	4.8	540.00	安山岩	H	41	4	-	
	440	4356	磨石・敲石	3.8	3.7	1.2	30.00	砂岩	E	75	4	a	
	441	1244	磨石・敲石	5.3	4.6	2.3	90.00	砂岩	G	65	4	a	
160	442	10215	磨石・敲石	11.9	10.3	5.4	840.00	安山岩	H	29	4	a	
	443	21409	磨石・敲石	6.9	5.7	4.1	250.00	安山岩	H	35	4	a	
	444	7839	磨石・敲石	8.1	5.7	3.8	200.00	安山岩	H	54	4	-	
	445	309	磨石・敲石	8.7	10.0	6.1	710.00	安山岩	-	-	4	b	
	446	10714	磨石・敲石	8.9	6.5	4.5	420.00	安山岩	H	22	4	a	
	447	6907	磨石・敲石	9.8	9.6	5.0	530.00	安山岩	G	37	4	b	
161	448	22496	石皿	7.3	18.3	4.5	720.00	砂岩	F	62	3	b	
	449	1775	石皿	18.5	12.9	4.1	1,570.00	安山岩	H	70	4	b	

## 第9節 弥生時代・古墳時代の調査成果

### 遺物

#### (1) 弥生時代 (第162図450~452)

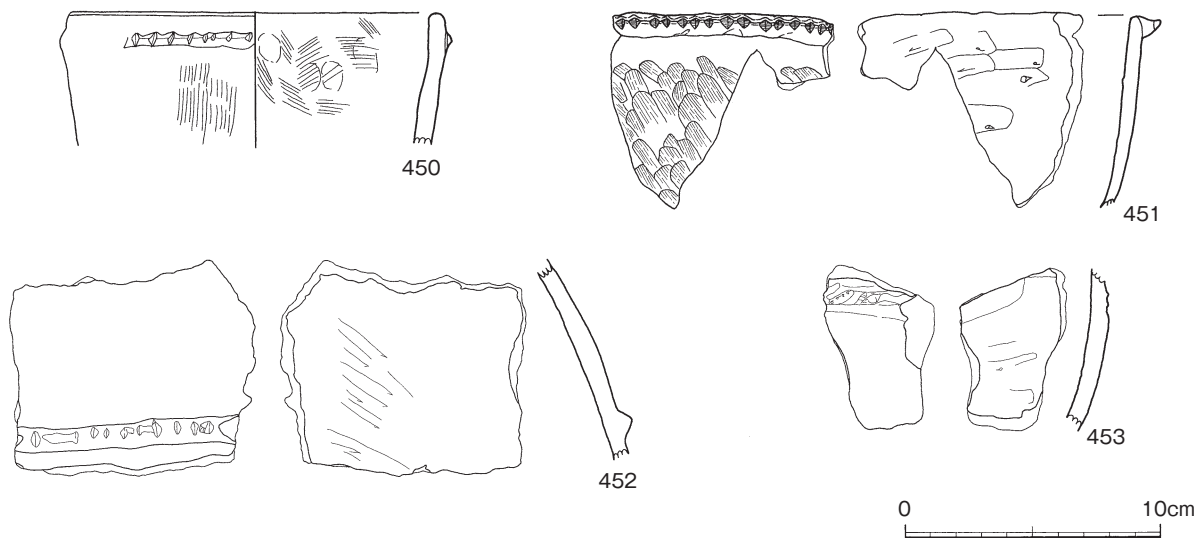
この時代の土器の出土状況は、F-24区を中心にIVa層に出土しているが量は少ない。よって、分布図は省く。

450は甕形土器の口縁部である。文様は口縁部において一段下がった部分に細い刻目突帯を貼り付けている。刻み目は三角突帯に縦位に施されている。器面調整は外面が縦研磨で、内面が横研磨である。色調は内面及び胎土が黒色で、外面が灰黒色である。451は甕形土器の口縁部である。口縁部は三角突帯を貼り付け、縦位の刻み目を施している。器面調整は外面が斜位のヘラナデで、内面がヨコナデである。色調は外面が暗茶褐色で、内面は口縁部側が茶褐色で胴部側が黒色である。452は壺形土器の肩部である。文様は三角突帯に縦位の刻み目を施している。器面調整は外面が丁寧な横ナデで、内面が斜位のナデである。色調は外面が茶褐色に明茶褐色の斑点があり、内面には茶褐色に黒斑がみられる。

#### (2) 古墳時代 (第162図453)

この時代の土器の出土状況は、G-45区を中心にIVa層に出土しているが量は少ない。よって、分布図は省く。

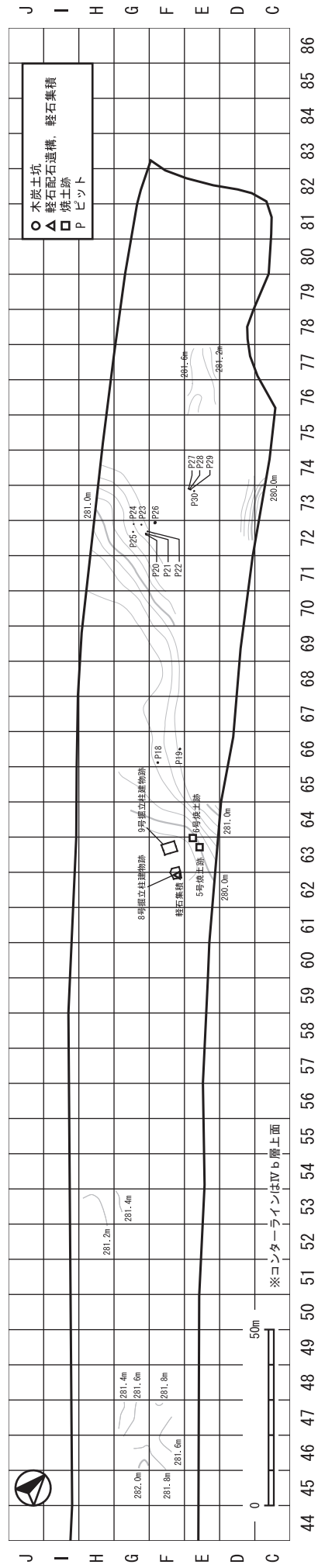
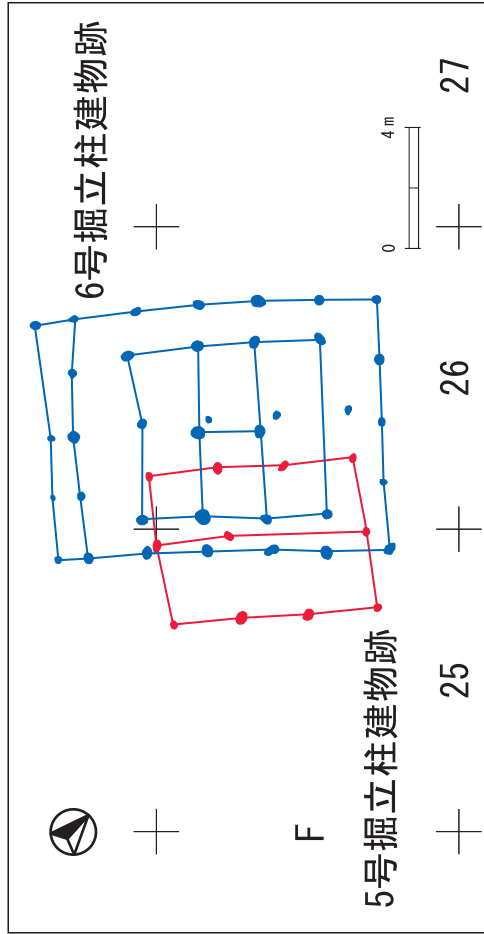
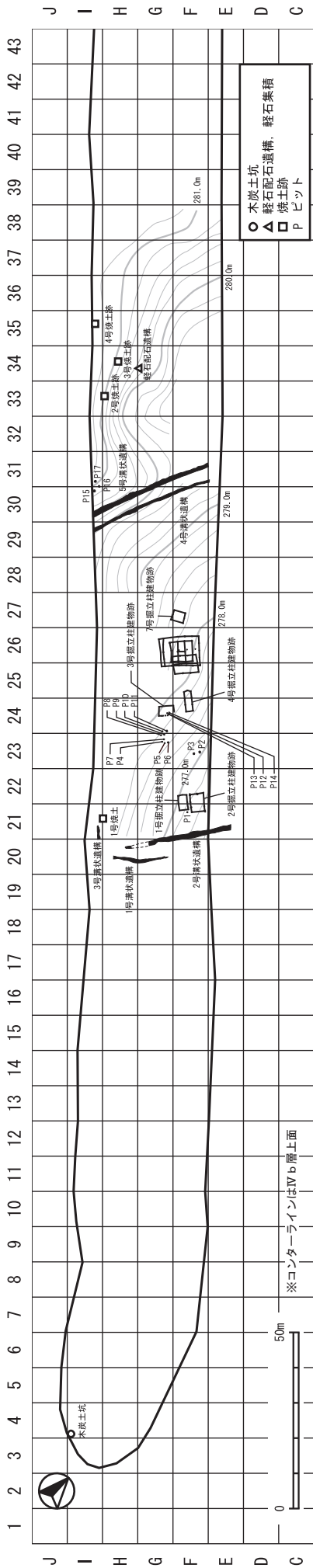
453は壺形土器の肩部である。文様は上下に沈線をつけた狭い蒲鉾形突帯に斜位の刻み目を施している。器面調整は外面が丁寧な横ナデで、内面が斜位のナデである。色調は外面が茶褐色に煤付着の黒色斑点があり、内面は茶褐色である。



第162図 弥生・古墳 土器

第32表 弥生・古墳 土器観察表

挿入番号	図番号	取上番号	分類1	分類2	区	層位	層位2	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考
162	450	12285	弥生		F	24	IV a	刻目突帯, 研磨	研磨	灰黒色	黒色	長・石・角	硬質	口径15.0cm
	451	10677 12287	弥生		F	24	IV a	三角突帯, ヘラナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色, 黒色	長・石・角	硬質	
	452	12308	弥生		G	23	IV a	三角突帯, 丁寧なナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質	
	453	1295	古墳		G	65	IV a	蒲鉾形突帯, ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長・石・角	普通	煤付着



第163図 古代・中世 遺構位置図

## 第10節 古代・中世の調査成果

### 1 調査の概要

Ⅲa層を主に古代から中世該当層，Ⅲb層を主に古代該当層として調査した。その結果，奈良・平安時代に該当する古代の遺構は掘立柱建物跡9棟，焼土跡6基，溝状遺構5条，軽石集積1基，軽石配石1基，ピット30基が検出され，鎌倉時代以降に該当する中世の遺構は木炭土坑1基が検出された（第163図）。

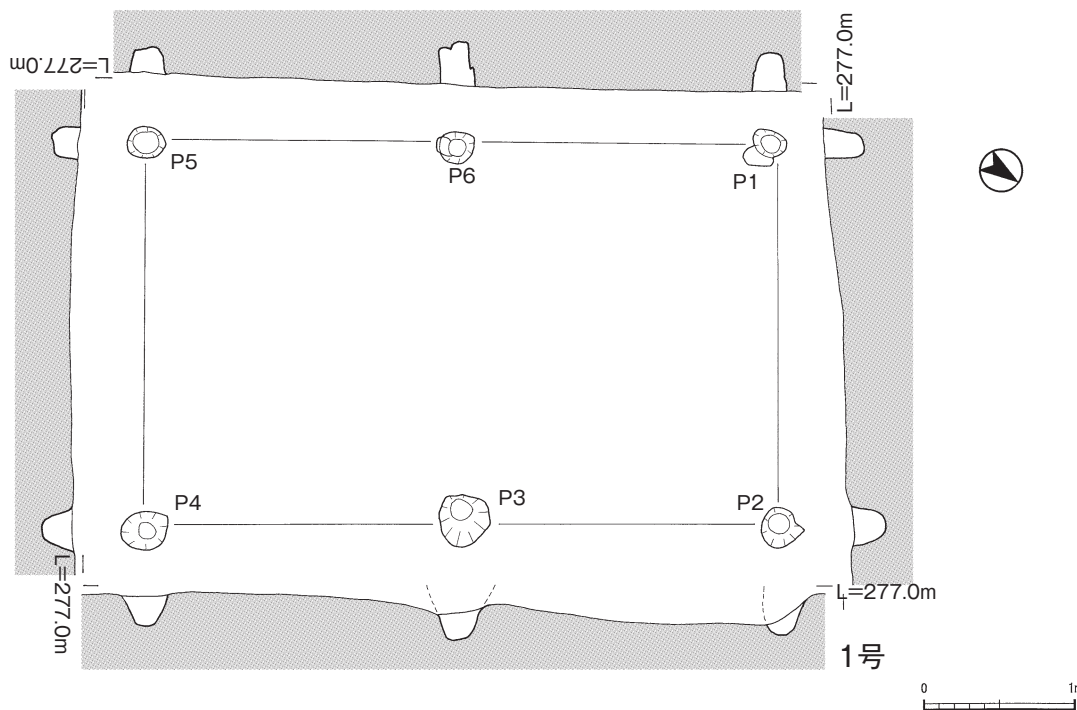
遺物は，Ⅲa，Ⅲb層から甕，坏，埴，焼塩壺，青磁，軽石製品などが出土した。

### 2 遺構

#### (1) 掘立柱建物跡

##### 1号掘立柱建物跡（第164図）

F-21・22区で検出された。1間×2間の建物で，大きさは2.50m×4.23mである。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは，最も浅いものが17cm，最も深いものは28cmである。北側梁間の中央部に小ピットが1基検出されたが，南側梁間の中央部はピットが検出されなかった。



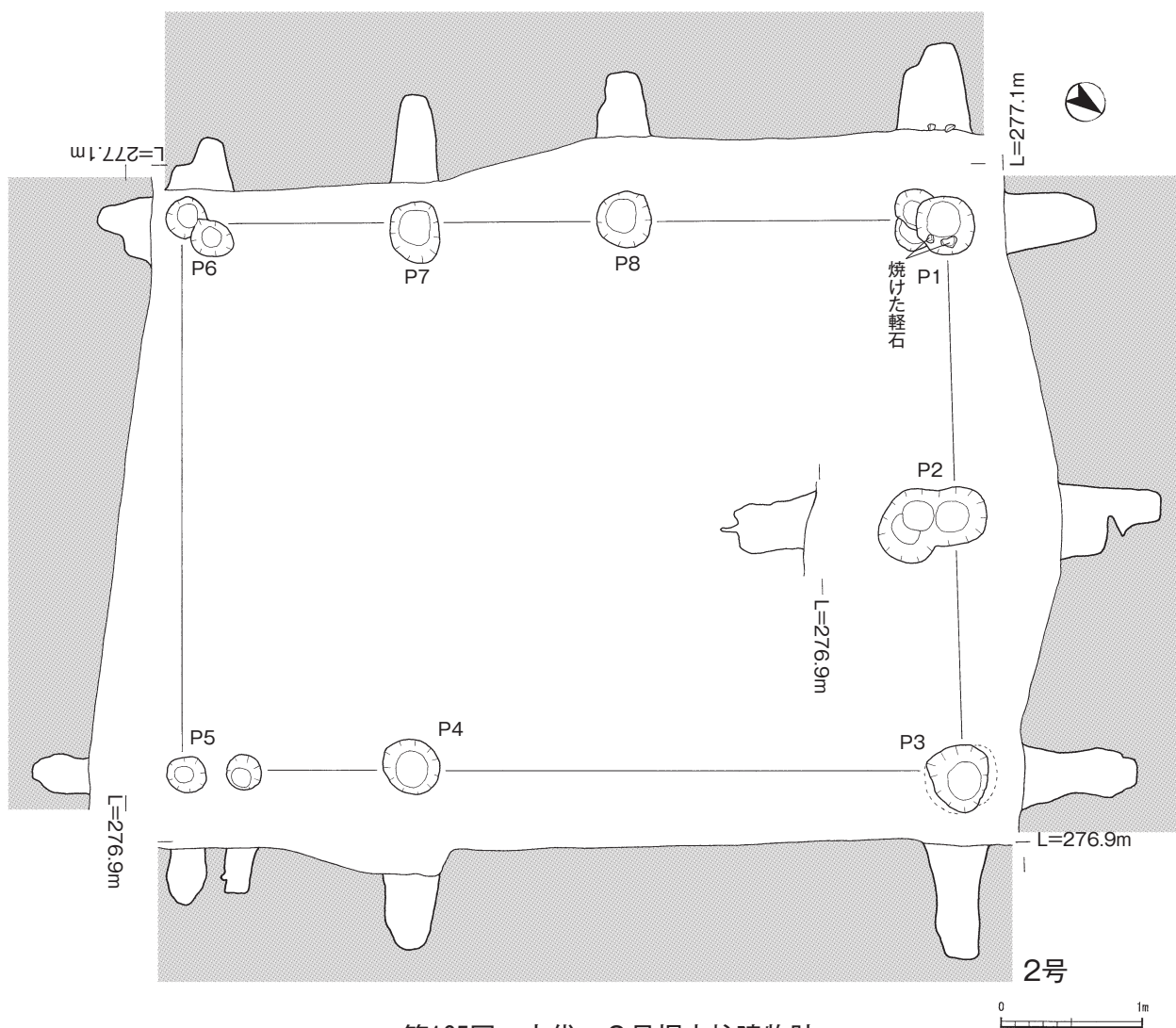
第164図 古代 1号掘立柱建物跡

第33表 古代 1号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH 1	北側上屋1間		東側上屋2間		2.50m		4.23m		F-21・22区
	南側上屋1間		西側上屋2間		2.55m		4.18m		方位 N-W 34°
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ (cm)
	P1~P2	2.50m			P2~P3	2.13m			P1. 23×18×27
	P4~P5	2.55m			P3~P4	2.10m			P2. 29×23×25
					P1~P6	2.10m			P3. 36×33×24
					P6~P5	2.08m			P4. 33×26×23
									P5. 26×16×17
									P6. 24×16×28

## 2号掘立柱建物跡（第165図）

F-21・22区で検出された。2間×3間の建物で、大きさは3.92m×5.32mである。柱穴の深さは、最も浅いものが38cm、最も深いものは81cmである。P1、P2、P5、P6はそれぞれ複数の柱穴が見られることから添え柱か建て替えの可能性がある。また、P1内からは10cmと5cm大の焼けた軽石が出土した。1号掘立柱建物跡と隣接し、大きさを比較すると約1.5倍大きい。



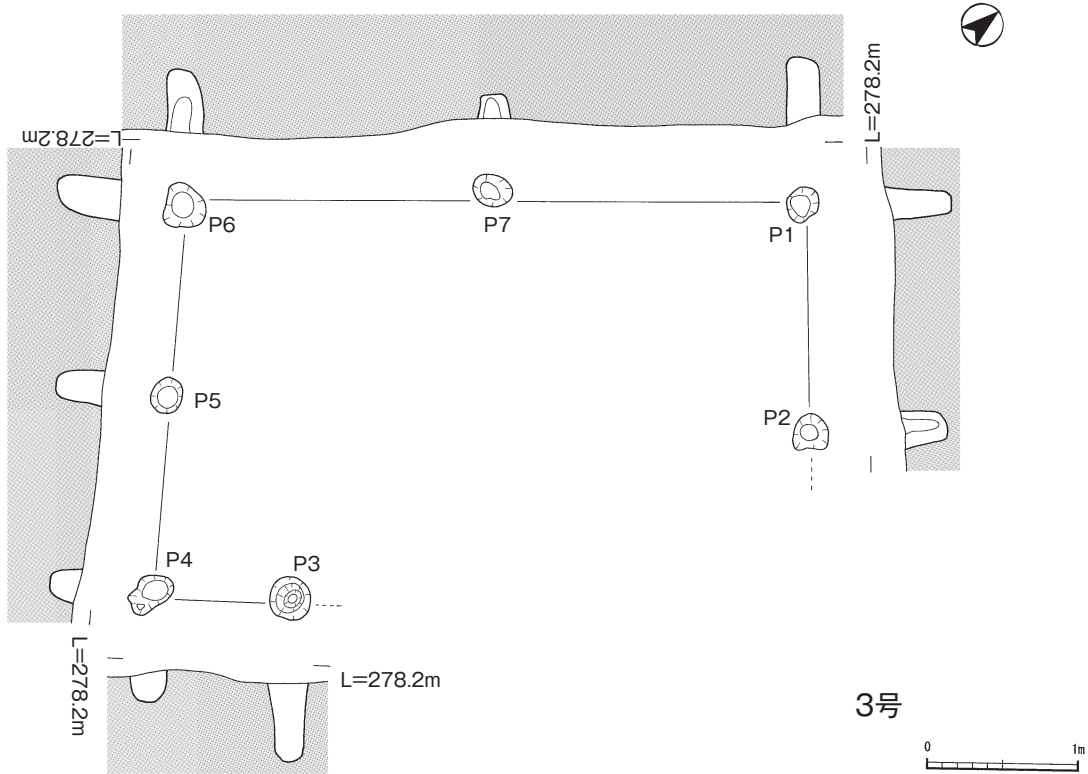
第165図 古代 2号掘立柱建物跡

第34表 古代 2号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH2	北側上屋2間	東側上屋2間	3.92m		5.49m		F-21・22区
	南側上屋1間	西側上屋3間	3.92m		5.32m		方位 N-W 35°
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間	上屋桁行柱間	下屋桁行柱間	柱穴の長径×短径×深さ (cm)		
	P1~P2		P3~P4		P1. 45×40×63		
	P2~P3		P4~P5		P2. 79×40×72		
	P5~P6		P1~P8		P3. 48×39×81		
			P8~P7		P4. 43×37×53		
			P7~P6		P5. 29×25×41		
					P6. 30×27×38		
					P7. 45×34×61		
					P8. 41×48×45		

### 3号掘立柱建物跡（第166図）

F・G-24区で検出された。推定2間×2間の建物で、大きさは2.55m×4.08mである。柱穴の深さは、最も浅いものが17cm、最も深いものは53cmである。



第166図 古代 3号掘立柱建物跡

第35表 古代 3号掘立柱建物跡計測表

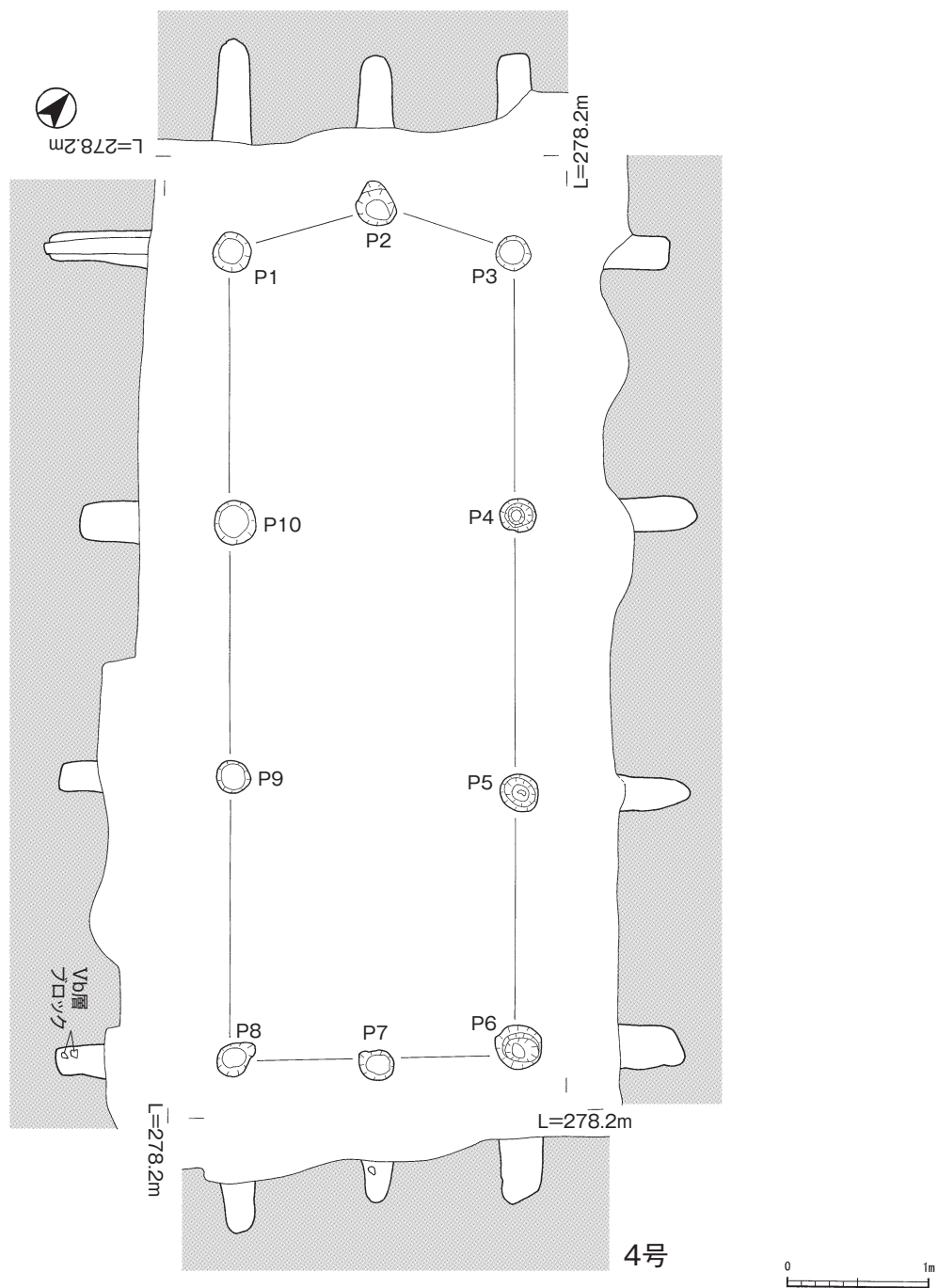
建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH3	北側上屋1間		東側上屋半間		—		—		F・G-24区
	南側上屋2間		西側上屋2間		2.55m		4.08m		方位 N-E 40°
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ(cm)
	P1~P2	1.51m			P3~P4	0.91m			P1. 25×19×45
	P4~P5	1.28m			P1~P7	2.05m			P2. 26×22×31
	P5~P6	1.27m			P7~P6	2.03m			P3. 30×27×53
									P4. 32×18×21
									P5. 24×21×31
									P6. 32×28×43
									P7. 27×21×17

第36表 古代 4号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH4	北側上屋2間		東側上屋3間		1.96m		5.63m		F-24・25区
	南側上屋2間		西側上屋3間		2.00m		5.69m		方位 N-W 41°
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ(cm)
	P1~P2	1.07m			P 3~P 4	1.86m			P1. 29×27×75
	P2~P3	1.00m			P 4~P 5	1.95m			P2. 25×26×51
	P6~P7	0.98m			P 5~P 6	1.82m			P3. 25×24×46
	P7~P8	1.02m			P 1~P 6	1.90m			P4. 26×24×54
					P10~P 9	1.80m			P5. 29×28×51
					P 9~P 8	1.99m			P6. 34×31×46
									P7. 27×21×30
									P8. 31×21×34
									P9. 24×23×30
									P10. 32×29×42

#### 4号掘立柱建物跡（第167図）

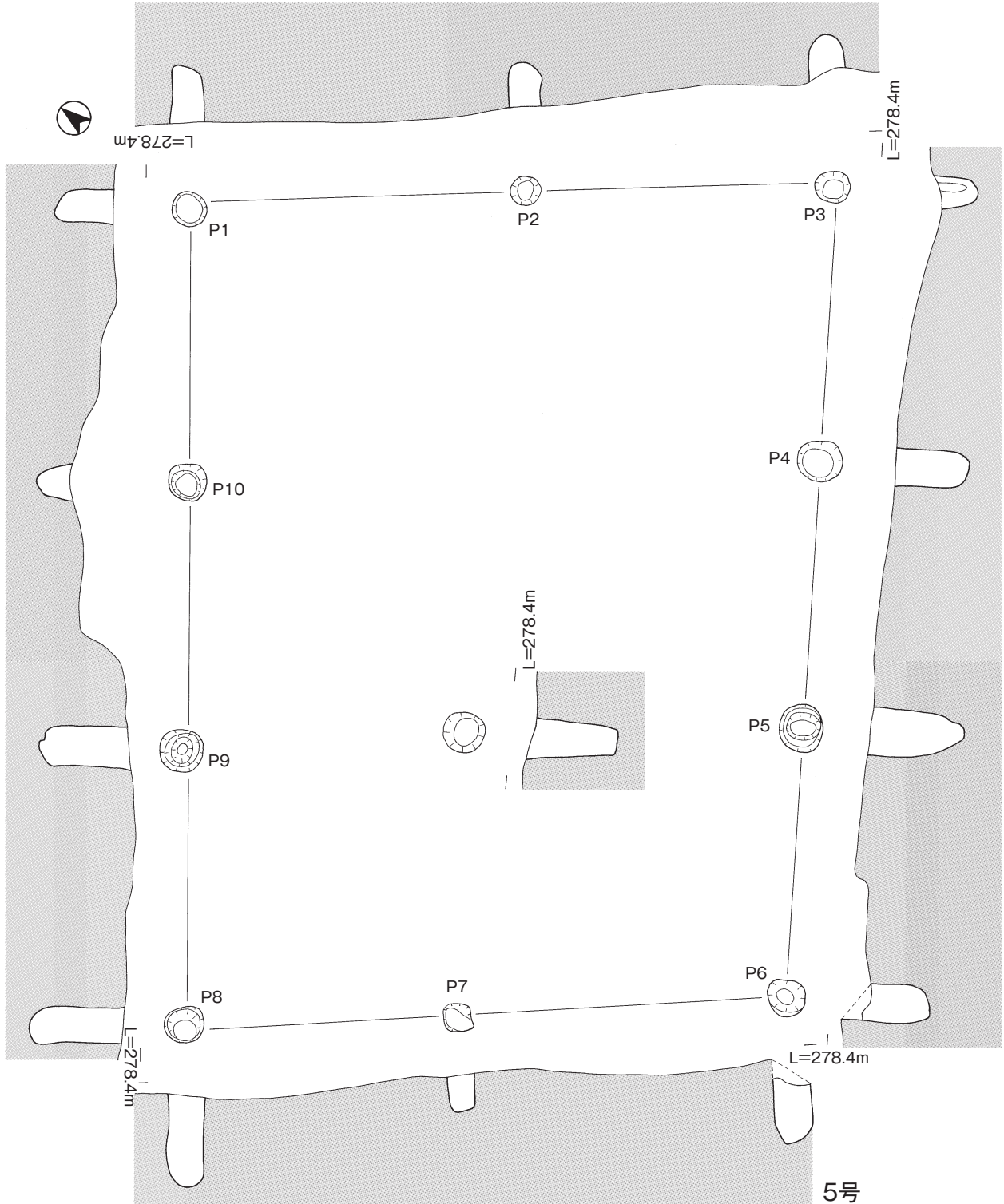
F-24・25区で検出された。2間×3間の建物で、大きさは2.00m×5.69mと細長い建物である。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが30cm、最も深いものは75cmである。



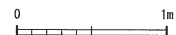
第167図 古代 4号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡（第168図）

F・G-25・26区で検出された。2間×3間の建物で、大きさは5.35m×6.85mである。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが20cm、最も深いものは79cmである。南側から2本目の列中央にも1本の中央柱が添えられている。



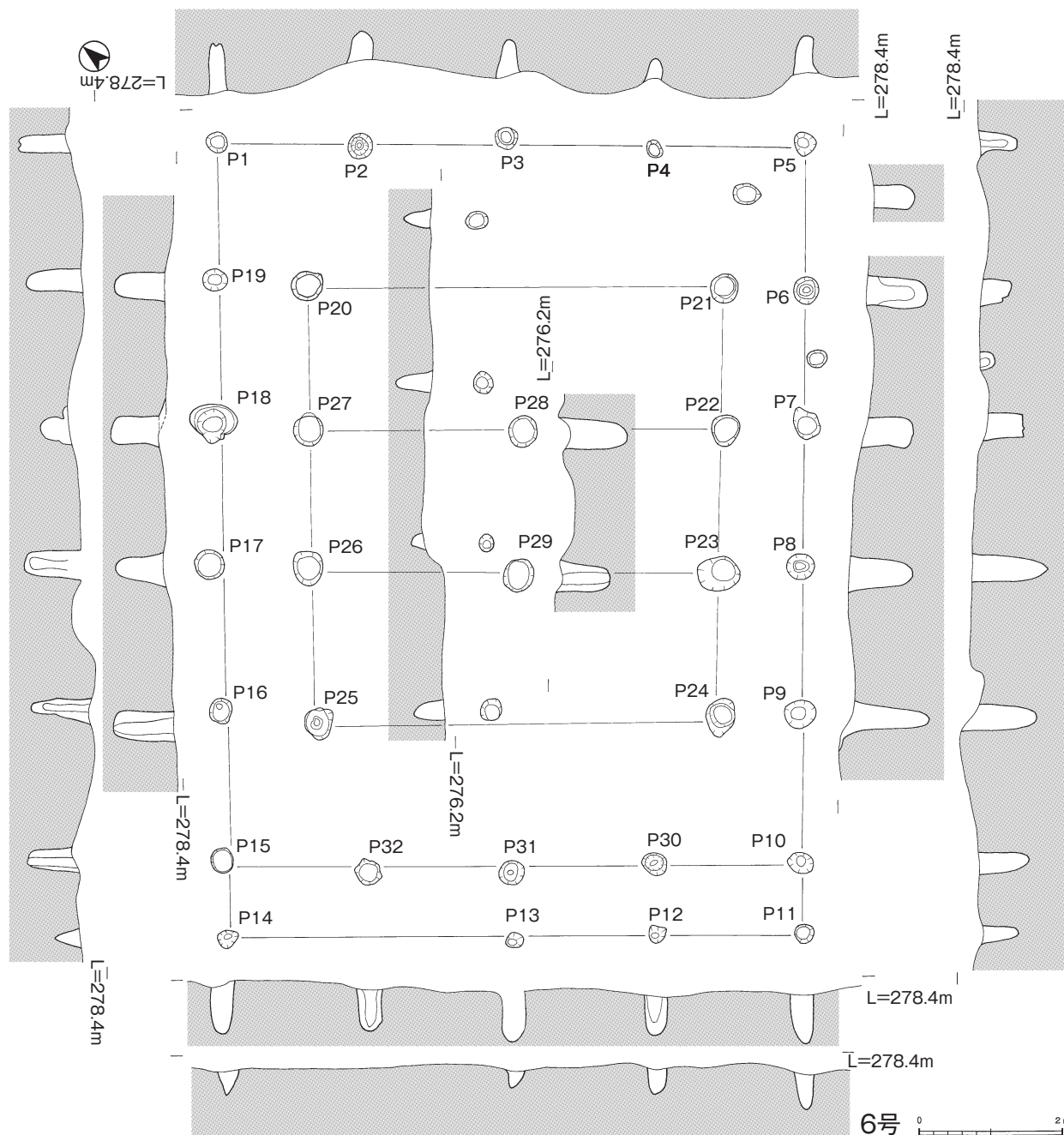
第168図 古代 5号掘立柱建物跡





### 6号掘立柱建物跡（第169図）

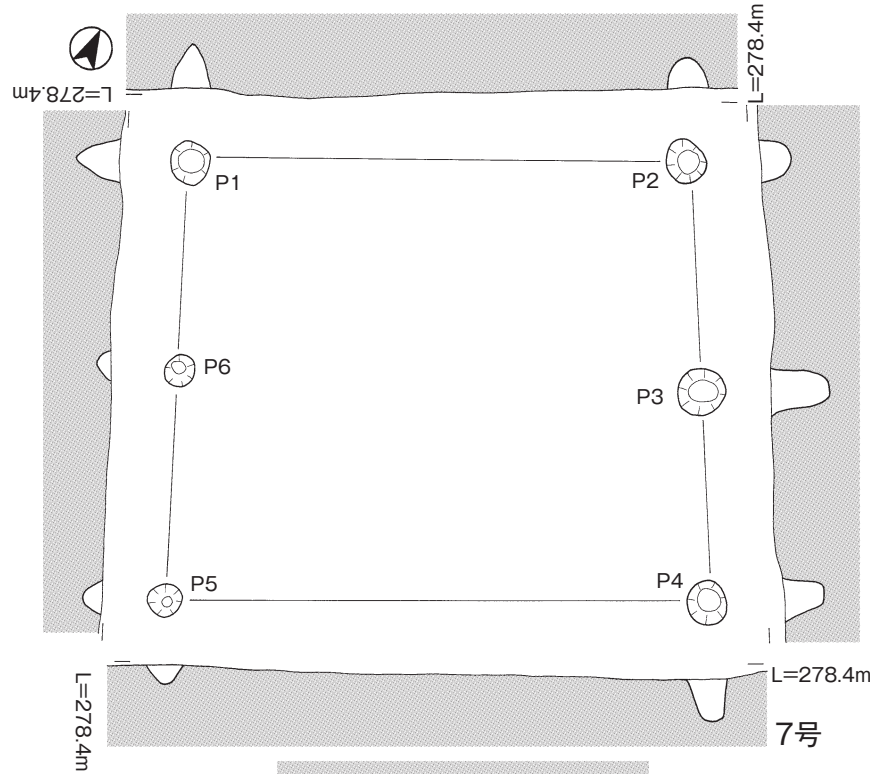
F・G-25・26区で検出された。上屋が2間×3間、下屋は4間×5間半の建物である。上屋の大きさは5.70m×6.12m、下屋の大きさは7.66m×11.10mで、梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが25cm、最も深いものは123cmである。



第169図 古代 6号掘立柱建物跡

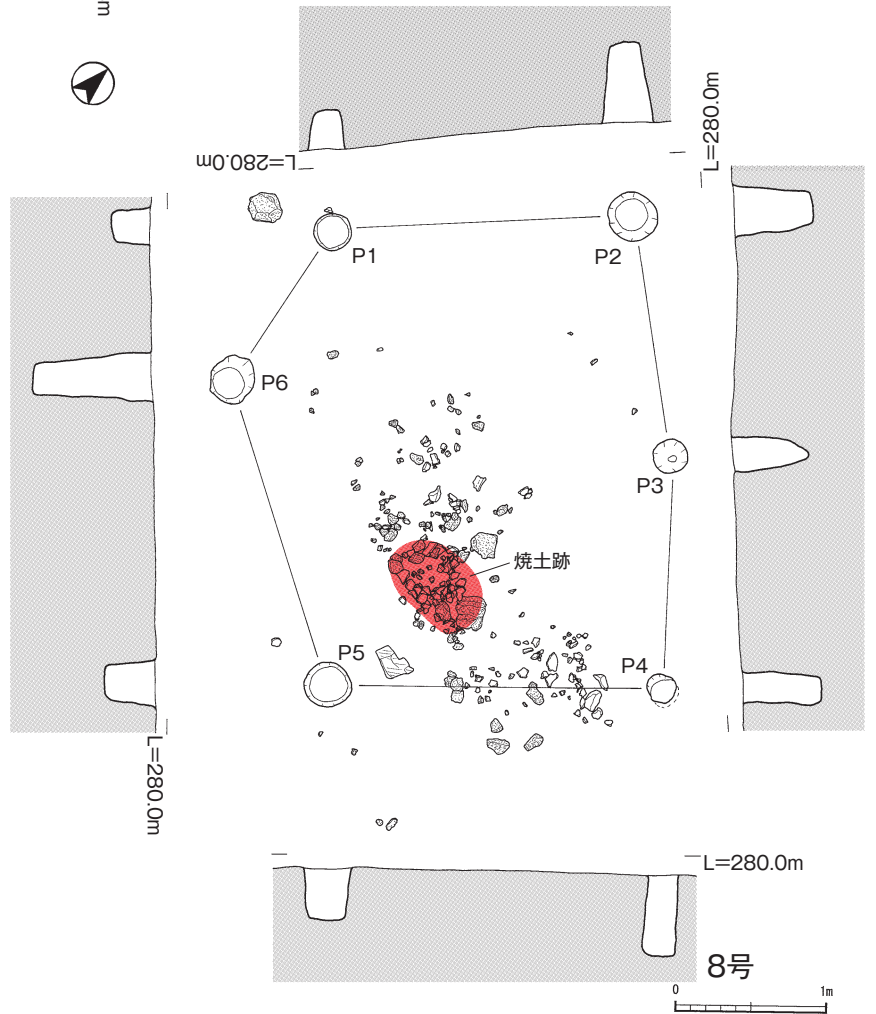
7号掘立柱建物跡（第170図）

F・G-27区で検出された。1間×2間の建物で、大きさは3.29m×2.92mである。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが10cm、最も深いものは81cmである。



8号掘立柱建物跡（第170図）

F-62・63区で検出された。1間×2間の建物で、柱穴の深さは、最も浅いものが26cm、最も深いものは81cmである。この掘立柱建物跡内には焼土跡がみられ、土器片と割れた軽石が散乱（軽石集積 第171図）していた。これらは共伴関係にあり、土間として利用された可能性が高い。



第170図 古代 7号, 8号掘立柱建物跡

第37表 古代 5号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH5	東側上屋2間		北側上屋3間		5.35m		6.85m		F・G-25・26区 方位 N-E 50°
	西側上屋2間		南側上屋3間		4.98m		6.73m		
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ(cm)
P1~P2	2.80m			P 1~P 10	2.30m			P1. 31 × 29 × 49	
P2~P3	2.55m			P 10~P 9	2.20m			P2. 26 × 24 × 37	
P6~P7	2.72m			P 9~P 8	2.35m			P3. 30 × 35 × 37	
P7~P8	2.26m			P 3~P 4	2.28m			P4. 39 × 34 × 60	
				P 4~P 5	2.20m			P5. 40 × 36 × 78	
				P 5~P 6	2.25m			P6. 34 × 30 × 72	
								P7. 34 × 23 × 32	
								P8. 34 × 19 × 79	
								P9. 38 × 36 × 76	
								P10. 34 × 32 × 20	

第38表 古代 6号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH6	東側上屋2間	東側下屋4間	北側上屋3間	北側下屋5間半	5.70m	7.66m	6.12m	11.10m	F・G-25・26区 方位 N-E 50°
	西側上屋2間	西側下屋4間	南側上屋3間	南側下屋5間半	5.64m	7.98m	6.00m	11.04m	
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ(cm)
P20~P21	5.70m	P 1~P 2	1.48m	P 20~P 27	2.02m	P 1~P19	1.92m	P1. 28 × 26 × 70	P17. 47 × 36 × 54
P27~P28	2.98m	P 2~P 3	2.04m	P 27~P 26	1.94m	P19~P18	2.00m	P2. 37 × 34 × 40	P18. 64 × 50 × 40
P28~P22	2.80m	P 3~P 4	2.08m	P 26~P 25	2.16m	P18~P17	1.96m	P3. 32 × 29 × 53	P19. 35 × 31 × 81
P26~P29	2.94m	P 4~P 5	2.06m	P 21~P 22	2.00m	P17~P16	2.06m	P4. 26 × 19 × 29	P20. 46 × 40 × 71
P29~P23	2.86m	P15~P32	2.04m	P 22~P 23	2.00m	P16~P15	2.10m	P5. 33 × 32 × 52	P21. 39 × 35 × 80
P25~P24	5.64m	P32~P31	1.96m	P 23~P 24	2.00m	P15~P14	1.06m	P6. 39 × 32 × 42	P22. 41 × 36 × 72
		P31~P30	1.98m			P 5~P 6	2.04m	P7. 47 × 34 × 54	P23. 59 × 46 × 88
		P30~P10	2.04m			P 6~P 7	1.90m	P8. 38 × 36 × 104	P24. 51 × 30 × 123
		P14~P13	3.94m			P 7~P 8	1.98m	P9. 43 × 36 × 103	P25. 43 × 39 × 86
		P13~P12	1.98m			P 8~P 9	2.04m	P10. 38 × 30 × 69	P26. 47 × 39 × 69
		P12~P11	2.06m			P 9~P10	2.08m	P11. 26 × 25 × 49	P27. 42 × 39 × 74
						P10~P11	1.00m	P12. 26 × 23 × 33	P28. 42 × 40 × 92
								P13. 24 × 22 × 25	P29. 46 × 42 × 73
								P14. 30 × 26 × 34	P30. 34 × 32 × 55
								P15. 30 × 28 × 76	P31. 35 × 33 × 70
								P16. 34 × 31 × 87	P32. 38 × 33 × 57

第39表 古代 7号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH7	北側上屋1間		東側桁行2間		3.29m		2.90m		F・G-27区 方位 N-W 25°
	南側上屋1間		西側桁行2間		3.57m		2.92m		
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ(cm)
P1~P2	3.29m			P 2~P 3	1.51m			P1. 30 × 26 × 30	
P4~P5	3.57m			P 3~P 4	1.39m			P2. 30 × 26 × 20	
				P 1~P 6	1.36m			P3. 33 × 30 × 38	
				P 6~P 5	1.56m			P4. 29 × 26 × 27	
								P5. 23 × 21 × 13	
								P6. 22 × 19 × 10	

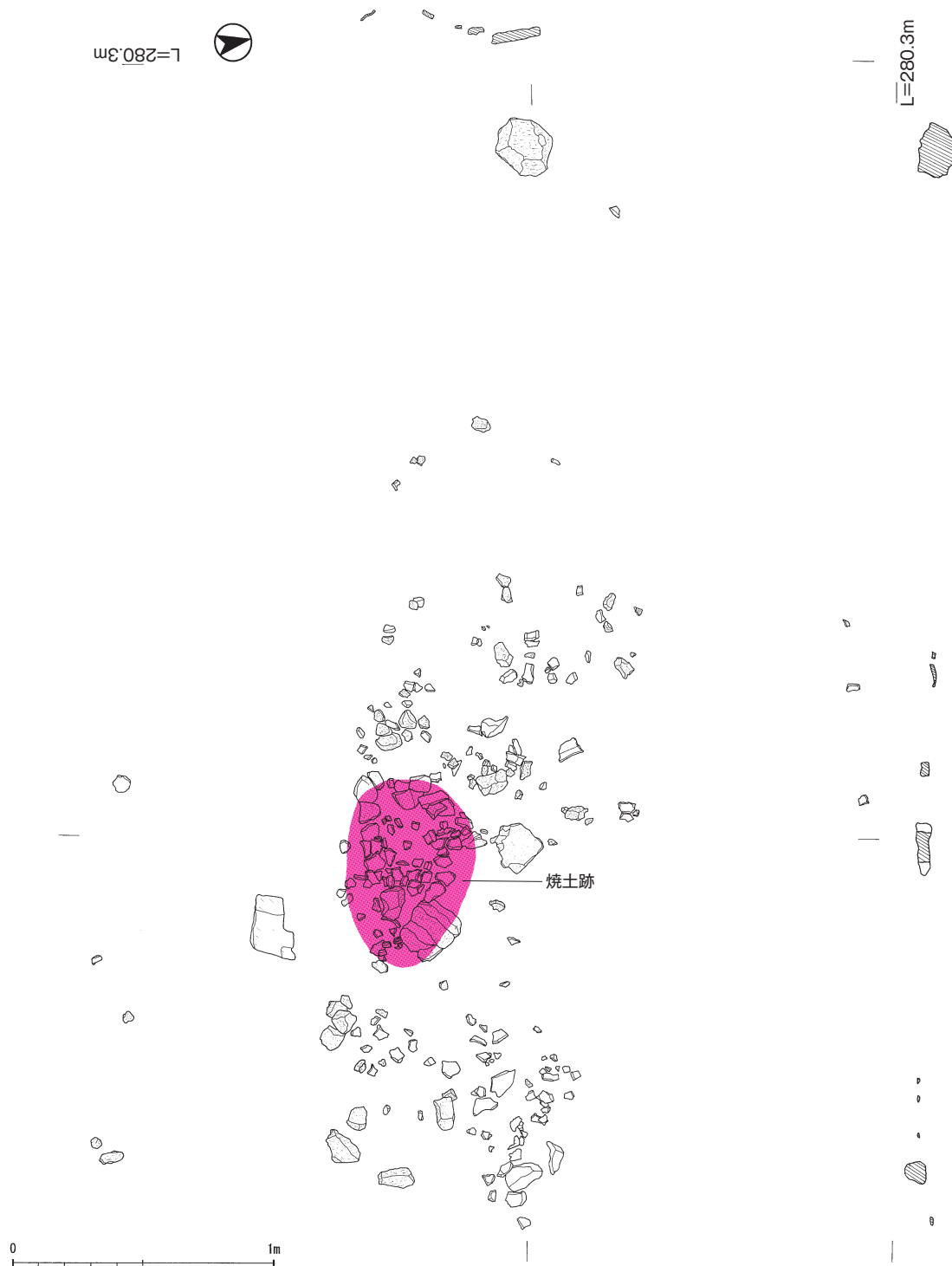
第40表 古代 8号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH8	東側上屋1間		北側上屋2間		2.20m		3.15m		F-62・63区 方位 N-W 50°
	西側上屋1間		南側上屋2間		1.98m		3.00m		
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ(cm)
P1~P6	2.20m			P 2~P 3	1.58m			P1. 25 × 25 × 26	
P3~P4	1.98m			P 3~P 4	1.54m			P2. 34 × 32 × 54	
				P 1~P 6	1.20m			P3. 23 × 22 × 50	
				P 6~P 5	2.10m			P4. 20 × 18 × 54	
								P5. 32 × 30 × 35	
								P6. 33 × 28 × 81	

### 軽石集積（第171図）

東西約4m、南北約2mの範囲に及ぶ。中心部には、厚さ3～4cmの板状の軽石が多く出土し、その周辺に土師甕の破片が集中している。土師甕口縁部の破片は比較的大きいが、胴部や底部の破片はそれに比べると小さい。

周辺の軽石の大きさは、こぶし大あるいは長さ10～15cmほどの直方体に近いものである。また、中心部より2.5m西側では、径が約30cmの大きな軽石が出土した。いずれの軽石も被熱のためか、非常にもろく赤色化したものが多い。

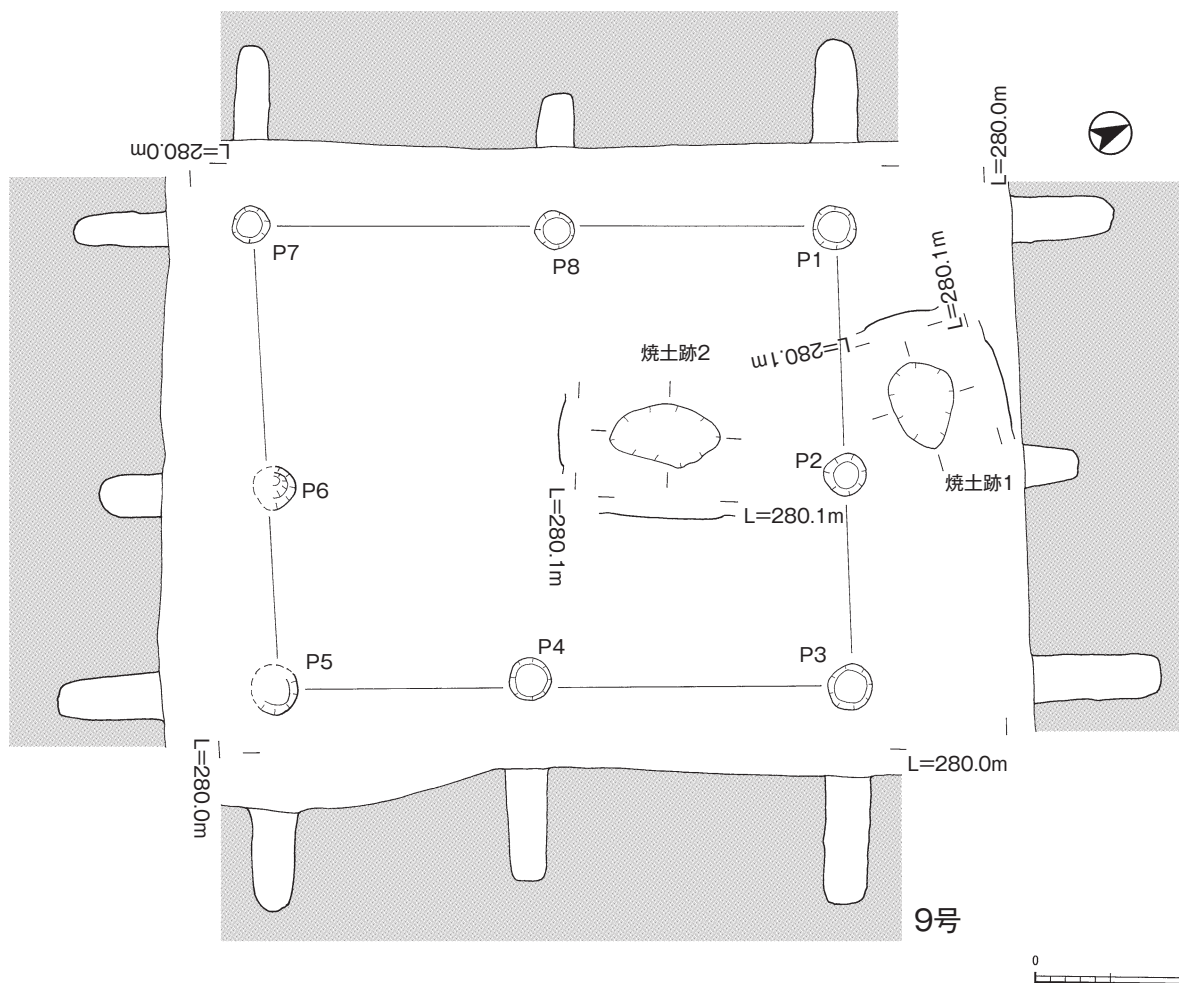


第171図 古代 軽石集積

### 9号掘立柱建物跡（第172図）

F-63区で検出された。2間×2間の建物で、大きさは3.05m×3.82mである。梁間と桁行の柱穴が整然と並ぶ。柱穴の深さは、最も浅いものが36cm、最も深いものは86cmである。P5とP6は、県道に隣接しており完掘できなかった。

本建物跡の内外に付随すると思われる焼土跡が2基検出された。焼土跡1の長軸は58cmでほぼ東西方向をとり、短軸は41cmでほぼ南北方向をとる。深さは3cmで浅い。焼土跡2の長軸は70cmでほぼ北東-南西方向をとり、短軸は40cmでほぼ東南-西北方向をとる。深さは2cmで浅い。



第172図 古代 9号掘立柱建物跡

第41表 古代 9号掘立柱建物跡計測表

建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH9	北側上屋2間		東側上屋2間		3.05m		3.82m		F-63区 方位 N-E 23°
	南側上屋2間		西側上屋2間		3.09m		3.87m		
	上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ (cm)
	P1~P2	1.64m			P3~P4	2.11m			P1. 31×28×68
	P2~P3	1.41m			P4~P5	1.71m			P2. 29×26×37
	P5~P6	1.38m			P1~P8	1.84m			P3. 31×29×86
	P6~P7	1.71m			P8~P7	2.03m			P4. 29×28×78
									P5. 34×31×71
									P6. 30×27×43
									P7. 26×24×62
									P8. 27×24×36

(2) 焼土跡

1号焼土跡 (第173図)

H・I-21区で検出された。遺構内では土器片や礫、破碎した軽石が散在している。散在している軽石の表面は茶褐色を呈していることから被熱したと思われる。

2号焼土跡 (第174図)

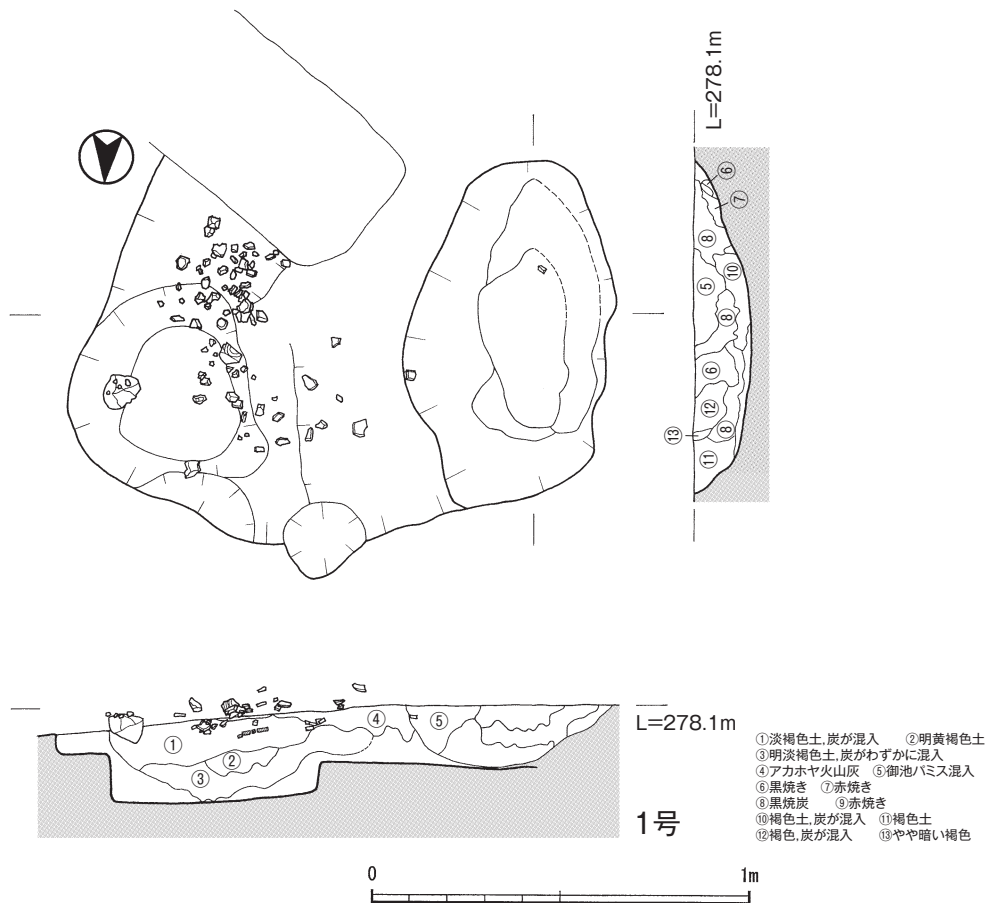
H・I-33区のIVa層で検出された。現代の攪乱により、本遺構は南北の間を攪乱溝で切られており全体の形状は残っていない。同一遺構の可能性が考えられる。また、断面の掘り込みのように見える部分は、IVa層の被熱範囲を示している。

3号焼土跡 (第175図)

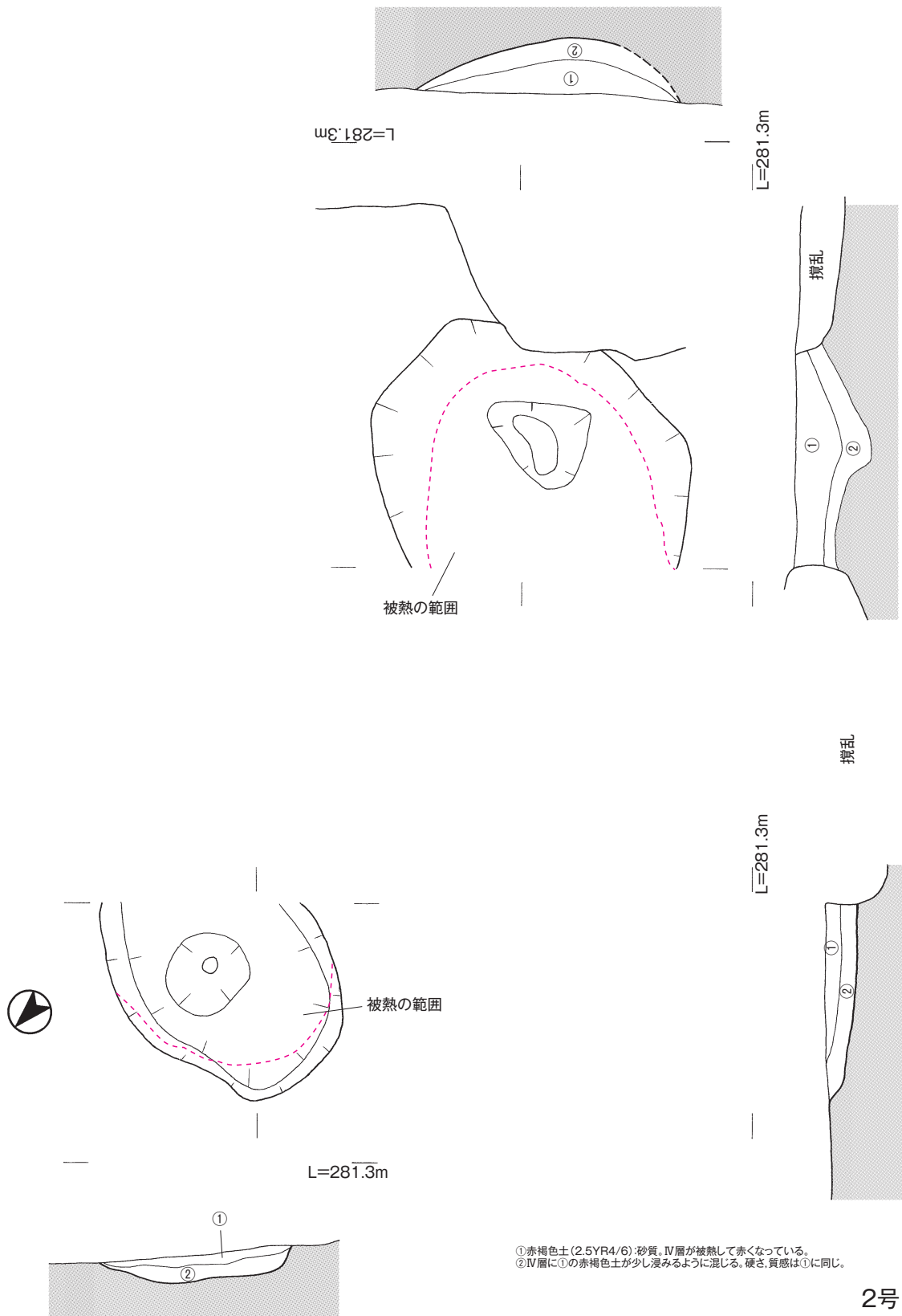
H-34区のIVa層で検出された。図面中の赤線内は赤褐色を呈しており、被熱の中心と考えられる。その周りは暗褐色を呈し、IVa層がわずかに赤褐色化した層で熱の伝わった範囲を示す。

4号焼土跡 (第175図)

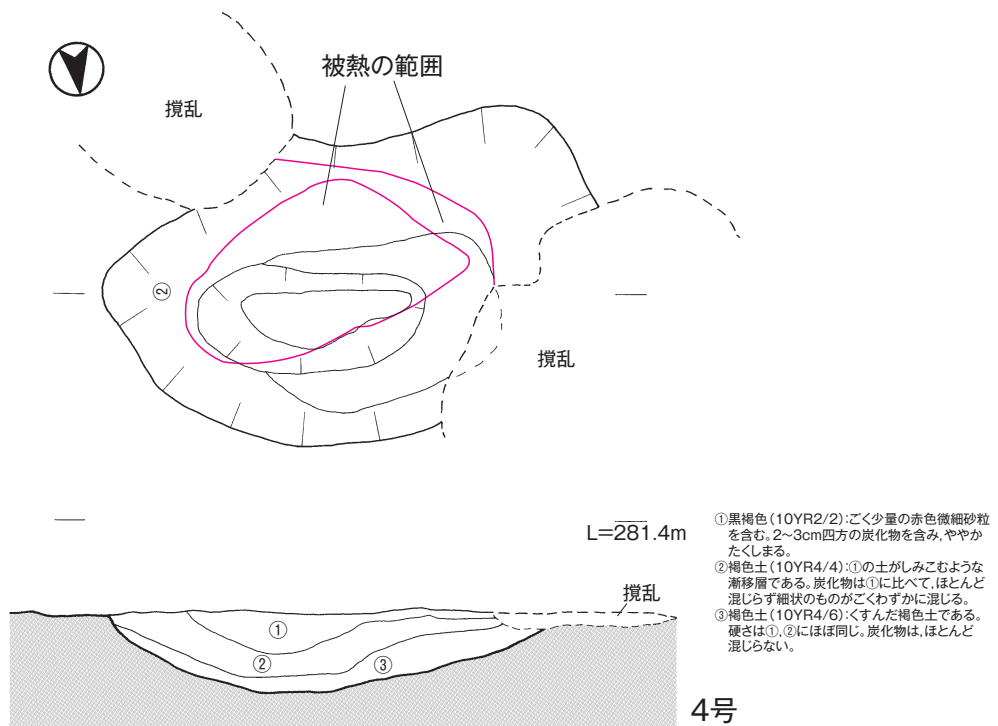
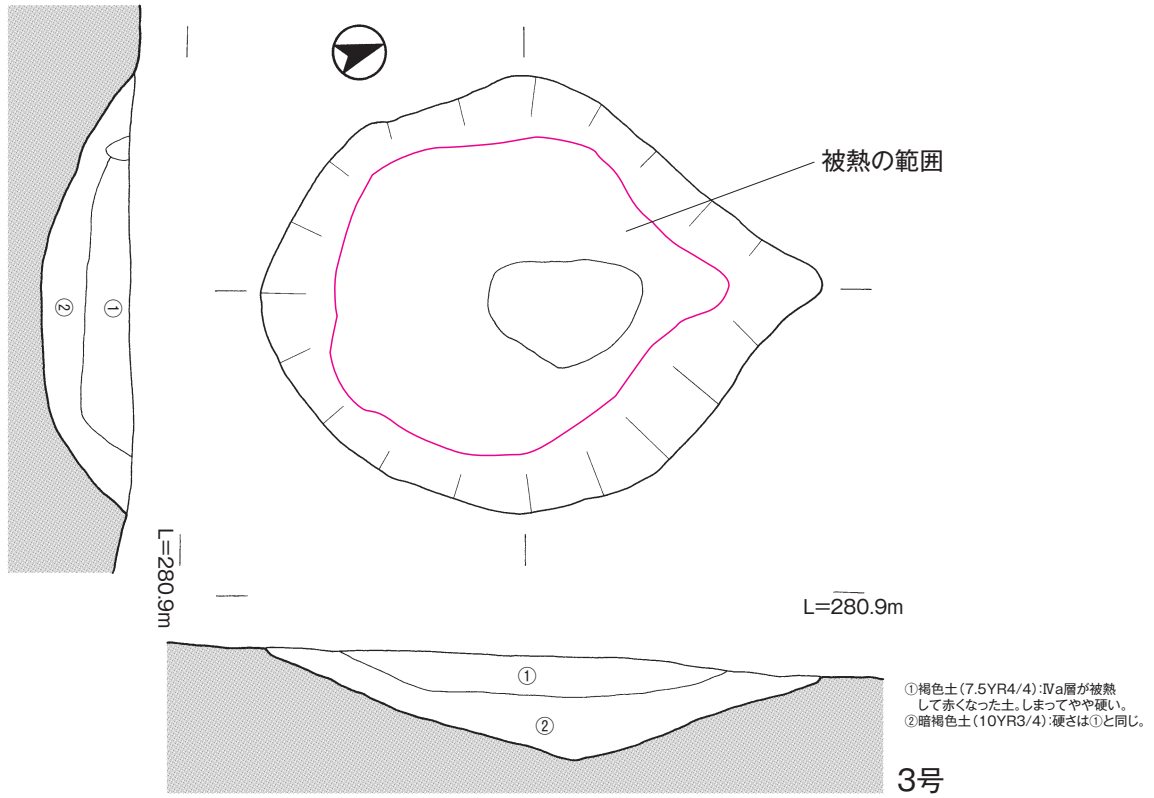
I-35区のIVb層で検出された。遺構内から6点の土器片が出土した。遺構が一部攪乱で切られている。



第173図 古代 1号焼土跡



第174図 古代 2号焼土跡



0 1m

第175図 古代 3号, 4号焼土跡

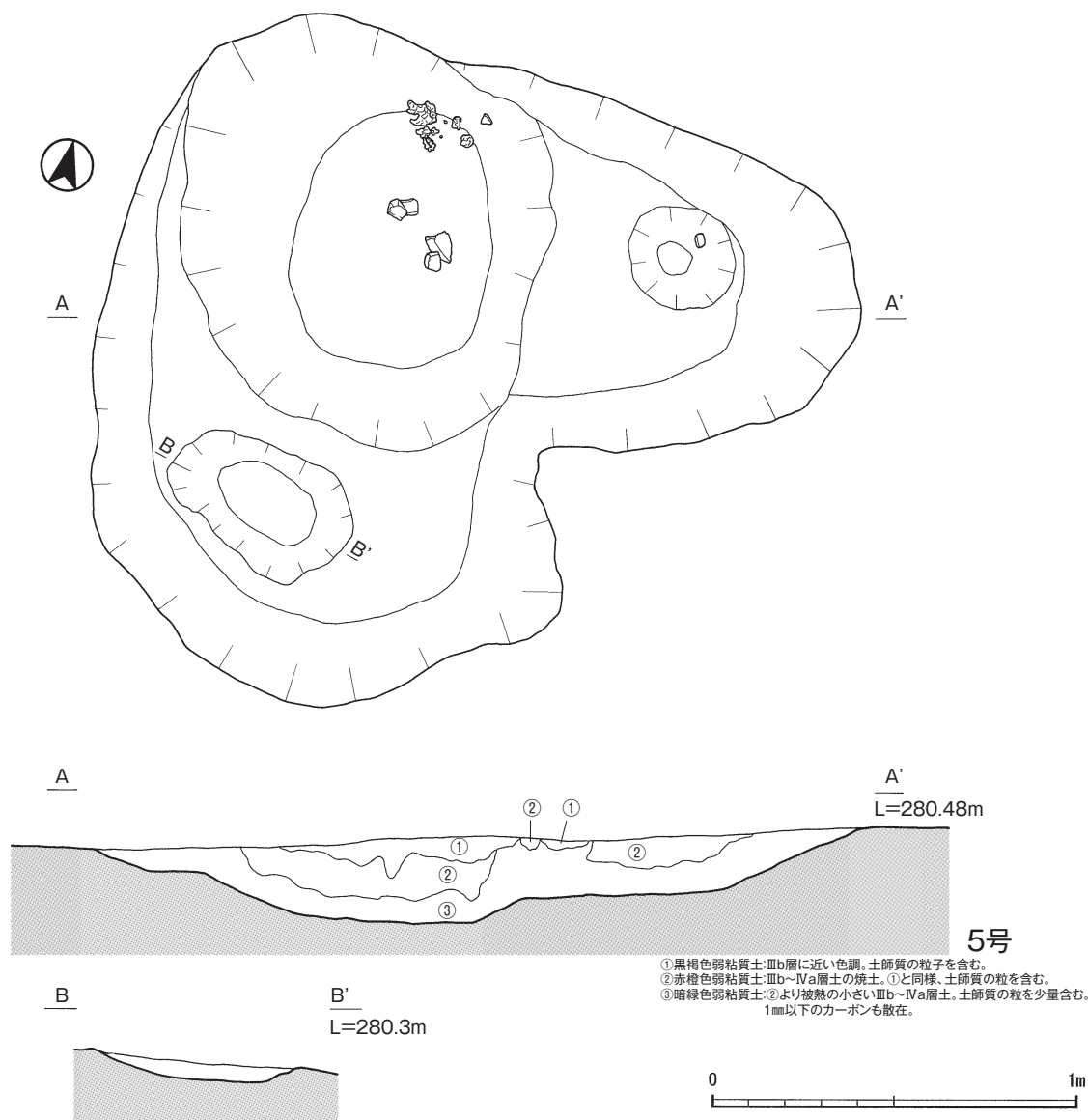


### 5号焼土跡（第176図）

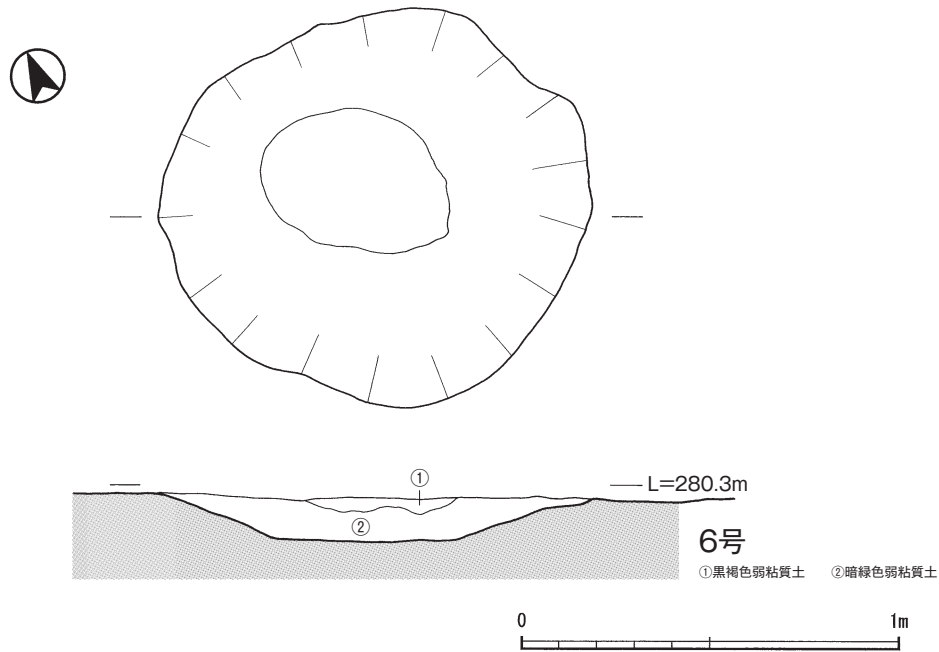
E-63区のⅢb層で検出した。東西方向に2.1m、南北方向に1.9mの範囲にわたる。遺構内炭化物の放射性炭素年代測定の結果は $3,490 \pm 30$  (yrBP) で、縄文時代後期後葉に相当する時期であるが、遺物は軽石や土師器片などが出土している。

### 6号焼土跡（第177図）

E-63・64区のⅢb層で検出した。形状はやや円形で径が1.1mある。



第176図 古代 5号焼土跡



第177図 古代 6号焼土跡

### (3) 溝状遺構

いずれも途中で切れているため、つながりは確認できない。そのためここでは個々の溝状遺構として扱う。

なお、溝状遺構として扱っているため、人為的に掘り込んでいるもの以外についてもここではあえて掘り込みという言葉を用いた。

#### 1号溝状遺構（第178図）

H・G-20区で検出された。攪乱を受けているため残存状況が良好ではない。検出状況の最大幅約1.1m、深さ約20cm程度の掘り込みがみられるもので、北東-南西方向に約7.5mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。

#### 2号溝状遺構（第178図）

E~H-20・21区で検出された。最大幅約1.8m、深さ約70cm程度の掘り込みがみられるもので、北東-南西方向に約31mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。本遺構のE・F-21区内では、土師器片、木炭片、焼けた軽石が出土した。

#### 3号溝状遺構（第178図）

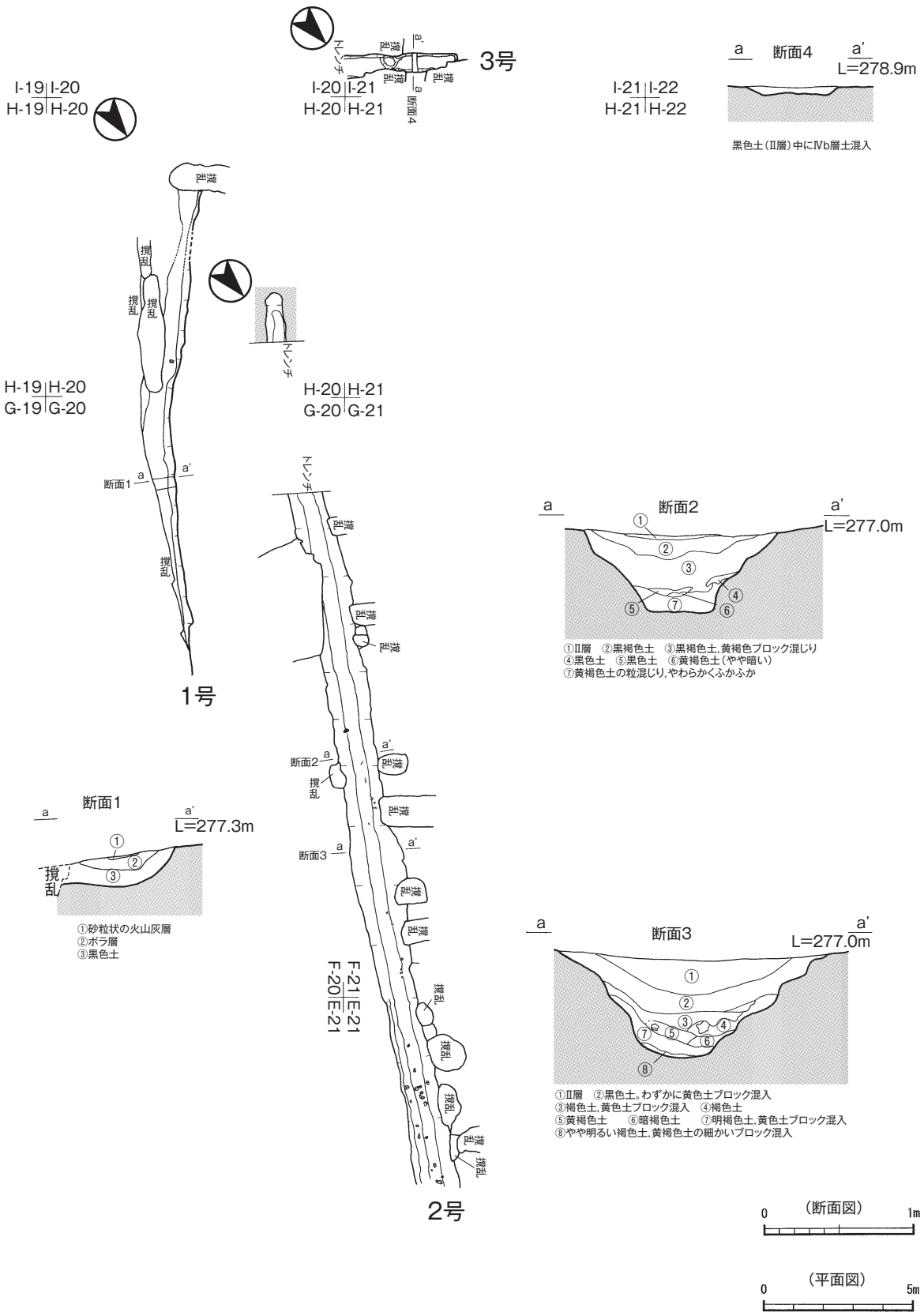
I-21区で検出された。最大幅約75cm、深さ約5cm程度の掘り込みがみられるもので、東南-西北方向に約3.7mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。

#### 4号溝状遺構（第179図）

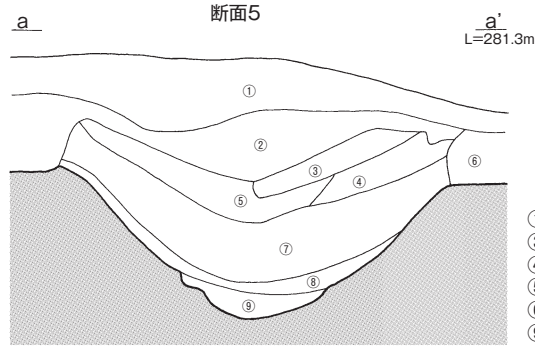
E~I-29~31区で検出された。最大幅約1.2m、深さ約20cm程度の掘り込みがみられるもので、北東-南西方向に約37mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。

#### 5号溝状遺構（第179図）

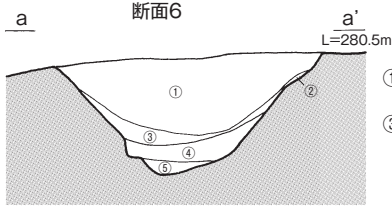
F~I-30・31区で検出された。最大幅約1.9m、深さ約60cm程度の掘り込みがみられるもので、北東-南西方向に約37mの長さが残存する。硬化面は確認できなかった。



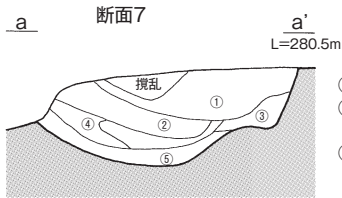
第178図 古代 1号～3号溝状遺構・断面図



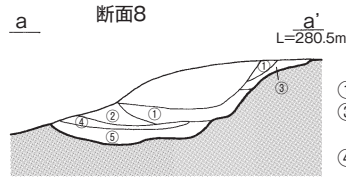
- ①表土1 ②表土2
- ③黒色土に白色バミス混入。
- ④細いボラ、白色
- ⑤細いボラ+黒土
- ⑥Ⅲ層 ⑦ボラ ⑧Ⅲ層
- ⑨黒褐色土



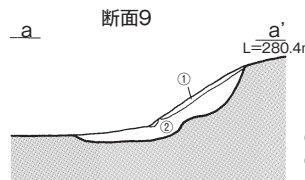
- ①P3 ②Ⅲ層ベースに褐色土(10YR4/6)のブロック(2~3cm下)が少し混入
- ③Ⅲ層 ④黒褐色土(10YR2/3) ⑤②と同じ



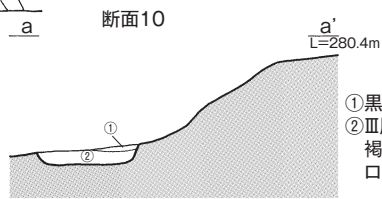
- ①P3 ②泥土のついたP3
- ③Ⅲ層ベースに褐色土(10YR4/6)ブロック(2~3cm下)が少し混入
- ④Ⅲ層ベースに粉状の褐色土(10YR4/6)が少し混入 ⑤黒褐色土(10YR2/3)



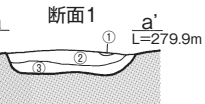
- ①P3 ②泥土の付いたP3
- ③Ⅲ層ベースに粉状の褐色土(10YR4/6)が少し混入
- ④Ⅳ層 ⑤黒褐色土(10YR2/3)



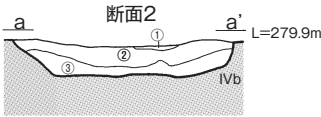
- ①P3 ②黒褐色土(10YR2/3)



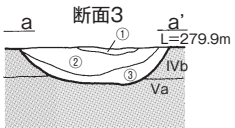
- ①黒褐色土(10YR2/3)
- ②Ⅲ層ベースに粉状の褐色土(10YR4/6)ブロックが少し混入



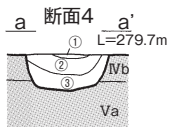
- ①黒色土(10YR1.7/1)。Ⅲa層に近く、炭化物を少量含む。粘りがややある
- ②黒褐色土(10YR2/2)。Ⅲb層に近く、径1mm程度の御池バミス少量含む
- ③暗褐色土(10YR3/4)。径1mm程度の御池バミス多量を含む。粘りはあまり無く、しまりややあり。色は黒っぽい



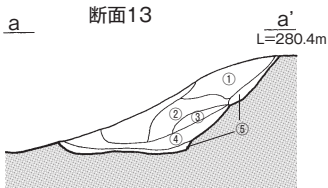
- ①断面1①と同じ
- ②断面1②と同じ
- ③断面1③と同じ



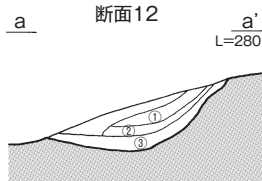
- ①断面1①と同じ
- ②断面1②と同じ
- ③断面1③と同じ



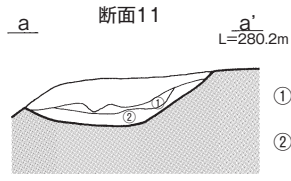
- ①断面1①と同じ
- ②断面1②と同じ
- ③断面1③と同じ



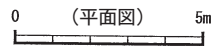
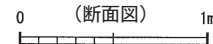
- ①P3 ②泥土の付いたP3 ③Ⅲ層
- ④黒褐色土(10YR2/3)
- ⑤Ⅲ層と褐色(10YR4/6)ブロックが多く混入



- ①泥土の付いたP3
- ②Ⅲ層ベースに粉状の褐色土(10YR4/6)が少し混入
- ③黒褐色土(10YR2/3)



- ①Ⅲ層ベースに粉状の褐色土が少し混入
- ②黒褐色土(10YR2/3)

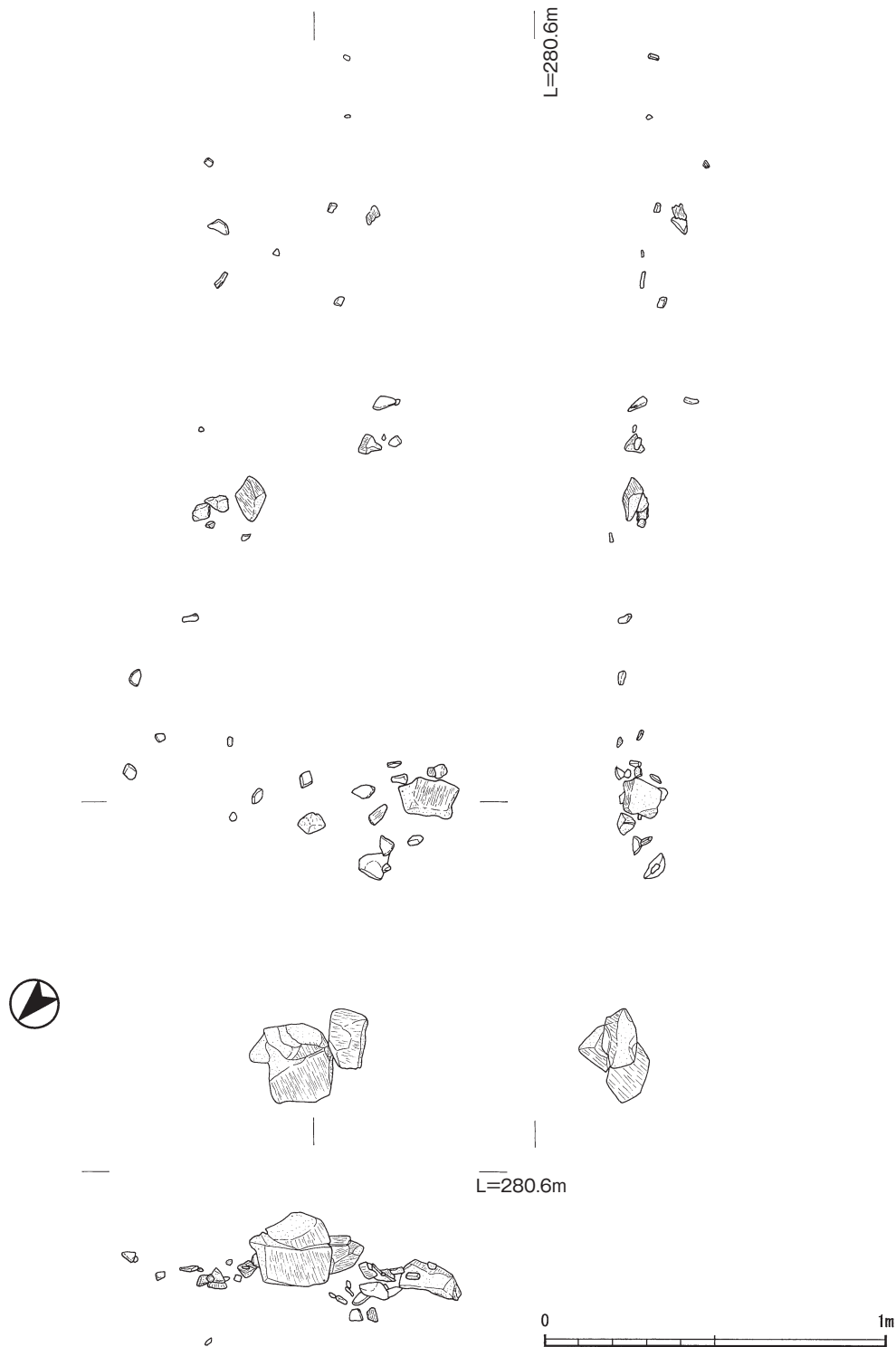


第179図 古代 4号, 5号溝状遺構・断面図

(4) 軽石配石 (第180図)

G-34区で検出された。中心部から北方向へ約1.2m離れたところに20~30cm四方の赤色化した大きな軽石がある。中心部で軽石の破片が散在しており、その周辺からは土師器や土師甕などがほぼ同レベルで出土した。

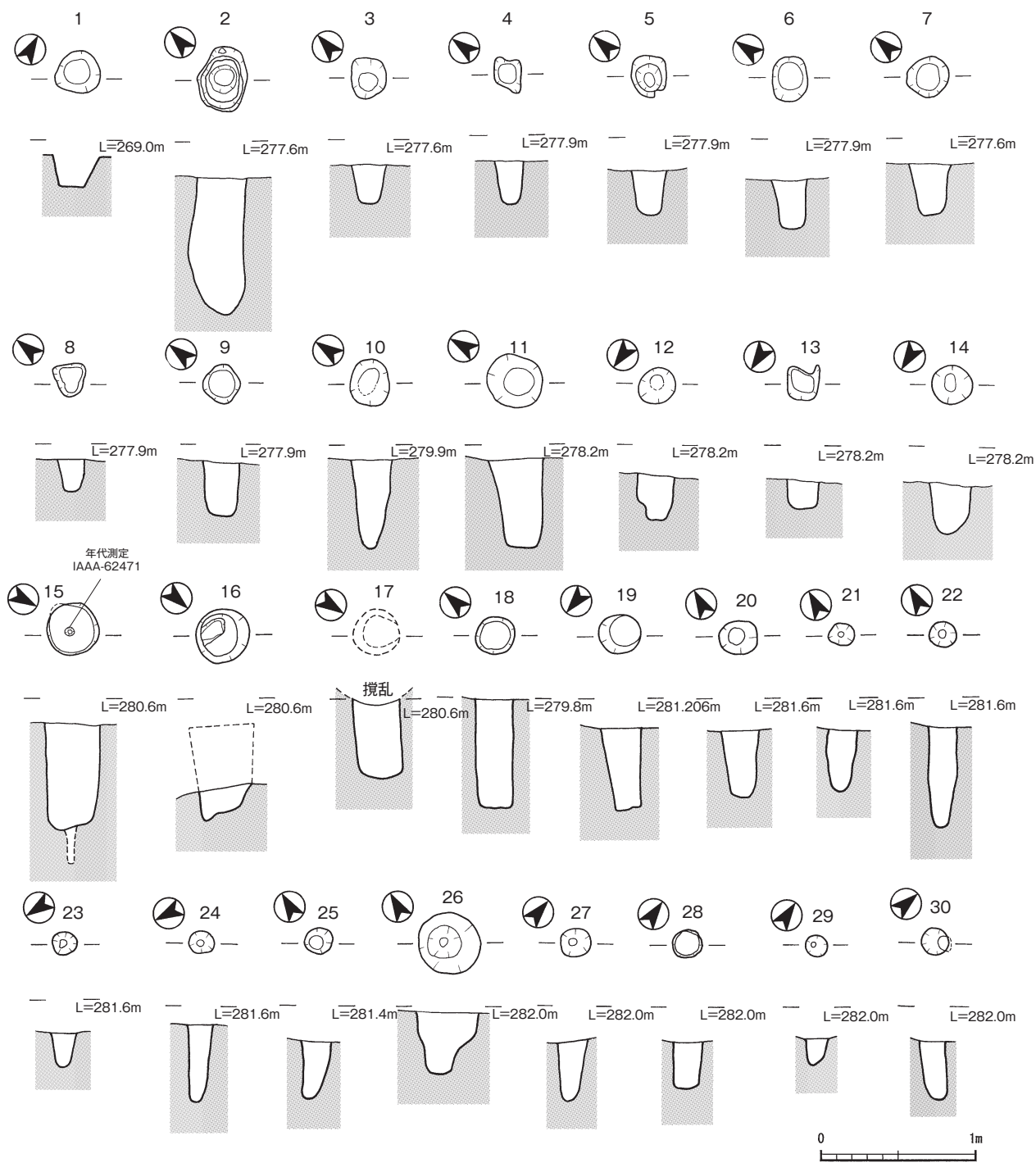
また、遺構内では炭化物も多く散在していた。当時周辺で火を焚くなどして、その際に何かの用途で使用した軽石と燃えかすである炭化物が散在した可能性が考えられる。



第180図 古代 軽石配石

(5) ピット (第181図)

30基を掲載した。ピット15内の炭化物の放射性炭素年代測定結果は、 $1,250 \pm 30$  (yrBP) である。



第181図 古代 ピット

第42表 古代 ピット計測表

順	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)				
181	1	29.5	24.5	21.5	6	30.5	25.0	34.0	11	37.0	34.5	59.0	16	36.0	33.5	19.0	21	17.0	14.5	41.0	26	42.0	39.5	40.0
	2	43.5	32.5	89.5	7	28.0	25.0	33.5	12	25.5	22.5	30.5	17	31.5	28.5	52.0	22	17.5	17.5	66.5	27	20.5	19.5	42.5
	3	27.5	22.5	25.5	8	23.5	21.0	21.0	13	24.0	18.5	20.0	18	27.5	24.5	72.0	23	16.5	15.5	23.0	28	20.0	18.5	33.0
	4	27.5	19.5	29.0	9	26.5	24.0	37.0	14	26.0	25.5	34.5	19	27.0	25.5	54.0	24	16.0	14.5	51.5	29	14.5	14.0	18.0
	5	27.5	24.0	30.0	10	31.0	25.5	57.5	15	35.5	32.0	70.0	20	24.5	22.0	44.0	25	19.0	16.5	38.0	30	17.5	17.0	39.5

## (6) 遺構内遺物

軽石集積、軽石配石等で土器や軽石製品が出土した。遺物について以下にまとめた。

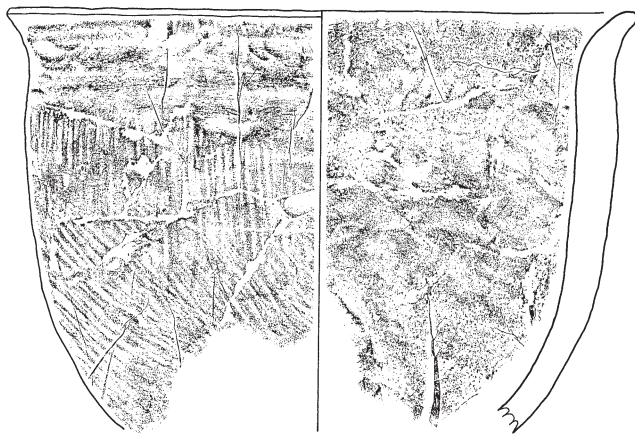
### 軽石集積内出土遺物（第182～第184図454～474）

454は甕形土器である。器形は口縁部が短く、頸部で外反するものである。器面は外面が頸部から口縁部にかけてヨコナデで、頸部から下はヘラ先で縦位に、胴部から下は斜位に撫でた調整である。内面はヨコナデである。また、器壁は厚く作られている。口縁部は煤の影響で黒褐色部分もある。455は甕形土器である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から底部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部から底部は掻き上げである。また、器壁は薄く作られている。456は甕形土器である。器形は口縁部が頸部で外反するものである。器面は外面が胴部から口縁部にかけてヨコナデで、胴部から下はヘラ先で横位に、その下は斜位に撫でた調整である。内面はヨコナデである。また、器壁は厚く作られている。457は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で丸く外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げがみられるが稜線ははっきりしない。また、器壁は胴部にかけて厚く作られている。458は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位の弱い掻き上げで弱い稜線がみられる。459は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部はヘラ掻き上げが横位にみられる。内側の稜線がみられない。460は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、内側の稜線がみられない。461は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、内側の稜線がみられない。462は坏である。底部はヘラ切り離しで、立ち上がりは直行の外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。463は坏の底部である。底部はヘラ切り離しで、立ち上がりは直行の外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。464は埴の底部である。立ち上がりは直行の外開きで、高台部は欠損している。器面調整は轆轤の水引がみられる。465はナデ仕上げの底部で、胴部は直行しながら立ち上がり、口縁部も直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。

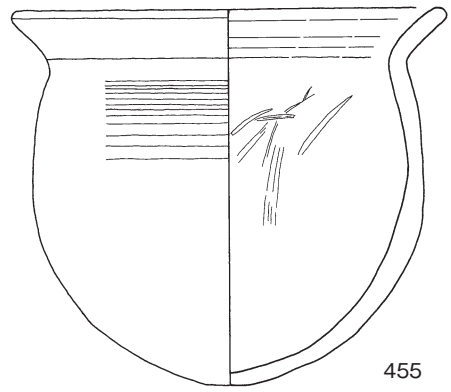
軽石製品を9点図示した。466は4面を丁寧加工した角筒状の形である。各面は3面が平坦で、1面が内側に窪んでいる。角は1辺が丸く加工され他は鋭い角を持っている。各面の色調は1面に赤茶褐色がみられ、これは火を受けた面と思われる。また、両端は欠損している。

### 軽石配石内出土遺物（第184図475・476）

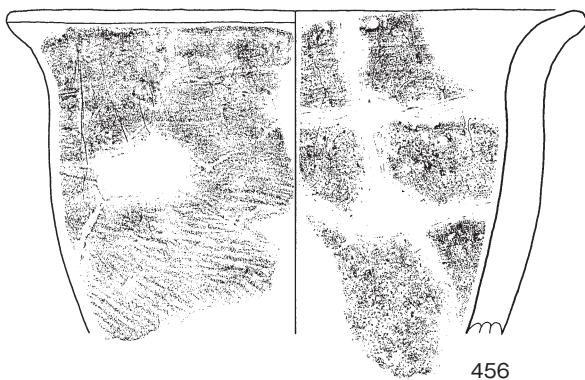
軽石製品を2点図示した。475は3面が平坦に加工され、他の面は粗く加工されているが、欠損した面になっている。各面の色調は1面に赤茶褐色がみられ、これは火を受けた面と思われる。



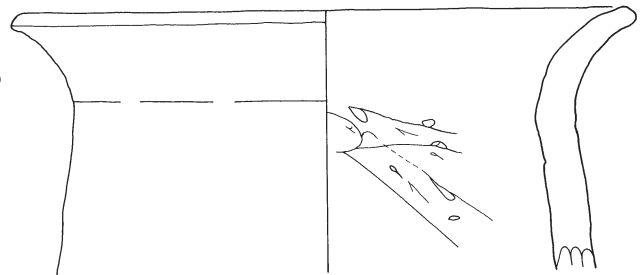
454



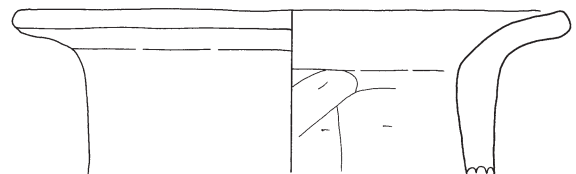
455



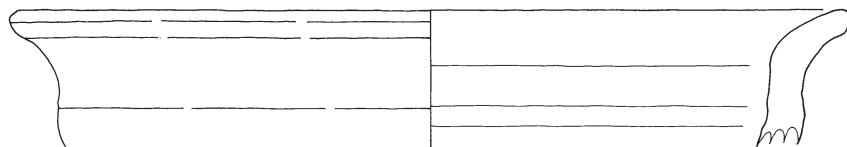
456



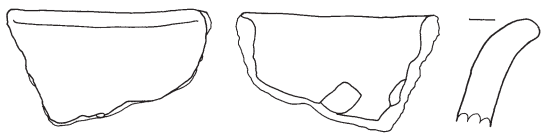
457



458



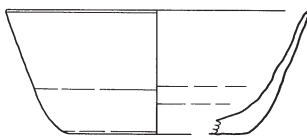
459



460



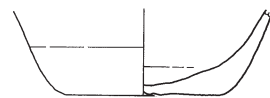
461



462



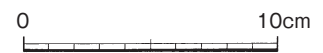
463



465

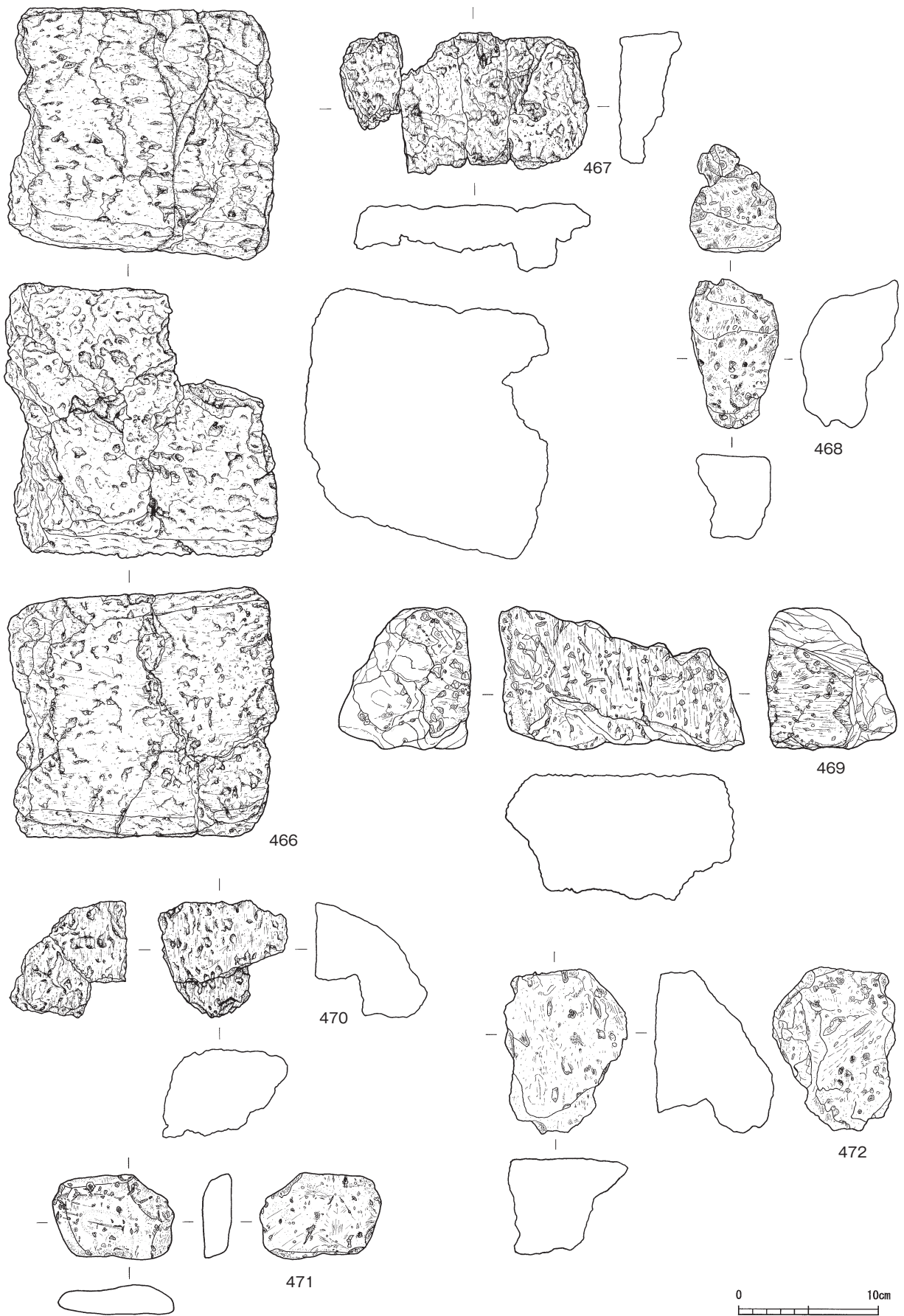


464

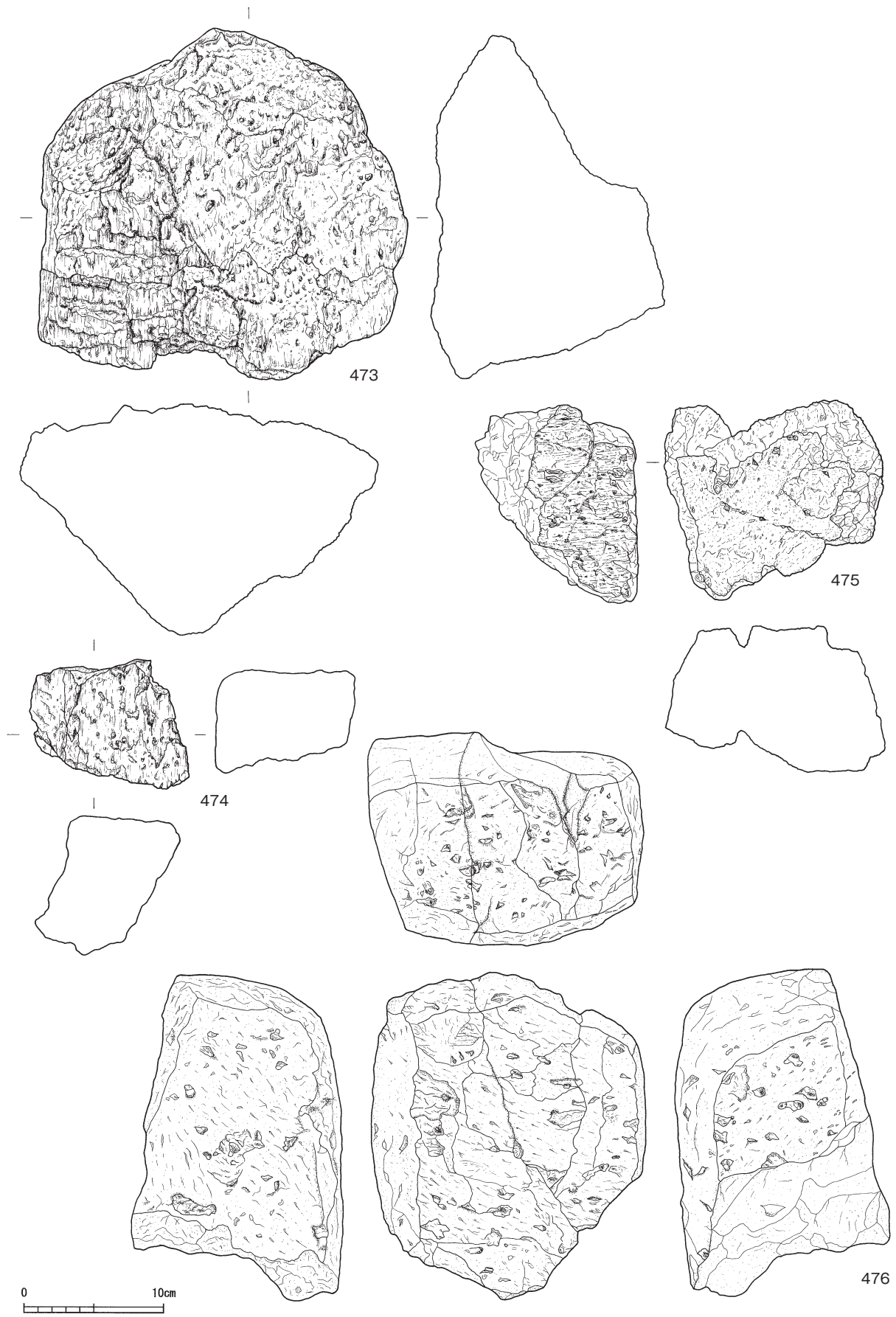


第182図 古代 軽石集積内出土土器

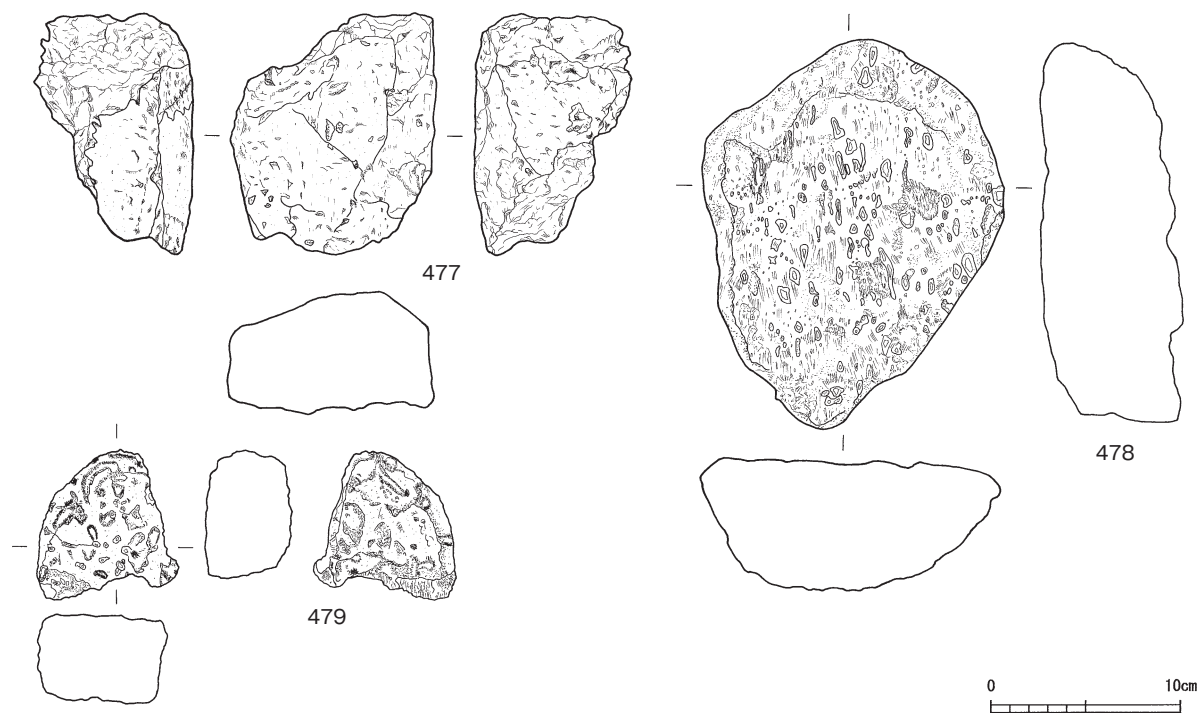




第183図 古代 軽石集積内出土軽石製品



第184図 古代 軽石集積及び軽石配石内出土軽石製品



第185図 古代 2号溝状遺構内出土軽石製品

2号溝状遺構内出土遺物（第185図477～479）

軽石製品を3点図示した。477は金属性の道具で粗く削り取って面を整形している。その面は3面みられ、他の面は欠損部の面である。若干黄色がかっており、火を受けたと思われる。

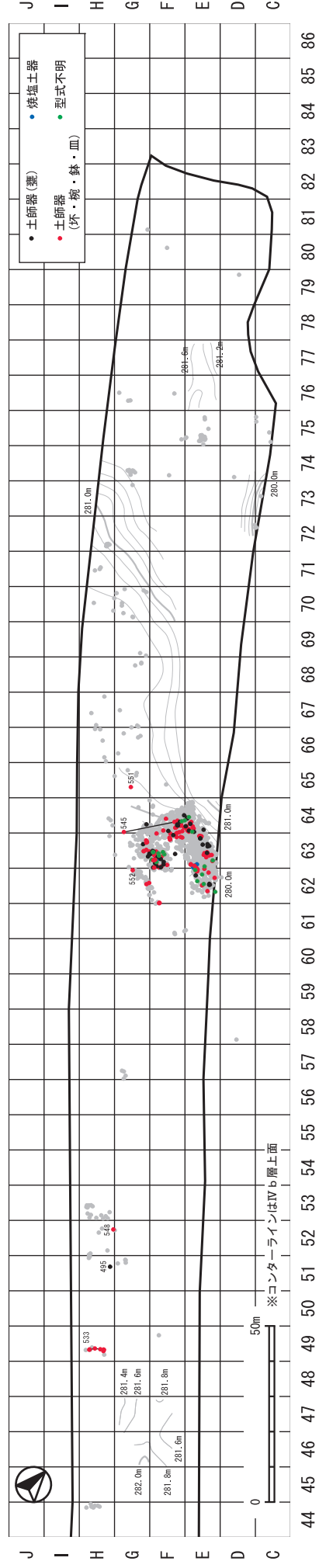
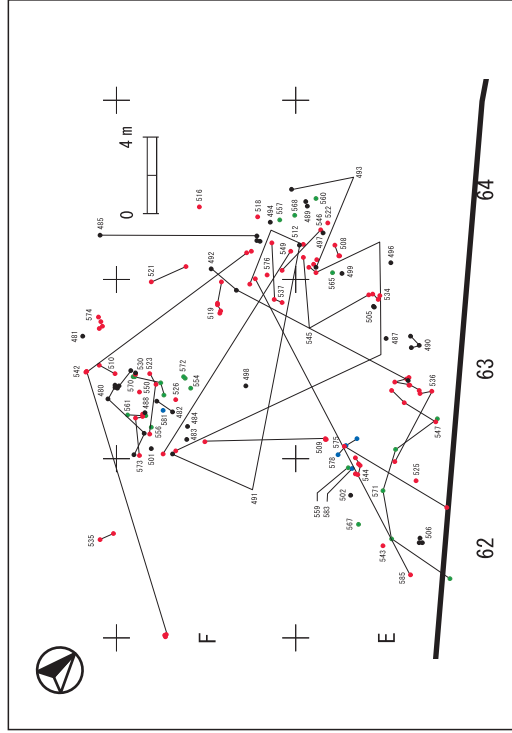
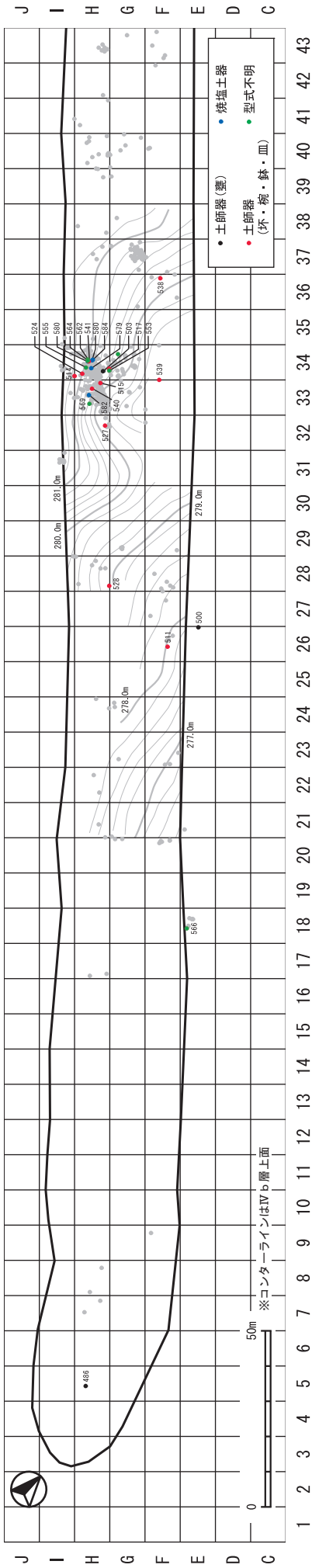
479は円形に加工した四分の一の部分と思われる。上下は平坦に、円周部は丸く加工されている。角の一部に赤茶褐色の部分が見られる。用途は不明である。

第43表 古代 軽石集積内出土土器観察表

挿図番号	図番号	分類	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考
182	454	甕形土器	ナデ	ナデ	赤茶褐色	灰茶褐色	長・石・角	硬質	口径24.4cm
	455	甕形土器	ナデ	ナデ	白茶褐色	白茶褐色	長・石・角	硬質	口径17.2cm
	456	甕形土器	ナデ	ナデ	灰茶褐色	灰色	長・石・角	硬質	口径22.9cm
	457	甕形土器	ナデ	ナデ	明赤褐色	暗赤褐色	長・石・角	硬質	口径24.4cm
	458	甕形土器	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	長・石・角	硬質	口径22.2cm
	459	甕形土器	ナデ	ナデ	赤黒褐色	赤黒褐色	長・石・角	硬質	口径33.3cm
	460	甕形土器	ナデ	ナデ	黒色	黒色	長・石・角	硬質	
	461	甕形土器	ナデ	ナデ	赤茶色	赤茶色	長・石・角	硬質	
	462	土師器坏	轆轤の水引き	轆轤の水引き	明茶褐色	明茶褐色	粒の小さい粘土	硬質	口径12.0cm, 底径7.2cm
	463	土師器坏	轆轤の水引き	轆轤の水引き	明茶褐色	明茶褐色	粒の小さい粘土	硬質	底径6.8cm
464	土師器碗	轆轤の水引き	轆轤の水引き	赤茶褐色	赤茶褐色	粒の小さい粘土	硬質		
465	土師器坏	轆轤の水引き	轆轤の水引き	茶褐色	茶褐色	粒の小さい粘土	硬質	底径6.2cm	

第44表 古代 軽石集積内ほか出土軽石製品観察表

挿図番号	図番号	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
183	466	70	軽石製品	軽石	19.6	19.9	18.2	2024.0	軽石集積内
	467	14 25 27 33 78	軽石製品	軽石	10.2	17.9	4.9	278.5	軽石集積内
	468	9171	軽石製品	軽石	10.8	6.5	7.0	131.0	軽石集積内
	469	9368	軽石製品	軽石	10.3	17.5	9.7	467.0	軽石集積内
	470	4631 4633	軽石製品	軽石	8.4	9.4	8.4	113.0	軽石集積内
	471	3010	軽石製品	軽石	6.2	8.8	2.2	26.5	軽石集積内
	472	69	軽石製品	軽石	11.8	8.3	8.8	239.5	軽石集積内
184	473	1	軽石製品	軽石	25.3	26.6	16.9	3170.0	軽石集積内
	474	1595	軽石製品	軽石	9.3	11.5	10.1	323.0	軽石集積内
	475	軽石②軽石③	軽石製品	軽石	14.3	15.6	11.5	550.5	軽石配石内
	476	軽石①軽石⑧	軽石製品	軽石	23.5	19.8	15.3	1811.0	軽石配石内
185	477	6494	軽石製品	軽石	12.9	10.9	8.5	479.5	2号溝状遺構内
	478	6493	軽石製品	軽石	20.8	16.1	7.7	798.5	2号溝状遺構内
	479	6505	軽石製品	軽石	7.9	7.6	4.8	91.5	2号溝状遺構内



第186図 古代～中世 土器出土状況図

### 3 遺物

包含層の出土遺物は甕、土師器の坏・埴、焼塩土器が出土している。

#### 甕

甕は大きく薄手と厚手に分かれる。

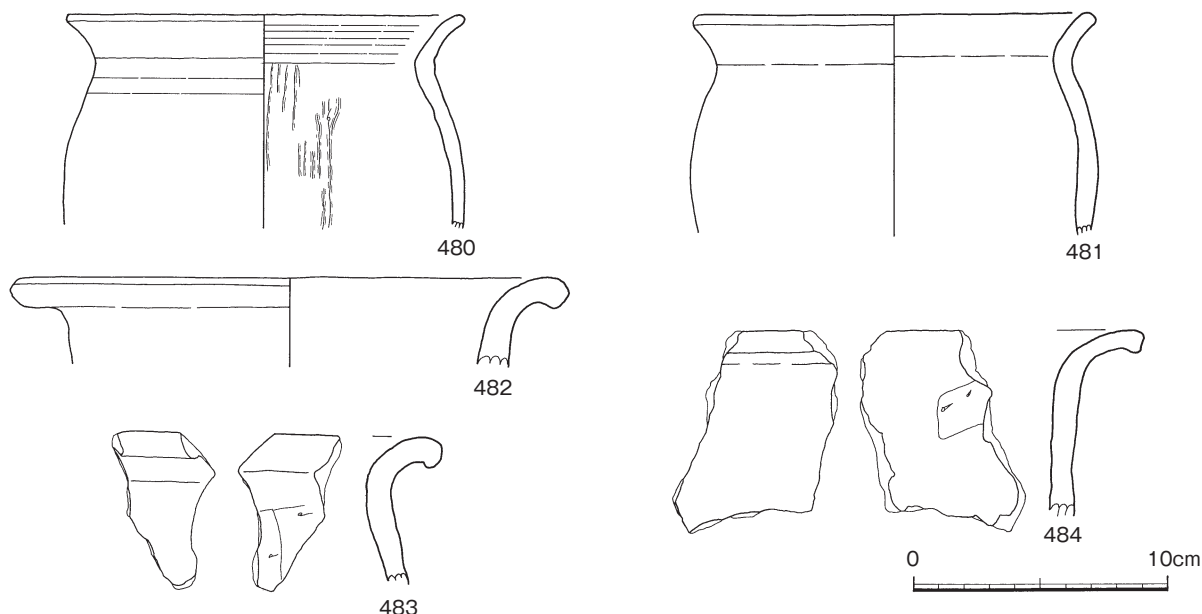
#### 薄手甕（第187図480～484）

480は甕形土器である。器形は口縁部が長く、頸部で締め外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部から底部は掻き上げである。また、器壁は薄く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗灰茶褐色である。481は甕形土器である。器形は口縁部が長く、頸部で締め外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部は掻き上げである。また、器壁は薄く作られている。色調は内外面とも黄茶褐色である。482は甕形土器である。器形は口縁部が長く下がり気味で、頸部で外反するものである。器面は内外面ヨコナデである。色調は内外面とも茶褐色である。483は甕形土器である。器形は口縁部が長く下がり気味で、頸部で外反するものである。器面は内外面ヨコナデである。色調は内外面とも茶褐色である。胎土には石英、長石、角閃石等が含まれ、焼成度はやや硬質である。484は甕形土器である。口縁部は長く、口唇部が下がり巻き気味である。器形は頸部で外反するものである。器面は内外面ヨコナデである。色調は内外面とも暗茶褐色である。

#### 厚手甕A（第188図485～497）

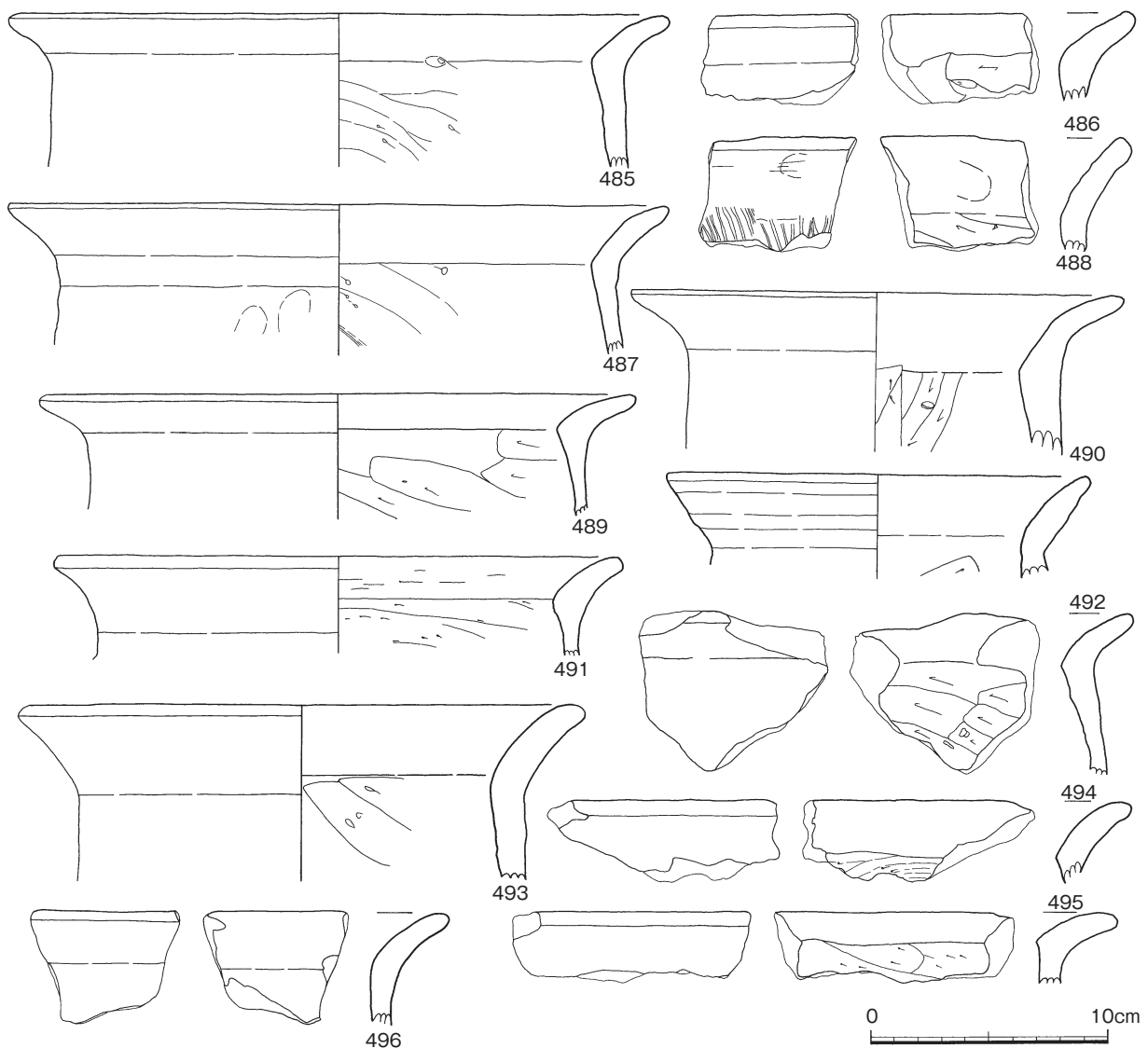
このタイプは口縁部が長く頸部内側に稜線がみられるものである。

485は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。また、器壁は胴部にかけて薄く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。486は甕形土器の口縁部である。器形は口縁部が長く、頸部で締め外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は横位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。色調は内外面とも赤茶褐色である。胎土には石英、長石、角閃石等が含まれ、焼成度はやや硬質である。487は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で締め外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部は横位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面が灰茶褐色である。488は甕形土器の口縁部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部は横位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。色調は外面が茶褐色で、内面が赤茶褐色である。489は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけて丁寧なヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。また、器壁は胴部にかけて薄く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が赤茶褐色に黒斑がみられる。490は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。



第187図 古代 土器（薄手甕）

内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位の掻き上げで稜線がみられる。色調は外面が暗茶褐色で黒斑がみられ、内面は暗茶褐色である。491は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。また、器壁は胴部に向かって薄く作られている。色調は外面が暗赤茶褐色で黒斑がみられ、内面は暗茶褐色である。492は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけて粗いヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げで若干の稜線がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。493は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。494は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。また、器壁は胴部に向かって薄く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が暗茶褐色である。495は甕形土器の口縁部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面がヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。色調は内外面とも茶褐色である。496は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げで稜線ではなく丸みがみられる。色調は内外面とも明茶褐色である。497は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部は斜位のヘラ掻き上げで稜線がみられる。色調は外面が黒赤茶褐色で、内面が口縁部の茶褐色と頸部の暗茶褐色である。

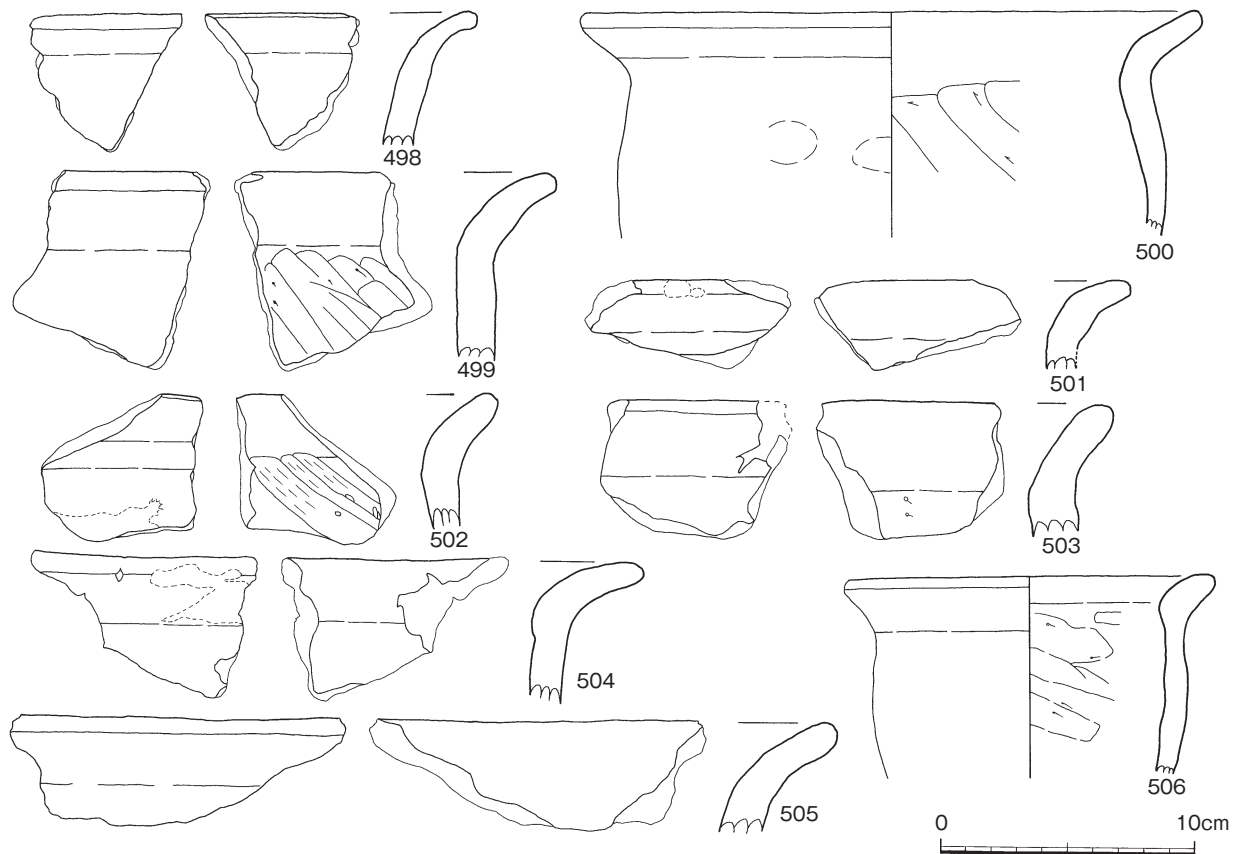


第188図 古代 土器（厚手甕A）

厚手甕B（第189図498～506）

このタイプは口縁部内側に稜線がないタイプである。

498は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで稜線がみられない。また、器壁は胴部にかけて厚く作られている。色調は外面が赤茶褐色で、内面が茶褐色である。499は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部から胴部は斜位のヘラ搔き上げで内側の稜線がみられない。また、器壁は胴部にかけて薄く作られている。色調は外面が茶褐色で、内面が明赤茶褐色である。500は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く、頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から胴部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、頸部から胴部は斜位のヘラ搔き上げで内側の稜線がみられない。また、器壁は胴部にかけて薄く作られている。色調は外面が茶褐色に黒斑がみられ、内面が暗茶褐色である。501は甕形土器の口縁部から頸部である。器



第189図 古代 土器（厚手甕B）

形は口縁部が長く，頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで，頸部から胴部は斜位のヘラ掻き上げで内側の稜線がみられない。色調は外面が茶褐色で黒斑がみられる。内面は明赤茶褐色である。502は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く，頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで，頸部から胴部は斜位のヘラ掻き上げで内側の稜線がみられない。また，器壁は胴部にかけて厚く作られている。色調は外面が茶褐色で黒斑がみられる。内面は明赤茶褐色である。503は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く，頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで，頸部から胴部は斜位のヘラ掻き上げで内側の稜線がみられない。色調は外面が茶褐色で，内面は明赤茶褐色である。504は甕形土器の口縁部から頸部である。器形は口縁部が長く，頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで，頸部から胴部は斜位のヘラ掻き上げで内側の稜線がみられない。また，器壁は胴部にかけて厚く作られている。色調は外面が茶褐色で黒斑がみられる。内面は灰茶褐色である。505は甕形土器の口縁部である。器形は口縁部が長く，頸部で外反するものである。器面は内外面ともヨコナデである。色調は外面が茶褐色に煤の黒色がみられ，内面が茶褐色である。506は小形の甕形土器の口縁部から胴部である。器形は口縁部が長く，頸部で外反するものである。器面は外面が口縁部から頸部にかけてヨコナデである。内面は口縁部から頸部にかけてヨコナデで，頸部から胴部は斜位のヘラ掻き上げで内側の稜線がみられない。色調は外面が明赤茶褐色で，内面は明茶褐色である。



## 土師器坏（第190図507～532）

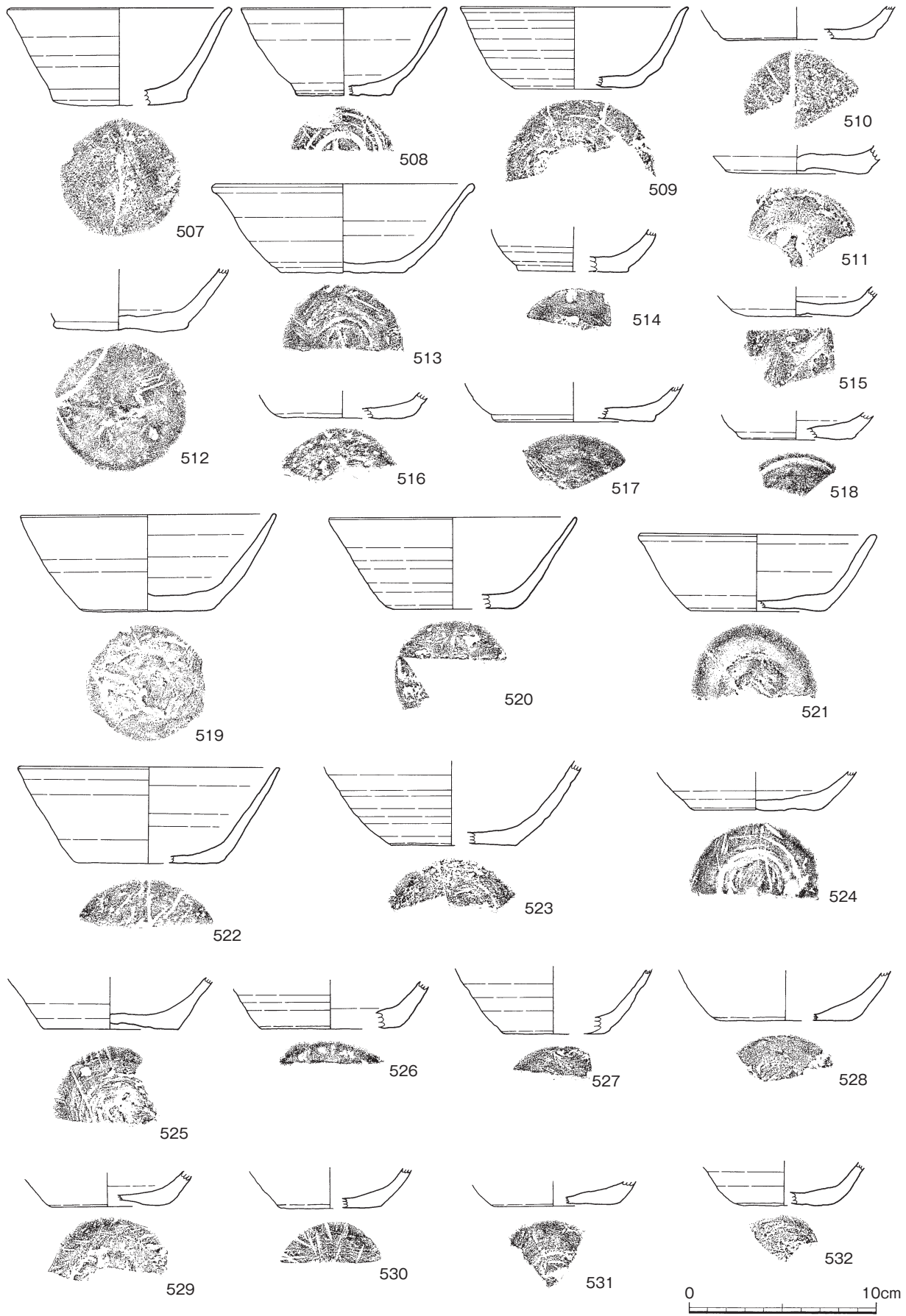
坏は底部と胴部の間に充実高台気味に段をもつものともたないものに分けられる。前者は507～518で、後者が519～532である。

### 段をもつもの

507はナデ仕上げの底部で、胴部は直行しながら立ち上がり、口縁部も直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。508はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。509はヘラ切り離しの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。510はナデ仕上げの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がる器形である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白茶褐色である。511はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明灰褐色である。512はヘラ切り離し後にナデ調整をした底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。513はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。514はナデ仕上げの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がる器形である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。515はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。516はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白茶褐色である。517はナデ仕上げの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がる器形である。器面調整はヘラナデである。色調は内外面明茶褐色である。518はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。

### 段がないもの

519はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色に黒斑がみられる。520はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部は直線状に立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。521はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部は直線状に立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白桃茶褐色である。522はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部は直線状に立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白茶褐色である。523はヘラ切り離しの底部で、胴部は湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。524はヘラ切り離しの底部で中央部が上がっている。胴部は直行しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面灰茶褐色である。525はヘラ切り離しの底部で中央部が上がっている。胴部は直行しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面灰茶褐色である。526はヘラ切り離しの底部である。色調は内外面茶褐色である。527はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。528はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや



第190図 古代 土器 (土師器坏)

湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。529はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で中央部が上がっている。胴部は直行しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面灰茶褐色である。530はヘラ切り離しの底部で、胴部はやや湾曲しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。531はヘラ切り離しの底部である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。532はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、胴部は直行しながら立ち上がる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面暗茶褐色である。

#### 土師器塚（第191図533～548）

塚は無色彩と内赤土器と内黒土器といわれる黒色土器が出土している。

#### 塚（533～542）

533はヘラ切り離しの後、三角断面の低い高台をつけている。底部にはヘラによる記号が1つ刻まれている。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも明茶褐色である。534はヘラ切り離しの後、半円断面の低い高台をつけている。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも茶褐色である。535はヘラ切り離しの後、三角断面の低い高台をつけている。底部にはヘラによる「十」印がみられる。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも明茶褐色である。536はヘラ切り離しの後、細い半円断面の低い高台をつけている。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも黄茶褐色である。537は半円断面の低い高台をつけている。胴部の立ち上がりは直線状に外に開いている。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも茶褐色である。538はヘラ切り離しの後、半円断面のやや高い高台をつけている。胴部の立ち上がりは直線状に外に開いている。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも灰茶褐色である。539はヘラ切り離しの後、半円断面のやや高い高台をつけている。胴部から口縁部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも明茶褐色である。540はヘラ切り離しの後、半円断面のやや高い高台をつけている。胴部の立ち上がりは直線状に外に開いている。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は両面とも明茶褐色である。541は塚である。底部の高台は外開きに貼り付け、胴部の立ち上がりは球状に作っている。器面調整はヘラナデの刺し痕がみられる。色調は灰白色である。

542は特殊塚である。器形は高い高台に直線的に開く外側に張り出しを廻らしているものである。器面調整はナデ調整で、色調は内外面とも灰茶褐色に黒斑がみられる。

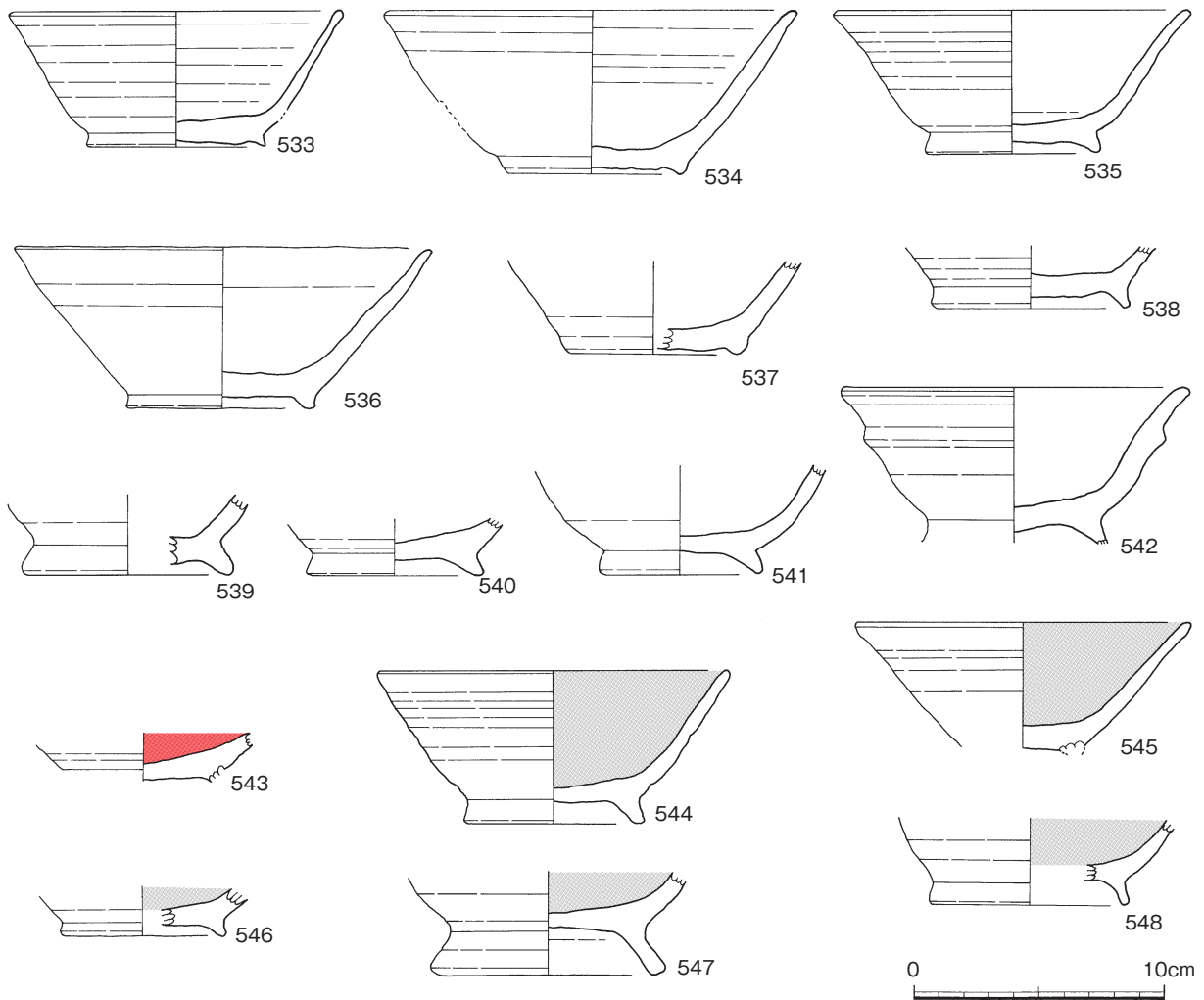
#### 内赤土器（543）

543は高台が欠損しているもので、胴部の立ち上がりは直線状に外開きである。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は内面に赤色の部分が残っている。外面は明茶褐色である。

#### 内黒土器（544～548）

544はヘラ切り離しの後、細い半円断面の低い高台をつけている。胴部から口縁部の立ち上がりはやや湾曲状に外に開いている。器面調整は外面に轆轤の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が黄茶褐色で、内面は黒色である。545はヘラ切り離しの後、高台をつけている。胴部か

ら口縁部の立ち上がりは直線状に外開きをしている。器面調整は外面に轆轤の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が白茶褐色に黒帯斑がみられ、内面は黒色である。546はヘラ切り離しの後、細い半円断面の低い高台をつけている。胴部の立ち上がりはやや湾曲状に外開きをしている。器面調整は外面に轆轤の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が白茶褐色で、内面は黒色である。547はヘラ切り離しの後、細い半円断面の高い高台をつけている。胴部の立ち上がりはやや湾曲状に外開きをしている。器面調整は外面に轆轤の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が黄茶褐色で、内面は黒色である。548はヘラ切り離しの後、細い半円断面の高い高台をつけている。胴部の立ち上がりはやや湾曲状に外開きをしている。器面調整は外面に轆轤の水引がみられ、内面に研磨がみられる。色調は外面が茶褐色で、内面は黒色である。

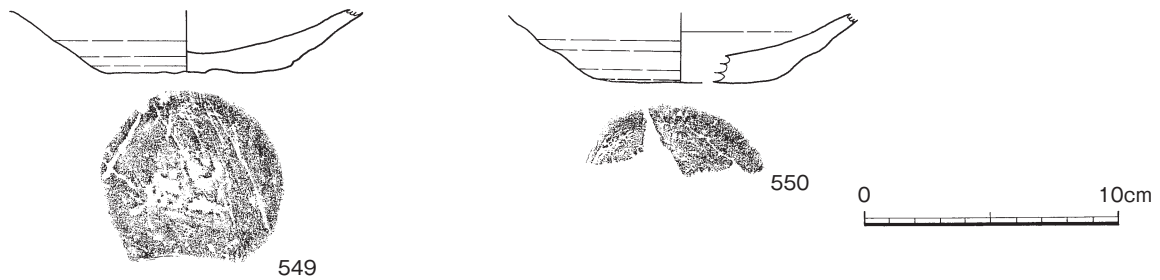


第191図 古代 土器 (土師器塚)

土師器皿 (第192図549・550)

やや大きめで口縁部が大きく開く器形のものである。

549はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、底部の角は丸みを帯びている。胴部は直行しながら立ち上がり大きく開く器形である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。550はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、底部の角は丸みを帯びている。胴部は直行しながら立ち上がり大きく開く器形である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面茶褐色である。

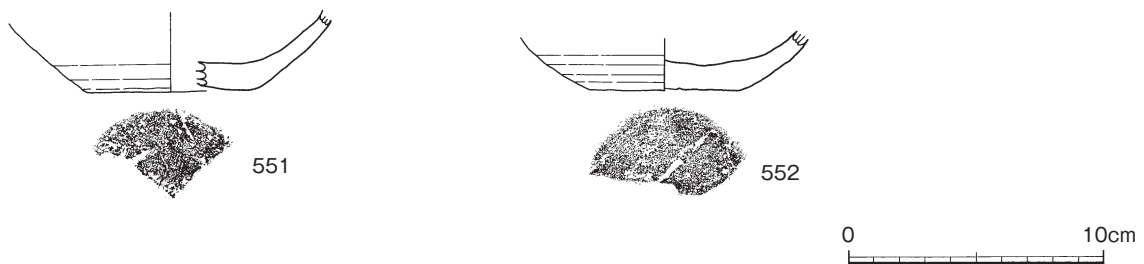


第192図 古代 土器（土師器皿）

土師器鉢（第193図551・552）

底部が厚く小さめで、坏の底部と異なるものを鉢とした。

551は底部が厚く平底で、胴部は湾曲して立ち上がる器形である。器面調整は横ナデ調整である。色調は内面が白茶褐色で、外面が白茶褐色と赤褐色である。552は黒色土器である。底部が厚く平底で、胴部は湾曲して立ち上がる器形である。器面調整は外面が横ナデ調整で、内面が黒色研磨である。色調は内面が黒色で、外面が白茶褐色と赤褐色である。



第193図 古代 土器（土師器鉢）

器種不明の土器（第194図553～572）

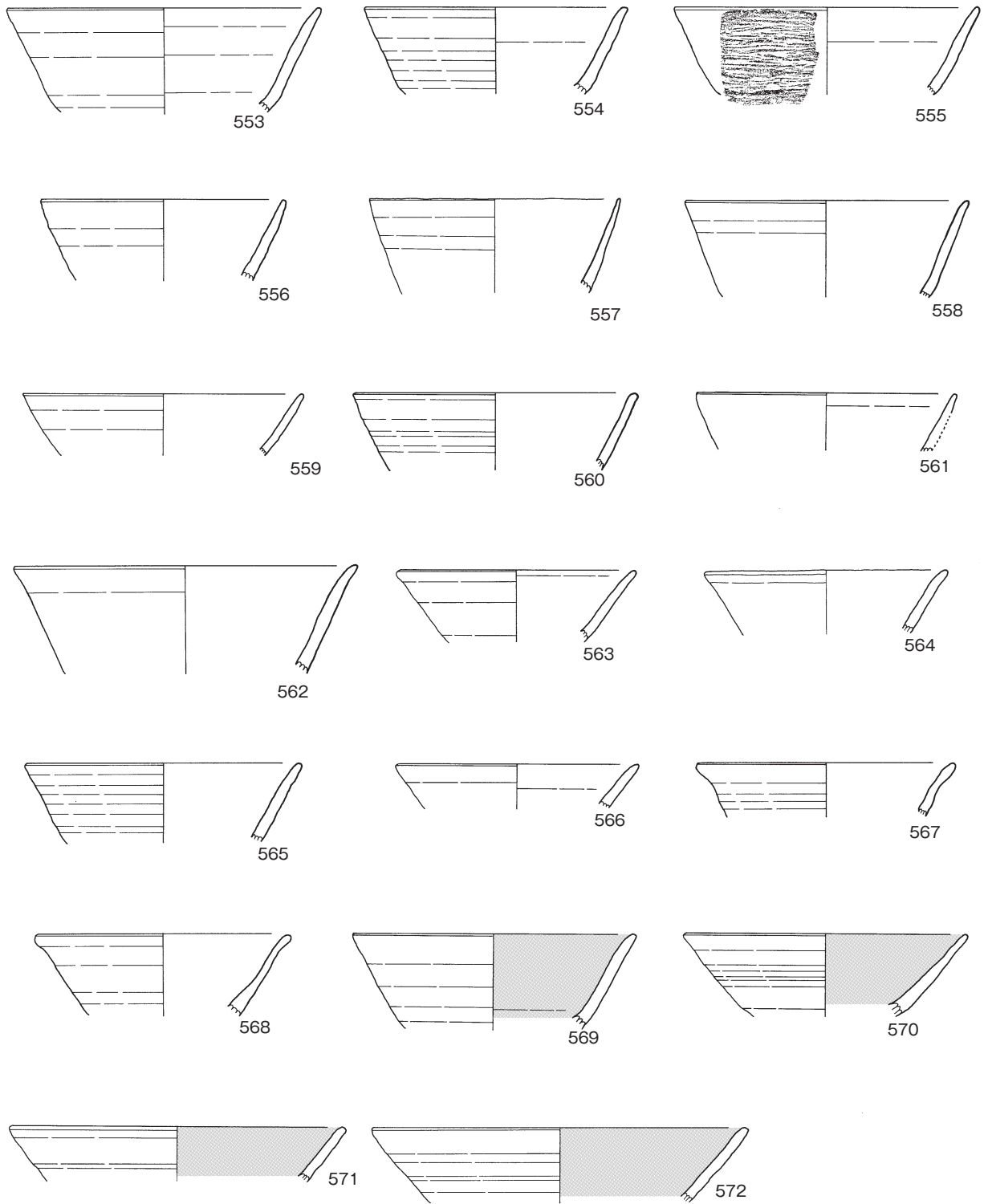
底部欠損のため主なものを掲載した。これらは、坏、埴、皿等の一部である。553～568は無色彩で、569～572は内黒土器である。器面調整は黒色土器以外が轆轤の水引がみられる。なお、内黒土器は内面が黒色研磨調整である。553・554・555は立ち上がりがやや湾曲し、口縁部が直線状に開く器形である。色調は553が暗茶褐色に黒斑がある。また、554の色調は茶褐色、555は明茶褐色である。器面調整は轆轤の水引がみられる。559・560は立ち上がりが直線状で、口縁部まで開く器形である。567と568は口縁部が外反する器形である。器面調整は轆轤の水引がみられる。色調は561が暗黒褐色、565が暗茶褐色、568は白茶褐色に黒斑がみられる。それ以外は茶褐色である。569～572の調整は内面が黒色研磨で、外面が轆轤の水引がみられる。色調は内面が黒色で、外面が茶褐色である。

墨書土器（第195図573～577）

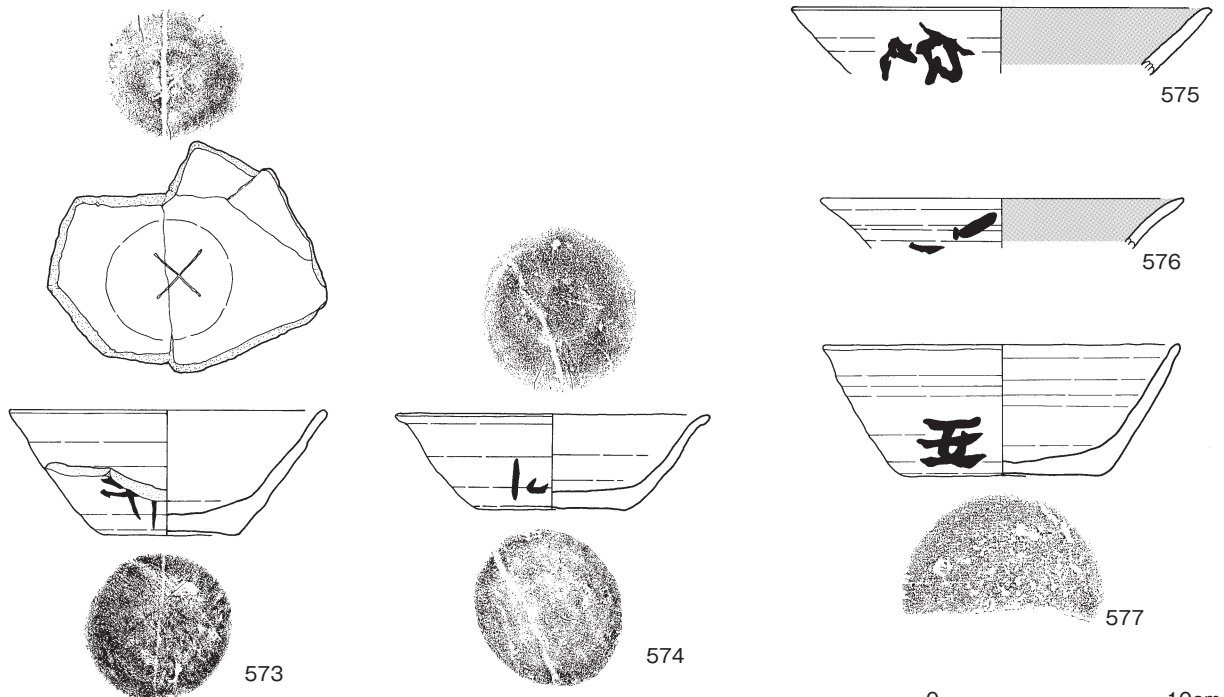
この土器は5点出土している。

573はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、底部の角は丸みを帯びている坏である。胴部から口縁部は直行しながら立ち上がり開く器形である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。見込みに「×」印があり、側面の墨書は「神？」がみられる。574はヘラ切り離しナデ仕上げの底部で、底部の角は丸みを帯びている坏である。胴部は直行しながら立ち上がり、口縁部は外反する器形である。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面明茶褐色である。墨書は側面に

「九？」がみられる。575は直線状に開く内黒土器の側面に「寶？」がみられる。576は直線状に開く内黒土器の側面にみられるものは不明である。577はヘラ切り離しのナデ調整底部で、胴部は直線状に立ち上がり、口縁部は直行して外開きである。側面に「安？」がみられる。器面調整は轆轤の水引である。色調は内外面白茶褐色である。



第194図 古代 土器（器種不明）

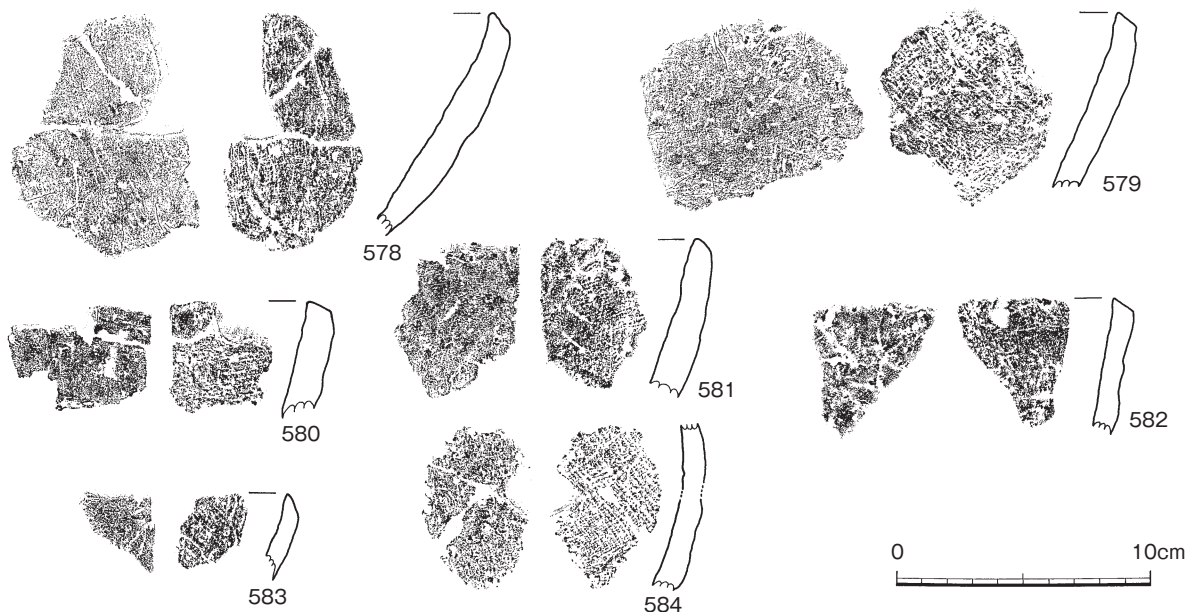


第195図 古代 土器 (墨書)

焼塩土器 (第196図578~584)

この土器は内面に布目痕がみられるもので外面は粗雑にできている。

578は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は尖底状で胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は茶褐色である。  
 579は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は尖底状で胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は明茶褐色である。  
 580は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は尖底状で胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は灰茶褐色である。  
 581は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は尖底状で胴部に丸みを持つ。器壁



第196図 古代 土器 (焼塩土器)





は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は灰茶褐色である。582は口縁部の外側は切られ、断面三角形をなしている。器形は胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は紫茶褐色である。583は口縁部の外側は鋭く切られ、断面三角形をなしている。器形は胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は茶褐色である。584は器形が胴部に丸みを持つ。器壁は厚く、粗雑に作られている。器面調整は布目圧痕とヘラナデである。色調は茶褐色である。

第46表 古代・中世 土器観察表(2)

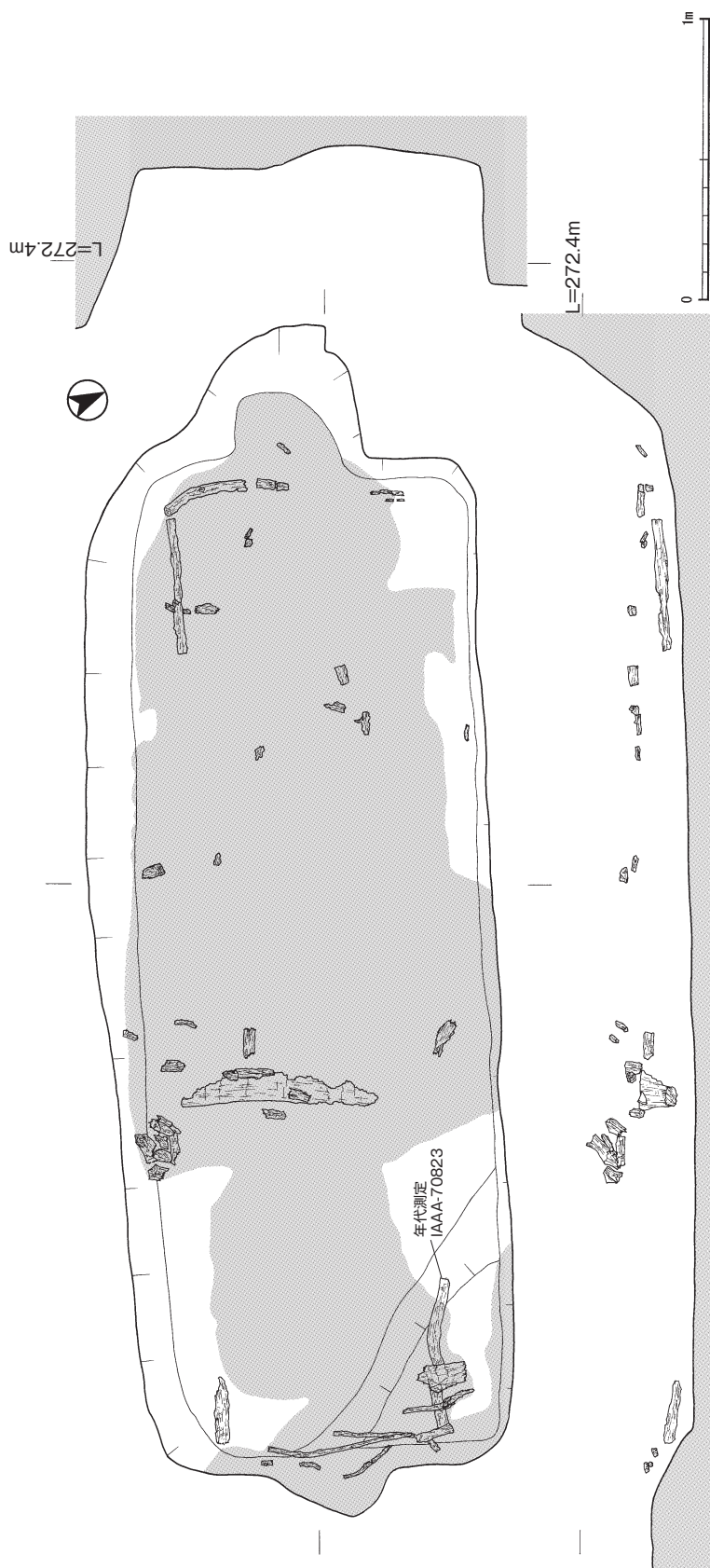
器図号	図番号	取上番号	分類1	分類2	区	群	型	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	焼成	備考				
192	549	4520	土師器皿		F 64	III	a	轆轤の水引	轆轤の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	硬質	底径6.0cm				
		9295			F 63	III	a	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	底径6.0cm				
193	551	1281	土師器鉢		G 65	IV	a	ナデ	ナデ	白茶褐色、赤褐色	白茶褐色	角	硬質	底径6.7cm				
		8461			G 62	III	b	ナデ	黒色研磨	白茶褐色、赤褐色	黒色	角	硬質	底径6.0cm				
194	552	21662	不明		H 34	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	暗茶褐色	暗茶褐色	角	硬質	口径15.5cm				
		9348			F 63	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径13.0cm				
		20527			H 34	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	硬質	口径15.0cm				
		9112			F 63	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径12.1cm				
		1576			F 64	III	-	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径12.4cm				
		摺乱			-	-	-	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径14.0cm				
		2180			E 62	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径13.8cm				
		2649			E 64	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径14.0cm				
		8939 8963			F 63	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	暗黒褐色	暗黒褐色	角	硬質	口径12.8cm				
		20429			H 34	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径17.0cm				
		SE101.4			-	-	-	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径11.8cm				
		20433			H 34	IV	a	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径12.0cm				
		2968			E 64	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	暗茶褐色	暗茶褐色	角	硬質	口径13.6cm				
		92			E 18	IV	a	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径12.0cm				
		2166			E 62	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	茶褐色	茶褐色	角	硬質	口径12.8cm				
		4474			F 64	III	-	轆轤の水引	轆轤の水引	白茶褐色	白茶褐色	角	硬質	口径12.6cm				
		21261			H 33	IV	a	轆轤の水引	黒色研磨	茶褐色	黒色	角	硬質	口径14.0cm				
		8809 8839 9018 9175			F 63	III	-	轆轤の水引	黒色研磨	茶褐色	黒色	角	硬質	口径14.0cm				
		571			2148 2159 2218 2372 3303	一括			E 62	III	b	轆轤の水引	黒色研磨	茶褐色	黒色	角	硬質	口径16.6cm
									E 63	III	b	轆轤の水引	黒色研磨	茶褐色	黒色	角	硬質	口径16.6cm
572	9350 9351	一括			F 63	III	b	轆轤の水引	黒色研磨	茶褐色	黒色	角	硬質	口径18.6cm				
					-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
195	573	8434 8950 8960 9196 8719 8721 8723 9155	黒書土器		F 63	III	b	轆轤の水引	轆轤の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	硬質	口径12.4cm、底径5.3cm、器高4.9cm				
					574	G 63	III	-	轆轤の水引	轆轤の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	硬質	口径12.4cm、底径5.8cm、器高3.8cm			
					2247	E 62	III	b	轆轤の水引	内黒	にぶい黄橙色	黒色	角	硬質	口径16.6cm			
					3283	E 63	III	b	轆轤の水引	内黒	にぶい黄橙色	黒色	角	硬質	口径14.4cm			
					1613	F 64	III	-	轆轤の水引	轆轤の水引	白茶褐色	白茶褐色	角	硬質	口径14.0cm、底径8.0cm、器高5.2cm			
577	-	-	-	轆轤の水引	轆轤の水引	白茶褐色	白茶褐色	角	硬質	口径14.0cm、底径8.0cm、器高5.2cm								
196	578	3242 3262 3265 20499 20436 20453 9139 20925 3288 20458	焼塩土器		E 63	III	b	ヘラナデ	布目圧痕	茶褐色	茶褐色	小円礫	普通					
					579	H 34	III	b	ヘラナデ	布目圧痕	明茶褐色	明茶褐色	小円礫	普通				
					580	H 34	III	b	ヘラナデ	布目圧痕	灰茶褐色	灰茶褐色	小円礫	普通				
					581	F 63	III	b	ヘラナデ	布目圧痕	灰茶褐色	灰茶褐色	小円礫	普通				
					582	H 33	III	b	ヘラナデ	布目圧痕	紫茶褐色	紫茶褐色	小円礫	普通				
					583	E 62	III	b	ヘラナデ	布目圧痕	茶褐色	茶褐色	小円礫	普通				
198	585	1369 2144	土師器坏		F 64	III	b	ナデ	轆轤の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	硬質					
					586	E 62	III	b	ナデ	轆轤の水引	明茶褐色	明茶褐色	角	硬質				
		一括	青磁		-	-	-	青釉	青釉	青緑色	青緑色	釉薬	硬質	底径4.0cm				

### 【中世の遺構】（第197図）

#### 木炭土坑

I - 4区で検出した。平面プランは長辺420cm，短辺143cmの隅丸長方形で，検出面からの深さは64cmである。

なお，遺構内炭化物の放射性炭素年代測定の結果は $700 \pm 30$  (yrBP) である。

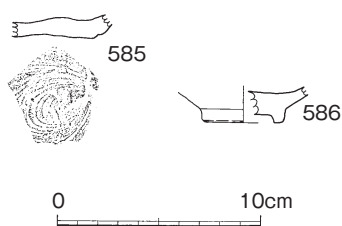


### 【中世の出土遺物】（第198図）

土師器の坏と青磁が出土した。

585は土師器の糸切り底の坏底部である。色調は明茶褐色で，内面には轆轤の水引がみられる。焼成は良く，硬質である。

586は青磁である。底部は断面四角の高台で，高さは低く，畳付けの内側には暗茶褐色の露胎がみられる。底部から立ち上がるの面にしのぎ連弁の一部がみられる。釉の色調は青緑色である。



第198図 中世 出土遺物

第197図 中世 木炭土坑

## 第11節 まとめ

### 旧石器時代について

ここでは旧石器時代第Ⅰ文化層と第Ⅲ文化層の石器群について、それらの編年的な位置づけを中心に若干の検討を行い、まとめとする。

#### 1 第Ⅰ文化層について

検出されたブロックは多くないが、石器群は特徴的なものであった。第1ブロックでは大型の槍先形尖頭器と大型三稜尖頭器、搔器が出土した。第2ブロックでは大型の基部加工ナイフ形石器が出土した。このナイフ形石器は剥片時の打面は折り取り、基部の整形などは直線的に浅くなっており、剥片尖頭器の形骸化したものであることが理解できる。出土層もP17火山灰相当層であり、桐木・耳取遺跡の剥片尖頭器出土層よりかなり新しくなる。また石器組成的には前山遺跡の大型尖頭器の第Ⅱ文化層と極めて近い関係と考えられる。このようにP17の時期に南九州では大型の尖頭器が出現することが明確となった。

南九州旧石器編年(宮田2006)では、VC期2群からⅥ期の初頭ごろに位置づけられよう。

#### 2 第Ⅲ文化層について

第Ⅲ文化層は第Ⅹ層とⅪ層を遺物包含層とするものであり、計20ヶ所の遺物集中ブロックを認識した。そのなかには2ヶ所の土器集中部(第8・19ブロック)も含んでおり、また第3ブロックでは4点の土器が含まれ、そして第6ブロックでは2点の石鏃も出土している。しかし第6ブロックでは小型ナイフ形石器も認められており、このブロック全体が同一時期とは言えない。

全体の20ブロックの石器群のうち、第1・15・16ブロックの石器群は、桑ノ木津留系黒曜石の細角礫を主として使用した小型の細石刃核が特徴となるものである。第1ブロックでは計16点の細石刃核が出土しており、この中には打面が後方に傾斜して作業面幅が広く、古い時期の典型的な野岳・休場型細石刃核(宮田2004)もみられた。

また、第2と第4ブロックは南九州において極めて異例の細石刃石器群であった。まず石材はそのほとんどが良質で黒色を呈する腰岳産と分析された黒曜石であり、細石刃核はブランク形成後に削片を剥離して正面形V字形に仕上げる削片系の楔形細石刃核であった。これは、これまで南九州で多く出土している「福井型細石刃核」ではなく、「唐津型細石刃核」(岡本2002)もしくは「石ヶ元型細石刃核」(小畑1987・2005)と呼称されているものである。第2ブロックでは細石刃核と削片の接合資料もあり、加えて削片を使用した彫器も出土した。このような彫器は西北九州では多く出土しているが、南九州では初見である。これらのブロックでは製作上の剥片も多く出土しており、特定石器の持ち込みではなく、この地で製作したことが理解される。ブロック全体の腰岳産黒曜石比率が99%を超えている。以上のことはこのブロックを形成した集団が、腰岳産黒曜石を何らかの方法で入手したのではなく、細石刃核の技術的特徴と製作技術や彫器の存在などから、西北九州の集団がこの地に来て、これらのブロックを残したと判断することができよう。

また、他のブロックから一つだけ離れた位置に所在する第9ブロックについては、出土石材の90%以上が腰岳産黒曜石であり、同様に削片系の細石刃核と典型的な野岳休場型細石刃核が出土した。この両細石刃核型式は、技術的には全く異なるものであるが、同一ブロックであり同様の腰岳産黒曜石を使用するという共通性から、共伴と考える必要がある。

そして、北側の区域で隣接していた第11・12・13・14ブロックの石器群は、石材的にも他のブロックと異なり、淀姫系と分析された黒曜石が中心の第13ブロックや、日東産黒曜石が圧倒的に多い第12ブロックと第14ブロックなどがみられた。

第13ブロックでは桑ノ木津留系黒曜石を使用し、横打打面形成による福井型細石刃核と、淀姫系黒曜石を使用した泉福寺8層類型の細石刃核が出土している。これらの各ブロックでは腰岳産黒曜石は認められず、第2～5や9ブロックとは形成時期にも違いがあるものと考えられる。

第11・12・14ブロックで出土している日東産と分析された黒曜石は、主としてスクレイパーとして利用されており、細石刃核として使用される桑ノ木津留産黒曜石と石材利用差をもつ。

第7ブロックで石材率が最も高かったのは、他ブロックでほとんど出土していない上牛鼻産黒曜石であり、このブロックでは小型ナイフ形石器が多く出土したと関連する可能性がある。

以上のように、第Ⅲ文化層は小型ナイフ形石器が主体となるナイフ形石器文化終末期から細石刃文化、そして石鏃や土器が主体となる縄文時代草創期までの時期を含む各種の時期のブロックからなるものであり、そのなかで唐津型あるいは石ヶ元型と呼称される削片系の細石刃核が主体となる特別な石器群が確認できた。これらの削片系の楔形細石刃核は、唐津地域のみでの地域性ではなく、福井型とは異なる一定時期を画する型式として認識する必要がある。そして、野岳・休場型細石刃核との共伴例から福井型より古い時期で、野岳・休場型にきわめて近い時期と考えられる。

### 3 細石刃と使用痕について

出土した細石刃には特徴的な使用痕が認められた。これまで細石刃の使用痕に関しては、刃部の微細な剥離や線状痕が主として言及されてきた（芝2007）。ところが仁田尾遺跡出土の細石刃では刃部に摩滅痕があるものが確認され、加えて金属顕微鏡で線状痕も確認するなど、細石刃の使用法や機能についての新たな認識（宮田・寒川2008）が必要となっている。

建山遺跡の細石刃の使用痕観察でも明瞭な線状痕などや変色部が確認できており、細石刃の使用に関して若干の検討を行う。第3ブロックで出土した複数の細石刃は、打面を上にした場合の左側縁には微細な剥離が認められ、その裏面には長軸方向の線状痕が明瞭に残っていた。その線状痕は左半分のみ観察され、著しいものは左半部が変色していた。このことは明らかにシャフトに装着されたことを示しており、そして長軸方向に刃部が運動するような使用方向が推定される。そして、線状痕が認められるほどの使用回数（長期的な使用期間）の存在が想定されることとなる。

ところで、これらは共通して刃部と反対側の縁辺が折れていたことから、同一の装着状況そして取り替え時点での類似した縁辺の破損が推定される。すなわち同一シャフトに装着されていた可能性をも示唆しており、そして第3ブロックで近接した位置で出土したことから、ここで新しい細石刃と付け換えた可能性も考えられる。

また、線状痕が裏面全体の長軸方向に形成されていた例も少なからず確認され、これはシャフトへの装着が縁辺の細い溝に埋め込むシベリア出土例と異なる、平坦的に装着する方法などを新たに考慮する必要があるだろう。すなわち、機能的にはこれまで常識的に言われていたシャフトに装着して槍先に使用していたものではなく、装着した植刃ナイフ的な使用方法と機能が推定されよう。

今回、出土した細石刃の線状痕などの使用痕観察から、南九州における細石刃の機能や使用方法について再考をうながす結果となった。

（宮田栄二）

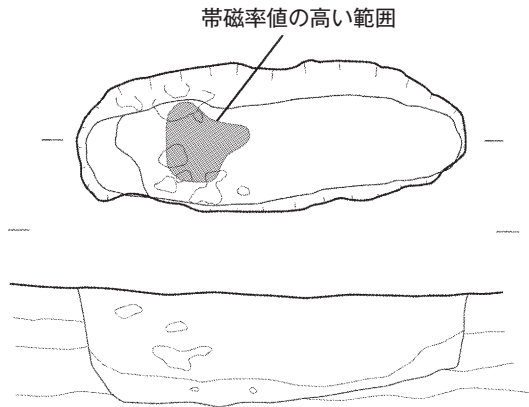
## 遺構について

### 縄文時代早期

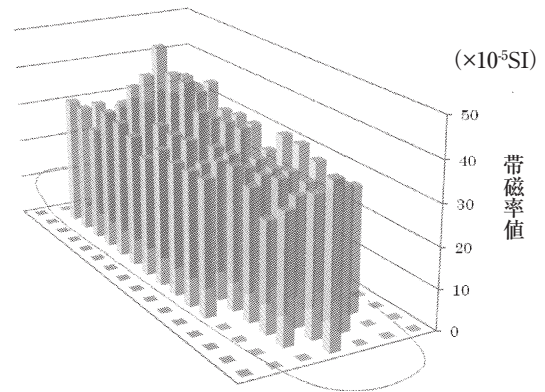
竪穴住居跡2軒，竪穴状遺構2基，連穴土坑1基，土坑10基，集石遺構30基，落とし穴13基，磨石集積1基が検出された。以下に，主な遺構についてまとめた。

南九州における縄文時代早期の連穴土坑は，薩摩火山灰層上面において検出される場面が多く，埋土に遺物が含まれない場合，遺構としての判断材料は検出面での形状や埋土の特徴的なパミスなどの視覚的な情報に頼らざるを得ない。建山遺跡で検出された土坑内部の帯磁率を測定したところ，底面及び側壁の一部において周囲とは異なる高い数値が得られ，遺構内部において帯磁率値の変化する行為が行われたことが推察された。

鹿児島県における連穴土坑（炉穴）は早期前葉を中心に17遺跡，合計84基以上調査されており，その分布域は県本土の中心～北東側（宮崎県側）で比較的多く検出されている。形態は小型土坑と大型土坑が並び，それぞれの土坑が内部でトンネル状に繋がるため橋状に残る部分（ブリッジ）が存在していたと思われるものが多い。ブリッジ下部（煙道部）の手前及びその側壁部付近を中心に焼土・赤色化が認められる事例が多く，本遺跡の連穴土坑はブリッジ部分に該当する薩摩火山灰が崩落し，底面に落ちたと想定される。底面及び側壁の一部に若干の赤色化が認められた。そこで土坑底面，側壁部分の帯磁率を測定し，被熱の可能性を探った。帯磁率計は（株）田中地質コンサルタント製WSL-Cを使用した。



第199図 帯磁率の高い範囲



第200図 帯磁率測定値

結果は，被熱部分における帯磁率値は周囲と比べ約1.3倍高いという結果が出ている（第199図，200図）。被熱による土壌の変化等の視覚的情報以外の情報として活用するため，更にデータの増加を図り，土壌の違いや遺構の配置等との関係を調べ，精度を高めていく必要がある。（永濱功治）次に集石遺構である。礫の集中密度の多少を基に各集石を第47表のように分類した。

第47表 各検出層における礫の集中密度別の集石分類表

検出層	IX層	VIII層	VII層	VIa層	層不明
礫が密 (Ia類・IIa類)	11号	22号	7, 14, 21, 29号	20号	8, 15号
礫が散在 (Ib類・IIb類)	-	2, 5号	1, 3, 4, 6, 9, 10, 12, 13, 16~19, 22, 24, 26~28, 30号	23号	-

この表からわかるように、本遺跡の集石は礫が散在しているものが多いのが特徴である。

落とし穴は、底面中央部に小ピットが検出されたもの13基を認定した。3つの区域内(29～34区, 41～43区, 48・49区)でまとまって検出された。うち、29～34区内と48・49区内の落とし穴をそれぞれ落とし穴群とした。また落とし穴の時期を分析すると、埋土内の桜島P13が、6号と13号を除き密に混入していることから、本遺跡の落とし穴の多くは早期前半の時期に該当すると考えられる。

#### 縄文時代前期～晩期

前・中期の遺構は、竪穴状遺構2基、土坑4基が検出された。2基の竪穴状遺構は全体を確認できなかったが、基本的には円形の平面プランである。また、土坑の性格は不明で、平面プランは4基とも円形であった。後・晩期の遺構は、大型の軽石製品を伴う土坑が1基検出された。

#### 古代～中世

奈良・平安時代の遺構は掘立柱建物跡9棟、焼土跡6基、溝状遺構5条、軽石集積1基、軽石配石1基、ピット30基が検出され、鎌倉時代以降に該当する中世の遺構は木炭土坑1基が検出された。

掘立柱建物跡9棟のうち、軽石集積を伴うものと焼土跡を伴うものがそれぞれ1棟検出された。近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査で、軽石集積を伴う掘立柱建物跡は曾於市末吉町の唐尾遺跡で2棟、焼土跡を伴う掘立柱建物跡は唐尾遺跡で1棟、曾於市大隅町の高古塚遺跡で3棟、曾於市末吉町の関山西遺跡で1棟検出されている。

また、6号掘立柱建物跡は9棟の中で最も大きいですが、建物の構造については今後検討を要する。

(國師洋之)

#### 土器について

##### 縄文時代草創期

I類は桜島起源P14降下火山灰層(薩摩火山灰, 約11,500年B.P.)より下層で出土したもので無文土器である。

##### 縄文時代早期

IIa類は指宿市岩本遺跡出土の円筒形土器を標識とする岩本式土器に比定される。IIb類は熊本県の中原遺跡出土の土器を標識とする中原式土器に比定される。IIc類は鹿児島市吉野町雀ヶ宮前平遺跡出土の土器を標識とする前平B式土器に比定される。

III類は鹿児島市吉野町雀ヶ宮前平遺跡出土の土器を標識とする前平A式土器に比定される。

IV類は鹿児島市本名町大原遺跡出土の土器を標識とする吉田式土器に比定される。

V類は南九州市知覧町石坂上遺跡出土の土器を標識とする石坂式土器に比定される。

VI類はバケツ形の器形で、VIa類は西之表市下剥峰遺跡出土の土器を標識とする下剥峰タイプに比定される。VIb類は霧島市溝辺町桑ノ丸遺跡出土の土器を標識とする桑ノ丸タイプに比定される。

VII類は撚糸文系の文様をもつもので、VIIa類は霧島市溝辺町石峰遺跡出土の土器を標識とする変形撚糸文土器に比定される。VIIb類は細い撚糸文で、VIIc類は撚糸文、VIId類は網目状の撚糸文土器である。

VIII類は押型文を施した白坂・手向山式土器に比定される。VIIIa類は山形押型文、VIIIb類は山形押型文と貝殻腹縁刺突文を施したものである。VIIIc類は楕円及び穀粒押型文を施しているものである。VIIId類は格子目状の押型文、VIIIe類は同心円文の押型文を施している。

IX類は沈線を施し、X類は微隆起突帯を貼り付けた白坂・手向山式土器に比定される。

XI類は塞ノ神式A式土器に比定している。XIa類は撚糸文をもつ塞ノ神A式土器で、XIb類は塞ノ神A式土器の無文タイプと考えられる。

XII類は塞ノ神B式土器に比定している。XIIa類は貝殻刺突文をもつ塞ノ神B式土器で、XIIb類は塞ノ神B式土器の無文タイプと考えられる。

XIII類は貝殻条痕で文様を施した鹿児島市本城町小山遺跡や宮崎県の右京西遺跡出土の土器を標識とするタイプに比定する。

#### 縄文時代前期

XIV類は尖底土器及び丸底土器で、器面を貝殻条痕で施したもので、轟A式土器に比定される。

XV類は器面に隆起線文を施した轟B式土器に比定される。

XVI類は器面を細い沈線で文様を施した曾畑式土器に比定される。

#### 縄文時代中期

XVII類は沈線と突帯貼付文と撚糸文で構成される岡山県の船元遺跡出土の土器を標識とする船元Ⅲ式土器として分類した。

XVIII類は貝殻条痕と突帯貼付文を施した春日式土器の範疇に含まれる。

XIX類は口縁部が肥厚する霧島市横川町中尾田遺跡出土のⅢ層Ⅲ類土器を標識とする。

XXa類は凹線や沈線を施す阿高式土器に、XXb類は凹線文の土器であるが器形等で志布志市中原遺跡出土の土器を標識とするタイプに類似している。

#### 縄文時代後期

XXI類は貝殻刺突文と沈線の組み合わせの文様で岩崎上層式土器に比定される。

XXII類は2本の平行沈線文の文様をもつ土器で指宿式土器に比定される。

XXIII類は鐘ヶ崎式土器で、XXIV類は前類が疑似縄文化した土器である。XXV類は曾於市末吉町中岳洞窟出土の土器を標識とするタイプに比定される。XXVI類はタイプ不明としておきたい。

XXVII類は屋久島町一湊松山遺跡出土の土器を標識とするタイプに比定される。XXVIII類は曾於市丸尾遺跡出土の土器を標識とするタイプに比定される。XXIX類は器形が西平式土器に類似するが形式としては不明としたい。XXX類は口縁部が三万田式土器に類似するが形式としては不明としたい。

#### 縄文時代晩期

XXXIa～e類に分類され、深鉢、浅鉢、ボウル状の鉢がみられる。これらは黒川式土器の範疇に比定できる。

#### 弥生時代・古墳時代

弥生時代前期の甕形土器と古墳時代前期から中期の壺形土器が出土している。

#### 奈良・平安時代

9世紀前後の甕形土器、坏、埴、鉢が出土している。この中に、墨書土器や線刻された土器も含まれる。また、焼塩土器も出土している。

#### 鎌倉時代以降

糸切り底の坏底部が出土している。

以上、土器に関してのまとめである。本遺跡の土器の特徴は2つ考えられる。

第1に草創期の土器が細石刃文化の包含層で出土したことである。同一包含層中で出土した事例は少ないが、細石刃文化と土器共伴出土事例は鹿児島市加治屋園遺跡で大量の細石刃文化の石器と100点以上の土器が同一包含層に共伴して出土した例もあるので、今後の調査の事例が増えることがあれば土器の発生についての指標になる遺跡と思われる。

第2に白坂・手向山式土器、通称「手向山式土器」が多く出土していることである。この型式は押型文文化の範疇である事で知られていたが、今までセットとして出土した遺跡は少なく、本遺跡では押型文を中心に、沈線文、突帯文が組み合わされて施文されていることが確認された。器形としては変形捺糸文の流れをくむ可能性が強いことも考えられる。(彌榮久志)

### 縄文時代の石器について

本遺跡における縄文時代の石器組成については、石鏃が最も多いという特徴が見られる。分布については、後・晩期に石鏃の製作が行われたと考えられるブロックが1基認められるが、他は散在している状況である。以下に石器組成を示す。(出土率は小数第2位を四捨五入した。)

第48表 縄文時代早期 (Ⅷ～Ⅵa層出土) 石器組成表

器種	石鏃	石匙	スクレイパー	トロトロ石器	石斧	磨石・敲石	石皿	計
出土数	25	11	17	1	6	24	13	97
出土率	25.8%	11.3%	17.5%	1.0%	6.2%	24.7%	13.4%	

第49表 縄文時代前・中期 (Ⅴa層出土) 石器組成表

器種	石鏃	石匙	スクレイパー	磨石・敲石	計
出土数	8	1	2	2	14
出土率	57.1%	7.1%	21.4%	14.3%	

第50表 縄文時代後・晩期 (Ⅳa, Ⅳb層出土) 石器組成表

器種	石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	石斧	磨石・敲石	石皿	その他	計
出土数	33	3	5	4	7	9	3	4	68
出土率	48.5%	4.4%	7.4%	5.9%	10.3%	13.2%	4.4%	5.9%	

(木内敏生)

### 【参考文献・引用文献】

- 岡本東三 (2002) 「九州島の細石器文化と神子柴文化」『泉福寺洞穴研究編』
- 小畑弘巳 (1987) 「西南日本の楔形石核とその系譜について」『東アジアの考古と歴史』
- 〃 (2005) 「削片系細石刃技法の分布圏と日本列島」『考古学ジャーナル』No.527
- 芝康次郎 (2007) 「非削片系細石刃石器群における行動論的考察」『阿蘇における旧石器文化の研究』
- 宮田栄二 (2004) 「九州地方－九州細石刃石器群の東西対極構造と集団」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』
- 〃 (2006) 「九州東南部の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』同成社
- 新東晃一 (1997) 「縄文時代早期の炉穴の復元」『南九州縄文通信』No.11
- 〃 (2005) 「九州の連穴土坑の再検討－南九州の初期縄文文化を代表する遺構について－」『南九州縄文通信』No.16
- 町田洋・新井房夫 (2003) 「新編火山灰アトラス」東京大学出版会
- 森永速夫 (2007) 「土壌・岩石の磁気を利用した考古科学－被熱遺構探査」『地球電磁気・地球惑星圏学会第122』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター (2008) 「関山遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書 (126)
- 〃 「唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書 (127)



## 建山遺跡の遺構内出土炭化物及び出土土器付着炭化物の自然科学分析（放射性炭素年代測定）

### I 「株式会社 パレオ・ラボ」による報告（一部抜粋）

#### 1 はじめに

鹿児島県に位置する建山遺跡から検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtadidze, Jorjoliani, 測定は伊藤、丹生、小林が行い、報告文は伊藤、中村が作成した。

#### 2 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表51のとおりである。

第51表 測定試料及び処理

報告書図番号	測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
挿図番号 第131図 図番号 223	PLD-11047	遺跡名：建山遺跡 調査区：F-39区 試料No.：3 その他：地点No.20071ほか	試料の種類：粉状の炭化物 (土器付着?) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス
挿図番号 第82図	PLD-11048	遺跡名：建山遺跡 調査区：F-41区 遺構：逆茂木 試料No.：4	試料の種類：炭化材(小片4点) 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸:1.2N) サルフィックス

### 3 結果

放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果は表52のとおりである。

第52表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

報告書図番号	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
挿図番号 第131図 図番号 223	PLD-11047 試料No.：3	-26.87 $\pm 0.14$	4053 $\pm 28$	4055 $\pm 30$	2622BC (44.1%) 2566BC 2525BC (24.1%) 2496BC	2836BC (5.3%) 2816BC 2666BC (90.1%) 2480BC
挿図番号 第82図	PLD-11048 試料No.：4	-24.39 $\pm 0.13$	22198 $\pm 87$	22200 $\pm 90$	較正曲線範囲外	較正曲線範囲外

### 4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。2 $\sigma$ 暦年代範囲（95.4%の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する）に着目して結果を整理する。年代値と考古学編年との対応について、縄文時代はキーリ・武藤1982と小林2008、弥生時代は春成・今村編2004、西本編2006、西本編2007を参照した。

建山遺跡の試料No.3 (PLD-11047) は、2836-2816calBC (5.3%) および2666-2480calBC (90.1%) で、縄文時代中期後葉に相当する。試料No.4 (PLD-11048) は年代値が古く較正曲線範囲外であったため $^{14}\text{C}$ 年代のみ示した。これは旧石器時代に相当する。

## II 「株式会社 加速器分析研究所」による報告（一部抜粋）

### 1 測定対象試料

測定試料は、F-50区のXVI層検出の礫群内から出土した炭化物ほか計11点である。

### 2 化学処理工程（略）

### 3 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（ $\text{HOx II}$ ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も同時に行う。

### 4 算出方法（一部略）

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- (2) BP年代値は、過去において大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る $^{14}\text{C}$ 年代である。
- (3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 $\chi^2$ 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- (4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

### 5 測定結果

放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果は表53のとおりである。

第53表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

報告書 図番号	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
		Age (yrBP)	pMC (%)			
挿図番号 第55図	IAAA-62041	8,960 ± 40	32.77 ± 0.17	8,961 ± 40	8270BC-8190BC (42.2%)	8280BC-8160BC (52.4%) 8120BC-7960BC (43.0%)
					8110BC-8090BC (6.6%)	
					8080BC-8060BC (2.2%)	
					8040BC-7990BC (17.2%)	
挿図番号 第57図	IAAA-62042	8,950 ± 40	32.82 ± 0.16	8,949 ± 40	8250BC-8180BC (35.0%)	8280BC-8160BC (43.5%) 8140BC-7960BC (51.9%)
					8120BC-8090BC (8.3%)	
					8080BC-8060BC (4.1%)	
					8050BC-7990BC (20.8%)	
挿図番号 第84図	IAAA-62043	8,920 ± 50	32.94 ± 0.2	8,919 ± 50	8230BC-8160BC (21.8%) 8120BC-7980BC (46.4%)	8280BC-7930BC (95.4%)
挿図番号 第78図	IAAA-62044	8,780 ± 40	33.53 ± 0.17	8,777 ± 40	7940BC-7750BC (68.2%)	8200BC-8100BC (2.6%) 8000BC-7650BC (92.8%)
						IAAA-62045
挿図番号 第12図	IAAA-62469	2,3540 ± 90	5.34 ± 0.06	23,539 ± 84	21680BC-21500BC (68.2%)	21770BC-21420BC (95.4%)
挿図番号 第176図	IAAA-62470	3,490 ± 30	64.78 ± 0.25	3,487 ± 30	1880BC-1750BC (68.2%)	1900BC-1730BC (95.4%)
挿図番号 第181図	IAAA-62471	1,250 ± 30	85.56 ± 0.32	1,253 ± 30	685AD-780AD (68.2%)	670AD-870AD (95.4%)
挿図番号 第100図 図番号 81	IAAA-70406	8,080 ± 40	36.56 ± 0.19	8,082 ± 41	7140BC-7030BC (68.2%)	7180BC-6910BC (87.9%) 6890BC-6820BC (7.5%)
					IAAA-70407	8,110 ± 40
挿図番号 第104図 図番号 104	IAAA-70407	8,110 ± 40	36.44 ± 0.19	8,108 ± 42	1270AD-1300AD (57.1%)	1250AD-1320AD (72.7%)
					IAAA-70823	700 ± 30

## 第V章 西原段I遺跡

### 第1節 発掘調査の方法及び層位

調査区域は、10m×10mのグリッドを設定して調査を行った。グリッドの設定は、工事用基準杭 S T A 262+60と S T A 262+80の2点を結ぶ直線を基準軸とし、西側から東側に向かってA・B・C・・・南側から北側に向かって1・2・3・・・とし、A-1区、B-2区のように呼称した。

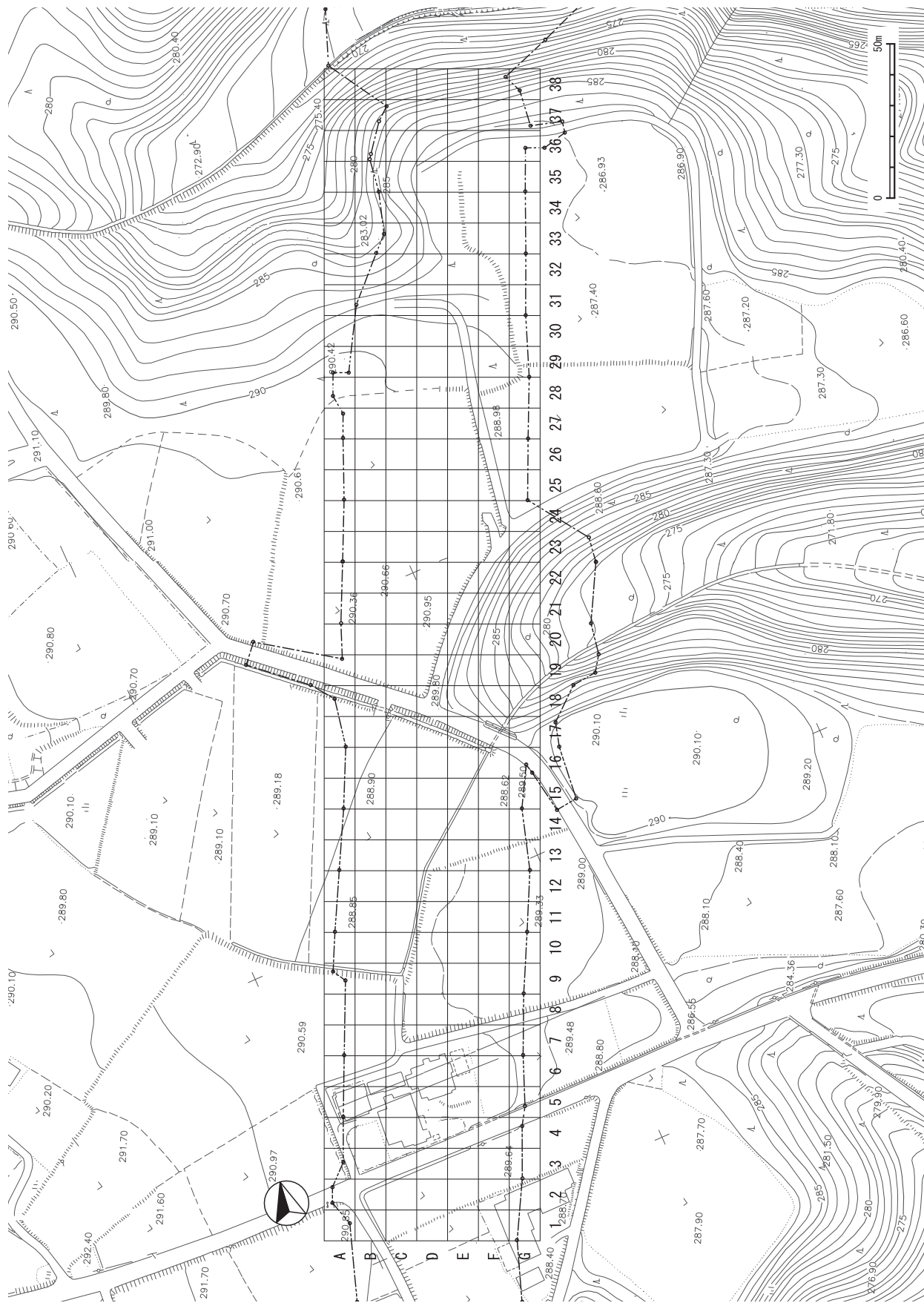
調査区が、過密植栽及び市道で分断されるため、C～G-8区～16区までをA地点、C～G-24区～36区までをB地点、18年度の試掘調査の結果、遺跡範囲を拡張したB～G-1区～7区をC地点として調査を行った。

A地点は、重機で表土剥ぎを行ったが圃場整備による天地返しのため地表から3m近くまで攪乱を受けておりⅧ層上面から層が残っていることが判明した。Ⅷ層上面からⅨ層上面まで人力で掘り下げ、その後下層確認トレンチを7か所(1T～7T)設定しⅩⅧ層(シラス)上面まで人力で掘り下げ調査を行った。調査の結果、旧石器時代、縄文早期、縄文時代中期～後期の遺構・遺物が確認された。

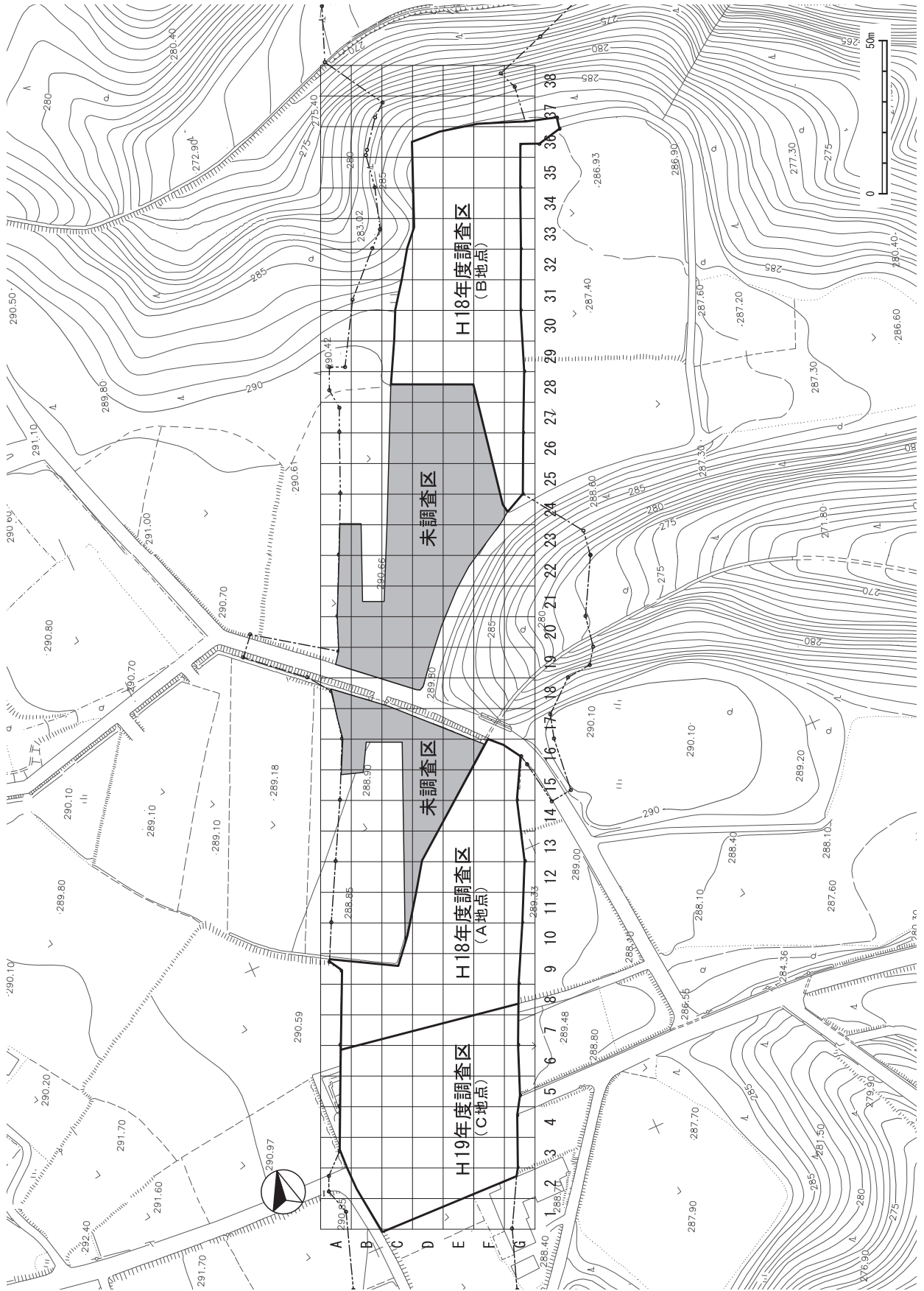
B地点は、調査開始時は畑部分と買収済みの山林部分があったので2班に分かれて調査を始めた。畑部分は、重機で表土剥ぎを行ったところ、A地点と同じく圃場整備による天地返しのため地表から1m近く攪乱されていた。一部Ⅴ・Ⅵ層が残存していた場所もあったが、Ⅶ層からは層が残っていることが判明した。表土を剥いだ後、確認トレンチを4か所(8T～11T)設定し、Ⅸ層上面まで人力で掘り下げた。9・10Tで遺構・遺物が確認されたので、E～G-32～36区にかけて全面調査を行った。調査の結果、旧石器時代の遺構・遺物は確認できなかったが、縄文時代早期の遺構・遺物が確認された。

山林部分は、まず人力で伐採や根起こしをした後、重機でⅢ層上面まで剥ぎ、Ⅲ層上面からⅥ層上面まで人力で掘り下げた。掘り下げ中、C・D-31・32区から北西方向に、E-33～35区から西及び南西方向に、地形が傾斜していることが判明し、特に、D-33・34区付近は傾斜が急になっていることが判明した。そこで、Ⅵ層からの下層確認トレンチを13か所(12T～24T)設定し、ⅩⅧ層上面まで人力で掘り下げ調査を終了した。調査の結果、旧石器時代、縄文時代早期～中期の遺構・遺物は確認されなかったが、縄文時代後期～晩期、古代～中世の遺構・遺物が確認された。

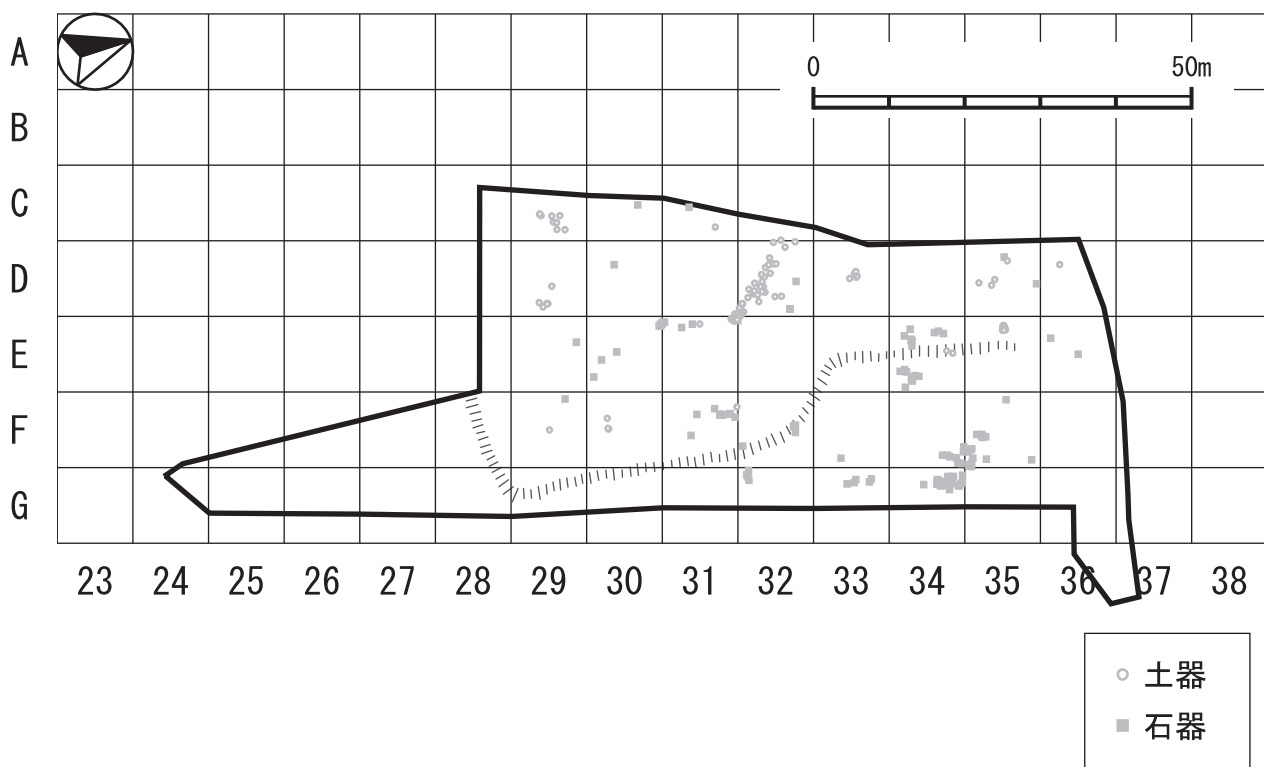
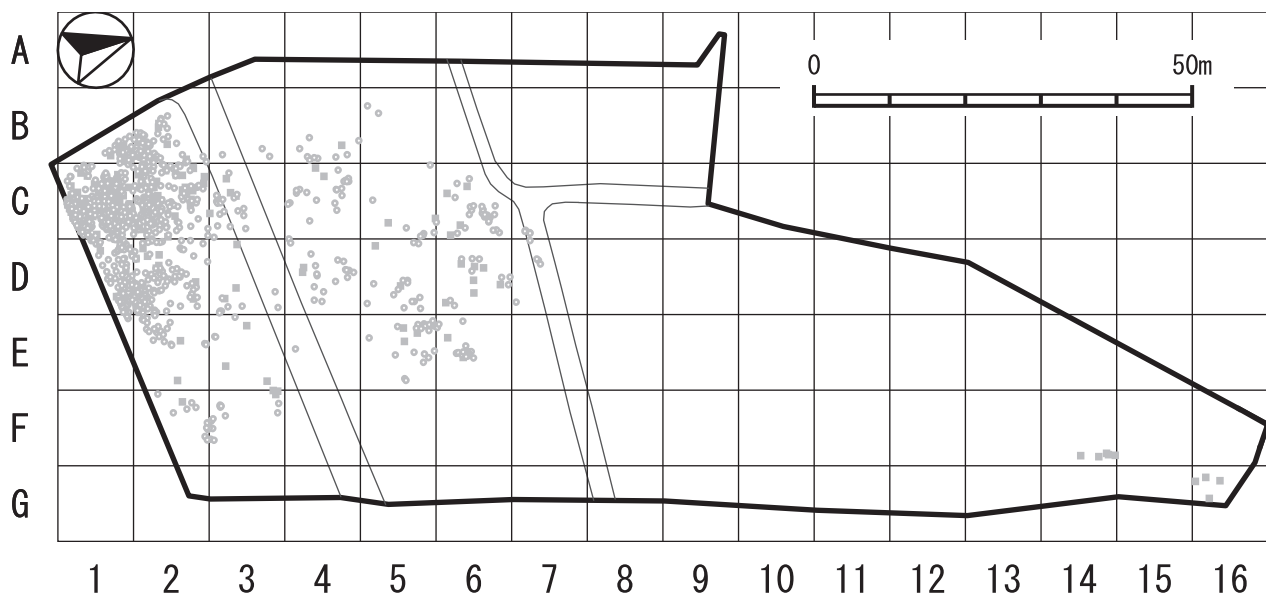
C地点は、平成18年度に試掘トレンチを11か所(A～Kトレンチ)設定し、人力で浅いところはⅢb層、深いところはⅦ層上面まで掘り下げ調査を行った。調査の結果、縄文時代後期～晩期、古代～中世の遺構・遺物が確認されたため、西原段I遺跡の範囲をB～G-1区～7区まで広げ平成19年度調査を行った。重機で表土からⅢ層上面まで剥いだ後、人力でⅥ層上面まで掘り下げた。その後、平成18年度の調査結果から、縄文時代早期以前の遺構・遺物は確認されていないので、確認トレンチを8か所設定しⅨ層上面まで人力で掘り下げた。さらに、8か所の内の3か所は旧石器時代の遺構・遺物を確認するためⅩⅧ層上面まで人力で掘り下げた。調査の結果、旧石器時代、縄文時代早期～中期の遺構・遺物は確認されなかったが、縄文時代後期、縄文時代晩期～弥生時代初頭期の遺物、古代～中世の遺構・遺物が確認された。



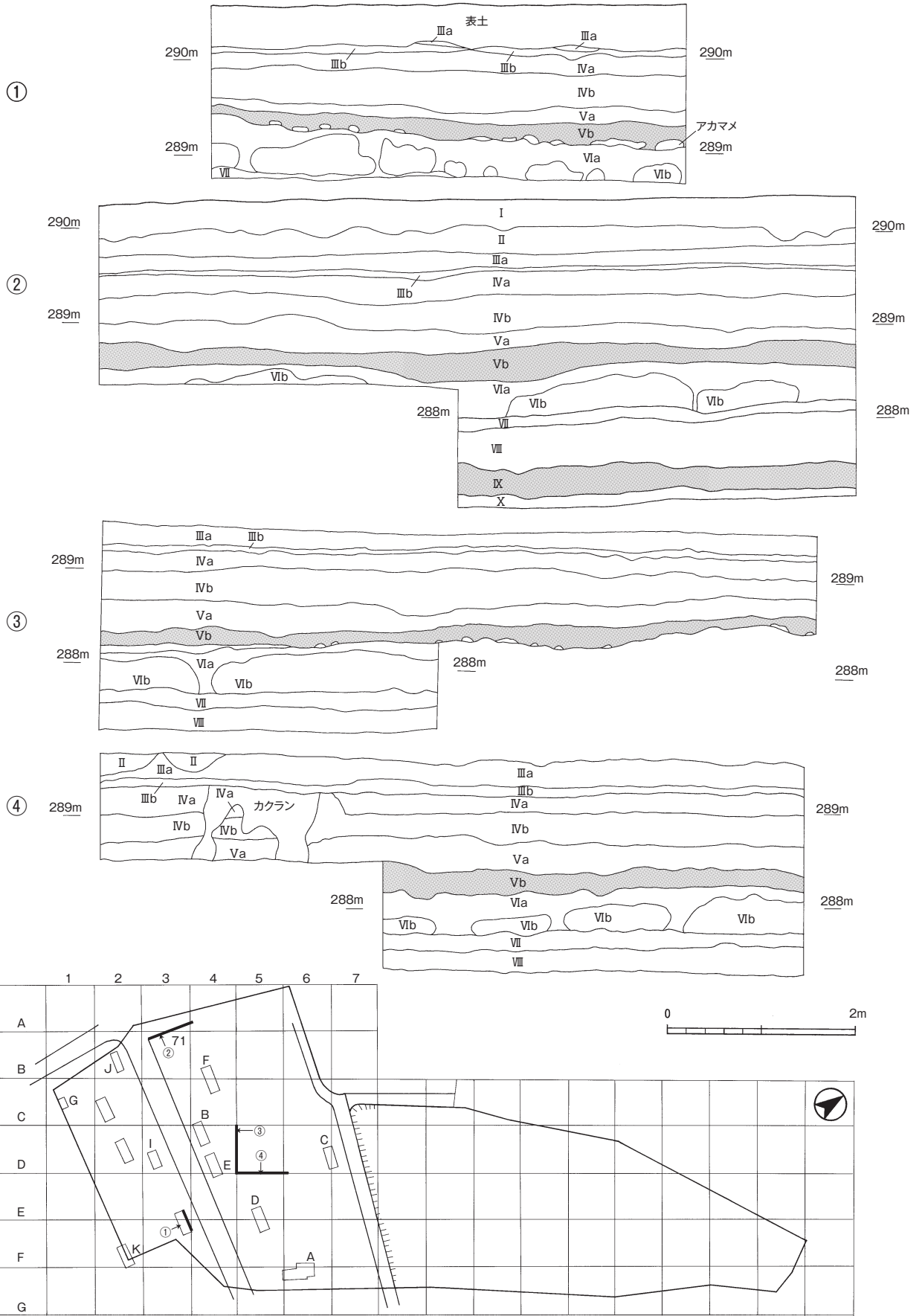
第1図 遺跡周辺地形及びグリッド図



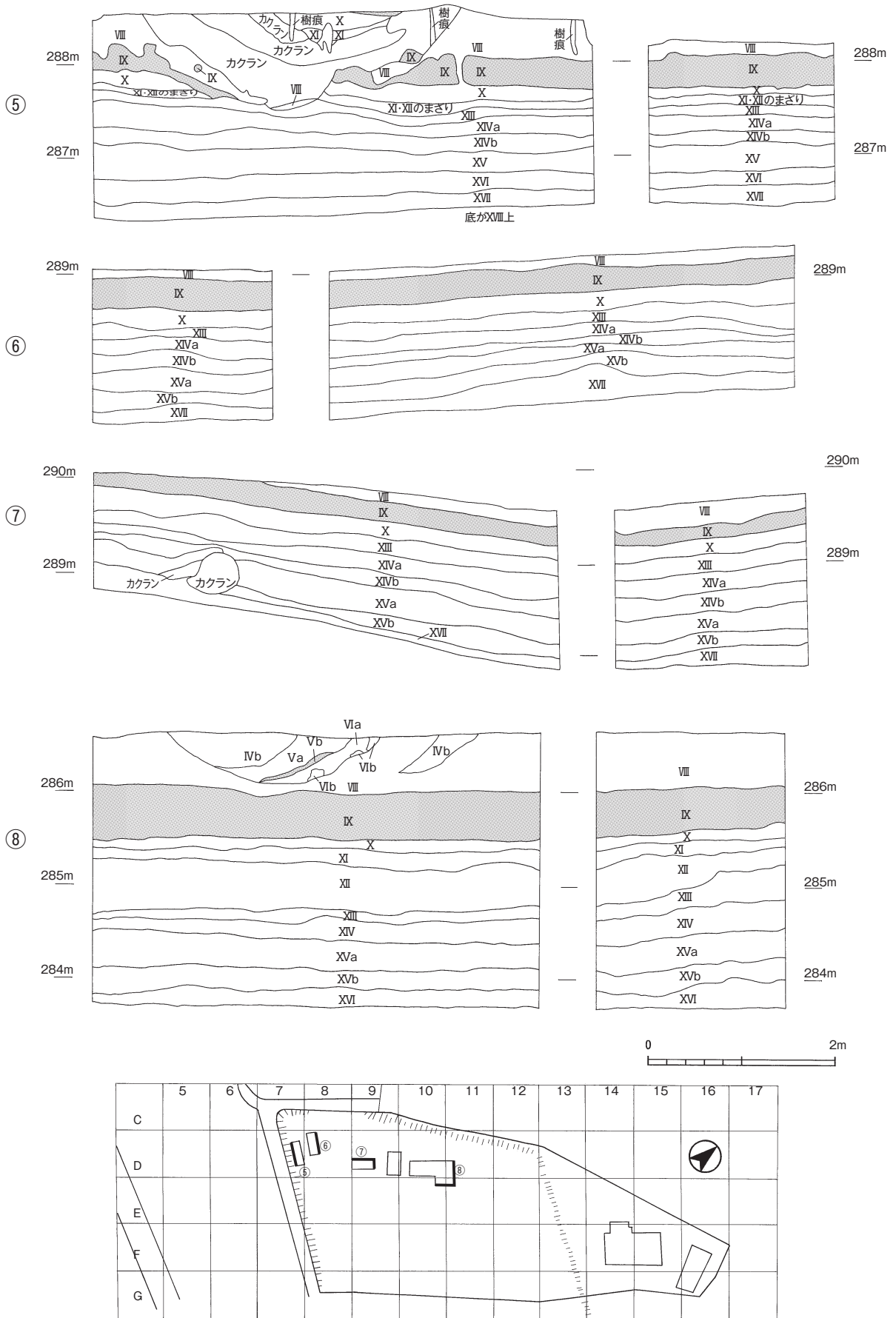
第2図 調査範囲図



第3図 遺物出土状況図

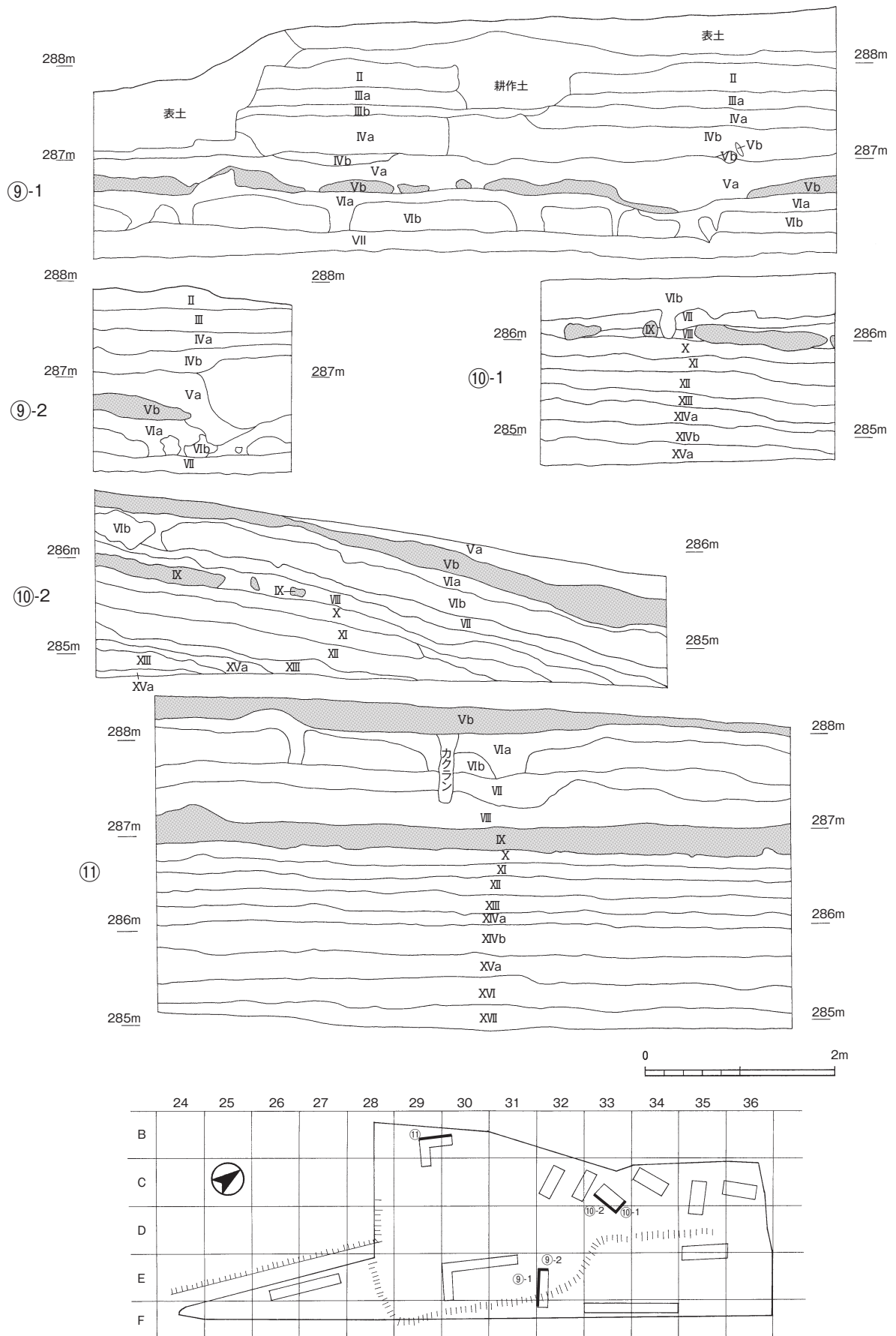


第4図 土層断面図1 (C地点)



第5図 土層断面図2 (A地点)



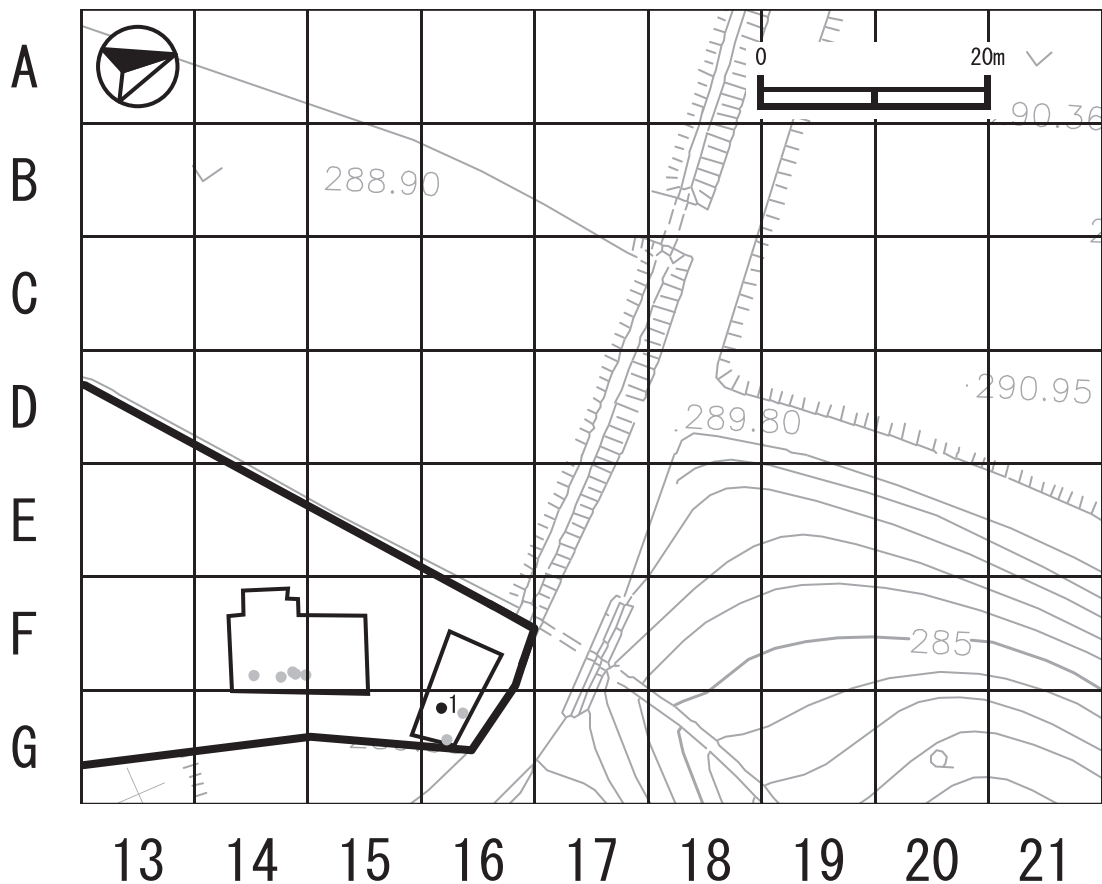


第6図 土層断面図3 (B地点)

## 第2節 旧石器時代の調査成果

### 第1項 調査の概要

旧石器時代の遺物が確認されたのは、平成18年度調査範囲のF-16区7トレンチ及び7トレンチ拡張部分のみである。F-16区は、調査区南東側から北西側にかけて入る谷の谷頭に当たる部分である。XIII層よりハンマーストーン1点、XVII層から剥片が1点出土している。図化したのはXIII層出土の1点のみである。



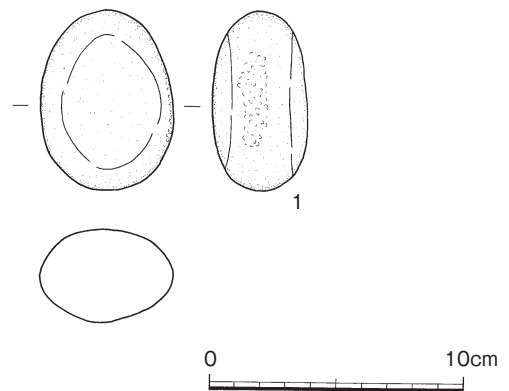
第7図 旧石器遺物出土状況図

### 第2項 遺物（第8図 1）

XIII層出土遺物は1点のみである。

1は河原から採取してきたと思われる円礫を利用したもので、側面にわずかに敲打痕が確認されることからハンマーストーンであると考えられる。

最大長70mm、最大幅51mm、最大厚38mm、重さ204.5gを測る。



第8図 旧石器出土遺物

### 第3節 縄文時代の調査成果

#### 第1項 調査の概要

縄文時代早期の包含層はアカホヤ火山灰層であるVb層と薩摩火山灰であるⅨ層との間のVI～VIII層である。

遺構・遺物はE～G-15・16区，D～F-30～35区を中心に分布している。

縄文時代前期～後期の包含層は，霧島御池火山灰層の二次堆積層であるIVa層とアカホヤ火山灰層の二次堆積層のIVa層・Va層である。圃場整備による天地返しのため削平されており，遺物が確認されたのは，D～F-30区～34区のB地点の一部のみである。

縄文時代晩期の包含層は，Ⅲb・IVa層である。包含層が残存しているのは，宅地部分であったため，圃場整備による天地返しを受けていないB～F-1～7区のC地点のみである。

#### 第2項 遺構

##### 1 縄文時代早期

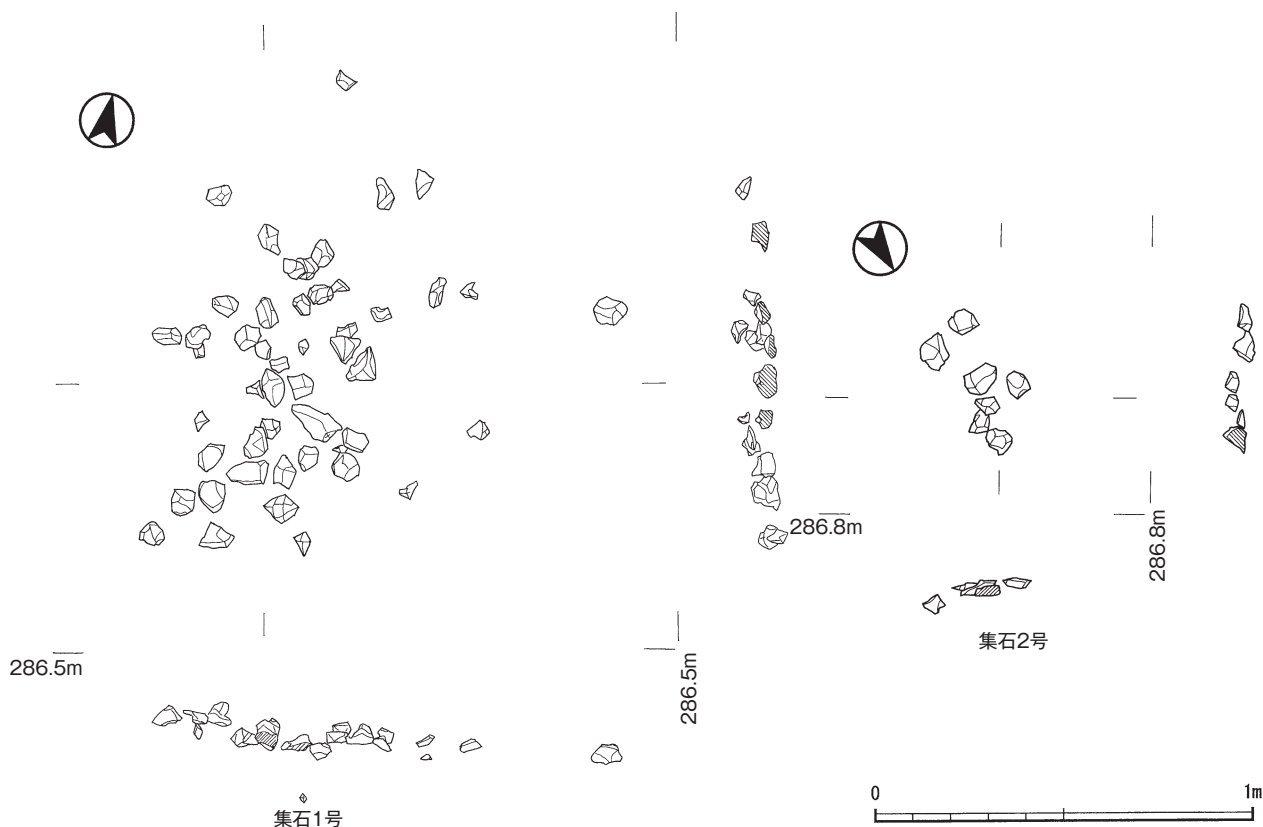
###### (1) 集石

###### 集石1号（第9図左）

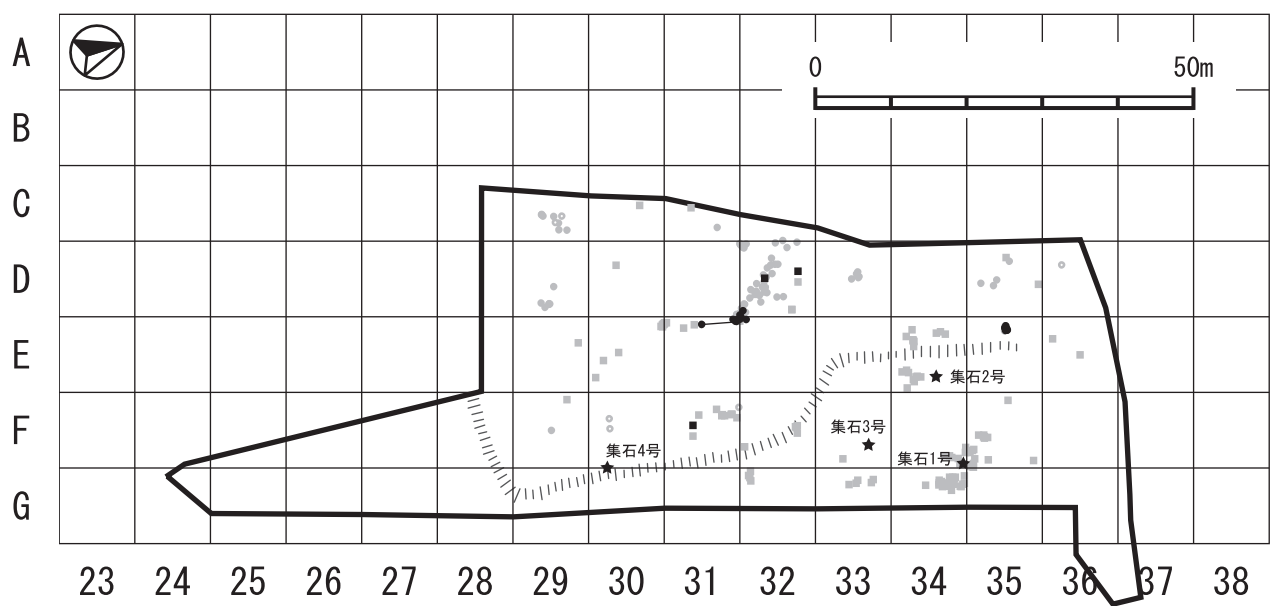
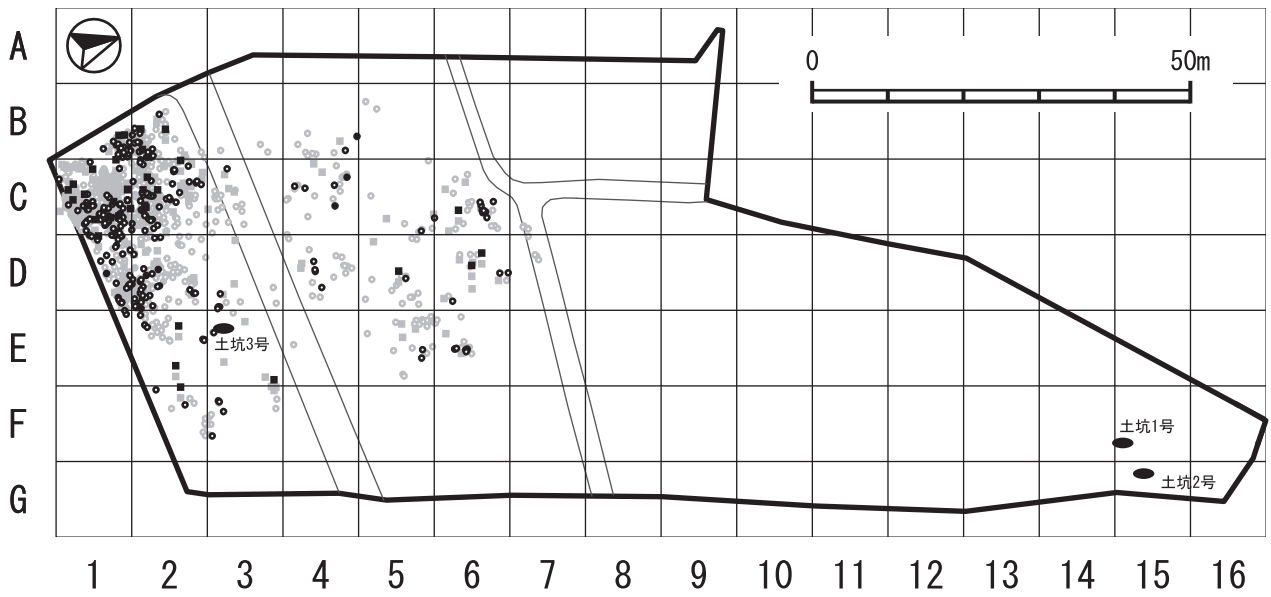
F-34区，VIII層上面で検出された。こぶし大前後の角礫合計49個の石を確認した。被熱により赤化したり，破碎した石が多く見られる。堀込みは確認されなかった。石材は安山岩が中心であるが，頁岩も4個確認された。

###### 集石2号（第9図右）

E-34区，VIII層上面で検出された。7個の石を確認した。堀込みは確認されなかった。石材は安山岩である。



第9図 縄文時代早期集石1

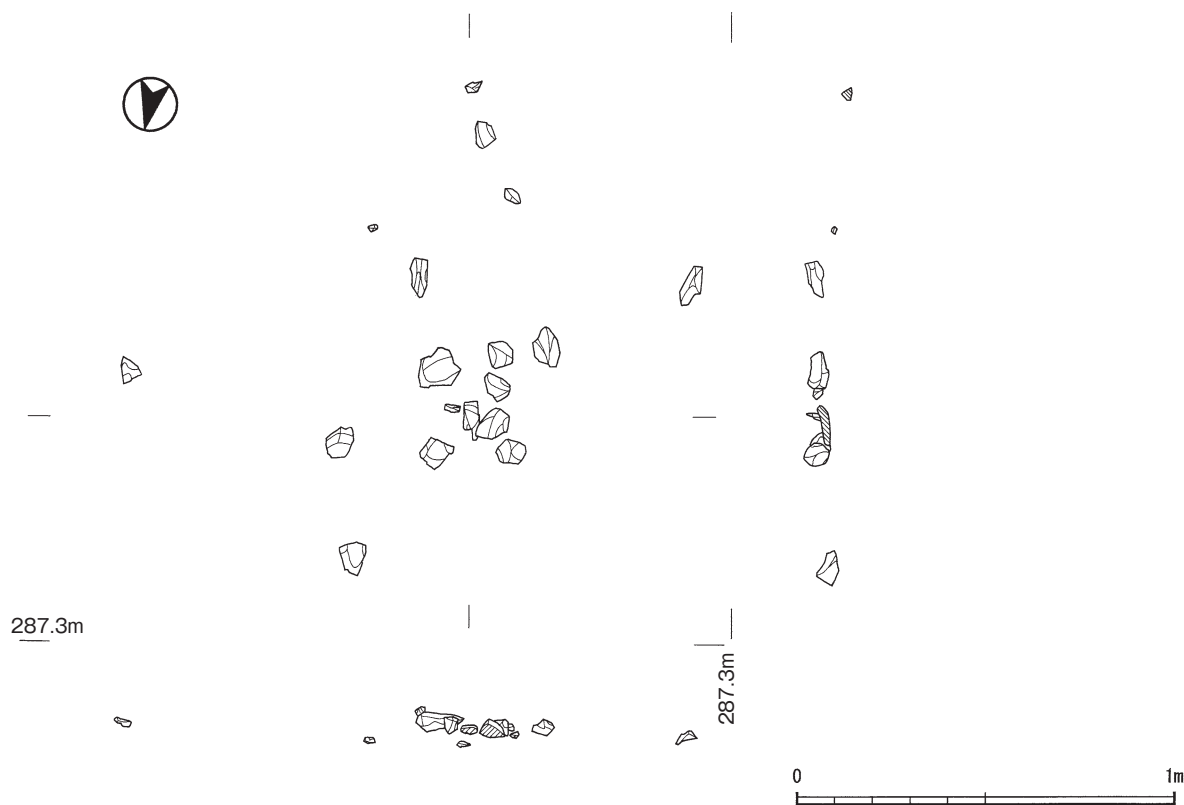


- 中後期土器
- 晩期土器
- 石器
- (グレーのドットは非掲載遺物)

第10図 縄文時代遺物出土状況図

### 集石3号（第11図）

F-33区, VIII層上面で検出された。12cm程度のやや大きめの角礫を含み合計18個の石を確認した。堀込みは確認されなかった。石材は安山岩が中心であるが, 熱で破碎した頁岩も確認できた。軽石も1個確認された。



第11図 縄文時代早期集石2

## 2 縄文時代前期～後期

### (1) 集石

#### 集石4号（第12図）

F-30区, IVa層で検出された。34個の石を確認した。被熱により赤化したり, ひび割れたりした石もあった。堀込みは確認されなかった。石材は安山岩が中心であるが, 砂岩, 凝灰岩, 頁岩, 軽石なども確認された。

### (2) 土坑

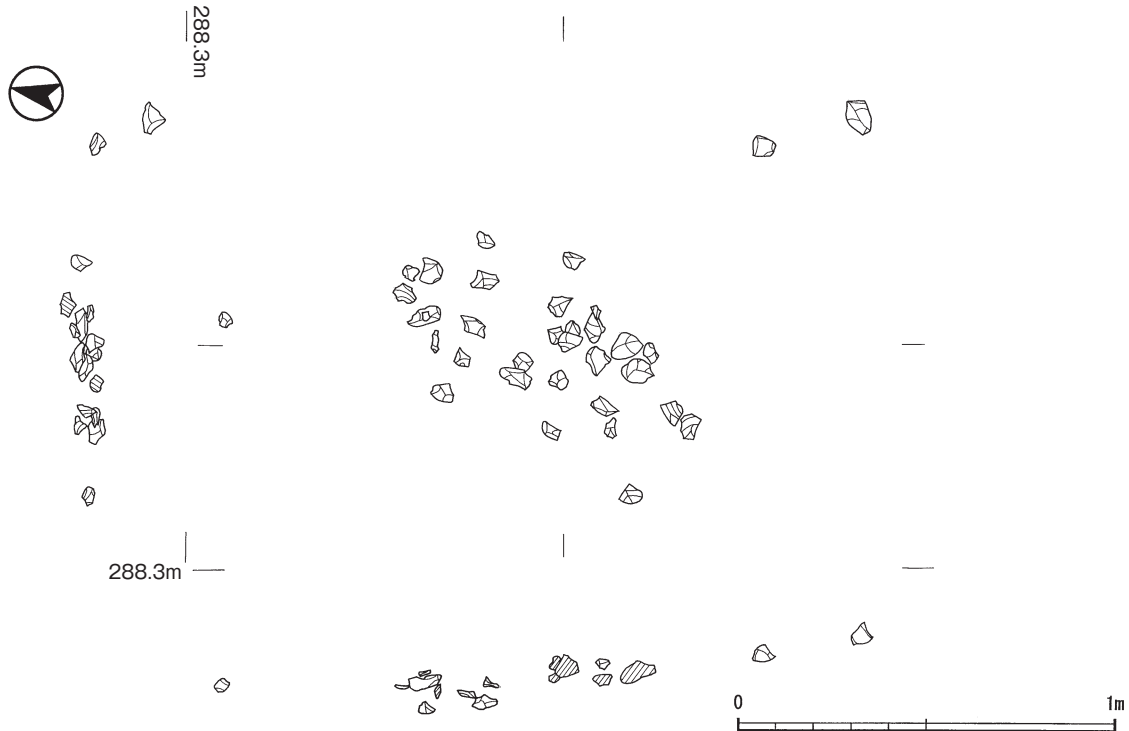
#### 土坑1号（第13図左）

F-15区, VIII層上面で検出された。平面形は, 直径約80cmの円形で, 検出面からの深さは, 約40cmを計り, X層のチョコ層上面まで掘り込んでいる。底面形も直径約50cmの円形を呈する。埋土はIV層にVIb層のP11のパミスが混じった土である。

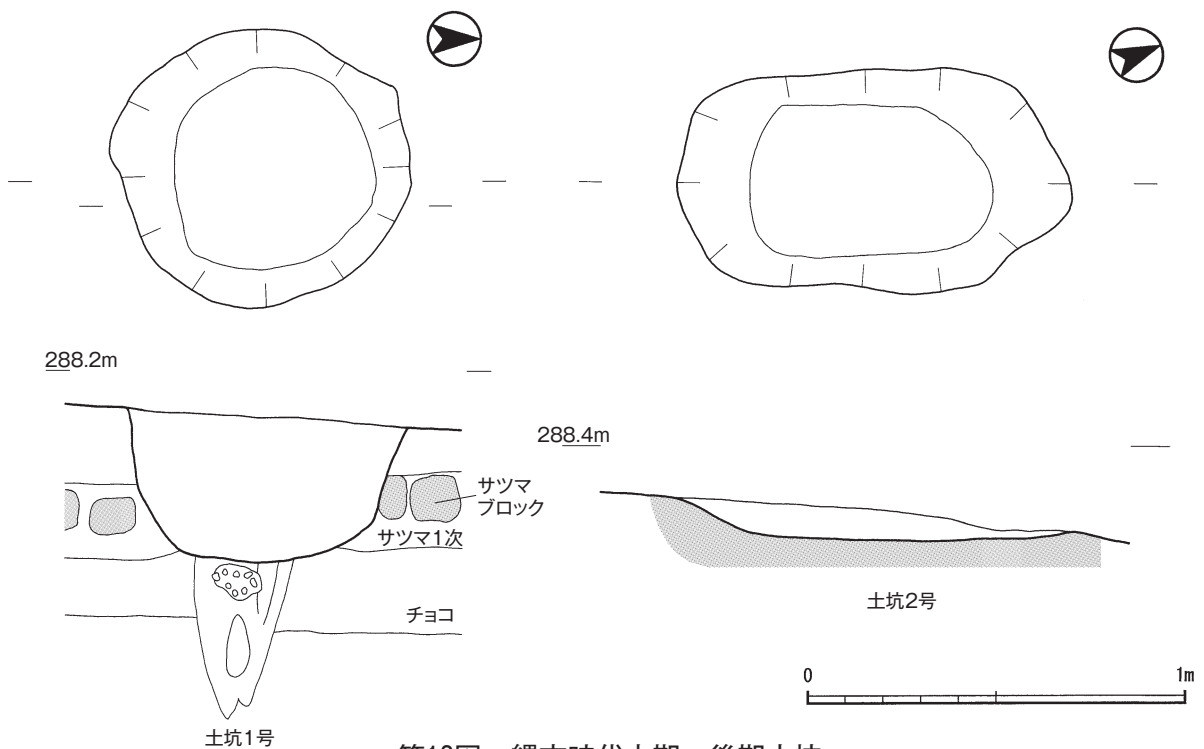
落とし穴である可能性も考え, 断ち割り調査を行ったところ, 樹痕と思われるしまりのないX層混じりの黒色土の部分と, XIII層と思われるブロックが確認された。X層中に落とし穴の底面に見られる逆茂木の跡のような部分も一部確認できたが, 逆茂木痕であるとは断定できなかった。

土坑2号（第13図右）

G-15区、Ⅷ層面で検出された。平面形は、長径約100cm、短径60cmの楕円形で、検出面からの深さは、圃場整備の影響で表土の下がⅧ層～Ⅸ層上面まで削平を受けている場所であるため、約10cmであったが、検出時のプランははっきりと確認できた。埋土は、Ⅳa層の御池火山灰混じりの黄褐色の単一層である。逆茂木痕は確認されなかった。



第12図 縄文時代中期～後期集石

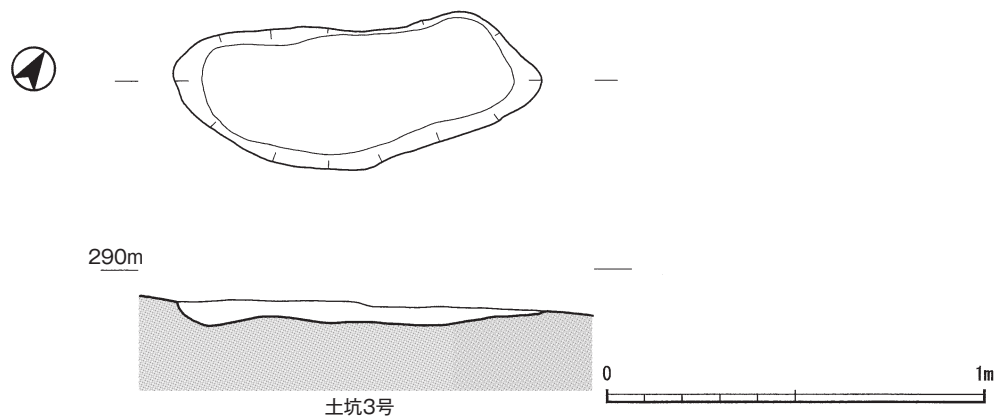


第13図 縄文時代中期～後期土坑

### 土坑3号（第14図）

E - 3区, IV層面で検出された。平面形は, 長径約100cm, 短径40cmの楕円形で, 検出面からの深さは, 圃場整備の影響でIV層あたりまで削平を受けているため, 6~8cm程度である。

埋土は, 炭化物を含む黒褐色土である。



第14図 縄文時代晩期土坑

## 第3項 遺物

### 縄文時代の土器

縄文時代の土器は, 中期, 後期, 晩期のものが出土している。1~6類土器は, 縄文時代中期から後期の土器である。出土数は少なく, 出土範囲は削平の影響もあってかなり限られている。接合はできなかったが, 1個体になると思われるものが多い。

圃場整備による削平を受けていないC地点に, 晩期末~弥生時代初頭の土器が数多く出土している。これらの土器は, 縄文時代と弥生時代の並行期の土器のため, どちらの時代の物と明確に区分しにくい時期の物である。そこで, 時代区分は縄文時代の土器として扱うこととし, 深鉢型を呈する土器は, 「深鉢・甕形土器」と呼称することとした。また, 本来は弥生時代として扱うべき壺形土器, 高坏についてもこの項で取り扱うこととした。

#### 1類土器（第15図 2）

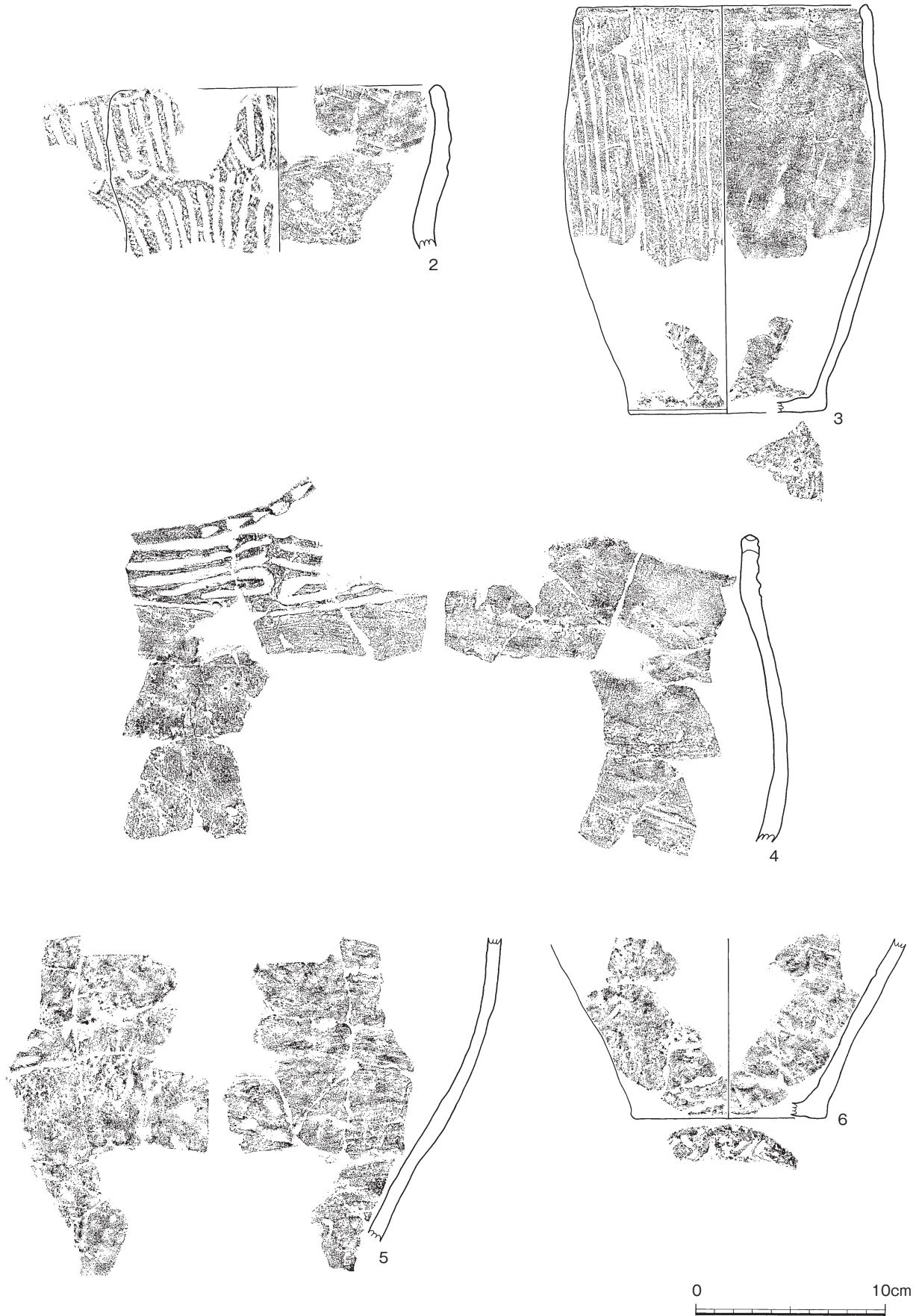
2はE - 6区IVb層から出土した。キャリパー状の器形で, 口唇部を丸く収める。文様は単節縄文を施文後, 口縁部及び頸部から胴部にかけて太めの沈線を縦位に施している。

#### 2類土器（第15図 3）

3はD - 7区IVb層から出土した。砲弾形に近い器形で, 底部は平底である。器壁は6~7mm程度で薄手である。文様は口縁部から底部近くにかけて密に浅い沈線を縦位に施している。胎土に大粒の金雲母がわずかに含まれる。

#### 3類土器（第15図 4~6）

4~6はD - 31区を中心にIV層から出土した。接合はできなかったが同一個体と思われるものである。波状の口縁をもち口唇部に刺突を施す。口縁部付近のみに凹線文が施され胴部以下は無文である。底部には網代圧痕が観察される。



第15図 1・2・3類土器



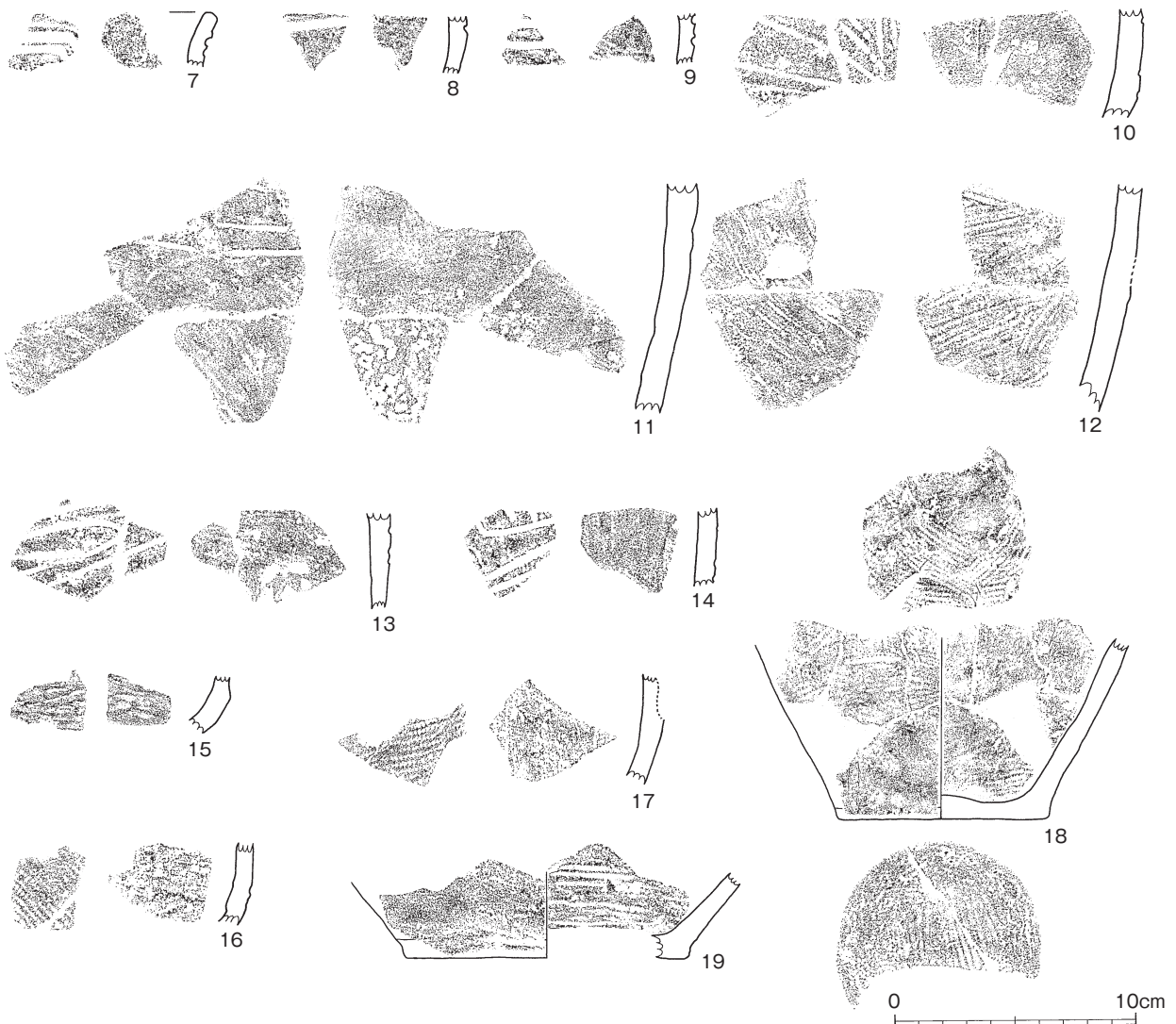
#### 4類土器 (第16図 7~15)

7・8・9は同一個体の可能性が高い。これらの土器は薄手の深鉢である。7は口縁部でやや外反し2本の平行沈線をもつ。8は文様帯の中位で、9は下位にあたると思われる。器面調整は外面が丁寧なナデ調整である。外面の色調は茶褐色で、内面は暗茶褐色である。胎土は金雲母、石英、長石を含み、焼成は良い。

10~14は同一個体の可能性が高い。これらの土器は厚手の深鉢である。13・14は2本の沈線を施した文様帯の中位にあたり10・11は下位にあたる。12は胴部で文様がない部分と思われる。器面調整は内面が外面より丁寧なナデ調整を施している。色調は外面が茶褐色の一部に黒斑点がみられ、内面は暗茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられる。焼成は外面が良くない。15は内外面に条痕がみられる土器である。色調は内外面暗茶褐色である。胎土は前項と同じで、焼成は良い。

#### 5類土器 (第16図 16・17)

16・17は外面に沈線と捺糸文が施されているものである。色調は外面が明茶褐色で、16の内面が暗茶褐色、17が黒色である。胎土は石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。内面の色調はやや異なるが同一個体の可能性が高い。



第16図 4・5・6類土器

## 6類土器 (第16図 18・19)

底部を一括した。18は底部である。器面調整は外面がナデで、内面が貝殻調整痕である。色調は茶褐色である。19は平底の底部からやや外開きに立ち上がる胴部である。器面調整は外面がナデで、内面が貝殻調整痕である。色調は内面底部が黒褐色で、他は茶褐色である。胎土はともに石英、長石、角閃石がみられ、焼成は良い。

## 7類土器

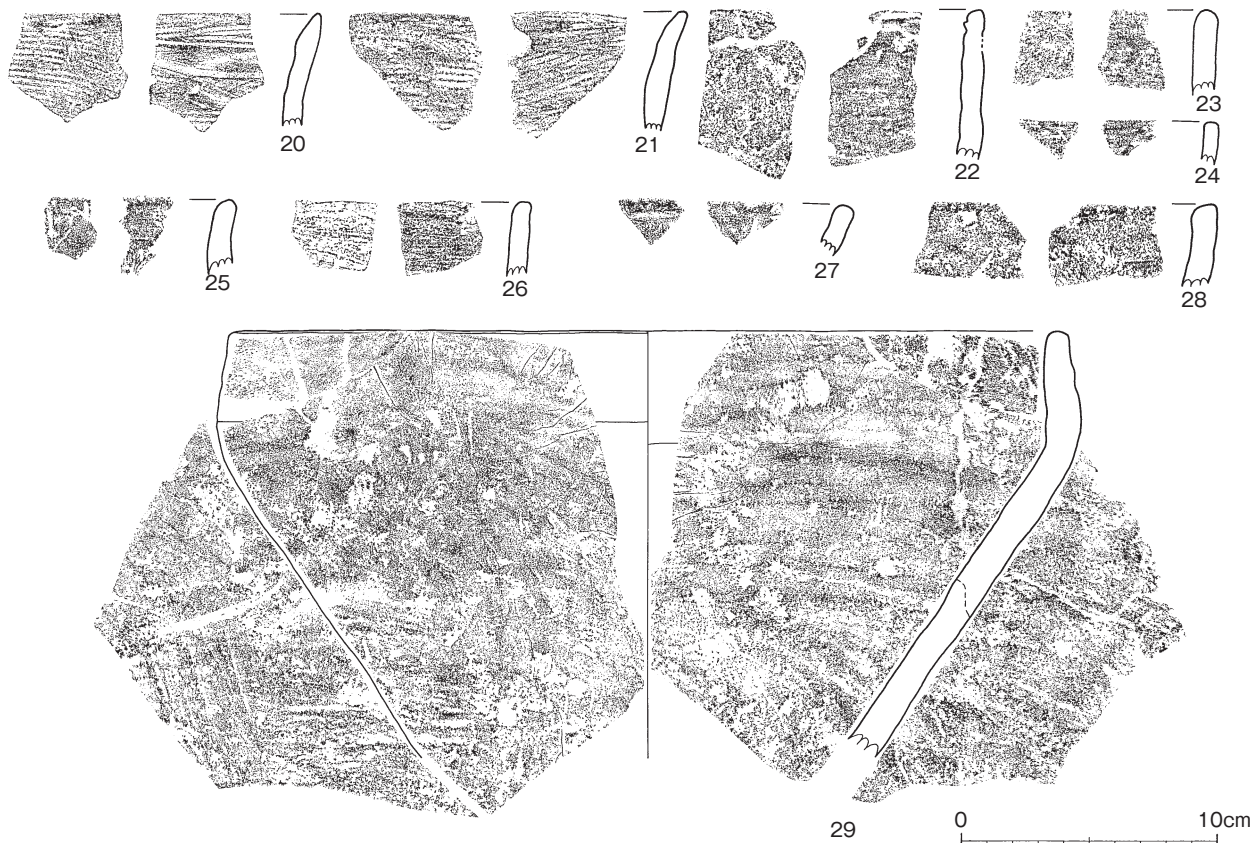
7類土器は、本遺跡の出土遺物の主体を占める一群である。先にも述べたが、縄文時代晩期から弥生期にかけての時期と考えられるため、縄文土器として扱うか、弥生土器として扱うか区別しにくい時期であるが、他に弥生土器が出土していないことから縄文時代晩期の土器として取り扱うこととした。

器形によって、深鉢・甕 (7 a類), 鉢 (7 b類), 浅鉢 (7 c類), 壺 (7 d類), その他 (7 e類) で分類した。

### 7 a-1類 (第17図 20~29)

粗製の「深鉢・甕形土器」で突帯をもたず体部上半での屈曲もないタイプのものである。20~22は口唇部を丸く収め口縁部が、外反もしくは直口するものである。20, 21は内外面に条痕による器面調整がなされている。23~27は小片のため鉢または浅鉢の可能性もあるが、内側の器面調整がやや粗いことからこの類とした。

28・29は突帯をもたず体部上半で内湾して立ち上がるものである。器壁も12~15mmほどあり分厚



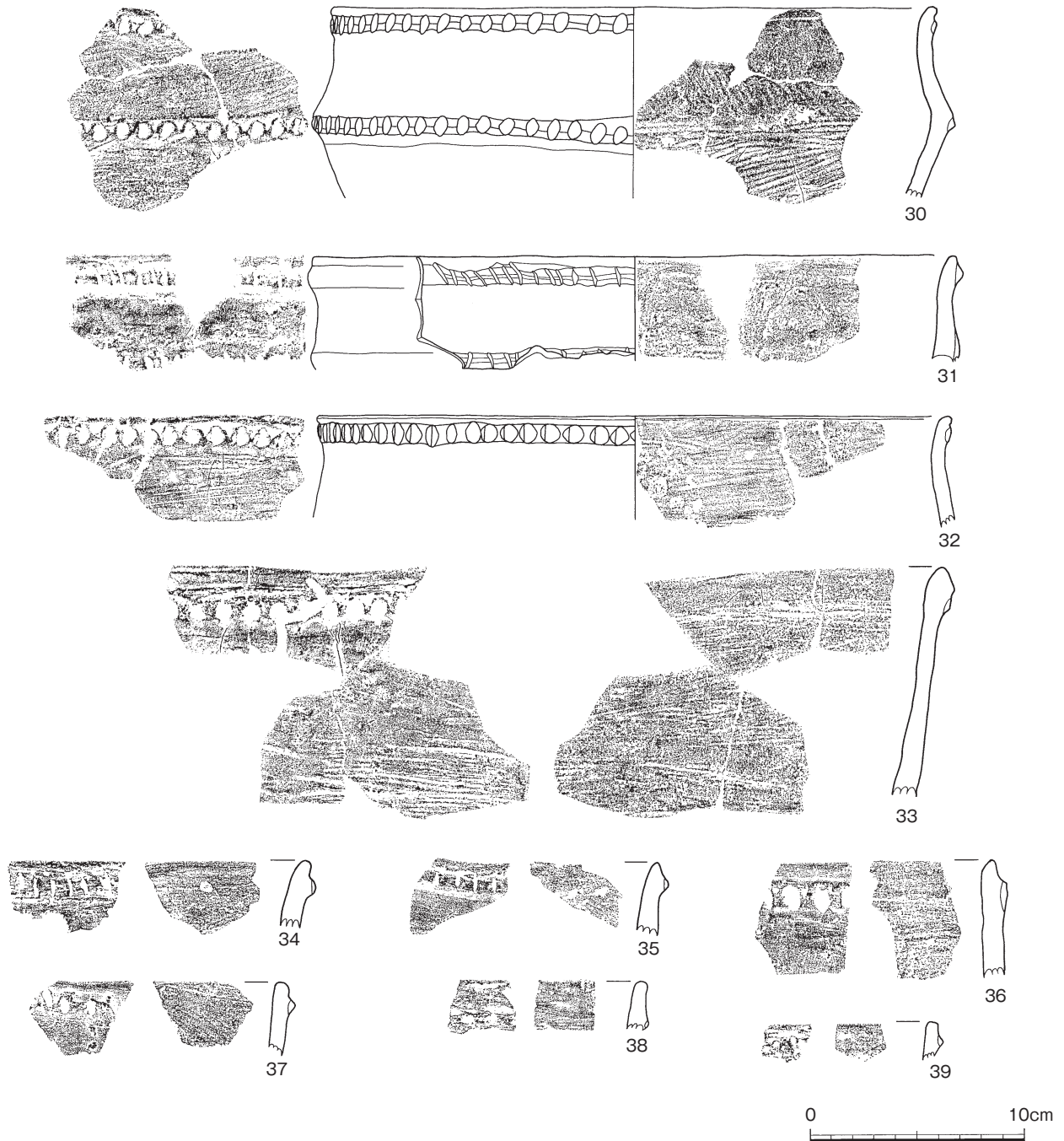
第17図 7 a-1類土器

く、内外面とも非常に粗い。29は胴部に輪積みの跡がはっきりと観察できる。

7 a-2類 (第18図 30~39)

「深鉢・甕形土器」で口唇部より少し下がった位置に横方向の刻みを有する突帯が巡っている。また、口縁部より下部の張り出した部分にも同様な突帯が巡っているものもある。突帯に付される刻目にはいろいろなバリエーションが見られる。

30~32は口縁部の下位にも同様な突帯が巡り、そこを胴部の最大径として内側へ屈曲して底部へと向かっている。口唇端部は丸まっており、口縁部は上端で幾分外反している。30・32は指頭状刻目突帯で31はヘラ状工具による刻目突帯である。器面は両面とも貝殻腹縁による条痕によって調整



第18図 7 a-2類土器

されている。

33～39は口縁部片である。33, 36, 37, 38, 39は指頭による刻目突帯が34, 35はヘラ状工具による刻目突帯が口唇部より少し下がった位置に巡る。33は口唇部が肥厚している。器面は両面とも貝殻腹縁による条痕によって調整されている。

### 7 a - 3類 (第19図 40～48)

「深鉢・甕形土器」で口唇部に接した位置に横方向の刻みを有する突帯が巡っているものである。また、7 a - 2類と同様に、口縁部より下部の張り出した部分にも同様な突帯が巡っているものもある。突帯に付される刻目にはいろいろなバリエーションが見られる。

40は口縁部の下位にも同様な突帯が巡り、そこを胴部の最大径として内側へ屈曲して底部へと向かっている。口唇端部は丸まっており、口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。器面は内外両面とも貝殻腹縁による条痕によって調整されている。底部は平底で底部の上端はストーンと真下へ落ちる。年代分析の結果<sup>14</sup>C年代2400±30yrBPの結果を得た。41～48は口縁部片である。42～46は指頭による刻目突帯が47, 48はヘラ状工具による刻目突帯が口唇部に接した位置に巡る。44は口縁部より下部の張り出した部分にも同様な刻目突帯が巡っている。

### 7 a - 4類 (第20図 49～58)

「深鉢・甕形土器」で口縁部より下部の張り出した部分に突帯が巡っているもの（口縁部の突帯の有無、位置が不明）である。突帯に付される刻目は指頭によるものが多い。54, 55, 58は内側が磨かれているため7 b類（鉢形土器）の可能性も考えられる。

### 7 a - 5類 (第20図 59～62)

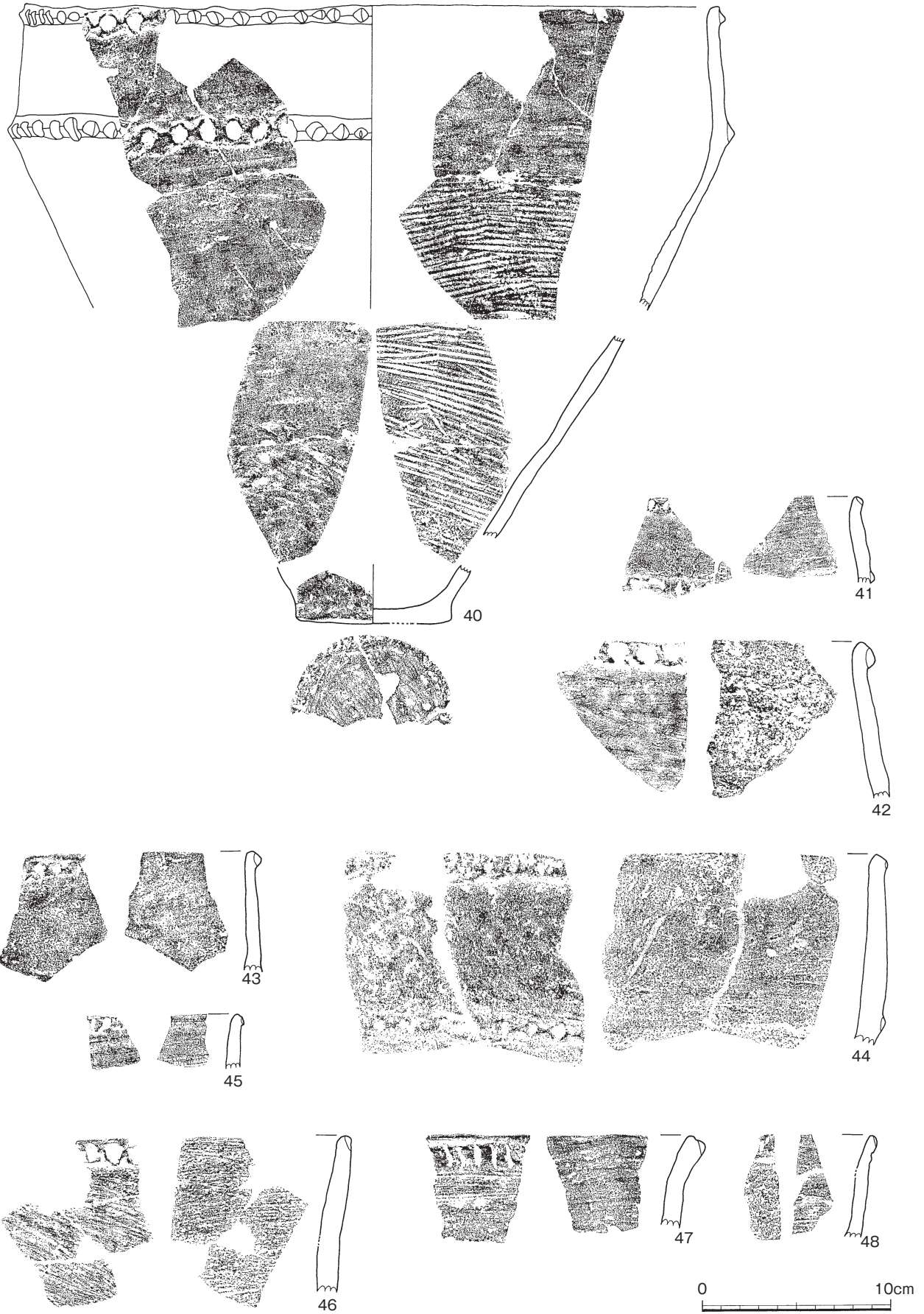
「深鉢・甕形土器」の底部片である。いずれも張り出しをもつ安定した底部である。62は網代網の圧痕をもつ。胴部その他に圧痕が見られないことから、土器作りの回転台代わりに使った痕と思われる。

## 7 b類土器

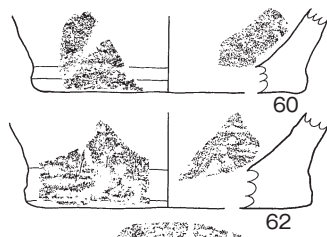
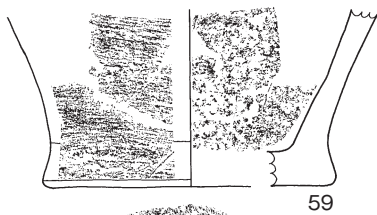
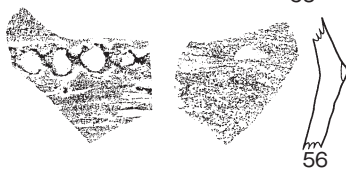
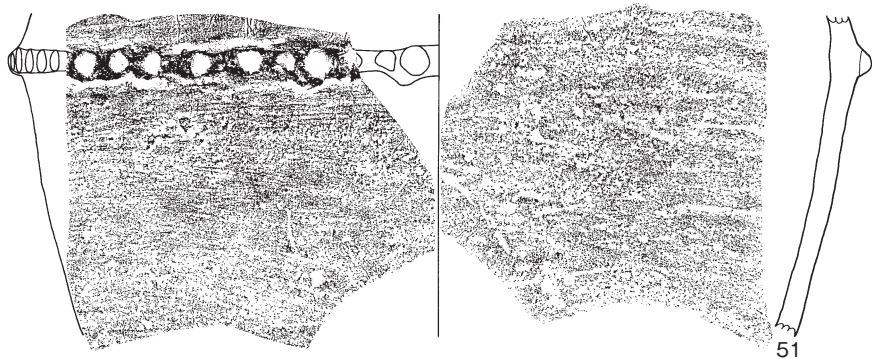
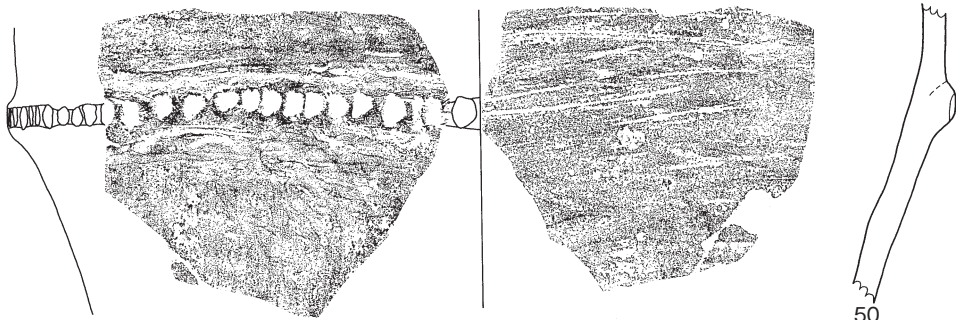
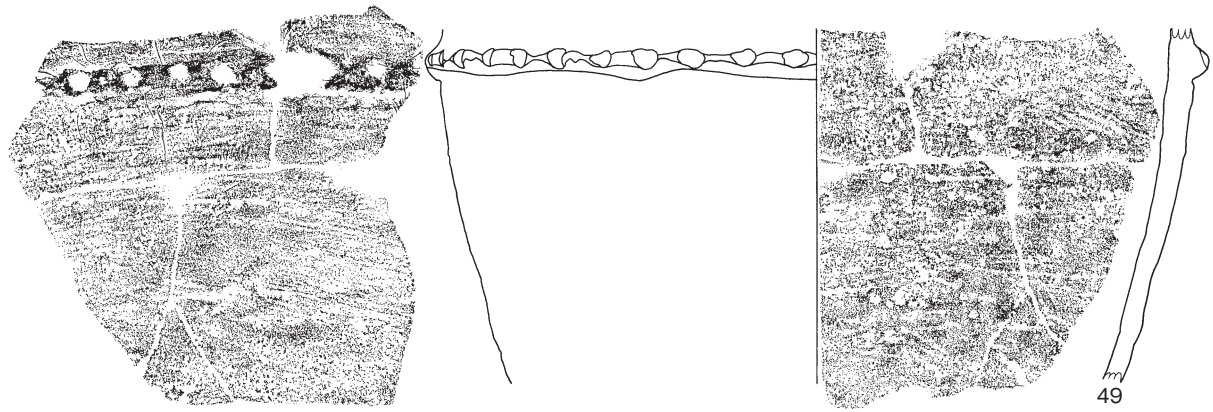
7 b類土器は中華鍋形の器形のものである。外面は粗いナデによるものの内面は丁寧に磨かれているのが特徴で、ススが多く付着しているものが多い。「深鉢・甕形土器」と同様に、突帯のあるなし、及び突帯の位置により分類した。組織痕をもたないものともつものがある。

### 7 b - 1類 (第21図 63～71)

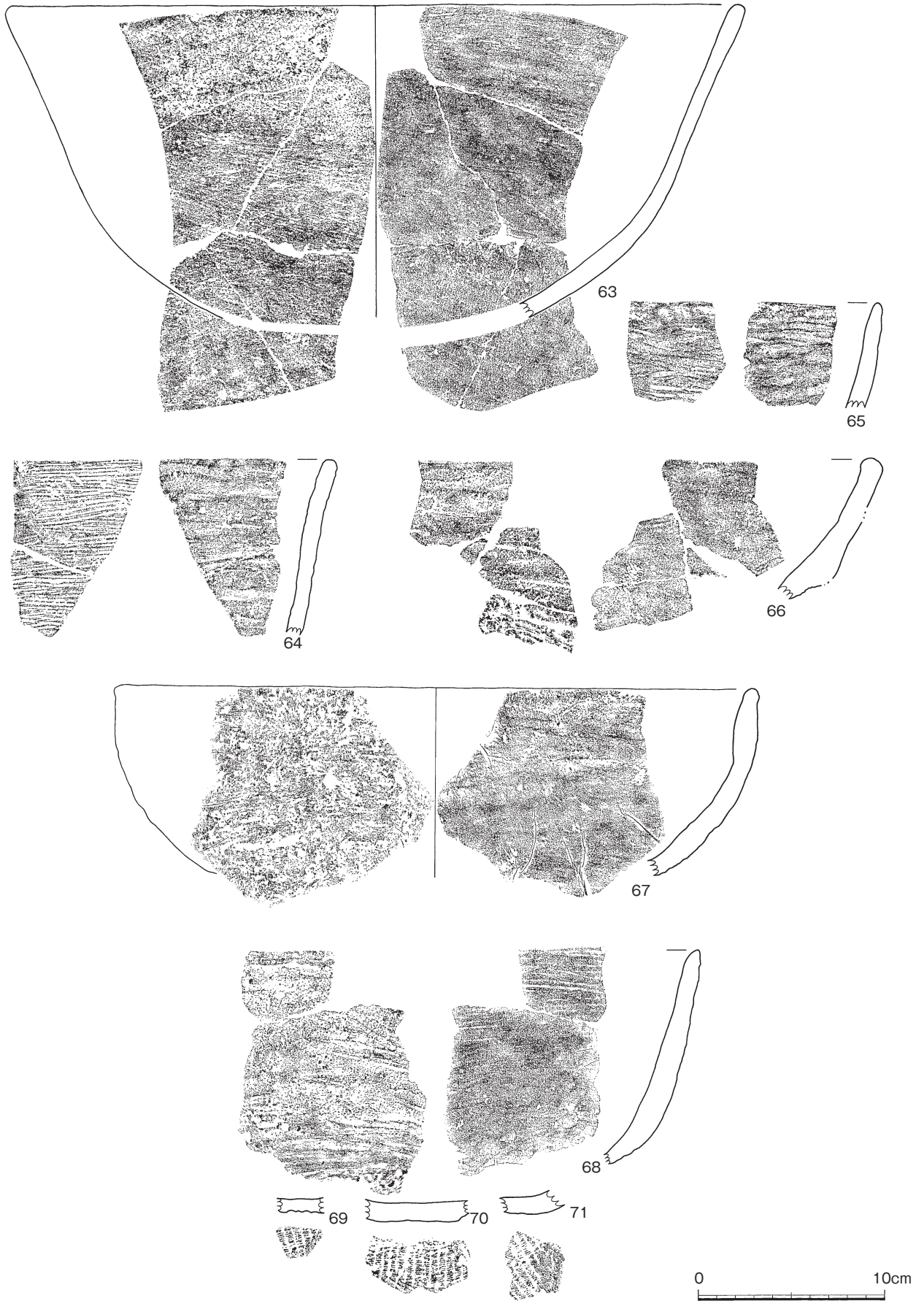
鉢形土器で突帯をもたないものである。63～65は組織痕をもたない（確認できない）ものである。63は内面は丁寧に磨かれ外面も丁寧にナデられている。外面口縁部付近にススが付着しており、年代分析の結果<sup>14</sup>C年代2500±30yrBPの結果を得た。64は外面に貝殻腹縁による条痕によって調整されている。65は内外面ともヘラケズリ後にナデによる器面調整が施される。66～71は組織痕をもつものである。66は底面部分との接合部分に組織痕が確認できる。内面は丁寧なナデである。67は内面はナデによる器面調整で、外面は粗い。胎土に白い砂粒を多く含む。外面底部付近にわずかに組織痕が確認できる。68と69～71は接合できなかったが胎土及び出土状況から同一個体と考えられる。底部に縦糸が4 mm間隔の細かい編布圧痕が確認できる。内面は大変丁寧に磨かれている。



第19図 7a-3類土器



第20図 7a-4・5類土器



第21図 7b-1類土器

7b-2類 (第22図 72~第23図 81)

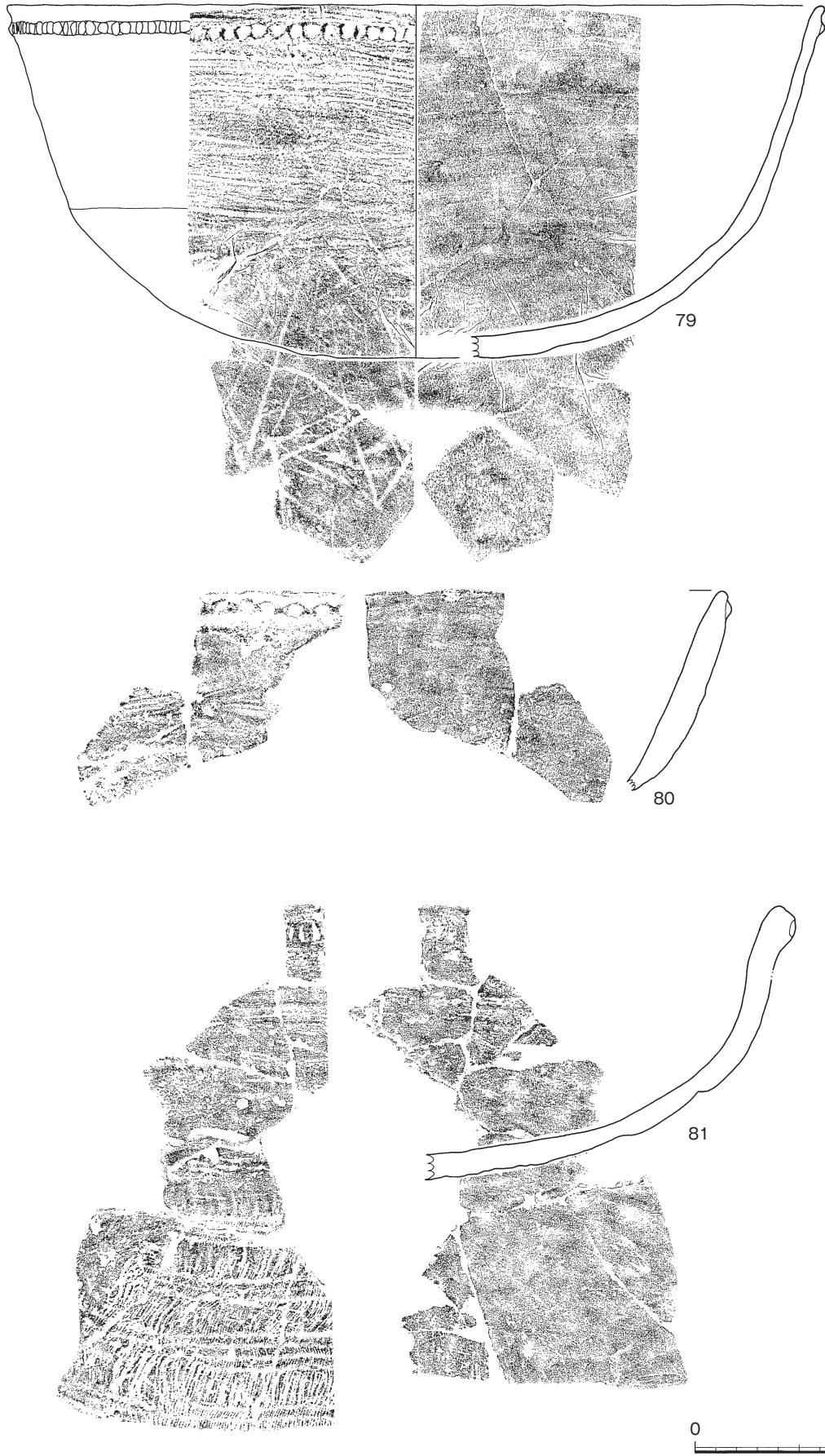
鉢形土器で突帯の位置が口縁部より少し下がった位置にあり、72~78は組織痕が見られないものである。

72は口唇部から7mm~1cm下がったところに刻目突帯があり、内面は丁寧に磨かれている。外面口縁部付近にススが付着しており、年代分析の結果<sup>14</sup>C年代2505±30の結果を得た。73は一部口唇部に接するが3~5mm下がったところに刻目突帯があり、外面口縁部付近にススが付着している。74、75は器壁が5~7mmと薄く、内面は磨き、外面は貝殻条痕による器面調整が施される。76はヘラ状の工具で刻みを施したもので、胎土は白っぽい粘土で、突帯と口縁が一体化し口縁部下が肥厚したように見えるものである。77・78は口縁部がないが下がった位置に突帯が付くと考えられる。77は内面はナデ調整である。78は内面はヘラケズリ後に磨きである。



第22図 7b-2類土器(1)





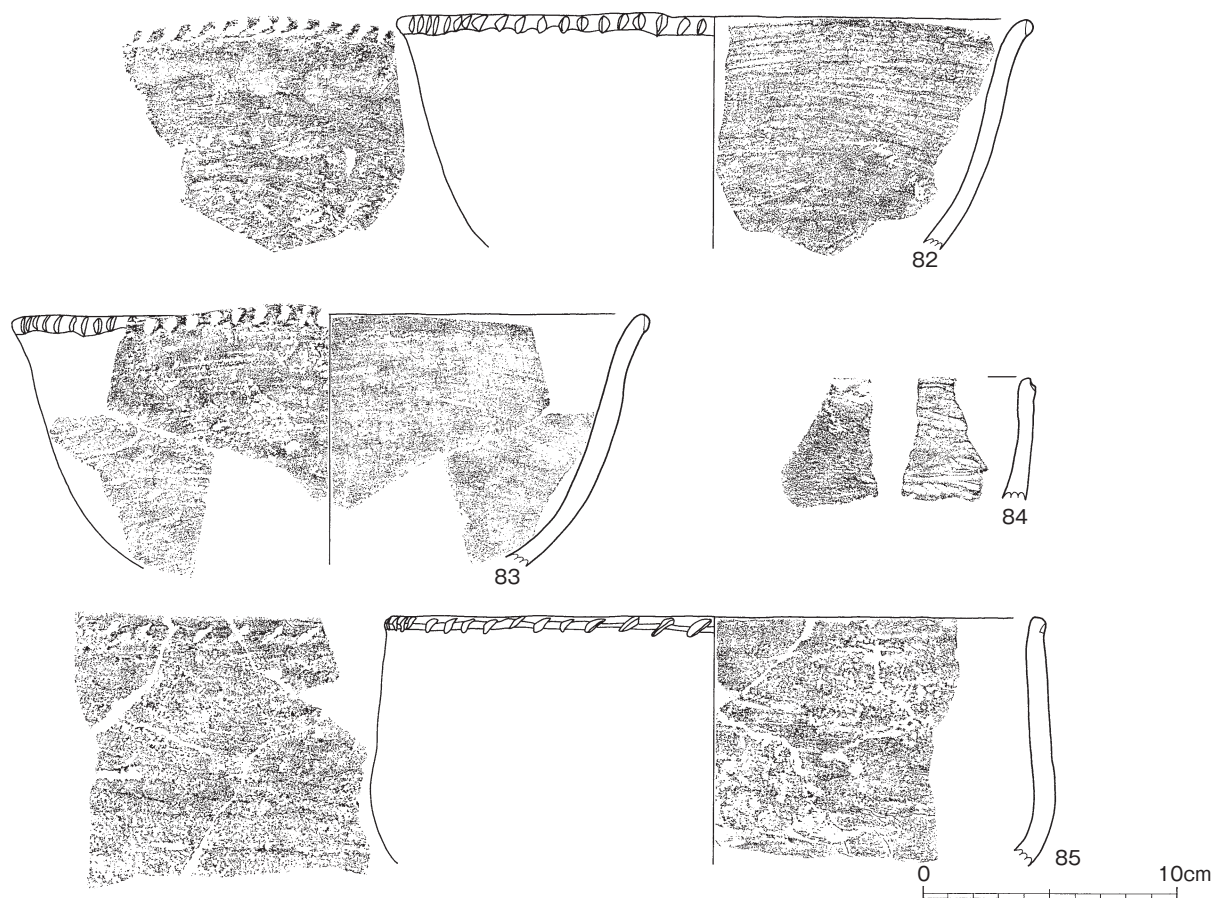
第23図 7 b-2類土器(2)

79～81は組織痕をもつものである。79は口径約40cm，器高17.5cmを測る。口縁部より約1cm下がった部分に幅約6mmの突帯が横位に一条巡る。突帯には指頭圧痕が施される。器壁が5～7mmと薄く，内面は丁寧に磨かれ，外面には貝殻条痕による器面調整が施される。底部から胴部下位に木葉痕が確認できる。木の種類は不明である。年代測定の結果 $2470 \pm 30$ yrBPの結果を得た。80は口縁部より約3mm下がった部分に幅約6mmの突帯が横位に一条巡る。突帯には指頭圧痕が施される。内面は丁寧に磨かれ，外面突帯付近にススが付着する。胴部端の底部との接合部付近に編布圧痕が観察される。81は突帯が口縁部と一体化するようになっており，口唇部下端が肥厚したようになっている。ヘラ状工具による刻みを施す。組織痕は編布圧痕で縦糸の間隔が約5mm-5mm-15mm-5mm-5mm-15mmといったように一様でなく変化している。底部から立ち上がる部分の組織痕は一部ナデ消されている。80・81とも白色粘土を胎土とするものである。

### 7b-3類 (第24図 82～85)

鉢形土器で突帯の位置が口縁部に接した位置にあるものである。この類で組織痕をもつものは確認できなかった。

82は幅約6mmの突帯が口縁部に接し一条巡る。深さ3mm程の明瞭なヘラ状工具による刻みを施す。83は幅約1cmの突帯が口縁部に接し一条巡る。ヘラ状工具による刻みを施す。84は突帯は明瞭ではなく，棒状工具による浅い刻みを施す。内面はヘラ磨きによる調整である。85は直口気味に立ち上がる。ヘラ条工具により斜位にやや間隔を開けて刻みを施す。



第24図 7b-3類土器

#### 7b-4類 (第25図 86~第27図 127)

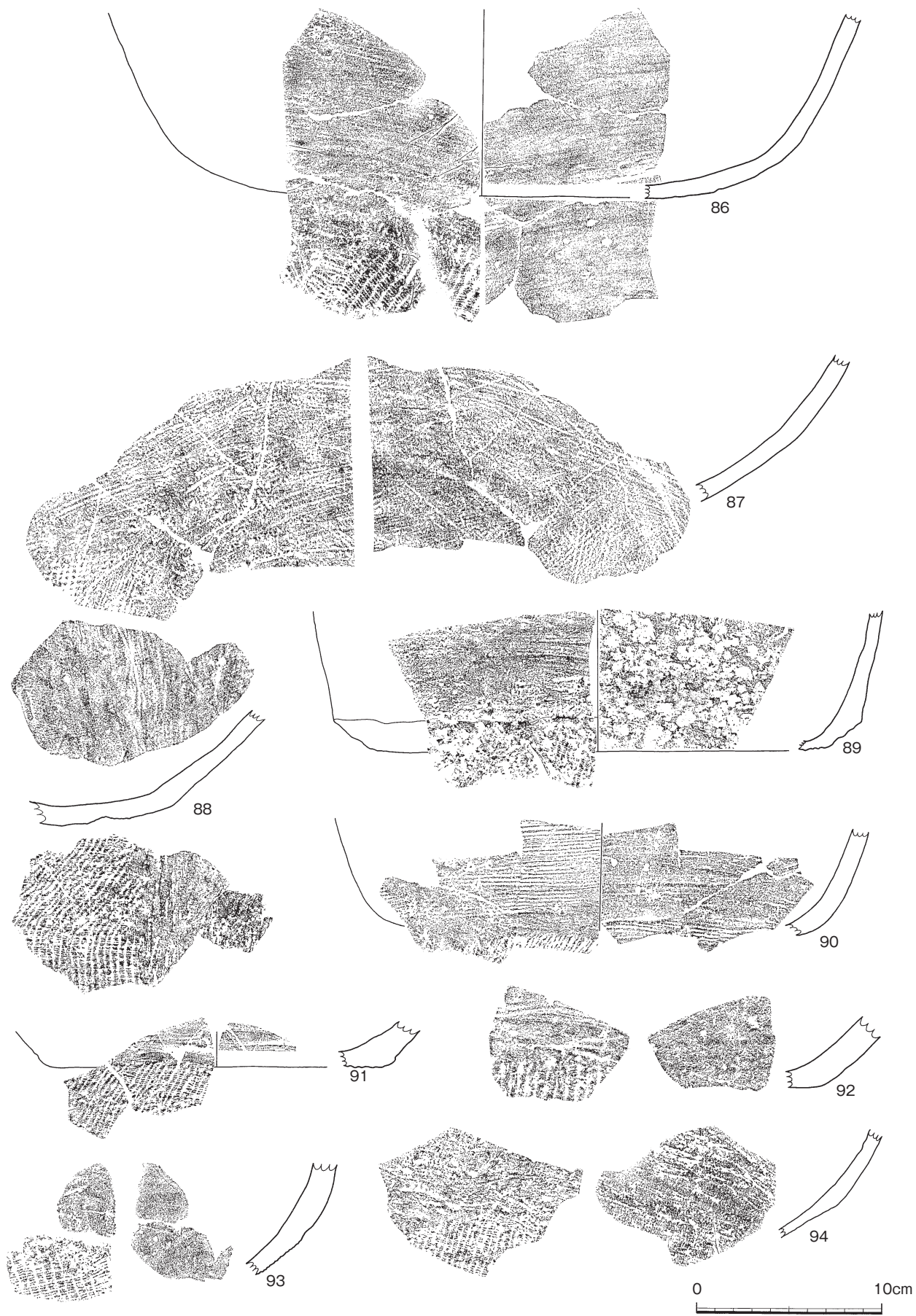
鉢形土器の胴部または底部で、突帯の有無、位置は不明だが組織痕をもつものである。

86は底部から胴部へ立ち上がる部分である。底面に編布圧痕をもつ。縦糸の間隔は約5mmでほぼ等間隔である。外面の底部組織痕の部分にはススは付着しておらず、胴部へと立ち上がる部分にススが付着しており、口縁部に近い部分に多くススが残っている。内面は丁寧に磨かれており、外面とは逆に底部が黒くなっている。87は内外面とも貝殻条痕で器面調整されナデられている。底部から立ち上がる部分に一部だけ網目圧痕が確認できる。88も底部から胴部へ立ち上がる部分である。底面に編布圧痕をもつ。縦糸の間隔は約3mmと密である。底部に2箇所凹んだ部分があるが凹みの中にも組織痕が確認できる。底部から立ち上がる部分の組織痕がナデ消されているのが確認できる。86と同様外面の底部組織痕の部分にはススは付着しておらず、胴部へと立ち上がる部分にススが付着しており、口縁部に近い部分に多くススが残っている。89は底部から胴部へ立ち上がる部分で、底部と貼り合わせた部分である。凸凹した貼り合わせ部分に編布圧痕が一部確認できる。内面は剥落が激しい。90は胴部へと立ち上がる部分に編布圧痕が一部確認できる。外面は貝殻条痕による器面調整が横位に施される。内面は貝殻条痕による器面調整後ナデられている。91は縦糸間隔約3mmと密である。底面の薄くなった部分にも組織痕が確認できる。92は縦糸が約7mm間隔であるが、磨滅のため横糸は確認できない。93は縦糸が約5mm間隔である。94は縦糸の間隔が約3mmと密である。87以外はいずれも編布圧痕である。89~93の胎土は、白っぽい粘土である。

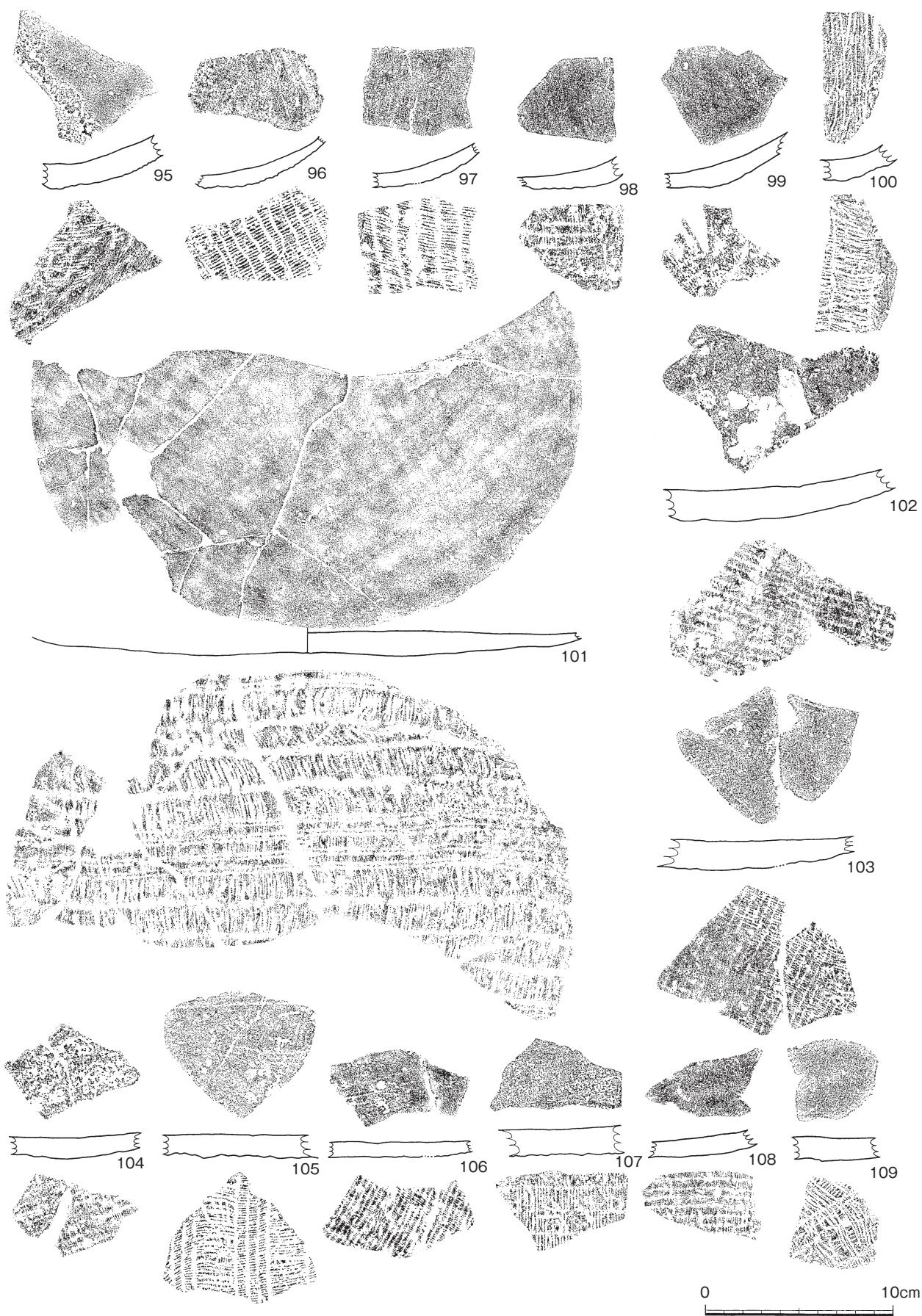
95は縦糸間隔が11mmの編布圧痕をもつ。外面の胴部へと立ち上がる付近の圧痕はナデ消されている。内側は丁寧に磨かれており、底部の平坦に近い部分にススが付着している。96は縦糸間隔が3mm~11mmと変化している。縦糸の縞りが明瞭に観察できる資料である。97は縦糸間隔が12mmの編布圧痕をもつ。内面は丁寧に磨かれている。98・99の内面は内黒土師器のように黒く磨かれている。100は縦糸間隔が23mmと広く横糸も詰まっていない。101は直径30cmを越える平板状の底部で内面は丁寧に磨かれている。縦糸間隔は2mm-5mm-2mm-5mm-2mm-15mmといったように縦糸の幅を変えることによってデザイン性に富んでいる。102~104は磨滅のため組織痕が見えにくい縦糸間隔6mm程度の編布圧痕をもつ。白っぽい粘土製で同一個体の可能性も考えられる。104は内面にススが付着している。105は縦糸間隔6mm-6mm-6mm-22mmと縦糸の幅を変化させている。106は縦糸間隔3mm、横糸も1cm内に9~10本と大変密である。107~122も編布圧痕をもつ底部片である。111は内面に貝殻条痕による器面調整が見られる。縦糸間隔14mmで横糸は詰まっていない。116、117は縦糸間隔が3mmで横糸も大変密である。123は縦糸間隔が7mmの編布圧痕をもつ。編布圧痕の上に粘土を薄く貼り付けている部分が観察できる。124は縦糸間隔が10mmの編布圧痕をもつ。編布圧痕の上に粘土を薄く貼り付けている部分が観察できる。

125~127は網目圧痕をもつ底部片である。網の目の大きさは6~8mmと細かい網目である。

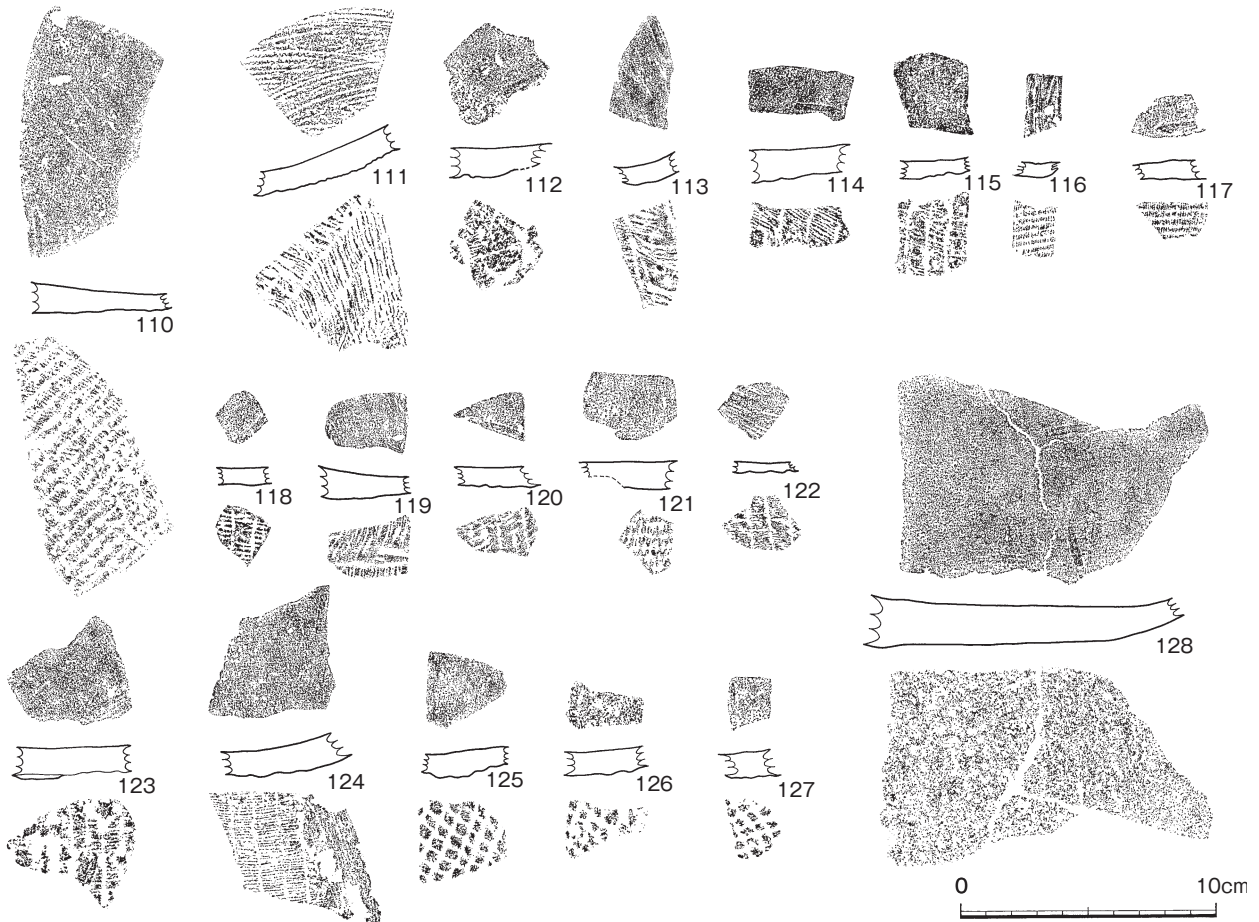
128は組織痕は観察できないが101と同様の平板状の底部である。組織痕の上に粘土が貼り付けられている可能性も考えられる。



第25図 7 b-4類土器(1)



第26図 7 b-4類土器(2)

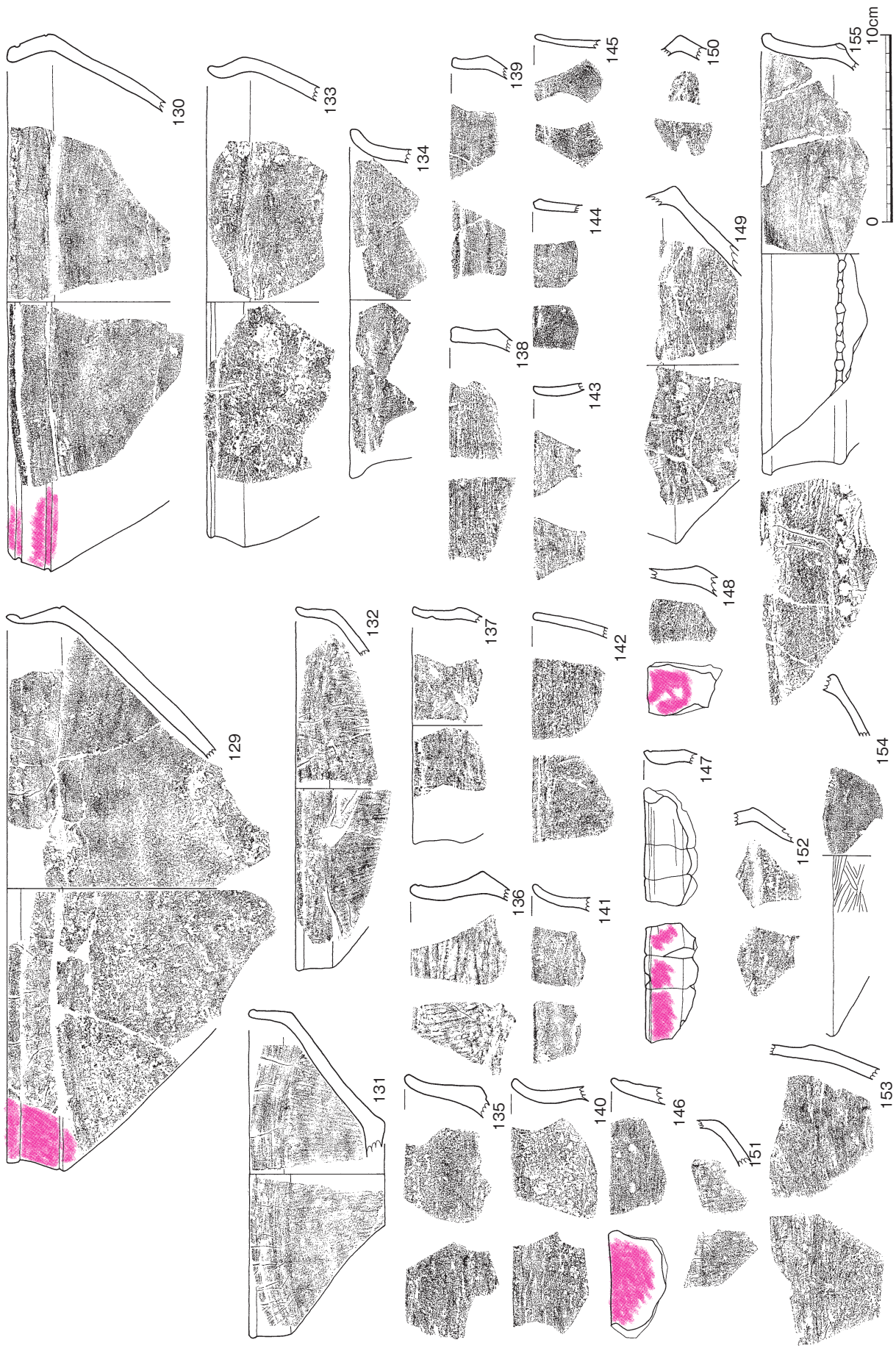


第27図 7 b-4類土器(3)

7 c類土器 (第28図 129~155)

7 c類土器は浅鉢形土器である。逆「く」の字形のものが多く口縁部と屈曲部に沈線をもつものも見られる。129・130は口縁部と屈曲部に沈線をもち屈曲部に丹が確認される。陵から口縁部にかけての立ち上がり方は内傾している。129は復元口径29.8cm, 130は復元口径27.5cmを測る。130・131は口縁部に沈線をもつ。口縁部下方の陵からの立ち上がりはほぼ真上に立ち上がる。器面調整は内面口縁部付近は横方向の内面の陵より下位は縦方向の丁寧なナデ調整及びヘラ磨きによって仕上げられている。131は復元口径15.8cm, 器高7.4cmを測る。132は復元口径18.6cmを測る。134は外反しながら立ち上がる。復元口径19cmを測る。内外面ともナデによる器面調整である。

135~147は口縁部である。外面の口縁部下方の陵から口縁部にかけての立ち上がり方には陵が明瞭で内傾するものや、ほぼ真上に立ち上がるもの、外反するものなどいくつかのパターンがある。また、口唇部の形態も丸みを帯びるもの、平坦になるもの等いくつかのパターンがあるようである。148~154は屈曲部である。147・148は丹が確認される。154は器面調整は内面はヘラ磨きによって仕上げられている。155は口縁部より下部の屈曲部に横方向の刻みを有する突帯が巡っている。口唇部端は丸まっており、口縁部は上端で幾分外反している。内面は横方向のヘラ磨きで丁寧に仕上げられている。内面の器面調整、器高等の違いから浅鉢形土器であると考えられる。



第28图 7 C-1類土器

7c-2類 (第29図 156~163)

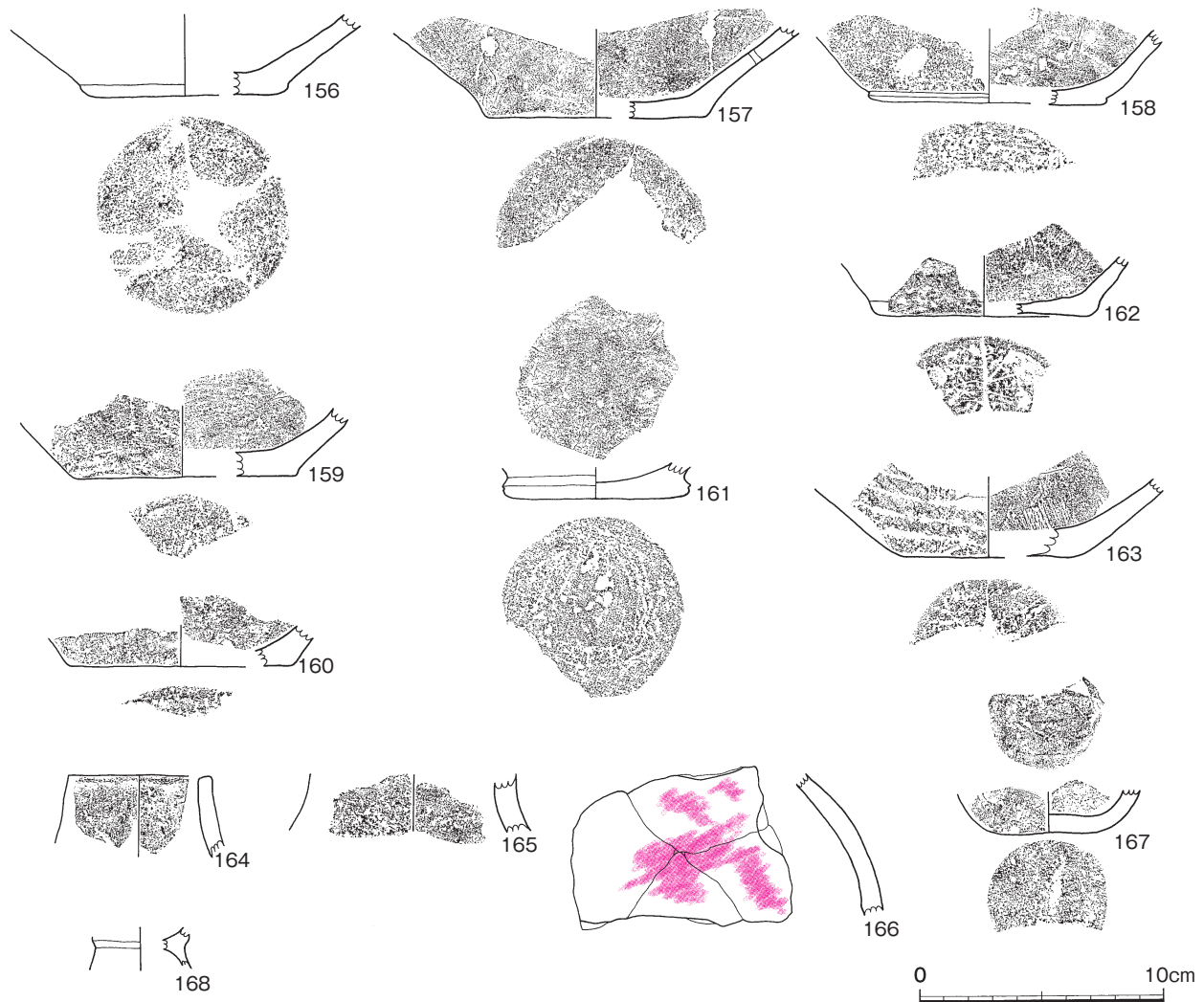
156~163は浅鉢形土器の底部であると思われる。156は内面の剥落が激しい。157は内面が研磨されており、補修孔と思われる穿孔が一箇所確認される。162は底部に木葉痕が確認される。木の種別は不明である。163は胴部からのラインが角が無く底部につながるもので、底部ではなく胴部に編布圧痕をもつものである。縦糸間隔が約7mmで横糸はナデ消されているため確認しにくいだが密である。

7d類 (第29図 164~167)

7d類は小片のため確実に壺形土器であるとはいえないが、壺形土器の可能性のあるものである。164は脚の可能性もあるが径がやや小さいことからこの類とした。165・166は丹塗りが確認された。165は壺形土器の口縁部、166は壺形土器の胴部片の可能性が考えられる。167は成川式土器の柑のようだが、古墳時代遺物の出土例が他にないことから小型の壺形土器の可能性が考えられる。

7e類 (第29図 168)

168は坏部と脚部の接点に巡らす突帯でしか確認することができないが、高坏形土器であると考えられる。



第29図 7c-2・7d・7e類土器



## 1 石器

### 石鏃 (第30図 169~187)

縄文時代の石鏃は、IV層及び表土から欠損品や未製品を含め21点出土した。以下のように分類した。

#### 1類：直線的な基部を持つ石鏃

169・170は直線的である。169は形状が正三角形である。170は先端部が欠損しているが、二等辺三角形である。

#### 2類：浅い抉りの基部を持つ石鏃

171・172は逆刺が鋭く、浅い抉りのある基部を持つ石鏃である。171・172は側辺が外湾する。173・174は、側辺が直線的である。175は側辺が内湾する。176は先端部が欠損している。

#### 3類：深い抉りの基部を持つ石鏃

177~179は逆刺が丸みを持ち、深い抉りのある基部を持つ石鏃である。177は側辺が鋸歯状になっている。180は逆刺が鋭く、深い抉りのある基部を持つ石鏃である。

#### 4類：剥片石鏃

181は逆刺が鋭く、浅い抉りのある基部を持つ剥片石鏃である。

#### 5類：未製品の石鏃

182~187は自然面を残したり、押圧剥離がされていない面などを持つ石鏃である。

#### 6類：基部が欠損する石鏃

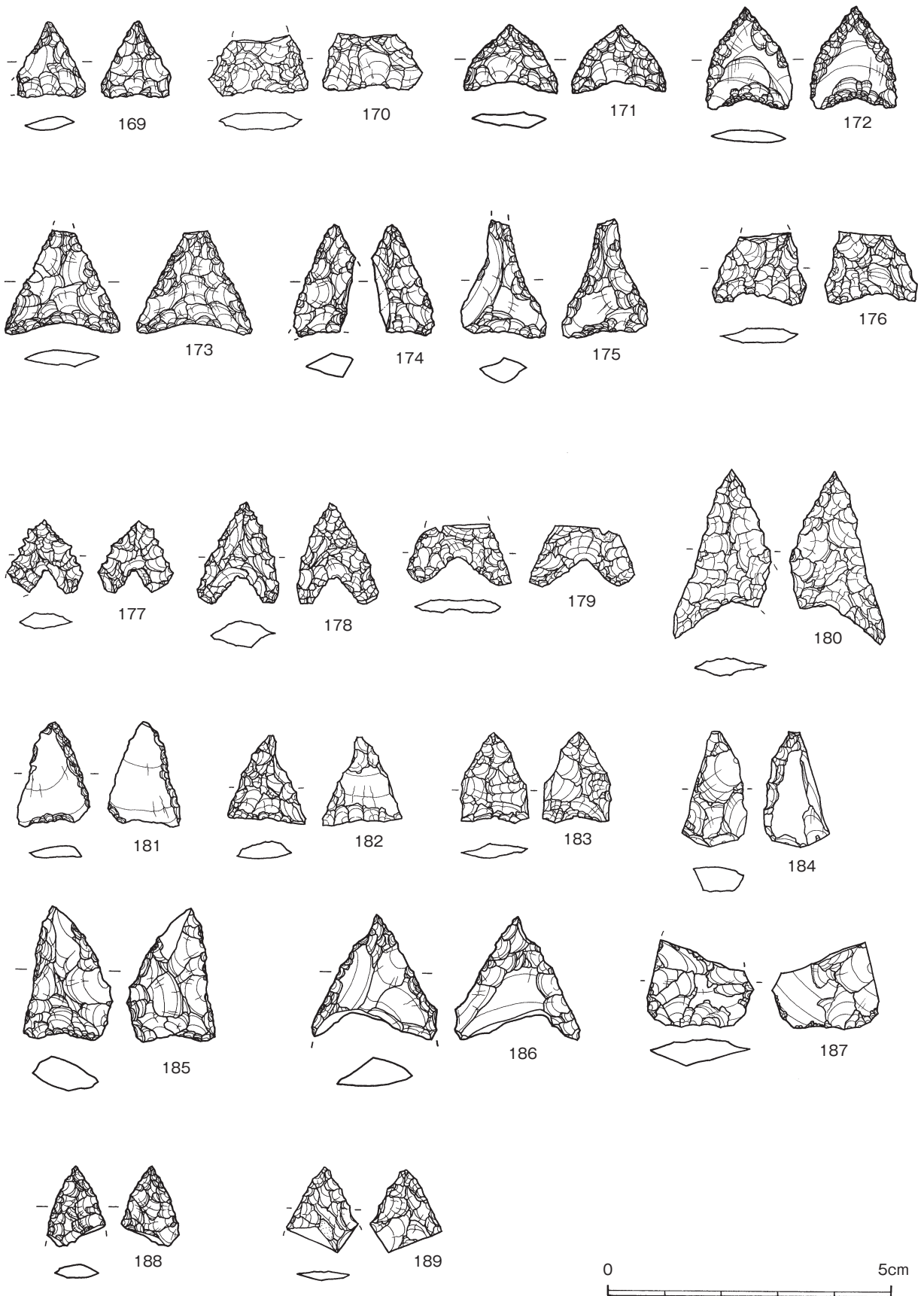
188・189は基部が欠損した石鏃の先端部である。188は側片がやや外反する。189は直線的である。

### 楔形石器 (第31図 190)

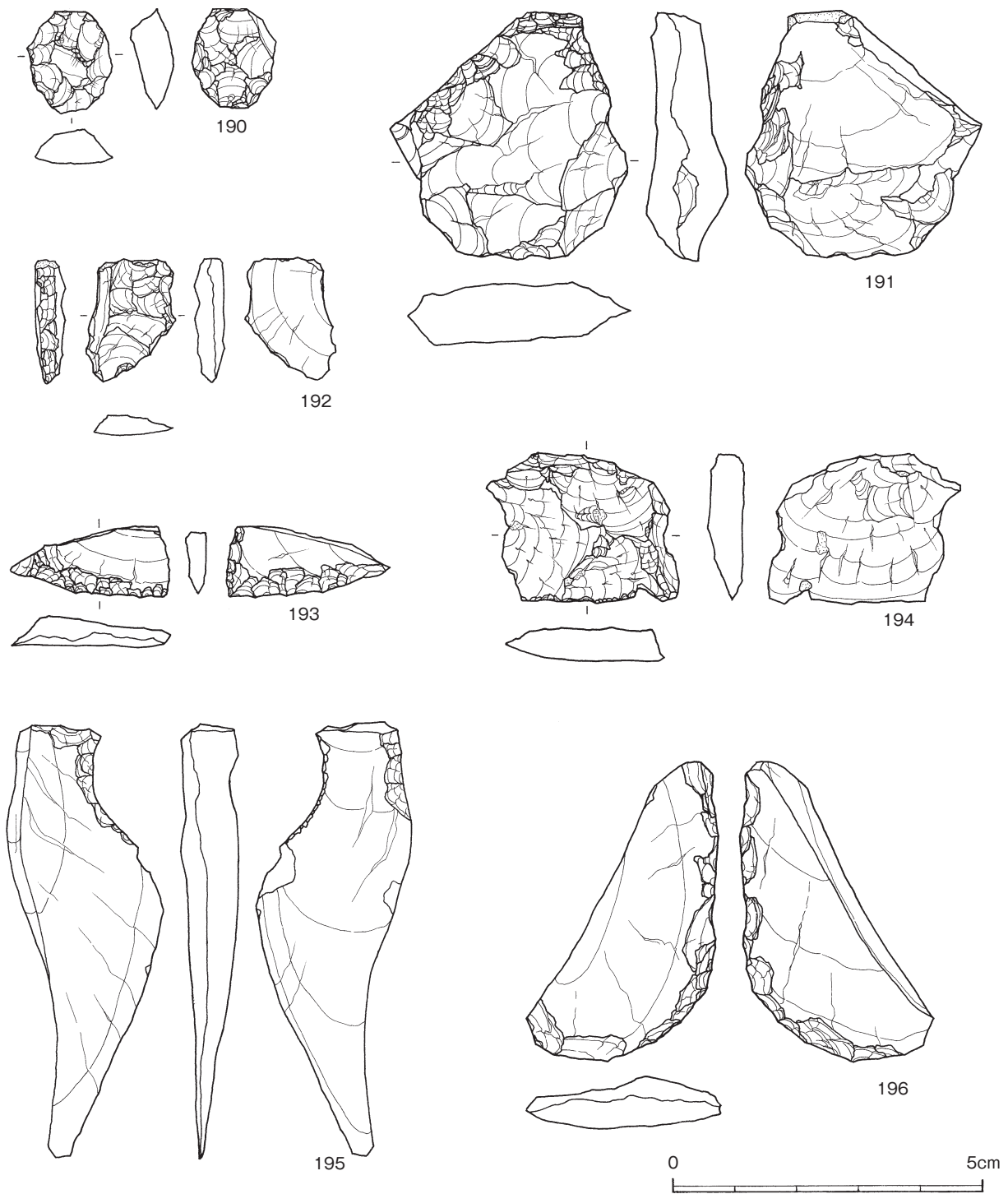
190は気泡の少ない質の良い飴質状の黒曜石で作られたものである。製作としては小母岩を利用して、亀の甲羅状に両面に剥離を入れている。特に、幅の狭い部分は鋭利であるので機能としては楔形石器の可能性が高い。

### 削器 (第31図 191~195)

191は灰色と黒色の色調が互層にみられるため石材はチャートと思われる。上部には風化面がみられ、そこから薄く剥いでいる。主要剥離面は凸凹がみられ、右側の辺に二次調整剥離を加え、交互剥離で鋸歯状の刃部を作っている。機能としては削器の可能性が高い。192は黒灰色を呈し、熱を受けた頁岩である。薄く剥がれた剥片を片面剥離で片刃状に剥離を入れて刃部を作っている。機能は削器の可能性が高い。193は黒灰色を呈し、熱を受けた頁岩である。薄く剥がれた剥片を両刃状に剥離を入れて刃部を作っている。機能は削器の可能性が高い。194は黒色の中に透明感があり、気泡を多く含んだ黒曜石である。薄く剥がれた剥片を片面剥離で片刃状にブラントイングを入れて刃部を作っている。機能は削器の可能性が高い。195は黒灰色を呈し、熱を受けた頁岩である。薄く剥がれた剥片に小さな二次調整剥離を入れて刃潰しを作っている。機能は削器の可能性が高い。



第30図 縄文時代石器(1)

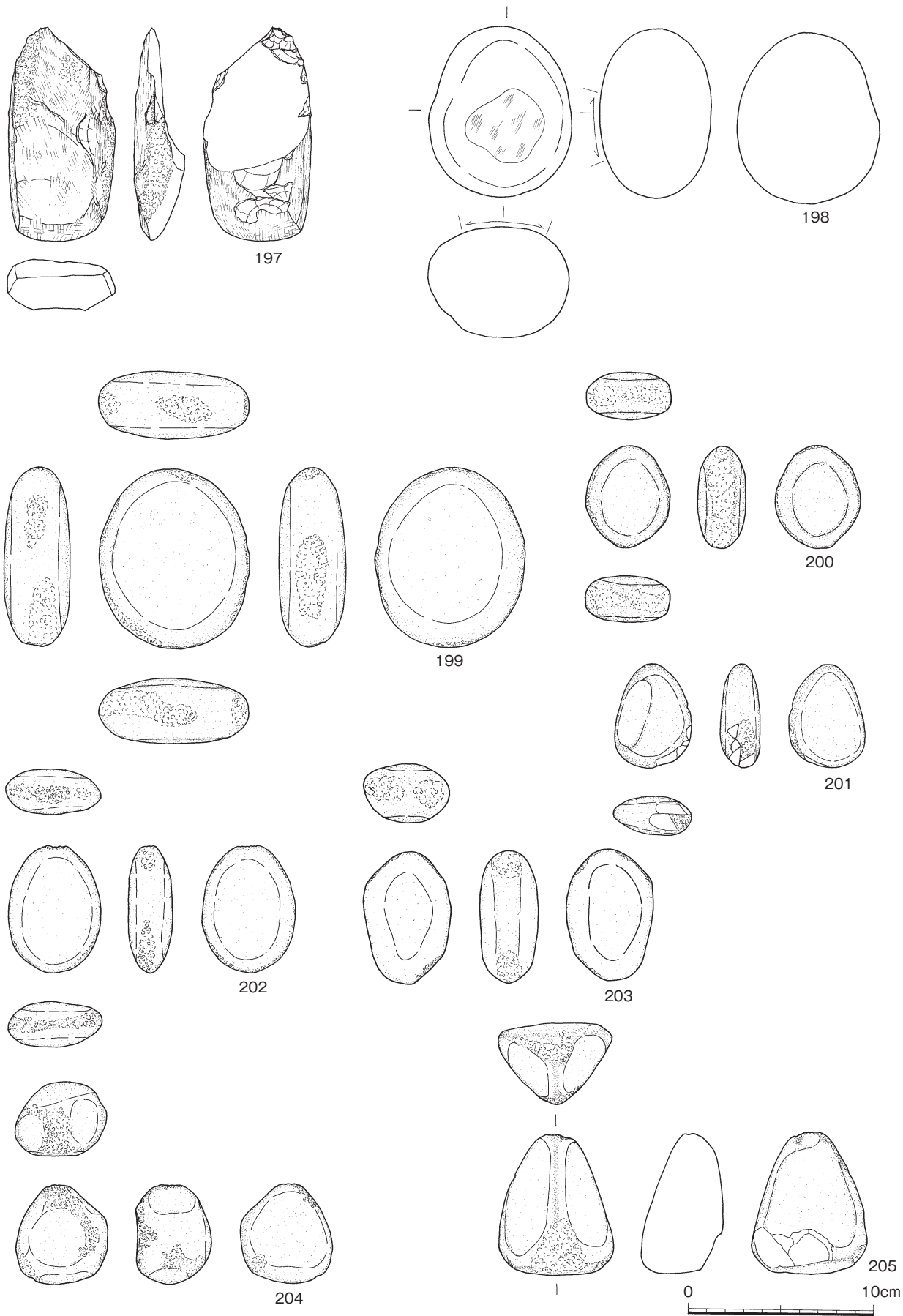


第31図 縄文時代石器(2)

石斧 (第31図 196・197)

196は熱を受けた砂岩質で灰茶褐色を呈す。薄く剥がれた剥片を両刃状に二次調整剥離を入れて刃部を作っている。これは破損した刃部で、小型打製石斧の刃部の可能性が高い。

磨製石斧は197のみ1点の出土である。刃部の形は両刃で円刃形を呈するものである。左側面は研磨により整形されているが、右側面には敲打による整形が行われている。



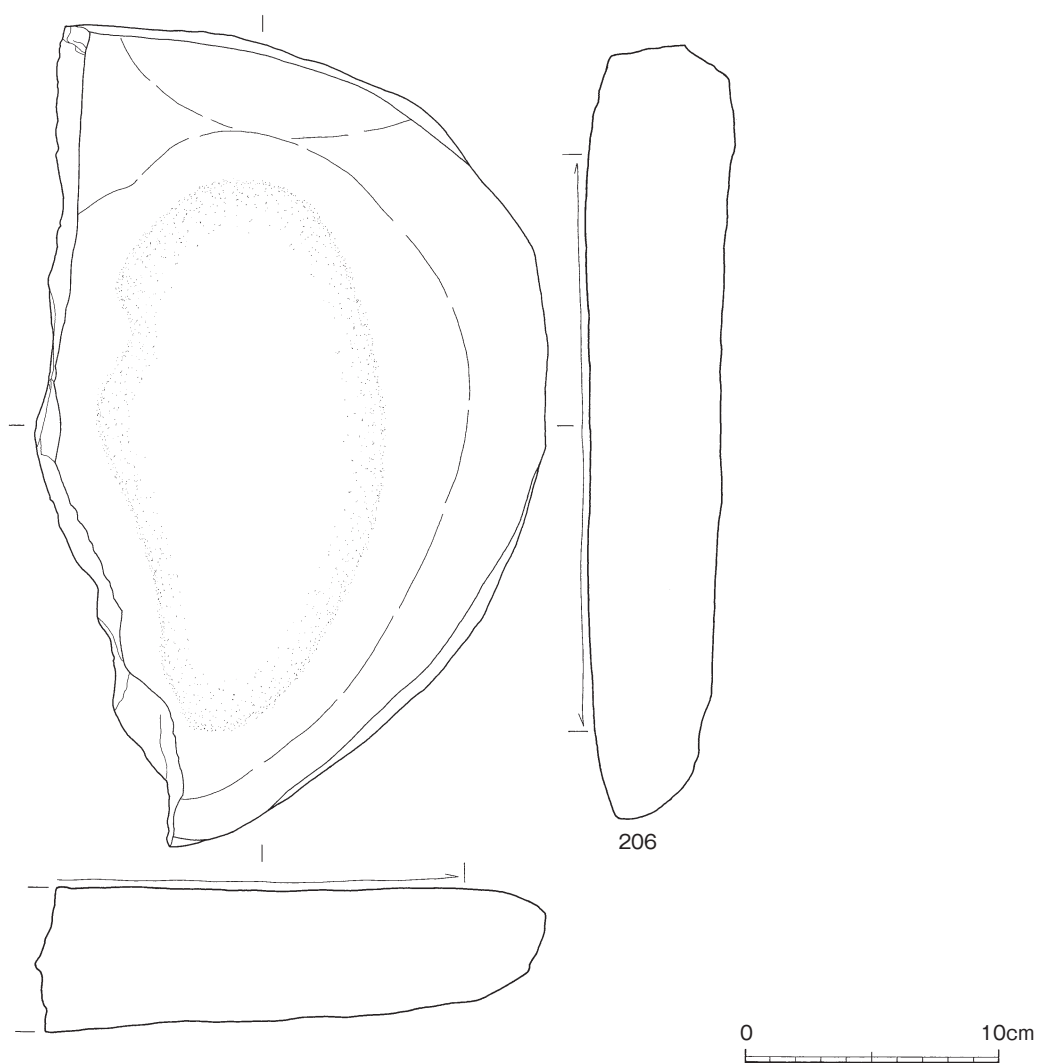
第32図 縄文時代石器(3)

### 磨石・敲石（第32図 198～205）

磨石・敲石類の分類は、磨面のみが観察されるものを磨石、磨面と敲打痕が観察されるものを磨敲石、敲打痕のみが観察されるものを敲石としている。198は球状の礫を利用した磨石である。片面のみ磨痕が観察される。199は扁平な亜円礫を利用したもので、両面に磨面があり、側面の全周にわたって敲打痕が観察される。200・201は長軸6cm以下の小型の礫を利用した敲石で、200は長軸に対して2・4・8・10時方向、201は4時の方向に激しい敲打痕が観察される。202は長軸の上端部に激しい敲打痕が観察される。203は長軸に対して2・4・10時の方向に激しい敲打痕が観察される。204は小型の礫を利用したもので上端部及び左右下端部に激しい敲打痕が観察される。205は三角形の礫を利用したもので、上端部及び下端部に敲打痕が観察される。

### 石皿（第33図 206）

206は平面形が亜円形で板状の礫を利用したものである。石材は砂岩である。皿部縁辺に一部敲打痕が観察される。片面のみ磨面が観察される。約半分ほどに破損していると思われるが、中央付近が光沢をもつほど平滑な磨面となっていることから、破損した後に砥石として使用したと考えられる。



第33図 縄文時代石器(4)

## 第4節 弥生時代～中世の調査成果

### 第1項 調査の概要

弥生時代から中世の包含層は、Ⅱ層の西暦1471年桜島起源の噴出物である文明ボラと御池火山灰の腐植土層であるⅣa層の間のⅢa・Ⅲb層である。

先述のとおり、圃場整備等により層が削平されており、古墳時代から中世の包含層が残存しているのは、B地点北西部の山側部分とC地点のみである。また、弥生時代の調査成果は、甕形土器の完形品1点のみである。

### 第2項 遺構

遺構は、Ⅱ層の文明ボラの下から、中世のものと考えられる落とし穴1基、道路状遺構4条、畑の畝跡1か所が確認された。畝跡は未調査部分に広がる可能性が考えられる。

#### 1 落とし穴（第35図）

F-30区と31区のちょうど境にあたる部分で検出された。検出面は、Ⅳa層上面である。平面形は、約260cm×約80cmの細長い方形で、検出面から底面までの深さは、約180cmを測る。底面形も約210cm×約30cmの細長い方形で、平坦である。断ち割り調査を行ったところ、底面の長軸の中央付近に、ほぼ一列に並んで逆茂木痕が合計11本検出された。逆茂木痕の平面形は約10cmの円形で、先端を尖らせてある。底面からの深さは、約20～40cmを測る。Ⅸ層の薩摩火山灰層まで打ち込まれていることが確認できた。

#### 2 畑跡（第36図）

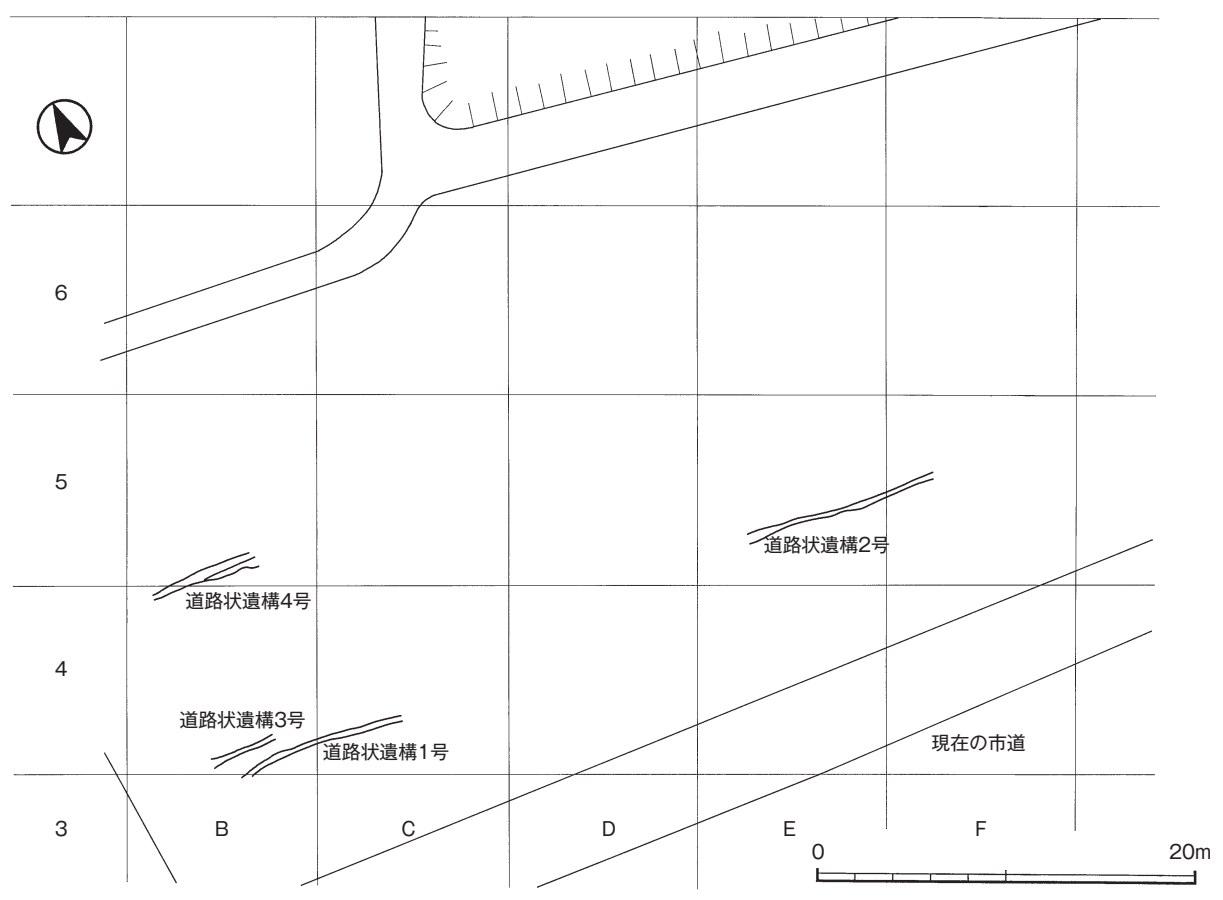
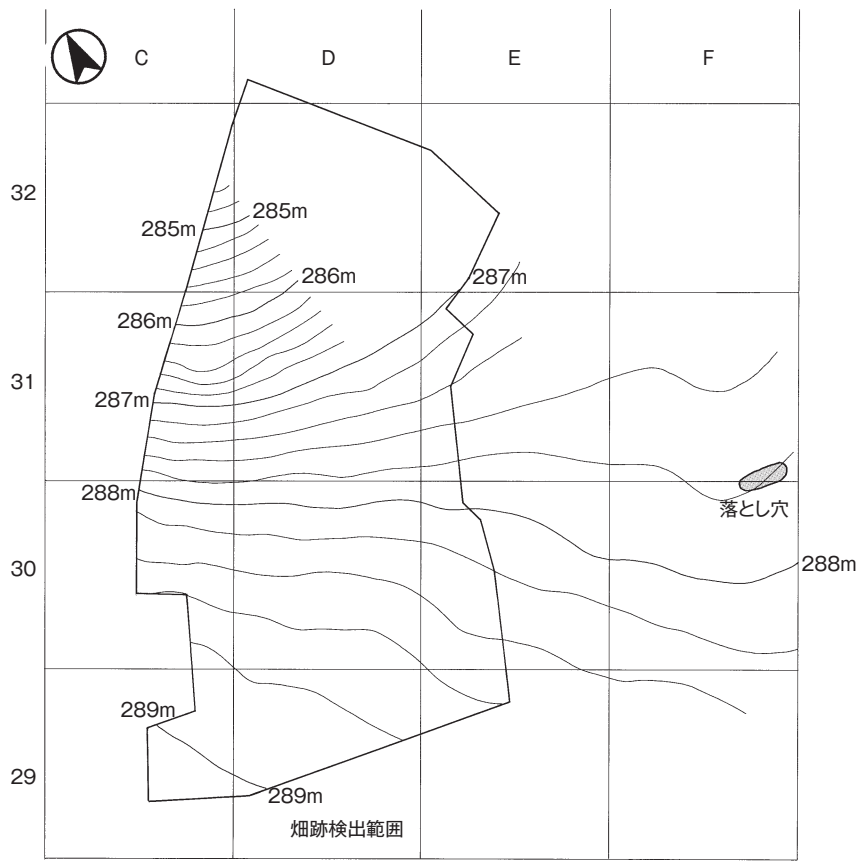
C～E-29～32区の北西方向に落ちていく斜面で検出された。検出面は、Ⅱ層の文明ボラ層（1471年）直下のⅢa層上面である。段々畑のように畑部分と段の部分とを明確には分けづらいが、斜面の傾斜に沿って平坦な部分と段になる部分が縞模様のように見えるのが確認できる。平坦部分の幅は概ね40cm、段の部分の幅は25cm程度である。

畑にほぼ直角する方向で、道跡と考えられる溝状に延びる部分が3条確認された。道跡Aは上場幅約90cm、下場幅約40cm、深さ約3～10cmである。道跡Bは、道跡Aとほぼ直角に交わる。谷の傾斜に沿って北側へ延びている。上場幅約80cm、下場幅約30cm、深さ約3～8cmである。道跡Cは、上場幅約90cm、下場幅約40cm、深さ約3cmである。削平により確認できなかったが、道跡AとE-30区で直角している可能性がある。

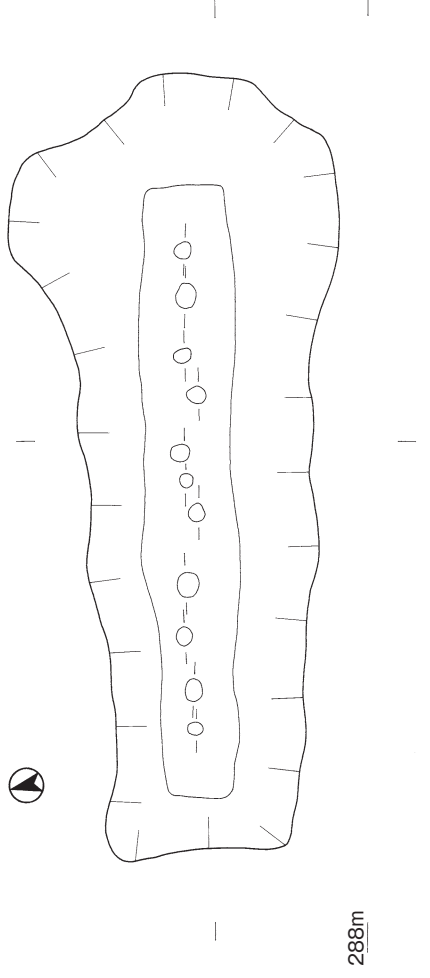
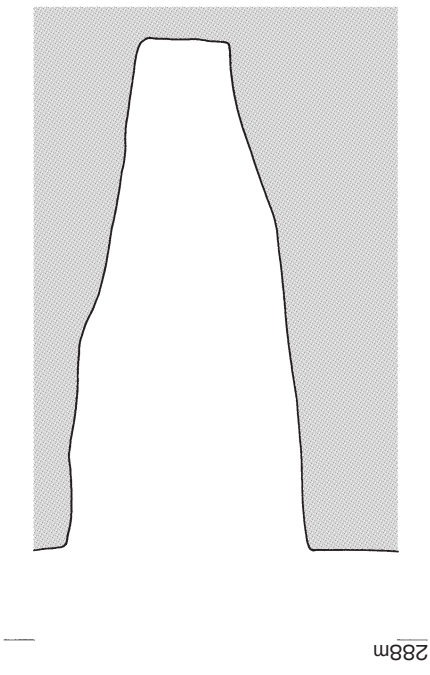
#### 3 道路状遺構（第37図）

B～F-4～5区で4条検出された。検出面はⅣa層上面である。4条とも現在の市道と平行する方向に延びており、道跡1号は、幅約40cm、長さ約10m。道跡2号は、幅約40cm、長さ約9m。道跡3号は、幅約40cm、長さ約3m。道跡4号は、幅約40～90cm（一部分時期差のある2条が重なっている）、長さ約6mが確認された。

4条とも硬化面を持つ。硬化面が2層確認された部分もあり、ある程度長期間使用されていたと考えられる。



第34図 古代～近世遺構配置図

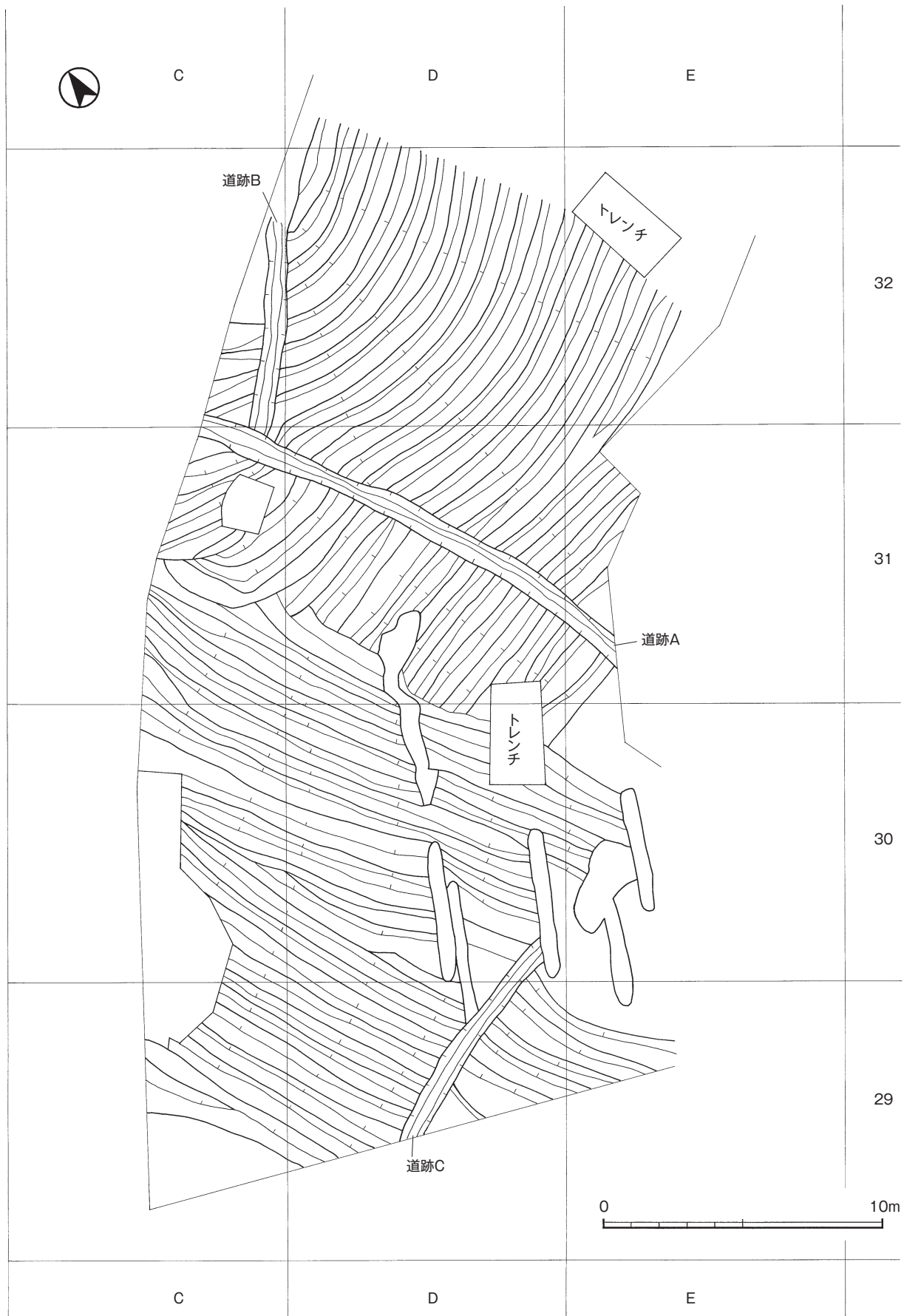


落とし穴埋土分類表

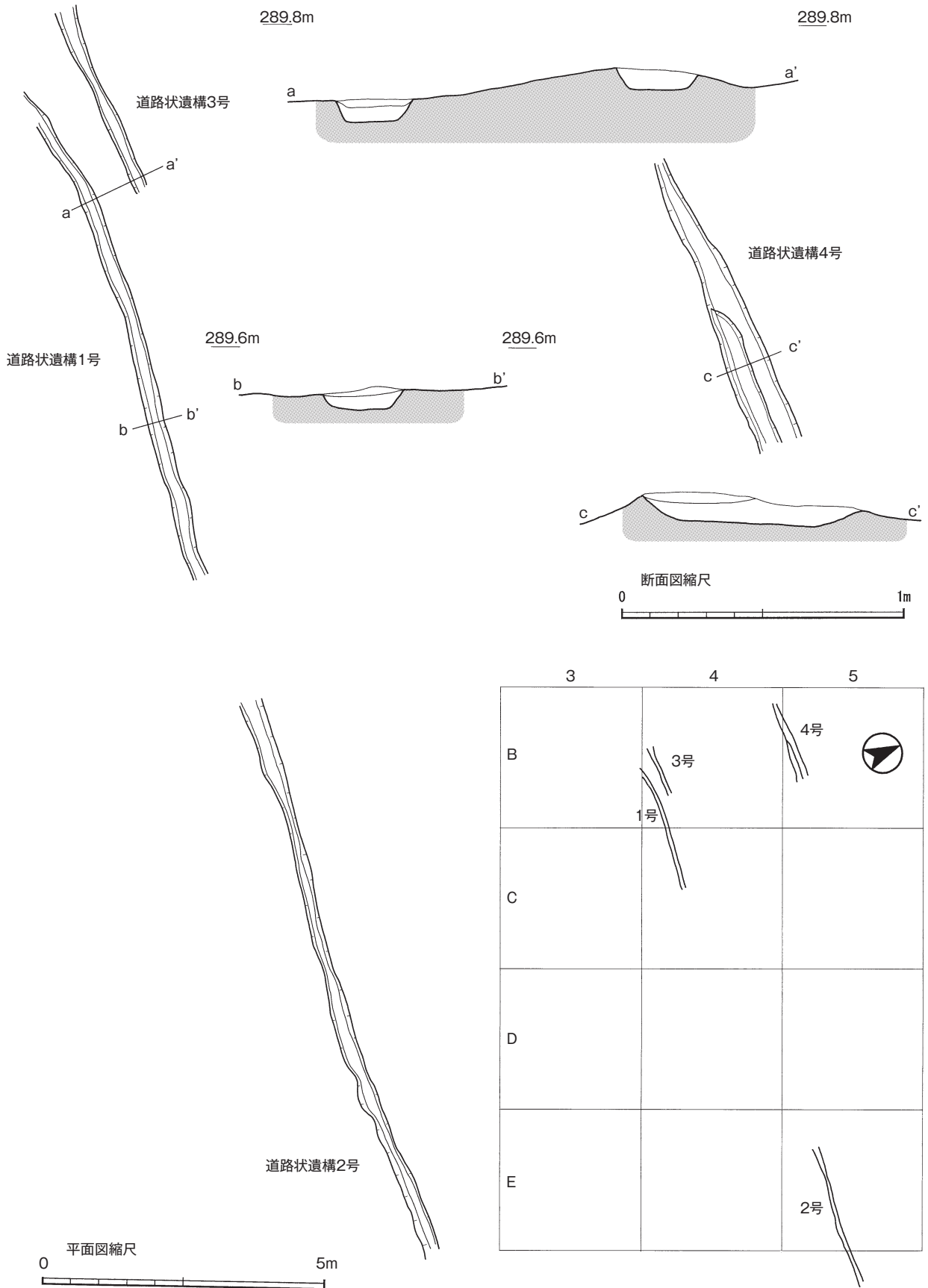
A 類	底面近くにほぼ水平に堆積する黒色土 (VIII層) を基本とする埋土 土黄色パミスを含む 含まれる黄色パミスの量により細分 A-① < A-②
B 類	右側 (a側) が崩れたために流れ込んだと考えられる埋土IV層 (アカホヤ層) を基本とし、黒色土 (III層) が混じる。 アカホヤに混じる黒色土の量により細分 B-③ < B-② < B-① 少 ⇨ 多
C 類	黒色土 (III層) を基本とする埋土 C-①: 黒色土の中に15cm程度度アカホヤのブロックを含む。 C-②: 黒色土の下の部分にアカホヤを含む。
D 類	黒色土 (III層) を基本とする埋土、レンズ状に堆積をしている。 砂やアカホヤを含み灰色味を帯びたり、黄色味を帯びる。 D-①: 砂を含みややや灰色味を帯びる。 D-②: アカホヤを含み黄色味を帯びる。

第35図 落とし穴実測図





第36図 畑跡実測図



第37図 道路状遺構実測図

### 第3項 遺物

#### 弥生時代 (第38図 207)

弥生時代の遺物は、甕形土器の完形品1点である。207は甕形土器である。口縁部径18cm, 底部径8.5cm, 器高20.2cmを測る。底部は中空の脚台で, 胴部はやや膨らみながら立ち上がり頸部でしまる。口縁部は「く」の字状に近く外反し, 内面の稜線はわずかに認められる。外面は胴部下位はハケ目でその上位はヘラケズリ, 胴部中位から頸部はハケによるカキ上げを施した後, 横ナデが見られる。内面は胴部は工具ナデ, 口縁部はハケ目である。

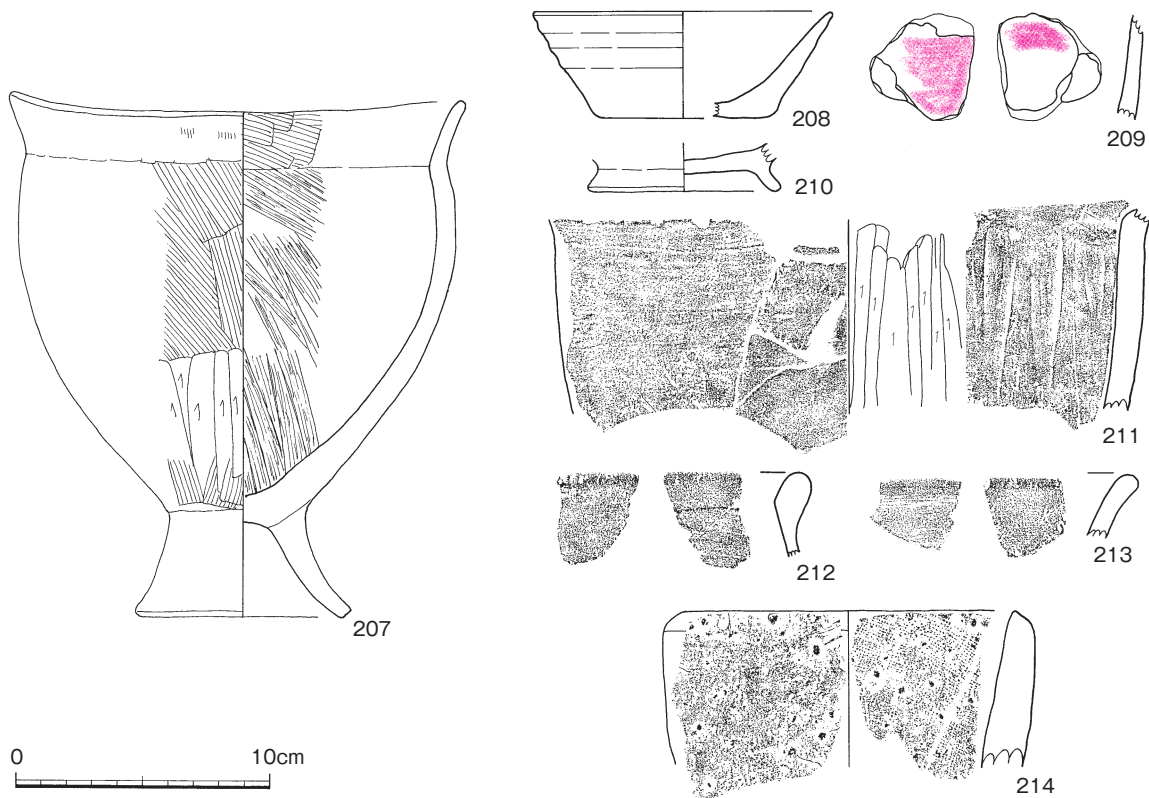
#### 古代 (第38図 208~214)

208は口径12cm, 器高4.5cmを測る坏である。ヘラ切りの底部から直線的に立ち上がり口縁部へ至るものである。209は赤色土器で坏と思われる胴部片である。外面・内面共に赤色顔料の塗布が認められる。

210は内黒土師器の碗と思われる。底部は径8.5cmの高台で, 内面は黒色でヘラ磨きが認められる。

211~213は甕である。211は復元頸部径29cmを測る。口縁部は欠損するが, 外反するものと思われる。調整は外面はハケ目, 内面は胴部から頸部へかけてヘラケズリである。外面の一部にススの付着が認められる。212・213は口縁部が外反するもので, やや小型の甕である。212は内面にヘラケズリが認められ, 胴部上位が薄くなっている。

214は口縁部径14cmを測る焼塩土器である。内面に布目圧痕が認められる。胎土には3mm前後の小礫を多く含む。



第38図 弥生~古代出土遺物

第1表 縄文時代土器観察表(1)

挿図番号	レイアウト	分類	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号
15	2	1類	縄文・沈線	ナデ	灰黄	灰黄	長石	硬質		856,857,858
	3	2類	沈線	ナデ	黒褐	黒褐	雲・角・長	硬質		52,799,803ほか
	4	3類	沈線	ナデ	橙	橙	長・石・砂	硬質		82,83,197
	5	3類	ナデ	ナデ	橙	橙	長・石・砂	硬質		89,152,190ほか
	6	3類	ナデ	ナデ	橙	橙	長・石・砂	硬質		78,192,195
	7	4類	沈線	ナデ	明褐	明褐	長・角	硬質		743
16	8	4類	沈線	ナデ	明褐	にぶい黄橙	長・角	硬質		891
	9	4類	沈線	ナデ	明褐	にぶい褐色	長・角	硬質		740
	10	4類	沈線	ナデ	橙	明褐	長・角	硬質		1402,1552
	11	4類	沈線	ナデ	明褐	明褐	長・角	硬質		1579,1580,1582
	12	4類	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	長・角	硬質		1573,1744
	13	4類	沈線	ナデ	明褐	褐	長・角	硬質		1699,1575
	14	4類	沈線	ナデ	明褐	にぶい黄褐	長・角	硬質		1742
	15	4類	ナデ	ナデ	にぶい褐	褐	長・角・火	硬質		1617
	16	5類	沈線・燃糸文	ナデ	にぶい黄橙	オリーブ褐	長・角	硬質		859
	17	5類	沈線・燃糸文	ナデ	にぶい黄	黒褐	長・角	硬質		786
	18	6類	ナデ	条痕・ナデ	黄褐	にぶい黄褐	長・角	硬質		1368,1388,1761
	19	6類	条痕・ナデ	条痕・ナデ	橙	にぶい黄橙	長・角・火	硬質		116,117,118ほか

第2表 縄文時代土器観察表(2)

挿図番号	レイアウト	分類	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号
17	20	7a-1類	条痕・ナデ	条痕・ナデ	黒褐	黒褐	長石	硬質		810
	21	7a-1類	条痕・ナデ	条痕・ナデ	黒褐	灰黄褐	長・角	硬質	外煤付着	900
	22	7a-1類	条痕・ナデ	ナデ	黒褐	灰黄褐	長・砂	硬質	外・内煤付着	998
	23	7a-1類	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	長・砂	硬質		401
	24	7a-1類	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい橙	長・角・砂	硬質		446
	25	7a-1類	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	赤褐	黒褐	長・角	硬質		737
	26	7a-1類	ナデ	ナデ	黒褐	黒褐	長・角・砂	硬質		1430
	27	7a-1類	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長・角	硬質		1571
	28	7a-1類	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	長・角	硬質		841
	29	7a-1類	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長・角・砂	硬質		1755,1757
18	30	7a-2類	突帯・条痕・ナデ	条痕・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長・角・砂	硬質	外・内煤付着	1024,1025,1239
	31	7a-2類	突帯・ナデ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	長・角・砂	硬質	外煤付着	1818,1087
	32	7a-2類	突帯・条痕・ナデ	条痕・ナデ	褐	灰黄褐	長・角・砂	硬質		1335,1357
	33	7a-2類	突帯・条痕・ナデ	条痕・ナデ	にぶい褐	褐	長・角・砂	硬質	外煤付着	1406,1411,1420ほか
	34	7a-2類	突帯・ナデ	ナデ・ミガキ	褐灰	にぶい黄橙	長・角・砂	硬質	外煤付着	1019
	35	7a-2類	突帯・ナデ	ナデ	暗灰黄	にぶい黄	長・角・砂	硬質		973
	36	7a-2類	突帯・ナデ	条痕・ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	長・角・砂	硬質		1142
	37	7a-2類	突帯・ナデ	条痕・ナデ	黒褐	暗赤褐	長・角・砂	硬質	外煤付着	949
	38	7a-2類	突帯・ミガキ	ナデ	黒褐	褐	長・砂	硬質	外煤付着	1610
	39	7a-2類	突帯・ナデ	ナデ	黒褐	暗褐	長石	硬質	外煤付着	541
19	40	7a-3類	突帯・ナデ	条痕	にぶい赤褐	明赤褐	長・角	硬質	外煤付着	916,919,926ほか
	41	7a-3類	突帯・ナデ	ケズリ・ミガキ	黒褐	にぶい黄褐	長・角・砂	硬質	外煤付着	1651
	42	7a-3類	突帯・ナデ	はく落	灰黄褐	黄灰	長・砂	硬質		1355
	43	7a-3類	突帯・ナデ	ナデ	にぶい赤褐	橙	長・角・砂	硬質		1520
	44	7a-3類	突帯	条痕・ナデ	浅黄	浅黄	長・砂	硬質		1666,1572
	45	7a-3類	突帯・ナデ	ナデ・ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質	外煤付着	表探
	46	7a-3類	突帯・条痕	条痕・ナデ	黒褐	黒褐	長石	硬質		1123,1124
	47	7a-3類	突帯・条痕	条痕・ナデ	オリーブ黒	灰オリーブ	長・砂	硬質	外煤付着	1410
	48	7a-3類	突帯	ナデ	黒褐	褐灰	長・砂	硬質	外煤付着	1771
	49	7a-4類	突帯・条痕・ナデ	条痕・ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	長・角	硬質	外煤付着	1361,1362,1489ほか
20	50	7a-4類	突帯・ケズリ・ミガキ	条痕・ナデ	黄灰	にぶい黄褐	長・角・砂	硬質	外煤付着	1502
	51	7a-4類	突帯・条痕・ナデ	条痕・ナデ	浅黄	にぶい黄橙	長・角・砂	硬質	外煤付着	1012
	52	7a-4類	突帯・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角・砂	硬質		1092
	53	7a-4類	突帯・ケズリ・ミガキ	ケズリ	褐	褐	長・砂	硬質		935
	54	7a-4類	突帯・ナデ	ケズリ・ナデ	褐	明褐	長・角・砂	硬質		467
	55	7a-4類	突帯・ナデ	ケズリ・ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	長・角・砂	硬質		1683
	56	7a-4類	突帯・条痕	条痕・ナデ	明褐	褐	長・砂	硬質	外煤付着	1385
	57	7a-4類	突帯・ミガキ	ナデ	黄灰	にぶい黄	長・角・砂	硬質	外煤付着	1345
	58	7a-4類	突帯・ナデ	ケズリ・ミガキ	褐	にぶい褐	長・角・砂	硬質		1566
	59	7a-5類	条痕	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄	長・角・砂	硬質		896,897
	60	7a-5類	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角・砂	硬質		一括
	61	7a-5類	ナデ	ナデ	褐	灰黄褐	長・角	硬質		958
	62	7a-5類	網代圧痕	ナデ	褐	にぶい黄橙	長・砂	硬質		1342,1484
21	63	7b-1類	条痕・ミガキ	ナデ・ミガキ	橙	にぶい黄橙	長・角・砂	硬質	外・内煤付着	1259
	64	7b-1類	条痕	条痕・ナデ	にぶい黄	にぶい黄	長・角	硬質	外煤付着	1673,1567
	65	7b-1類	ケズリ・ミガキ	ケズリ・ミガキ	明赤褐	にぶい橙	長・角・砂	硬質	外煤付着	1623,1756
	66	7b-1類	ナデ・編布	ナデ	灰黄	にぶい黄	長・砂	硬質	外煤付着	847,848,849
	67	7b-1類	ナデ	ナデ	灰黄	褐灰	長・角	硬質	外煤付着	1054
	68	7b-1類	条痕	ケズリ・ミガキ	明赤褐	明赤褐	長・角	硬質	外煤付着	980,1387,1707
	69	7b-1類	編布	ミガキ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	長・角	硬質		1533
	70	7b-1類	編布	ミガキ	明褐	にぶい褐	長・角	硬質	外煤付着	979,1212
	71	7b-1類	編布	ミガキ	明褐	にぶい褐	長・角	硬質		405

第3表 縄文時代土器観察表(3)

挿図番号	レイアウト	分類	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号
22	72	7b-2類	条痕	ケズリ・ミガキ	黒褐	にぶい褐	長・角・砂	硬質	外煤付着	1107
	73	7b-2類	一	ナデ	浅黄	黄褐	長・角・砂	硬質	外煤付着	1089
	74	7b-2類	条痕	条痕・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角・砂	硬質	外煤付着	1326
	75	7b-2類	条痕	条痕・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長・角・砂	硬質	外煤付着	一括
	76	7b-2類	突帯・ナデ	ミガキ	黒褐	黒褐	長石	硬質	外煤付着	1316
	77	7b-2類	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい褐	長・砂	硬質		1614
	78	7b-2類	条痕・ミガキ	ケズリ・ミガキ	暗褐	にぶい褐	長・砂	硬質	外煤付着	1127, 1128, 1129ほか
23	79	7b-2類	条痕・木葉痕	ケズリ・ミガキ	にぶい橙	にぶい褐	長・砂	硬質	外・内煤付着	938, 1153, 1359ほか
	80	7b-2類	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角・火	硬質	外煤付着	1351, 1069
	81	7b-2類	条痕・ナデ・編布	ナデ・ミガキ	灰黄	暗灰黄	長・砂	硬質	外・内煤付着	1041, 1042, 1045ほか
24	82	7b-2類	ナデ	ケズリ・ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質	外煤付着	934
	83	7b-3類	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質	外・内煤付着	285, 336, 623ほか
	84	7b-3類	ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質		1778
25	85	7b-3類	条痕・ナデ	ナデ・はく落	灰黄褐	にぶい黄褐	長・砂	硬質	外煤付着	435, 438, 442ほか
	86	7b-4類	ナデ・編布	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		920, 1137, 1138ほか
	87	7b-4類	条痕網目	条痕・ナデ	褐	暗褐	長・砂	硬質	外・内煤付着	966, 967, 970ほか
	88	7b-4類	ナデ・編布	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	長・角	硬質	外煤付着	1020, 1578
	89	7b-4類	ナデ・編布	はく落	黄灰	にぶい黄橙	長・角	硬質	外煤付着	1438
	90	7b-4類	条痕編布	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石	硬質		1613, 1620
	91	7b-4類	ナデ・編布	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石	硬質		1120, 1475, 1546ほか
	92	7b-4類	ナデ・編布	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		1046
	93	7b-4類	ナデ・編布	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質	外煤付着	1067, 1535
	94	7b-4類	条痕編布	ケズリ・ミガキ	褐	褐	長石	硬質	外煤付着	1655
	95	7b-4類	編布	ナデ・ミガキ	明褐	灰黄褐	長・砂	硬質	内煤付着	1670
	96	7b-4類	編布	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	長・角	硬質	外・内煤付着	1346
	26	97	7b-4類	編布	ミガキ	にぶい黄褐	灰黄褐	長・砂・角	硬質	
98		7b-4類	編布	ミガキ	にぶい黄橙	黒	長・砂	硬質		1774
99		7b-4類	編布	ミガキ	にぶい黄橙	黒	長・砂	硬質		965
100		7b-4類	編布	条痕	にぶい黄	にぶい黄	長・砂	硬質	外・内煤付着	1562
101		7b-4類	編布	ミガキ	にぶい黄橙	褐灰	長・角・砂・火	硬質	外・内煤付着	1650
102		7b-4類	編布	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	長・角・砂	硬質		1358, 1495
103		7b-4類	編布	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	長・角・砂	硬質		386, 1494
104		7b-4類	編布	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質	内煤付着	385, 1785
105		7b-4類	編布	ナデ	にぶい黄	黄灰	長・角・砂	硬質		281
106		7b-4類	編布	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	長石	硬質		1393, 1400
107		7b-4類	編布	ミガキ	にぶい黄橙	暗灰黄	長・砂	硬質		842
108		7b-4類	編布	ナデ	浅黄	灰黄	長・砂	硬質		1004
109		7b-4類	編布	ナデ	にぶい黄	黄灰	長石	硬質		1433
27	110	7b-4類	編布圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質		1485
	111	7b-4類	編布圧痕	条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質	内煤付着	1698
	112	7b-4類	編布圧痕	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	長石	硬質	内煤付着	1601
	113	7b-4類	編布圧痕	ナデ	灰黄	暗灰黄	長・砂	硬質		1044
	114	7b-4類	編布圧痕	ナデ	にぶい褐	黒褐	長石	硬質	内煤付着	1640
	115	7b-4類	編布圧痕	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	長・角	硬質	内煤付着	1422
	116	7b-4類	編布圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石	硬質	外・内煤付着	1333
	117	7b-4類	編布圧痕	一	にぶい黄橙	灰黄	長・砂	硬質		1773
	118	7b-4類	編布圧痕	一	橙	黒褐	長・砂	硬質		1711
	119	7b-4類	編布圧痕	ヘラ削り	浅黄	暗灰黄	長石	硬質		560
	120	7b-4類	編布圧痕	一	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質		1231
	121	7b-4類	編布圧痕	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	長・角	硬質		Gトレイ一括
	122	7b-4類	編布圧痕	ナデ	橙	灰黄	長・角	硬質		421
123	7b-4類	編布圧痕	ナデ	明褐	にぶい黄橙	長・角・砂	硬質	粘土貼り付け	1816	
124	7b-4類	編布圧痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質	内煤付着・粘土貼り付け	885	
125	7b-4類	網目圧痕文	一	にぶい黄橙	浅黄	長・砂	硬質		1255	
126	7b-4類	網目圧痕文	一	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・砂	硬質		624	
127	7b-4類	網目圧痕文	ナデ	浅黄	オリーブ褐	長・砂	硬質		1330	
128	7b-4類	ナデ	ミガキ	にぶい褐	暗灰黄	長・角・砂	硬質		7, 751, 752	
129	7c-1類	ナデ	ナデ	明赤褐	橙	長・角	硬質	外丹塗りあり	932, 939, 940ほか	
28	130	7c-1類	ミガキ	ナデ・ミガキ	褐	灰褐	長・角	硬質	外煤付着	1192, 1257
	131	7c-1類	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		1131, 1132, 1414
	132	7c-1類	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長・角	硬質		1317
	133	7c-1類	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長・角	硬質		1396
	134	7c-1類	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		1462
	135	7c-1類	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄褐	長・角・砂	硬質		1421
	136	7c-1類	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	黒褐	長・角	硬質		1551
	137	7c-1類	ミガキ	ナデ	暗褐	褐	長・角	硬質		1193
	138	7c-1類	ナデ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	長・角	硬質		1343
	139	7c-1類	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		995, 1229
	140	7c-1類	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		1423
	141	7c-1類	ナデ・指押さえ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	長・角	硬質		1766
	142	7c-1類	ナデ・ミガキ	ナデ	暗褐	にぶい褐	長・角	硬質		1394
	143	7c-1類	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	黒褐	にぶい黄褐	長石	硬質		1661
	144	7c-1類	ナデ・ミガキ	ナデ	褐	褐	長石	硬質		1437
	145	7c-1類	ナデ	ナデ・ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	長石	硬質		318

第4表 縄文時代土器観察表(4)

挿図番号	レイアウト	分類	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号
28	146	7c-1類	指押さえ・ナデ	ナデ	橙	橙	長・角	硬質	外丹塗りあり	1435
	147	7c-1類	ナデ	ナデ	褐	にぶい黄褐	長・角	硬質	外丹塗りあり	1248,1301
	148	7c-1類	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質	外丹塗りあり	479
	149	7c-1類	ナデ	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	長・角	硬質	外丹塗りあり	1027
	150	7c-1類	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長・角	硬質		1356
	151	7c-1類	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		1458
	152	7c-1類	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	長・角	硬質		1162
	153	7c-1類	指押さえ・ミガキ	ミガキ	橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		1604
	154	7c-1類	ミガキ	ナデ	灰黄	褐灰	長・角	硬質		1693
	155	7c-1類	ナデ	ミガキ	灰黄褐	赤褐	長石	硬質	外丹塗りあり	428,440,1657
29	156	7c-2類	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	長・角	硬質		1516
	157	7c-2類	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質	穿孔(焼成後)	1105,1033,1034
	158	7c-2類	指押さえ・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	長・角	硬質		1314
	159	7c-2類	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		1363
	160	7c-2類	ナデ	ナデ	橙	灰黄褐	長石	硬質		315
	161	7c-2類	ナデ	ナデ	橙	黄橙	長・角	硬質		1014
	162	7c-2類	指押さえ・ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	長・角	硬質	底部に木葉痕あり	1496
	163	7c-2類	ナデ	ミガキ	にぶい黄褐	黒	長・角	硬質	胴部に編布圧痕あり	1615,1635
	164	7d類	ナデ	指押さえ・ナデ	にぶい褐	にぶい褐	長・角	硬質		1066
	165	7d類	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質	外丹塗りあり	1217
	166	7d類	ナデ	ナデ	明褐	橙	長・角	硬質	外丹塗りあり	1331
	167	7d類	ナデ	指押さえ・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長石	硬質		1084
	168	7e類	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長・火	硬質		1682

第5表 弥生～中世遺物観察表

挿図番号	レイアウト	分類	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号
38	207	かめ	ハラケズリ	ナデ	黄橙	黄橙	長石	硬質		1821
	208	土師杯	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	長石	硬質		273
	209	赤色土器	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	長石	硬質	内・外赤色顔料塗布	1801
	210	土師碗	ナデ	ミガキ	黒	黒	長石	硬質		353,1764
	211	土師かめ	ハラケ目	ハラ割り・ナデ	黄橙	黄橙	長石	硬質		1554,1555,1556ほか
	212	土師かめ	ナデ	ハラ割り・ナデ	黄橙	黄橙	長石	硬質		279
	213	土師かめ	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	長石	硬質		Gトレイ一括
	214	焼塩土器	指押さえ・ナデ	布目圧痕	黄橙	黄橙	砂粒	硬質		356

第6表 石器観察表

挿図番号	レイアウト	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	区	層位	取上番号
8	1	ハンマーストーン	7.1	5.3	3.7	210	砂岩	7T G-6	13	1
30	169	石鏃	1.3	1.2	0.2	0.28	サヌカイト	Gトレ	4 a	377
	170	石鏃	1.1	1.7	0.3	0.6	ob	C-1	4 b	1786
	171	石鏃	1.2	1.6	0.3	0.36	サヌカイト	C-1	4 a	1703
	172	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.58	ob	D-1	4 a	1398
	173	石鏃	1.8	2	0.3	0.86	サヌカイト	E-2	4 a	1692
	174	石鏃	2	1.1	0.4	0.64	頁岩	Gトレ	4 a	566
	175	石鏃	2	1.5	0.4	0.81	サヌカイト	Gトレ	4 a	616
	176	石鏃	1.3	1.6	0.25	0.61	チャート	C-2	4 a	1457
	177	石鏃	1.3	1.3	0.3	0.31	ob	D-6	4 b	865
	178	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.68	タンバク石	D-5	4 b	886
	179	石鏃	1.1	1.8	0.2	0.38	チャート	Jトレ	4 b	473
	180	石鏃	3	1.7	0.3	0.33	サヌカイト	D-32	4	66
	181	石鏃	1.8	1.3	0.2	0.41	サヌカイト	Gトレ	4 a	376
	182	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.63	サヌカイト	C-2	4 b	1289
	183	石鏃	1.6	1.1	0.25	0.54	チャート	Gトレ	4 b	685
	184	石鏃	20	1.15	0.4	1.24	ob	A地点	表採	-
	185	石鏃	2.3	1.5	0.6	1.59	サヌカイト	B-2	4 a	1180
	186	石鏃	2.2	2.2	0.5	1.65	サヌカイト	C-2	4 a	1284
	187	石鏃	1.5	1.8	0.45	0.97	ob.腰岳	Gトレ	4 a	357
	188	石鏃	1.4	1	0.25	0.33	ob	F-31	4 a	410
189	石鏃	1.5	1.25	0.15	0.33	サヌカイト	C-2	4 b	1051	
31	190	ピエス	1.65	1.35	0.55	1.34	ob.桑ノ木	D-6	4 b	863
	191	スクレイパー	4	3.8	1	17.22	チャート	B-1	4 a	1160
	192	スクレイパー	1.95	1.4	0.3	1.31	サヌカイト	C-1	4 a	1512
	193	スクレイパー	1.1	2.55	0.5	1.08	サヌカイト	C-2	4 b	1291
	194	UF	2.4	3.1	0.55	5.43	ob	F-3	4 b	1303
	195	スクレイパー	7	2.6	0.9	9.4	サヌカイト	E-2	4 a	1689
	196	打製石斧	4.8	3	0.9	7.64	砂岩	C-1	4 a	1428
32	197	磨製石斧	11.5	5.7	2.7	195	安山岩	E-33	4	57
	198	磨石	9.2	7.7	6	640	安山岩	C-6	4 b	873
	199	磨石敲石	9.7	8.1	3.6	430	砂岩	C地点	表採	-
	200	磨石敲石	5.5	4.6	2.6	100	砂岩	F-2	3 b下	1641
	201	磨石敲石	5.6	4.1	2.1	70	安山岩	C-1	4 a	1440
	202	磨石敲石	6.9	5.1	2.5	125	安山岩	B-2	4 b	1271
	203	磨石敲石	7.1	4.7	3.2	150	安山岩	C-1	4 a	1432
	204	磨石敲石	5.4	5	4	150	安山岩	C-1	4 a	1529
33	205	磨石敲石	7.1	6.2	4.4	230	安山岩	B-1	4 b	921
	206	石皿	32.3	20.2	5.8	5700	砂岩	B-2	横転	1258

## 第5節 まとめ

西原段Ⅰ遺跡は圃場整備等により、畑地であった部分はⅨ層～Ⅹ層近くまで攪乱を受けている部分もあり、当初遺跡範囲としたA・B地点では、遺構・遺物はほとんど検出・出土しなかった。宅地部分であったC地点の試掘調査の結果、Ⅱ層の文明ボラも残存していることがわかり、Ⅳ層を中心に縄文時代晩期の遺物包含層が確認され、遺跡範囲をC地点まで拡張し調査を行った。

調査の結果、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡で、縄文時代晩期から弥生時代初頭への移行期を主とした遺跡であることが判明した。

### 旧石器時代について

旧石器時代の遺物が確認されたのは、平成18年度調査範囲のF-16区7トレンチ及び7トレンチ拡張部分のみである。F-16区は、調査区南東側から北西側にかけて入る谷の谷頭に当たる部分である。ⅩⅢ層よりハンマーストーン1点、ⅩⅦ層から剥片が1点出土している。

### 縄文時代について

#### 1 遺構

早期相当の遺構はⅧ層上面で集石が3基検出された。集石はいずれも掘込みは確認できなかった。石材はほとんどが安山岩であった。

前期から晩期相当の遺構はⅣa層で集石が1基、Ⅳ層埋土の土坑が3基検出された。集石は34個の石を確認した。被熱により赤化した石も確認された。石材は安山岩である。

土坑1号・2号は削平されているため検出面がⅧ層であるが、埋土にⅣ層の御池火山灰を含むことから前期から中期相当と考えられる。土坑3号も削平を受けているが、Ⅳ層面で検出された。埋土は炭を含む黒色土である。周囲の土器の出土状況から晩期相当の土坑と考えられる。

#### 2 遺物

1類土器はキャリパー形の器形で、単節縄文を施文後、口縁部及び頸部から胴部にかけて太めの沈線文様を施してある。この特徴は志布志市野久尾遺跡に類例があると東氏より御教示をいただいた。中期中葉の春日式土器北手牧段階に並行すると考えられる。2類土器は砲弾形に近い器形で底部は平底である。口縁部から底部近くにかけて縦方向に浅い沈線を密に施すもので類例を確認できず位置付けについて苦慮するが、1類土器と共に出土したことから近い関係が考えられる。胎土についても大粒の金色雲母がわずかに含まれる点は、南九州には例が無く東九州を含めた他の地域との関係を探る必要がある。類例を待ちたい。

3～6類土器は後期相当の土器と考えられる。3類は波状の口縁をもち口縁部付近にのみ凹線文が施され胴部以下は無文である。阿高式系土器と考えられる。4類は沈線文が施されることから指宿系土器と考えられる。5類は指宿系土器の底部であると考えられる。6類土器は沈線と撚糸文で施文される。

7類土器は本遺跡の主体となる土器である。縄文時代晩期から弥生時代への移行期の土器群と考えられる。7a類を深鉢・甕形土器、7b類を鉢形土器、7c類を浅鉢形土器、7d類を壺形土器及び高坏とし、刻目突帯の有無、及び、刻目突帯の位置、組織痕の有無をもとに細分した。

40・63・72・79に付着した炭化物についての年代分析を行った。結果は下記のとおりである。

遺物番号	72	63	79	40
類	7 b - 2 b (鉢形土器) 2 (突帯が下がる) (組織痕なし)	7 b - 1 b (鉢形土器) 1 (突帯をもたない) (組織痕なし)	7 b - 2 b (鉢形土器) 2 (突帯が下がる) (組織痕あり)	7 a - 3 a (深鉢・甕形土器) 3 (突帯が接する)
<sup>14</sup> C年代	2505 ± 30yrBP	2500 ± 30yrBP	2470 ± 30yrBP	2400 ± 30yrBP

刻目突帯の有無と刻目突帯の位置で時期差を見てみると、刻目突帯位置が口縁部端から下がるものと刻目突帯をもたないものの時期差は少なく、刻目突帯位置が口縁部端に接するものと口縁部端から下がるものとは、口縁部端から下がるものの方が古い時期のものではないかと考えられる。しかしながら、試料数が4点と少ないため、今後の試料の増加を期待したい。

石器は石鏃21点、楔形石器1点、削器5点、石斧2点、磨敲石類8点、石皿1点が出土した。石器組成は当時の生業を反映しており、本遺跡は狩猟が中心であったとなるが、全体的に出土数が少なく、出土範囲も耕地整理等による攪乱によって限られていることから、一側面が見えたにすぎないと思われる。

### 弥生時代から中世について

弥生時代の遺物は中津野式の甕形土器1点のみである。中世の遺構は文明ボラの下から、落とし穴、畑跡、道路状遺構が検出された。

落とし穴は埋土の一番上がⅢ層の黒色土で、1471年の桜島起源の噴出物の文明ボラを含まないことから中世のものと考えられる。中世の落とし穴の例として、鹿児島県のチシャノ木遺跡で1基、宮崎県の梶粉山遺跡から15基検出されている。形状や逆茂木の状況など類似している。畑跡は未調査区に広がる可能性が考えられる。今後の調査で栽培作物等も含め性格をより解明できることを期待したい。道路状遺構は現在の道路とほぼ並行になっている。調査区東側に谷頭があり地形に沿った道路であると考えられる。

古代の出土遺物は土師器の坏1点、赤色土器の坏と思われる胴部片1点、内黒土師器の碗1点、土師甕3点、焼塩土器1点が出土した。

#### 〈引用・参考文献〉

- 唐津市教育委員会 1982 「菜畑遺跡」 唐津市文化財調査報告 第5集  
 藤尾 慎一郎 2003 「弥生変革期の考古学」  
 末吉町教育委員会編 1986 「上中段遺跡」 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター2006 「市ノ原遺跡」(第5地点) 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (105)  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター2008 「チシャノ木遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (125)  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター2002 「計志加里遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (38)  
 宮崎県高原町教育委員会 2003 「梶粉山遺跡」 高原町文化財調査報告 第10集  
 東 和幸 2002 「鹿児島県の組織痕土器」 『南日本縄文通信No.12』 南日本縄文研究会



# 西原段 I 遺跡の出土土器附着炭化物の自然科学分析(放射性炭素年代測定)

## I 「株式会社 パレオ・ラボ」による報告 (一部抜粋)

### 1 はじめに

鹿児島県に位置する西原段 I 遺跡から検出された試料について、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調整は廣田, 瀬谷, Lomtadize, Jorjoliani, 測定は伊藤, 丹生, 小林が行い, 報告文は伊藤, 中村が作成した。

### 2 試料と方法

測定試料の情報, 調整データは表 1 のとおりである。

表 1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11045	遺跡名: 西原段 I 遺跡 調査区: B-1 区 試料No: 1 遺物No: 1107	試料の種類: 土器附着炭化物 部位: 口縁部外部 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N) スサルフィクス
PLD-11046	遺跡名: 西原段 I 遺跡 調査区: B-2 区 試料No: 2 遺物No: 1259	試料の種類: 土器附着炭化物 部位: 口縁部外部 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N) スサルフィクス

### 3 結果

放射性炭素年代測定法及び暦年較正の結果は表 2 のとおりである。

表 2 放射性炭素年代測定法及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-11045 試料No: 1 遺物No: 1107	-25.29 $\pm$ 0.22	2507 $\pm$ 28	2505 $\pm$ 30	767BC (10.5%) 746BC 688BC (11.5%) 665BC 646BC (46.2%) 553BC	768BC (95.4%) 538BC
PLD-11046 試料No: 2 遺物No: 1259	-26.62 $\pm$ 0.20	2498 $\pm$ 28	2500 $\pm$ 30	763BC (11.5%) 738BC 689BC (3.6%) 681BC 672BC (4.1%) 663BC 648BC (49.0%) 548BC	776BC (95.4%) 520BC

### 4 考察

試料について, 同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。2  $\sigma$  暦年代範囲 (95.4%の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する。) に着目して結果を整理する。暦年代と考古学編年との対応について, 縄文時代はキーリ・武藤1982と小林2008, 弥生時代は春成・今村編2004, 西本編2006, 西本編2007を参照した。

西原段 I 遺跡の試料No 1 (PLD-11045) は786-538calBC (95.4%), 試料No 2 (PLD-11046) は776-520calBC (95.4%)である。いずれも紀元前8世紀前半から紀元前6世紀後半の範囲を示した。

## II 「株式会社 加速器分析研究所」による報告 (一部抜粋)

### 1 測定対象試料

測定対象試料は、IV層から出土した土器付着炭化物2点 (No.1 : IAAA-80768 : 遺物No.1316, No.2 : IAAA-80769 : 遺物No.1136) である。測定試料は、共に土器の外表面から採取した。

### 2 化学処理工程 (略)

### 3 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 4 算出方法 (一部略)

(1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。

(2) <sup>14</sup>C年代(LibbyAge : yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。<sup>14</sup>C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cを測定した場合には表中に(AMS)と注記する。

(4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を基に描かれた較正曲線と照らし(以下略)

### 5 測定結果

IV層から出土した土器付着炭化物の<sup>14</sup>C年代は、No.1が $2400 \pm 30\text{yrBP}$ 、No.2が $2470 \pm 30\text{yrBP}$ である。試料の炭素含有率は、57.9%(No.1)と55.3%(No.2)であり十分な値である。化学処理および測定内容にも問題なく、妥当な年代と考えられる。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						LibbyAge (yrBP)	pMC (%)
IAAA-80768	No.1	層位 : IV層	炭化物	AaA	$-21.01 \pm 0.36$	$2,400 \pm 30$	$74.14 \pm 0.28$
IAAA-80769	No.2	層位 : IV層	炭化物	AaA	$-19.58 \pm 0.32$	$2,470 \pm 30$	$73.54 \pm 0.24$

[#2350]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-80768 遺物No.1316	$2,340 \pm 30$	$74.75 \pm 0.28$	$2,402 \pm 30$	511BC-405BC (68.2%)	732BC-691BC (8.9%) 661BC-651BC (1.5%) 545BC-397BC (85.1%)
IAAA-80769 遺物No.1136	$2,380 \pm 30$	$74.36 \pm 0.24$	$2,468 \pm 30$	751BC-697BC (26.4%) 667BC-637BC (12.0%) 621BC-615BC (2.0%) 594BC-519BC (27.8%)	761BC-682BC (29.5%) 671BC-484BC (58.0%) 465BC-416BC (7.9%)

[参考値]

## 第Ⅵ章 野鹿倉遺跡

### 第1節 発掘調査の方法及び層位

平成18年度の野鹿倉遺跡の確認調査は、西原段Ⅰ遺跡の本調査と並行しながら、平成19年2月1日から平成19年2月16日まで実施した。調査前の現地の状況は、馬の背状の平坦地を持つ傾斜地で、杉及び比較的小さな雑木の茂る荒地であった。

地形及び用地買収の関係で重機が進入できないため、馬の背状の平坦地の雑木を伐採し、2m×5mの大きさのトレンチ2本（Aトレンチ、Bトレンチ）を設定し、表土から人力で掘り下げながら調査を行った。

調査の結果、A・B両トレンチとも、表土下約30cmにⅡ層の文明ボラが確認できた。Aトレンチからは、Ⅶ層及びⅧ層から土器片数点、礫数点が確認でき、BトレンチからはⅢbから土師器1点、Ⅶ層から礫数点が確認できた。遺構は両トレンチとも検出されなかった。また、Ⅸ層以下は深さが2mを超えるため確認調査を行わなかった。

平成19年度の野鹿倉遺跡の確認及び本調査は、西原段Ⅰ遺跡の本調査と並行しながら、平成19年8月1日から平成19年10月26日まで実施した。

調査区域は、10m×10mのグリッドを設定して調査を行った。グリッドの設定は、工事用基準杭S T A 253+20とS T A 252+60の2点を結ぶ直線を基準軸とし、西側から東側に向かってA・B・C・・・南側から北側に向かって1・2・3・・・とし、A-1区、B-2区、C-3区のように呼称した。

確認調査は、杉の伐採が終わってはいるが、杉の根は残ったままであったため、重機を使って、杉の根を除去した後に18年度は未買収のため調査が行えなかった馬の背状の平坦地の南側の傾斜地を中心に確認トレンチを6本設定し、遺物包含層の有無や広がりを確認した。

確認調査の結果、傾斜地西側の4つのトレンチからは、遺構・遺物ともに確認されなかったため、本調査の範囲を馬の背状の平坦地を中心に行うこととしたが、東側の1トレンチからは、X層、XⅦ層から旧石器時代の遺物が確認されたため、本調査の範囲を1トレンチ周辺の傾斜地まで拡張し調査を行った。2トレンチの横転層から礫が3点出土したが、上からの流れ込みと考えられる。

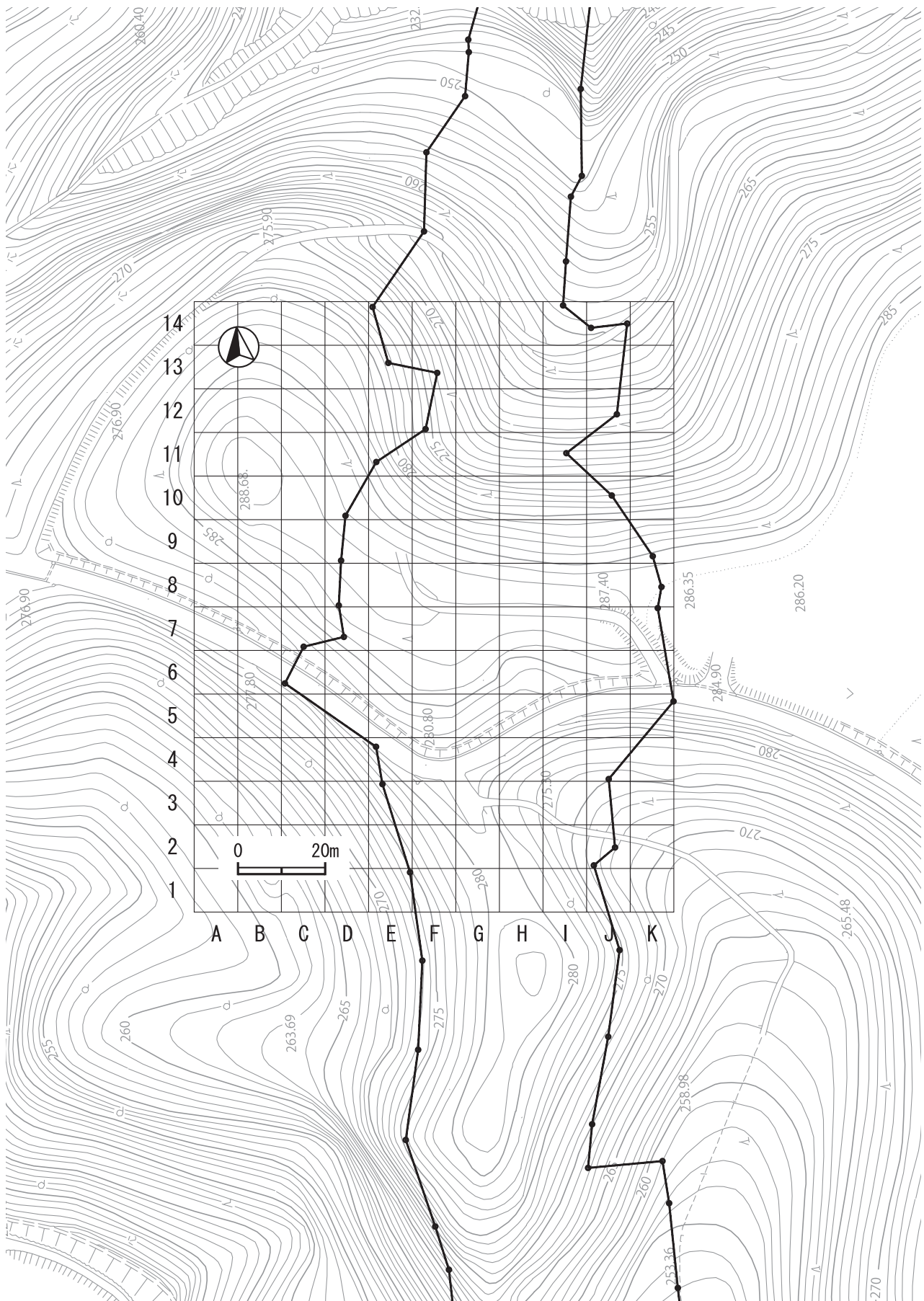
本調査は、馬の背状の平坦地（E～J-6～9区）部分及び、傾斜地東側（I・J-6・7区）部分について実施した。

馬の背状の平坦地（E～J-6～9区）部分は、表土からⅡ層までと杉の根を重機によって除去し、Ⅲ層からⅧ層まで人力による掘り下げを行い調査を行った。Ⅲb層から土師器、Ⅳa層から縄文時代後期から晩期の遺物、Ⅶ～Ⅷ層から縄文時代早期の集石遺構、遺物が確認された。

その後、旧石器の確認トレンチを設定し、XⅧ層（シラス）上面まで調査を行った。X層、XⅦ層から遺物が確認された。

傾斜地東側（I・J-6・7区）部分は、旧石器の遺物が確認された1トレンチを、地形的に高い北東側に約8m×8m拡張して、XⅧ層（シラス）上面まで調査を行った。

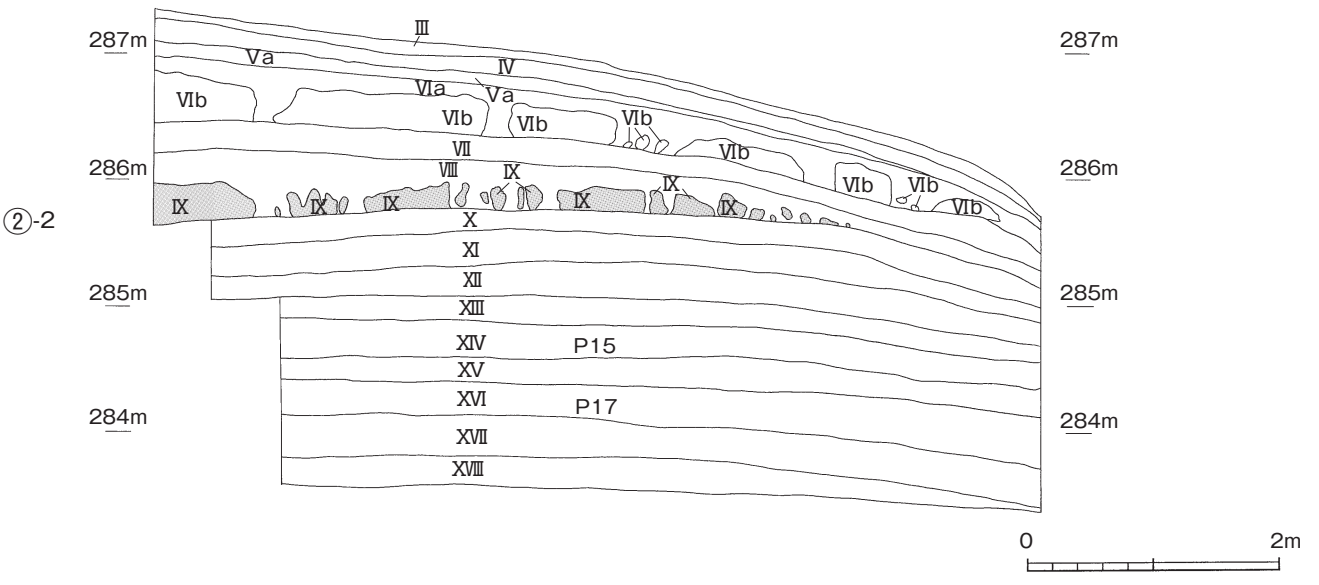
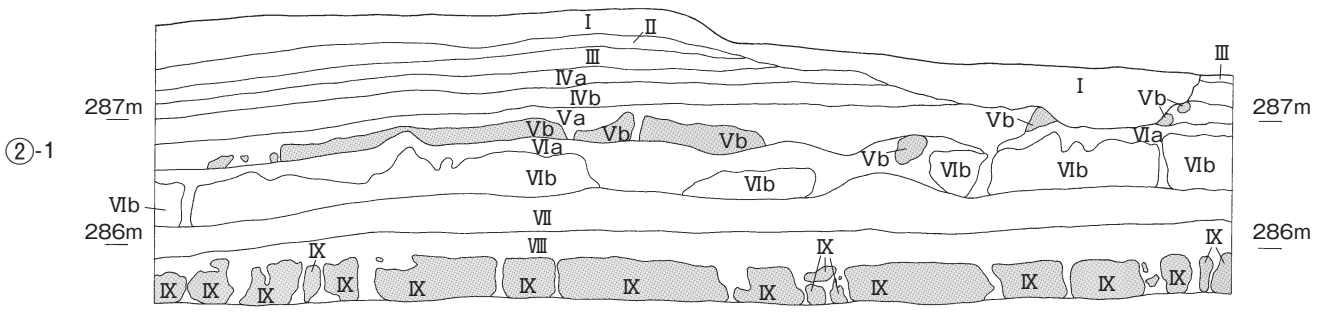
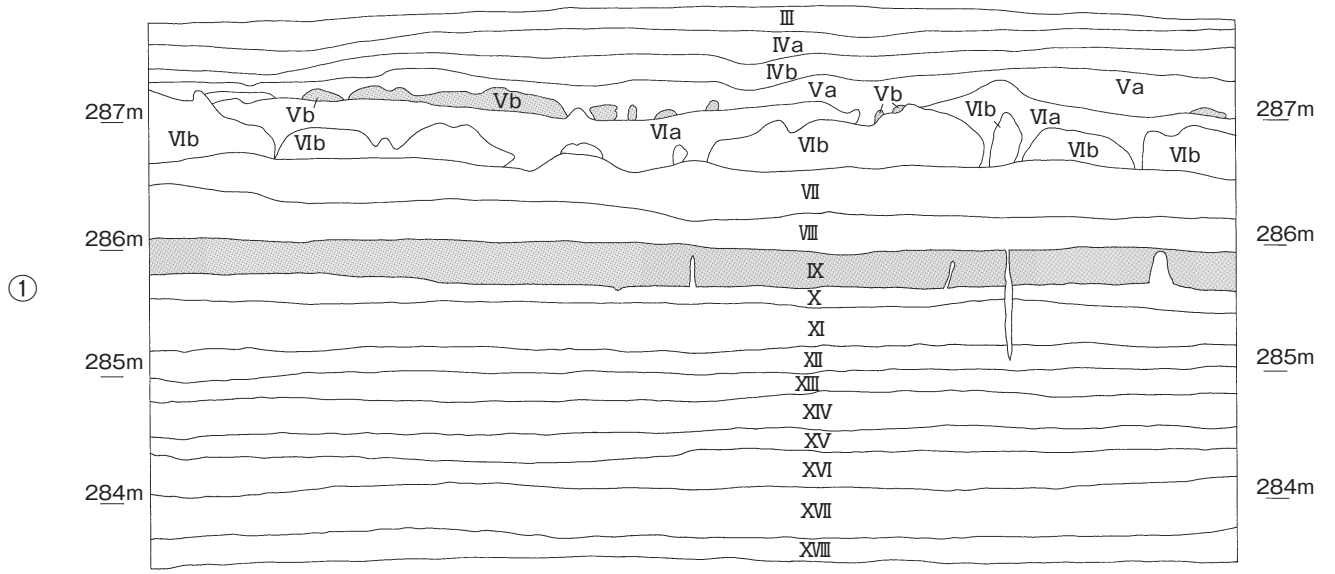
X層からマイクロブレード、XⅦ層黒曜石の石核やフレークが確認された。遺構は、確認されなかった。



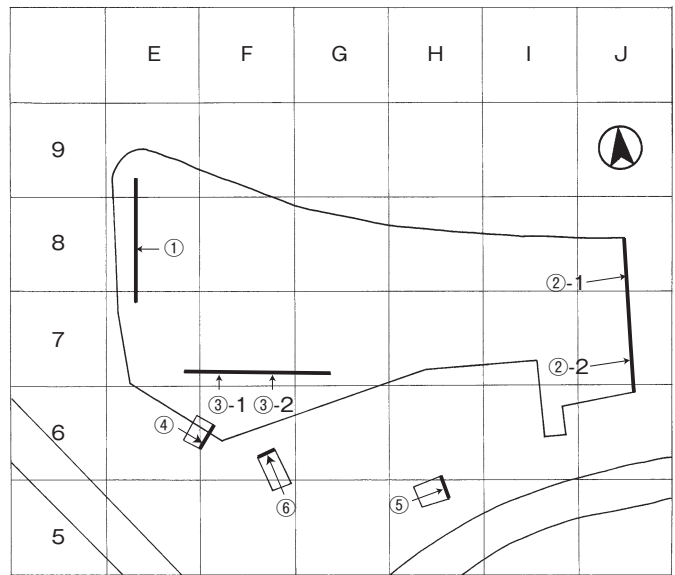
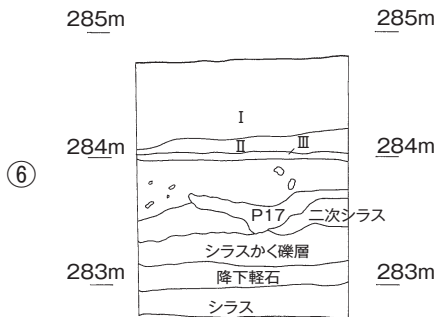
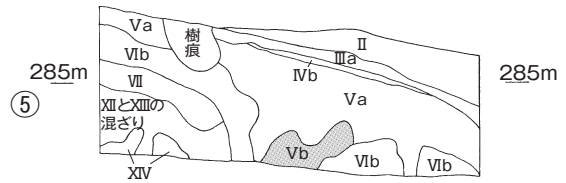
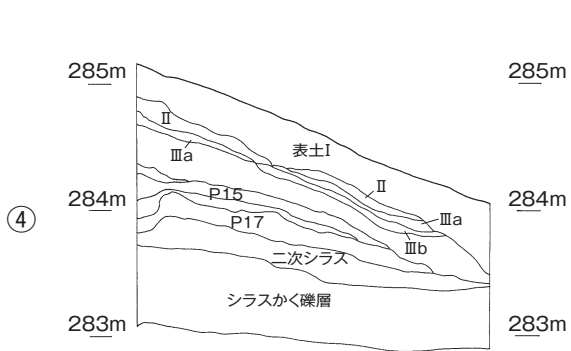
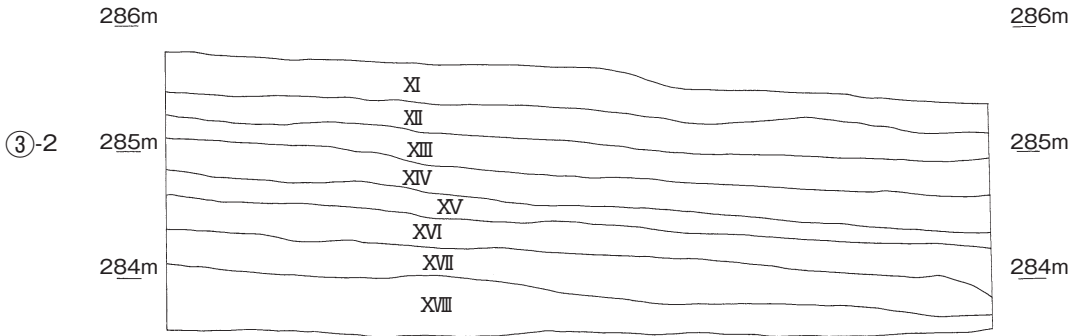
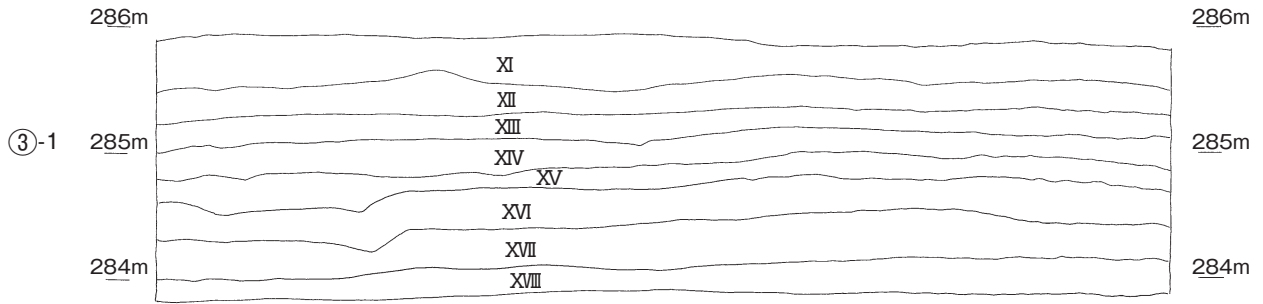
第1図 遺跡周辺地形及びグリッド図



第2図 遺物出土状況図



第3図 土層断面図1



第4図 土層断面図2

## 第2節 旧石器時代の調査成果

### 第1項 調査の概要

旧石器時代の遺物が確認されたのは、I-7・8区の1トレンチ及び、E~G-7・8区の下層確認トレンチ部分のみである。

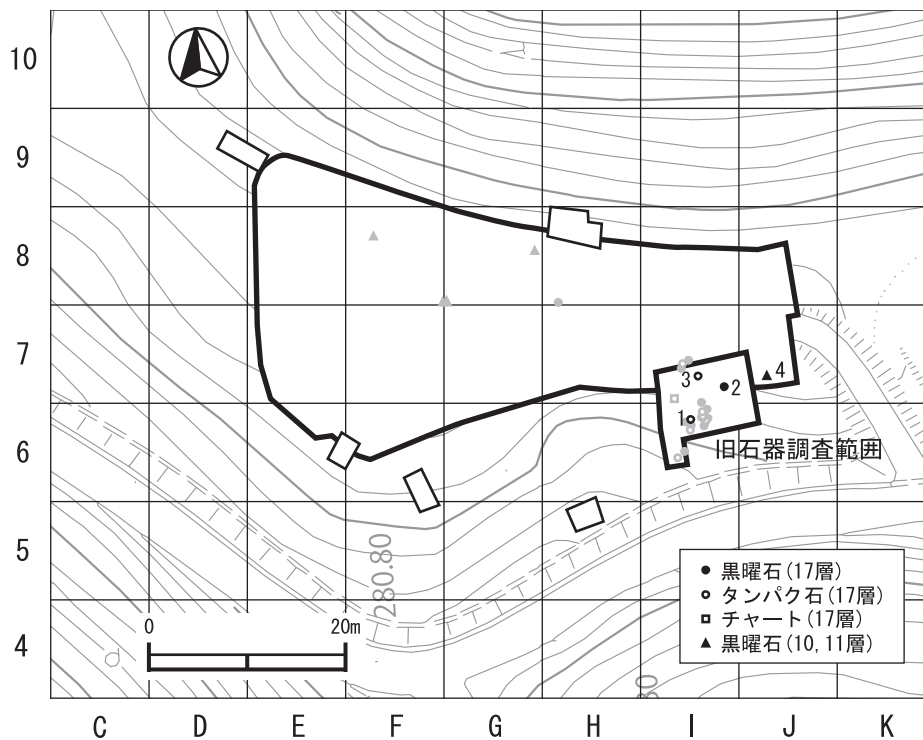
1トレンチは、傾斜地であるため、包含層の有無を確かめるために設定したトレンチであったが、X層から細石刃文化器、XVII層からナイフ形石器文化器が確認されたため、調査範囲を拡張して調査を行った。遺物は、上部からの流れ込みの可能性が高いと考えられる。上部の平坦部の調査でも遺構は確認できなかった。

E~G-7・8区の下層確認トレンチは、馬の背状に延びる平坦部のほぼ中央部分に当たる部分である、X層から遺物が確認された。

### 第2項 遺物 (第6図 1~4)

ナイフ型石器文化器の遺物は、1トレンチ内から合計26点が出土した。3点を図化した。

1は1トレンチのP17下層でXVII層から出土したものである。1トレンチは当初2×3mで遺跡の東側斜面に設定した。地層の堆積は東側に傾斜していた。XVII層から遺物が出土したため8×8mに拡張し調査を行った。他にも数点の小石片が出土した。1は白地に黄色と黒色の面が中に入り、石材は玉髄と思われる。上面に凹凸のある主要剥離面がある。右面には黄色の風化面がみられ、この面も含め剥離調整は亀の甲羅状に施されている。石器としては石器をつくる前のコアの段階と思われる。2は1と同質の剥片で、同一層にあたる。3は1トレンチの東側のXVII層に検出した。石材は黒色の中に暗灰色の筋が互層になり、全体的に白色の不純物が混ざっている黒曜石である。

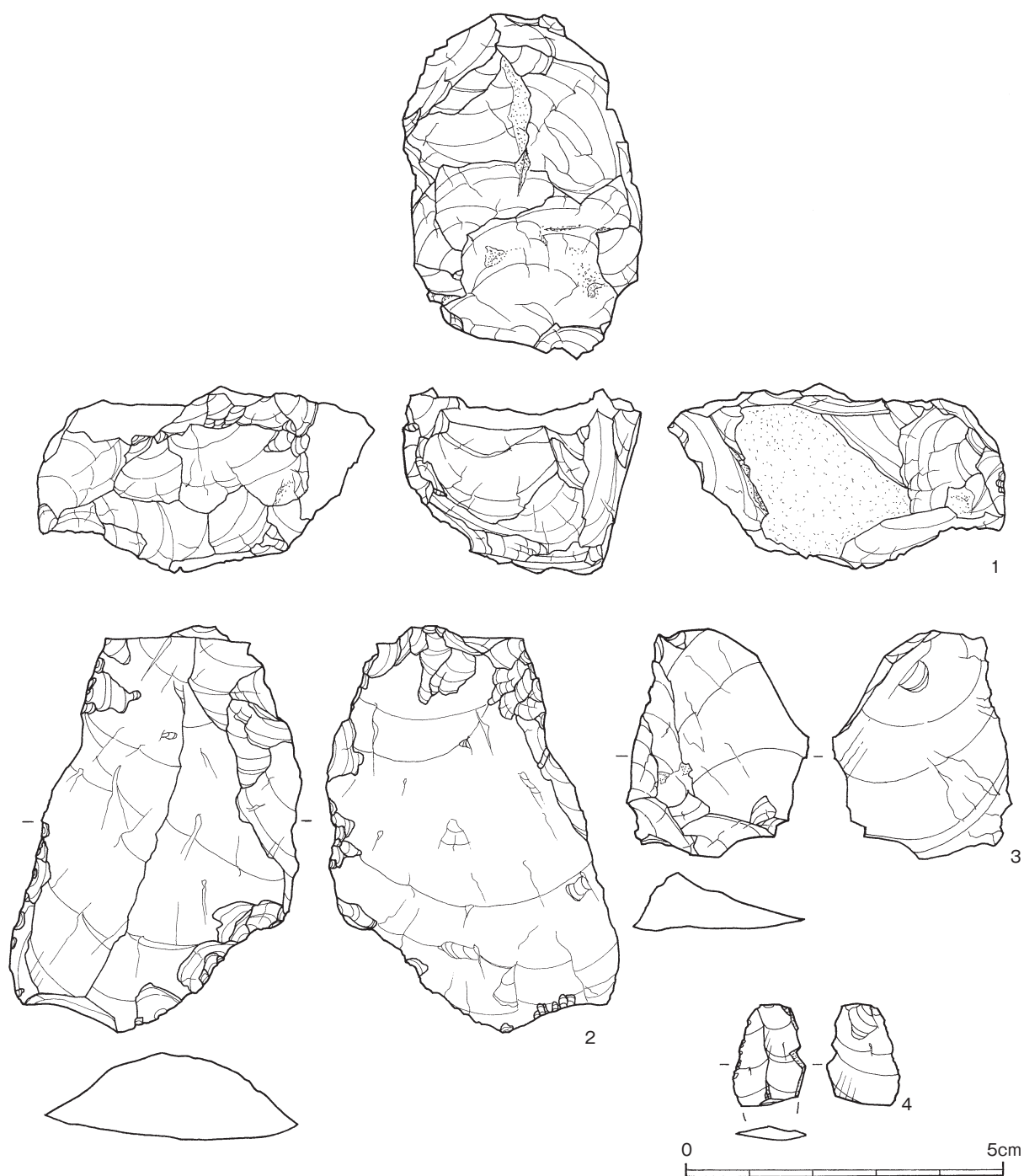




背面は2面の剥離面があり，腹面は主要剥離面1面である。なお，上部と下部は折られた状態である。調整剥離は左側で片面の小さな二次調整剥離面がある。右側の剥離面は粗く調査時についた可能性が高い。機能としては削器が考えられる。

細石刃文化器の遺物は，1トレンチ内及びE～G-7・8区の下層確認トレンチから合計7点が出土した。1点のみを図化した。

4はX層から出土したものである。石材は透明感のある黒曜石で不純物は少ない。背面は2面，腹面は主要剥離面の1面で作られ，下部が折れている。機能としてはマイクロブレイドと思われる。



第6図 旧石器出土遺物

### 第3節 縄文時代の調査成果

#### 第1項 調査の概要

縄文時代の調査は、確認調査で早期に相当する遺物の出土した馬の背状の平坦部（E～J - 6～9区）のIVa層～VIII層面で行った。

遺構は、VIII層上面で縄文時代早期の集石12基が検出された。

遺物は、IV層から中期から晩期相当と考えられる土器が数点、VII～VIII層上面で縄文時代早期の土器や石器が出土している。遺物の出土状況もE～G - 7・8区の調査区西側の平坦部に集中している。

#### 第2項 遺構（集石）

集石1号（第8図左上）はF - 8区に位置し、中央部に小礫のまとまりが観られ西側に集石4号、南側に集石7号が位置する。集石の東側に3・5・7類土器が1点ずつ出土しているが集石との関係は定かではない。

集石2号（第8図右上）はH・I - 7・8区の平坦面に位置し、10cm前後の大きさのそろった礫が中心部（約0.8m×0.9m）に留まる。集石の北側に9類土器が出土している。

集石3号（第8図左下）はG - 7区の平坦面に位置し、5～10cm大の礫が散在する。北側に11号集石が隣接する。

集石4号（第8図右下）はF - 8区に位置し、4～7cm大の小礫で構成され礫が疎らに散在する。

集石5号（第9図上）はE - 7区南西側の急傾斜地に下り始める台地縁辺部に位置し、1.20m×1.30mの堀込みがあり、底面は平坦である。この堀込み内に礫のほとんどが留まっている。堀込み内の上位には約10cm程の礫が密に入り、最下部に乳児の頭部大（約20cm）程の大型の礫と上位から入り込んだ約10cm程の礫が密に入る。

集石6号（第9図左下）は調査区東端のI - 8区、北側の急傾斜地に下り始める台地縁辺部に位置し、10～18cm大の礫が約0.5m×0.6mに集中する。7類土器が近くから出土している。

集石7号（第9図右下）はF - 7区と8区の境に位置し、8cm大から20cm大の少数の礫で構成された小型の集石である。

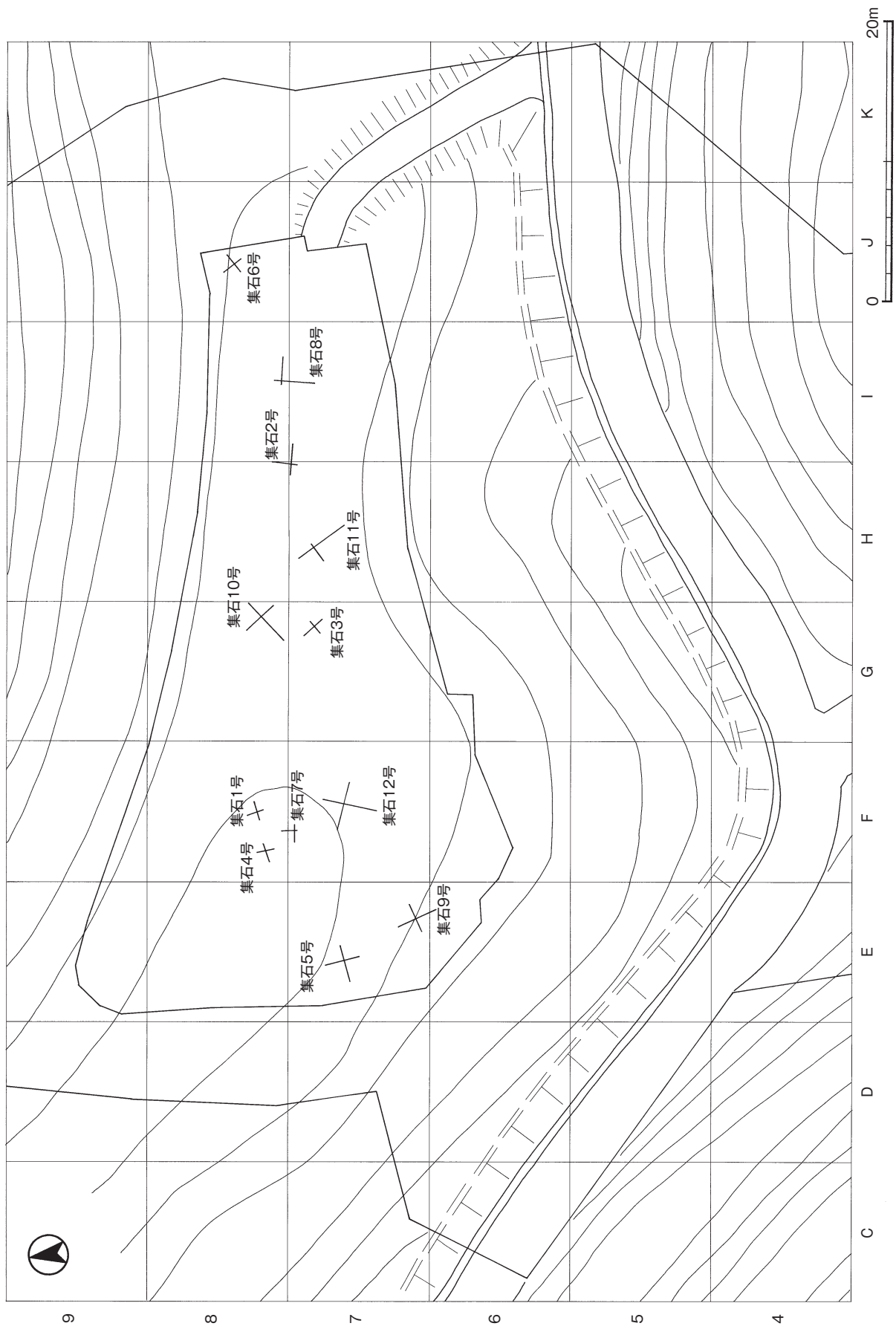
集石8号（第10図上）はI - 7区と8区の平坦面に位置し、集石の主体部は約0.5m四方である。集石を構成する礫の中に石皿の二次利用と観られる56、57が検出された。

集石9号（第10図下）はE - 7区の台地縁辺部に位置し、約25cm大の礫を中心として約1.8m四方に小礫が散在する。

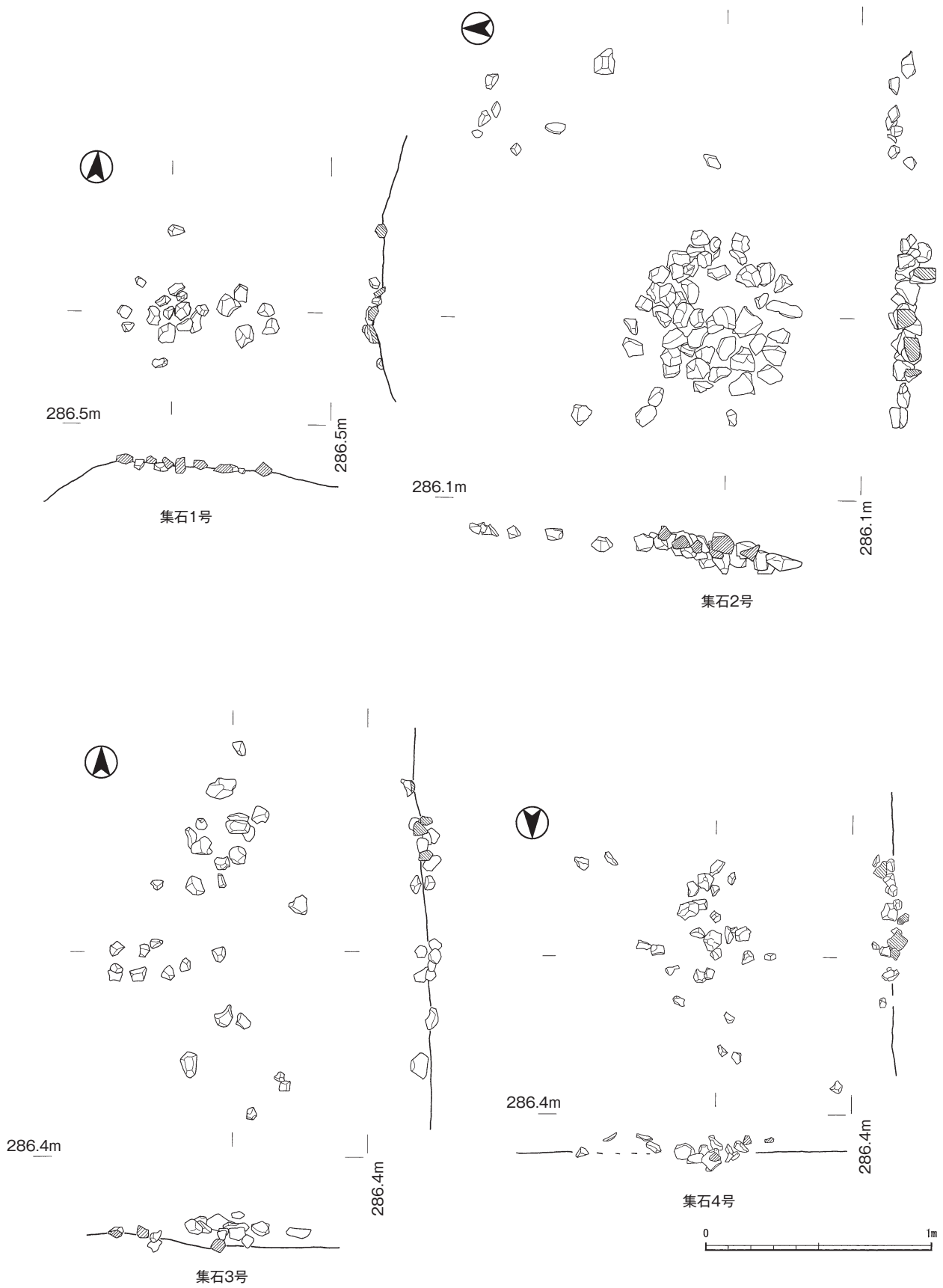
集石10号（第11図）はG - 8区の平坦面に位置し、南側に3号、11号集石が検出されている。主体部をもたず小型の礫が疎らに散在している。集石の南側部分から9類土器28の土器片が多数出土した。

集石11号（第12図）はH - 7区に位置し、平坦面に集石の主体部があり南側斜面に礫が散在する。3号、10号集石と近接する。

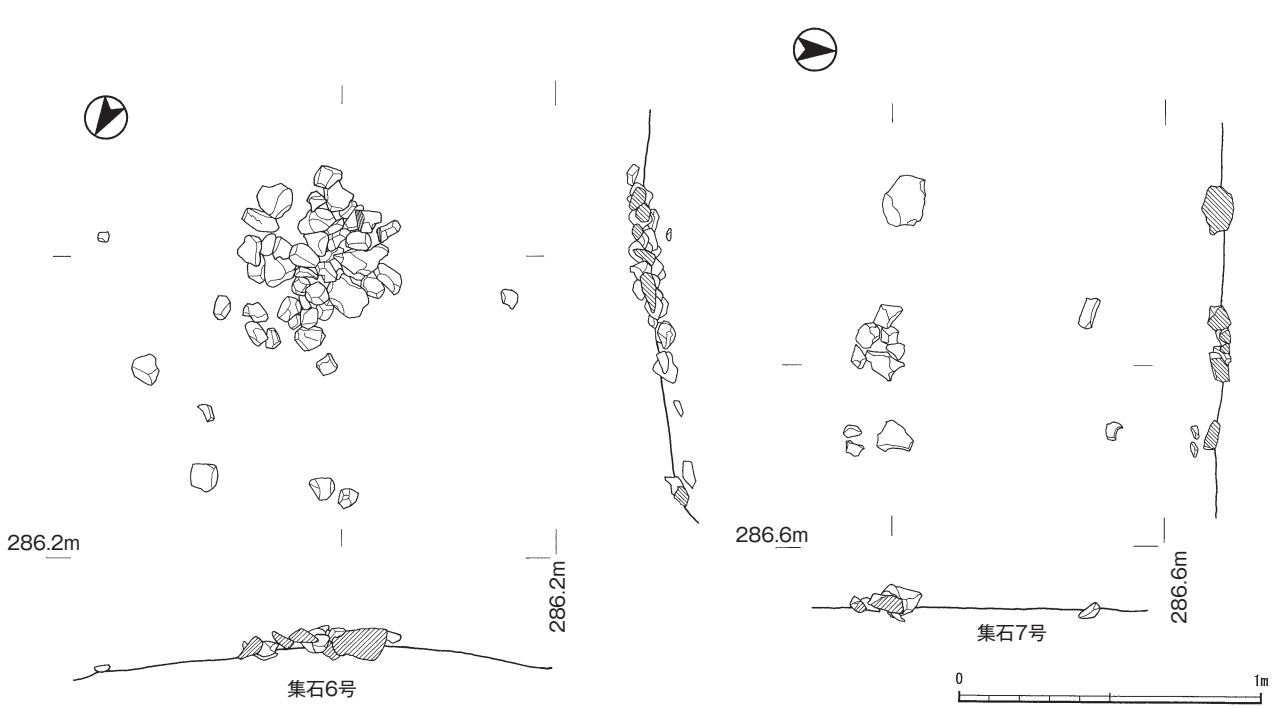
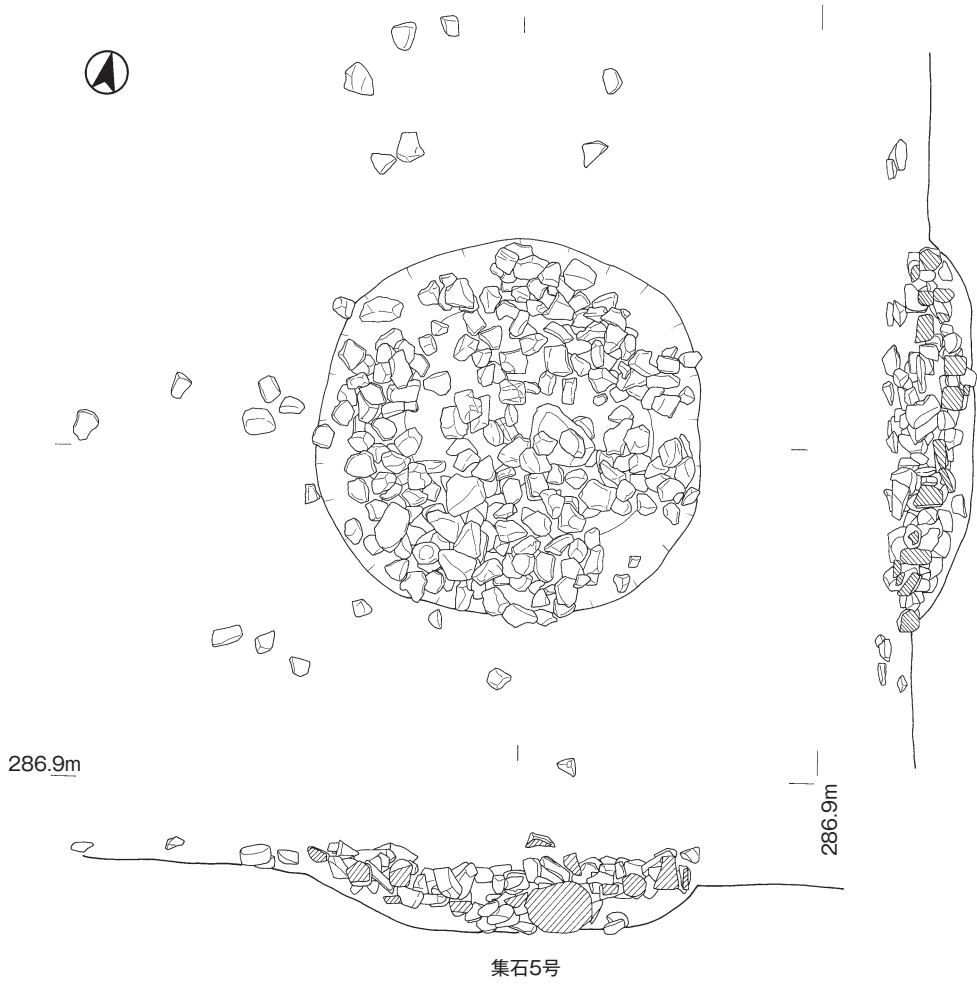
集石12号（第13図）はE - 7区に位置し、約3m四方に礫が散在する。主体部は観られない。



第7図 縄文時代早期集石配置図



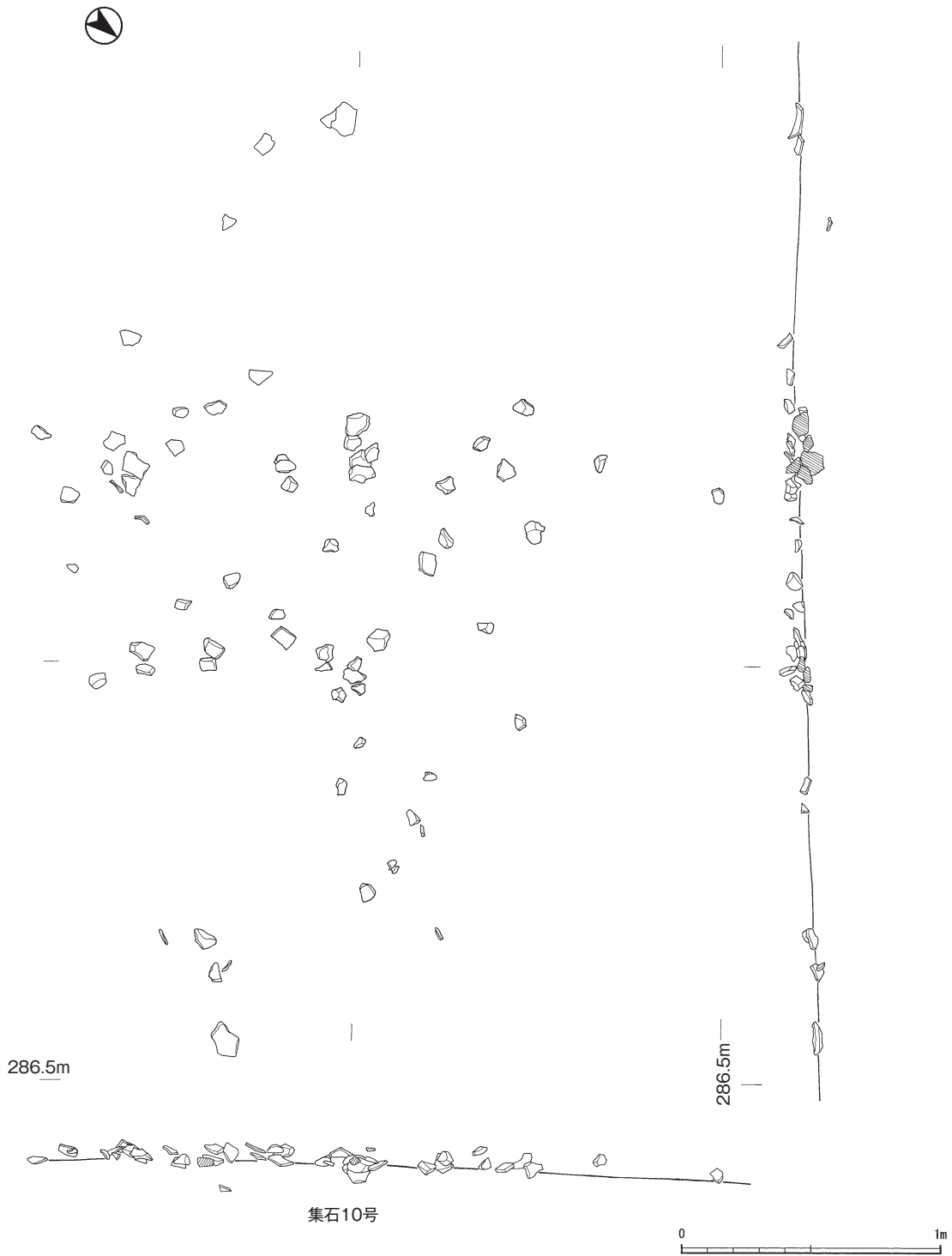
第8図 縄文時代早期集石(1)



第9図 縄文時代早期集石(2)



第10図 縄文時代早期集石(3)

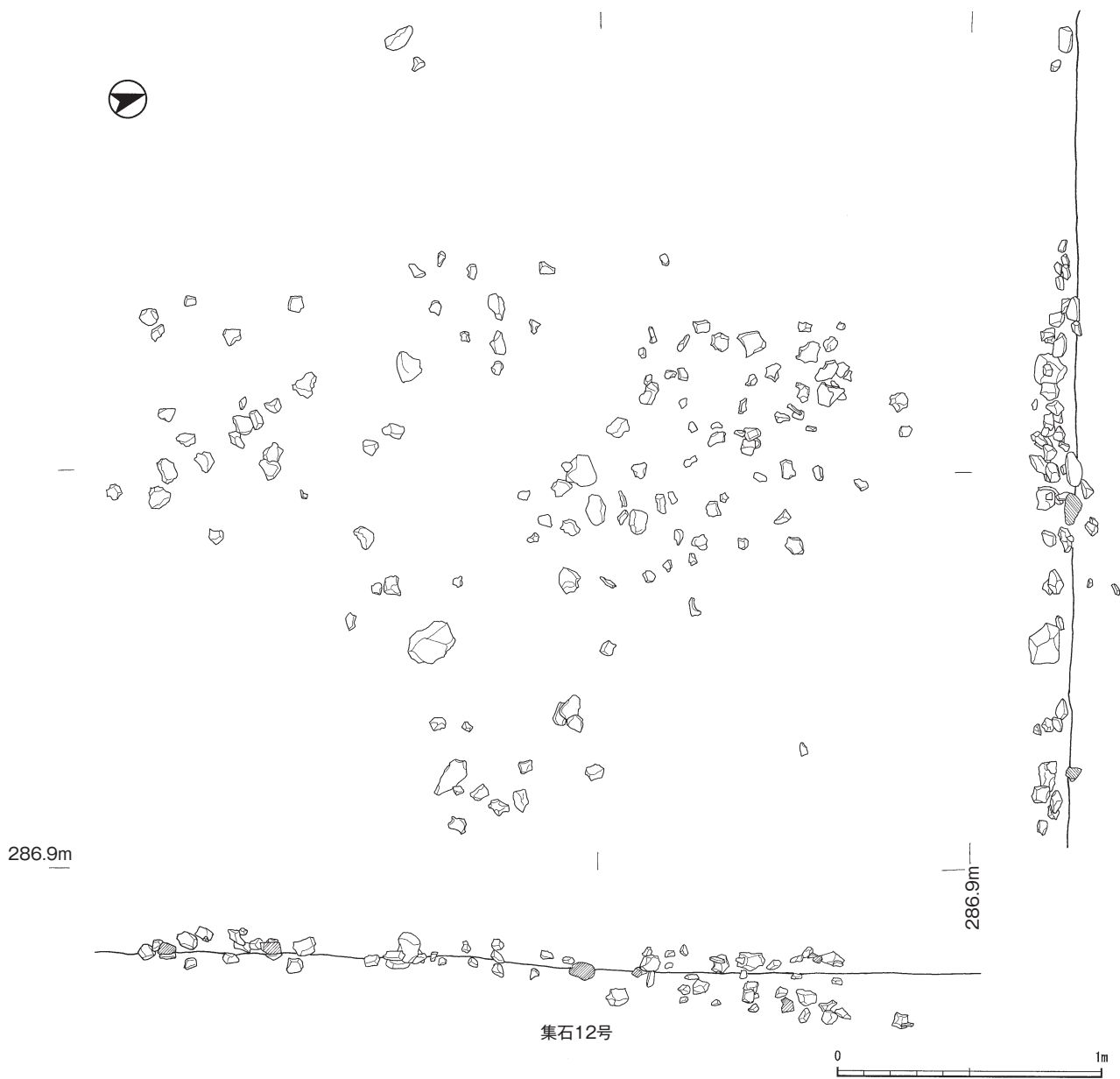


第11図 縄文時代早期集石(4)



第12図 縄文時代早期集石(5)





第13図 縄文時代早期集石(6)

### 第3項 遺物

縄文時代の遺物は、VII～VIII層上面から早期相当の土器や石器、IV層から晩期相当と思われる土器が出土しているが、数は少ない。土器は、形態・文様などから以下の1～14類に分類した。

#### 1類土器 (第14図 5)

口縁部はほぼ直線的に立ち上がる円筒形で、口唇部及び口縁部に刻みを施す。胴部には貝殻条痕文が横位に施される。内面にはケズリ痕が口縁部では横位、胴部には縦位に見られる。外側からの摺り切りによって穿った縦長の補修孔が3か所確認できる。

#### 2類土器 (第14図 6)

口縁部がわずかに外反しながら直線的に立ち上がる器形で、口唇部に刻みを施す、口縁部には貝殻刺突文がめぐる。その下には、楔状の貼付文をもつ、貼付文の両側には貝殻刺突を施す。

#### 3類土器 (第14図 7)

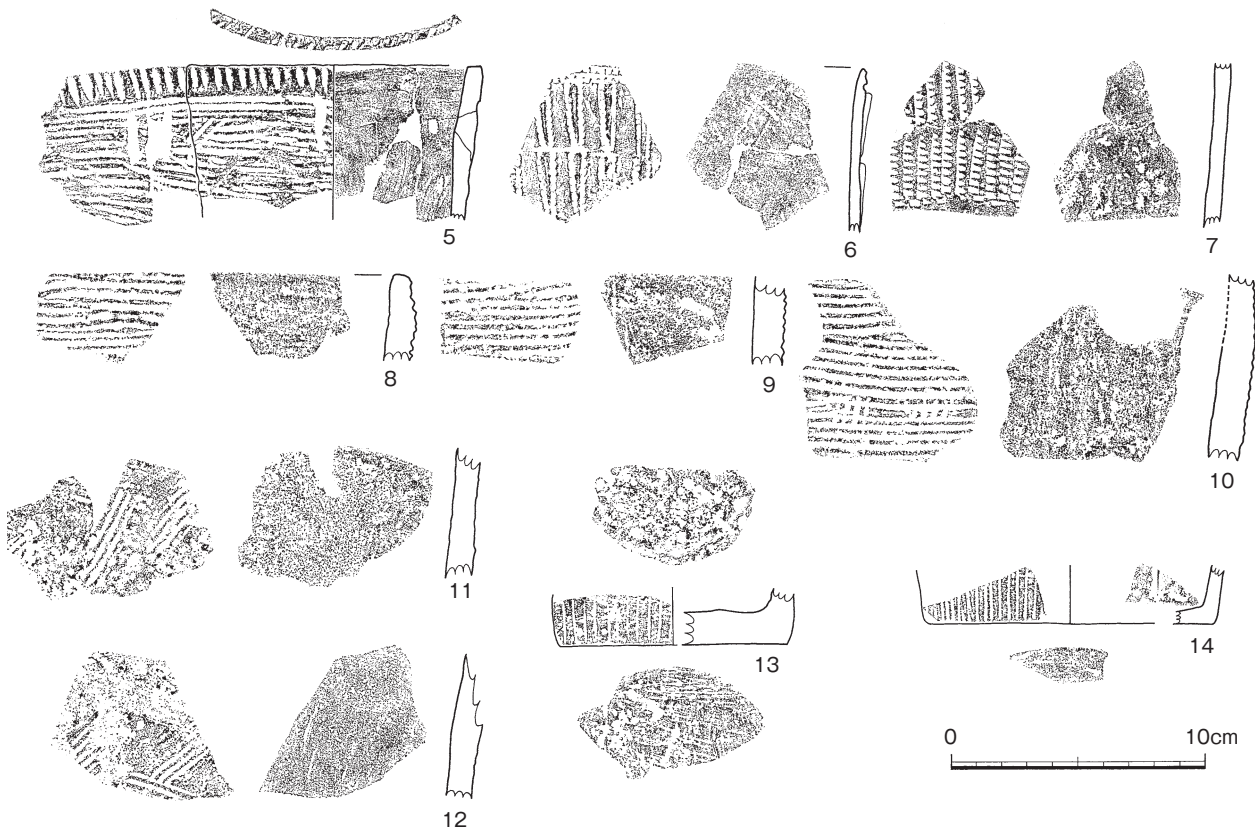
胴部は直線的に底部に至る筒型の器形を呈すると考えられる。胴部に貝殻押引文が施される。図化しなかったが、同一個体と思われる小片が2点出土した。

#### 4類土器 (第14図 8～10)

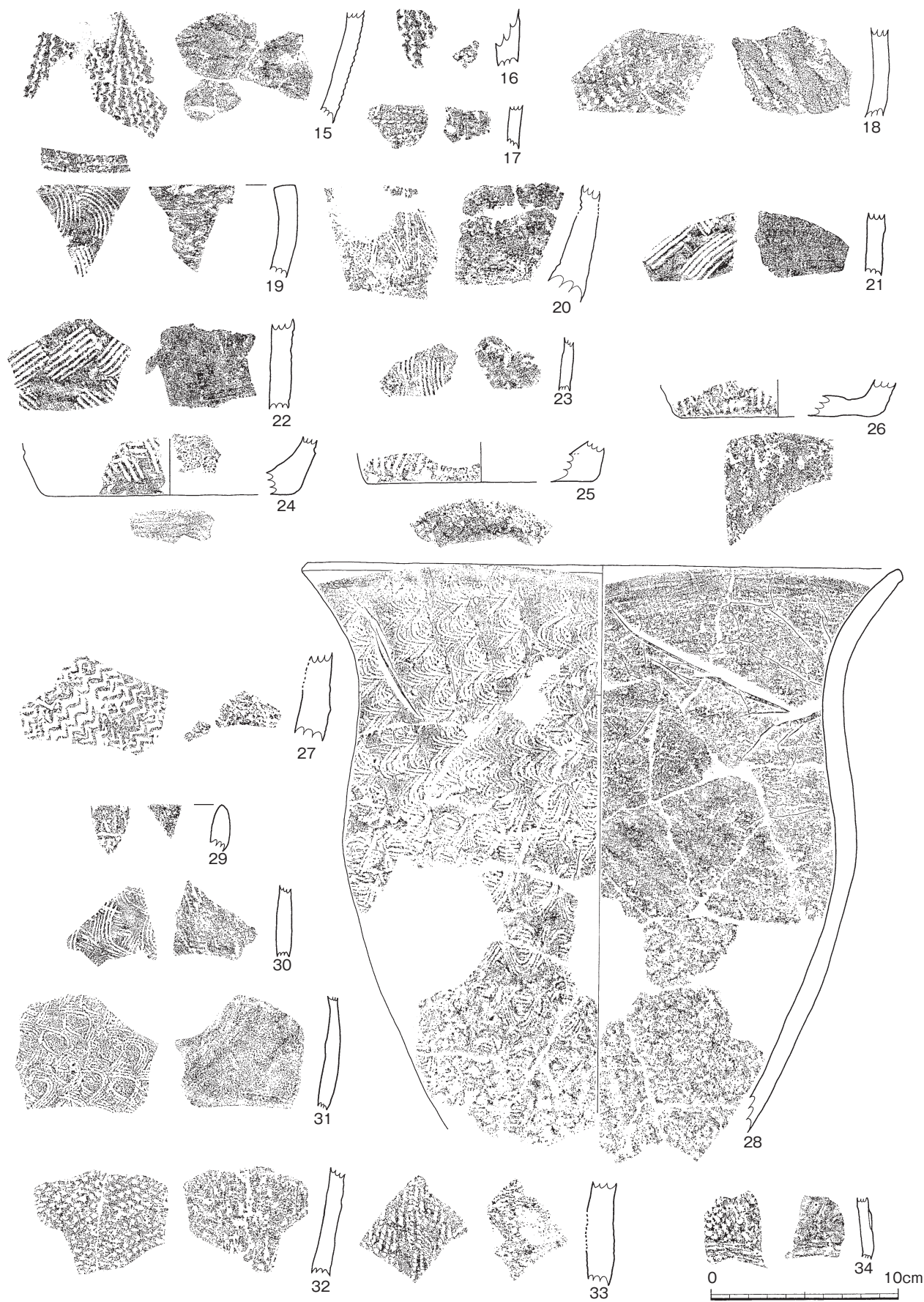
8はわずかに外傾して立ち上がり口縁部が若干内湾する。横方向の条痕を巡らしている。9・10は同様に横方向の条痕を巡らせた胴部片である。器壁は1～1.3cmと厚く、9は1単位の条痕の幅が約2cmで5～6条である。

#### 5類土器 (第14図 11～14)

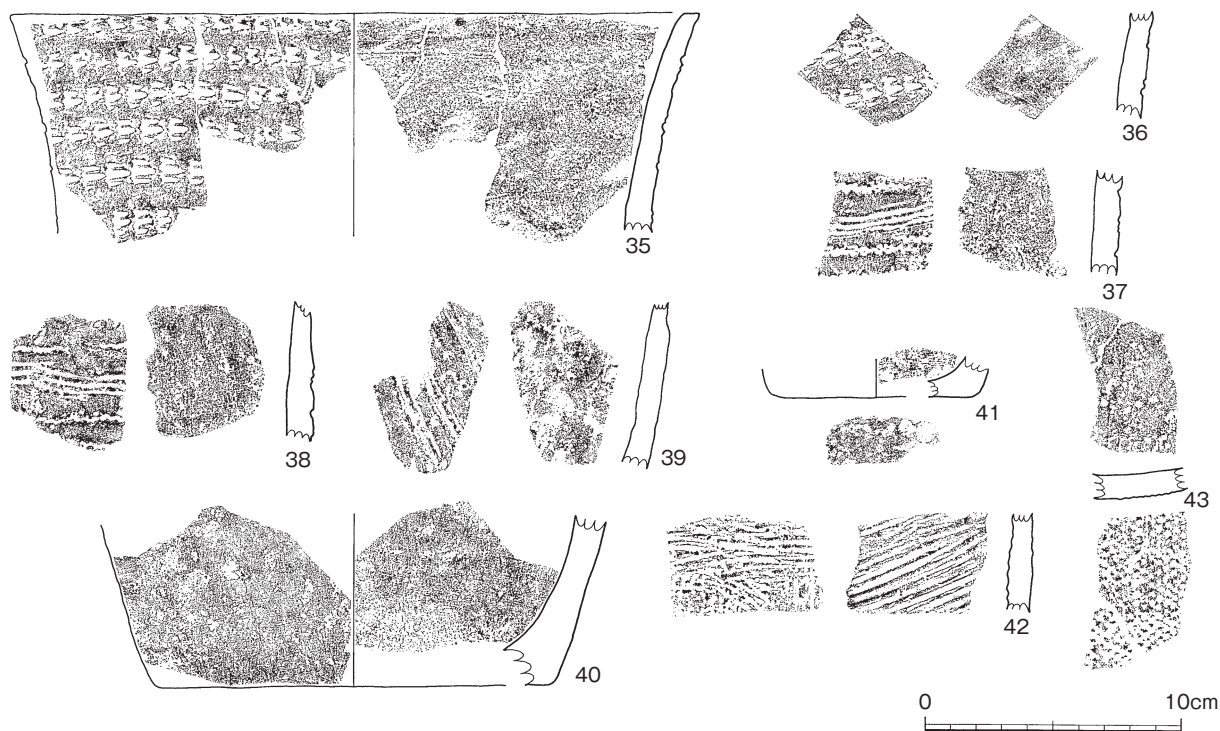
11・12は基本的に胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施すものである。13・14は底部端に縦位の条痕を施す。底部からの立ち上がりは丸みを帯びてやや胴が張るようになると思われる。



第14図 1～5類土器



第15図 6~11類土器



第16図 12～14類土器

6類土器 (第15図 15～18)

15・16は貝殻外縁で連続して刺突が施されている。器面調整は、内面は丁寧なナデが施されている。17は破片が細片のため貝殻刺突線が直線しか見られないものである。器壁は4～6mmと薄手である。18はナデ消されているため施文の様子がわかりづらいが、貝殻による刺突が確認できたためこの類に分類した。胎土には、15と同じように金雲母や白い砂粒を含む。

7類土器 (第15図 19～26)

19～24は基本的に貝殻条痕による羽状文を施すものである。19は平坦な口唇部がわずかに肥厚し口縁部がわずかに内湾している。口縁部付近に貝殻条痕による流水文が施されている。

21～23は胴部片である貝殻による羽状文が施されている。20は2本1組の櫛状工具による羽状文が施されているが風化が激しい。24～26は底部片である。底端部に貝殻条痕が施されている。

8類土器 (第15図 27)

27は山形押型文を斜位に施すものである。内面は剥落が激しい。1点のみの出土である。

9類土器 (第15図 28～31)

28～31は撚糸文を施すものである。28は胴部全体にかけて縦位および横位の変形撚糸文を施す。変形撚糸文は連弧文状の形態である。形態は口縁部が大きく外反し胴部中央部は球形状を呈する。口唇部付近の施文はナデ消されている。口縁部内面には、連弧文状の変形撚糸文は施されていない。

10類土器 (第15図 32・33)

32・33はどちらも小片のためはっきりしないが縄文を施すものである。32は縄を回転させて施文した後一部ナデ消している。胎土には白っぽい砂が多く含まれる。胎土は6類土器と似ている。33は胎土に金雲母を含む。

### 11類土器 (第15図 34)

34は微隆起突帯をもち縄文を施すものである。内側は丁寧なナデ調整が施されている。

### 12類土器 (第16図 35~41)

35は外反する口縁部である。貝殻腹縁による連続刺突文が口縁部から頸部にかけて6条施されている。36は35と同一個体と思われる破片である。貝殻腹縁による連続刺突文が2条確認できる。37~39は胴部片である。2~3条の幅の狭い貝殻条痕文と貝殻外縁による刺突文が横位に施される。40・41は12類土器の底部である。平底で外開きに立ち上がる。

### 13類土器 (第16図 42)

IVa層出土の土器である。42は内外面に貝殻条痕をもつものである。外面は横位に条痕を施し、内側は掻き上げで斜位に条痕が施されている。

### 14類土器 (第16図 43)

IVb層出土の土器である。平織りの圧痕をもつ組織痕土器であると思われる。他に出土はなく1点のみの出土である。

## 1 石器

### 石鏃 (第17図 44)

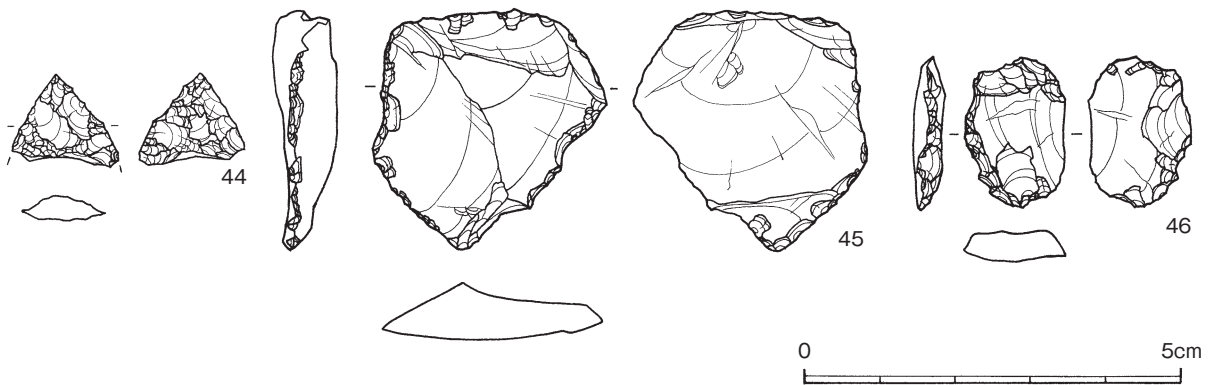
44はE-7区VII層に出土したものである。石材は鉛色質の黒曜石で1~2点の不純物を含んでいる。この石器は厚みのある剥片を利用した凹基式の石鏃である。調整辺は交互剥離の二次調整剥離がみられ、脚部の両先端は欠損している。

### 削器 (第17図 45)

45はJ-8区VII層に出土したものである。石材は乳灰色にネズミ色の筋の互層がみられるチャートである。背面が2面で主要剥離面の腹面が1面の剥片を使い、左辺に片面剥離の二次調整剥離がみられ刃部を作り、右辺には粗い二次調整剥離がみられる。

### 楔形石器 (第17図 46)

46はG-8区VII層に出土したものである。石材は乳灰色にネズミ色の筋の互層がみられるチャートである。石片は丸みのある主要剥離面のある剥片を使い、左辺に片面剥離の小さな剥離がみられ、上下に鋭利のある剥離をいれ刃部を作っている。



第17図 縄文時代石器(1)



第18図 縄文時代石器(2)

### 石斧（第18図 47）

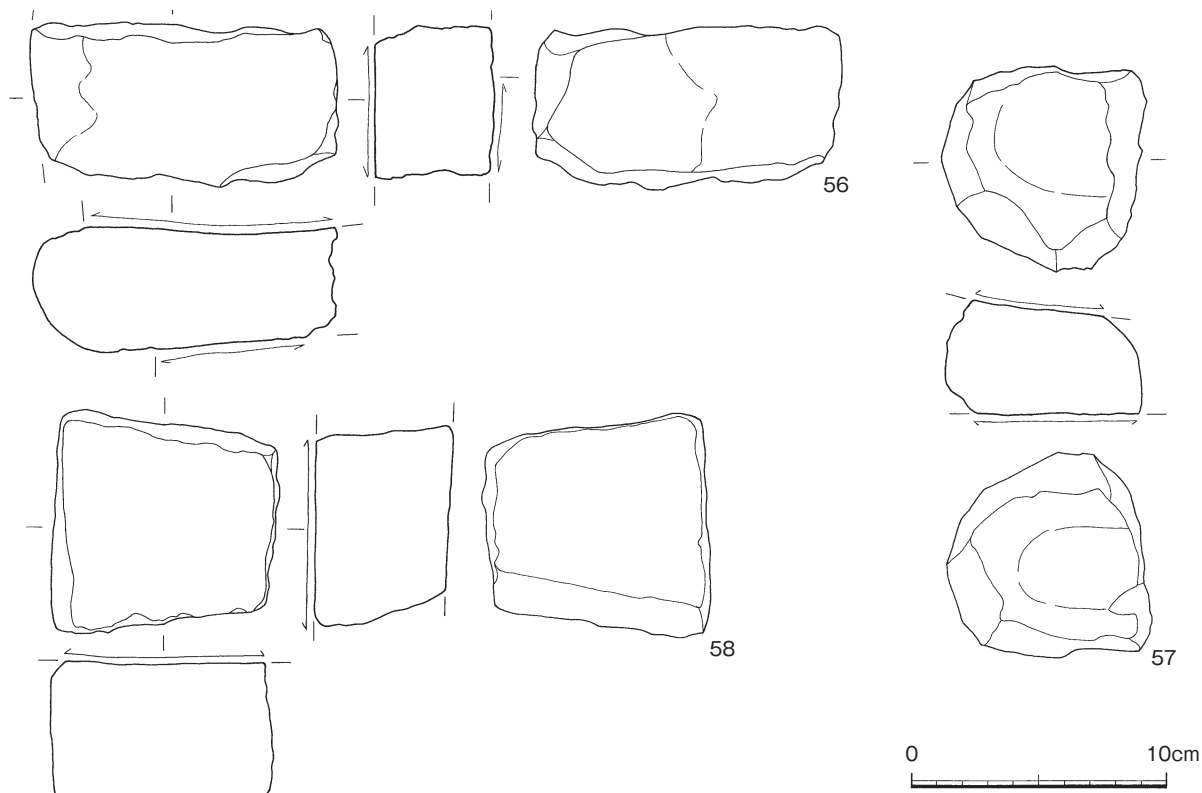
47は扁平打製石斧（土掘り具）と呼ばれる打製石器である。扁平な頁岩を素材として用い、大小の剥離により調整され、全長16cm、最大幅7.4cm、最大厚1.7cmを測る。片側の側縁上部付近がわずかにくぼむ。刃部は、使用によるためか、刃縁の刃こぼれが観察できる。

### 磨石、敲石類（第18図 48～55）

48・49は半球状の礫を利用した磨石である。48は平坦な片面のみに49は両面に磨面が観察される。50・51は扁平な垂円礫を利用した敲石である。50・51は側面の全周にわたって敲打痕が観察される。51は両面の中央部にも敲打痕が観察される。52～55は磨面と敲打痕が観察される磨敲石である。52は石けん形の形状で長軸の上端部及び右側面に敲打痕が観察される。左側面は欠損のため敲打痕は不明である。表裏両面に使用による磨り面が観察される。53は楕円形の礫を利用したもので、長軸に対し2・4・10時方向に敲打痕が観察される。表裏両面に使用による擦痕が観察される。54は小型の礫を利用したものである。長軸の両端部に敲打痕が観察される。表裏両面に使用による磨り面が観察される。55は球状の礫を利用したもので、一部欠損しているが、側面全周に敲打痕が、平坦面に擦痕及び敲打痕が観察される。

### 石皿（第19図 56～58）

石皿は3点を図化した。いずれも破損品である。いずれも安山岩製である。56・57はⅦ層出土である。56は一部に丸縁の縁辺部を形成し、皿部は弓状に凹み部をもつ。平滑な磨面のため砥石としての利用も考えられる資料である。57は石皿の小破片で、両面に磨面が観察できる。58はⅣ層出土である。板状の礫を素材とした方形状に遺存した資料で、平面状の側縁を残したもので、上面に磨面が観察できる。

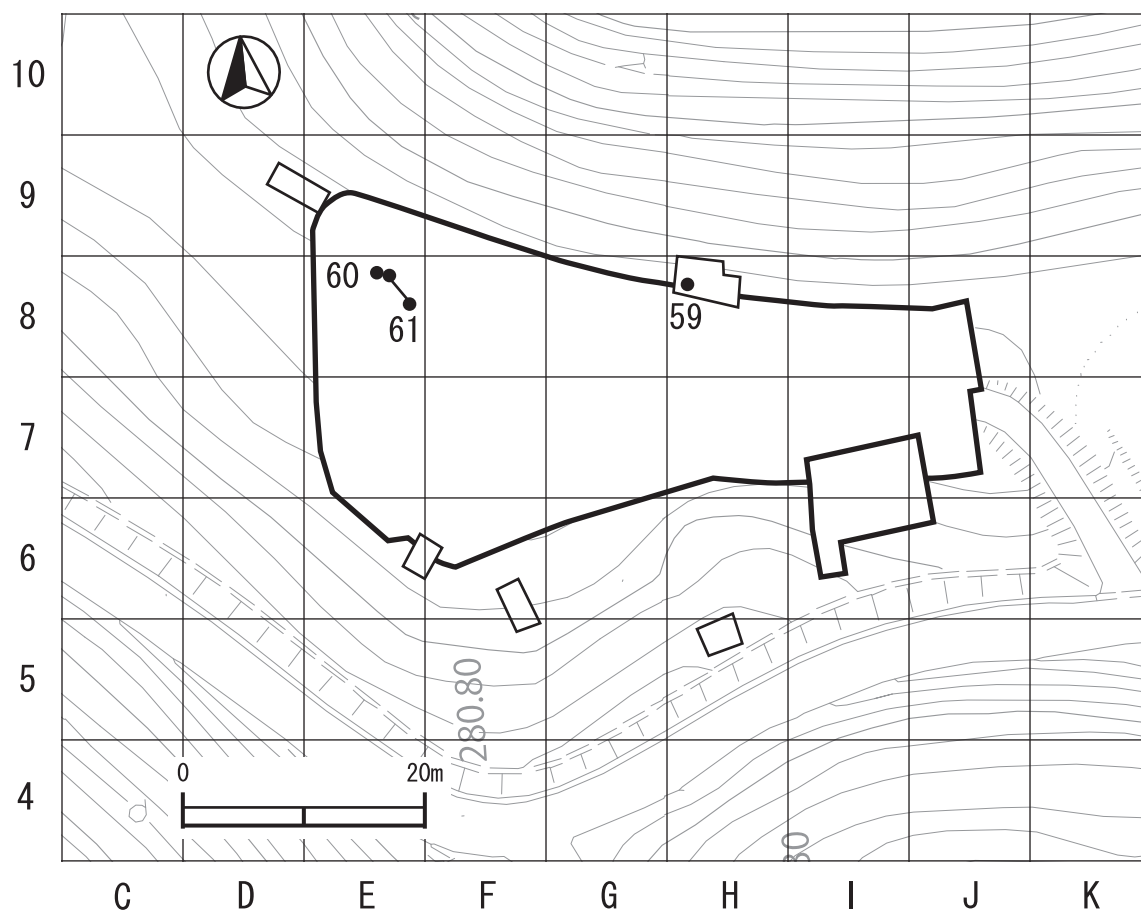


第19図 縄文時代石器(3)

## 第4節 古代の調査成果

### 第1項 調査の概要

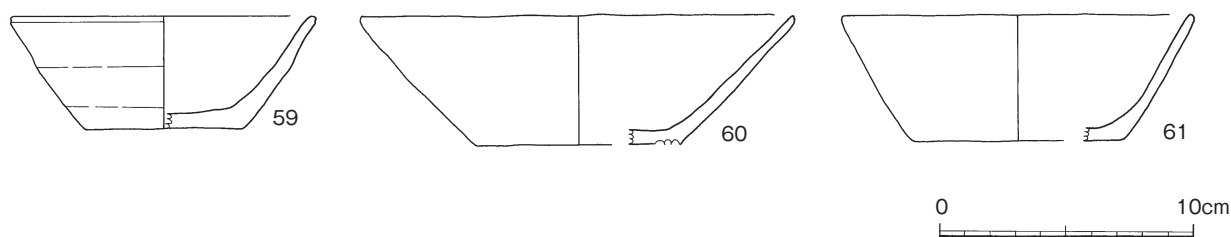
古代の遺物包含層は、Ⅱ層の文明ボラ層の下のⅢ層の黒色土層である。Ⅲ層は調査区内全域で確認できた。18年度の確認調査で、馬の背状の平坦地から傾斜地になる場所に設定したBトレンチから、土師器の坏が1点出土し、古代の遺物が確認された。19年度の本調査では、遺構は検出されなかったが、土師器の坏が出土した。



第20図 古代遺物出土状況図

### 第2項 遺物（第21図 59～61）

出土した遺物は、土師器の坏3点のみである。59～61はいずれもヘラ切りの底部から直線的に口縁部へ至るものである。59は口径12cm，器高4.6cm，60は口径17cm，器高4.2cm，61は口径14cm，器高5cmを測る。



第21図 古代出土遺物



第1表 縄文時代土器観察表

挿図番号	レイアウト	分類	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号
14	5	1類	条痕文	ケズリ	にぶい黄褐	灰黄褐	長・角・砂	硬質		196
	6	2類	クサビ・貝殻刺突	ナデ	橙	橙	長・角	硬質		105,108
	7	3類	貝殻押引	ナデ	明赤褐	明赤褐	長・角	硬質		171
	8	4類	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		151
	9	4類	貝殻条痕文	ナデ	灰黄褐	にぶい橙	長・角	硬質		135
	10	4類	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		134
	11	5類	貝殻条痕文	ナデ		黒褐	長・角	硬質		173,174
	12	5類	貝殻条痕文	ナデ	にぶい赤褐	黄褐	長・角	硬質		186
	13	5類	貝殻条痕文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	長・角	硬質		104
	14	5類	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい赤褐	長・角	硬質		170
	15	6類	貝殻刺突文	ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	長・角・砂	硬質		177,178
	16	6類	貝殻刺突文	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	長・角・雲・砂	硬質		165
	17	6類	貝殻刺突文	ナデ	灰黄褐	黒褐	長・角・雲	硬質		121
	18	6類	貝殻刺突文	ナデ	にぶい褐	黒褐	長・角・火	硬質		114
19	7類	貝殻羽状文	ナデ	にぶい黄	浅黄	長・角	硬質		112	
20	7類	条痕文	はく落	にぶい黄褐	灰黄褐	長・角・雲	硬質		125	
21	7類	条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		108	
22	7類	条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	長・角	硬質	外煤付着	172	
23	7類	条痕文	ナデ	黄褐	にぶい黄	長・角	硬質		132	
24	7類	条痕文	ナデ	暗灰黄	にぶい黄橙	長・角・雲	硬質		158	
25	7類	条痕文	ナデ	暗灰黄	灰黄褐	長・角・雲	硬質		116	
26	7類	条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長・角	硬質		211	
27	8類	山形押型文	はく落	黒褐	褐	長・角・雲	硬質		133	
28	9類	変型撚紋	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		90,189ほか	
29	9類	変型撚紋	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		93	
30	9類	変型撚紋	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	長・角	硬質		198	
31	9類	変型撚紋	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	長・角・砂・雲	硬質		199	
32	10類	縄文・ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄	長・角・火	硬質		192,193	
33	10類	縄文・ナデ	はく落	橙	橙	長・角・砂・火	硬質		113	
34	11類	微隆起突帯	ナデ	黄褐	黄褐	長・角	硬質	外煤付着	187	
35	12類	貝殻刺突文	ナデ	赤褐	赤褐	長・角	硬質		147,148	
36	12類	貝殻刺突文	ナデ	褐	橙	長・角	硬質		168	
37	12類	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	長・角	硬質		60	
38	12類	貝殻条痕文	ナデ	灰褐	黒褐	長石	硬質		115	
39	12類	貝殻条痕文	ナデ	灰黄褐	黒褐	長石	硬質		118	
40	12類	ナデ	ナデ	赤褐	黒褐	長・角	硬質		131	
41	12類	ナデ	ナデ	暗褐	暗褐	長・角	硬質		28	
42	13類	貝殻条痕文	貝殻条痕文	褐	褐	長石	硬質	外煤付着	95	
43	14類	組織痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長・角	硬質		44	

第2表 古代遺物観察表

挿図番号	レイアウト	分類	文様・調整(外)	文様・調整(内)	色(外)	色(内)	胎土	焼成	備考	取上番号
21	59	土師杯	ナデ	ナデ	黄橙	橙	長石	硬質		30
	60	土師杯	ナデ	ナデ	黄橙	橙	長・角	硬質		61
	61	土師杯	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	長・角	硬質		67,62,146

第3表 旧石器時代石器観察表

挿図番号	レイアウト	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	区	層位	取上番号
6	1	石核	5.4	3.8	2.9	56.57	玉髓		17	50
	2	さつ器	6.4	4.6	1.4	36.77	ob三船	1 T東	17	98
	3	フレーク	3.6	2.8	0.9	8.64	玉髓		17	223
	4	マイクロブレイド	1.6	1.1	0.2	0.3	ob	東	10	48

第4表 縄文時代石器観察表

挿図番号	レイアウト	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	区	層位	取上番号
17	44	石鏃	1.25	1.4	3.5	0.5	ob	E-7	7	140
	45	スクレイパー	3.15	3.1	0.75	6.64	チャート	J-8	7	206
	46	二次加工	2	1.3	0.4	1.37	チャート	G-8	7	210
18	47	打製石斧	16.15	7.4	2.1	310	頁岩	E-7	7	137
	48	磨石	9.5	8.5	5.9	660	安山岩	E-7	横転	150
	49	磨石	5.8	4.9	5.5	200	安山岩	G-9	-	集石8号-1
	50	磨石・敲石	10.6	8.4	4.4	630	砂岩	J-8	7	208
	51	磨石・敲石	10.2	9.9	3.6	550	砂岩	H-8	7	200
	52	磨石・敲石	9.1	7.2	4.7	480	安山岩	E-8	8	117
	53	磨石・敲石	9.1	7	4.7	465	安山岩	F-7	7	175
	54	磨石・敲石	6.3	4.4	3.7	120	砂岩	1 T東	7	96
	55	磨石・敲石	9.5	7.1	6.2	570	安山岩	F-7	7	167
	56	石皿	6.5	12.2	5	700	安山岩	I-9	-	集石3号-10
19	57	石皿	8	8.1	4.6	440	安山岩	F-8	-	集石3号-19
	58	石皿	8.9	9	5.4	875	安山岩	H-7	4a	54

## 第5節 まとめ

野鹿倉遺跡は確認トレンチ調査の結果、馬の背状の平坦部（E～J-6～9区）から縄文時代早期から晩期の遺構・遺物及び、古代の遺物が検出・出土した。傾斜地東側（I・J-6・7区）からは旧石器の遺物が出土した。

### 旧石器時代について

ナイフ形石器文化期の遺物は玉髓のコア1点、黒曜石製の削器2点が確認された。細石刃文化期の遺物は黒曜石製のマイクロブレイドが1点確認された。いずれもI・J-6・7区から出土している。

### 縄文時代について

#### 遺構

馬の背状の平坦部に縄文時代早期相当層のⅧ層上面で集石12基が確認された。堀込みをもつものは集石6号のみで残り11基に堀込みは確認できなかった。集石8号周辺からは変形撚糸文土器が出土したが、その他集石と出土遺物の相関を関係づけられるものはなかった。

#### 遺物

出土数は少ないが、縄文時代早期相当の土器を中心に多様な型式の土器が確認され、1～14類土器に分類した。型式等は下表のとおりである。

1類	前平式土器	5類	石坂式土器	9類	変形撚糸文土器	13類	条痕文土器
2類	加栗山式土器	6類	下剥峯式土器	10類	回転施文土器	14類	組織痕土器
3類	吉田式土器	7類	桑ノ丸式土器	11類	平椀式土器		
4類	中原式土器	8類	山形押型文土器	12類	塞ノ神式土器		

石器は石鏃・削器・楔形石器・打製石斧がそれぞれ1点、磨石、敲石類が7点、石皿が3点出土した。石皿のうち56と57は集石3号より出土した。

### 古代について

古代の遺構は確認されなかった。遺物もヘラ切りの土師器の坏3点が出土したのみである。

#### 〈引用・参考文献〉

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2006「市ノ原遺跡」（第5地点）鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（105）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2008「関山遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）
- 鹿児島県吉田町教育委員会2002「宮ノ上遺跡」吉田町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 鹿児島県教育委員会1977「桑ノ丸遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 鹿児島県教育委員会1980「石峰遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（12）
- 鹿児島県始良郡栗野町教育委員会1994「木場A遺跡2」栗野町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
- 鹿児島県西之表市教育委員会1978「下剥峯遺跡」西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

# 建山遺跡写真図版



建山遺跡空中写真（狩俣遺跡方向を望む）

図版2





H・I-30区XV・XVI層遺物出土状況



XVI層遺物出土状況



F-50区XVI層礫群検出



旧石器尖頭器出土状況



F-75・76区X層遺物出土状況

图版4







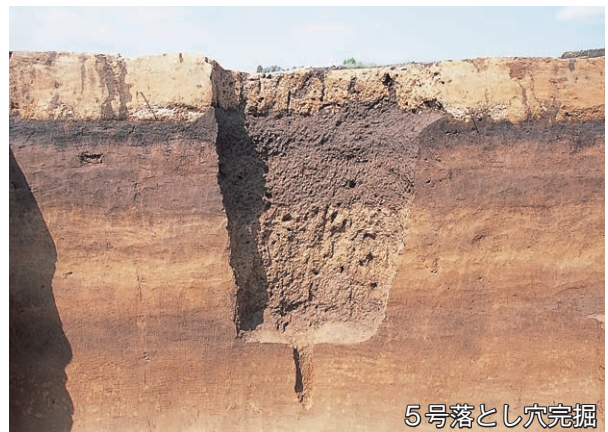
图版6



图版 7



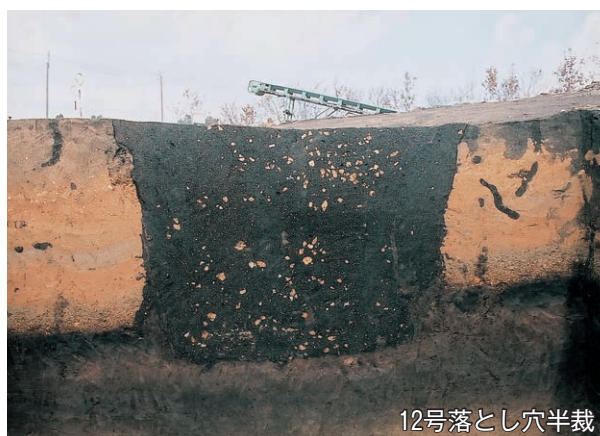
図版8





図版10





図版12



3号竪穴状遺構プラン確認状況



F-65区IVa層遺物出土状況



18号土坑半裁

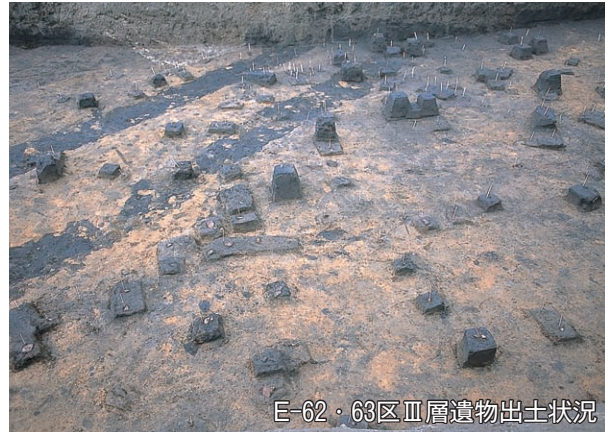


H-53区IVa層遺物出土状況





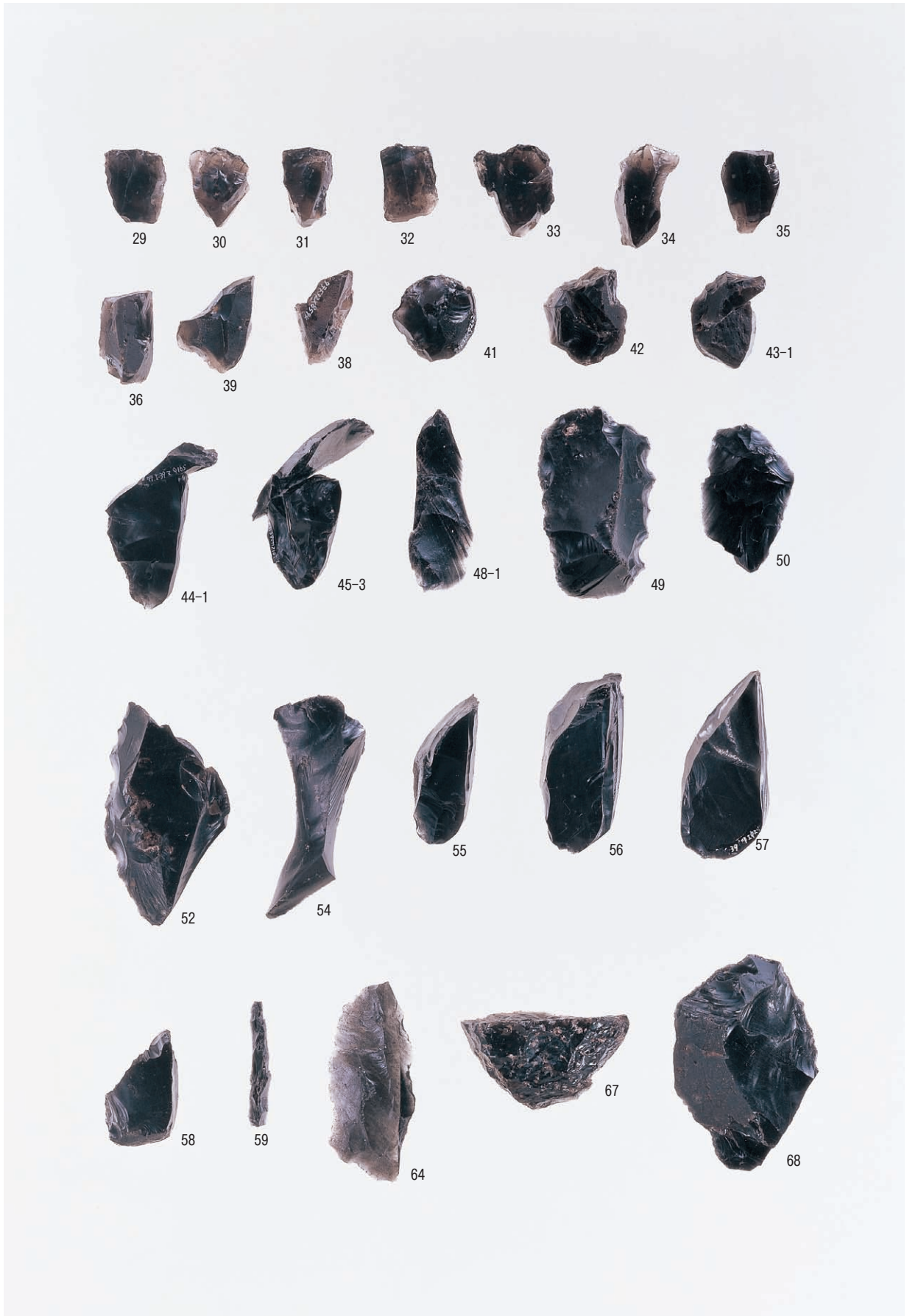
図版14





旧石器时代第 I · II 文化层出土石器

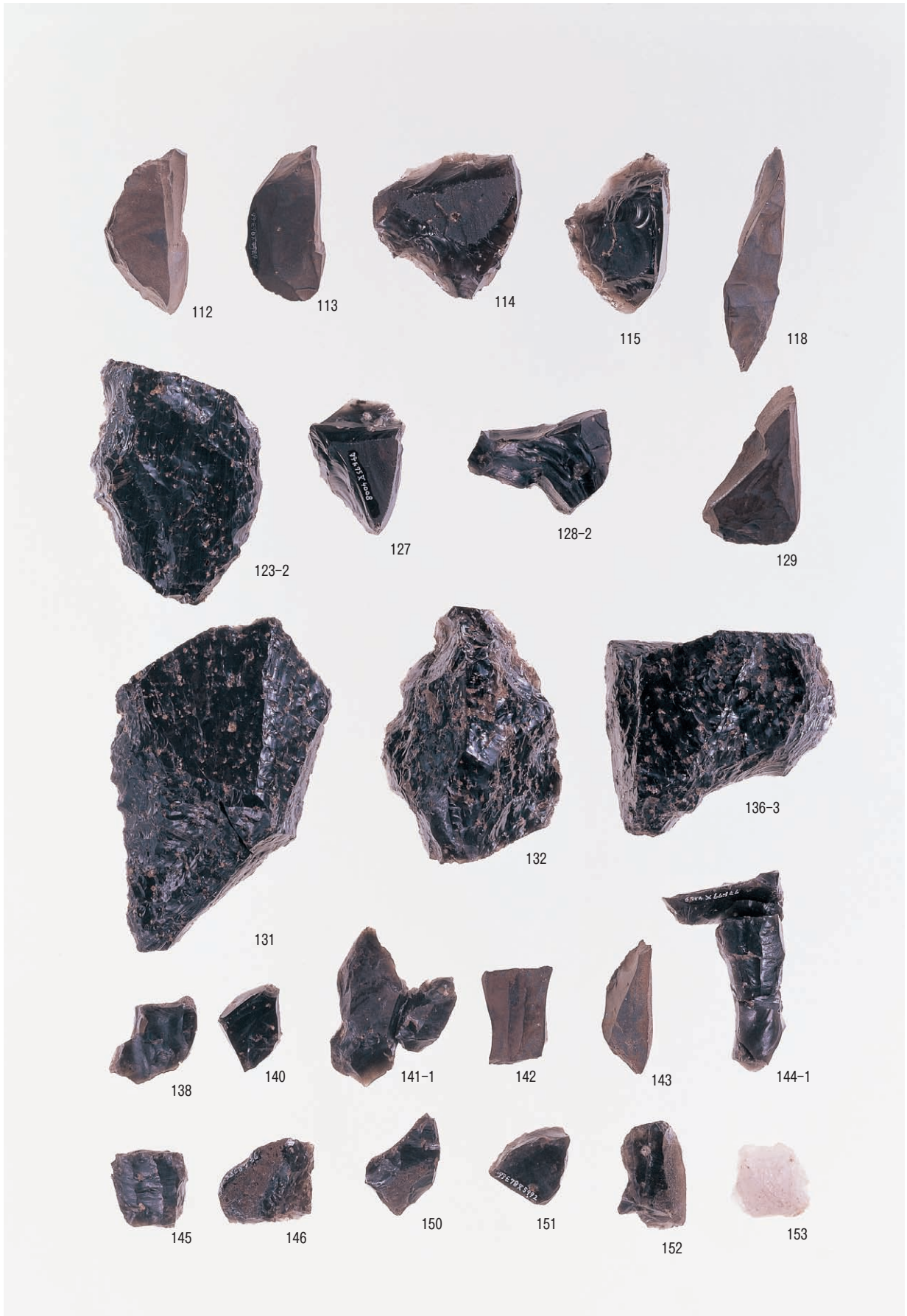
图版16



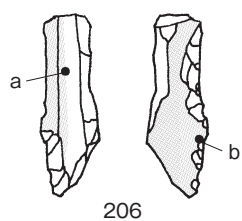
旧石器时代第Ⅲ文化层出土石器(1)



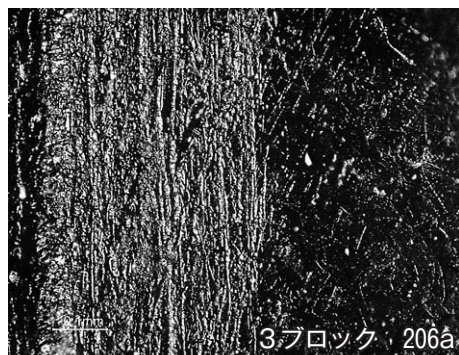
旧石器时代第Ⅲ文化层出土石器(2)



旧石器时代第Ⅲ文化层出土石器(3)



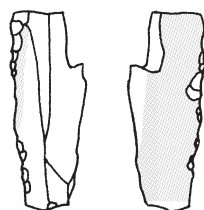
206



3ブロック 206a



3ブロック 206b



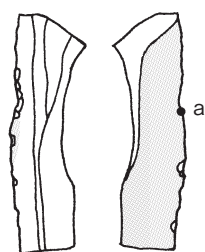
207



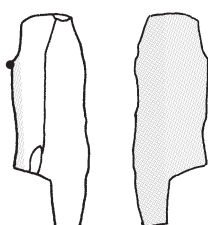
3ブロック 207



3ブロック 205



205



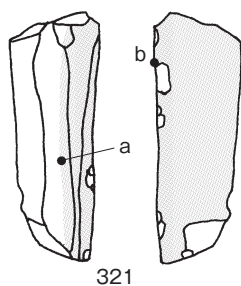
225



4ブロック 225 潰れ

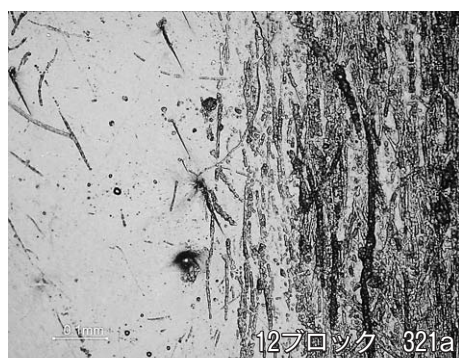


12ブロック 321



321

細石刃拡大図  
アミ部は線状痕



12ブロック 321a



12ブロック 321b

細石刃の使用痕

图版20

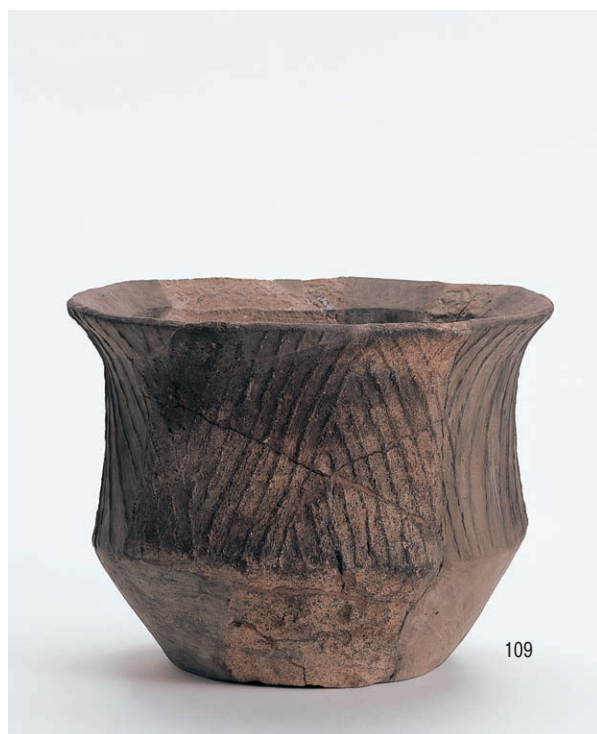


I · IIa · IIb · V類土器

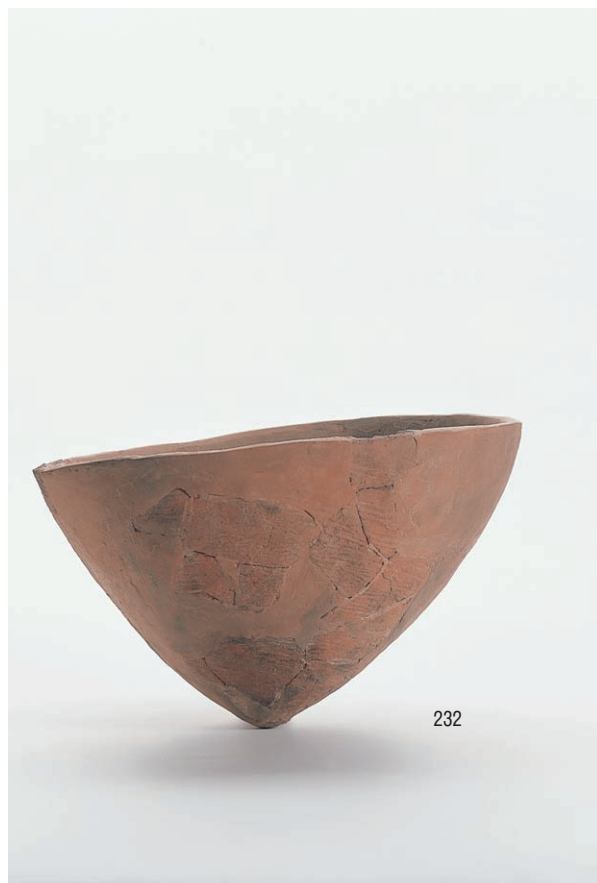


VIIa・VIIb・VIIc・VIIa類土器





VIIa · VIId · VIIe · X類土器



XIIa・XIII・XIV類土器及びXIII類土器出土状況

图版24



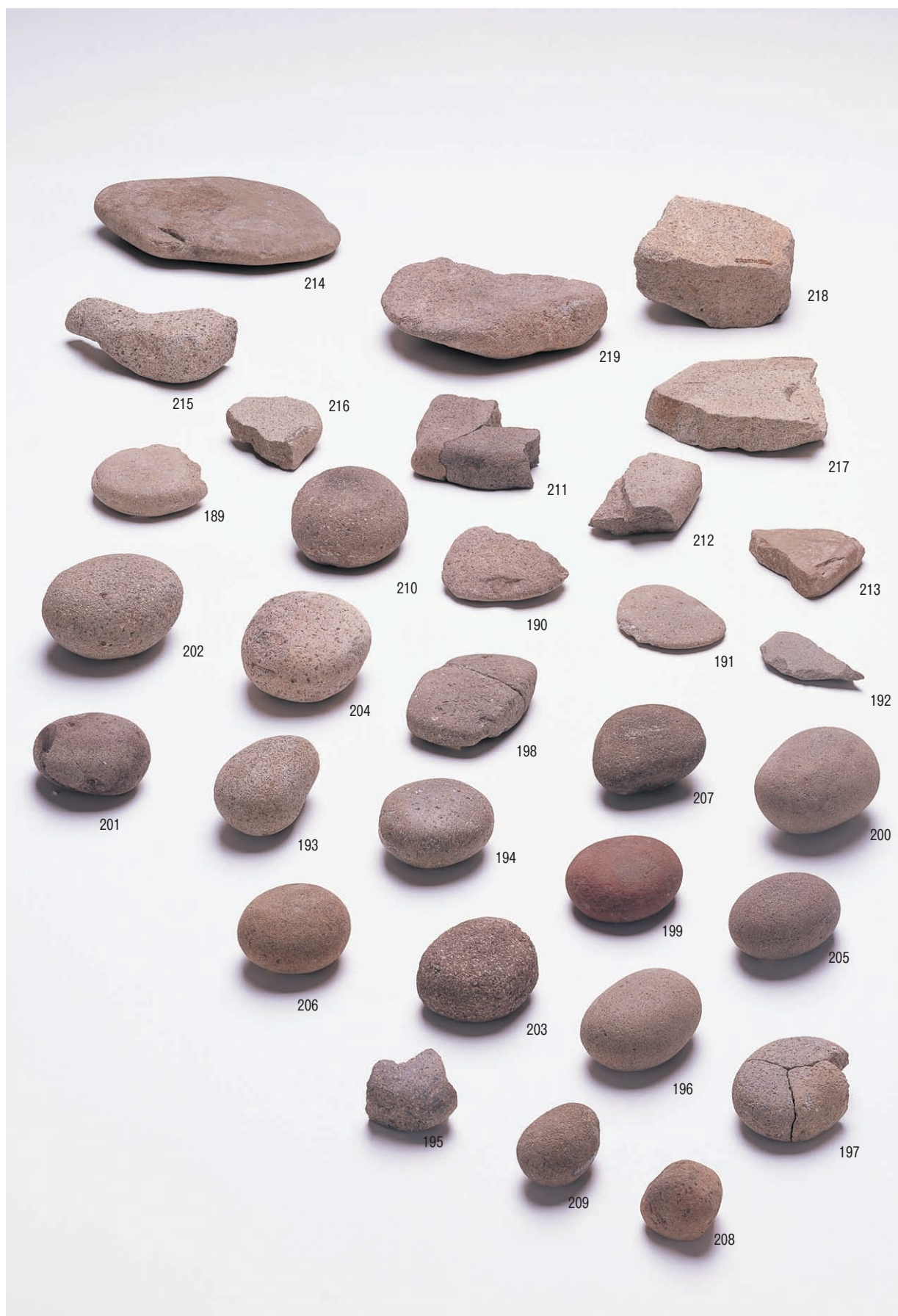
XVII · XVIII · XIX · XX a · XX b 類土器



XXXIc・XXXId類土器及び縄文時代早期出土石器(1)

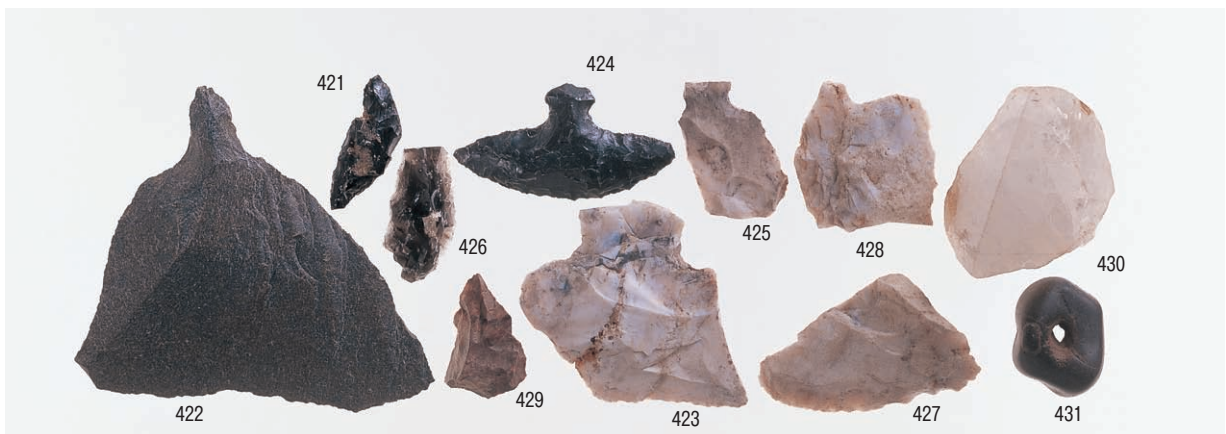
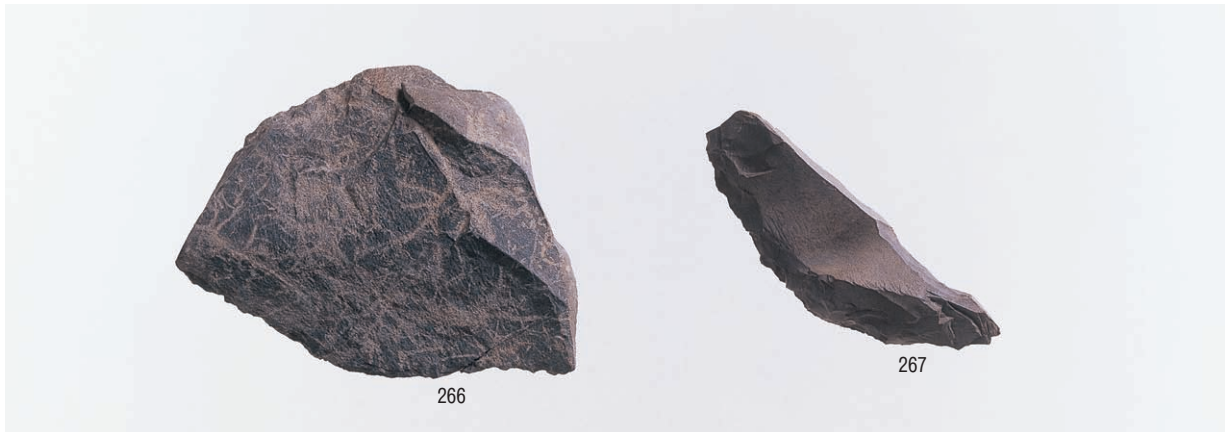


縄文時代早期出土石器(2)



縄文時代早期出土石器(3)

图版28



縄文時代前期～晩期出土石器(1)



縄文時代前期～晩期出土石器(2)





土師甕



土師器坏

图版32



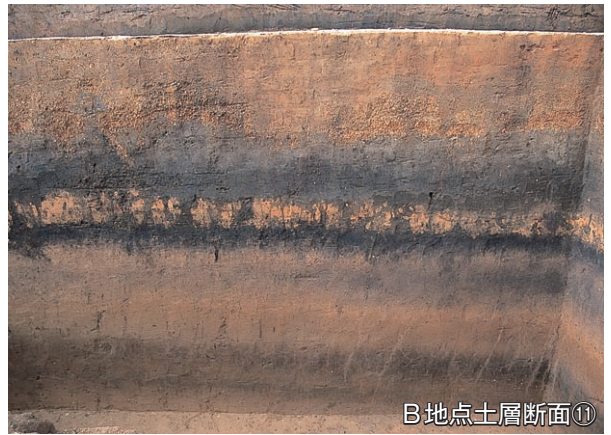
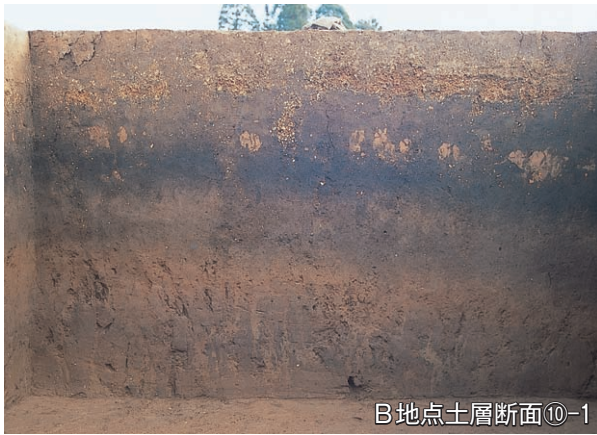
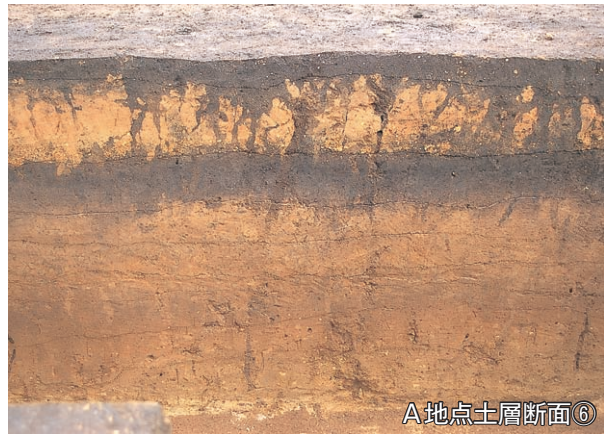
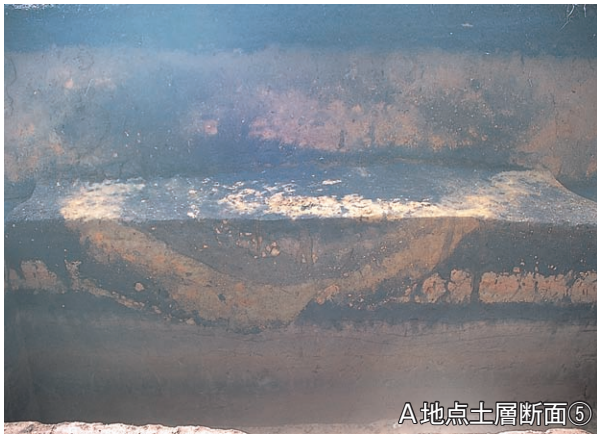
土師器碗 (533~536, 542)  
土師器坏 (内黒) (544・545)



# 西原段 I 遺跡写真図版



图版2





集石4号



土坑2号検出状況



土坑1号検出状況



土坑2号完掘状況



土坑1号完掘状況



土坑3号検出状況

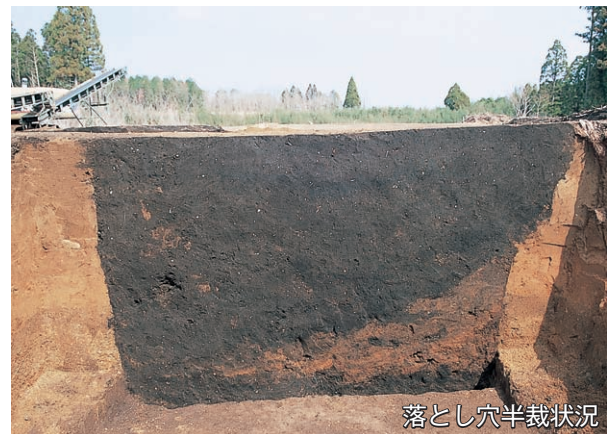


土坑1号断割り調査状況

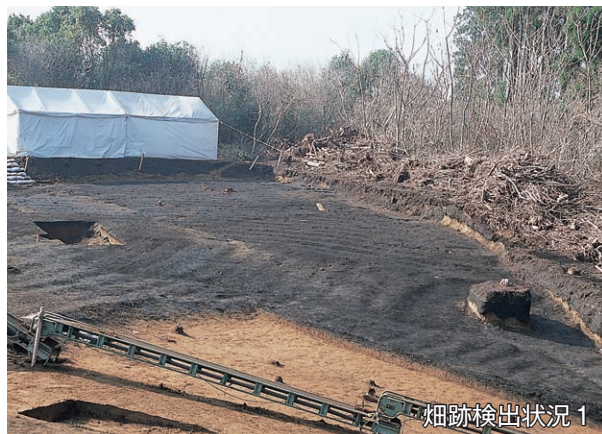


土坑3号完掘状況

図版4







畑跡検出状況 1



畑跡検出状況 2



畑跡検出状況 3



道路状遺構 4号検出状況



弥生土器 (207) 出土状況 1



道路状遺構 4号



弥生土器 (207) 出土状況 2

図版6



A 地点調査状況



C 地点IV層遺物出土状況



H トレンチ遺物出土状況



G トレンチ遺物出土状況



組織痕土器 (101) 出土状況

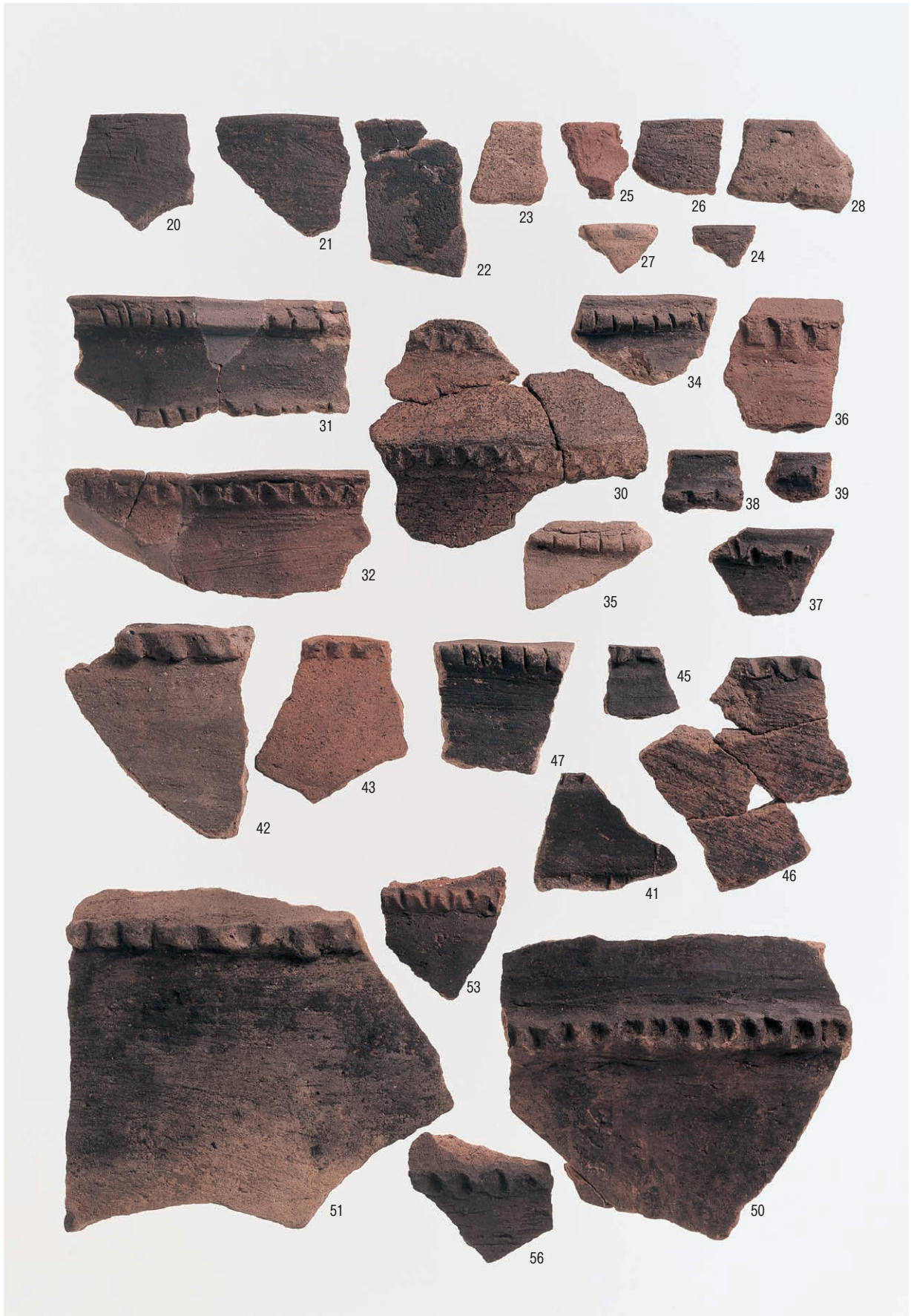


石皿 (206) 出土状況

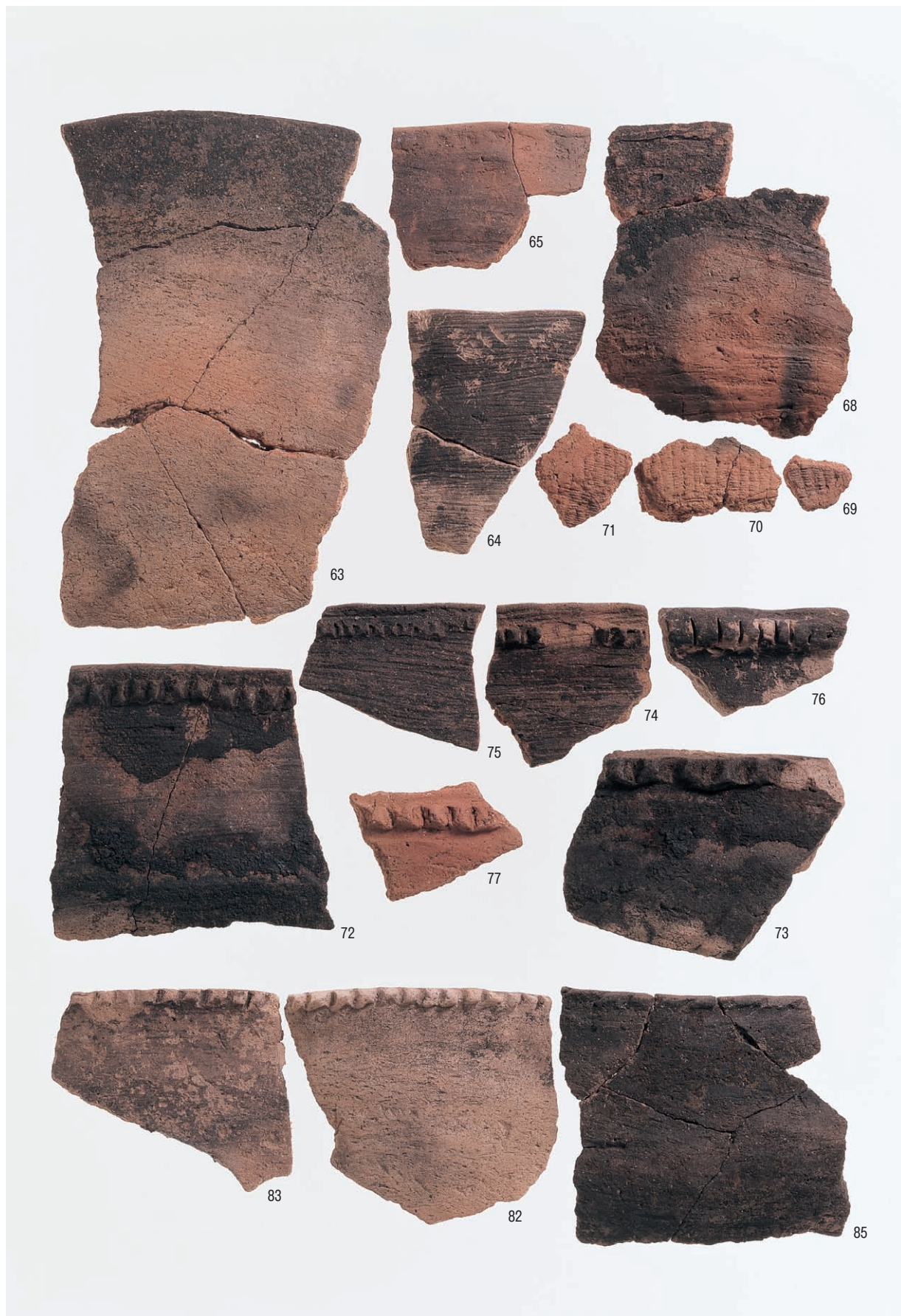


1 ~ 6類土器

图版8



7a類土器



7b類土器



組織痕土器 1



組織痕土器 2

图版12



復元土器





7c・7d・7e類土器



縄文時代石器1

図版14



縄文時代石器 2

# 野鹿倉遺跡写真図版

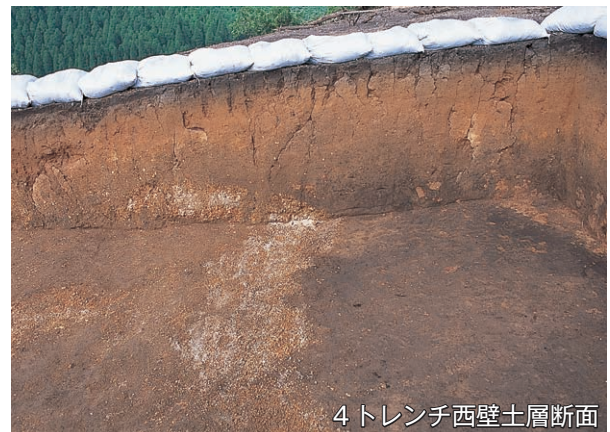
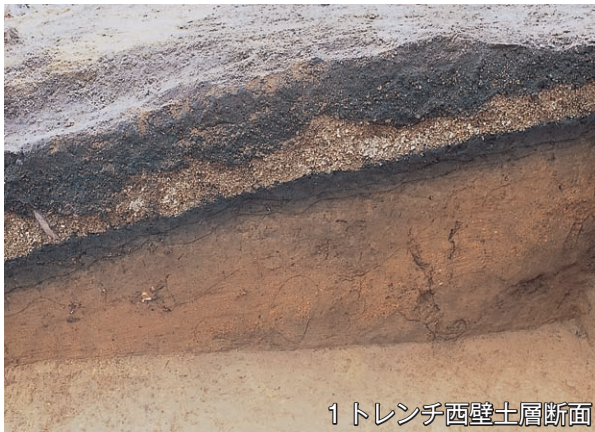


野鹿倉遺跡より西原段Ⅰ遺跡方向を望む



野鹿倉遺跡より建山遺跡方向を望む

図版2





図版4



集石1号



集石2号



集石3号



集石4号



縄文時代早期集石検出状況2

図版5





図版6



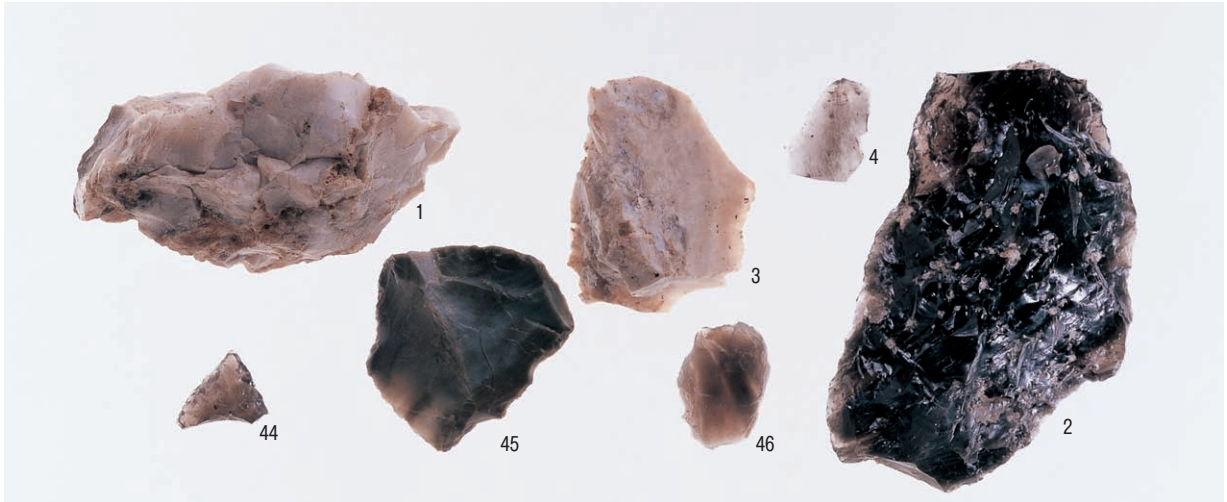


集石5号調査風景



旧石器調査風景

图版8



石器 1



1~7類土器



8~14類土器

图版10



石器2



土師器

## あしがき

建山遺跡・西原段 I 遺跡・野鹿倉遺跡の発掘調査では、実に多くの方々の協力を得ました。

2年間の整理作業、報告書刊行は、失われつつある調査時の記憶を掘り起こしながらの作業が続きました。発掘調査や整理作業を通して、多くの貴重な情報を得ることができました。

「一つでも多くの情報を記録したい」と努力しましたが、情報を整理・統合し、十分に活用できたかは、時間的な制約と担当者の力量不足のため、恥ずかしながら疑問に思うところがあります。

今回の発掘調査報告書を発刊するにあたり、多くの汗を流し発掘調査に携わってくださった地元の作業員さん、報告書作成のために努力してくださった整理作業員さんに厚くお礼を申し上げ感謝の言葉といたします。

担当者一同

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（139）

東九州自動車道建設（末吉財部IC～大隅IC間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

## 建山遺跡 西原段Ⅰ遺跡 野鹿倉遺跡

発行日 平成21年3月

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
TEL (0995) 48-5811

印刷所 (株) トライ社  
〒892-0834 鹿児島県鹿児島市南林寺町12-6  
TEL (099) 226-0815